海と想いと君と

coyuki

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
海と想いと君と

【Ｎコード】
Ｎ２２０８Ｈ

【作者名】
ｃｏｙｕｋｉ

【あらすじ】
「好きになれる人なんていなくても、生きていける」そんな恋愛観を持つ主人公、杉浦沙彩。だが、ひとつの出逢い……蒼井大翔との出逢いや親友の高杉唯、周りの環境によって彼女の恋愛観は大きく変わってゆく。人を好きになる、という輝かしく、息苦しいことを表現した物語。

第0話　恋なんて……

周りの女子や男子。みんなこんなこと言っちゃってる。

『私、あの子いないと生きていけな～い！』

『俺、彼女いねーと死ぬかも、マジで』

度々生じる……何で？という、問いかけたい気持ち。

好き、と思えるような人がいなくても、生きていられる。
好き、と思えるような人がいなくても、人生は成り立つ。
好き、と思えるような人がいなくても、社会は動いてくれる。

恋人ができなくったって、生きていられる。
恋人ができなくったって、人生は成り立つ。
恋人ができなくったって、社会は動いてくれる。

それが、私が思う考え。
そんなこと言ったら、「あんたシケてるね」って言われるだろうから、言わないけど。
こんな私。

――でも、何年か経った今になって分かる。

好き、と思えるような人がいて……
恋人、と呼べる存在がいて……

こんなにも、生きてることに感謝できて……――途轍もなく、息苦しいこと。

第1話　補習

私は、白い紙切れを渡されて呆然とした。
「マジですか……」
「残念だが、マジだ」
1学期最後の学級活動が終わり、先生に手招きされて向かったのは職員室。
手渡されたのは、白い紙切れ……補習の案内だ。
「杉浦、お前1年の頃はそこそこの成績だったみたいだが……何があったんだ?」
「そこそこって……やっぱ志望する大学が変わったから……ですかね」
1年の頃、私は私立の大学を目指してた。
でも親に「私立はダメ」と猛反対され……渋々志望大学を変えた。
国立の大学だけど……簡単に目指せる大学じゃない。
自暴自棄になった私は、授業はサボるわ、授業に参加したときは寝るわで……散々だ。
「変わったからって……全教科赤点はさすがにマズいぞ」
「ですよねぇ。なんかもう、勉強する意味が分かんなくなったっていうか……赤点でも、まぁいっかって思うようになっちゃって……」
だらしなく頭を掻いてると、先生が短く溜息をついた。
「勉強する意味が分からないなら、退学しろ」
きっぱりと先生に言われ、私は白い紙に目を落とした。
退学は……嫌だ。
「……はい。ちゃんとします。」
「ならよし。この期日にちゃんと来いよ?」
「……はい。失礼します」
職員の目が気になり始め、早足で職員室を後にした。

「さ～や～！どしたの～？」
「うわっ」
後ろから突如何かが抱き付いてきて、体が少しよろめいた。
「……夏姫かぁ。びっくりした」
「へへッ」
可愛く微笑む抱きついて来た人物は東郷夏姫（トウゴウナツキ）。身長１４５センチのミクロ少女だ。
ちなみに「さーや」とは私、杉浦沙彩（スギウラサアヤ）のこと。
執拗に三画の部首が一文字一文字に入っているのが特徴の名前。
「……コレ見てよ」
補習の案内用紙を夏姫に見せる。
「あっちゃ～……さーやが喰らったかぁ。補習」
……ん？“が”
「何？が、って。」
「ほら、先生が言ってたじゃない。「このクラスの中でたった１人補習を受ける義務を要する人物がいるので、そいつはサボらず補習を受けるように！」って。その１人がさーやだったとは……」
いつものように寝てた私は、そんなこと聞いていない。
「だから、終わった直後先生にさーやが手招きされてたから、もしやって思ってたんだ～」
「……ねぇ、そんなに私バカ？」
「うん」
そ、そんなにハッキリ言わなくてもよぉ、夏姫さん……
「だって今回のテスト楽勝だったでしょ？１回目だったし。なのに、さーや赤点だったじゃん」
グサッと刺さる夏姫の言葉。
忘れてた。夏姫は１年の頃から１０番以内に常に居座るエリートだったっけ……
「……２学期からはちゃんとするもん……」
「とにかく、補習頑張ってね！んじゃ、私たっくんと一緒に帰る予

定だから～！」
夏姫は私の肩を叩くと、靴箱へと向かった。
たっくんとは、夏姫の彼氏。１年の頃から付き合ってる。
たまに私と夏姫とたっくんとで絡んでる。
「彼氏……ねぇ」
――必要、あるのかな。
結婚するわけでもない、ただやらしいことだけする男女の仲。
どうせすぐ引き裂かれる、もろい仲……
だけど夏姫たちは、例外かもしれないな。
だって、１年以上互いを想いあって過ごしてるんだから。

改めて、補習案内を見る。
平日９時から１２時。場合によってはお昼過ぎまで……
夏休みに平日も休日もあるのか？っていうツッコみはさて置き。
「夏休み、半分奪われるし……」
隣を、１組のカップルが通り過ぎる。
笑い合いながら、夏休みの予定を語り合ってるっぽい。
そんなカップルを横目に、心の中で溜息をついた。

すぐに引き裂かれるもろい仲。
でも、そのもろい仲に憧れてる自分がいたのかもしれない。

第2話　出逢い

「あ、さーやだぁ～！」
補習初日。補習室……となった大ホールに行くと、手を振って黒ギャルが近づく。
えっと……？
「誰だっけ？」
「んなっ！さーやヒドッ！桃だよぉ～！」
あぁ、思い出した。林桃花（ハヤシモモカ）だ、この子。
あの純白ナチュラルな清楚系……だったけど……
「派手になったねぇ……」
遠い目をして、彼女を見る。
「でしょでしょでしょ～～～？？最近ねっ、ギャルメイクに目覚めてー先輩に教えてもらったのぉ！日サロにも行ったんだよぉ！」
嬉しそうに自分の顔を指す桃花。
かつて桃花は、愛され系の真っ白な肌で、ナチュラルメイクだったけど……毒されたか。
喋り方までその先輩に毒されたらしく、甲高い声が耳を貫く。
「てゆーかぁ、なんでさーやがここにぃ？1年の時めっちゃ頭よかったじゃん！」
「めっちゃってこともないけど……こないだのテスト、全教科赤点だったんだ」
「あ、仲間ぁ～！桃も～！」
……あまり嬉しくないけど……
「もう、問題の意味が分かんなかったしぃ！」
私が赤点を取った理由は、何ひとつ聞いてこない桃花。
気を遣ってるのか、単にバカなのか……
「おーい、席着けぇ～！」
と、数学の巨大先生……通称巨人が大ホールに入ってきた。

「席着けって言われてもどこか分かりませぇ～ん！」
と、どっからか声が飛んできた。

巨人の指定により、席が決まった。
席が1列に4つあって、左端が1年、その隣が2年、その隣が3年、右端も3年という配置に。
「分かんないとこがあったら、1年は隣の2年に、2年は隣の3年に、3年は隣の3年に聞け！それでも分かんなかったら俺を呼べっ！以上！」
……アバウト……アバウトすぎるよ巨人……
「んじゃ、今からプリント配る！」
とどめはプリント……どこまでもアバウトすぎる。
配られたプリントは……世界史。
左半分は内容理解の部分。右半分は問題がズラリと並べられてる。
……とりあえず、解いてみるか。
仕方なくシャーペンを手に取り、解答欄を埋めていく。
「……ん？」
左腕が何かに突付かれたので、横を向いた。

「この日本文を英訳するのって、どうすればいいですか？」
目に映ったのは……肌が白くて、綺麗な目をした男の子。
一瞬にして、その目に吸い込まれていきそうな感覚になった。
「あのー……」
「あ、ゴメン。これ？」
慌てて、その男の子が指す日本文を見る。
「これは、主語をまずＨｅにして、過去完了形だから……」
……ヤバい。すごい、ドキドキする……ていうか、緊張する。
「あ、なるほど！ありがとうございます」
「いえいえ」

彼が納得したところで、すぐに自分の問題に向き直った。
火照る頬を隠すように頬杖なんかついたりして。

なんなんだろう、この感じは……

3時間の補習が終わり、みんな疲れ顔。
「あ～、これがあと何回も～……」
隣の3年生は、大きく溜息をついている。
まぁ3年生はどっちみち夏休み中は勉強する運命なのさ……なんて言ったら、しばかれる程度じゃ済まない。
「さーやー！おつかれ～いっ」
だが、桃花は至ってピンピンしてる。
「桃花……元気だね」
「だって3時間中ずっと寝てたもん！あ～！すっきり！今日朝3時ぐらいまで彼氏とメールしてたんだよねー！」
……なるほど。
「だったら、さぞかし疲れが取れ……」
桃花の後ろにいる存在に気づき、語尾が消える。
「ほえ？」
私の目の色に気づいたのか、桃花が振り返る。
「はぁーやぁーしぃー……」
その名も、巨人。ますます巨大に見えるゼ。
すごい形相をして、桃花の襟元をつまみ上げる。
「お前“だけ”午後3時まで補習！」
「えぇ～～～！？それナシっしょぉ！？」
「お前だけ1問も解いてなかっただろ！」
あっちゃー……そりゃバレるわな……
「うぇ～ん！さーや助けてぇ～！」
「が、がんばれ桃花」
「そんなぁ～……」

桃花はこのまま、説教部屋に行くことになるだろう……
「さっきの人、友だちですか？」
声をかけられ、振り向く。
……さっきの、綺麗な男の子だ。
「あ、さっきの……」
「蒼井です。蒼井大翔（アオイヒロト）」
蒼井君はニコッと微笑んだ。
「先輩は？」
「あ、杉浦沙彩……２－Ｄの」
「えっ、そーなんですか？」
何故か私の名前を聞いて蒼井君は驚く。
「さーやってあの先輩呼んでたから、さやかって名前かと思いました」
「あ、よく言われる。さーやって、さやかっぽいって」
「とにかく、ありがとうございました。教えてもらって……」
「いや、私、１年の時は頭いい方だったし……」
あ……あの時、緊張してよく見れなかったけど……あの英訳問題以外全部埋めてたよね、蒼井君。
「あ、蒼井君って頭いいんじゃない？」
「……中学の時３０番ぐらいだったらしいんですが、出席日数が１学期中、０だったんで」
そう言って蒼井君は苦笑した。
ていうか、他人事みたいだなぁ。３０番ぐらいだったらしいって……
「……不登校……とか？」
「不登校じゃないけど……内緒です」
出席日数が０の理由……考えてみたけど、不登校しか思い浮かばない。
「……そっか」
根掘り葉掘り聞くのも悪いな、と思ってそう言った。
「それじゃ、僕、帰りますんで……」

「あ、うん。バイバイ。明日もがんばろーね」
そう言って蒼井君は靴箱へと向かう。

太陽が眩く輝き始めた初夏。
私は、ひとつの“出逢い”をした。

それは……後々、未来を変えたかけがいのない“出逢い”となる。

第3話　電車で

補習2日目。
「……よし、準備完了。」
朝、こっそりと支度をして、制服に着替えた。
あとは音を立てずに玄関を出るだけ……
……だが！
「沙彩！待ちなさい」
「うげっ」
制服の襟元を寝ていたはずのお母さんに掴まれてしまった……
「昨日から夏休みのはずでしょう？制服着てどこ行くつもりよ？」
「え、えと……」
そう。こそこそしてたのには理由がある。
補習のことがバレない為だ……
「せ、制服でーと？」
「デートが平仮名よ。彼氏なんていないでしょう？」
嘘も呆気なくバレる。
なんせお母さんは刑事。嘘ついても、最終的には必ずバレてしまう
……
ここは正直に言おう！うん。
「……補習デス……」
容疑者の自白みたいにそう呟いた。
「まぁそれは分かってたけどね」
そう言い、お母さんは白い紙切れをヒラヒラさせた。
……完敗です。

「とりあえず、朝食はちゃんと作ったものを食べなさいよね」
「はぁい……」
昨日は6時ぐらいにこっそり家出て、コンビニ弁当を食べた。

お母さんはそれさえも知ってたのか……慣れた手つきで次々と料理を作り出す。
「なんでお母さん、そんなに手際いいの？」
「お母さんの実家、自営業だって知ってるでしょ？手伝ってて自然に身についたのよ」
そう言って、サラダとオムレツとスープとパンとフルーツポンチを私の前に出す。
時計を見たら……僅か１０分しか経ってない。
「あんたも一品ぐらい作れるようになんなさい」
「別に料理できなくっても生きてけるし……」
愚痴をこぼしながら、オムレツに手をつける。
ちなみに今、お父さんはいない。
お父さんは海上自衛隊の隊長やってる。どんだけ大変なのかは分かんないけど、お盆とお正月以外、１年に３回ぐらいしか家に帰って来ないんだ。
私の志望大学に対してダメだ、と言ったのもお父さん。

……ふと気がつくと、お母さんがいない。
「お母さん？」
お母さんは、私の通学カバンの傍に座って何かしてた。
「何やってんの？」
「ハ～……男の子の名前がない……」
どうやら、私のケータイのアドレスブックや送受信データを見てたらしい。
「男子の名前なんてあるわけないっしょ。てゆーか勝手にケータイ見ないでよ」
無理矢理ケータイをお母さんの手から奪う。
「あんた、高校２年生でしょ？一応」
「だから何？」
「そろそろ彼氏の１人や２人作らないと、売れ残っちゃうよ？」

売れ残っちゃうよって……私は物じゃないし。

「今彼氏作ってもすぐ別れるに決まってるじゃん。結婚まで進展するのはカップルの１００組中……いや、２００組中１組ぐらいだよ？」

「その１組にお父さんとお母さんがいるのよね……」

うわ。いきなりうっとりし始めたよこの人……

お父さんとお母さんは、恋愛結婚。高校時代の同級生同士だったらしい。

「はいはい。もうその話めっちゃ聞いたからいいよ」

「何を聞いたのよ」

「どうせ「私たちは高校２年生の春に廊下でぶつかって……」から始まるんでしょ？」

「何で分かるのよ」

「あ、もう学校行ってくる」

７時前後になってるのに気づき、通学カバンを持ち上げた。

「聞き忘れてたけど、なんであんた補習なんか受けるの？」

「……えと、自主参加……」

「ふーん。“第１学期期末考査で３０点以下の生徒”及び出席日数が極端に少ない生徒には補習義務を……」

「行ってきます！」

プリントには、赤点取った人に補習義務が与えられることが書いてあったらしい……

私が通う海宮高校は、私の家から電車で４０分、そっから自転車で２０分かっ飛ばした先にある。（かっ飛ばさなかったら３０分。）

名前通り、海の近くにある。

んで、海宮病院という比較的おっきい病院があって、私がインフルエンザになったり予防接種を受けるときはお世話になってる。

なんせ、家の近くに病院なんかないからだ。これぞ、過疎地域の運命。

「あ、さーやじゃん！」
駅のホームでばったりと夏姫に出くわす。
夏姫の格好は私服。いかにも「夏満喫中！」的な。
「夏姫。どーしたの？」
「見てのとーり、朝帰りぃ。たっくん家に泊まったんだぁ！」
朝帰りって……なんかやらしい響きをもってる言葉だ。
「ふーん？」
「やーだもぉ～！さーやったらぁ！」
顔を赤く染めて私の背中をバシッて叩く夏姫。……痛い。
こんなミクロちゃんでも、やることはやっちゃってるわけだ。
「そんじゃ、今日もまた補習に励んできますよ」
「頑張ってね～！」
テンションマックスなのか、夏姫は元気よく手なんか振ってる。
まぁ夏姫はいつもテンション高いんだけどね……

電車に乗ると、ちらほらと同年代の人たちの姿が映る。
みんな私服で、夏休み満喫中……か。
制服の私が浮いているのか、みんなチロチロと私を見る。
……悪かったね、補習生と同じ電車で。
その中でも、一際目立つギャル男みたいなグループが私をチロチロじゃなくジロジロ見てきて、耳打ちし合って気持ち悪い笑みを見せる。
それが約5分間続き……
いい加減、滅多にキレない私の怒りケージもマックスに。
そして遂に、怒りのゴングが私の中で鳴った……
「……さっきからジロジロ見てて気色悪いんですけど、何なんですか？」
我ながら低い声で呟きながらギャル男集団に近づく。
「いや、なんでもねぇって。なぁ？？」
「そーだよなぁ～！」

なんて、ニヤニヤしながら同意を求める集団……
私の怒りケージ、マックスの値から遂にマックス上になってしまった！
ボス的な感じのギャル男の胸倉を掴み上げると、電車の壁に押し付ける。
「気持ち悪ぃんだよ。ニヤついてんじゃねぇ」
「うぐっ……」
苦しそうな表情と声を出すボスギャル。
多分今、私の腕の筋肉凄いことになってるだろう……
残りのギャル男たちも怯えた表情してんのがよく分かる。
『○○駅に到着しました。』
……と、そこで電車のアナウンス。
「あ、ボス、到着……」
残りのギャル男Aが怯えた声で呟く。
軽く舌打ちして、手を離した。
ボスギャルはひどくむせ返ると……
「い、いくぞっ！」
と、残りのギャル男に号令をかけてそそくさと立ち去っていった。
立ち去り際、「痴漢計画なんてアホなこと考えるなよな、お前！」というボスギャルの捨れた声が聞こえた。
「ふーん」
適当に相槌を打つと、元の席に腰を下ろした。
隣にいた乗客がズザザッと私とは反対側にずれたのはさて置き……
ふと顔を上げた。
すると……
笑顔で私に拍手をする男の子の姿……
私の中で、何かがサ――ッと冷めた。

第4話　危険信号

「凄いですね、杉浦先輩！あのギャル男、めっちゃビビってましたよ！」
近づいてくる人物に、目を合せれない。
……なんで蒼井君がここにいるの！？
「しゅ……終始見てた？」
「はい、バッチリ。」
わー……
……
「み、見なかったことにしてっ！お願いっ！てか、頼むっ！」
「はい？」
横に座った蒼井君に向かって、手を合わせて頭を下げる。
「別に僕、元から誰にも言うつもりないですよ？」
「あ、そっか。よかった」
安堵して、元の姿勢に戻る。
「バレちゃいけない理由があるんですか？」
「うん、まぁ……お母さんの耳に知れ渡ったら、命ないから。あ、お母さん、刑事なんだ。特に暴力とかの不祥事は許さない主義で……」
「え、お母さん刑事なんですか。カッコいー」
「……そりゃカッコいいけど、恐ろしいよ。嘘ついてもすぐバレるし」
私がそう言うと蒼井君は、くはっと笑った。（くはっ？）
「杉浦先輩でも嘘ってつくんですね」
「杉浦先輩……“でも”？」
「だって先輩、めっちゃ真面目そーだし」
そうかな、と首をかしげた。
確かに刑事の娘だからチャキチャキしてそーな感じはするだろうけ

ど……

「……あれ？そういえば真面目そうなのに、なんで補習受けてるんですか？」

「1学期の期末テストで全教科赤点取っちゃったの。バカでしょ？」

蒼井君は「えマジで？」ってな表情をする。

「なんか、勉強する意味分かんなくなって、赤点でもいーや的な」

「なるほど……不良への一歩手前ゾーンですね」

グサッと刺さる蒼井君の言葉。

「不良へのって……」

「あ、すみません。でも一歩手前だから、またやり直せれますよ」

「……そっか」

妙に納得してしまった。

勉強する意味……大学受験するだけだと思った。

だから志望大学に行けなくなった途端、勉強する意味なくなったって思ったけど……まだ別に、あるかもしれない。

――――……

『次は海宮市駅～』

駅のアナウンスで、目が覚めた。

……あれ、寝ちゃってたのかな。

「あ、起きました？」

「ん～……」

目を擦り、キョロキョロ辺りを見回す。

ここは……電車内。隣にいるのは、昨日知り合った蒼井君。

「……あ、もう着いたんだ？海宮市駅」

「はい」

カバンを持って、席から立ち上がった。

「そういえば蒼井君、どこ住み？」

「A市ですけど……」
A市……私が住んでる市だ。
「私もA市だ。もしかして、朔良中？私、そこだったんだけど……」
「あ、はい。もしかして同中だったんですかね？」
「かもね～」
う～ん、何たる偶然。
ていうか……
「蒼井君、意外と背ぇ高いね」
身長１６０センチの私より、ちょっと高い。推定１６５センチぐらいの蒼井君の身長。
「意外とってヒドいなぁ～」
そう言って苦笑し、「童顔だから仕方ないですかね」と付け加えた。
いや、童顔……というより、綺麗、と言った方がしっくりくる。
「いーなー。蒼井君は。顔キレーで」
「いや……先輩の方がキレーですよ。うちのクラスの男子も女子も言ってるし」
「えっ、そんなに有名!?」
驚いて、蒼井君を凝視する。
「はい。昨日の補習の時、俺の後ろの席だった奴も散々羨ましがって……」
「わ、なんかゴメン……」
赤くなった頬を必死にさすった。
……そういえば、今日は自転車使ってない。
「てか、蒼井君ってチャリ使ってる？」
「いつも歩きですが……」
「そっか」
本来ならば、自転車使って蒼井君を追い抜いてさっさと学校に行くべき……
だけど、何故か……蒼井君と喋りながら行きたい、って思う。
なんでだろうね。意味が分かんない。

学校に着き、補習を受ける。
昨日よりたくさん蒼井君から質問を受け……ていうか、話して。
昨日は、あまりもの蒼井君の綺麗さに緊張しっ放しだったけど、今日は普通に喋れる。

この時、違う意味でドキドキしてるってことに、気づかなかったんだ。

補習を受け終え、家路につこうとしたけど……
「沙彩。ちょっといい？」
同じクラスの高杉唯（タカスギユイ）に声をかけられた。
「唯。どしたの？」
ちなみに唯って女っぽい名前だけど、正真正銘の男子だ。しかも超モテる。
1年の時から“杉”繋がりでよく絡んでるクラスメイト。いわゆる、男友だち。
もう名前で呼び合う仲になってしまってる。

だけど、それが危険信号だってこと……

「ちょっと話あるんだ。旧校舎裏、来てくんない？」
「いーよ」

気づかなかったんだ。

第5話　意味

旧校舎裏……夜にユーレーが出る、と噂の旧校舎の裏側。
まぁ、ユーレーは目に見えるものじゃないから別に怖くない。
別に、生きているもの以外のものが存在したっていいじゃない、と思う私。
それはさて置き……唯がさっきから、ずっとソワソワしてる。
「どしたの？唯」
「……」
気づいてないね、これは。
「ゆーいっ！」
わざと唯の目の前に立って、大きく手を打つ。
途端、唯はハッとした表情を浮かべた。
「あ、ゴメン。ボーっとしてた」
「ボーっとしてるなら帰るよ？暑いし」
日陰になってるから、別に暑くないけど……早く帰りたいのは事実。
「だったら呼び出した意味ないし」
「んじゃあ早く用件言ってよ」
「……ったく、急かすなよな……」
いきなりキレて頭を掻く唯。意味分からん。
「……沙彩、もうちょっと寄って？」
目の前にいる唯は、更に近づけと手招きする。
疑問符を頭に浮かべる私は2歩ぐらい唯に近づく。
その途端……

……今、おかれてる状況が、分かんない。

2歩近づいた途端、顎を持ち上げられて、口が何かに強く、強く塞がれた。

唯の唇。もしかして……キス？
どうやって回避したらいいのか分からない私はただ、怖い、と思いながら目を強く瞑った。
「……好きだ。1年の頃からずっと」
唇を解放された私の真っ白な頭の中に響いた、言葉。
「返事、待ってる」
その場で返事を求めず、唯は走り去って行った。
唯が角を曲がる時、私の目に映った……唯の真っ赤な頬。
……本気？
口に手を当て、稀に吹いてきた強い風に髪がなびいた。

「あ、さーやーっ！」
駅まで行こうとしたら、桃花が駆け寄ってくる。
あ、桃花って海宮人だったっけ。（海宮人……海宮市に住む人のこと。何故か男女ともに顔立ちが整っている人が多い。）
「桃花。今日はサボんなかったの？」
「そりゃー！1日勉強はキッツいしー」
……確かにね。
「てゆーかぁ、さーやって“あの”蒼井大翔と付き合ってる系？」
「“あの”って……なんで？」
「なんかさぁ、噂してたよぉ？蒼井と2年生の女の先輩が一緒に補習来ていた～って！」
多分、電車で乗り合わせた人たち……かな。
「へぇ、そーなんだ。残念ながら、付き合ってないよ」
「えぇ！マジで！まぁそれがいいかもね……」
桃花が目を擦る。
それがいいかもね……っていう言葉が、耳に残った。
「んぎゃっ！マスカラ取れたし！」
……うん。そりゃ、目擦っちゃ取れるよ。
「ちょっと公園寄ってもいい～？」

「うん、いーよ」
……最早、桃花の中で私は「一緒に帰ってる人」らしい。

海宮公園。おっきな噴水があるのが特徴的な公園。
それ以外はほとんど特徴がないという……
ベンチに座り、桃花が手鏡を取り出す。
「あ～～～……」
不快そうに声をあげ、ビューラーとアイラインとマスカラ、アイシャドウ……様々なメイク道具を取り出し、手際よく目に黒色をのせる。
「そういえば、蒼井君って有名なの？」
「1年の河合によるとさぁ～、中学時代に軽く30人ぐらいと付き合ってたらしーよ？？」
「えっ、マジで！？あんな素直そうな子が！？」
ガタッと勢いよく立ち上がった私。
桃花は「おわっ」と声をあげ、メイク落としを取り出した。
「あ、ゴメン。アイメイクずれた？」
「まぁいいさ！なんせ桃、心広いですからっ！」
桃花の言葉に首を捻った。
「あぁっ！首捻ったぁ！」
「アハハ……それより、なんで1学期中、蒼井君学校来なかったか知ってる？」
「なぜかってのは聞いてないけど～……本人に聞けばいーじゃん！」
「内緒、って言われた」
そこを問い詰めるんだよ！と、マスカラを突き出してきた桃花。
そこまで根掘り葉掘り聞く性分じゃないです……
「てゆーかぁ、さっきからさーや、蒼井君のことばっかり～！」
「……話の発端は桃花からじゃん」
「あ、そっかぁ！」
……やっぱバカだ、この子。

アイメイクを終えた桃花は、先ほどよりド派手に盛ってる。（ついでに擦ってない方の目もメイク直ししたらしい）

「……浜田ブ○トニー……」

「え～？何～？」

「あ、なんでもなーい」

浜田ブ○トニーとは、漫画家兼タレント。

ギャルで背がちっちゃいから、桃花にそっくり。

「てゆーかぁ、さーやって好きな子いないの～？」

今度はグロスを取り出しながら聞いてきた。

「……いない、なぁ。」

先ほどの唯からの告白を思い出して、眉をひそめた。

「変なカオーッ！桃はいるよぉ！マイ・ダーリンのユースケ！」

あ～、ハイハイ。あのギャル男ね、なるほど。

「好きな人じゃなくって、彼氏じゃん」

「ムッ！ユースケのこと、大好きだもん！」

どうやら、好きな人＝彼氏という方程式が桃花の中で成り立ってるらしい。

「ふーん……」

「さーやも作ったらいいじゃん！楽しいよ～毎日！」

桃花がニヤリと笑みを見せる。

「へぇー……」

毎日が楽しい……ねぇ。

それから1時間ぐらい桃花と語った。

唯から告白されたことは言わなかったけど……

家に帰ったら、お母さんが仁王立ちしてた。

「沙彩。ケータイ見てみなさい」

「え？なんで？」

「いーから」

言われるがまま、ケータイを開く。

……お父さんからだ。
『補習を1日でもサボったり、次回のテストで赤点取ったら海坊主に食わせるぞ。父。』
う、海ボーズって……いるのか！？
てかお母さん、お父さんにチクったな……
「海坊主に食われないためにも勉強しなさい」
「はい……」
ＤＥＡＲ蒼井君。
勉強する意味分かりました。
私の場合、海坊主に食われないためです。

第6話　元カノ

それから、補習＋家でも1学期中の学習内容の復習をしながら夏休みを過ごした。
「もう2週間ですね」
揺られる電車の中で、車内の日付表示を見ながら呟く蒼井君。
あれから、何故か同じ車内での乗り合わせが多い蒼井君。そして、他愛もない話をしながら学校へと向かう。
そんな毎日。でも、心なしかなんか楽しい。
「何が？」
2週間、という言葉に疑問を持った私は聞く。
「夏休み始まってから」
「あ、なるほど」
そっか、もう2週間か……
同級生たちや同高の人たちは、夏休みが始まった、というワクワク感が一気に冷めてぐうたらし始めたのか……それとも宿題に手をつけ始めたのか、ほとんど車内にいない。
って、宿題……
「宿題、ひとつも手つけてない……」
この時、初めて補習＋@にしてたものがムダだった、ということに気づいた。
「え……ヤバくないですか？」
マジで？ってな感じの蒼井君の目を少し睨む。
「んじゃあ、蒼井君はどーなんよ？」
「俺、読書感想文以外全部終わりましたよ？」
へぇ。蒼井君、読書感想文以外全部終わったのかぁ。へぇー……
って！
「早っ！何そのスピードッ！人間！？」
思わず大声を出して席を立つ。

隣にいた、転寝(うたたね)してるおじいちゃんが「ほひゃあっ！？」と言って目を覚ました。
「あ、スミマセン……」
なんかの同好会で集まってるっぽいおばちゃん集団も、目を丸くして私を見る。
クスクスと笑いを堪えてる蒼井君。
「ん～、人生で5番目に恥ずい……」
周りからの視線が突き刺さる中、席に座った。
ちなみにそれ以上は……内緒です。
そして、隣ではまだ蒼井君が笑ってる。
「も～、蒼井君しつこいっ！」
「ゴメンゴメン。ツボった……」
あ。タメ語。
蒼井君はたまに、タメ語で喋るときがある。
別にあんま気にしないからいいけど……正直、ちょっと戸惑いもある。
だって産まれて16年、年下に話しかけられたことがなかったからだ。
先攻術を熟知してることが影響してか……小学生の時は、男子4人（しかも上級生）とのデュエルにも難なく勝利。
中学生の時は、校内に侵入した不審者を羽交い絞めにして失神状態に陥らせた。
銃を所持したコンビニ強盗を捕獲したりして、校内でも表彰され……という、まるでどっかの戦隊物のリーダーみたいな私に、年下の子が近づいてくるわけでもなかった。
逆に、同級生からはかなり慕われてきたけど……
「ねぇ、蒼井君は怖くないの？」
「え？何がですか？」
笑いが少し収まったらしく、笑顔で聞き返してくる。
……一瞬、その笑顔の綺麗さに心臓が跳ねた。

「だ、だってほら、私、ギャル男の胸倉掴み上げたんだよ？」
「なんだ、先輩のことか。全然怖くないですよ。むしろ楽しい」
その笑顔でそんな可愛いこと言われたもんだから、合わしてた視線を思わず逸らす。
胸の奥に、じわりと何かが広がる感じがした。
「……楽しい？」
「はい。あと、男っぽくてカッコいいし！」
その言葉にリアルにズルッと足を滑らせた。
……その途端、ケータイの着信音らしいものが聞こえてくる。
「あ、メールだ」
どうやら、蒼井君のケータイらしい。
色は黒……ケータイ持ってたんだ。気づかなかった。
蒼井君はケータイを見るなり……さっきの笑顔とは一変、眉をひそめて怪訝な表情をした。
「どしたの？」
「……」
私の声は聞こえてないらしく、蒼井君はしばらくケータイを見つめたあと、ケータイを開いた。
慣れているような手つきでボタンを押す指を見ながら、相手を想定する。
“３０人以上と付き合ってたらしいよ！”
桃花の言葉を思い出し、元カノかな？って思った。
同時に……なんでかチクッと、胸が痛む。

そりゃあ、３０人と交際してたら……元カノからの未練たらしいメールも来るだろう。
だけどそれは、蒼井君の問題であって……
なんで、赤の他人である私の胸が痛むんだろう……？
……そういえば、なんでさっき、蒼井君の笑顔に心臓が跳ねた？
胸の奥に、じわりと広がったものの正体は、一体何だ？

考えれば考えるほど、分からない。

「ったく、しつこいなぁ……」

溜息混じりで、蒼井君はケータイを閉じる。

「元カノから？」

「……まぁ、そういったとこでしょーか……」

頭の後ろで手を組んで、背凭れに凭れる蒼井君。

「最近、めっちゃメール来てしつこいんですよ」

「彼女、O型？」

「えっなんで分かるんですか？」

「なんか、O型って自分からいく感じだし……」

そういえば……唯も、O型。

なんで私なんかに告白してきたんだろう……？

返事、考えた。

やっぱり、友だち以上はどう考えても……無理。

でも、それをどうやって唯に伝えよう……

「先輩、なんか数学解くような感じの顔してますよ？」

「え、マジで？」

慌てて顔をペタペタ触る。

……てか、数学解くような感じの顔って……

この前の補習は数学。蒼井君は隣だから、バッチリ数学の難しさに歪んだ私の顔を見たのか……

なんか恥ずいです。

『次は海宮市駅……』

車内のアナウンスを聞いて、羞恥心がピタっと収まった。

「行きますか」

蒼井君に続いて、立ち上がった。

駅のホームから出て、ちょっと歩く。

すると、前方から……見たことある人影が見えた。

自転車に乗って、青いTシャツを着ている……唯。
「あれ？沙彩じゃん」
唯がこっちに気づいたらしく、近づいてくる。
「……こっちは？」
近づいてきた唯は、蒼井君の姿に気づかないわけもなく……
唯は蒼井君を睨む。
蒼井君も……知らない人に睨まれて腹が立ったのか、睨み返す。
まぁ睨みたい気持ちは分かるけど……
私は、その場で硬直。
……ヤ、ヤバい……

第7話　返事

「……彼氏？」
しばし沈黙があった後、硬直してる私に唯が低く問う。
現実に戻され、慌てて否定しようと口を開いた。
「あんた、杉浦先輩の何なんですか？」
だけど、先に声を出したのは蒼井君。
「先輩に向かってあんたとは……1年でしょ？君。礼儀が成ってないね」
「よく言われますよ」
唯の目には、生気が窺(うかが)えない。
蒼井君は、なんかいつもの蒼井君の声じゃない……
あの綺麗な笑顔も、邪気みたいな黒いオーラを帯びている。
「あ、蒼井君は補習が一緒の1年生だよ！」
ようやく声を出した。
「……蒼井」
「はい？」
名字を呼び捨てにされてキレたのか、蒼井君の声は低く怖い。
「沙彩には近づくな」
そう言い残し、ペダルに足を置いた唯。
……今しかない。そう思った。
「ちょっと、唯！」
ぐっとペダルに力を入れる直前の唯を呼び止める。
「返事、かなり遅れたけど……唯のこと、友だち以上とは、どうしても思えない！ゴメン！あとさ、そんな風にキレるのって唯らしくないよ！」
ありったけの声。妙に息切れがする。
必死な想いは伝わったのか……唯は、寂しそうに微笑んだ。
「……そっか」

それだけ言って、どこかへと消えていった。
……ゴメン。心の中で、もう一度謝った。

「あの人、高杉唯……って名前ですよね？」
そう聞く蒼井君の顔は、もう普通に戻ってる。
「う、うん」
「あの人、先輩のこと好きなんですか？」
「……前に、告られた」
改めて、告白されたことをまた、思い起こす。
「……なんか、嫌味そーな人ですよね。いきなり俺のこと睨んできて……」
「いや、唯はいい奴だよ！なんか、今日、人が変わったみたいでビックリしたけどっ……」
でも、それも、私のことを好きが故……
うぬぼれかもしれないけど、安易にそう思えるほど今日の唯は変だった。
「いい奴だったら……告白断る理由、どこにあるんですか？」
「友だち以上には思えないし……」
1年の頃から、女友だち同様に唯と遊んでた。
テスト前は一緒に勉強して、休日は夏姫を交えてゲーセン行ったり……
そんなひと時ひと時の間さえも、ずっと唯は私を想ってた……と思うと、なんか複雑な気持ちになる。
「……あ、そうだ。メアド交換しません？」
話題を変えよう、という蒼井君の心遣いからか、そんなことを言ってきた。
「え？あ、うん」
思いもよらない提案に、ケータイを出す。
……って、ちょっと待てよ？
お母さんに勝手に見られるかも……

ケータイ片手に動きが静止した。
「どうしました？」
「……え？あ、なんでもないよ？」
と、ケータイを開く。
赤外線通信で、蒼井君のメアドが届いた。
やっぱり、お母さんに茶化されるかも。
やっと男の子をメアドを……！って。3時間ぐらい。
……でも、ロックかけておいたらバレない……よね？
ていうか、なんでこんなにもバレるのを恐れてる……？
と、そこへ、何かが背中にぶつかった。
「さーやぁっ！おっはよぉ！」
ハイテンションな甲高い声……桃花だ。
「桃花。おはよ」
ケータイをパチンと閉じて振り向く。
「あ、噂の蒼井大翔！」
「……はい？」
いきなり名前で呼び捨てされ、しかも指で指されたので、蒼井君の表情は「イミワカンナイ」って感じだ。
「こんな道中で何してたの～？」
「んと、メアド交換」
「マジで！？桃花もする～！さーや、ケータイ出して！」
半ば強引に桃花ともアド交換をした。
『Ｍｏｍｏｃａ－ｓ２－Ｙｕｓｕｋｅ．ｉｓ２Ｄａｒｌｉｎｇ……』
……長っ！
「桃花、ｓ２って何？」
「ハートマークだよん」
あ、なるほど。
「大翔君も交換しよ～！」
「いえ、俺は……」
おそらく、蒼井君は交換しないつもりだったんだろう。

だが、桃花が蒼井君の手の中にあるケータイを奪って赤外線通信をした。
「わぁい！フォルダ内の男の子の名前５０人目！！！」
ごっ、５０！？
ユースケ君もよく嫉妬しないよね……
「桃花、５０人はどうかと……」
「いーじゃーん！ブー！」
あらら。拗ねちゃった。
蒼井君は戻されたケータイ片手に苦笑いを浮かべてた。

そして３人で学校へ。
「明日、学年別テストをする！６０点以上取れた者は、明後日（あさって）から補習免除にしよう！」
巨人先生の言葉に、ホール中がざわつく。
隣の３年生は「うそ～ん」って言って、その隣の３年生と愚痴を言い合ってる。
蒼井君はなんか余裕そうに笑ってる。
「楽しみ？」
そう聞くと、蒼井君はニッコリ笑って頷いた。
「今回は満点取る気、満々ですから」
どうやら、めちゃくちゃ勉強したらしい。
「１００点取る気って……」
「１日も出席しなかった分、挽回して先生等を唖然とさせてみせるんですよ」
自信満々の笑顔。
なんでここまで自信に満ち溢れてるんだろう、この人は……
「１００点、取れるといーね。私はとりあえず８０点ぐらいを目安に頑張る」
ふと、思った。
補習がなくなったら、蒼井君とも会えなくなるんだよね……

それはちょっと、寂しい。素直に。
せっかく仲良くなったのにさ。
「どーしました？」
「……ううん。なんでもないよ」
……まぁ、メールもできるんだし……ずっと会えないってわけじゃないし、いいよね。
そう答えたところで、巨人からの「静かに～！」の声が響き渡った。

翌日。テストの日。
……ここでですが、私は毎回の定期テストの朝は必ず寝坊をする。
そして、今日も……
「……し、７時５０分！？」
寝ぼけ眼で見た時計で、一気に目が覚めた。
ヤバ、あと１０分で支度しないと！
８時に特急が来るから……と、時間配分しながら着替えをして、テーブルに並べられた朝ごはんを食べて家を飛び出す。

「な、なんとか間に合った……」
特急に乗り込み、一息つく。
えっと、２０分ぐらいで海宮駅に着くから、そこからマジで自転車かっ飛ばして２０分ぐらいで学校着くから、１０分前ぐらいには間に合う……額から流れる汗を、手で拭った。
……なんか、蒼井君がいない車内は……不思議な感じがする。
こう、何もかもが……
そう思う私は……もう、蒼井君が登校中一緒だ、っていうのが普通となってたのかもしれない。

海宮市駅に着き、久しぶりの自転車にまたいでかっ飛ばす。
「つ、着いた……」
時計は８時４０分。なんとか間に合った。

玄関をくぐり、大ホールへと急ぐ。
「あ、さーやーっ！珍しく遅かったね～！」
ギャルグループと騒いでた桃花が私に手を振る。
「寝坊しちゃって……めっちゃ急いだ……」
桃花以外にも黒ギャルが3人いて……とりあえず笑顔でそう言って、席へと急いだ。
私的に黒ギャルはちょっと拒否感があるんです。
「あ、先輩。どうしたんですか？」
「あ～、寝坊した。起きたの、７時５０分で……」
「そーですか……お疲れさまです」
そう言って微笑む蒼井君。
……ヤバい。マイナスイオン漂（ただよ）いすぎだよ、その笑顔は……
きっと1時間持久走してもその笑顔見たら一発で疲れが和らぐだろうな。
「お～い、席着け～！」
巨大先生の合図で、カバンを足元に置く。
「今日は隣の上級生に聞いちゃいかんぞ～！喋った奴、即延長補習だからな！」
そう言って、前から回されるプリント。
始めは……世界史だ。
「では、始めぃ！」
補習免除か否かを賭けたテストが、今、始まる……

第8話　リボン3人組

世界史、数学、古典、現代……3時間みっちりとテスト漬け。
期末よりも問題量少なくて助かったけど……難易度は期末とほぼ一緒だった。
「づ、づがれだ……」
12時のチャイムとともにテストが終わり、燃え尽きた私は机に伏せる。
「やっぱ3時間はキツい……」
蒼井君も机に伏せる。
多分今、5分の4の生徒が机に突っ伏してるだろう……
その間、先生が手際よく解答用紙を集めた。
「あと1時間後にテスト結果出るだってぇ～！」
桃花が近づいてきて、そう言ったのが分かった。
今日やった分の点数を全部足して、教科数で割って……と、平均点で運命が決まるらしい。
たとえば日本史が50点、古典が30点、数学が60点だったら、140点÷3教科で46点……みたいな。
今学校にいる先生が総動員でこの作業をするらしい。
「桃花、どうだった？」
「あ～も～全然ダメ！終わった～ってカンジ！！夏休みが消えちゃった～的なっ！うへへへ～」
本当に終わりなのか、桃花のテンションがおかしい。
「まっ、いいのさっ！桃イコール補習で！にゃははは！んじゃあ桃はミュウミュウ（黒ギャルのあだ名）のとこ行ってくるねぇ！バァ～イ！」
……誰にも止めれそうにないです。
ていうか、あと1時間か……なんか頭使って、お腹空いた。
「あ、あのっ、杉浦先輩……ですよね？？」

「ん？」
後ろから声をかけられ、振り向く。
そこには頭にリボンつけた小さい子が３人いた。
名札が白……１年生かな？
「キャー！間近で見ても超美人～っ！」
「私たち、杉浦先輩のファンなんです！」
……なんか、騒がれてます。
前に蒼井君が言ってたっけ。杉浦先輩有名ですよ、って。
「あ、そりゃどーも……」
なんか妙に照れて、頭の後ろを掻く。
「キャーッ！カッコい～！」
ど、どこがぁ！？
あまりものオーバーリアクションに唖然としてたら……近くで、ガタッて音がした。
蒼井君が立ち上がった音。
「どーしたの？」
「……俺、ちょっと購買行ってくる……」
ひきつり笑いを浮かべ、蒼井君はその場を離れるような体勢をした……が。
「え？蒼井って……もしかして、大翔なの？」
キャーキャー騒いでた１年リボンＡ（勝手につけたあだ名）が、蒼井君を呼び止める。
「うっそぉ！全然気づかなかった～！髪型変わってるし！あ、もしかしてその髪……」
「咲良（サクラ）！ちょっと……」
と、蒼井君は１年リボンＡ……もとい、咲良ちゃんの手を掴み、ダッシュでその場を去った。
私はその後姿を、ずっと見てた。
……もしかして、あの咲良って子が……？
「あの男の子が大翔君ってゆーんだぁ！」

「カッコいい～！」
１年リボンＢとＣが大声を上げる。
それよりも……蒼井君と咲良ちゃんの行方が、どうしても気になる。
「杉浦先輩？どしたんですか？」
「え？あ～……お腹空いたな～って……」
咄嗟の言い訳で、気を紛らわせた。
「あ、だったら一緒に購買行きませんかっ！？」
Ｂからの提案に、
「うん」
そう言って笑うと、ＢとＣの目はハート型になっていた……

購買に行く途中聞くと、Ｂの名前は萩本優希（ハギモトユキ）。Ｃの名前は春野李流（ハルノリル）。
咲良ちゃんの名字は西院（サイ）という、少し変わった名字らしい。西院咲良（サイサクラ）……か。
「咲良、いつも「元彼の大翔っていう人が～」って、元彼の話ばっかしてたんですよ～！」
優希ちゃんが、パンを口に入れながら話す。
「だから、その大翔って人、一度見てみたかったんです！今日初めて見たけど……ギザカッコヨス！でした！」
そう言う李流ちゃんは「ダイエットしてるんでっ」と言って、何も食べていない。
「蒼井君、１学期から１回も学校来なかったから……知らないわけだね。優希ちゃんも李流ちゃんも。」
「はい！違うクラスだったから、学校来てないってことも知りませんでした！」
「李流も～！」
大翔君の存在は１学年全員に確認されてないらしい……
２学期からは、優希ちゃんや李流ちゃんもこれだけキャーキャー言うんだから……絶対１年女子全員も歓声をあげるだろうな……と、想像した。

まるで、少女漫画に絶対1人は出てくる王子キャラ。
「咲良、大翔君と何してんだろ～？」
「もしかして、もう1度告ってるとか！？」
「もしそれでくっついちゃったら、どうする！？」
そんな話を聞いて……なんでか、ズキッと来る。
しつこくメールするくらいだ。咲良ちゃんは、蒼井君にアタックしてるだろう、今頃……
「……あっ、もうすぐ1時だ！ホール戻ろっと。」
ズキズキする心から逃げるため、その場を立ち上がる。
私に続いて、優希ちゃんと李流ちゃんが立ち上がった。

大ホールに着く。……蒼井君は、まだいない。
「咲良いないなぁ～。遅いなぁ～……」
「何やってるのかな～……」
次々に言う優希ちゃんと李流ちゃん。
平静を装って、私は頬杖をついた。
「お～い、席着けぇ～！」
巨大先生がホールに入って、優希ちゃんと李流ちゃんは「それじゃ杉浦先輩、失礼しますっ！」と元気よく言って、それぞれの席へと帰って行った。
「ん？蒼井と西院がいねーなー。どこ行ったんだぁ～？」
と、しばし辺りを見回す巨大先生。
……そう。まだあの2人は帰ってきてない。
「まぁいっか。成績表渡すから、3－Aから出席順に並べ～！」
3年生が続々と立つ。そして並んでる間……蒼井君がホールに入ってきた。
「……セーフ、ですか？」
ちょっと息切れした様子で、辺りを見回す蒼井君。
「うん」
私の言葉に、蒼井君は安堵した表情をした。

蒼井君は帰ってきた……けど、咲良ちゃんがいない。
「咲良ちゃんは？」
「あ……と、帰りました。」
少々困惑してる蒼井君。何があったんだろう……？
「咲良ちゃんに、何て言われたの？」
「……別に、大したことは……」
わ。うまく話を逸らしたな、蒼井君……
それ以上は、何も聞かなかった。

そして、やって来た成績表。
ドキドキしながら、開く。
日本史７０点。
数学６０点。
古典８０点。
現代９０点……
そして、平均。
「７８．５点……」
よ、よっしゃ！
無意識のうちに、ガッツポーズを作る。
「補習免除、ですね」
覗き見してたらしい蒼井君が、笑顔でそう言った。
「うん！」
私も負けじと、笑顔を見せた。

「よし、みんな座れ！」
先生の号令で、バラバラに散らばってた生徒が席に座る。
「今回、補習継続者４０人！補習免除者２４人！補習免除者はひとまずご苦労だった。継続者は今より更に勉強するように！」
４０人の人……マジでどんまいです。
ちなみに蒼井君は……ただ成績表を見て笑顔になってただけで、点

数は分からない。
「ちなみに、今回全教科満点を取った人がいる！1年の蒼井大翔！これには教職員全員が驚いてた！続けるよーに！以上、解散っ！」
え……マジで？
ビックリして、蒼井君を見る。
「唖然とさせましたよ」
そう言って、笑った。

「凄いねぇ、蒼井君は……」
帰り道。しみじみと言う。
「別に、凄くないですよ？」
なんて言う蒼井君の表情には、嬉しさが窺える。
……謙虚なのか、どうなのか……
「ほんとほんと……天才だよ大翔君は……」
一緒にいる桃花は、疲れ切った表情だ。
どうやら、平均点が４５点だったらしく、補習継続になったらしい。
ちなみに咲良ちゃんは、優希ちゃんや李流ちゃんによると補習免除になったらしい。そして、優希ちゃんも李流ちゃんも。
あの3人組とは、ひとまずお別れ……かな？
しみじみとそんなことを考えてると……
「あ、さーや！」
前方から、夏姫がやって来た。
「あ、夏姫。久しぶり。またたっくんとデート？」
「大当たりぃ～！」
白ワンピにGジャン、白ミュール。白帽子に白バッグ……半分漂白された夏姫が、ピースサインをする。
「って、この黒ギャル誰～？」
隠れズバズバ言うタイプの夏姫は、桃花を見て不思議そうな顔をする。
「林桃花だよん！1年の時一緒だった！」

「えぇ！？桃花ちゃん！？うそ～……」
と、漂白時代の桃花しか知らない夏姫は、口をあんぐりさせてた……
桃花と別れ、電車に乗る。
でっかい車内広告があった。
「海宮花火……？」
綺麗な花火の周りに、そんな文字。
「あ、去年、さーやが寝込んで行かなかったやつだぁ！」
……ああ、そんなこともあったっけ。
去年、夏姫と唯と私とで海宮花火に行く約束してたんだけど……珍しく夏風邪ひいちゃったんだっけ。
「今年は行こーよ、さーや！」
「うん。でも……唯とは無理……」
「え、そうなんだ～。ケンカ？まぁいいけど……そうだっ！さーやの彼氏も行こーよ！」
……はい？
ボーっとしてた蒼井君が、夏姫を驚いて見る。
「彼氏って……蒼井君のこと？」
「へぇ、蒼井君っていうんだねぇこの子！めっちゃ綺麗！まぁさーやの彼氏だから常識かぁ～！」
「いや、彼氏じゃないって……」
ていうか蒼井君……なんか言おうよ！
「あ、そうなんだ？つまんなぁい！」
「いいですね、花火。俺も行きたいです」
笑みを見せながら言う蒼井君。夏姫はノックアウトされてる。
あ、蒼井君、先輩キラー……？
「んじゃ決まりぃ～！たっくんも誘うから、男1人じゃないしね！」
どうやら、夏姫の彼氏……たっくんもいくっぽい。
夏休み、最初の思い出が作れそう……です。

第9話　海宮花火1〜ざわめき〜

それは、昨日のことだった。
『私、大翔君のこと好きになっちゃったから、ユースケとは別れたぁ』
桃花からのメール。絵文字もギャル文字も顔文字も使わない、簡素な文で綴られた内容。
『ふーん、そっか』
そんな、呆気ない返信をする。
やっぱもろいな、恋人って。
……これが、メールでよかった。
電話とかだったら、ざわついた心を桃花に悟られるかもしれないから。
――……なんで、心がざわつく？
自分のことなのに自分が分からず、もどかしい思いで布団に体をくるませた。
「意味分かんない……」
ずっと前から、思ってた。
最近の私は、意味分かんない。

蒼井君の笑顔を思い出す度、胸が熱くなる。頭がぽわっとする。
蒼井君が咲良ちゃんの手を引いて立ち去る姿を思い出す度、胸が熱くなる。泣きたい気持ちになる。
そして、気になるんだ。蒼井君と咲良ちゃんがあの日、なんて会話をしたのだろう、と。
人がなんて話そうが、私には関係ないことなのに……どうして、こんなに気になってしまうのだろうか。

「う〜……」

「どしたのよ、沙彩。くるまって。大丈夫？」
呻き声をあげてると、布団の上からお母さんの声がする。
「えっ？あ、なんでもないよ」
慌てて布団から出ると、クローゼットをごそごそ漁り始めた。
「……なんか沙彩、変わったわね」
「へ？」
「全体的に雰囲気丸くなったっていうか。可愛くなったんじゃない？」
「そ、そうか……？」
頭の後ろを掻くと、「男っぽい行動とかは変わりないけど」と付け加えられた。
「それより今日は海宮花火、見に行くんでしょ。服、選んだげる」
「あ、ありがと」
そう言って、クローゼットから出た。
「ん～……これとこれとこれ……あと、これもね。あ、そうそう。これも。あ、これも出そう」
と、次から次へと出てくるもの。
7分丈のスキニーとロングキャミ。大きめのシフォンT。カゴバッグにシフォンリボン。
一度も履いたことがない白ミュール。こんなん履ける……？
「始めに着替えて。後でメイクと髪やるから」
「はぁい」
と言って、「メイクポーチ持ってくる」と自室へと戻ったお母さん。
……てか、チュニックコーデってやったことがない私。
いつもTシャツに長パンツにスニーカーという……髪もそのままのストレートだし。

着てみたら、自分で思うのも変だけど、案外似合ってた。
「あら、似合うじゃない。さすが私。んじゃ、メイクするから座りなさい」

お母さんが入ってきて、私をイスへ座らせた。
どこのメーカーか分かんないけど、高そうなリップを塗られ、グロスも塗られる。
ビューラーでまつ毛を上げられ、チークをのせられる。
そして髪は、シンプルに束ね上げられ、リボンをつけられた。
……リボン3人組みたい。
咲良ちゃんを思い出し、少し嫌になった。
「……お母さん、リボンはやめて。ゴメン」
「あ、そう。んじゃあ巻きつけて……」
と、リボンが解かれ、結び目にシフォンリボンを巻きつけられ、シュシュ風になった。
そしてコームで逆毛をたてられ、スプレーをかけられる。
仕上げにイヤリングをつけられ、ネックレスをつけられた。
「うん。夏娘の出来上がり」
珍しくお母さんが微笑み、仕上げに、と香水を私の耳元にかけた。
ほんのり香る……マリン？
「あ、ありがと……」
そう言って、カゴバッグを持って玄関に下りる。
「“問題は”起こさないようにね。行ってらっしゃい」
夏祭り＝強盗とか誘拐とかの不祥事が起こる祭りという方程式が刑事の中で出来上がってるのか……問題は、のとこを強調して言うお母さん。
苦笑いを浮かべて、行ってきます、と言った。

「あ、さーやっ！」
駅のホームに着いて、大きく手を振るのは、夏姫。
誰かとたっくんが、その横で話してた。
……誰だろう。2年？いや、3年？たっくんの友だちか先輩かな？
「さーや！超かわい～！」
「おわっ」

恒例、夏姫からの突進。
桃花が浜田ブ○トニーだから…夏姫は矢口○里かな。例えたら。
ていうか夏姫、浴衣だし！
「夏姫、浴衣じゃん！暑くない？」
「そりゃ暑いけどぉ～……いちばん最初に「可愛い」って言ってよぉ！」
と、膨れる夏姫。
「俺が最初にコイツの浴衣姿見たとき、「暑くねぇか」って聞いたら、コイツ怒った」
たっくんがやって来て、夏姫の頭の上で頬杖をつく。
「も～！頭痛いってばぁ！」
夏姫がたっくんの腕を掴んでじゃれる。
……あ～も～、暑苦しいなぁ。
「あの２人、付き合ってんですか？」
後ろから頭上で、声がする。
「うん。もうかれこれ１年以上も……」
って……この声……
「あ、蒼井君！？」
驚いて振り向く。
たっくんと話してた“誰か”とは、蒼井君だった……！
「だだだ、誰かと思ったし！」
「そんなに変わるかなぁ……？」
だって、まず、髪型が大きく違う。
前はサラサラの栗毛だったのに、今は無造作の黒髪。
でもやっぱ、服装が違うと印象も違って見える。
「なんか、３年生みたい」
「３年生にしては、背ぇちっちゃすぎるでしょ」
と言って、笑う。
私も笑い返し、いちゃついてる夏姫たちを呼ぶ。
ホームでは、アナウンスが流れていた。

電車に乗り込み……まず始めに、大量の人ゴミに驚く。
「これ、絶対座れないし……」
４０分間立ちっぱかぁ……と、残念に思うけど、しょうがない。
辛うじてあいているスペースに立つと、後ろにはおっさんの集団…
…どうやら、帰宅ラッシュ＋夏祭り客が合わさって、大変な状態に
なっているらしい。
「こんな満員電車に乗るの、初だし」
蒼井君は苦笑いを浮かべ、窓の外の景色を見ている。
その横顔に、近くにいた女子高生が色めきだした。
……本当、３０人も彼女できるわけだ……
小さく溜息を吐くと、気分を紛らわすために車内広告を見る。
……ふと気がつくと、誰かにお尻を触られていた。
憶測……後ろの帰宅ラッシュ中のおっさん集団の誰か……だ。
足の位置を想定し、ミュールのかかとを少し上げ……
想定したおっさんの足を、思い切り踏んづけた！
「○×△□☆＊（＜□＞）（「□」）（ＴＯＴ）――っ！！！！
！」
後ろを向くと、ワケ分かんない奇声をあげたおっさんはうずくまっ
ている。
それを見て、フッと笑った。
「……さっきのおっさん、もしかして先輩が……？」
蒼井君が、うずくまるおっさんをみてそう言う。
「うん。痴漢してきたから、かかと落とし喰らわせた。」
「マジですか。やっぱ先輩カッコい～」
……まぁ確かに、普通じゃないよね。
普通の女の子……夏姫だったら多分、悲鳴を上げて周りの注目を浴
びてるだろう。（んで、痴漢犯がキョドる）
だが私は、おっさんが悲鳴を上げて、周りの注目を買ってしまった
……

海宮駅に着き、一応駅員さんに痴漢されたことを報告。
駅員さんは、「今度されたときは、危険人物かもしれないんで攻撃するんじゃなくて悲鳴を上げてください。駅員が捕獲しに行きますので」と、半分本気、半分笑いを交えて言った。
「さーや！お前強っ！」
たっくんに頭を突付かれ、夏姫からは「格好は女の子なのに、することは男の子だね！」と言われ……
オレンジ色の空には、祭りの始まりを知らせる大砲みたいな音が、パンパンと響き渡っていた。

第１０話　海宮花火２～一期一会～

「おわ～……」

祭り会場に着き、その“祭り”という典型的な雰囲気に魅了された。

綺麗な浴衣姿の女の人。はしゃぐ子ども。

まるで、自分が未来からやって来た人物みたいに思える。

……でも、そのイメージは簡単にかき消された。

「あ、さーやだぁっ！」

と、近くに寄ってきたピンクのド派手な浴衣で、デカ花つけたギャル、桃花。

そして後ろには、黒ギャル３人がギャーギャー言いながらはしゃいでる……

……ああ。このギャルこそ典型的な祭りの要素……なのかな。

「どーよ！この海宮美女・美男が集まった祭りは！」

キャッキャはしゃいでる桃花。

……そういえば桃花、蒼井君のこと好きなんだっけ……

「お～い、さーや！うちらあっち行ってるね～！」

「えぇっ！ちょっと夏姫ぃ……」

瞬く間に蒼井君と夏姫とたっくんは人ごみへとかき消された……

「あ、メールのこと、本気だからね！！」

と、念を押すように私の目の前に人差し指を突き出す桃花。

少々後退りしながら、うん、と答えた。

「んじゃ、またねぇ～っ！」

黒ギャル集団の中に帰っていった桃花。

……さてと。夏姫たちを追いかけなければ……

辺りをキョロキョロしてると、男友だちと笑い合ってるユースケがいた。

「ユースケ！」

大声で呼ぶと、ユースケが振り向く。
ワックスでガンガンに逆立てた髪。ピアスに腰パン……レベル８のギャル男、ユースケ。（ＭＡＸはレベル１０）
なのになぜか頭いい、謎なヤツ。
「さーやじゃねーか！マジ久しぶり！」
ユースケとは１年生で同じクラスだったから、ちょっとは喋ったことがある。
「桃花と別れたって本当？」
「あぁ。あっさり振られちまった～的な！」
そう言ってユースケはニャハハと笑った。
……あれ？意外と平気そう……？
疑惑を持った目でユースケを見ると、「マジだって！」と言われた。
「んじゃ！さーやもいい恋しろよー！」
人ごみに消えてゆく後姿を、最後まで疑惑を持った目で見てた。
普通、彼女に振られたらショックで立ち直れないだろう？
でも、今普通に友だちと笑ってたし……
ていうか、他に女がいたとか！？
……悶々と考えていても、別れた、という事実にしか結びつかなかった。

その後も、顔見知りの人と会ったら少々話し、また会ったら少々話して……の繰り返し。
「夏姫たち、いないし……」
歩くの速すぎるし！
……なんか今、迷子になった子どもの気持ちが分かるよ。うん。
なんて考えてたら……
「うえ～ん！ママがいなぁぁぁい！！！」
足元でちっちゃな女の子が、わんわん泣いていた。
「ど、どうしたの？ママいないの？」
３歳ぐらいの女の子を抱き上げ、問いかける。

「みうねっ、そこでねっ、そこでねっ！」
嗚咽で途切れ途切れの言葉。名前は……みう、って言ってたから、みうちゃんかな。
よく見ると、膝が少しすりむけている。
憶測だけど……お母さんについて行こうとして、走ったらこけて、お母さん見失って……で、今に至るのかな。
なんて、みうちゃんに聞いても分かるわけがなく……
「え、えと、とりあえず消毒……って、薬持ってないし！」
とりあえず、けがの処置は早く……ということで、水道に行って、みうちゃんの膝を洗う。
「ママァ……どこぉ？」
だいぶ泣き止んだのか、それともまた泣きはじめるのか……寂しそうな顔で、みうちゃんは辺りを見回していた。
「すぐ見つかる……よ」
と言ったけど……みうちゃんのお母さんの顔が分かんないから、見つかるはずもなく。
あ～、どうすれば……
「先輩、この子誰ですか？」
「え？」
振り向くと、みうちゃんの目線に合わせてしゃがんでる蒼井君がいた。
「えと、迷子っぽくて……ケガしてたから、傷口洗ってたんだけど……」
「んじゃ、とりあえず本部行きますか。」
と、蒼井君はみうちゃんを抱き上げた。
あ、本部！その手があった……
「おにーちゃん、だぁれ？」
不思議そうな顔をして、みうちゃんは蒼井君を見る。
「そこのおねーちゃんの友だち。」
「ともだち？」

まだ小さいみうちゃんには「後輩」という言葉は分かんないんだろう。

「友だち」っていう言葉が分かりやすいんだろうけど……

その「友だち」の響きに、違和感を感じた。

「海翼（ミウ）！」

みうちゃんを連れ本部に行くと……中に、すっごい綺麗な女の人がいた。

みうちゃんは、「ママ！」と大きな声で言うと、蒼井君の腕の中から飛び出し、お母さんに飛びつく。

胸板を蹴られたらしい蒼井君は「おっ」と行って、抱えていた腕をほどく。

一瞬見えた、みうちゃんのバッグ。

“工藤海翼（クドウミウ）”と書いてあった。

海の翼……で、海翼ちゃん。か。

「海翼、ごめんね、気づいてあげれなくて……」

海翼ちゃんのお母さんは、もう声が震えてて半泣き状態。

「本当、ありがとうございました！」

と言って、深々と頭を下げられた。

しどろもどろしてると、海翼ちゃんが、

「あのねっ、おねーちゃんとおにーちゃん、ほんとのパパとママみたいだったんだよ～！」

と、笑顔でお母さんに言っていた。

「あら、そーなの？」

「うんっ！あ、そだっ！海翼ね、りんごあめ食べたい！」

「じゃあ、買いに行こっか！」

そう言って微笑む海翼ちゃんのお母さん。

「本当にありがとうございました！」

そしてもう一度、頭を下げて、日差しもないのに何故かサングラスをかけて本部を出て行った。

「バイバ～イ！」
元気よく手を振る海翼ちゃんに、私も振り返した。
……さっきのお母さん……つい綺麗さに見惚れちゃったけど、なんか、子持ちにしては若すぎたような？
「俺、さっきの人……なんか知ってる」
「え、誰？」
「たしかモデルの、工藤リ……」
「あっ！工藤リリナ様！？」
工藤リリナ様とは、今人気のファッションモデル。２０歳で日米ハーフで超美人、と有名な人。
確か、子どもがいたような……
「な、なんでリリナ様がここに……？」
「ここの出身で、海宮美人の象徴ですよ。多分」
「うわ～……サイン貰っとけばよかったなぁ～」
少々後悔中の私……
そんな私を見て、蒼井君が笑う。
「なんか先輩、子どもっぽい」
「え〝……」
思わぬ言葉に、言葉を濁す。
クスクスと笑い続ける蒼井君。
「んじゃ、屋台でもまわります？」
「あ、うん！」
思えば夏姫たちを探すばっかで、屋台まわってなかったっけ。
蒼井君に続いて、私も本部から出た。

そして数年後、またリリナ様や海翼ちゃんに会うことになるとは……祭りを心から楽しんでる私には、想像がつかなかった。
一生に一度の出会い……つまり、「一期一会」だと思ってた。

第１１話　海宮花火３～気づき～

「んん～～～……」
杉浦沙彩。只今、りんごあめ売り場の前で悩み中…です。
「先輩、りんごあめとか、どれも一緒ですよ？」
「……じゃなくって～……」
りんごあめの屋台、にも関わらず、いちごあめやぶどうあめが、艶やかに光って並んでいる。
りんご、いちご、ぶどう…どれも大好き。だから迷ってるんだ。
ていうかなんで「りんごあめ」って堂々と書いてあるのに、レパートリーが広い……？
「お嬢さん。どれにするかね？」
売り場のおじいちゃんも、半分呆れた様子でフォッフォと笑ってる。
「ん～……」
りんごはシャリシャリしておいしい。
いちごは美肌にはもってこいのフルーツ……
ぶどうはあの味の濃さがいいんだよね……
「迷うなぁ～……」
３つのフルーツと、にらめっこしたけど……どれにも負ける。（意味分かんない）
「おっさん、これとこれとこれ買う」
「え？」
横にいる蒼井君が、３つのフルーツを指差した。
「まいどありぃ～。４５０円だよ。」
おじいちゃんの手に、蒼井君が４５０円をのせる。
「はい」
と、にっこり笑って、３つの棒がちらっと見える袋を渡す蒼井君。
「え？あ、ありがと……」
ビックリ、と嬉しい、が混じって拍子抜けな声になる。

「兄ちゃん見てると、昔のワシの鏡のようじゃ。」
顎鬚(あごひげ)を触りながら、シワシワのおじいちゃんが笑う。
お、おじいちゃん、蒼井君ぐらい顔キレイだったの……!?（ちょっと失礼）
「ワシも若い頃はヤエコによくいろんなものを買ってあげたもんじゃ……あ、ヤエコっていうのは数年前に死んだ娘のことなんじゃけどなぁ」
おじいちゃん、回想シーンに入ってます……
ていうか、私と蒼井君……親娘(オヤコ)じゃないですよ?

おじいちゃんの話を長々と聞かされ、ようやくりんごあめの屋台から脱出。
「あのおじいちゃん、ウケますね」
いや、ウケるというかなんというか……
「そ、それより！４５０円払うよ！」
「いやいいですって。先輩、多分もう底ついてるだろうし」
財布を開けてみると……蒼井君の言うとおり、１００円玉が２枚と５０円玉が１枚。
思い起こせば、いろんなモンを買った……
「……ほんと、ゴメン……」
半泣きでそう言うと、財布をバッグにしまった。
「それより、ちょっと金魚すくいしてもいいですか?」
「え?金魚?」
金魚すくい、とかかれた屋台を指差す蒼井君。
「妹が熱出してて。「金魚とってきて」っていう命令が出たもんで……」
「妹いたんだ！」
「はい。５歳の」
だ、だいぶ歳が離れてますなぁ……
「名前はなんていうの?ヒロトだからヒロコとか?」

「いや、亜珠華（アスカ）。亜細亜（アジア）の亜に真珠の珠、華道の華、で、亜珠華」
わお。豪華な名前～……
「母の再婚相手の連れ子なんで、全然似てませんが」
と、蒼井君は苦笑した。
「いや、でもやっぱ妹っていいよね～。私、1人っ子だから羨ましい」
「たまにウザいですけど……じゃ、ちょっとすくってきます」
蒼井君が人ごみに混じって見えなくなり、私は石が積み重なった塀にもたれる。
夜風が頬に当たって、気持ちいい。
しばらく目を瞑っていると……
「あ、杉浦先輩！」
聞いたことがある声に、目を開けた。
「あ。優希ちゃんと李流ちゃんと咲良ちゃん……だよね？」
「キャー！覚えててくれたぁ！」
浴衣姿のリボン3人組。私が覚えてたぐらいで、キャッキャ騒いでた。
でも咲良ちゃんは……なんか、じとっとした目線で私を見る。
「……どしたの？」
咲良ちゃんは、ふい、と私から目をそらせた。
「……優希、李流。ちょっと先に川原行ってて？」
「え？あ、うん。どうしたの？咲良ぁ」
「別に……ごめんね？」
なんて言う咲良ちゃんの目は、別にって感じじゃない。
渋々優希ちゃんと李流ちゃんは川原へと向かって行った。
「……杉浦先輩」
今度はまっすぐ、咲良ちゃんは私を見る。
「ん？」
「……大翔と、どんな関係ですか？」
その言葉に、眉をひそめた。

この子は……やっぱ、蒼井君に未練があるんだ。
「咲良ちゃんが知る必要、ないじゃない？」
「あるんですっ！」
咲良ちゃんの大きく、叫ぶような声に、少しビクッとなる。
「……先輩、大翔と付き合ってるんですか！？」
「そ、そんなことないよ」
「じゃあ、大翔のこと好きなんですか！？」
その言葉に、ドクッと一気に心臓に血液が流れ込む感じがした。
私が、蒼井君を……好き？

「好きじゃなかったら、関係聞いたときに「ただの友だち」って言えるはずでしょう？」
ただの友だち……ただの、をのけても、友だち。
唯みたいな、一緒にいることが当たり前な存在。
唯みたいな、恋愛とか考えられない存在。
蒼井君は……友だち、じゃない。
さっき、蒼井君が海翼ちゃんに私のことを「友だち」と言ってて、ズキッときた。
――じゃあ、一体……友だち、じゃなかったら、何？
「……関係が分からないのなら……大翔に、近づかないでください。私が迷惑なんです……」
冷たい声でそう言い、走り去って行った咲良ちゃん。
私は無意識に、３種類のあめが入った袋を握り締めた。

「……輩。杉浦先輩！」
「……え？」
ボーっとしてたらしく、蒼井君の声に気づかなかった。
「すみません、結構並んでて遅くなって……」
時計を見たら、あれから３０分は経っていた。

「ん、いいよ。あんま気にしないし」
「あ～よかった。怒られるかと思った」
安堵した表情を浮かべ、蒼井君が笑う。
「そこまで怖い先輩じゃないよ」
私もつられて、笑顔になった。
「金魚、５匹すくいましたよ」
ほら、と言って目の前に出された小さい袋の中には、オレンジ色の金魚が口をパクパクさせている。
「亜珠華ちゃんもきっと、喜ぶね」
「はい」
すると、夜空に……大輪の花火がひとつあがった。
よく見ると、辺りには人がほとんどいない。
また石壁にもたれかかった。
んで、空を見る。
「わぁ、キレー……」
次々と打ち上げられる花火。
蒼井君も同じように、もたれかかって上を見る。
赤、オレンジ、青……色とりどりの花火。
これが……海宮花火、なのかな。

最後の花火が夜空を彩って、しんと静まりかえった頃……ケータイの着信音に気づく。
夏姫からだ。
『今日はたっくん家泊まるから、先帰っててぇ～！』
……あの２人といったら……
「夏姫、たっくん家泊まるんだって」
「それじゃ、先帰りますか」
蒼井君の合図で、もたれていた体を起こした。

帰り道……といっても、いつもの学校からの帰り道に等しい。

「海宮花火、日本の名花火百選に選ばれているらしーですよ」
「どうりで……すっごいキレーだったしね」
さっきの海宮花火を思い出し、納得する。
そして……何故か訪れる、沈黙。
頭の中には……咲良ちゃんや、桃花が浮かぶ。
「……あのさ、蒼井君」
「はい？」
「なんか変な話なんだけどさ…例えば、身近に異性の友だちがいるとするよ？」
「はい。女友だちですか？」
「うん。蒼井君の場合だとすると……その女の子の笑顔思い出しただけで頭がクラクラしたり、他の男の子と喋ってるのを見て、めっちゃ悲しい気分になるのって……恋だと思う？」
まっすぐ、前だけ見て聞く。
でも、蒼井君の考えてる表情がなんとなく分かった。
「……だと思いますよ」
「え？なんで？」
蒼井君を見ると、口に拳をあてている。
「友だちかどうかはさて置き、その人のこと考えるだけでも……十分恋なんじゃないんですか？」
「……そっか。」
だとしたら……

多分私は……あれほど、必要ないと思ってた恋を、しているのかもしれない。

第12話　ため語

帰りの電車。辺りには、カップルだらけ……
でも、かなり電車の中は空いていた。
「行きとは大違いですね」
「そだね」
席に座ると、電車が動き始める。
……今までの心臓の鼓動や胸のざわめき。
それらは全て、蒼井君を好きだから……ということが分かった今。
……めっちゃドキドキしてます。
カップルだらけのこの現場での沈黙もキツい……
気を紛らわす為、車内広告を見てたら、隣から腕を突付かれた。
「さーあやちゃんっ」
振り向くと、少々ニキビが目立つ女の子がニコニコしながら私を見る。
……あれ？この子、どっかで見たような……
「久しぶりぃ～！」
「……あ、もしかしてキョン？」
「うんっ！」
そうだ、キョンだ。
キョンとは、中学生の時、バスケ部に所属してた頃の後輩。
本名は、外見に似合わず遠藤崎右京（エンドウザキウキョウ）という婆臭（ばばくさ）い名前……（失礼な）
ちなみに姉は左京（サキョウ）という名前らしい。
本人の熱願により、キョンと呼んでる。
「超久しぶりじゃん」
「沙彩ちゃん、めっちゃ可愛くなったことない！？あ、メイクしてんの？あれ？してないよねぇ？やっぱ女度っていうのが上がったの！？モテるっしょ～！何人に告られた？」
キョン……あんたはお喋り度が上がったよ。

キョンは後輩で唯一タメ語を使う。
……あ。後輩には懐かれなかった、ってしみじみ思ってたけど、キョンは別。
てか、私の中でキョンはもう、同級生だったのかな。
「てゆーかぁっ！沙彩ちゃんの横の男の子だぁれっ！？超キレー！カッコいー！」
蒼井君を見て、キョンのテンションはレベルアップ。
いい加減、車内のカップルたちもキョンにイラついてるご様子……
「……そ、それはどーも……」
「えっ、3年生！？先輩！？もしかして2年生！？1年生じゃないよねぇ！？」
「1年だけど」
「うっきゃ～～っ！マジ大人っぽ！ヤッバ！」
出たよ、キョンの奇声。
キョンは「の○め」並の奇声を上げる。
「もしやもしやもしやっ！沙彩ちゃんの彼氏！？おっひゃあ！沙彩ちゃんって年下好きだったんだぁっ！？クーガーじゃん！？」
あ～も～……「おっひゃあ」って……クーガーって何ていう意味なのよ……
カップルさんたちは迷惑そうに耳打ちし合っている……内容は何となく分かっちゃう。
「キョン！頼むから黙って！」
「うぐっ」
キョンの口を、手で押さえた。
「ゴメンなさぁぃぃぃ……」
半泣き顔のキョン。手を離した。
カップルさんたちは安堵して、それぞれの相手といいムードを作り始めてる。
「キョン、高校どこ？」
「海宮だよ！」

「あ、じゃあ同高だ」
「えっ！そうなの？気づかなかったよ～……」
なぜ悲しむ？キョン！
「ていうか沙彩ちゃん、バスケやめちゃったの？強かったのに？」
「うん。今は声楽部」
そう。私は、音楽が大好き。
だからバスケをやめて、声楽部へと入部したんだ。
「そぉなんだぁ……」
『次は○○駅～』
悲しむキョンの言葉と、車内アナウンスがリンクする。
「あ、ちょっとダチとつるむからここで下りる！」
「つるむって……あんま夜遅くに帰っちゃヤバいよ？」
「へーキへーキ！朝帰りするしぃ！じゃあね沙彩ちゃん！」
……キョン。不良になっちゃって……
「うん、バイバイ」
キョンに手を振り返した。
「あの人、一体何なんですか……」
スキップしながら去るキョンをじっと見る蒼井君。
「ゴメン……中学校の時の後輩。多分、蒼井君の同級生だと思う。知らない？遠藤崎右京って子」
「ん～……忘れました」
ちょこっと笑う蒼井君。
か、可愛い！めっちゃ可愛すぎるし！
「えと、んじゃあ学校に行ったら会えるかもね」
「別に会わなくてもいいですけど……」
……蒼井君の嫌いな人リストにキョンが入ってしまった……か。
「それよりさっきの……ウキョウさん？ですか？」
片言みたいに右京と言う蒼井君。
まぁ、確かにあんまり日頃口にしないからね、右京なんて……
「うん。右の京で、右京」

「その人、めっちゃ先輩にため語でしたよね……」
「キョンは基本、誰にでもため語だったから」
「へぇ。先生とかにも？」
「担任はもちろん、生徒指導の先生や校長先生にまでため語だった」
ある意味天才なキョン。怒られてもため語だったし……
「蒼井君もため語でいいよ？敬語って疲れるっしょ？」
「……実はちょっと苦手だったりするかも。ため語、使っていいですか？」
「もちろん」
って、敬語使ってんじゃん。
蒼井君にバレないように笑った。

こんなちっちゃいことでも、楽しいって感じるもんなんだなぁ……
って思った。
ずっと前に言ってたっけ、桃花が。
“好きな人いると、毎日が楽しい”って。
確かに、楽しい。うん。
でもその桃花が……蒼井君のこと好きだなんて、ね。

駅に着き、名残惜しいけど電車から出る。
ホームを出て、大通りへと出た。
「それじゃ俺、自転車ですから」
「あ、敬語……」
「うわ、超無意識」
蒼井君はハハッと笑うと、「気をつけて」と言った。
「蒼井君こそ。私は誰か来ても吹っ飛ばすし！」
「さすが先輩。じゃあ、また」
「うん、バイバイ」
笑顔で手を振る蒼井君に対して、私も手を振り返す。
……やっぱり、名残惜しいなぁ……

これから、きっともう廊下で擦れ違う程度でしか会えないかも。
補習も終わっちゃったしね。

苦笑しながら、家路を向く。

空には、満天の星が煌(きらめ)く。
蒼井君と一緒に見たかったな…と、少し後悔した。

第13話　ぐーたら（前書き）

今回は、見ても見なくてもいいです…

第１３話　ぐーたら

朝日に気づき、目が覚める。
「んん～……」
時計は、１０時になっていた。
昨日は２１時に帰ってきて……そのまま寝ちゃったんだっけ。
たっぷり１３時間も睡眠とっちゃったわけだ……
髪を解くと……ボサボサ。顔は見れたもんじゃない。
「サイアク……風呂入ろう」
下着と部屋着を持って、１階に下りた。

シャワーを浴び、すっきりしてダイニングへと向かう。
「ふあ……眠ぃ眠ぃ……」
間抜けな声が後ろからしてきて……ビクッとなって振り返った。
「沙彩か？」
爆発頭のゾンビが、髪を掻きながら近づいてくる……
「それとも彩華か？」
ずいっと顔を近づけられ……
「うわぁぁぁぁっっっっっ！！！！！」
思い切り後退りした。
って、いやいや、この物体は……

「朝から奇声を上げるな。うるさいし近所迷惑だろう」
部屋に戻り、髪を上げてメガネをかけた……お父さん。
そう、さっきのゾンビはお父さんだったのだ。
「朝からゾンビ化してるお父さんが悪いっしょ……気をつけてよね……もう年いった１６歳なんだからさ……」
「俺は何もやっていない。しかも１６歳っつったら若い盛りじゃねーか」

大口をあけ、ヤツは肉を一口で平らげる。
「ていうか、なんでここにいるの？」
「お前忘れたのか。盆だよ盆」
ああ、お盆ね、なるほど…
肉を切り、私はちまちまと食べる。
「それより、せっかく帰ってきたんだ。街にでも行こう」
「なんでお父さんと街に行かなきゃなんないの？お母さんと行けば？」
「彩華は今、仕事で忙しいんだ。誘えるわけないじゃないか」
溜息を吐き、ヤツはお米を一気に平らげる。
少し冷めていたお米は、一度に口にいれてもあまり熱いと感じないらしい。
「ごちそうさま」
お父さんは手を合わせ、食器を片付ける。
「そういえばお前、彼氏とかまだできないのか？」
「いないよ」
「はぁ？俺は彩華とは沙彩ぐらいの時に知り合ったんだぞ。お前…売れ残るぞ？」
「うっさいなぁ……お母さんも同じこと言ってたよ」
娘に向かって“売れ残る”なんて言う父親は一体どこにいるのか……
溜息を吐いた。夫婦揃って似たもの同士だね……
「でも、好きな奴はいるんだろ？」
「……いるよ、一応」
それだけ答えると、水を飲んだ。
「ふーん、そっか。そーだよなぁ、華の女子高生たるもの、想い人の1人や2人……って、え、マジ？誰？」
お父さんの声が一気に変わり、信じられないといった疑惑を持った目で見られた。
「誰でもいーじゃん。お父さんが知らない人だよ。当たり前だけど」
それ以上追求されるのがめんどくさい、と思い、さっさと食器を片

付け部屋に戻った。

「んー……ダルい……」

ベッドに再び寝転び、寝返りをうつ。

……そういえば去年、夏姫とたっくんがお父さんと遭遇し……

『あの人、さーやのお父さん!?超若くない!?しかもめっちゃカッコよくない!?佐〇健みたい!（ルーキーズの）』

『あぁ!一瞬、メガネかけた佐〇健って思ったし、マジで!』

いや……佐〇健は言いすぎでしょ!と思った……

だって年が１０ぐらい離れているし……いや、２０だっけ?まぁいいや。

それは置いといて……

「ピアノしようっと」

部屋に置いてあるグランドピアノのふたを開けた。

お母さんの代から伝わる、グランドピアノ。音質は、ピアノの先生の家のピアノよりも抜群だ。

今弾いてるのは、クロード＝ドビュッシーの「月の光」

月の光をイメージした、綺麗な叙情曲…

特に中半の盛り上がるところがいちばん好き。

最後のアルペッジョが終わったとき、ケータイの着信音が鳴った。

「誰からだろ……」

すっかり冴えた頭で、ケータイをとる。

……蒼井君からだ。

『昨日、レディースに逆ナンされた（笑）』

思わず、笑ってしまう。

逆ナンって……

『私は無事帰れたよ（・ｖ・）Ｖそっちは災難だったね』

顔文字って…何日ぶりに使っただろうか…?

送信、と。

すると１０秒後に、返信がきた。
『それはよかった＾＾』
……うーん、返信しにくい内容……
とりあえず、ゾンビのことを送った。
『今朝、ゾンビが出たの！
よく見たら、お父さんだった（＾□＾；）』
『朝にゾンビは出ないし（笑）
お父さん、いつも家にいないの？』
『海上自衛隊やってて、たまにしか帰って来ない。
だからこそ、リアルでゾンビかと……』
『海上自衛隊……カッコいい！』
……私の場合、陸上自衛隊の方がカッコよく思えるんだが……
『ちょっと出かけてくるんで、しばらく返信できない…ｍ（＿＿）ｍ』
『ＯＫ（●・ｖ・）ｂ行ってらっしゃい！』
メールが終わった途端、寂しさと同時に嬉しさもこみ上げてきた。
向こうは知らないだろうな……私が、どんな想いでいるのかってこと。
「んへぇぇ……」
妙な奇声を発しながらベッドにうつぶせる。
なんか、キョン化してきてるかも……？

そのまま寝てしまい、７時になっていた。
「何時間寝れば気が済むんだろうねぇ私の体は……」
夜、寝れるんだろうか……という不安に駆られながらも、立ち上がり１階に下りる。
「あ、やっと起きた」
お母さんが料理を並べながら、私の方を見る。
「あんた、今日何時間起きてたの？」
「……多分、１～２時間ぐらい？」

「ハァ。補習が終わった途端、勉強する気も失せてしまったわね……」

お母さんは、呆れ顔だ。

「ほら、ご飯できたわよ。食べなさい。」

カレーが、おいしそうな匂いを漂わせている。

あんまお腹空いてないけど…無理して胃に詰め込んだ。

そして部屋に戻り、ベッドにうつぶせて……就寝。

……かなり、生活がぐーたらになってきた……かもしれないです。

第１４話　カミングアウト

「沙彩、早く起きなさい」
布団を剥がされ、目が覚めた。
「……まだ６時じゃん……」
「何言ってんの。９月１日でしょう？今日は」
……あ。そうだった。
今日から新学期だったっけ……
「ご飯できたから、早く食べなさい」
「ふぁい……」
眠たい目をこすりながら、制服を持って１階に下りた。

洗顔して髪を整え、制服に着替える。
そしてかなりの量の朝食をしっかり食べて、歯磨きをしたら……準備は半分終了。
部屋に戻り、買いたてのメイクボックスを開いた。
……新学期からは、ちょっとメイクしてみようかな……と思ったわけで。自分改革？
お母さんにメイク道具一式を買ってもらった。
まずはベース。次にアイメイク、次に眉毛やって、ほおに色のせて、唇に色つけて……
「よし、完成」
うん、練習の甲斐あって１０分でできた。７時からの電車には間に合う。
髪は……まぁ、いっか。これで。
いつものロンスト（ロングストレート）スタイルで、お母さんのところへ行った。

「メイクおかしくない？」

「ん～……アイラインはもうちょっと濃い方がいいかも。でも、上手くなったじゃない。」
「マジで？」
あまり褒めないお母さんの言葉に笑顔になってると、お母さんがバッグを漁る。
「これ、あげる」
と言い、私の手に乗せられたのは、私の好きな青と白の混色シュシュ。
「あ、ありがと。どこで買ったの？」
「ちょっとコンビニ寄って、可愛いなと思って買ってみたの」
コンビニかいっ！ていうツッコミはさて置き。
「んじゃ、ちょっと髪ウザくなったら使うね」
「はいはい。行ってらっしゃい」
お母さんに見送られ、駅のホームへと向かった。

「さーや！おはよぉ～！」
電車の中で、ちょっと黒く日焼けした夏姫が手を振る。
「あれ？メイクしてる？」
「うん。どう？」
「めっちゃ大人っぽい！3年生みたい！」
「ありがとう」
夏姫はこの夏、たっくんと旅行に行ったみたい。
とか言って県内らしいけど、いい思い出になったらしい。

電車に乗り込んで、空いてる席に腰を下ろす。
「見て見て！この子！可愛くない？」
夏姫が見せてきたのは、5ヶ月ぐらいの可愛い男の子の写真……！？
「夏姫、あんた……」
「やだなぁ！いとこだってぇ！」
「びっくりした……」

てっきり夏姫が産んだんかと思ったよ……
「あ、あれ、蒼井君じゃない？」
「え？」
夏姫が窓の外を指差したので、私も見る。
あ、ほんとだ。あの黒の無造作……蒼井君だ。
「いや～、相変わらず白いねぇ蒼井君……名字の通り、蒼白（ソウハク）？」
「蒼白って……」
入口を見てたら、蒼井君が車内に入るのが見えた。
……途端、入口近くにいた男子生徒の集団が「おぉっ」と声を上げる。
「大翔じゃん！久しぶり！」
「退院したのか。よかったな！」
「え？あ、おー」
……退院？蒼井君、入院してたんだ？
あ、だから1学期は出席日数0なのか。
初耳……しかも何故か、蒼井君、男子生徒に合わせてる……？
「あ、これ、中学の時借りてたCD！お前復帰するだろーなと思って持って来てた！」
「あぁ、サンキュ」
……なんか、顔が、「誰だコイツ」って感じ……気のせいかな。
「……や？さーや？杉浦沙彩っ！」
「へっ！？何！？」
「何ボーっとしてんの～？大丈夫？」
「あ、うん」
本当は……気になってしょうがない。
けど、夏姫に悟られるのが怖くて……今日の授業について、話題を繰り広げていった。

ふと、思い出す。
補習受けてたときの、行きの電車や帰りの電車……

隣には、蒼井君がいた。
けど今は……他の男子と、笑い合っている。
前と今の違い。そして、今の距離感。
心が、少し痛んだ。

海宮駅に着き、私と夏姫は自転車にまたがる。
危ない……と思いつつも、夏姫と二列で喋りながら自転車を走らせていると……
「おはよ！沙彩、夏姫！」
後ろから、唯の声がした。
そして私の隣に来て……三列になった。
警察沙汰になるな……
「おはよ～」
「おっ、沙彩、化粧してっしょ？」
「えっ、なんで分かるの？」
「愛の力～！なんちゃって！」
いつものように、おどけてみせる唯。
……って、私、この人に告られたんだよ……ね？
あまりもの唯の自然さに、その事実すら忘れかけていた。
「朝からテンション高いねぇ唯は」
「だって、夏休み中部活ばっかで超つまんなかったし！」
海でも行きたかったなぁ、と唯は唇を尖らせた。
いや、あんた海宮人（海宮市に住む人）だから海にはいつでも行けるっしょ……
「あ、沙彩！」
視線を向けられ、ギクッとなる。
「俺、あっさり承諾したけど……まだ諦めてねーからな！」
ぶっきら棒に言うと、また笑った唯。
夏姫は「は？」って顔してる。
「何何何？唯、さーやに何か奢（おご）ってあげたの？唯はその代金を請求

してるワケ？」
「あれ？話してなかったっけ、夏姫には……俺、夏休みの最初ら辺に沙彩に告ったんだよね～」
そ、そんなあっさり言うな唯！
そろ～っと、夏姫を見ると……声が出ない様子。口をパクパクさせてた。
「えと、それはつまり、唯は、さーやが……いや、さーやを……？」
「そゆこと！んじゃ、俺先に学校行ってる！」
唯は自転車をかっ飛ばして私たちより先に学校へ向かった。
「ささささ、さーやっっっ！なんでそんなこと早く言ってくれないのぉっ！？」
「うわっ！夏姫危ない！運転っ！」
走行中にも関わらず、横からガシッと私の肩を掴む夏姫。
夏姫は慌てて、手をハンドルに戻した。

学校に着き、靴箱に靴を入れる。
「唯がさーやを……ねぇ……」
夏姫、しつこいです……
「まぁさーや美人だしねっ！」
「んなことないって……」
そんな話をしてると、１年の男子集団と擦れ違った。
……何かがビビッと来て、すぐ分かった。
蒼井君がいる。
振り向くと、蒼井君も振り向いてこっちを見てた。
私が手を振ると、笑顔で振り返してくれる蒼井君。
「え？さっきの集団の中に誰かいた？」
「……ヒミツ」
「えぇ～っ！」
夏姫には、まだヒミツ。

あのお祭りで、蒼井君が買ってくれた、りんごといちごとぶどう味のあめ……まだ冷蔵庫に保存してる。
いつ食べようかな……と、ふと考えた。

第１５話　切ない

始業式。文学好きな校長が、長々と壇上で話している。
……も、もうダメだ……
目が完全に閉じて、体がガクッとなる。
起き上がっては、またガクッと……
「さーやっ、ガンバれ！あと推定１５分！」
隣の夏姫が小声で応援してくれるが……
睡魔は一向に立ち去る気配はない。
「ガンバってる……一応……」
そしてまた、ガクッとなった。

……気がつくと、生徒がちらほら教室へと帰っていくのが見えた。
「ふあ……よかったぁ。先生にバレなくて……」
眠い目をこすりながら、呟く。
「さーや、居眠り癖早く直そうよぉ。」
「はいはい……」
今一度大きくあくびをすると、教室へと足を進めた。

「んじゃあ、３時限目から新学期最初の授業だ！気を引き締めるよーにっ！」
担任の声で、ＨＲが終わった。
新学期最初の授業以外は気ぃ抜いてもいいんかい……
ていうかみんな、気を引き締める気なんて、一切持ってないような気がする。
夏休み明け……っていうこともあるだろうけど、やっぱり第一の理由は修学旅行があるから……かな。
「修学旅行、楽しみ！」
「東京とか一度でいいから行ってみたかったんだよね～！」

修学旅行……というより、最早旅行。
この海宮高校……修学旅行の全日程が自由行動なんだから。
でも、ちゃんとホテルの手配はしてもらってるし、自由行動で行く場所もレポートにして提出する義務もあるから、単なる旅行にはならない……と思う。
東京都、といえば、日本一人口が多い。なんせ首都だしね。
特に東京23区は、日本で最も人口が多い区として知られている……はず。
それ以外、全く無知。
竹下通りや渋谷街……どこにあるのか分かんないし。
原宿と新宿の違いも知らないし。
……まぁ、東京通の誰かが教えてくれるでしょう。多分。（いるのか？）
3時限目は、悲惨なことに、数学だ。

――――……

4時限目が終わり、お弁当タイム。
「さーや！いつものとこ行こ～！」
「うん」
いつものとこ……というのは、私と夏姫がいつも一緒に弁当を食べてる場所。
屋上。普段は立ち入り禁止だけど……夏姫によって開発された小道具で、屋上への門は開かれる。
「ふあ～っ！風、めっちゃ気持ちいいし！！」
夏姫は大きく背伸びをする。
まだまだ蒸し暑い9月……にしては珍しい風が吹いていた。
「本当、屋上っていいよね。」
「なんでこんなとこ施錠しちゃうんだろーね～！」
日陰に座り込み、弁当を広げた。

……と、その途端、屋上の扉がバンッと開けた。
「……うわっ、ヤバいっ！施錠すんの忘れてた……」
夏休みボケのせいか、夏姫が絶体絶命のミスを……
「どうする？」
「とりあえず、隠れよーよ。」
と、何か変な機械の裏に隠れた。
そこから、こっそり扉の近くを覗き込む。
その人は、何やら扉の向こうの様子を伺ってから、扉をしめて施錠し、一息ついていた。
……あれ？あの人……
「蒼井君……だよね？」
夏姫に耳打ちすると、「私も思った」って返ってきた。
「蒼井君？どしたの？」
少々緊張しながら声をかけると、大げさに蒼井君は後退りする。
「あ、杉浦先輩……びっくりした～」
そして再度、蒼井君は一息ついていた。

なんでここにいるのか、を聞いたところ、こうだった。
４時限目が終わった途端、男子からも女子からも食事のお誘いがあって……弁当持って逃げに逃げまくり、２年教棟に入り、開錠してた扉を見つけ、逃げ込んだらしい。
「モテる人は大変だね」
「いや、ただ、転入生だから興味持たれてるだけだし……」
「も～！大翔君そんなにカッコいいんだから、モテる以外ないっしょ！謙遜しすぎ！」
夏姫が蒼井君の背中をバンッと叩く。結構痛そう……
「ところで、友だちできた？」
「一応……同中のシゲオってやつと、カイジってのと、ユウヤってやつ」
同中の友だちの呼び名としては、片言みたいな気がした。

てかシゲオって……何時代の人だよ。
「凄い名前だね、シゲオ。やっぱヒゲとか生えてんの？」
「シゲオは、筋肉凄くて黒くて目が超キリッとしてて……ゴリマッチョのちょっと薄い感じ。声なんか、水〇ヒロにそっくり。かなり年上にモテるっぽい」
「いや、黒いのは日焼けでしょ？」
「まぁそうかも」
でも、なんか一度会ってみたいな、シゲオ。
私の中で、シゲオのレッテルは究極の年上キラーに決定された。
「ってあれ？大翔君、なんか落ちてるよ？」
夏姫が、蒼井君の弁当の傍にあった綺麗な封筒を渡す。
「なんだコレ……」
器用に封筒を開け、便箋を取り出した蒼井君。
……にしても指、長くて超キレー。ピアノ弾きやすそう……（そっちかい）
……話逸れちゃうし。
あの封筒……絶対、女の子が持ってそうなやつ。
便箋も、封筒と同じ柄だった。
……やっぱ、内容が気になってしまうのが本音。
便箋を見ている蒼井君の横から、ちょっと盗み見した。

『蒼井大翔君へ
突然手紙書いたりしてごめんね。
退院して、2学期から学校に来る、って聞いて急いで手紙書きました。
いきなりで本当、ごめんだけど、私は蒼井君のことが大好きです。
中学校からずっと見てました。
付き合えるとは思ってません。だけど気持ち、伝えたかったので、手紙書きました。
藤堂沙織（トウドウサオリ）より』

「……わぁ。手紙で告るって……めっちゃ純情じゃん。」
しかも藤堂沙織って知ってるし……1週間に1回は告られる、超可愛い子じゃん。
……やっぱ、あんなに可愛い子にも想われるんだな、蒼井君……
「えっ、告白手紙!?ちょっと見せてぇ!」
私の言葉に反応したのか、蒼井君の手紙を強引に奪う夏姫。
そろっと蒼井君の顔を見ると、心なしか……白い頬がかすかに赤に染まっていた。
心臓が、ドクッてなる……
もしかして、両想い……?
桃花が、蒼井君のこと好きだ、って言ってた時。
咲良ちゃんが、自分の蒼井君に対する想いを私に打ち明けた時。
その2つの時と同じ……それ以上に、心臓が不規則にドクドク鳴る。
平静を装う為に、弁当を食べることを再開した。

……本当は、伝えたい。
今、ここでも……伝えたい、っていう思いは募る。
だけど、言えない。
多分……傷つくのが、怖いから。
……人を好きになる、って……臆病になることと一緒……なのかもしれない。
今までの私は、自分でも分かるほど……常に動じなくて、誰からも「クールだね。」って言われる存在だった。
でも、今は……動じまくりで、臆病で、意気地なし。

「んで、大翔君はOKすんの~?」
「え?あ、しませんよ」
ネガティブモード……に入っていた時、聞こえてきた、あっさりとした蒼井君の声。

「え～！なんでぇ？」
「だって好きじゃないですし。好きでもない人と付き合っても、傷つけるだけかもしれないですし」
笑いながら、軽快に弁当をつつく蒼井君。
……なんだ、そうなんだ……
今、多分、人生の中でいちばんホッとしてる
「んじゃあ、大翔君って好きな子いるわけだぁ～？？」
……途端、聞こえた夏姫の、蒼井君の核心を突く質問。

「……いますよ」

……別の答えを、望んでる私がいた。
「いますよ」その言葉を聞いて……真っ先に浮かんだ、咲良ちゃんの顔。
頭にリボンをつけてる、笑顔が可愛い女の子。
自分の想いを素直にぶつける、まっすぐな瞳を持った女の子。
……自分とは、格差ありすぎる女の子……
アオイクンガ、オモッテイルカモシレナイ、オンナノコ…

「……なんか急に頭痛い……ちょっと保健室行ってくる……」
急に涙腺が緩みだして、食べかけのお弁当をまとめ……
言い訳を並べ、立ち上がった。
「頭痛いって……大丈夫？連れていこっか？」
心配そうな蒼井君の表情に、胸が熱くなる。
それすら……切ない。
「……いや、大丈夫。ありがと……」
作れるだけの笑顔を作って、保健室へと向かった。

「先生、ちょっと頭痛いんで……寝てていいですか？」
「あら大丈夫？いいわよ」

俯いたまま保健室に入り、事情を話してベッドにもぐりこむ。
枕に顔を押し付け、声を押し殺して……溢れてきた涙をしみこませた。
……蒼井君に、彼女いるわけでもない。
好きだ、と想う人がいるだけのこと……
その現実に、悲しむ私……
私を見て、くれないんだな……

一度でいいから、振り向いてほしかったな……
心の中で、そっと呟いた。

恋をする、って、不思議なもの。
可愛くもなれるし、強くもなれるし、笑顔にもなれるし、楽しいって思える。
けど……臆病にもなれるし、意気地なしになっちゃうし、弱くもなる。

蒼井君に恋するまで、気づかなかった。
恋ってこんなにも、息苦しいこと……

――――…

目が覚めた。
いつのまにか、眠ってしまってた。
ふと、顔が軽く感じ……目をそっと触ると、黒くならない。
つまり、メイクが落とされていた。
あと、額に乗る白いタオル……
目だけ動かし、辺りの光景を見た。
……ふと、傍に存在感を感じ、横を向く。
「あ、起きた？」

そう言い、微笑む……

「唯……？」

第16話　彼氏彼女

「……なんでここに？」
起き上がり、頭にのってるタオルを取る。
「夏姫と俺とで5時限目の前に見舞いに来たんだ」
時計を見ると、もう4時。放課後だ。
「じゃあ、この顔……」
「メイクがグチャグチャに崩れてたらしいから、夏姫がメイク落としたってよ」
……あ、大泣きしたからか……しかもうつ伏せて。
ていうか……バレたかな、泣いてたの。
例えば、私が夏姫だったらビックリするだろうな。
頭痛い、って言って保健室行ったのに、うつ伏せでメイクグチャグチャで枕湿ってたら……かなり驚くだろう。どんだけ頭痛かったんだ、みたいな。
「……そっか。メイク落ちてたからビックリした」
わざと知らないフリして、笑った。
「ていうか沙彩、なんで泣いてたの？」
「え……泣いてない……よ。」
すぐバレる嘘……
唯の手が、私の頬に触れた。
「嘘だろ。涙の跡、残ってるし」
唯は私の頬を頭にのってたタオルで拭きながら、「しかも……」と続けた。
「ずっと、言ってたよ」
「……何を？」
「蒼井君、って。」
顔が、自分でも赤くなるのが分かった。
うわ言で、蒼井君のことを呼んでた……？

「蒼井って、補習の時……一緒に登下校してた1年？」
黙って頷く。
赤くなった顔を見られたくないから俯いた。
「あいつ、彼女……いるって。夏姫から聞いた。」
……え？
思わず、顔を上げる。
「マジ……で？」
「うん。夏姫が、蒼井本人から聞いたんだって」
……多分、私が口実つけて去って行った直後……
「……相手は……？」
「……西院咲良。1年で、蒼井の元カノだっ……」
唯は、私の顔を見て目を見開く。
……気づかないうちに、目から涙が溢れていた。
「……あれ？なんで私が泣かなきゃいけないのかな……」
慌てて拭っても、次から次へと……憎たらしいほど、流れてく。
「おかしいな……ごめんね、ゆ……」
……何か暖かいものに包まれた。
私の背中に、唯の手がまわされている。
「俺じゃ、蒼井の代わりになれない？」
そう言い、唯は一層強く、私を抱き締める。
その強さも暖かさも何もかも……心地よかった。

想うより、想ってくれる相手と一緒にいたい……
それは、同情でもなんでもなかった。
……唯の背中に、手をまわす。
——それが、答えだったんだ。

……結局、弱虫で意気地なしな私は、逃げるっていう形で唯を選んでしまった。
私がいちばんサイアクだ、って思ってた付き合いのパターン……

あの日の唯からの告白は、そのサイアクな事態を自分が……という、危険信号だったのかもしれない。
だけど、唯が私を想ってくれなければ……今頃自分は、どうなってただろう……
「……ただいま」
家に帰り、ソファに座る。
焦点が定まらない目で、テレビを見た。
「あら、おかえり沙彩。遅かったわね」
「……まぁ。うん。」
「新学期、どうだった？」
「……まぁ。うん」
それ以上、お母さんは何も聞いては来なかった。
私の状態が尋常でないことに気づいたんだろう。
「ご飯、できてるわよ」
その言葉でテレビの電源を切り、食卓へと向かった。
テーブルには、肉じゃが・焼き魚・おひたし・白米……と、和風な食材が湯気を立てている。
相変わらず美味しそうなんだけど……食欲がわかない。

「もう食べないの？」
「うん。食べる気しない……」
一通り、2、3口は食べ、箸を置いた。
「まぁ明日のお昼私が食べるからいいけど……なんかあった？」
疑惑を持った目で、私を見るお母さん。
「……好きな人に彼女できて、私にも彼氏できた」
さらっとそう言うと、お母さんは今までに見たことないほど大きく目を見開いた。
でも、少し腫れた私の目を見て、普通の目に戻る。
「……そう。いろいろあんのね、あんたにも」
お母さんは内心、ビックリしてるだろう。

だって、私に好きな人がいるってのも知らなかったし……しかもいきなり、彼氏できた、って言われるもんだから。
それ以上、何も喋りたくなくて……部屋に閉じこもった。

「……咲良ちゃん、嫉妬する……よね。」
ケータイのアドレスブックに載ってる、「あおいちゃん」って言葉。
お母さんに抜き打ちでケータイ見られたときに対応できるように、
「君」を「ちゃん」に変えて登録しておいた。
そのアドレスを選択し……削除をした。
……一瞬、何もかもを失ったような、喪失感が私を襲う。
頭が、ギンギンと痛んだ。
「……こんなにも、蒼井君のこと好きだったんだな……」
なんでもっと早く気づかなかったんだろう。
ベッドの上に寝転がり、目を閉じる。
……蒼井君と出会った、補習日からの記憶を掘り起こした。

偶然、隣の席が蒼井君で……問題をどう解くか聞いてきたっけ。
補習後も律儀にお礼言ってきたりして……

ギャル男にぶち切れた時、尊敬の眼差しで見られたっけ。
「誰にも言わないで！」って必死に懇願したっけなぁ。
でもほんとは……ほぼ男同然の私の姿を見られて、恥ずかしかっただけかもしんない。

それから、補習がある日は一緒に学校行って、補習受けて……
多分、その繰り返しで、想いが募っていったのかもしれない。

元カノの咲良ちゃんの存在を知って、もやもやして……
そのもやもやの正体は、蒼井君に対しての恋心だってこと、咲良ちゃんによって気づいた。

あれほど、必要ないって思ってた恋を……してしまった。

目を一層、ギュッと強く閉じる。

……浮かぶ、蒼井君の笑顔。

小さく笑う顔。

笑いを堪えてる顔。

苦笑する顔。

頼もしい笑顔……

どの笑顔も……素直に、大好きって思える。

……大好き、なんだよ……

「っ――――……」

言葉に成らない叫び。

目の上に置いた手の甲は、涙で湿ってる。

……忘れなきゃ。蒼井君に対しての恋心……

私にはもう、唯がいる。

こんな弱虫な私を想ってくれる、唯がいる。

その想いに答えたのは、紛れもない……私。

捨てたのは、蒼井君に対する恋心。

捨てたものは、忘れなきゃならない……

忘れなきゃ、忘れなきゃ、忘れなきゃ――――……

……気づかなかった。

忘れなきゃ、と想うほど……忘れれないこと。

より一層、想いがどんどんどんどん、強く、濃く、はっきりとなってくこと……

第17話　最後

Ｒｉｐ　Ｓｌ○ｍｅの「太陽とビ○ニ」……？

「……ん……？」

Ｅメール着信音に設定してるその音楽によって、起こされた。

しかも立て続けに鳴ってるし……

ディスプレイを見ると、１０時半……

「ヤバ、学校……」

支度しようとするけど……唯や蒼井君、咲良ちゃんのいる学校を思い浮かべると、手が止まる。

……おかしいな。支度を進めようとする手が、微動たりともできない。

「……ムリだ」

再度、ベッドに寝転んだ。

仕事中であるお母さんにメールを打つ。

『学校、行けない。

　気持ちが整理つくまで休んでいい？』

すると、意外にも早く返信がきた。

『いいけど、１週間前後で整理つけなさい。

あと、勉強と彼氏や恋は別。しっかり区別つけること。

あ、学校には風邪欠席だって言っておくからね』

……いつも彼氏いないかどうか、興味半分で聞いてくるお母さんとは違うお母さんの心が、文に表れてた。

「てか、返信しないと……」

私のケータイにメールを送り込んできたのは……１０人。

全員、同じクラスの子。

『さーや大丈夫？』

『風邪でもひいた？』

ほとんど、そんな内容。

なんか、ホッとした。
そんな中、唯と夏姫だけは違う文章だった。
『ごめん』
唯は……何を悟ったのか分からないけど、その3文字だった。
『まだ頭痛い？大丈夫？』
嘘を信じてくれてる、夏姫からの言葉。
……ごめんね、夏姫。痛いのは頭じゃなくて多分、心なんだ。

『唯が謝ることないよ』
3時限目の休み時間にあたる時間帯に、唯に返信する。
『しばらく、学校行かないかも。復帰したらノート見せて！（・人・）』
夏姫には、しばらく休むことを伝えた。
そしてクラスの子たちには、『大丈夫。心配しないで！』と8人同時に送った。
一通りのことが済んだので、パチンとケータイを閉じる。
改めて、考えた。
……しばらくって、いつまで……？
どうやったら、蒼井君を忘れられる……？
いつになったら、忘れられるのかな……
……しばらく考えて、答えが出た。
「唯を好きになる……」
それしか、方法はない。
……もし、その方法が成功すれば……蒼井君への想いは消えてしまうわけで。
……寂しさからか、静かに涙が頬を伝い、手に流れ落ちた。
次第にその涙は数を増す。

……この涙は、無駄なんだ。
想いから逃げたくて。でも逃げたくなくて……

そんな、曖昧な涙、何の意味も持たない。
……私がいくら泣こうと、蒼井君はもう、咲良ちゃんっていう彼女がいる。
咲良ちゃんっていう、好きな子がいる。
それは、変わりようのない真実……
……私は、傍にあったタオルで目を押さえた。
「……本当、泣き虫になったな」
自嘲的な笑いがこみあげてくる。と同時に、涙も零れてゆく。
……こんな泣き虫でも、決心した。
蒼井君を想っての涙は、これで最後にしよう、と……

第１８話　班長

「あ、おはよ～さーやっ！復帰したんだ！よかったぁ！」
１週間後……気持ちにケリがついた私は、いつも通り駅のホームへと向かった。
「おはよ夏姫。心配かけてごめんね」
「いや～、さーやのことだから心配いらないっしょ！」
夏姫は力強く私の背中を叩いた。

電車に乗り込み、いつもの席に座ってケータイを開く。
「これ、今超ハマッてるお笑い芸人！」
お笑い好きの夏姫は、またもや芸人の写メを見せてくる。
……これ、江○２：５０だよね…？今更かい……
「私は、は○にゃがいいと思うよ」
「あ～、は○にゃね！おもしろいよね～！あっ、そだ、学校でづくだ○づんぶ○ぐんゲームする？？」
「やめとく……」
そんな会話をしてると……ふと、視界に入ってきた。
「今日、数学の宿題やってきてないしぃ～」
浮ついた声で、長い巻き髪をくるくるさせてる……咲良ちゃん。
「俺やってきてるから見せたたげよっか」
「え～マジで！？ありがとぉ！大翔大好きぃ～！」
いつもの綺麗な笑顔を咲良ちゃんに向ける、蒼井君。
「……さーや？どした？」
「え？あ……江○なにげカッコいいなぁ、と思ってた」
「でしょでしょでしょ～！？」
適当な言い訳……
胸は、じくじくと痛む。
まぶたが熱くなる……

……忘れたはずじゃん。なんで悲しんでるんだよ、沙彩。
自分に強く言い聞かせ、上を向いた。
……やっぱまだ、キツい。

「おはよ、沙彩、夏姫」
駅を出ると、自転車に乗ってやって来た唯が私たちに声をかける。
「おはよ、唯」
私がそう言うと、唯は照れくさそうに笑った。
……意外と可愛いな、こいつ。
「おっはよぉ唯ちゃん！」
「なんでいきなりちゃん付け？」
夏姫の「唯ちゃん」発言に、思わず顔が緩む。
私と夏姫は自転車に乗り込み、大通りへ出た。
横一列に自転車3台……通りすがりのサラリーマンが驚いた顔で私たちを見た。
「……ていうか、話にくくね？自転車置いていこーぜ」
唯の提案で、近くにあった駐輪場に自転車をとめた。

「あ～、久しぶりの歩き！」
夏姫は伸びをしながら歩いてる。
「……そういえば沙彩、夏姫に言った？」
唯が耳打ちで聞いてきた。
「え？何を？」
「付き合ってること」
「あ……言ってない」
そう言うと、夏姫は「何何～？」って言って近寄ってきた。
「夏姫、あのさ……」
言おうとした瞬間、唯に肩をつかまれ、引き寄せられた。
「俺ら、付き合ってるから！夏姫、沙彩に手ぇ出すなよ？」
ちょ、直球すぎるって！！！

案の定、夏姫は「え？」って感じの顔。
「そういえば唯、さーやに告ったんだよね？夏休みの最初ら辺……さーや振ったんだよね？唯のこと……」
夏姫はもう、混乱状態。
「蒼井君からの想いから逃げて、唯からの想いを受け取りました。」なんて言えるはずもなく…
「いや……でもやっぱ、唯でもいいかな～って……」
「なんだ～？“でも”って！」
唯は小さく私の頭を叩く。
唯の腕の中で、笑みをこぼした。
「そっかぁ！唯、さーや、おめでとぉ！」
何がおめでとうなのか分からないけど、ありがとうって返した。
……3人の間には、平穏な空気が漂っていた。
いつもと変わらない…変わったのは、私と唯が付き合うことになったことくらいの。
ずっと続くといいな。
これは、本心だった。

そして徐々に私と唯が付き合ってる、って噂が流れ出た。
もちろん妬む人もいたけど……だって唯、世間一般からするとカッコいいしね。
でも、その妬む人とも最終的には和解、という結末に必ずなる。
なぜかは……唯が、その人たちに「沙彩は何も悪くない」って、はっきり言ってくれるから。
その言葉を聞く度、好きでいてくれてるんだな、って思う。

夏姫とたっくんは、相変わらず順風満帆（ジュンプウマンパン）。
些細なことでよくケンカしたりしてるけど、翌日には元のラブラブカップルになってる、って感じの。
桃花に、蒼井君に彼女が出来たことを話した。

『ふ～ん、そっかぁ』……それだけ。
噂だけど、桃花とユースケは復縁したらしい。
うん。それはいいことだ。

それはさて置き……1限目は学級活動。
修学旅行の自由行動のプラン決めだ。
「夏姫、私どこの班？」
「ふふっ私と唯とさーやと伶だよぉ！」
「あ～よかったぁ。奇跡的じゃん」
「実はね、くじ引きの時にちょっと細工しといた！」
さ、細工って……恐るべし、夏姫さん。
先生が「班作れ～」って言って、早速その4人で集う。
「んじゃ～早速だけど、どこ行きたい？」
「えっと、私竹下通り！」
夏姫が大声で主張。
「俺、渋谷がいい」
クールに呟く伶君。
伶君とは、唯の幼なじみで唯と腐れ縁で唯と誕生日一緒で……とまぁ、簡潔に言うと、唯の親友。
あんま喋んない人だけど、そこがいい！って理由で、女子にモテる。
「俺やっぱお台場がいいな。沙彩は？」
「え？私？……ぎ、銀座……？」
「え～俺ヤダ銀座。人多いし」
「渋谷も多そうじゃん」
「渋谷は若者の街だからいーの」
……そこから、私と伶君の討論が始まった。
「若者の街……って危ないよ？」
「昼間だからあっち系の店やってねぇし、危なくねぇよ」
「だって、カツアゲとか」
「どこでカツアゲすんだよ」

「ていうか伶君、メイド喫茶とかに入りたいだけでしょ」
「知らねーし、そんなキャバクラみたいなとこ」
「はいはい、討論そこまで！」
唯のデカい声で私と伶君は黙る。
「……とりあえず、伶は渋谷、沙彩は銀座な？」
落ち着いた物腰の唯。
どうやら班長は唯だろうな……

「じゃあ、班内で班長と副班長決めろ～」
先生の声で、第ニの討論が始まる。
「どうする？班長～！」
「班長どうやって決める？班長」
「班長は決まってんだろ。な？班長」
私と夏姫と伶君、一斉に唯を班長呼ばわりする「班長攻撃」。
「…分かったよ。俺がなる」
「よっ！九州男児！潔い～っ！」
「いや、九州じゃないしココ」
夏姫がやんやと声をあげる傍で、副班長は誰にする？という議題が浮かび上がった。
「やっぱ副班長は彼女のさーやでしょ～！」
「あ、唯、杉浦と付き合ってるんだっけ？」
伶君は思い出したように唯に聞く。
「ああ。修旅中に沙彩に手出すなよ？まぁ伶なら出さねーとは思うけど」
「……出したら杉浦の少林寺拳法の大技で腕粉々にされそう」
……少林寺拳法なんて知らないし。
「伶君は彼女いないの？」
「いない。てゆーかいらねぇ。めんどくさいし」
うん。伶君らしい答えだね。
その間、夏姫は先生を呼び出し、私と唯の名を告げた。

高校生活で最も思い出になるであろう修学旅行……
心なしか、今からワクワクしてた。

第19話　ブロック

……6時限目。たいへん重要な集会がある。
そう、体育祭のブロック決め。
この海宮高校では、10月半ばに体育祭がある。
1ヵ月前の今日、ブロック決めが行われる……
ちなみに文化祭は1月。とはいえ、体育祭と修学旅行がブッキングしている2年生の2学期は特に忙しい……

「まず、1年生からくじを引いてもらいましょう！」
1年A組からF組の代表が、箱の中に手を入れる。
ブロックは全部で6ブロックある。
風・火・水・地・空・森。この6ブロック…
なぜ“海宮”高校なのに“海”がないんだ？と、1年の頃から思ってる。
まぁ、海は水の中に入るんだろうけど…水と海水は塩分濃度が極端に違うぞ？
そんなくだらないことを考えてる間に、1年生はくじを引き終えたみたいだった。
……そういえば蒼井君、何組なのかな……？
って、何考えてんの私！
……無意識に蒼井君の組を知りたがる私は……まだ、完全に“恋心”を捨てきれてない。
「は～……」
大きく溜息を吐いた。
「どしたのさーや？疲れた？まだ頭痛い？」
隣の夏姫が、心配そうに私を覗き込んだ。
「いや、なんでもないよ」
「そっかぁ！ところでさ、何ブロックになると思う？私、空がいい

！」

「……私は風……かな」

ポツリと呟くと、夏姫は「なんで？」と聞いてくる。

「風に吹かれてる時って、気持ちいいじゃん。黒い心を吹き飛ばしてくれる感じだし」

「……さすがさーや。爽やかだねぇ……」

「それギャグ？」

……なんて話してる間に、最早2年生がくじを引き終えていた。

えっと、私の組は……水。

夏姫や私の希望を裏切っての“水”だった。

「水かぁ～！残念っ！でも色は空とあんま変わんないよね！」

……そう。それぞれのブロックには、イメージカラーというものがある。

風は白色。火は赤色。水は青色。地は黄色（茶色だと地味なので）

空は透き通るような水色で、森は緑だ。

ちなみに水ブロックの1年は……D組。

「ねぇねぇっ！1－Dってかなりのイケメン揃いのクラスらしーよお？」

隣の河野（コウノ）さんが興奮状態で私たちに話を振る。

「転入生らしい、超肌キレーで白い子と、ゴリマッチョ系と細マッチョ系とモデル系の子！その他の子も端整な顔立ちしてるって噂だし！でも、中でもその4人がダントツ！1－Dイケメン四天王って専（もっぱ）らの噂！！！あ～！会ってみたいぃ！」

河野さんはもう、誰にも止められない……

……そういえばこの人、専らのジャニーズ好きだって聞いたっけ。

「……って、待てよ？細マッチョ系って……カイジ君？」

夏姫が呟く。

カイジ……？聞いたことあるような……

あ、蒼井君の友だちだ。

「じゃ、じゃあ、転入生らしい超肌キレーで色白い子って……蒼井

君？」
「モデル系って、ユウヤ君……だったような。」
「ゴリマッチョ系って、シゲオ君！」
私たちは、顔を見合わせた。
……マジですか……

3年生がくじを引き終わり、結団式が始まった。
水ブロックの3年生は、A組。
A組のリーダーらしき人が、1・2年生に向かって手招きをしてる。
その人たちのところへと駆け寄った。
「え～っと！私が団長の小原優羽（コハラユウ）！女だけど、男より声デカいから安心してね～！」
……そう言う小原先輩の高い声は、体育館中を響き渡らしている。
他のブロックの男子団長の声なんか、蚊の羽音ぐらいに聞こえた。

結団式が終わり、ブロック交流会が始まる。
「小原先ぱ～い！先輩と同じブロックになれて超嬉しいで～す！」
夏姫が小原先輩めがけて飛びつく。
…あ、小原先輩ってバレー部のキャプテンだったっけ。
同じバレー部の夏姫にとっちゃあ、もう顔見知りの先輩なんだろうなぁ。
「も～夏姫ぃ！超かわい～い！」
夏姫の頭を撫でる小原先輩。たっくんと負けないぐらいのラブラブっぷりだ。
「拓海とはどう？うまくいってる？アイツ、ああ見えて感情表現ドヘタだし……」
「そんなぁ、そんなことないですよぉ！超順調です！」
……そして、夏姫の彼氏・たっくんこと拓海のお姉さんでもある小原先輩。
「ところで、その子誰？夏姫の友だち～？」

小原先輩に目を向けられ、ビクッてなる。
……やっぱ、先輩っていう人間は苦手です。
「えと……杉浦沙彩……です……」
「怖がらなくていいんだよ～？私、団長の小原優羽！って聞いたか～！とりあえずヨロシクね、沙彩ちゃん！」
そう言い、小原先輩はニカッと笑った。
「杉浦先ぱ～い！」
「うおっ」
いきなり何かがぶつかってきて、大げさにのけぞる。
「久しぶりです！」
「あ……優希ちゃん、李流ちゃん」
この2人もD組だったか……
たしか、咲良ちゃんもこの2人と同じクラスだったような気がする。
「咲良ちゃんは？」
「あ～、大翔君とラブってます！」
「ほら、あそこ！」
2人が指差す先を見る。
……できれば、見たくなかった。
けど、優希ちゃんや李流ちゃんには……気づいてほしくなかった。
「…わ～、ほんと」

視線の先には、笑顔で話す咲良ちゃんの姿があった。
その姿の正面には、蒼井君。同じように、笑顔を見せていた。

蒼井君の手は、咲良ちゃんの頭へとのびる。
……これ以上、見たくない。
2人から目を離し、夏姫や小原先輩、優希ちゃんや李流ちゃんと話した。
「なんか最近咲良、大翔君にべったり～……」
「復縁したのはいいけどね～」

2人は寂し顔。
咲良ちゃんは……友だちより、彼氏……なのかな。

すぐ後ろにいた人が、咲良ちゃんと話してる蒼井君に大声を張り上げる。
「大翔――っ！イチャついてないでこっちこ～いっ！！！」
この声……水〇ヒロじゃん。
振り返ると……色黒で、筋肉ついてて、めっちゃ色っぽい男の子が蒼井君を見てた。
その傍には、美少年。その傍にはファッションモデルでもやってそうな男の子。
……なるほど。この3人がシゲオ・カイジ・ユウヤ……か。
「お～、今行く！」
蒼井君も負けじと大声を上げる。
って、今行くって……必然的に擦れ違うし！
心臓が、ドキドキする。
……まるで、蒼井君と初めて喋った補習の時のように。
「沙彩ちゃんってどこ中出身～？」
小原先輩が聞いてきて、慌てて小原先輩の方を向く。
「えっと、A市の……」
「あ、そーなんだぁ！私、海宮中学校！」
小原先輩は、海宮中学校での出来事を話し出す。
その間にも……蒼井君は、どんどん近づいてくる。
そして、擦れ違った。

……何も、声はかけられなかった。かけてくれなかった。
まるで、通行人同士が擦れ違ったような……
蒼井君が残した風を腕で感じながら、固まった。

「……沙彩ちゃん？どした？」

「え？……あ、なんでもないです。」
無理して笑う。
……本当は、笑えないのに。

忘れたはずなのに、声をかけてくれなかったことだけで、こんなにも悲しくなる。
忘れようとしてるのに、心臓は高鳴る。
……矛盾した、感覚。
矛盾の先には……何があるんだろう。

「杉浦せ～んぱいっ」
可愛い声に呼ばれ、振り返ると、手を後ろにして私を見上げてる…
…咲良ちゃんがいた。
「ちょっとお時間いいですか？」
そう言い、にっこり微笑む顔は……海宮花火を見に行ったときとは、打って変わってて。
相変わらず、頭に乗ってるリボン。
それを見ながら、
「…いいよ」
そう答えた。

第２０話　記憶

「私、大翔とまた付き合えるようになったんです！！」
バルコニーに出て早速、咲良ちゃんが飛び跳ねて、笑顔で言う。
「唯からきーたよ。……よかったね。」
無理矢理笑顔を作って、祝福の言葉をかけた。
咲良ちゃんは今一度、笑顔見せる。
「私、中３の頃大翔と付き合ってて……結婚まで約束した仲なんです！」
「へ～……」
「もう、毎日デートして好きって言われて……」
「ふ～ん」
聞きたくない……２人の過去。
興味なさげに、その場に座って胡坐をかく私は……誰がどー見ても、嫌な先輩だろう。
しみじみそう考えてると、咲良ちゃんも座った。
「……でも、大翔……事故で、記憶なくしちゃったんです。」
「……え？」
その話に、初めて反応する。
事故？記憶喪失？
「日常的なことや知的能力は以前と変わらないままなんですけど……いや、むしろかなり発達したっていうか。人の名前や顔、今まで自分が何をやって、どんな会話をしたのかを、綺麗さっぱり忘れちゃったんです」
「それは、中学校卒業後？」
「……卒業後、私とデートしてる途中、車に轢(ひ)かれて……」
でも、奇跡的に蒼井君の命は助かった……という。
「お見舞いに行ったら、「あんた誰？」って言われました。めちゃくちゃショックで……それから毎日電話やメールして、大翔にいち

から好かれようとしました。でも……なかなか好きになってくれなくって、大翔に貰った指輪を大翔に見せたら……復縁しました！」

指輪がきっかけで、咲良ちゃんとの記憶が蘇ってきた……ってこと？

「……へぇ」

そっけなく返すと、頬杖をついて考えた。

……2学期初日の電車の中。親しげな表情で蒼井君を囲む男子に合わせて、蒼井君も笑顔を作ってたこと。

同中出身だったキョンのことを忘れていたこと。

でもキョンも蒼井君のこと忘れてた……

……多分、1学期中蒼井君の姿を見なかったこともあるだろうし、顔も少々違ってたせいなのかな。

「……蒼井君ってさ、中学校の時どんな顔だったの？」

「めっちゃ美少年！って感じでした！目がおっきくて、ちょっと日焼けしてて…でも今は美男子って感じ！」

笑顔で咲良ちゃんは話す。

……彼氏の容姿聞かれると、嬉しくなるもんなのかな。

「とにかく、よかったね。蒼井君と、仲良くね？」

「はいっ！！」

澄み切った顔で答える咲良ちゃんには……もう、海宮花火の時に言った私当ての言葉は記憶に残ってないだろう。

咲良ちゃんにバレないように、眉をしかめた。

「おかえりぃさーや！」

「ただいま、夏姫」

再び4人の中に入る。

それに、咲良ちゃんが加わった。

正直、あまりいい気はしないけど…しょうがないか。優希ちゃんと李流ちゃんは咲良ちゃんの親友だし……

でも、今後の交流タイムも咲良ちゃんがいるのかぁ……と思うと、なんとなく憂鬱だった。

「よ〜し、じゃあそろそろ切り上げるかぁ！水ブロックのみんな、かいさぁ〜んっ！」
小原先輩の大声で、水ブロックの生徒はぞろぞろと教室へ帰ってゆく。
「あっ！じゃあ、また！」
「バイバ〜イ」
リボン3人組が1年生の輪の中に入り、残されたのは、私と夏姫。
「ヤッバァイ！1－Dイケメン四天王、マジヤバかったよぉ〜っ！」
隣に来た河野さんがキャーキャー騒いでる。
……まったく、この人は……
「やっぱ蒼井様がダントツにカッコよかったぁ！」
「シゲオは何番目〜？」
「ん〜、2番目かなっ！」
「えっ、私、カイジ君カッコいいなぁ〜って思ったけど〜……」
「でもユウヤ君もカッコいい！」
夏姫と河野さんの会話を聞きながら、談笑する。
蒼井君がダントツ……かぁ。
「そういえば、私とたっくんと、さーやと大翔君とで海宮花火行ったんだよ〜！ね〜？さーや！」
「あ、うん。」
「うっそん！杉浦さんと蒼井君って……カップル！？」
「いや、違うよ？」
「あ、唯君だっだっけ？そういえば」
河野さん、意外と恋愛ものには疎い……
「そうそう。蒼井君は……後輩、だよ。」
“後輩”
これを言うのに、数秒、躊躇(ためら)った。
……そして、気づいてしまった。
蒼井君たち4人が、私たちを追い越したこと。

一瞬だけど、何か視線を感じたんだ。
「へ～！部活一緒とか！？」
「いや、そんなんじゃなくって……」
笑顔が、歪（イビツ）になる。
聞こえてた……かな。
後輩。私の中で、膨大な数の１年生の中の１人……それは紛れもなく虚実だった。
「やっぱりか～！杉浦さんには唯君っていう超カッコいい男子がパートナーなんだからさっ！蒼井君に心変わりしちゃダメだよぉ～？」
こ、河野さん、声デカいって……
「ア、アハハ……」
苦笑いして、話題を変えた。

今にも、泣き出したい気分だった……

第２１話　思い込み

体育祭の準備が進む中、２年生だけは修学旅行の準備に没頭していた。
「部屋割り決めるけど、俺と伶、沙彩と夏姫の組み合わせが強制的らしいよ」
流れるように、唯は言う。
私たち以外の班は全て、女子同士や男子同士。
他の班は部屋割りをわいわい言いながら決めてるが……うちの班だけは、話し合わずに済む。
「そりゃあね～。常識っしょ！」
夏姫はうんうんと頷く。
「……いや、非常識にするのもアリじゃね？」
「例えば？」
伶君の言葉に、私は聞き返す。
「同室名義で唯が杉浦の部屋で一緒に寝て、俺と東郷はそれぞれ別のダチのとこで寝泊りする……とか？」
「……はい？」
名義……？
唯の方をチラッと見ると…あまり動揺してなかった。
「伶、お前見かけによらず……阿呆（アホ）だな。」
「でもアリじゃん。２人付き合ってるんだし、野郎２人じゃつまんねーだろ？」
「１時間ごとに先生が寝室見回りするんだよ。それに、沙彩が嫌がるだろ」
唯はそう言って、プリントをめくる。
……私が、嫌がる。
その言葉には……まだ、唯は私が蒼井君のこと好きだって思ってる、ということが隠れていた。

……ていうか唯、随分大人っぽくなったような……？
なんか、この頃唯は無駄に騒がなくなった。
でもその分、以前よりモテるようになったらしい。
「席割りは、俺と沙彩隣でいい？」
唯が、私の顔を覗き込む。
……案外、可愛い。瞳には、まだ子どもっぽさが残ってる。
「うん、もちろん」
「んじゃあ補助席使って、俺が唯の隣」
「伶君バッカじゃない？デリカシーなさすぎぃ！私の隣だよぉ～！」
え、と伶君は顔を顰めた。
「……彼女にバレたら嫉妬されるし……」
「別にバレなきゃいーじゃん！私もたっくんに嫉妬されるかもだけど……さーやと唯のためだし！思う存分たっくんから隠れるし！」
夏姫はそう言い、私にウインクする。
夏姫なりの、優しさだって思った。
……ていうか夏姫、気づいてないね。
伶君、彼女いないんだよ？
「なんかごめん。ありがと」
小さい声で言うと、両手を目の前で合わせた。
「……なんか杉浦ってさ、超暗いタイプじゃん？声ちっせえし、顔キレーだけど男に興味なさそーだし。唯は杉浦のどこに惹かれた？」
「超暗いって……」
伶君の言葉が次々と私を刺す。
暗いって……暗いって……
人からはよく、「沙彩ちゃんってクールだよね」って言われる……
クール＝暗いなのか……！？
「どこって言われても……これといって、ないかな」
さらっと言う唯からの言葉にも、グサッとくる。
「……でも、これくらい人好きになったことって初めてかも」
「おっ！言うね～唯っ！」

私は発言する場所がなく、ただ話を聞いてた。

ぐんと大人っぽくなった唯。だけど顔は赤いような気がする。
可愛いなって思って、少し笑った。
……いつか、唯だけを見れる日が来て欲しい。
唯を好きになる日が来て欲しい、と願ったんだ。

「んで～、杉浦は唯のどんなとこ好きになった？」
かすかにニヤけてたら、伶君がそんなことを聞いてくる。
我に返り、返答に困った。
ど、どんなとこって……
「え、えっと……」
「夏姫、竹下通りって何がある？」
言葉を濁してると、唯が夏姫に話を振る。
もしかして、助けてくれた……？
「クレープ！もう最高らしーよぉ！絶対１０個は食べるし！」
「うえっ。俺、クレープ無理」
伶君も夏姫の話に入っている。
ホッとした反面……凄く、悲しくなった。
やっぱり唯はまだ、私が蒼井君のこと好きだって思ってるのかな。
だとしたら……物凄く、申し訳ない。

それから、竹下通りの話題で班内は持ちきり。
担任が教卓で何かしゃべってる間も、会話に花を咲かせていた。
……もちろん、私は聞いて頷いて相槌うつだけだけど……
「お～い高杉！聞いたか～！！！」
担任が声高らかに叫ぶ。
「あ、なんですか？」
唯は動揺せず、ニコッと微笑んだ。
担任は歪な笑顔をつくる……

「……班長は放課後会議室に集合……分かったか？」
「あ、分かりました～」
夏姫と伶君は声を押し殺して笑ってた。
……そうだ！
「唯、今日一緒に帰んない？」
「え？地区違くない？」
「まぁ、たまには……ってことで。」
言ってるとだんだん恥ずかしくなり……照れ隠しとして、窓の外を見る。
だって友達であれ誰であれ、自分から「一緒に帰ろう」って誘うのは初だから。
１年生が元気よく、校庭を走り回っていた。
「……んじゃ、玄関で待ってて。できるだけ早く行く」
「え～何何～？さーや、何約束したのぉ～？」
夏姫が興味津々で目を輝かせている。
「……内緒」
「え～ヒッド～い！」
「東郷って精神年齢小学生ぐらいだね」
伶君の呟きに、夏姫の膨れてた頬は更に膨らむ。
「ガキじゃないもん！もう立派な大人の女だもんっ！」
「へ～～～」
「あ〝っ！バカにしたな！五十嵐伶ッ！」
五十嵐というのは、伶君の名字。
「ごじゅうあらし」じゃなく、「いがらし」。（そりゃ分かるだろ）

夏姫と伶君の口論……いや、決闘が始まり、教室は静まり返るどころか笑いの渦に。
担任はもう、口出す余地がなかった。
……そんなこんなで、放課後。玄関にあるベンチに座り、１人、ｉＰｏｄで音楽を聴いていた。

しんみりと、クラシック。
ショパンの「ノクターン」「雨だれ前奏曲」「別れの曲」……
エチュードからワルツ、そして作曲家が交代してリストになり、超絶技巧で演奏される「ラ・カンパネラ」やメロディの美しい「愛の夢」……
聞いてるうちに、うとうとし始め……やがて、眠りについてしまった。

第２２話　惹かれ

……夢を見た。
薄暗い森の中……目の前に、２本の道がある……
どっちに行くか、迷ってた。
……迷ってた私の手を、誰かが握り、左の道へと私を引っ張る。
「……誰？」
その誰かが振り返ったけど……
途端に目を攻撃した、眩い光に反射して、顔が見れなかった。

「……――や？沙彩？」
「ん～……？」
名前を呼ばれ、目を開くと……唯の姿。
「ごめん。結構長引いた……終電間に合う？」
時刻は、６時。
「……余裕で間に合うよ？」
「マジで？俺、電車乗ったことねぇから分かんなかった」
苦笑いを唯は浮かべ、「行こう」と言った。
それに続き、私もベンチから立ち上がる。
空は……オレンジ色。もうすぐ、秋が来る。

「ていうか唯、ほんとに電車乗ったことないの？」
「うん。練習試合とか大会とか、移動全部車だし。沙彩ん家や夏姫ん家行くときも自転車で行ってるしね」
「あ、そっか。唯、いっつも自転車だったよね」
「まぁ、軽い筋トレ感覚？てか、電車だったら痴漢に遭うかもしんないし」
「痴漢は普通、男は受けないよ～」
笑い飛ばしている間……蘇ってきたのは、夏祭りの日。

駅のホームでの、蒼井君との別れ際……

『帰り、気をつけて』
『蒼井君こそ。私は誰か来ても吹っ飛ばすし！』
『さすが先輩！じゃあ、また』
『うん、バイバイ』

結局、蒼井君は逆ナンに遭ったんだっけ……
思い出し、またかすかに笑う。
……ハッてなった。
私、また……
また、蒼井君のこと思い出してる。

その後は、唯と一緒にいるのに蒼井君のことを思い出してしまった罪悪感からか……会話が成り立たなかった。
「あ、着いた」
唯の一言で顔を上げると、駅のホームがある。
「わ。なんか早い」
沈黙交じりの会話だったけど……不思議と、居辛くなかった。
だから、ほんとに駅のホームに着く時間が早い。
1年ちょっとの友達期間って案外すごいなぁ……
「あ～、ここで沙彩とお別れか～……」
残念そうに笑う唯と一緒に、私も笑った。
……なんか、不思議な感じ。
友だちだった頃は、普通にホームに着いたら「はい、バイバイ」だったのに……
今はちょっと、名残惜しい。
唯はもっと前から……名残惜しさを隠してた？
……自意識過剰だと思うけど……
「じゃ、またね」

「うん、また明日」
唯は私の頭を軽く叩くと、近くに停めてあった自転車に乗って颯爽と消えていった。
その姿を、無意識にずっと見つめてた。

ホームで別れなきゃならないときの名残惜しさ。
ほんの少し、唯を可愛いって思えたこと。
少しずつだけど、多分唯に惹かれてる。

――だけど、私の中には……こんな些細な、自分でも感じ取りにくい感情より……もっとおっきな何かがあるってことに、気づかなかったんだ、この時は。
ただただ、「唯だけを見れる日が近づいてるんじゃないのか」って、笑みを浮かべてたんだ。

第２３話　修学旅行１～始まり～

「沙彩っ！早く起きなさいっ！！！」
珍しいお母さんの怒鳴り声で、眠りから目が覚める。
「……まだ６時じゃん……」
「ハァ！？学校、６時半集合じゃない！どんだけボケてんの！？」
……あ、そうだった。
ベッドの傍にある手荷物の存在で、今日何があるのかにやっと気づく。
……そう。修学旅行。
「一刻も早く準備しなさい！車出すから！！！」
お母さんはそう叫び、荷物を持って部屋のドアを閉める。
あんなに取り乱したお母さん、初めてみたなぁ……って、何ノンキなことを考えてる？
「……ヤバい……」
サーッと血の気がなくなり……多分、ここ４年間ぐらいの制服生活、至上短時間で制服を身に着けた。
洗面所で顔を洗い、化粧水もつけずに髪をブローする。
アイロンなんて、握ってるヒマもない！
「沙彩！１０秒で車乗んなさい！１０！９！８！７！」
「わ、分かった！分かったって！」
ローファーのかかとを踏んで、家を出た。

「なんであんたは、いつもいつも大事な日に限って寝坊すんの！？」
「……私でも知らないって……」
「ほんっとそーゆーとこ、お父さんにそっくりね！」
……ほんと、アホな娘ですみませんね。
「てかお母さん、もう１２０キロじゃん、車の速さ」
「いーのよ！車ほとんど走ってないし！」

って、あなたホントに刑事!?

……などと考えてるうちに、学校へ着いた。

「東京でも寝坊しないようにね」

お母さんは落ち着きを取り戻し、いつものようなクールな素振りで話す。

「分かってるって。行って来ます」

車から出て、校門へと入った。

時刻は、6時20分。

教室へ行く途中……体育館の前を通り過ぎる。

反対側の窓には、ズラリと女の子の列。

ダムダム、と、バスケットボールが跳ねる音がしていた。

「こんな時間から、朝練……?」

ほんの好奇心が沸いた私は、そろっと体育館を覗いてみる。

……あの子……

「蒼井……君?」

ちっぽけでよく見えないけど、あれは確かに蒼井君。

黒髪で、無造作で……あれ、背伸びたのかな。ちっぽけだけど、大きく見える。

バスケ部……入ったんだ。

てか、こんな早くから朝練……?

あ、ボールをゴールに向かって投げてる。

そのボールは柔らかな弧を描いて、ゴールに吸い込まれていった。

……綺麗なフリースローだな……

「って、遅れるしっ」

見とれてるヒマはない。

時刻は、6時25分だった。

「さーや、おっそぉい!」

教室に入るなり、夏姫が私に飛び蹴りを食らわす。
「痛っ。寝坊したんだから仕方ないっしょ……」
軽く笑いながら、机にひとまず荷物を置いた。
「これだからさーやは……大事な日に限って寝坊するよね！」
「ほんと、ごめんってばー……ていうか、お母さんと同じこと言ってるし」
「んま、それは置いといて……今日体育館で大翔君見た？？」
「あ、うん。こんな時間から……って物珍しくってさ」
ってことは、夏姫も見たのか？
「朝から凄かったよね！まだ6時半っしょ？」
「え？何が？」
「『蒼井大翔親衛隊』だよ！女の子の列あったっしょ？」
あ……確かに。
あの女の子たちが『蒼井大翔親衛隊』のメンバー……って……
「蒼井君、ファンクラブまで作っちゃったの！？」
「いや、大翔君が作ったんじゃなくって、1年の原美来（ハラミライ）って女子が作ったらしーよ！」
「原美来……って、まじない部の？」
「そうそう！」
まじない部。日々まじないを研究する部活。
そんな聞いただけでも怪しい部活に所属する唯一の1年生、原美来は有名だ。
見たことはないけど、どこかどんよりしてた雰囲気がある子なのかな……って思ってたけど、親衛隊作るほど積極的な女の子だったとは。
それはそれで、ビックリだった。

先生が教室に入ってきて、男子から出席を取り始める。
「粟飯原（アイハラ）～、榎波（エナミ）～、小倉（オグラ）～、海崎（カイザキ）～、古川（コガワ）～、高杉（タカスギ）～……って、高杉どこだ？」

唯……いないじゃん。
唯の席を見てみたけど、空席。
「伶君、唯どうしたの？」
何気に後ろの席の伶君に聞く。
「あー、寝坊じゃね？」
……ちょっとは焦ろうよ！
「んじゃあ、メールの着信音で起こそっかな……」
と、ケータイを取り出した直後、
「おっはよーございまーす」
と、頭を掻きながら唯が入ってきた。
「高杉ぃ～。お前遅刻な！」
「寝坊したんスよ、先生。すんません」
ハハッと笑う唯の顔は……どこか、作ってるようだった。
「反省してる様子は窺えないが……続けるぞ～。高千穂（タカチホ）～、戸田（トダ）～……」
ちょっと唯の方を見てから、また先生の方を向いた。

「じゃあ、今からバスに乗り込むぞ！暴れんよーにな！」
HRが終わった先生の合図で、一斉に大荷物を持った生徒が教室を出て行く。
「唯、お前堂々としすぎ！マジカッコいいんだけど」
伶君、カッコいいの基準がおかしいよ……
バスに乗り込んで、唯の横に座る。
「あ、沙彩窓際な。酔いやすいっしょ？」
と、先に座った唯が席を交代してくれた。
「ごめん、ありがと……」
唯のさり気ない優しさが、心を温かくしてくれた。
そして何故か……――切ない。

「さーやっ、さーやっ！」

後ろの席の夏姫が、私の頭を突付く。
「ん？何？」
「伶君寝ちゃったからヒマい～！話そっ？」
唯の方をチラッと見ると……頬杖ついて、いつの間にか寝ちゃってる。
伶君に至っては、豪快な寝方……
「……そ、そだね」
座席の上に膝立ちをして、夏姫の方を向いた。

「さーやさ、初体験まだなの？」
うきうきしながら夏姫が振りかけた質問は……これ。
「…何の？」
「あーもー！こりゃナイな！ナイナイナイ！」
微妙にキレた夏姫サン。
何なんだ一体……
「唯と付き合い初めていくら経った？」
「い、いくらって……まだ1ヵ月も経ってないよ？」
「1ヵ月かぁ……そりゃまだ難いかもなー……私らだって5ヵ月目だったし……」
ブツブツ呟く夏姫……なんか怖い。
「キスしたのはいつ？？」
「い、いつって……ないよ？」
「やっぱ1ヵ月未満ならキツいかぁ。キスさえも……んじゃあ、その話題は置いておこう！今日どこ行くっけ？」
「いや、東京でしょ……」
その後は、東京での楽しみなことを語り合った。

――――……

新宿・原宿・渋谷・世田谷・銀座・竹下・赤坂……

いろんな街がある東京。
語り合いながら……そして眠りを挟みながら今、そこに着きました。
……はい……
「人、多っっっ！！！」
窓越しに見える人の多さに思わず大声を出した。
四方八方、全て人人人……
そしてこのバスはあまりもの車の多さに渋滞中。
白昼の東京。学生はさすがに見当たらないものの、やっぱり人は多い……
「ホテルに着いたから、各自部屋に荷物置いたら、１日目のプラン通りに動いていいぞ！」
先生の合図でホテルに入る。
「……うっわぁ……ビジネスホテルの格が違う……」
シャンデリアが飾ってあるビジネスホテルの一室。
その隅っこに荷物を置くと、サブバッグを持って部屋を出た。
同時に、唯と伶君も出てきて……いざ、東京の街中へ！！！

「次マック行こ～！」
「行く行く行く！」
「次どこ行くよ～？」
「ＣＯ○ＬＵＬＵのショップがいいなぁ」
友だち、恋人、夫婦、兄弟姉妹、親子……様々な人々が、私たちを次々に通り越していく。
田舎者に見えるのか……はたまた制服が白昼に合っていないのか、ジロジロ見ながら通り越していく。
なんか……東京の街中に放り出された修学旅行生の気分。（まさにそうだろ。）
「じゃ、竹下通り行くか」
唯の合図で、不安な足を動かした。

第２４話　修学旅行２～衝撃～

「うっわぁ……」
竹下通り……たくさんの人やお店が並んでいて、思わず声が出る。
夏姫はガイドブックみながらはしゃいでるけど……
そのはしゃぎ様が平常じゃない。
「キャーッ！このクレープ屋さんおいしそうっ！あっ！あそこのブティック超可愛くないッ！？あっ、あそこで撮影してる人、伶君にそっくりっ！」
「おい東郷、バカにしてんのかよ」
伶君にそっくり！と言って夏姫が指差す方向には……バナ○マン日村みたいな人が変なポーズで撮影してる。
……「ブサ男ウォッチ・ｉｎ竹下通り」とかっていう、何かの雑誌の特集とか？
いや、イケメンならまだしもブサ男をウォッチしても何の利益にもなんない……
「てか夏姫、めっちゃテンション高くない？どしたの？」
「だって、竹下通り昔っから行きたかったんだもんっ！」
……いや、それだけじゃあないよね、多分。
夏姫の目が、かなり動いている。
……さては。
「夏姫、たっくんならあっち行ってたよ」
「えっ！マジで！？あっちってどこどこぉっ！！！？」
「……やっぱり。たっくんと一緒にまわりたいんだね……」
少々いじけてると、夏姫は笑顔で頷いてた。
「なぁんて！さーやたちとまわりたいに決まってんじゃん！」
その言葉に一瞬笑顔になった私。
……でもさ。夏の海宮花火見に行ったときも……夏姫、たっくんと２人で消えていったじゃないか。

「……別にいーよぉ？たっくんとまわっても。唯と伶君いるしぃ……」
「え、マジでっ！？んじゃっ、たっくんのとこ行くからケータイかして！」
えぇぇぇ！！！心変わり早っ！
「ケータイ持ってないの？」
「ホテルにおきっぱ！」
ケ、ケータイおきっぱって……凄いなぁ。
「たっくんのケー番は？」
「えっとね、０９０－……」

たっくんと話をつけた夏姫は、颯爽とたっくんの元へと走っていった。
「……あれぞまさしく、「亜麻色の髪の乙女」だね」
「歌詞がね」
「風のように～丘をくだり～優しい～彼のもとへ～……ってとこがね」
「そだね」
夏姫の残した風とともに、伶君とよく分かんない会話をした。
「な～２人とも。俺、この第２４話始まってから一言も喋ってないんだけど……」
「人ごみに唖然としてるお前が悪い」
「てかお前、性格クールなくせに喋りすぎ」
「唯もじゃねーか」
２人のそんなやりとりに、思わず吹き出す。
「なんか、漫才できるんじゃない？唯と伶君」
「漫才？じゃあユニット名はユーレーかな」
「てか俺ら、どちらかとゆーとアイドルじゃね？」
「伶君、自分で言うのはどうかと思うよ～？」
そんな会話をしながら、買い物……いや、半ば食べ歩きをしながら

竹下通りを楽しんだ。

ふと気がつくと、安室奈〇恵の『Ｄｏ　Ｍ〇　Ｍｏｒｅ』がバッグの中から聞こえた。

「夏姫からだ」

夏姫からの電話。通話ボタンを押した。

『もっし～？さーやちゃぁん！６時にホテル戻ったんでい～い？？』

さっきより更にハイテンションな夏姫の声。

思わずケータイを耳から離す。

「うん、それでいーから！切るよ！？」

『はぁ～い！』

辛うじて夏姫が返事したのを聞いて、電話を切った。

……大きい音は、嫌いだ。うん。

お昼ごはんを適当に済ませ、また竹下通りをぶらぶら歩く。

「俺、新しいリストバンドほしいから、ここ寄っていい？」

と、伶君の提案でリストバンドショップへと入った。

内装は……うん。男だね。

黒と青と白。それを基調として、赤とかピンクとかオレンジとか黄色とかはほとんどない。

「らっしゃいませ～」

金髪でガングロの不良っぽい男の人が笑顔で言った。

「おっ、このリストバンド超カッコよくね？」

青と白のストライプのリストバンドを伶君はカゴに入れる。

「コレ、唯にめっちゃ似合いそう！」

と、伶君は唯にスポーツタオルを首にかける。

「……ハタから見れば農家のオッサンじゃねーか……」

「いやいや、どーみても「運動後の汗かいた好青年」だよ、唯」

「だったらいーかもな」

唯は苦笑いをして、タオルを元の場所に戻した。

「あ、コレとか杉浦系っしょ！」
その声と同時に、目の前が真っ暗になった。
「あれ？唯？伶君？どこ？」
「伶、沙彩は顔と頭小っさいから全部覆ってんぞ」
唯の声とともに、視界が開けた。
「あ、やっぱ似合う！杉浦、おまえやっぱ黒！ダーク系！」
……あのどこまでもクール（？）な伶君が満面の笑みを浮かべてる。
……恐るべし。小物グッズ……
「ダーク系って……まぁ茶髪だしぃ……」
ぶつぶつ言いながらも、鏡を見る。
少し裾（？）を折った、黒いニット帽……
……この帽子、気に入ったかも！（ぇ。）
って、何気に入ってんだ私……
頭の天辺（てっぺん）についてる白いポンポンを真上にひいて、帽子を外した。
少しぐちゃぐちゃになった髪を手櫛で整えて、適当な場所においておく。
「お、コレも超カッケェし！うおっ、コレも！」
次々と、カゴにリストバンドを入れる伶君。
「伶君って、お金持ちなの？」
「あぁ。五十嵐財閥のお坊ちゃまだしな。小遣いカードで持ってきたらしーよ。しかもブラック」
ブ、ブラックカード……
ブラックカードで小物買っていいのか！？
てかブラックカードって……ジェットとか簡単に買えるやつだよね？
「さっすが……てかなんで、あんなにリストバンドに執着するんだろ？」
「あぁ、アイツ……っと。秘密」
「え？なんで？」
「沙彩にはちょっと言えねーかもな……あ、これ沙彩系じゃね？」
話題を逸らそうと、唯は私の後ろにまわって黒と白のリボンを私の

髪の結び目につける。
「ね～唯、伶君が何なの？どーしたの？」
「いくら沙彩でも言えね～」
唯は微笑むだけでシラを切らない……
頭で唯の胸板をぶつけて攻撃するけど、あまり効いてないし……
「あ～、やっぱこっちが彼氏かぁ～」
前方から、先ほどの金髪ガングロの店員さんがやって来た。
「女1男2で店入ってくるもんだから、どっちが彼氏なのかずっと気になってたしぃ！」
「ど、どっちがって……」
あのどこまでも女を必要としない伶君が彼女持ちとすら思えない。
……まぁ初対面の人だったら伶君の綺麗さから見ても、絶対彼女持ちだろうっておもうだろうけど……
「にしても……あのもう1人の子凄いね！この店の商品4分の1ぐらい買い占めちゃってるよぉ！」
「……なんかスミマセン……」
何故か唯が店員に謝った。

「い、五十嵐サン……買いすぎじゃないっスか？」
「これぐらいフツーだろ？」
思わず名字にサンづけしてしまうほど……伶君はめっちゃ買ってた。
大袋3個に小袋5個。
「じゃあこれ郵送してくるから。ちょっと待ってて」
と、すっかりいつものクールな伶君に戻った彼は郵送のためにどこかへ行った。

まぁとりあえず座ろーぜ。という唯からの提案で、すぐそこにあったベンチに座った。
「……で、伶君のリストバンド好きは何で？？」
何気に買ってしまった商品が入ってる小袋をぷらぷらさせながら唯

に聞く。
「その話忘れてたと思ってたんだけどな～……」
……やっぱ唯はじらす。
「マジで知りたい？」
「知りたい」
「ほんとに？」
「うん」
「じゃあ、今度駅前の超どデカパフェ奢って？」
…はい？
思いがけない言葉に、思わず顔を上げる。
「え、私が？あの1万ちょっとぐらいする？」
「嫌だったら、教えてやんない」
いたずらっぽい笑顔……今の私にとっては結構酷。
う～って唸る。
「……よし！買ってやろうじゃないの！」
「……んじゃ、言わねぇとダメだよな……」
「当たり前じゃん。交換条件だもん」
唯は深呼吸してるみたいだった。

「アイツ……伶、リスカしてるっぽいんだ。」
……え？

第２５話　修学旅行３～触れてはいけない～

リスカ？リストカット？
あの、メスか何かの刃物で手首にキズをつけること……だよね？
「……え？なんで？」
「……それは、俺も知らない」
唯の言葉が本当か嘘か分かんないけど……リスカは完全に自殺行為。
「唯、止めないの？」
「何度も止めたけどさ。「理由分かんないお前に止められたくねーよ」って、いつも俺の話し聞かねーし……しかも、リスカって聞いた途端、アイツすっげぇ目変わる」
郵送を済ませて、こちらに向かってくる伶君を見ながら、唯は呟く。
「多分、人間が狼男に変わるみたいに」
唯に耳打ちされ、ス○ラーのＰＶで、マイ○ル・ジャ○ソンが狼男に変身した姿を思い浮かべた。
「そ、そうなんだ……」
なんだか背筋がぞぞっとしてきた。
「唯、杉浦、待たせたな」
片手をあげて、小走りする伶君。
「別に待ってないよ、うん」
「ならいいけど……俺腹減った。Ｌｉｓａのどデカパフェ食いに行かない？駅前にもチェーン店あったよな？」
「あ、どデカパフェなら今度交換条け……」
最後まで言い終わらないうちに、唯に口を塞がれた。
「え？交換条件？」
「あ～っと……」
「ま、いーや」
……よかった。伶君がしぶとい（？）性格じゃなくて……
てか伶君、腹減るの早すぎ。

「沙彩、お前、早速バラすとこだったじゃん。あのままいけば交換条件の内容までバラしてただろ？」
唯に軽く小突かれる。
何も言い返せない私は、黙って唯からのお説教（？）を喰らってた。
それからは買い物したり食べたり遊んだり……で、あっという間に6時。
「そろそろホテル戻るか」
唯はそう言うと、またリストバンドに見とれ始めてる伶君の襟元を掴んで竹下通りを出た。

「あっ！さ～あ～や～ちゃんっ！」
ホテルに戻ると、デレデレでくつろぎモードの夏姫がいた。
その背後にはたっくん……つまり、背後からたっくんが夏姫を抱き締めてるって感じの。
「……小原拓海、なんで私等の部屋いんの」
「いーじゃん。あ、今日ここ泊まるから。沙彩、別の部屋移って？」
「アホか！」
部屋にあったスリッパをたっくん目掛けて投げるが、あっさり避けられる。
「さーやぁ……お願いっ！たっくん、私と一緒のベッドで寝るからぁ～……」
「夏姫とたっくんが作り出すメチャクチャ甘ったるい空気を吸う私の身にもなってよ」
「だってぇ……」
夏姫が説得を始めようとした頃……
「点呼取るぞ～」
先生が部屋に入ってきて、たっくんの姿を見るなり、
「小原！何やってんだ！」
と、鬼形相。素早く連行されてしまった。

「東郷！先生についてこい！」
「えぇ～っ！！！」
ほら、ザマーミロ。これだから言わんこっちゃない。
2人が連行され、1人取り残された私は、今日買った商品を旅行カバンに詰めた。
「……風呂にでも入ろっかな。」
カバンに詰めて、あふれてしまった下着と体操服を持って部屋についてるユニットバスへと入った。

「もうっ、嫌になっちゃう！なんで修学旅行ぐらい彼氏とラブラブさせてくれないのよぉ～……」
「アンタら日中ず～っとラブラブしてたでしょ」
風呂から出たと同時に、愚痴りながら夏姫が帰ってきた。
「そぉだけどさぁ～……せっかく勝負下着つけてきたんだよ？？」
「……ま、まさか、ほんまに寝る気だったの？」
「あったりまえでしょ～？？」
……どんだけ非常識なんだこの子！
「んじゃ、私お風呂入ってくる～！」
「……なるべく早くしないと食事の時間間に合わないよ？」
「はいはぁい」
入浴道具一式を持った夏姫は、ユニットバスへと入っていった。

……結局、夏姫はなかなか出てこず……私1人で食事会場へと向かった。
「え～、本日の自由研修で……」
学年主任の長ったらしい挨拶を聞いてる間、夏姫の姿を探す。
「おい、東郷来てなくね？」
「風呂入ってるんだよね、夏姫。なるべく早くしろって言ったのに」
「食べ始めたら呼びいく？」
「食事中に部屋帰ったらいけないらしーよ」

唯と、風呂上りにも関わらずリストバンドをしてる伶君とそんな会話しながら、どうか夏姫が早く来るよう祈った。

「さーや～っ！置いてくなんてヒドいよぉっ！」

まだ学年主任の話が終わってないうちに、夏姫がこれまた派手に登場してきた……

タイミング悪っ！そして声がデカいっ！

「って、さーやどこぉ～？？」

「夏姫、こっちこっち！」

小声で言いながら、場所を示す為に手を上げる。

「東郷……」

先生は怒りで顔を真っ赤に染めていた……

「ふあ～っ！ご飯おいしかったぁ～！」

部屋に帰るなり、ベッドにダイブする夏姫。

「ご飯おいしかったぁ～……じゃないよ！めっちゃハズかったし！学年全体の前で堂々と大声で私の名前呼ばないでよっ！」

「あはは っゴメ～ン！」

それから一晩中、夏姫と喋りながら夜を過ごし……気づいたら、眠りに落ちていた。

第２６話　修学旅行４～別れよう～

翌朝。朝食の時間より1時間早くセットしていたアラームの音で目が覚めて……予想してた通りだけど、夏姫は起きてない。
「夏姫ぃ～。朝だよ～。メイクやんないの～？」
寝ぼけた声で夏姫を呼んでみるけど……起きる気配は全くナシ。
……仕方ない。夏姫は放っておいて先にメイクと髪やろっか。
バッグからごそごそとコテを出して、コンセントを探した。

「おっはよぉん！さーや！よく寝たぁ～っ！」
髪を巻いている途中、夏姫が起きた。
「おっ！今日はストレートじゃなくって巻き髪～？」
「うん。気分的に」
自分の中で、大体この４日間の髪型やメイクは設定してる。
昨日はストパー＆マスカラとリップをつけただけのシンプルスタイル。
今日はしっかりした巻き髪＆ピンク系メイクのドーリー系。
明日は２つ結いにリップだけの女子高生系。（女子高生だろ）
明後日はポニーテールにスッピンのスポーティー。（遊園地で遊ぶから）
明々後日は移動だけだから何もしない。
……まぁ、大したことはするつもりはない。
「今日はお台場のフジテレビ局見学と銀座～？」
夏姫も私と同様、コテで髪を巻きながら聞いてきた。
「うん。確かお台場は唯の提案だったような……」
「唯、昔っからの夢がカメラマンだからね～！」
そう。唯の将来の夢は、プロカメラマン。
しかも、フジテレビの専属カメラマンっていう、細かい要望まで持っている……

「楽しみだなぁ～……水○ヒロに会えると思う！？」
「う～ん……み○もんた　になら会えると思うよ？」
「あ、「み○もんたの朝ズバッ！」か！」
なんて会話しながら、手際よくメイクしていった。

「それでは、気をつけて行ってください」
先生の合図で、午前中に予定してるフジテレビ局へと電車で向かった。
「さ、さささ、さーやぁ……」
座る席がないので立っていると……隣の夏姫が涙目で私を見た。
「何？どしたの？」
「私、後ろ……」
夏姫の後ろを見ると……サラリーマンのオッサンが、夏姫のお尻を触ってる。
あ～なるほど。痴漢ってヤツ……
東京にいないはずないもんね。
私は大きく溜息を吐き、ニヤニヤしながら夏姫のお尻を触ってるオッサンの手首を掴んで、圧（へ）し折った。
ボキッて、不快な音が耳に入る。
「○×△□☆％（○´ｖ｀）ポョ（゜□゜；）ンガァッ――――っっっっっ！！！！！ｏｒｚ」
ワケ分かんない奇声を発すると、オッサンは手首を手で掴んでしゃがむ。
あ、ちなみに折れてはないと思う。まぁ関節と腱はどうなったか分かんないけど……
「ありがとぉさーやぁ……」
「どーいたしまして。ったく、やっぱ東京って痴漢が多いね」
左向こうでは、女の人が涙を流してる。
右向こうには、女子高生か誰かの悲鳴が聞こえる……
助けにいきたいとこだけど……傷害をもたらした罪で私が連行され

てもいけないし。
『次、台場駅～』
電車のアナウンスが聞こえ、入口へと少しずつ足を進めた。
「沙彩、夏姫、大丈夫？」
「夏姫がちょっと……でも私が手首折ってやったし」
「うわっ。怪力女。そういや杉浦って握力いくらだったっけ？」
「４５だよ」
２年女子の中では、暫定１位。
扉が開き、波のように流れ出る人たちと一緒に駅へ降りた。

――――……

今日は、昨日と比にならないほどいっぱい買い物したなぁ。
袋に入ってるメイク道具やアクセを見て、しみじみ思う。
……といっても、夏姫の比にはなんないけど。
「ごめんねぇさーや！持たせちゃって」
「いーよ、別に」
片手には私が買った商品。そしてもう片方には夏姫が買った商品……
「おい東郷。お前買いすぎ」
「夏姫、おまえいくら持ってきたんだよ一体……」
唯や伶君も片手には夏姫のお買い上げ商品をぶら下げている。
「ほんとごめんってぇ！」
なんて言いながらも、夏姫はご満悦だ。

ホテルについて、一旦肩の荷（？）を下ろす。
「は～重かったぁ」
そこら辺のおばちゃんみたいに肩を叩いた。
「こっちもぉ～」
夏姫も私と同様、肩を叩く。
……まぁ夏姫は両手に大袋２つずつ持ってたから。

「6時から夕食だって」
「え～！私、お腹空いてないし！」
……そう。結構間食しちゃって、腹は全然空いてない。
「けどね、うん」
「む～……」
微妙なやり取りをして、夕食会場へと向かった。

「あれ？食べねーの？」
肉汁たっぷりのステーキを頬張りながら、唯が不審そうな目で私と夏姫を見る。
「あ、さては食べ過ぎただろ」
ニヤリとしながら、伶君はサラダを食べた。
……ていうかさ、唯も伶君も……私たちと同じぐらい食べたよね？
「2人とも、お腹空いたの？」
「うん。バッチリ」
サラダボールの中に入ってるミニトマトを突付きながら聞く私に、男性陣2人はハモッて答える。
……恐るべし、男の胃袋。
「あ～！もう私、ムリッ！唯、私の分食べてよ！お願いっ！」
「……いくら俺でも2人分はキツいわ」
「東郷、俺が食べるよ」
「マジで！？ありがと！」
ギブする唯に対して、伶君はサラダを完食し、夏姫の料理を受け取る。
伶君細いのに……むちゃくちゃ意外。
いや、隠れ細マッチョ系なのかもね。
「伶君スゴいね。なんでそんなに食べれるの？」
「家での料理が、バカみたいに多いから」
……あ～、なるほど。お金持ち食に慣れちゃったワケね。
「しかもスポーツ系の習い事、いくつかしてんだよね」

「え、たとえば？」
「バスケ、バレー、卓球、剣道、柔道、空手、弓道」
「な、７つ……」
さすがお坊ちゃま……ていうか、ほとんど武道じゃん。
「あれぇ？テニスとか野球とかサッカーは？」
「屋外とか、暑いしヤダ」
……なるほど。
「伶、お前、屋外の体育の授業全部休んでるだろ」
「だって暑いし。その分テストで単位はとってるよ」
我侭（わがまま）お坊ちゃまはそう言い、ステーキを切った。

食事の時間が終わり、部屋に帰ろうとした時……
「沙彩、ちょっといい？」
唯に呼び出された。
「？いーよ」
少し不思議に思いながらも、唯についていく。

着いた場所は、人が通る気配がない廊下。
「あのさ、沙彩……ずっと思ってたんだけど」
唯は、息を大きく吸い、はいた。
そして、私の方を向く。

「……別れても、いいよ、うん」

唯は、寂しげに微笑んでいた。

第27話　修学旅行5～好きだし～

「別れる……って、なんで？」
「沙彩さ、アイツ……蒼井大翔、だっけ」
唯の口から、久々に聞いたような名が出てきた。
「そいつのこと、まだ好きっしょ？」
「え？なんで？」
「修学旅行の初日の朝……蒼井の朝練、沙彩見てたろ？」
朝練…あ、『蒼井大翔親衛隊』が見物してた……
ていうか、なんで……？
「なんで唯が知ってんの？」
「あの日さ、遅刻してきたのって、ウソ。沙彩見つけて観察してたんだ」
……じゃあ、表情がわざとらしかったのって、そのため？
「……で、沙彩が行った後、俺、蒼井に聞いた。なんで朝練してんのかって。……沙彩さ、蒼井が事故ったの知ってる？」
「う、うん。咲良ちゃんから聞いた」
よくよく考えたら……虚実なのかな、って思ったこともあったけど。
「この頃、蒼井、頭痛がヒドいんだって。んで、検査入院してんの。海宮病院だから、学校もすぐ近くだし……許可もらって、朝練に参加してるんだって。検査入院つっても、軽度だしって言ってた」
検査入院？大丈夫かな。また記憶喪失に……
って、今はそれじゃないっ！
「と、とにかくっ！唯とは別れないから！」
何故か、唯とは別れたくなかった。
同情じゃなく……最初は、蒼井君のこと忘れれるかな……って思ってた。
けど、今は……
「唯のこと、好きだ、し……？」

告白まがいの言葉に、語尾が小さくなる。
……唯には、好きだって言われた。
でも、私からは初めてで……
火照(ほて)る私の体を、唯が抱き締める。
「……マジ、今日で終わりかって思った」
唯の腕は、かすかに……ほんと、かすかに震えていた。
……そんなに、不安だったんだ。
「確かに、蒼井はカッコいいヤツだ。でも俺、蒼井越えれるように頑張るからさ」
「……バカだな、唯」
腕を唯の腰に回して、抱き締めた。

唯がどれだけ苦しく、切ない想いをしてきたか……後々、思い知ることになる。
……そして、唯に伝えた『好き』っていう、2文字の言葉……
これが、最初で最後だった。

私たちは、ここで始まって――ここから、終末に行き着くのかな。

――……

3日目は、大分疲れが出始めたのか……体がダルかった。
4日目はサイアク。せっかく楽しみにしてたディズ〇ーランドなのに……
浦〇市に着いた途端、ヤバいくらいのめまいに襲われた。
ちなみにディズ〇ーランドでの行動は、班を解体して学年全体で班を決めるらしい。
夏姫はもちろん、たっくんと班を組んだ。
高校生になったら、大分大人数で行動しなくなる。2人や3人が普通で、多くて4人程度の班ができた。

私はというと……結構お誘いがきた。でも、2人組とかを組んでる直後に誘ってくるから……なんとなく、気が引ける。
桃花からもお誘いがきたのだが、ギャル4人組で誘いをかけてきて……正直怖かった。
それで、最終的に唯と伶君の2人組に入った。
唯に至っては、「いーよ。俺も嬉しーし」と笑顔で承諾。
伶君に至っては、「暗に俺のこと、追い出そうとしてね？」って言いつつも、（一応）班に入れてくれた。
「ディズ〇ーランドって、イタリアのバチカン市国2つ分の大きさらしーよ」
伶君の豆知識情報に、知ってるよ！とツッコむが……気分は悪いまま。
だけど顔に出しちゃ、せっかくの旅行の雰囲気ガタ落ちだよね。

ディズ〇ーランドに着き、唯が点呼をとる。
「時間もったいないから早速出陣だぁ～っっ！！！6時にこの隊形で集合な！！！」
引率者の巨大先生の合図で、わらわらとゲートをくぐった。

「唯、杉浦！あれがミッキーっていうヤツ！？」
テンションが少し上がったらしい伶君が、ミニーを指して言う。
「いや……あれ、ミッキーじゃなくてミニーだよ。」
「へ～……ていうかコレ、よくできてんなぁ」
伶君がペタペタときぐるみミニーを触るもんだから……ミニーが照れちゃってるよ。
それはさて置き……
「……暑っ」
日差しがキツく、思わず学校指定の帽子を被った。
……ヤバ、目眩（めまい）が……
「沙彩沙彩！あれ、シン〇レラ城ってやつ？」

「あ……うん、たぶん……」
唯が指差す方向に佇んでるシン○レラ城。
わ～、やっぱすっげぇ、でっか……い……

――――……

「……あ、起きた」
いつの間にか眠っちゃったらしく、目を開けると、唯が覗き込んでいた。
そう、いつの間にか眠っ……
って！！！
「えっ、私、ちょ、どう……うっ」
頭にズキッと痛みが走った。
「あ、ほら、急に動くと危ねーよ」
そう言い、唯は再び私をベッドに寝かす。
混乱してた頭が、少し整理ついた。
「……私、倒れたの？」
「うん。バターンって。すぐ救護室運んだ」
「そう……なんだ。伶君は？」
「ついさっきまでいたんだけど……いつのまにか消えちゃっててさ。多分、他のヤツ等といると思う。」
「そっか。重かったよね？ごめんね」
「いや、全然重くなかったし」
一通りの会話が終わったせいか、沈黙が続く。
口を開いたのは私だった。
「ごめん……せっかくのディ○ニーランドなのに……」
「まぁ、アトラクション全部まわるつもりだったから、ちょっと残念だけど」
唯のぼやきに、少なからずショックを受ける。
いや、少なからず……じゃないか。

私が黙り込むと、唯は笑った。
「冗談冗談。これも思い出になるからいーじゃん？」
「……だね」
笑ったせいか、頭の痛みがだいぶ取れた。
「あ、頭痛くないかも……」
起き上がると、さっきのような痛みはない。
「薬効いてきたんじゃん？」
「へ～、薬……って、私薬なんて飲んだっけ？」
「じゃ、平気っぽいから戻るか！」
唯はさっさとイスから立ち上がり、バッグを持った。
「え、ちょ、私の疑問は？どーなるの？」
「疑問は疑問のままでいーじゃん。」
意味不明な唯の言葉を聞きながら、ベッドから降りた。
疑問は疑問のままでいい……か。

「お～唯、杉浦。復活？」
伶君は土産物屋でぬいぐるみを全種類買い占めているところだった。
手首には、しっかりとリストバンドがついている。
しかも今日買ったものらしく、ミッキーの刺繍が入っていた。
……そのリストバンドの下に隠されている、傷痕。
その傷痕に対する私の疑問も……疑問のままで、いいのかな。
「あ、うん。復活。ごめんね、迷惑かけて……」
「迷惑かけるぐらいなら、最初から言えっつの」
伶君はそう言いながら、笑った。
「ていうか伶、お前ぬいぐるみオタク？」
「記念だよ記念。愛美（ツグミ）がコイツ…ミッキー好きだったからさ。」
さらっと言い、彼はブラックカードを店員に見せて、たいそう驚かせる。
……え？ツグミ？

「ねー伶君。ツグミって、誰？」
「……は？杉浦、お前、どこでその名前知った？」
伶君の目は、一瞬にして変わった。
“多分、人間が狼男に変わるぐらいに”
唯が言ってた……まさにソレ。
「いや、伶、お前さっき言っただろ。ツグミって」
「……あ」
伶君は口を押さえる。
空気が、なんか凍った感じになった。
「……もしかして、それと関係アリなんじゃない？」
私が伶君の手首を指すと……彼は大きく溜息を吐く。
「……誰にも、言うなよ」
私の中で唾液が、喉をリアルに音を立てて通る。

「愛美……早川愛美（ハヤカワツグミ）は、俺の元カノ。……もうこの世にいない」
早口で言うと、伶君は小さいミッキーを追加した。

第２８話　修学旅行６～過去の傷～

この世にいない……それはつまり、死を表していた。
「じゃ、宅配お願いします」
伶君は店員にそう告げると、さっさと土産物屋を後にした。
歩いている途中……何と声をかけていいのか、分からない。
「……ていうか、暑っ。アイスでも食おーぜ」
「あ、うん」
沈黙を破ったのは、伶君の言葉だった。

アイスを買って、ベンチに座って食べる。
アイスはサーティーツーみたいに種類が豊富だった。
「……ったく、高杉夫婦！黙りこくって気持ちわりーよ」
「た、高杉夫婦って……」
「あのこと聞かされて、お前に気安く喋りかけれるわけねーじゃん」
唯の言葉で、また静まり返った３人の空気……
「……まぁ、そうかもな。愛美の死が、俺が彼女作りたくないって思うトラウマ」
「愛美さん、なんで亡くなったの？」
「脳卒中。中学の時、結構頭痛がするって度々言ってたしな。いわゆる突然死、ってやつ。」
脳卒中ぐらい知ってるし……
「俺、自分で言うのもなんだけど……すっげぇ、愛美のこと好きだった。結婚まで約束した」
馬鹿らしいだろ？と伶君は付け足す。
私は首を横に振った。
「……結婚約束した次の日に、死んだんだ」
思わず、眉をひそめた。
伶君の表情がすごく……すごく、哀しそうだったから。

「俺、思った。すげぇ好きでも、いつかは離れてゆく……って。手の届かないところに。その形が、縁を切る、ただの“別れ”かもしれねぇし、永遠の“別れ”かもしれない。縁切りの別れだったら、またいつでも会えるけど……永遠の別れなら、いくら願っても会えねぇんだよ、ずっと」

……私は、固まったまま動けず……

手に、溶けたアイスが付着した感触で、ようやく我に返った。

「杉浦、アイス溶けてんじゃん」

慌ててアイスにがっつく。

全部食べたところで、立ち上がった。

「手汚れてるから……トイレ行ってくる」

「行ってらっさい」

すぐ近くにあったトイレに駆け込み、手に付着したアイスを洗い落とした。

「……いくら願っても会えない……か。」

伶君のあの表情が、頭から消えない。

……まさか……私と渋谷か銀座で口論したり、夏姫と戦ってた伶君にあんな過去があったなんて。

彼女作らない理由も、女嫌いかと思った。

“いくら願っても、会えない。”

まだ、そんな状況がよく分からなかった私は……伶君の心の痛みがどれほどのものか、分かったつもりで、分からなかった。

唯と伶君のところへ戻り、ご飯を食べると、伶君の提案で『アトラクション完全制覇』を実施することにした。

時間はお昼の1時。あと5時間で、このパーク内のアトラクションを全部乗ろう、という計画（？）

でも、ディ〇ニーランドって……来て思ったけど、無駄に広いじゃん。

「まぁ、できるだけって話じゃない？」
パンフを見ながら独り言を言う伶君の後ろで、私に唯がささやく。
「今日平日で人あんまいないからさ、制覇できるかもよ？」
「あ～、なるほど。ていうか沙彩、アトラクションとか平気？」
「うん。遊園地とかの乗り物、好きだし！」
ただし、一部を除く。
私が笑うと、唯は何故か切なそうな表情を見せる。
「どしたの？唯。」
「いや、なんでもない。それよりさ、これ面白そうじゃね？」
話変えるとこあたりが怪しいけど……疑問は疑問のままで、いいよね？

――――……

5時ぐらいになり、このディ○ニーランドのアトラクション全て乗れた。
「つっかれたぁ～～～……」
近くにあったベンチに腰掛ける私。
「あ～俺も。かなり……」
「移動、走ったもんなぁ……」
でも、私の中では立派な思い出のひとつになった。

それから、近くのショップに入り、お土産選び。
とりあえず、（隠れディズニーオタクの）お母さんとお父さんにペアのストラップ……かな。
あと、声楽部のメンバーにお菓子。
「あ、そうだ、イトコにも……」
なんて言いながら商品をカゴに入れていくと……予算ギリギリの量に達してしまった。
「あとひとつ……」

お土産は一通り選べた。予算ギリギリで……使い切るためには、あと５００円の品物をカゴに入れないといけない。
この幅がキツい……
ふと、私の横を新婚さんらしき夫婦が横切った。
「お揃いのストラップ、可愛いねっ！」
「そーだな」
……そうだっ！
「ね～唯、伶君！」
ショップの外で喋ってる２人を呼び出した。
「ん？何？」
「３人でお揃いの物買わない？記念でさ！」
「え～、俺、んなモン興味ない」
私の提案に、伶君はすかさずクレームを入れる。
「え～マジで～？お坊ちゃまだから高価なモンしか買いたくないとか～？」
「そんなんじゃねーよ。お前と唯とで買えばいーじゃん。わざわざ俺入れなくても」
もしや……この人、気遣ってる？
「んじゃ、俺らで買う？」
唯の言葉に、私は頷いた。
再びショップに入り、早速どれにするか選ぶ。
「やっぱストラップがいちばんよくね？」
唯の提案で、ストラップにすることに。
「わ、コレ可愛いかも……」
目に留まったのは、ミニーのシルバーのストラップ。
可愛いけど、カッコいい……いわゆる、カッコかわいい系なストラップだった。
「んじゃ、俺もコレにする」
「いや、これも可愛いかもな～……」
「・・・」

あれやこれやと散々迷い……結局、最初に選んだストラップにした。
唯は私と同じ種類のストラップのミッキーヴァージョン。
「記念……か」
夕日にストラップを翳し呟いた唯の言葉に、私は気づかなかった。

「お前ら、遅っ。俺、逆ナンされてたんだけど」
「そんだけいい男ってことじゃん？」
伶君、かなり怒ってる様子……
唯は謝る様子もなく。
「ご、ごめん伶君……」
「ま、別にいーけどさ。あと何分？集合時間まで」
腕時計を見る。
「５時５８分……」
唯と顔を見合わせ、青ざめた。
「俺、先に行こうと思ってたんだけどさ、親切だからお前ら待ってやっ……ってオイ！」
伶君の言葉もろくに聞かず、ゲートに向かい、本日最後の猛ダッシュ。
周りには、誰１人として海宮高校の生徒は居ず……６時丁度に着いた私たちの班が、最後だった。

走り回ったこの１日……きっとずっと、一生忘れない。

第２９話　性分

「疲れたぁ～……ただいまぁ。」
いろいろあった修学旅行も終え、家に帰った。
うん、やっぱ家の空気はホッとするな……
「お帰り沙彩。どうだった？」
お昼ごはんを作ってる途中のお母さんが、私に聞く。
「うん、おもしろかったよ。自由行動とかさ」
それから、延々と土産話をした。
今日は金曜日。明日明後日が休み。２年生は部活も出ちゃダメ。
……さて、土日何をしようか……
「沙彩、彼氏とはまわったの？」
「……え？」
あ、そうだ。お母さんに話したっけ……唯のこと。
結局聞き流したのかな……って思ったけど、しっかり覚えていたらしい。
「あ、うん。班は夏姫と唯と五十嵐君っていう人とで、ディ○ニーランドも唯と五十嵐君で班組んだし」
「……五十嵐君って誰だっけ」
「五十嵐伶っていう、唯の友だちだよ」
「あ、なるほど。唯君の友だち……五十嵐財閥の。なんで唯君と２人でまわらなかったの？ディ○ニーランド」
お母さんが、不思議そうな顔して聞く。
「付き合ってんなら、思い出作りに２人でまわればよかったのに」
「……十分思い出つくれたし……」
返答に、困った。
なんせ……お母さんにとって、恋人同士＋１人なんて式は有り得なさそうだったから。
「そう。ならいいけど……私が高校のときの修学旅行はね……」

お母さんの思い出話が始まる……出された料理をもくもくと食べながら聞いた。

土曜日。桃花からお誘いのメールが来た。

「さーやぁぁぁ！！！補習ぶりっっっ！！！」

「……そんなこともないけど……」

駅につくと、修学旅行をきっかけに黒に磨きをかけた桃花が走り寄ってきた。

「あ、そっかぁ！んじゃ、サーティーツーでも行こーよっ！」

な、何がどうなって“んじゃ”に繋がるの！？

……って思いながらも、桃花といろいろ話しながらサーティーツーへと向かった。

「うは～っ！うんめぇぇぇ！！！」

薄黄色のアイスクリーム……おそらく桃味のアイスクリームにがっつく桃花。

桃花だから桃か……（駄洒落？）

私も苺味のアイスクリームを食べる。

果肉が入ってて、めちゃめちゃウマいんだよなぁ、コレ……

「実は～、今日、さーやに聞こうと思ったんだぁ！」

「何を？」

「さーやの彼氏って、高杉だよね？高杉唯！」

な、なんだ今更……

「そうだけど？」

「彼氏のこと、好きぃ？」

今更、なことばかり聞いてきて、少々「桃花頭おかしくなった？」って思う。

「うん……好きだよ？」

「彼氏＝好きな人になってるぅ？」

「うん、まぁ……桃花、何が言いたい？」

「さーや、彼氏のほかに好きな人いるのかなぁ……って思ってさ！」
はい？……もう、ズバリ言う。
「桃花、頭おかしくなった？」
「っえ――――っっっ！！！さーやヒドッ！純情純白純粋純真な乙女の純情純白純粋純真な疑問なのにさぁ！」
どこが純情純白純粋純真っ！？
純情純粋純真はどうか分かんないけど…純白は違うでしょ！あと乙女も！
「はいはいはいはいはい……」
暴れる桃花を抑えていると……
「も――――――っっっっっ！！！！！！サイアクゥ！！！」
桃花以上の大声が聞こえてきた。
「なんだなんだぁ？」
桃花も私と揃ってその大声の主を見る。
あ、まじない部の……原美来？
「お、落ち着こうよ美来……」
そう言い、原美来を抑える……えっと、誰だっけ。
あ、そうそう。バスケ部の1年内で唯一のレギュラーで有名な高倉（タカク）歩海（ラアユミ）だっけ。
「何日暴れたら気が済むのか……」
クールにそう言うのは、生徒会役員で学年一頭がいい、窪田恵夢（クボタメグム）だ。
「だってさ！！！せっかく大翔君が登校したと思いきや……咲良ちゃんと付き合ってるんだよ！？」
「あ～……蒼井君と咲良ちゃんって、7月あたりで一緒にいるとこ見ちゃったんだよなぁ……」
「うっそぉぉぉんっっっっっ！！！メグ、なんで言ってくれなかったのぉ！？」
「言えるわけないじゃん」
7月あたり……咲良ちゃんが、自分のこと思い出してもらうためにお見舞いに通ってた時期かな。

んで、思い出してもらって両想い……幸せなパターンだね。2人にとっても……

「さーやぁ？どぉしたぁ～？」

「あ、えと……このアイスおいしいなぁって思って」

「なぁんだぁ」

……いけないいけない。何切なくなってんだ私は……

気を紛らわすため、再びアイスにがっついた。

それからゲーセンとかで桃花と遊び……夕方6時。電車に乗った。

「あ、メールだ」

ケータイに届いた、同じクラスの子からのメールに簡単に返信してると……

「あ～っっっ！沙彩ちゃんだぁ！」

「わっ」

横から何かが突進してきて……ドンッとぶつかった。

「あ、キョン」

「久しぶり～！」

キョンこと遠藤崎右京がニコニコと笑った。

「修学旅行どうだったぁ？」

「あ～うん。楽しかったよ。ディ○ニーランドとか行ってさ。」

「ディ○ニーランド！キョンも行きてぇぇぇぇ～～～！！！」

あ～……キョンうるさいぃ……

目の前の席に座ってるカップルもじとっと私たちを見……

……て……

い……！！！？

「キョォォォォンッッッッ！」

前の席からいきなりあの子が突進して……キョンに抱きつく。

そう、あの子……西院咲良ちゃん。

「んきゃ～っ！咲良ぁ！ひっさしぶりぃぃぃ！」

「久しぶりぃ！中学校以来っ！」

見るからに、2人は親友っぽい。
……じゃあなんで高校で会わなかったのか……高校が無駄に広いからか!?
いや、それはさて置き……咲良ちゃんの横にいた、男の方。
あれは……蒼井君?
髪は栗色から黒髪に変わってて、色白だったけど少し黒くなっている。
そしてまた一段と大人っぽく……だけど、昔の面影はしっかり残ってた。
でも、明らかに違うところ……

眉をひそめ、口は一文字。目は鋭く光ってて……
私を、睨んでる?

「大翔ぉ?顔怖いよぉ?」
蒼井君の表情に気づいた咲良ちゃんが甘ったるい声で蒼井君に言うけど……蒼井君の表情は変わらない。
ていうか……なんで私が睨まれなきゃいけない?何かしたっけ?
元好きな人とはいえ……――正直、ムカついた。そして、正直悲しかった。
ワケ分からず睨まれるのは、最も嫌いで、むしろやり返す性分だから……
私も同じように少し眉をしかめた。
「キョン」
「ほへ?」
「なんか前の人に睨まれてムカつくから席かえるね」
キョンに小声でそう言い荷物を持ち、他の車両へと移った。
……そして、思った。

もう、あの頃じゃないんだな。って。

あの頃の私や蒼井君は、もういないんだな。って。
――あの頃の日々は、幻想だったかもしんない。って。

第３０話　いじめ

「おっはよぉさーやぁ～！」
月曜日。何日かぶりの登校。
電車の中では、夏姫が大きく私に手を振っていた。
「おはよ、夏姫」
「あれ？さーや、顔怖いよ？何かあった？」
「別に、何も……」
……っていうけど、実は未だにムカついている……
なんで私が睨まれなきゃいけないワケ！？なんかしたのか私！
「……ねぇ夏姫。私、蒼井君に何もしてないよね？」
「おっ！久しぶりじゃん！さーやの口から蒼井君って言葉出るの！
さては～？大翔君絡みぃ？」
「いや、休み中に桃花と遊んだときの帰りの電車で、偶然咲良＆蒼井カップルに遭遇しちゃって。蒼井君に睨まれた」
夏姫は「へっ？」って感じな顔してる。
そりゃそうでしょう。だって、あの『１－Ｄアイドル四天王（河野さん命名）』のリーダーだよ？（リーダーかどうかは不明）
ていうかそれ以前に私、蒼井君に何もしてないし。（また。）
「あ～それはぁ～……う～ん……」
「ね？おかしいっしょ？意味分からんっしょ？」
「てかその人、ほんとに大翔君だったの？」
改めて思い出す。
黒の無造作で、目が大きくて……ちゃんと面影残ってた。
「うん。９９．９％。」
「何その値～！あとの０．１％は？」
「睨んだときの表情（カオ）。あれはちょっと別人っぽかった」
電車に乗って、辺りを見渡す。
……いました。蒼井君。咲良ちゃんはいないのか、友だちと喋って

ます。
「蒼井君、かなり友だちと打ち解けてんね～……やっぱ見間違いじゃない？」
「んなわけないじゃん。咲良ちゃんと一緒にいたんだよ？咲良ちゃん、「大翔～」って呼んでたし」
「あ～、そっかぁ」
……にしても夏姫、蒼井君を凝視しすぎ……いい加減あっちも気づくでしょ。
「さーや、その時1人だった？」
「いや……キョンっていう、中学時代の後輩と一緒に居て……あ、キョンって海宮の1年生なんだけどさ。咲良ちゃんと仲良いっぽい。2人が再会したとき超騒いでたし……まぁ、蒼井君はキョンのこと気に入らなかったみたいだけど」
「……もしかして、キョンにムカついて睨んだのかもよ？」
……え。キョンに？
睨みの標的はキョンだったの？
そっか、標的はキョンかも……なのに私、勘違いしてた？
「……かもね……うん」
納得して、改めて自分の早とちりさを恨んだ。
いや～、ハズいハズいハズい……

でも、あの目つきを思い出すと、また振り出しに戻るような気がした。

電車に揺られて、海宮駅に着いた。
チャリに乗り換えて、夏の終わり（？）の風を頬で感じる。髪が風に靡いた。
「ほんと、沙彩の髪ってキレーな栗色だよね～。うらやまし」
セミロングの夏姫は私の髪を触ってくる。
「運転中だよ。危ないよ」

「はぁ～い」
夏姫は手をハンドルに戻した。
「あ、沙彩夏姫。おはよ～」
曲がり角から、唯が現れた。……って、なんか違うぞ、唯。
「唯、髪染めた？染めたよね？」
あ、そうか、髪色。夏姫の言葉で気づいた。
唯の髪は、金髪に近い色になっちゃってる。
「あ～、うん。イメチェン？」
「似合うね」
そう言うと、唯は嬉しそうに笑った。
「も～ラブラブだなぁ～高杉夫婦！」
「それ、伶にも言われたんだけど」
「ま～いーじゃん？」
横3列で喋りながら、学校へと車輪を走らす私たち。
ハタから見たら……危なっかしい光景だろうな。

学校へ着くと、何故か先生に呼ばれた。
「お～スマンな呼び出して」
1年部の……滝川先生。
なんで1年部の先生が私に？
「杉浦、西院咲良知ってるか？」
「知ってますけど……」
「おおそうか。やはりな。先生は西院の担任だが……西院、この頃元気がないみたいなんだ。何か知ってるか？」
「いえ、特には……」
聞いて、ピンときた。
多分、蒼井君絡み……って。
「そっか。すまんな！」
「いーえ。では」
先生に一礼すると、教室へと向かった。

『蒼井大翔親衛隊』の人数や学年から見ても……蒼井君のファンは1年生のみならず2年3年にもいるだろう。
そんな人と付き合ってる咲良ちゃん……全学年のファンから目をつけられるのは、多分当たり前。
目をつけられるだけなら、いいかもしれないけど……ファンが行動し始めると、恐怖モノ。
集団イジメとか、有り得るよね……
「～～～っ！！！――――」
「――――！！！」
心なしか、どこかからか罵声が聞こえてきた。
どうやら……旧校舎からだ。
空き教室に入り、旧校舎を見る。
「さっさと別れろや！！！」
「嫌っ！やめてくださいっ！」
旧校舎の裏側なのか……とにかく、人の姿は見えないけど、明らかに声は聞こえる。
ていうかこの声……咲良ちゃんじゃん。
始業が鳴っているにも関わらず……私は2階から飛び降りた！（※絶対マネしないでください）
あっという間に私は旧校舎のすぐ近くに。シューズのまま、旧校舎の裏側へ行った。
「なんだこの草……」
首まで生えている草が邪魔。振り払いながら、進むと……ギャル系の3年生、5人の姿が見える。
その5人に囲まれ……リボンのついた頭が見えた。
「おめぇみてぇなぶりっ子、大翔様には似合わねぇんだよ！！！」
3年は咲良ちゃんを蹴って踏みつけ踏み躙り……私は、いてもたってもいられなくなった。
「何してんですか！？」
草むらから飛び出した私は、3年生を掻き分けて囲いの中に入り、

ぐったりしてる咲良ちゃんの意識を確認する。
「大丈夫!?咲良ちゃん!」
反応しないけど……呼吸はしていた。
「てめぇなんだよ!邪魔すんなよ!」
今度は私に蹴りが飛んでくる。
防衛術は知らないけど……先攻術が飛んできたら、こっちも先攻術で応じよう。
「いでででっ」
ギャルの足を掴み、足首を捻らす。
グギギって聞くからにも痛そうな音したけど……捻挫ぐらいだろう。
そいつはその場に蹲り、足首を掴んでのた打ち回った。
残り4人が呆然としてる間に立ち上がり、咲良ちゃんを担ぐ。
「……次は誰ですか?」
我ながら、気持ち悪い笑みを浮かべると……後ろから、殴られる気配がした。
すぐさま振り向き拳を避け、そいつを転倒させる。
今度は横から拳が飛んできて、下がってかわして、背骨を瓦に見立ててチョップする。
あとの2人は、凍りついた。
「つーかコイツ、2年の杉浦沙彩じゃん!握力40で有名の……」
「チッ……行こっ」
2人はのた打ち回るギャル1人を担ぎ、復活した2人はよろめきながら走ってどこかへ行った。
……なんだよ。4人一斉にかかってきても大したことないのに。ていうか40じゃなくて45だよ。
とにかく、咲良ちゃんを保健室に運ぶのが先……かな。

「あら、杉浦さん。HR始まってるわよ……って……」
保健の先生も、私が担いでいる咲良ちゃんを見て絶句した。
「さ、ささささ、西院さん!?」

「はい。3年の女子5人から暴行を受けてたみたいで……私が助けに行ったときは、もう意識不明で……」
「と、とにかく救急車！」
慌しく先生は動く。
その間、咲良ちゃんをベッドに寝かせた。
「失礼しますっ！」
先生があたふたしている最中……保健室から、人が入ってきた。
蒼井君だ。走ってきたのか、汗が一筋流れている。
「咲良！大丈夫か！？」
蒼井君は咲良ちゃんに駆け寄った。
「あら、蒼井君！西院さん、今さっき運ばれて……意識がないみたいなの！」
「え……」
蒼井君は、咲良ちゃんの顔を見て絶句した。
だって白くて綺麗な咲良ちゃんの肌は……殴られて、ボコボコになってて……ところどころ内出血していたから。
「……咲良ちゃん、3年の女子に殴られてた」
何日……何ヶ月かぶりに、蒼井君にそう話しかける私。
「3年女子は……蒼井君と咲良ちゃんが付き合ってるのが気に食わなくて、何発も何発も殴ってた。私が助けに行った時は……既に、意識なかったよ」
「・・・」
「なんでこんな風になる前に助けに行かなかったの……？私が行かなきゃ死んでたよ」
ああ。人に怒るのって何年ぶりだろ。
蒼井君は、俯いているだけだった。
「……せ、先生、西院さんの保護者に連絡してくるわね……」
静かながらもこのピリピリした空気に耐え切れなくなったのか、保健室を出て行った。
そして、訪れる沈黙。

「ご、ごめん。第三者外の私が変な口きいて……」
謝る必要ないけど、沈黙に耐え切れず謝った。
「いえ……俺が、悪いんです」
蒼井君が、この場所へ来て初めて私に向かって言葉を言う。
「咲良がいじめを受けてることに気づかなかった。全然」
「……咲良ちゃん、いつも明るいし」
そう。あの日の電車の中でのテンション……あんなテンションの子が、いじめを受けてるなんて普通思わない。
「ごめんな、咲良」
そう言い、咲良ちゃんの頭を撫でる蒼井君の表情は、もう立派な“彼氏”だった。

このまま、2人がうまくいきますように。
私は思った。
だけど……これから、あんなことになるなんて……思わなかった。

第３１話　相違点

「やっぱ無理……だな」
ふと、蒼井君が呟く。
「え？何が？」
「咲良の彼氏やるの」
思いがけない言葉だった。
彼氏やるのが、無理？
「どうして？」
「俺、中学生の時……すんげぇ遊び人だったらしくて。３０人以上と付き合っては別れ……の繰り返しだったぽい。事故遭って全然覚えてないけど」
「咲良ちゃんから聞いたよ」
「え、マジで？いつ？」
「えぇと……多分、ブロック結団式の時」
……ヤバい。もううろ覚えになってしまっている……年のせい？
「へぇ……」
「……で、咲良ちゃんと付き合ってた頃のこと、覚えてないの？」
「ほとんど覚えてないけど、事故に遭った直後に女の悲鳴が聞こえてたのは、覚えてる。……多分それが、いちばん最初の記憶」
……なんか、悲しいな。
思わず、私が記憶を失ったら……って想像した。
家族が誰なのかも、友だちが誰なのかも分からない状態……
「見舞いに咲良が現れた時、俺が「あんた誰？」って聞いたらめっちゃ悲しそうな顔してた。……でも、「西院咲良です。よろしく」って、初対面みたいに自己紹介して……」
蒼井君は、咲良ちゃんの頭を撫でている手を下ろした。
「それから、ほとんど咲良に付き纏われて。正直嫌気さした頃……補習の案内が届いた」

「あっと……“出席日数が足りなかった生徒”として？」
……なんで補習の案内が出てくるのかな。
「うん、それ」
そう言った途端、ドアがガラッと開き、救急隊員が来た。
一応邪魔にならないように、教室の隅に行く。
「急いで担架の準備を！」
「はい！」
咲良ちゃんは担架に乗せられ、保健室から出て行った。
「杉浦さん……ありがとね。今、1・3年部の先生呼んだから……詳しく話聞かせてもらってもいいかな」
「いいですけど……」
でも、“ギャル系女子5人”としか印象残ってないから、上手く伝えれるかな。

3人の先生……1年の学年主任、3年の学年主任、生徒指導の先生がズラッと私の前に並ぶ。
「まず、どこで西院咲良は被害に遭った？」
「旧校舎の裏です」
「何人が西院咲良に暴行を加えた？」
「3年の女子、5人です」
「どんな風だった？」
「5人が西院さんを囲む形で、蹴ってたりしてました」
「その女子の名前は分かるか？」
「分かりません」
ひと段落ついたのか、3人の先生は話し合っている。
なんか……取り調べられる容疑者みたいだ、私。
「ひとつ聞くが……君は西院咲良に危害を加えた1人ではないのか？」
先生が眉をひそめて聞く。
……本当に容疑者になっちゃってるよ、私！！

さっきの短い間で、どうやって私を容疑者にしたのか……
「違います！」
「……あの」
私が違う、とキッパリ断言した途端……蒼井君が話に入ってきた。
「杉浦先輩は、確かに痴漢してくる人を攻撃したりできて、強い人ですが……集団で1人に暴行を加えたりするなど、卑怯な真似は絶対しません」
「痴漢を攻撃……」
目を真ん丸くして3人一度に凝視してくる……
……すみませんねぇ。私が普通の女っぽくなくて！
「ていうか君は、杉浦や西院咲良とどういう関係だね？」
「杉浦先輩は、俺が尊敬する男性で……咲良は、俺の彼女です」
ちょ、ちょちょちょちょ～～～！！！
蒼井君、真面目な顔して何言ってんの！
「ほぉ、なるほど」
先生も納得しちゃってるし！
「私、男じゃないですよ！」
「まぁ、世の中男も女もあまり変わらん」
……変わるっしょ！
「……じゃあ、生徒写真持ってくるから、しばらく待っててくれ」
3年部学年主任は席を立ち上がった。
「藤田先生、神野先生、ちょっと……」
1年部学年主任と生徒指導は他の先生に呼ばれ……私と蒼井君、2人だけ取り残されてしまった。
な、何か話さなければ……っ！
「……そういえば、蒼井君と咲良ちゃん付き合ったきっかけって指輪……だったよね？」
「え？何の話？」
……はい？
だって咲良ちゃん、あの時……

“「大翔に貰った指輪を大翔に見せたら……復縁しました！」”
笑顔で、そう言ってた。
「だって、咲良ちゃん、「大翔に指輪見せたら復縁した～」とか言ってたよ？」
「俺、指輪なんか見せてもらったことないけど……ていうか指輪なんてあげるような趣味じゃないし」
……はい？（二度目）
ますますごちゃ混ぜになる。
つまり……どっちかが、嘘ついてる？
「じゃ、じゃあ、蒼井君と咲良ちゃんが付き合ったきっかけって……？」
「……」
そこで、何故か黙り込んだ。……プラス、私に背を向ける。
ふ、触れてはならぬとこだったか……？
「と、とにかく！彼氏やるの無理だとか……1回助けれなかっただけですぐそう思うのはよくないよ！……まぁ、私もちょっと怒ったけど……」
いや、かなりかな……
「だから、これからも咲良ちゃんと……」
「先輩！」
いきなり蒼井君がそう叫んだので、ビックリした。
彼は振り返ると、見たことないような……真剣な眼差しを、私に向けた。
「あの、俺……」
「杉浦ぁぁぁっ！！！」
蒼井君が何か言おうとした途端、担任の聞いたことないようなどす黒い声が聞こえてきた……
「杉浦ぁっ！大丈夫かぁっ！ケガはないかぁっ！！！」
「わ、私は全然！」
「おぉそうか」

落ち着くの早っ！！
「いや～、お前が3年の女子“１０人”に“殴られながらも”１－Ｄの西院咲良を助け出したって聞いて……」
……誰から聞いたんスか、ソレ。
「杉浦、これが3年の集合写真だ。まぁ去年の2年の修学旅行写真だけどな。5人ってどれか分かるか？」
3年部学年主任がやってきて、6枚の写真を出す。
……うへ～、多い……
しかも修学旅行だからみんなちゃんとして、全然分かんな……
……いや、でも明らかに場違いな派手なカッコしてる女子が映ってた。
しかも、6クラスあわせて5人。
「……多分ですけど……この人とこの人と……」
私がその5人を指差すと……学年主任は顔を般若（はんにゃ）のように歪ませる。
「コイツら……万引きやら何やらかんやらで……」
……やっぱり問題児？
「ありがとな杉浦。早速呼び出す。……この学校にいたらな。」
なんか初めてお礼言われたような気がする……
学年主任は覚束（おぼつか）ない足取りで保健室を後にした。
「とりあえず、教室に行こう！お、そこにいる1年は……もしや杉浦の彼氏かい？」
「違います。断じて」
「おぉそうだったな！お前は高杉唯だったな！」
……どこで知った！！
「杉浦と高杉……「杉コンビでお似合いだ」って職員室中で噂になってるぞ？」
恥（ハズ）ッ！なんでそんなことまで出回って……
教職員の情報網は、ハンパじゃない……
「そうだ。蒼井君、何か言おうとしてたよね？」
「え？あ、大したことないから」

「あ、そうなんだ」
蒼井君は、歪（イビツ）な笑みを見せた。
この歪な笑みの裏側にある、蒼井君の心情……
私が知るのは、多分、もっと先のことだった。

第３２話　不安

教室に戻ると、いきなり夏姫が飛びついてきた。
「さーやぁ～！めっちゃお手柄じゃんっ！」
「え、夏姫知ってたの……？」
「夏姫どころか、学校中のみんな知ってる。事件って伝わるのが早ぇよな」
唯が微妙な笑みを浮かべている。
……その微妙な笑いは、何を言いたいんだね？唯君。
「ていうかさーや、大丈夫なの！？怪我は！？」
「あ、そういえば……３年女子１０人に殴られたっていうの、誤報だから。正しくは、３年女子５人を倒して咲良ちゃんを救ったっていうか……」
「…やっぱりな。沙彩が殴られるわけねーもんな」
唯はそう言うと……いきなり私に抱きついた！
「沙彩、お前最ッ高！！すげぇ！」
「ちょ、ちょちょ、唯！」
私の髪をぐしゃぐしゃにして撫でてくる唯。
続いて、誰かの手も私の頭に触れた。
「よく頑張った杉浦。３年女子に殴られ蹴られ……」
その手の正体は、伶君。
「だから、何もされてないってば～」
私は笑顔で返した。
「えっ？何何っ！？」
「も～、唯！さーや！んなとこでイチャつくなぁ～っ！」
「羨ましすぎんぞぉ！」
「よっ！高杉夫婦っ！！」
次第にクラスメイトたちも私たちの存在に気づき……徐々に冷やかす。

だけど、今はその冷やかしさえも心地よく感じる。
「みんなっ！特にさーや！」
騒いでいる最中、クラスでもウルサい方の中島が教室に入ってくる。
「さーやがグッチョグチョにした3年女子のギャル5人組、警察に送検されたってよ！！」
「おおおお～～～っっっ！！！」
一気に教室が歓声の渦に。
「やったねさーや！」
「でかしたなぁ杉浦！！」
「さっすが唯の女！」
この盛り上がりは……1限目が終わるまで続いた。
この時は……心の底から笑えてた。青春の1ページだなって思った。
――幸せだった。

――――……

あれから、2週間後。『蒼井大翔親衛隊』は解散された。
今回の暴行は少なからずとも、このグループが一因だと考えた結成者……1年の原美来が解散させた。
そして私は、警察から感謝状を頂いた。
暴行をしたあの5人組は、万引きとか強盗とか余罪たっぷりで、警察も頭を悩ませてたらしい。
咲良ちゃんは……まだ、意識を取り戻していない。
私もちょくちょくお見舞いには行ってるものの……目を瞑ったまま、彼女についている何本もの管（くだ）の中に液体が走っている。
……それと。蒼井君からメールが来た。
『咲良を救ってくれて、ありがとう。
なんだかんだと色々あって、お礼遅れてごめん』
改めて、アドレスブックに蒼井君のアドレスを登録した。

……もう、私の中で蒼井君は後輩であり、友達だから。

そう、友達……

――――……

「杉浦先輩っ！」

優希ちゃんと李流ちゃん。そして……1年女子A・B・Cが休憩中、わらわらと寄ってくる。

「ここの振り付け、どうすればいいんですか？」

「あ、ここ？右手は前で交差して……」

海宮高校では、ブロック対抗種目が3つある。

1つ目はブロック男子対抗組体操。

2つ目はブロック女子対抗ダンス。

3つ目はブロック男女混合対抗応援合戦。

全力で拒否したが、無理矢理ダンスリーダーに決められた私は、後輩の指導係の1人になった。

「あ、なるほどぉ！じゃあ、ここは！？」

「ここはね……」

散々嫌がってたダンスリーダーだけど……いざなってみると、面白いもんだな。

「さっあやぁぁぁ！！！ここどー教えればいいの！？」

「夏姫、あんた後輩指導係っしょ？」

「だって私も分かんないもん！」

……何故か夏姫に頼られてる私。

「沙彩ちゃん、ここってどうやるんだったっけ？」

「あ、ここは……」

挙句の果てに、先輩にまで聞かれちゃうし……

私は一体何なんだ！？ダンス王者なのか！？

「大人気だな、沙彩」

「唯！んな呑気なこと言わないでよぉ……大変なんだよ？」
「まぁそれほど沙彩のこと、みんなが慕ってるわけじゃん？」
「そうかもしんないけど……」
にしても……暑い。もうすぐ１０月なんだけど、暑い。
髪が邪魔なのかな……いい加減切ろっかな。バッサリショートに……
「沙彩、その髪暑くない？」
つい最近髪を切った唯が、私の髪に触る。
「あ、それ今思ってた……いい加減切ろっかなぁ……」
「沙彩はなんでも似合うと思うけど……ロングがいちばん似合うと思うよ」
そう言うと、唯は私の帽子を取って、どこから出てきたのか分からないクシで私の髪をとかし……どこから出てきたのか分からないゴムで素早くひとつに束ね、どこから出てきたのか分からないヘアクリップで束ねた髪をお団子状にして留める。
そして元のように帽子を被せた。
「……やっぱショートも似合うかもね」
唯は微笑むと、男子の元へ帰っていった。
「さーや、似合うじゃん！髪帽子ん中入れるの！」
「そ、そっかなぁ……？」
若干違和感があり、頭を触った。
……ここんとこ、唯は益々大人っぽくなって色気出始めて……私がいるのにも関わらず、先輩後輩から様々なアプローチを受けるようになってた。
だけど、意外とニブい唯は全く気づいてないっぽい。
けど……彼女の私は結構気が気でしょうがない……

「だったらさ、別れちゃえば？」
「……は！？」
帰り道に桃花と寄ったカフェで飲んでたカプチーノを思わず噴出す。
「それ、さーやが高杉君のこと信じてない系じゃね？」

さり気なく桃花はお手拭で私の口を拭く。
「し、信じてないとか……そういうんじゃないけど……」
「んじゃ～何？高杉君に女の影でもあるってゆーのぉ？」
唯に女の影……そりゃあ、色んなのが。
でも、それは一方的に寄ってくる影であって……
「特別な影……とかはないなぁ」
「なんだぁ？それぇ！」
桃花はよほどツボにはまったのか、キャッキャ笑っていた。
「ま～いーさ！実際さーやと高杉君別れてるわけじゃないっしょ？
続いてれば全てオッケェ～！桃もユースケのことたまに疑っちゃうときあるけど……実際付き合ってるんだから問題ないじゃん？」
そう言い、桃花は立ち上がる。
あの、桃花さん……浮気されてる、っていう不安を抱えようとはしないのかね？
まぁ、私が抱えてるわけでもないけど……
「んじゃ、桃、これから日サロ行ってくる！」
「お～。黒に磨きをかけてらっしゃい」
日サロ……どんな世界だろうな。
カフェを後にする桃花の後ろ姿を見送っていたが……カフェを出る寸前、桃花が振り向く。
「でもさ！高杉君以外に好きな人とか気になっている人がいたら、ソッコー別れるのがオススメだよ！相手も苦しむだけだっちゃあ！！」
……だっちゃあ？
どっかで聞いたことある語尾を残すと、桃花はカフェを出て行った。
「唯以外に好きな人……かぁ」
……いないな！
「カプチーノ追加注文しよっと」
呼び出しボタンに指を近づけたその時……ＧＲｅ○ｅｅＮの『歩○』がカバンの中から流れた。

蒼井君からだ。

『咲良の意識が戻った！』

咲良ちゃんの意識が……戻った？

私は何も考えず、会計を済ませていた。

第３３話　喪失

「あのっ、西院咲良さんの病室は……？」
「西院さんですか？えっと……６０３号室です」
「ありがとうございます！」
フロントみたいなとこに座っている看護婦さんに病室番号を聞くと、すぐに階段を駆け上る。
２階、３階、４階……とにかく駆け上り、６階に辿りつく。
そこから６０３号室目掛けてダッシュした。
「咲良ちゃんっ！大丈夫！？」
息を切らしながら病室のドアを開けると……中にいた咲良ちゃん、そして蒼井君が同時に私を見た。
「……誰？あなた」
咲良ちゃんが、キッと私を睨む。
……へ？
「おい、お前マジで覚えてねーのかよ……」
「大翔以外知らないわよ」
咲良ちゃんは、合わせていた視線を逸らした。
何……何が起きてんの？
口調も、前よりずっとキツくなっていて……なんだか、怖かった。
「杉浦先輩、ちょっと」
「え？」
蒼井君がいきなり立ち上がり、私の手をひく。
「ちょっ、大翔っ！どこ行くの！？」
「すぐ戻るから」
ぐいぐい引っ張っていく蒼井君。
病室を抜け出し、人気のない廊下に出てきた。
「咲良さ、わざとにああ言ってるわけじゃねーから……」
「うん、それは分かる」

「……あいつ、俺以外……全く覚えてねーらしいんだ。主治医によると」
つまり……記憶喪失。
「でも、ちょっとしたらすぐ思い出すだろう、って」
「……そっか。よかったね、大事に至らなくて」
「ああ」
蒼井君は嬉しそうな悲しそうな……微妙な笑みを浮かべた。
「どしたの？」
「……いや、なんでもない。病室戻ろう」

再び病室に戻ると……咲良ちゃんがスゴい形相で、私に近寄ってきた。
「あなた……大翔に何したの！？大翔の何なのぉっ！？」
平手打ちをするつもりなのか……咲良ちゃんは手を振りかざす。
私は咲良ちゃんの手首を掴んだ。
「なっ……」
「……よかった。ここまで元気になれて。私、杉浦沙彩。海宮高校の2年生で……咲良ちゃんや蒼井君の先輩にあたるかな」
「杉浦……？」
咲良ちゃんは、眉をひそめる。
「あなた……どこかで会ったよね？」
「……自分で思い出してみて。そんじゃ、私帰るね。お大事に」
掴んでた咲良ちゃんの手首を離すと、荷物を持って病室を出た。
……思ったより、キツい。人に覚えてもらえてないのって……
「杉浦先輩！」
後ろから名前を呼ばれ、振り向く。
蒼井君がいた。
「また……来てくれる？」
答えは……決まってるじゃん。
「うん。咲良ちゃんに思い出してもらえるように頑張るよ」

「……よかった」
蒼井君は安堵の笑みを浮かべる。
私の記憶の片隅にある、蒼井君の笑顔……久しぶりに、見た気がする。
それまでの笑顔は……どこか寂しそうだったり、悲しそうだったりしてたから。
「咲良が完全に思い出したら……大事な話、咲良にしようと思うから……杉浦先輩も来て」
「え？うん……」
何故、大事な話に私が……？と思ったけど、あまり気にしなかった。

「ただいま」
「沙彩。遅かったじゃない」
夕食を作ってたお母さんが、私を見て言う。
「うん。ごめん、ちょっと……」
「元気ないわねぇ。どうしたの？」
やっぱり、お母さんにはお見通しか……
「……後輩のお見舞い行ってた」
「先日に沙彩が助けた……西院って子？」
「うん。西院咲良ちゃん。お見舞いに行ったらさ……私のこと、忘れてた。記憶喪失みたい」
咲良ちゃんの冷たい目線と声を思い出し、目をふせた。
「記憶、ずっと戻らないままなの？」
「いや……すぐ戻るって言ってた。でも……すっごいショックだった」
今になって、シチュエーションは少し違うけど……記憶をなくした蒼井君に会った咲良ちゃんの心情が分かるかもしれない。
「ほら、落ち込まないの。沙彩らしくない……いつもみたいに偉そうな態度取ってなさいよ」
「え、偉そうって……」

「沙彩がそんなんじゃ、西院さん思い出してくれないよ？」
「……そっか」
少々キツいけど、優しいお母さんの言葉に少しだけ勇気付けられた。
思い出してもらえるように……頑張ろう。

「咲良ちゃん、こんにちは」
「あなた、先日の……」
ある日の学校帰り。１人で６０３号室に行き咲良ちゃんに会った。
「これ、分かる？」
「……リボン。そんぐらい分かるわよ」
「咲良ちゃん、いつもリボン頭につけてたから……」
買ってきた白いリボンを咲良ちゃんの髪の結び目につける。
……うまくつけれないけど……ま、いっか。
「何これ、ダサ……」
咲良ちゃんは思い切り顔を歪ませる。
「他にも、優希ちゃんに李流ちゃんもリボンが大好きなんだ。２人とも、咲良ちゃんの友達だよ」
「優希……？李流……？」
私を見上げる咲良ちゃん。
２人のことは思い出してくれるかも……！？
「……誰それ」
……ダメだったか！
「いつか２人連れてくるから。楽しみにしててね」
「別に……楽しみにするほどでもないけど」
キツいな～、咲良ちゃん……
「それより、大翔は？」
「蒼井君は部活だよ」
「……なんであなたが知ってるのよ」
「知ってるも何も……今、大抵の生徒は部活中だし。私、声楽部に所属してんだけど、今日は休み」

蒼井君の名前を出したら急にグッと不機嫌になるなぁ……
咲良ちゃんは窓の外を見た。
「……今何月？」
「１０月。もうすぐ体育祭だよ」
「そう……」
やっぱり早く退院したいのかな……？
「それじゃ、私帰るね」
通学カバンを持って、扉に向かうと……
「あっ……」
という、咲良ちゃんの声が聞こえた。
「ん？何？」
「……別に。早く帰りなさいよ」
……気のせい？
首をかしげながら、病室を後にした。

翌日。ダンス練習。
今日だけで全部仕上げなきゃならない。
……何故か私が3学年全員のダンスを見ることに……
普通3年生が見るっしょ！！！なんてブツクサ言ってたら……
「さーや、踊らなくていーからいーじゃん！ちゃんと見ててよ！」
夏姫からの一喝……スミマセンでした。（汗）
「それじゃあ、まず1年。最初のポジションについてください」
私がそう指示すると、騒ぎがピタリと止んで、1年がポジションにつき始める。
音楽が鳴り始めた。カッコいいジャズダンスだけど……バラバラだったらカッコ悪い。
ちゃんと揃えないと……
「藍住さん、ワンテンポ遅れてる」
「は、はいっ！」
「長壁さん、右手が上がってないよ」

「……はい」
「優希ちゃん、もっとダイナミックに」
「はいっ！」
気づいたところを注意しながらダンスは続く。
……次第に私の目を意識し始めたのか……みんな自分のことに集中しすぎて、周りと動きがバラバラになってしまっている。
「……あ～もーダメ。もう1回最初から……」
あ゛～～……ハタから見たら超スパルタじゃん、私……
ていうか1年生、揃ってなさすぎ……
「2、3年生は踊りにくいところを練習してください。1年生は基礎からもう一度」
2、3年生に指示すると、1年生の前に立った。
「前半部分は、まぁ一応ちゃんとできてるんで、中盤の早い動き、後半の表現力が大事な部分を練習しましょう」
私がそう言っても、1年は返事をしない……
「返事は？」
「はぁい……」
やる気失せちゃったかな、この子らは……
でもここで手加減するほど、私は甘くない。
「ココは1．2．3．4って数えながら動きを変えていきます。まず1は……」
特訓はお昼ぐらいまで続いた。

「……よし。中盤と後半OK。それじゃあ、2、3年生の後、1年生だけ前半から通しで踊ります」
「よっしゃ！休憩～～～っ！！」
李流ちゃんのハイテンションな声に続いて、1年生は休憩場所へとダッシュで行った。
「ったく……マジ疲れたし。やる気でねー」
「あいつ、ほんと粘着……ムカつく」

「2年生だからって調子乗ってるしね」
入口で金髪の1年のマセギャル（？）のぼやきが聞こえてきた。
「それ、直接言ってくんないかな？ぼやいてただけじゃ、私も指導法変えないし」
「え……」
聞こえると思ってなかったのか、マセギャルは素っ頓狂な声を出す。
「あの、その……」
「あと、やる気ないんなら帰っていーよ。他の人の迷惑だし」
ニコリと微笑むと、3人はそそくさとどこかへ行った。
……まぁ、確かに休憩少なかったし……いろいろと粘着だったかもしんないけど。
軽く反省しながら、2、3年生の指導にあたった。

2、3年生はやっぱりダンスはうまい。けど……
「動きちっさいなぁ……」
1年生と比べ、はるかに動きが小さい。
「伸ばすときは伸ばす。曲げるときは曲げる……ひとつひとつの動きを大きく。もう一度いきます」
曲を流し、私も加わって踊った。
「……やっぱ杉浦先輩、断トツで上手いなぁ……」
休憩所から戻ってきた1年生が呟いた声が聞こえてきた。

「うん……よし！30分になったら全員でやろう」
1年生だけの通しも、完璧。
そして漸く私も休める……
「さーや、お疲れぇ～！」
「夏姫。休みナシだからしんどかった……」
「さーやの1年の指導、私見てたけど先生より分かりやすかった！」
「あのギャル1年でさえちゃんと踊ってたもん！スゴいね！」
……どうやら、私は間違ってなかったようだ。

30分になったら、全員で踊った。
一体感が生まれ、若さ故漲る元気よさ……
……これぞ、水ブロックダンスの集大成……！！
「うん、OK！分かんないとこだけ各自練習してください」
私は役目をしっかり果たした……っ！
「杉浦先輩！お疲れ様です！」
優希ちゃんと李流ちゃんが私のところにやって来た。
「お疲れ」
「先輩カッコよかったぁ～！ダンスも指導も完璧ですもん！」
「完璧って……」
妙に照れて頭の後ろを掻いていると……
「あ、先輩が照れたときの仕草だぁ！」
「……はい？」
どんだけ観察されてんだ、私は……
「まぁ、とにかく！もうすぐ体育祭ですね！」
「優勝するといーなぁ、水華ブロック」
水華ブロックとは、水ブロックの名前。
風ブロックは風神。火ブロックは火龍。地ブロックは地鳴。空ブロックは空飛。森ブロックは森力。

1週間後、6つの自然がぶつかり合う……

第３４話　体育祭１～カード～

体育祭当日。空は見事に晴れ渡っていた。
「うわ～っ！超緊張するぅ～」
夏姫はずっと騒ぎっぱなし……
私はというと……ハチマキの巻き方にてこずってる。
だって髪が邪魔すぎる！！！
「ほんと、切ろっかなぁ……」
いや、でも！唯がせっかく似合うって言ってくれたし……
うん、ショートには絶対しないぞ！
「おはようございます！杉浦先輩！」
優希ちゃんと李流ちゃんがやって来た。
相変わらずリボンを頭につけている。今日はハチマキバージョン。
てか、ハチマキ巻くの上手すぎ……
「おはよ」
「水華ブロック頑張りましょうね！」
「うん。てか、１年の女子来るの遅いよね……」
ていうか、全校の女子ほとんど集まってない。
もう集合時間間近なのに……集まってるのほとんど男子じゃん。
「あ～、女子は……」
そう言い、優希ちゃんが指差した方向は本部テント前。
……うわぁ。女の子の塊だぁ……
その中心にいるのは……
「１－Ｄイケメン四天王……だったっけ？」
「はい。ハチマキ姿がよほどカッコよくて色っぽいのか……」
……そりゃあ、あの蒼井君だしシゲル他だし……（シゲオです）
ハチマキ巻いて数段カッコよくなるのは予想範囲内だけど……色っぽいって……
「イケメンはハチマキを巻くとカッコよさだけでなく色気も出るの

か……」
単純に凄いね。
「でもっ！杉浦先輩の方が男っぽくて色っぽくてカッコいいですよぉ～！！！」
「あはは……なんかありがと……」
……一度でいいから、この2人の脳がどうなっているのか見てみたい。
「ほんといいよねさーやは！身長１６０でしょ？」
緊張で騒いでいた夏姫が、私を突然羨ましがる。
「私なんて１４５だし……早く成長期来て欲しいし！！！」
「あの……成長期、もう過ぎたんじゃ……」↑李流ちゃん
「えぇっ！？だったら一生１４５！？ショック！！！」
とうとう緊張でテンションがおかしくなったのか、夏姫……

『選手のみなさん、入場門に集まってください』
アナウンスが流れる。それを合図に、女子がわらわらと入場門に集まってきた。
「もう、サイッコー！」
「大翔様マジヤバいし！！！」
「あのぶりっ子（咲良）の彼氏なんて信じれないんだけど！」
女子は並んでも騒ぐ騒ぐ……3年生までも。
おいおい、先輩でしょ！？
「あの、ウルサいです！！！並んだら静かにしてください！！！」
みんなの前に立ち、朝一番の大声で言うと……ピタリと全校女子の歓声は止む。
止む……というか、しらけた？
「……っていうことで……」
だんだん羞恥心が込み上げてきて、所定の位置に戻った。
「さーやカッコいいっ！！」
「恥ずかしかった……」

絶対嫌な方向に知名度上がっちゃったなぁ……

開会式が終わり、先生に呼び出され、お礼を言われてしまった。
「いくら先生が注意しても静かにならなかったんだ～」
先生はそう言ってたけど……それ、単に先生の声がちっさいだけなんじゃ、と思った。
席に着いて、プログラムを開く。
始めは……1年生の男女種目か。
1番目は1年生女子による二人三脚。
2番目は1年生男子による借り物リレー。
その後に1年生の学級旗紹介
3番目は1年生男女混合のリレー……
当分私たち2年生の出番はないかな。
「1番目って二人三脚だよね～？」
夏姫が私の手にあるプログラムを覗き込む。
あ、そういえば……咲良ちゃんいないんだよね？
人数足りるのかな……
「ねぇ愛ちゃん、二人三脚って人数足りるの？」
骨折してて、運動会出場を断念し席に座っている愛ちゃんという1年生に向かって声をかける。
「あ、はい。リカちゃんが熱で休んでて……1走と2走のペアが2回走るみたいです」
「そうなんだ。ありがと～」
とりあえず一安心……かな。
運動場に目を向けたと同時に、競技開始のピストルが鳴った。

――――……

最初3位からのスタートだったけど……徐々に間をつめていって、2位に。

そしてアンカーである李流ちゃん&優希ちゃんペアが物凄い速さで目の前の相手を抜かし、1位になった。
「凄いねぇ、アンカー2人……」
隣の夏姫や私も含め、李流ちゃん&優希ちゃんの驚くべき速さには、全校生徒が唖然したことだろう……
まぁ、とりあえず1年女子は1位という結果を収めた。
「次は借り物競争だね」
運動場を見ると、1年女子から男子に変わっていた。
「借り物競争の定番は“好きな人”だよね～！」
夏姫が何故かワクワクしながら体を上下させている。
いや、そりゃ漫画の世界でしょ……
なんて思ってると……
「はぁっ！？好きな人ぉっ！？しかも異性！？」
1番目の子が大声を上げていた。
てか、もう競技開始したんだ……
さて、どうする！？
「んで、どさくさに紛れて告白もしちゃう……うひゃあ～、オモロー！！！」
夏姫、足踏みまで始めちゃったよ……
一方、好きな人カードを引いちゃった子はというと……意を決したような目で、こちらへ走ってきた。
どよつく水ブロック……
「李流ちゃん、来て！！！」
おぉっ、李流ちゃん！！！
「へ？あ、うん」
優希ちゃんと喋っていて、競技を見てなかった李流ちゃんは……キョトンとしながらも、差し出されたその子の手を取った。
「わぁ、あの子の好きな人ってアンカーの子だったんだ～！！！」
目をキラキラさせて夏姫はそう言う。
運動場には、長靴やリップクリームなどを持った男子が次の走者へ

とバトンを渡しに行っていた。

１０番目、２０番目と続き……我がブロックはアンカーに。

まだ１８番目のブロックもある。

今のところ、水ブロックは3位だ。

「最後はイケメン四天王のリーダー、蒼井君ですねぇ～っ！！！何て書いてるカード引くんだろう……」

イケメン好きの河野さん（久々登場）が蒼井君をガン見している。

蒼井君はというと……カードを見て、固まっていた。

そして、辺りを見渡す。

ど、どうしたんだ！？

「あ、もしかして蒼井君……好きな人カード引いちゃったのかな！？」

河野さんが大声で言う。

周りの女子がどよめきだした。

「す、好きな人カードって？」

「借り物競争実行委員から聞いたんだけど、１０枚“好きな人”って書いてあるカードを混ぜてるらしいよ～」

じょ、情報が凄い……

「でも、蒼井君の好きな人なら……」

「杉浦先輩、ちょっと来て！」

蒼井君の好きな人なら、今海宮病院に……と言おうとした瞬間、いちばん前の席に座ってた私の手首を誰かが掴んだ。

と同時に湧き上がる歓声……

「うそぉぉぉぉぉ！！！」

「なんでぇ！？」

私の手首を引っ張る、無造作の黒髪……

……蒼井君……だよね？

ていうか、今気づいたけど……身長めっちゃ伸びてない！？

夏頃は私と同じぐらいだったのに……

「2着、水ブロック！」
蒼井君（と、沙彩）が1人抜かしたみたいで、1年男子の結果は2位。
「……あ、ごめん。いきなり掴んで」
パッと蒼井君は私の手首を離した。
……カードになんて書いてあったんだろう。
「カード、なんて書いてあったの？」
そう聞くと、蒼井君はポケットの中からカードを取り出した。
「はい」
そして、私に渡してきて……
見るのが何故か……ほんのちょっとだけ、怖かった。

第35話　体育祭2～疾走～

カードは2回折りになっている。
恐る恐るカードを開けてみると……

“尊敬する先輩”

そう書いてあった。
「尊敬する……先輩？」
「そ。ため語遣ってるけど杉浦先輩は先輩じゃん？」
まぁ、私は1年生の過程は済ませてますが……
「先輩っていえば、同性とか部活の先輩とか……」
「同性でも杉浦先輩みたいに勇猛果敢な人はいないよ」
……褒められてんのか！？
「痴漢締め上げたりケンカの中に自分1人で入って行くし……ほんと、俺も杉浦先輩みたいになりてぇ」
……ほんと、褒められてんのか！？私！
「でもさ、俺……あー、やっぱ何でもない。カードもらっていい？」
苦笑に近い笑顔を蒼井君は浮かべた。

……私が大好きだった笑顔のひとつ……

……また、頭の片隅にあった蒼井君の笑顔を思い出してしまった。

座席に戻ると……ブロックの女子全員の視線が熱かった。
「……何？」
「杉浦さ・あ・や・さぁ～ん？」
うわ……夏姫が異様にニヤついてるよ……

「蒼井君と唯、どっちにするのぉ～！？」
次の瞬間……夏姫を含む女子……推定２０人が私に向かって飛び掛ってきた。
「そ、そんなんじゃないってば……」
予想外の奇襲に、さすがの私もテンパった……
「蒼井様に告られるなんてずるい！！！」
「蒼井様に選ばれるって……さーやどんだけモテんのよぉぉぉ！！！」
……だから違うって！！！

この一部始終を、あの人が見てるって……思わなかった。

――――……

２年生の種目が終わって、ようやく一段落。
座席に帰ろうとすると……木陰で涼んでる唯を見かけた。
「唯、お疲れ」
「……沙彩」
唯の横に座る。
木陰だからか……座席にいるときよりも数倍涼しく感じる。
「騎馬戦凄かったね。男子圧勝じゃん」
「……ああ」
なんだ？テンション低いなぁ……
言葉を発するまでの間が長いぞ？
「女子も頑張ったんだけどなぁ……やっぱE組には敵わない……って感じ？」
「……」
「リレーは……１００Ｍ１５秒の五嶋が大活躍だったよね。ウサ○ン・ボルト並の……火事場の馬鹿力ってやつ」
「……」

……反応しねぇ……！
「唯も係の仕事お疲れ」
唯は体育祭係に入っている。体育祭係はクラスで１０人ぐらいで、推薦制。
私も推薦されたんだけど……めんどくさいから断った。
「……なぁ沙彩」
唯がようやく、まともな言葉を発した。
「ん？」
「１年の……」
『２年の係、高杉唯君。至急本部まで来てください』
バッドタイミングで放送が入った。
……なんでこう、タイミングが悪いんだろうね。
「……ごめん、行く」
唯はすくっと立ち上がり、走って本部まで行った。
……唯といい、蒼井君といい……何か言いかけて、もみ消す。
何なんだろう……

――――……

３年生種目の応援を終え、お弁当タイムに。
お母さんは仕事で来れないっぽいから、あらかじめ手渡されていた弁当を取りに教室へ行った。
「……え？」
窓の外を見ると、それぞれの家族がお弁当をつついている……
まさか、教室には誰もいないだろうと思ってたら、誰かいた。
（久々登場の）五十嵐伶君。
「伶君、親来てないの？」
「あ、杉浦。まさか……来るわけねーよ」
「なんで？」
「親父、ロス。母さんはフラでバカってる」

……ロス？フラ？バカ？（ロス＝ロサンゼルス　フラ＝フランス　バカ＝バカンス）
もしや、業界用語なのか……（フラとバカはｃｏｙｕｋｉ作成……）
「そーなんだ。なんか凄いね……」
「まぁ、あいつ等にとっては日常茶飯事だろうけど」
ていうか五十嵐サン……
「弁当スゴッ！！！」
近づいてみて、はじめて見た伶君の弁当に驚愕の声が出る。
「ああ……調理師が結構はりきってたからな」
伶君の弁当を覗き込み、真っ先に目に入ってきたのはキャビア、フォアグラ、トリュフ……世界三大珍味やなかですか……（何弁？）
でも、どっかで見たには……
キャビアはチョウザメの卵を塩漬けにしたもの。
フォアグラは強制肥育したガチョウの肥大した肝臓。
トリュフはセイヨウショウロ科のキノコ……
「食べる？」
「いや、ノーサンキュー」
三大珍味の実態を知ると、ちょっと食べたくなくなる……
やっぱお母さんの料理がいちばんだ。
早速弁当を取り出し、フタを開ける。
私の大好きなスパゲティにハンバーグに……（お子様かい）
「よっしゃ」
小さく軽くガッツポーズした。
「何が“よっしゃ”？」
「あ、いやなんでもない……」
バレてないつもりだったんだけど……伶君に聞かれ、言葉を濁した。
「なんか杉浦って……愛美に似てる？」
「え？こんな冷めた奴だったの？」
「いや……よく俺に付き纏って、キャーキャーうるさくてすぐ泣く。あと、男嫌い」

……どこが似てるんですかねぇ。
「杉浦はどこか冷めてるけど、よくリーダーに抜擢されるし……愛美とは正反対って感じだけど……やっぱ雰囲気が似てるんだよな」
……褒められてんのか!?（本日3度目）
「つまり、外見が似てるってこと？」
「まぁそーゆーこと」
だったら最初からそう言わんかいっ！
というツッコミはさて置き……さぁ、弁当弁当。

弁当を食べ終わって、片付けた。
「そういえばさ、借り物競争の時借りられてたよな？あの１－Ｄアイドル四天王のリーダーの……赤井大翔（アカイタイショウ）だったっけ？」
「蒼井大翔だけど……赤井じゃないし、大翔っていう漢字の読み方違うし……」
「そう、そいつ。女子の悲鳴が凄かったよな。実行委員も必死に取り押さえてた」
す、すさまじい……！
蒼井君のスピードに合わせるために無我夢中で走ってたから実行委員が取り押さえてるとこ見てなかったけど……
「てか、蒼井が拾ったカード……１０枚目の好きな人カードだったんだろ？」
「え？」
「唯のことはどーすんだよ」
「ちょ……」
「蒼井にはちゃんと断んなきゃヤベェぞ？」
「いや、違うって！」
「……は？だってあれ……」
キョトンとした顔で何か言い続けようとしてたけど……誤解を解くために力説を始める私。
「蒼井君が引いたカードは“尊敬する先輩”で、“好きな人”じゃ

ないの！みんな好きな人カードだって思い込んでて、私の説は全然聞いてもらわなかったんだけど……」
「分かった分かった。落ち着け杉浦」
1回深呼吸する。
「とにかく、まず俺の誤解は解けた。よく分かった」
思わず笑みが零れる私。
「だが……全校生徒は蒼井が好きな人を連れ出したって思ってるぞ？」
「それは承知済み。でもさ、蒼井君が好きなのは咲良ちゃんだよ？だって好きな人＝恋人だし」
「蒼井の好きな奴は俺は全く知らねぇけど……唯、見てたぞ？」
……え？
唯、見てたって……？
「だって唯、係だったし……」
「一時休憩で席にいたよ」

一気にサーッと何かが私の中で流れた。

「彼氏の存在にも気づかないとか……」
「……伶君、唯どこ？」
「は？……あ～、もう座席なんじゃない？」
私の脳裏に浮かぶのは……ただひとつ。

行かなきゃ！！！

自分でも信じれないスピードで教室を飛び出した。

“「彼氏＝好きな人になってるぅ？」”

……なってるに、決まってんじゃん。

私は……受け止めてくれた、唯が好きだ。

第３６話　体育祭３～仕草～

「あれ……？」
座席にダッシュで向かったけど……唯の姿はない。
「どーしたのさーや！汗ヤバいよ？」
夏姫やクラスメイトが私の周りに集まる。
私は必死に辺りを見回したけど……やっぱりいない。
「唯……唯見てない！？」
「あ、そーいえば見てないなぁ……」
「まだ弁当じゃない？」
いや、もう午後の部開始１０分前だし……座席についててもいいはずの時間。
「杉浦ぁ！唯ならもう帰ったぞ！！なんか体調崩したみたいでさぁ！」
クラスメイトの男子が大声でそう言った。
え……帰った？
「あ、そーなんだ……ありがと。教えてくれて」
間抜けた返事をして、よろよろした足取りで座席に着いた。
そっかぁ。帰ったんだ唯。
帰っ……
……ただ事じゃないかもしんない。
だって、１年生からずっと風邪とかインフルエンザとかかかったことない唯が早退！？
皆勤賞貰ってた唯が早退！？１２月まで半袖だった唯が早退！？
……やっぱ聞かれてたのかも……
「誤解なのにぃ……」
溜息とともに、小さく言葉がもれる。
『続いては応援合戦です。地ブロックは準備を……』
時刻は１３時。私たち水ブロックの応援は４番目だ。

……一時このことは忘れて、配点が高い応援合戦とダンス……しっかりやらなければ。

――――……

応援合戦もうまくまとまり、ダンスもなんとか成功。
あとは部活対抗リレーとブロック対抗リレー。なんか出身中学別リレーもあるらしい。
リレーが根本的に大嫌いな私は、３つのリレーに出場願いが出たけど断った。
クラス全員リレーは流石に出たけど……
大体、リレーは人を至近距離で抜かすのがめんどくさい。
徒競走とかだったら、最初とばせば右に出る者はナシという状況作れるからいいけどね。（何気自慢）

最初は部活対抗リレー。声楽部は3年生がめちゃくちゃ多いから、出るのは全員3年。
「キャーッ！！！蒼井様～っ！！！」
女子の歓声……見なくたって分かるけど、バスケ部は蒼井君が出るのかな。
「へぇ、蒼井君1年生なのにスゴいねぇ」
「蒼井君は１００メートルを大体１０秒で走れる超俊足なんだって！！んで、たまに9秒出るらしいよ！」
夏姫と河野さんの会話を盗み聞き……
ひゃ、１００メートル１０秒！？
そりゃあ、借り物競争の佳境で抜かすわけだ……それについてった私も凄い。
「さーや～っ！蒼井君１００メートル１０秒だってさ！」
にやにやしながら夏姫が言う。
「へぇ凄いねぇ。速いねぇ……あ、小平先輩頑張ってください！！

！」

適当にスルーし、目の前を通過した部長の小平（コダイラ）先輩に声援を送った。

小平先輩は陽気な性格だからか……私に向かって手を振ったので、

私も振り返した。

――――……

女子の部と男子の部が終わった。

女子の１着は陸上部。まぁ当然かな。

２着はバスケ部。走りこんでるからね……

３着はなんと、声楽部。文化部でＴＯＰ３入りは史上初みたい。

男子の１着はバスケ部。アンカーの蒼井君で３位から挽回した……

凄すぎる。

女子の歓声もハンパじゃなかった。

２着は陸上部。３着はサッカー部という結果だった。

「す、凄かったなぁ蒼井君……」

冷やかす心も忘れてる夏姫は、口をあんぐりあけている。

……歓声上げる女子たち以外は皆、呆然としていた。

「平成のボ○ト……？」

「いや、ボ○トも平成で金メダル獲ったでしょ……」

「すげぇ……ハンパじゃねぇなぁ」

「転入生かなんかだっけ……あ、遅れて入学したんだっけ？蒼井大翔……」

男子も蒼井君に興味を持つようになったという……

「うわ～すげぇすげぇ！あの１年のバスケ部すげぇ！！マジ俺惚れるかも！」

同クラの柏原は１人騒ぎ……

「蒼井大翔……」

同クラの変人吉峰（男）は恍惚の表情を浮かべ……

グランドは次の種目、ブロック対抗リレーに移っていた。

男女混合のこのリレー。
1着は我等水ブロック。やはり蒼井君の活躍で。
2着は風ブロック。3着は空ブロック。

次は出身中学別リレー。
1着は私の出身中学校の朔良中。略して朔中(サクチュウ)。やっぱり蒼井君が大活躍。
2着は海宮中学校。3着は柊中学校……
って……全部のリレー、蒼井君出場してるじゃん！
ファンの女子たちは喜ぶだろうなぁ……

「蒼井様！カッコよかったです！」
「本当に足が速いんですね！」
リレーが終わり、得点係が集計をしている。
私たちは10分間の休憩に入っていて……蒼井君、予想通りのモテっぷり。
なんか同じブロックで同じテントにいるのに、むっちゃ遠い……
って、何考えてんだ私。
「さーやぁ、行かなくていーのぉ？盗られちゃうよぉ？あの3年生の先輩とか！」
と言いながら夏姫がやって来て、3年生の中でもとびきりで美人な華城咲(カジョウサキ)……先輩を指差す。
てか、華城咲先輩で合ってたっけ……そもそもこの3文字で名字？
咲(サキ)が名前で華城(カジョウ)が名字？
う〜ん、これをうろ覚えっていうのかな。
「盗られるって……蒼井君には咲良ちゃんがいるんだよ？」
「またまたぁ〜！さーや告られたんでしょぉ〜？」
「告られるわけないでしょ。全く、みんな誤解ばっかり……」
……もうここで弁解するしかない。

「あのね、好きな人カードは１０枚あって……１０枚目はたぶん地ブロックの男子が引いてたよ。蒼井君が引いたカードは“尊敬する先輩”。好きな人でもなんでもないの。分かった？」

「……なぁんだぁ。つまんなぁい！」

……散々騒いどってそれかいっ！

まぁ、私が逆の立場だったら落胆はしてたかな……

「だったら唯に悪いことしちゃったかなぁ～……」

「え？唯に？」

「えっと……」

夏姫が何か言おうとした瞬間……

「さぁぁぁやぁぁぁぁぁぁっっっっっ！！！」

得体の知れぬものが前から突進してきて私に抱きついて来た！

こ、香水臭っっっ！！

って……

「桃花！？」

「ダンス凄かったぁぁぁ！！！違うブロックだけど見惚れちゃったぁぁぁ！！！」

ほ、褒めてるんだろうけど……臭いっ！

「ごめん桃花。ちょっと離れて……」

「はぁいっ！」

そう言い、離れた桃花は……真っ黒！！！

地黒に加え、今日のガンガンな紫外線で真っ黒！！！

「どう？イケてっしょぉ～？」

なんて、セクシーポーズをとる桃花……

いや、誰もイケてるとは思わない！単刀直入に黒でしょ！！！

……というツッコミは、ウキウキな桃花にはできない……

「あ、うん……」

「おっ！さーやの横の子（夏姫）、お初じゃなぁ～い？私桃花！ヨロシコ～っ！」

いや、１年の時同じクラスだったっしょアンタ……

夏姫も苦笑いだし……
『生徒はグラウンド中央に集まってください』
「あ～っ！もう帰んなきゃなんないしぃ！じゃあねぇ！」
シタタッと去っていく桃花。
……あ、そういえばさっき夏姫が……
「夏姫、さっきなんだって？」
「……なんでもなぁい！早く行こっ！」
……なんか様子がおかしいなぁ……
そう思いながらも、グランド中央に行った。

涙と歓声と笑い声……さまざまな声に包まれ、体育祭は幕を閉じた。

――――……

「へぇ。優勝……ねぇ」
海宮病院に、咲良ちゃんのお見舞いに行った。
もうすぐ退院らしく、咲良ちゃんは点滴も外れ服装も外出着になっていて……けれど、足のギブスがまだ痛々しさを物語っていた。
同じブロックだから、一応結果報告をした。
応援の部で3位、女子のダンスで1位、男子の組体操で3位。
そして午前中の競技の部総合で1位だってこと。
あと、蒼井君がＭＶＰを取ったことも。
「……なんであなたが大翔のＭＶＰのこと知ってんの？」
私が蒼井君の名を出すと、決まって咲良ちゃんは不機嫌になる。
「咲良ちゃんさぁ、もうすぐ退院だから一応忠告してるんだけど……たぶん今、海宮高校じゃあ、どこでも蒼井君の名が挙がってるよ？いちいちムカついてたら可愛い顔が台無……」
「余計なお世話よ」
私は苦笑いを浮かべて、首の後ろを掻いた。
「クラスで大翔の名が挙がってたら、片っ端からとっちめるわ」

そう言い、咲良ちゃんは顔を上げる。
……そして何故か、ハッとした表情になっていた。
必要外の時はいつも閉ざされていた口が半開きになる。
「その仕草……！」
「え？あ～……癖だって最初、咲良ちゃんと優希ちゃんと李流ちゃんが言ってたっけ。補習の時」
私はサッと手を下ろした。
「それじゃあ、もうすぐ蒼井君来ると思うから帰るね」
荷物を持って、出口に向かう。
……あれ？いつもなら……「なんであなたが大翔の来る時間知ってんのよ」ぐらい言うのに……
私の口から蒼井君という単語が出たにも関わらず、咲良ちゃんはさっきの表情のまま。
「咲良ちゃん？」
私は咲良ちゃんの目の前に行き、顔を覗き込む。
次の瞬間……

「杉浦先輩……」

咲良ちゃんは、私と、しっかり目を合わせた。

第３７話　咲良（前書き）

今回の話、途中でナレーションが変わります。

第37話　咲良

「は～。や～っと解放された……」
タイミングを見計らったように、蒼井君が病室に入ってきた。
「あ、大翔。お疲れ！」
「ああ。江藤（体育教師）にコキ使われて……って……」
蒼井君は、持っていたカバンを落とす。
なんせ……“いつもの”咲良ちゃんだったから。
そして、いつもは距離を置いている私が、咲良ちゃんの間近にいるから……
「さっき杉浦先輩から聞いたんだ！スゴいね大翔、俊足は健在的な？」
流暢に話す咲良ちゃん。
蒼井君は私を見た。私は……「記憶が戻った」と言わんばかりの笑顔で頷いた。
「そっか……」
でも……蒼井君は、曖昧な微妙な表情。
……そりゃあ、記憶が戻ったといっても私のこと思い出しただけのことだし……別に蒼井君には影響ないけど。
でも、全体的に咲良ちゃんの雰囲気は、補習で初対面したあの時に戻っていた。
……あ、そうだ！
「咲良ちゃん、この子たち分かる？」
ケータイを取り出し、前に優希ちゃんと李流ちゃんとで撮った写メを見せる。
「優希と李流でしょ？ですよね？」
「じゃ、え～っと……この子たちは？」
何故か和解してしまったギャル3人組と撮った写メを見せた。
「ミキとカズナとユリカ！」

「あとは～……」
1年生と撮った写メ全部見せたところ……全員の名前を、咲良ちゃんは思い出していた。

咲良ちゃんは、記憶を、完全に取り戻した。
その事実が……私の心を晴れにさせる。

そんな私とは対照的に……蒼井君の表情は、あまり晴れていない。
言い換えるとしたら、曇天。
「どしたの～大翔！元気ないよ？」
咲良ちゃんが蒼井君の顔を覗き込む。
「……んなことねーよ」
そう言い、浮かべた蒼井君の微笑みは……多分、作り物。
どうしたんだろう……と思っていたら、手に持ってたケータイが震えた。
ディスプレイには、伶君の2文字
「伶君からだ。珍しいなぁ……って、ヤバ。ケータイ切ってなかった……」
って、今更気づいてどーする私。写メ見せてるときに気づけ！私！
あ～……ヤバいことしたなぁ……（※病院ではケータイの電源を切りましょう）
「ちょっと外で話してくんね」
ケータイを持って、一目散に外へと向かった。

――――……

「ね～大翔。先輩が言ってた伶君って誰？」
「五十嵐伶先輩っていう、杉浦先輩の彼氏……唯先輩の友達だよ」
表情を曇らせたまま、大翔は言う。
同じように、咲良も表情を暗ませた。

「大翔……忘れれない？」
「え？」
「杉浦先輩の……こと」
咲良は大翔を見上げる。
大翔は咲良と目線を合わせるように、ベッドの付近にある小さいパイプイスに腰を下ろした。
「そりゃあ……私も悪いことしたって思ってるよ。大翔の記憶、なくしちゃって……」
「だから、それもういいって」
「……よくないよ」
「だって記憶なくしたから、女遊び癖もなくなったんだろ？俺」
思い浮かべることができない、中学生の頃の姿を自分の中で作り上げながら、自分のことを聞く大翔。
大翔が想像した“女遊びをしている大翔”は……冷酷で、残酷。人の気持ちさえ考えない最悪人間。
だが……咲良が思い起こした中学時代の大翔は、口調も何もかも冷たいけどどこか暖かくて優しくて。
「そりゃそう……だね」
寂しそうに咲良は笑った。
「大翔……相変わらず私のこと鬱陶しく思ってて。んで、補習行った途端、晴々した顔つきで……それが後々杉浦先輩って知って……ビックリしたよ。私の憧れの先輩なんだもん。綺麗でカッコよくて、美人で、文化部だけど運動神経もよくて……」
「……一目惚れだった」

初夏。出席日数が足りなかったおかげで補習行きとなった大翔。
憂鬱な気分で席に座り、配られたのは意味が分からない単語ばかりのプリント。
持ち前の知識で少し解いたが……どうしても分からない問題があり、横の先輩……沙彩を呼んだ。

……こちらを向いた、綺麗な沙彩の顔。それを覗き込みながら、いきなり高鳴りし始めた心臓に困惑しながらも質問する、端整な顔立ちの大翔。
両者ともが、出会い、大翔が恋に落ちた、沙彩が大翔の顔立ちのよさに見惚れた一瞬だった。

「んで、大翔と先輩がくっつかないように色々働きかけたんだっけ。夏祭りのとき先輩呼び出して「大翔に近づくな」って……でもある日いきなり、大翔言ったよね。先輩に彼氏できたって」
「……名前言うのも嫌だったっけな」
自分の嫉妬深さを省みて、大翔は苦笑する。
「そんで私が……「先輩のこと忘れさせてあげる」って、大翔が弱ってるところにつけこんで……見事正式な彼女の座をゲットっと」
「弱ってるって……」
「それが公に知られてからは……凄かったなぁ。教科書隠されたり机に落書きされたり……要するにいじめ？」
「……ごめん。気づいてやれなくて」
「大翔と一緒にいれるんだったら、そんぐらいへっちゃらだった。けど……3年生の先輩に呼び出されて、のこのこついてったら……この有様」
咲良はギブスをパンパンと軽く叩いた。
「……そうだ。意識失う寸前……誰かに担がれたような記憶があるんだけど……大翔、誰か知らない？」
「……先輩だよ。杉浦先輩」
「えっ、うそ！お礼言ったっけ私！」
「言ってない……てか、ずっとツンケンしてた」
「うそ～～～っ！！！どーりで先輩も驚くはず……！」（※咲良にはツンケンしてた記憶はない）
一通り思い出したかな……補習からのこと。
大翔はそう考え、咲良をしっかり見た。

「咲良」
「ん？何？」
「実は……」
……なかなか大翔は、
別れよう
という言葉が出てこない。
こんなにも思ってくれている咲良の悲しむ表情を思い浮かべると、
良心が反論してくる。
このまま付き合っちゃえ、事故以前のように……と。
「……ふふっ。まだ言えないんだ？」
「え？」
「別れたいんでしょ？私と」
脳裏に浮かんでいた言葉をサラッと言われ、大翔は目を見開く。
「そりゃあ……私は別れたくないよ。大翔のこと、大好きだし。どんなに女子に疎まれても耐えてける。けど……大翔はそうじゃないんだよね」
今まで、思っていたこと。
ずっと、思っていたこと。
中学のときから、思っていたこと。
改めて言葉にする咲良の心は震える。
「……だっていつまで経っても大翔の目は、先輩に行ってるもん。
中学の時は……なんかを求めるみたいに、宙にあった」
愛を知らない、少年。
そんな少年が初めて恋をした。
１６歳という……遅い初恋。
その相手は……自分じゃない。他の人。

「好きな人には、自分だけ見てもらわなきゃ……嫌。でも大翔にいくらそう頼んでも……やっぱり、見てくれなかった」
大翔は目を伏せる。
そして閉じ、今までの自分を思い起こした。

反対側の校舎で、廊下を歩いている沙彩をいつまでも目で追っている自分。
唯と楽しそうにじゃれあっている沙彩を見て、心を痛める自分。
沙彩が目の前に居るときは……唯の姿も同じように出てきて、それに嫉妬する自分。
咲良を見なかった自分。
沙彩しか見えなかった自分。

「私、幼い頃からずっと欲しいものは手に入ってた。お金の力で……おもちゃも化粧品も……彼氏も」
咲良は今まで、金で男を買っていた。
男は金で買えるもの。そんな方程式が彼女の中で成り立っていて……そんな中、大翔に出会い、自ら恋に落ち。
来るもの拒まずな大翔は、咲良からの“お金なし”の告白を、何も考えずすんなりと受け入れて。
「でも……大翔は違った。大翔の心は、私の権力じゃ動かせられなかった……んで、いつの間にか、“私が”大翔を欲しがってた」
付き合ってるけれど……片想い。
そんな切ない状況の中で、やっとその方程式は間違っていると咲良は認識した。

「本当に欲しいものは、手に入んないのかな～……」

背伸びをする咲良の頬には……涙が伝っていた。

「……先輩には、唯先輩がいる。けど……大翔はそんなこと関係ないよね」

大翔は顔を上げて、しっかりと頷く。

「それ、ちゃんと杉浦先輩に伝えて？結果がよくても悪くても……大翔が幸せになれること、願ってる」

自分が大翔から離れることで、大翔の重荷が外れる。

ここ何週間かの入院生活で……かすかに、咲良が考えていたこと。

なぜ重荷が外れるかは、思い出せなかった。ただ、大翔に元気がないだけからか……

けれど、今では、沙彩という大翔にとって大切な存在がいるためだと思っていた。

「……大好きだよ大翔。別れよ」

涙が伝う頬。それを一生懸命緩ませ、咲良は微笑む。

「……ごめんな咲良」

「もうごめんなはナシ！……けど、最後に1個だけワガママ言っていい？」

「……何？」

口角をあげ、聞く大翔。

「最後に1回……抱き締めて」

大翔は立ち上がると……涙を流す、別れるべき人を優しく抱き締めた。

壊れない程度に、強く。

――――……

「……お墓参り？」

『そ。前に言ってた、死んだ元カノの』

「えと……愛美さん、だっけ？」
『ん。愛美』
耳から聞こえた声は……墓参りに着いてきてくれ、という伶君の声。
「いいけど……2人で？」
『2人で』
サラッという伶君の言葉に、膝につけていた肘がガクッと外れる。
「2人でって……伶君一応男だし……それに唯が……」
『別に何もやましいことする気ねーし。唯にも承諾取ってる』
てか一応ってなんだよ、と伶君は付け加えた。
『とりあえず、今度の月曜の昼2時。場所は海宮市駅……振り替え休日だったし、多分』
「いや多分じゃなくそうだって……」
『んじゃ』
そう言い、一方的に電話が切れた。
伶君とメアドとケー番交換したきっかけは……些細なこと。
前、唯と私と伶君とで海宮市で遊ぶとき……伶君、集合場所どこか知らなかったらしく。
唯はケータイ持って来てないし、私は伶君のケー番とメアド知らないし……で、散々捜索した末、私の住む駅に何故か居た、と。
唯にも承諾を取り、もしもの時に役立つようにその2つを交換した。
……まぁ、過去に1回宿題のどこをやるかを聞かれただけだけど。

電源を切ったことを確認して病院に入り、咲良ちゃんの病室へと向かう。
……あ。さっき急いでて……ドア開けっ放し。
閉めよーぜぃ……なんて思いながら、病室に入ろうとした。

私の目に飛び込んできたのは……

抱き合う、2人の姿。

私の心臓が、意味もないのにドクンと波打った。

……なんで？

第３８話　気丈さ

私は咄嗟に隠れた。
激しく動悸を打つ心臓……それをつぶれるくらい、ギュッと抑える。
……あ。この感じ、何かに似ている……
「にしても先輩遅いよね～！」
病室の中から、咲良ちゃんの元気な声が聞こえてきた。
「……そーだな」
若干元気なさそうな蒼井君の声。
……行くなら今だ！
「ごめんごめん！ちょっと時間割聞かれたもんで……」
空元気で病室に入る。
「いきなりケータイなって焦ったよ……ま、電源切り忘れた私が悪いんだけどさ？」
窓辺においておいたカバンを掴み上げ、次の嘘を考える。
……時間差を作んなきゃいけないから……
「しかも、立て続けに夏姫から打ち上げメールが来てさ～。そーゆーことで帰るね」
「あ、あの、先輩……」
「ん？」
「あ、なんでもないです……」
咲良ちゃんの表情が少し曇る。
お構いなしに病室を後にした。

……まだドキドキしている。
２人の抱き合う姿がフラッシュバックしてきて……
……もしかして私……って、そりゃナイナイ。
意気込みのため、頬を叩いた。
もう、過去のことだ。

すっぱり忘れて前に進んだ私に過去は必要ない。
必要ない……よね？
さっき座っていたベンチに、見知った人影を見つけた。
……唯だ。
「ゆーい！」
なにやらケータイをいじっている模様……
私の大声に気づき、顔を上げた。
「……沙彩」
「どしたの？病院前のベンチなんかに……あ、気分悪くて早退したんだよね？」
「別に、俺じゃないよ」
寂しそうに微笑む唯。そして目線をケータイに戻した。
「……あのさ、1年生の借り物競争のとき……」
「その話、もーいーよ」
……ズキッときた。
やっぱり……誤解してる。
「ご、誤解だよ……蒼井君が引いたのは、好きな人っていうカードじゃなくて……」
無視を貫き通す唯。
……ダメだ。全く通じない。
「唯ーっ！」
病院の入口から、1人の女の人がこちらに駆け寄ってくる。
……誰？少なくとも、うちの高校の人じゃない。
「……姉貴」
ぼそっと呟いた唯の一言……って、唯のお姉さん！？
「唯～、その隣の子、もしかして彼女～？」
「そーだよ」
「や～ん超可愛いっ！！！」

そしていきなり抱き締めるその人……く、苦しい……
「姉貴やめろ」
「アハハごめんごめん！私、コイツの姉の唯華（ユイカ）！二十歳だよ」
「あ、私、杉浦沙彩っていいます」
「沙彩ちゃんかぁ～！可愛い名前っ！ヨロシクね！」
「よ、よろしくお願いします……」
いきなり手を握られ、激しく上下……テンションが相当高い。
「……姉貴。俺帰りてーんだけど」
「あらそ～お？私もうちょっと沙彩ちゃんとお話したいから先1人で帰ってちょーだい！」
え、マジで！？
「ちょ、ゆ……」
「んじゃ」
……マジですか……完璧私、避けられてる……？
……気が滅入るなぁ。
「唯ね、今日体育祭なのに早退して……ず～っとあのテンションの低さなのよぉ。沙彩ちゃん、何あったか知らない？」
「さ、さぁ……」
あ～……やっぱ私、嘘つくのヘタかも。
さっきの病室の時だって……完璧2人に気づかれたかもしれないし。
「あ～やっぱあったんだ！何何？ケンカでもしたの？」
「……はい」
……やっぱバレてしまった。
「私でよかったら相談乗るよ？」
「実は……」

私は借り物競争や蒼井君のことを一通り話した。
「……そりゃあ、その蒼井っていう子が悪いわね。尊敬する先輩、で女の子の沙彩ちゃん選んじゃったら……誰でも『蒼井っていう子の好きな人＝沙彩ちゃん』になるよね～」

「そうなんです。席帰った途端冷やかされ……でも蒼井君に尊敬する先輩として選ばれたのは嬉しいんですよ」
「なんで～？先輩なら部活の先輩とか色々いるじゃない。なんであえて女の子である沙彩ちゃんを……」
「蒼井君、事故でずっと入院してたんです。１学期中……バスケ部に入部したみたいなんですけど、いきなりメンバーと一緒に練習するわけにもいかなくて。１人で基礎体力作りをしてるみたいだし、練習の終了時刻も他のメンバーよりも少し早くて……」
入院していて、体力がほぼもたないだろう、という判断でバスケ顧問の先生は蒼井君だけ早く帰している。
……クラスの男子が話していたのを盗み聞きして得た情報だから本当かどうか分かんないけど。
「……そっかぁ。蒼井君にとって、先輩として慕える人はまだ沙彩ちゃんしかいないってことかぁ」
「……ですね」

“「同性でも杉浦先輩みたいに勇猛果敢な人はいないよ」”
“「痴漢締め上げたりケンカの中に自分１人で入って行くし……ほんと、俺も杉浦先輩みたいになりてぇ」”

蒼井君が言った言葉には……尊敬の意が、いっぱい入ってた。
「唯もそのうち気づくわよ。だから、沙彩ちゃんは唯をいっぱい愛してね？」
「あ、愛してって……」
「私ね、妊娠してるんだ。４ヶ月目」
そう言って、お腹をさする唯華さん。
って……
「は、二十歳ですよね！？」
「うん。てか、もう結婚してるよ」
二十歳で結婚て……学生時代から付き合ってたお父さんとお父さん

でも結婚したのは２５歳ぐらいだったのに……

「今、私の夫ね、私の家にいるの。うちの両親、ほとんど家にいなくて……唯、１人じゃ寂しいだろうなって。でも、私の夫と唯、イマイチ馬が合わなくて……」

……そういえば。唯から両親のこと聞いたことないなぁ。

「気丈に振舞ってる感じだけど、ほんとはきっと、すっごい寂しいと思う。だから……沙彩ちゃん、ずっと傍にいてあげてね？」

気丈に……？

入学してから、初めて唯の会ったあの時……確かに、妙にうるさかった。

きっといっつもテンション高いだろうなって思った。

でも……唯が私に告白してきて、付き合い始めて……口数が少なくなって……

大人っぽくなったね、って私も夏姫も、みんながそう思ってたけど……

……実は、そうじゃないのかもしれない。

私が原因で……気丈さを振舞うことに疲れて、寂しさを全面に出すようになったのかもしれない。

「……」

返事が、出来なかった。

私が……傍にいても、いいのかな……？

そう思う私は、まだ……何かが、残ってるのかもしれない。

第３９話　いちばん、好きな人

“「俺じゃ、蒼井の代わりになれない？」”

その言葉がきっかけで、私に唯という彼氏ができた。

以前は……恋人とか彼氏とか……

すぐに引き裂かれるもろい仲。

やらしいことだけする仲。

そう思ってたけど……１回も、そんなこと思わなかった。

“どうせすぐ別れるだろう”なんて、１回も思わなかった。

そんな私は……油断してたのかな。

現在と過去。いつもと変わらない私と……

付き合い始めて、さり気ない優しさとかは相変わらずだけど、極端に口数が少なくなった唯。

いつのまにか……壁が、できちゃってたのかな。

目には見えないけれど、途轍もなく分厚い壁が――――……

月曜日。今日は伶君の“彼女”の愛美さんのお墓参り。

……だったが……

「……おっそ」

「ごめんごめん……すっかり寝過ごしちゃった」

この休みの間……夜は眠れず、朝になると眠気がくる……という、逆転生活が定着してしまった。

今２時３０分……３０分の遅刻。

ああ、我ながら情けない……
「まぁとりあえず行こ」
「うん」
墓地までの道は分かんないから、私が伶君についていくという形で海宮市駅から離れた。

海宮病院の近くまで来て、崖を登って……
「ここが、海宮崖」
「うっわぁ……」
やって来たのは、見晴らしのいい場所……いや、正確には墓地だけど。
崖の上にあって、崖から落ちないよう柵ができていて……
その柵に手をかけ、辺りを見る。
一面の……
「海宮海（カイグウカイ）……」
海宮市の名所ともなっている、めっちゃ綺麗な海宮海。
海の近くに墓地があるから、「幽霊が出るかも」と、あんまり観光客は来ない……という話を、どっかで聞いたことある。
その墓地に、愛美さんのお墓があったんだ……
「杉浦って朔良中だよな。海宮海来たことねーの？」
「来たことはあるけど……砂浜で遊んだぐらいかな。こんな高いとこから見下ろした経験ない……」
「ふーん」
海宮海を十分吟味して……
「さてと……愛美さんのお墓参りだよね」
「そーそー。本題それ」
崖の上のもうちょっと奥にある、墓地へと足を進めた。

「ここが、愛美の墓」
ひとつの、小さなお墓。『早川家之墓』と彫られている。

もうずっと掃除されてないらしく……葉っぱがあちこちに散らばっている。
「……掃除、してあげてもいーかな？」
「あ？ああ……」
すぐそこにあったホウキを取って、お墓周りの葉っぱを集める。
「愛美さんて……もしかして、身寄りがいない……とか？」
「両親が離婚してて、母方の祖母の家に引き取られた。愛美の母さんは愛美が中１のとき交通事故死……愛美の祖母も、俺等が高１のとき癌で他界してる」
そんな事実を聞き、１回手を止めた。
「なんか……ずっと寂しかったのかな、愛美さん」
「なんで？」
「オーラが……凄く寂しく見える」
「お前は霊媒師か。……俺がいたから、寂しくねーよ」
「すっごい自信だね、伶君」
掃除を再開させた。

一通り掃除を済ませ、地べたに座り込む。
「疲れるね～……ずっと腰曲げてたから、腰が痛いのなんの……」
「お前婆かよ」
「だってもう１７になるんだよ？」
いや、１７でも若いっちゃ若いか……
「……これが愛美」
そう言い、伶君がケータイを見せる。
待ち受け画面らしく、可愛い女の子が満面の笑みでピースしていた。
まさしく、愛らしく、美しい……
「可愛い子……名前負けとか全然してないね。むしろ名前勝ち？」
「余裕勝ちって感じ？」
何故か勝ち誇ったような表情の伶君。
……こんな伶君初めて見たなぁ。

「ねぇ、線香持ってきたけど立てていい？」
「いーけど……よく用意できたなぁ、線香って」
「お母さんが線香マニアでよく集めてんの」
お墓参りのことを話したら、快く貸してくれた線香。
煙が少なく、それでいて花の香り……
それの先端に火をつけ、丸い火種を息を吹きかけ消す。
1本の煙が出てきて、先端が赤く染まった。
それを立てて、手を合わせる。
「……初めまして、愛美さん。私、あなたの彼氏の伶君と同じクラスの杉浦沙彩」
目を開けて、お墓に語りかけた。
「愛美さんが生きてたら、同級生だね。じかに会ってみたかったなぁ……」
バカみたいだけど、もしかしたら届いてるかもしれない。
「あ、私、伶君の彼女ってことは全然ないから！私には、高杉唯っていう……」
思わず、口を噤む。
なんか……やるせない想いが、込み上げてきたから。
「……と、とにかく！伶君の彼女はいつまでたっても愛美さんだから……それだけは信じてて」
そう言い切った途端……さっきまで吹いていた風が、より一層強くなった気がした。
「届いたかも……な」
そんな伶君の言葉に、私は大きく頷いた。

崖の上に戻り、私と伶君は柵にもたれかかる。
「俺さ、いろいろ唯から相談受けた」
「……え？いろいろって？」
「お前と唯が付き合い始めた頃から頻繁に」
唯が……相談？

一体何の……
「「沙彩が想ってる人を越えるにはどうしたらいいか」とか……主にそれかな」
「私が想ってる人って……」
……瞬時に、あの笑顔が浮かんだ。
「この頃とか、特に。杉浦、あの西院って女子の見舞いにほぼ毎日行ってただろ？当然そこには西院の彼氏……蒼井ってやつがいるわけで……」
バ、バレてる……
私、蒼井君のこと伶君に言った覚えない……けどなぁ。
「それが物凄く不安だったらしいよ唯は。……まぁそれでもお前はちゃんと唯だけ見てると思うし、問題ないと思ったんだけど……あくまで客観的だけどな」
……そうだよ。ちょっと時間はかかったけど……今はちゃんと、唯だけを見れてる。
他の男子のことは、考えたことがあまりない……

……あれ？だったら……
私は、唯のことを考えていた？

「問題はお前がどーかだよ。ちゃんと唯のこと見てる？」
「……って思うけど……」
「じゃーさ、お前があの蒼井ってやつを好きになったときの自分と唯を見ている自分を重ねてみ？……なんか違わねぇ？」

蒼井君を好きだった自分……

いつもいつも蒼井君のことばっかり考えてた。
夜眠るときはあの笑顔が頭に浮かんで……
忘れなきゃ、と思う夜はいっぱい涙を流した。

唯を見ている自分……

唯の彼女でありながら、最初は蒼井君のことばかり見てた。
唯のさり気ない優しさに罪悪感を覚えた。
唯の優しさに甘えていた。

……そこに、私の気持ちの形跡はある？
ただ、唯のことばかり見てて……その目には、気持ちなんてあったのかな。

「……俺さ、愛美がいなくなって……ほとんど夜は寝れねーし、女遊びばっかしてたし。相当荒れてた。でもな……よく考えたら、本当に好きな人がいなくなるまで、彼氏でいられたってことだって気づいて……それってすっごい奇跡じゃんって」
空を見上げる伶君。
……今、脳裏に何が浮かんでいるだろうか。

愛美さんと過ごした時間。
愛美さんのひだまりみたいな笑顔。
愛美さんと見上げた空。

私は……いつか、この空を見上げたとき……
誰を脳裏に浮かべたいんだろう。

「どうとも思ってない人とか、好きでもない人と自分に嘘ついて過ごしている時間ほど、無駄なモンはねーよ」
その呟きには、何かがこもっていた。
「……杉浦。好きでもない人に好きじゃないって伝えんのも、優しさだと思う」

伶君はまっすぐ、私を見た。

「いちばん、好きな人と一緒になれ」

その瞬間……私の中で、何かが変わった。

頬には、涙が伝ったんだ。

私は……“受け止めてくれた”唯が好きなんだ。

第４０話　どっち

「ねぇ、愛美さんってどんな人？」
「……まぁ、一言で言うと可愛い奴」
涙が収まって、愛美さんについて聞くと……返ってきたのは、ノロケ？
「なるほどねぇ……」
「俺がいじる度にオモロい反応して、もう可愛いのなんの……」
わぁ……こんな笑顔の伶君初めて見た。
「あと、男嫌い」
「マジ？あんな可愛いのに？」
「ああ。なんか男は怖いって……好きになったのも付き合ったのも俺１人。まぁそこも嬉しいんだけどね」
写真の中の愛美さんは……物凄くフレンドリーで女子や男子とも仲良くって……な感じの子だったけど……
さて、伶さんのおノロケ状態は……
「愛美はやっぱ、俺しか見えてなかったと思うよ。まぁ俺も愛美しか見えてなかったけど」
……最高潮です。
「その状態だと、愛美さんにもデレデレだったんじゃない？」
クラスメイトの中川君を思い出した。（中川君……マオという１年生の彼女がいて、その彼女を「ま～タン」と呼んで授業中以外ほとんど彼女にくっついている、典型的なデレ系男子）
「いや……んなことねーよ。心ん中ではめっちゃ大好きなのに、チビとかバカとかっていっつもからかって、全然素直になれねーで……あ～、もっと好きって言えばよかった……」
空（クウ）を見つめ、呟くように言う伶君。
……今、その言葉の裏でどんなことを考えているんだろうか……

「なんか、杉浦と喋るとスッキリする」
「え、そう？」
「適度に深入りせず、そうでもなく……って感じ」
「それ、微妙じゃん」
何分かして海宮市駅に着いた。
「じゃ、また明日。……いろいろ教えてくれてありがと」
いろいろっていうのは、愛美さんのこともだし……唯のこともだし。
「ああ。……あ、そうだ。来週の月曜の5時、旧校舎裏で待ってるって」
「え？」
「あ、これ伝言。唯からの」

心臓が、ドクッと跳ねる。
そして、鼓動が速くなる。

「う……ん、分かった」
「そんじゃ……あ、俺のノロケ話、誰にも言うなよ？」
「分かってる……」

来週の5時……私が伝えるんだろうか。
それとも……唯が伝えるんだろうか。

――……

家に帰っても、お母さんはまだ帰っていない。お父さんも勿論いない。
私の足音だけが響く廊下……
「寂しいな……」
来週の今頃……この寂寥（セキリョウ）の感は、更に募るのかな。

部屋に着いて、ベッドに寝転びケータイを開く。
ここで……何回涙を流したかな。
子供の頃……お母さんに叱られて、目に涙いっぱい溜めて、自分の部屋に駆け込んで……
高２の最初……私立大学の進学を断念させられたとき、大声で怒鳴って自分の部屋に駆け込んで……
私が涙を流す場所は、いつもここだった。
弱い人間と見られたくないから、人前では決して涙を見せなくて……
……最近は、弱虫になって。いっぱい人前で泣いてしまった。
唯の前で。そしてさっき、伶君の前で……
ほんと、頼ってばっかだ。
でも……私は今、普通の人間になろうとしている。
人前で笑って怒って泣いて……いっぱい感情を出すようになって。

夏姫に、桃花に……そして唯に、蒼井君に出逢ってからかな……

待ち受け画面を眺めた。
……海宮崖からの帰り際、撮って素早く待ち受けに設定した、海宮海。
生命の源ともいえる海。
みんな海から生まれ、海に帰っていく。
その間の期間……つまり人生は、１００歳で亡くなったおばあちゃんみたいに長い人もいるし、１０年ちょっとしか生きられなかった短い人もいる。
いつかは海に帰っていく。
その定めを知ってても、海を見ると、誰でも元気になる。
生命を貰うから……元気も貰う。
人にとっても、何にとっても大切な海。

私にとって大切な人は――……

……あるジャニーズグループの、『Ｌｏｖｅ　ｓｏ　ｓｗｅ○ｔ』が聞こえてきた。
電話の着信音……唯から。
正直今は出にくい……でも、出なきゃいけない気がする。
通話開始ボタンを押し、耳にケータイを近づけた。
「……もしもし」
『もしもし……沙彩？』
いつもどおりの唯の声……
「……うん」
『もう帰った？』
「……うん」
『そっか。海宮海綺麗だった？』
「……う……ん」
声が掠れる。いつの間にか、目には涙が溜まっていて……
『……沙彩？……伶から聞いた？』
唯のその言葉に、相槌を打つことができなかった。
『……ゆっくりでいーから。１週間で答えが出なかったら……旧校舎裏、来なくていーから』
……その言葉に連動して、蒼井君の顔が浮かぶ。
そうだ、誤解の件……！
「あの、ゆ……」
『沙彩の本当に好きな人、俺じゃなくても……俺、絶対責めねーから』
その言葉を残し、電話は一方的に切れた。
その日……夕食を食べるのも忘れ、一睡も出来なかった。
……ずっと考えてた。

第41話　2人の自分

「昨日どーしたのよ沙彩。夕飯食べた形跡なかったじゃない」
深夜に帰ってきたらしいお母さんが、朝そう言う。
「ちょっとね……」
一睡もしていないせいか、半端じゃない眠気に耐えながら歩き、コップに水を入れて飲んだ。
冷たい水が、ほんの少し眠気を紛らわせてくれる。
「……ねぇお母さん」
「何？」
「……恋人がいるのに、他の人のことが好きってどう思う？」
無意識にそう聞き、朝食のオムレツを口に運ぶ。
「一言で言うと……最低ね」
「……そっか」
……これが、ほとんどの人の意見だろう。
分かってたけど……言葉にして言われると、自分に対して言われてるわけでもないのにキツい。
「ようするに浮気じゃない。その人のことが好きだから恋人になったわけで……他に好きな人ができるなんて、許されないと思う」
恋人＝好きな人。
前……桃花が言ってたこと。

“「でもさ！高杉君以外に好きな人とか気になっている人がいたら、ソッコー別れるのがオススメだよ！相手も苦しむだけだっちゃあ！！」”

唯以外に……好きな人……

「恋人にバレていないって思ってても……実際バレてるもんよ。ど

っちが好きなのかよく考えてみなさい」
それじゃ、仕事行ってくるねと付け加えて、お母さんは家を出た。
「……やっぱお母さんにはバレたか……」
オムレツが、なんかしぼんで見えた。

学校に行く支度をして、駅に行く。
まだ電車が来てないから、近くにあるベンチに座った。
ケータイをいじってると……
「ね～君、超可愛いじゃん。高校生？」
両端に、浪人生らしきチャラい格好をした2人の男が座る。
「……そーですが」
なるべく目を合わさないように、ケータイをいじり続ける。
「お～！冷てぇ！」
「可愛い顔しておっかねーなぁ！」
……余計なお世話だ。
「な～、学校なんかサボって俺らと遊ばない？」
左側の男が、2つ結いにしてる私の髪をいじる。
さすがの私でもムカつき……ケータイをパチンと閉めその手を振り払った。
「汚い手で触んないでください」
「あ？」
……どうやらあっちもムカついた模様。
同時にホームのアナウンスが聞こえてきた。
「電車来たんで失礼します」
カバンを手に取り、さっさと歩き出す私の手首をチャラ男は掴む。
「おい、待てよ！」
「……しっつこいなぁ！」
無理矢理手を振り解いて、そいつ等の方を向き……腹部に蹴りを入れた。
「うっ……」

そいつは地面に倒れこむ。
もう1人も拳を振り上げて近づいてきたから、私は拳が振り下ろされるその瞬間、相手の眉間を殴った。
……覚えていてほしい。人は正中線（特に眉間）にあたる部分を殴られると一発KOだってこと。
「……今度は華奢な子をナンパしろよな」
そんな言葉を吐くと、私は乗り場に向かった。

思えば……男と対戦したのは、高2に入ってから2回目。
1回目はこっち見てニヤついていた男。
2回目はさっきの奴等。
1回目は……蒼井君にしかと目撃されて、尊敬されまくったっけ。
とにかく恥ずかしかったな……
「さーや！こっちこっち！」
向こう側で夏姫が手招きしている。
「おはよ夏姫」
夏姫の隣に座った。
……夏姫は私のこと知ったら……どう思うだろう。
幻滅されるのかな……
「昨日、たっくんと遊んだんだ！ゲーセン行って……そん時撮ったプリがこれ！」
「へぇ……」
夏姫とたっくんこと拓海が映っているプリクラ。
満面の笑顔で映ってる夏姫と、何をどーしていーか分からず、とりあえずピースサインを作ってる拓海。
仲睦まじいカップル。それが2人に妥当する言葉。
「そういえばさぁ、さーやと唯がデートしてたって噂、一度も聞いたことないんだよね」
「……え？」
いきなり唯の名前が出て、声が裏返る。

「遊ぶときは必ずと言っていいほど私とさーやと唯っていうメンバーじゃん？たまにはさーや＆唯のコンビを見たいっていうか……」

「……」

何も、返す言葉が見つからない。

確かに……付き合ってから一度も、唯と２人でどっかに遊びに行く……いわゆるデートするなんてことは１回もなかった。

「まぁデートしてなくてもさーやと唯は仲よさそうに見えるからいーけど～……唯が浮気しないようにね？」

「う、うん……」

浮気してんのは……どっちだよ。

確かに私は、ちゃんと努力したし頑張った。

唯を見れるように、唯を好きになれるように。

蒼井君に対する想いは……海に溶け込んでいくように忘れてたはずなのに。

“「いちばん、好きな人と一緒になれ」”

伶君のこの言葉に……心が揺れて、涙が出た本当の自分。

もし、唯のことだけ見ていたら……いちばん好きなのは、唯１人だよ、ってはっきり言えただろうか。

……私、気づいてしまった。

精一杯、周りに怪しまれることなく唯の彼女を一生懸命に演じていた自分。

私が気づかなかった、どんどん彼女がいるあの人に対して想いを膨らませている自分。

２人の自分に……気づいてしまった。

だって……
一緒に笑い合った記憶。
一瞬一瞬のあの人の笑顔。
その笑顔を見るたび、ドキドキした自分。
あの人と見た、綺麗な海宮花火。
迷子になっていた海翼ちゃんの目線に合わせてしゃがんだ姿。
……擦れ違った時、全く気づいてくれなかった寂しさ。
あの人を想って涙した記憶。

全部全部……鮮明に思い出せる。
まだはっきりと、くっきりと。

……まだ、好きなんだ。

第４２話　真の姿

……気づかなかった。
忘れなきゃ、と想うほど……忘れれないこと。
より一層、想いがどんどんどんどん、強く、濃く、はっきりとなってくこと……
……私の気づかないうちに。

学校に着いて、なるべく唯に気づかれないように、目を合わせないように席に着いた。
カバンをしまって、頬杖をついて窓の外を眺める。
……結構寒くなってきた、１０月下旬。
けど冬生まれの私にとっちゃあ、結構平気。まだ夏服だ。
……冬生まれ関係ないか。
「さーやっ！」
窓の外に広がる、ハゲたおっさんみたいな中途半端に葉っぱをつけてる木々の中に、肌が黒い人が映る。
「……あ、桃花か」
「ボーっとしちゃってぇ！！！体育祭冷めぇ？」
私を覗き込むようにしていた桃花は、鈴木さん（沙彩の前の席の人）のイスに勝手に座り、回転させて私の方を見る。
「何かあったの？」
私を捉える、アイラインくっきり＆つけまつげがバサバサ＆マスカラバリバリ＆アイシャドウはっきり……な桃花の目。
「……何もないよ」
「ウソだぁ！人生見失った顔してんよ！！！」
「そ、そこまで？」
……確かに、見失う寸前だけど。
「桃、言ったよね？確か……高杉君以外に好きな人とか気になって

いる人がいたら、ソッコー別れるのがオススメって」
「……うん」
「高杉君、苦しむだけだって……」
そう言い、桃花は廊下側の席を指差す。
その方向を見ると……友達と何かしゃべりあってる唯の姿があった。
「ほら、苦しんでるっしょ？」
「……そうには見えないけど……」
たまに会話してる内容が面白いのか、笑顔を見せる唯。
……前の晩、私にあんな電話してきたのが嘘みたいな……
「い～や！オーラがさーやと一緒だもん。桃には分かる！」
「そう……」
唯から視線を逸らせた。
「……桃花は引かないの？」
「え？何がぁ？」
「その、なんていうか……私のオーラ？に」
実際、この期間に何があったかって桃花には分かるはずがない。
でも……なんとなく、桃花には、桃花にだけは見透かされてる気がした。
「引かないよ～？さーやも恋に悩む乙女なんだなぁ～って思う！」
「……はい？」
「ま、頑張んなよぉ！もしどっちかに決められなかったらライガンでもいーし！」
……ライガンって……ブリ語？（ライガン＝来世頑張る）
「でも……もう答えは見えてる気がするなぁ」
「答え？」
「いや、なんでもなぁい！そんじゃクラス戻るね～！」
答えって……何の答え？
何故かスキップしながら自分のクラスに帰っていく桃花の後姿を見送った。

「い、今のって誰？」
さっきまで唯と話していた、隣の席の中島が席に着いて私に聞く。
「桃花だよ。林桃花」
「はぁ！？林って……清楚な感じだったよなぁ！？」
中島は1年の時も同じクラス。
「先輩に漂黒されたんだって」
「うへ～……漂黒って……」
……桃花。たったいま、中島の中での桃花のイメージが清楚から黒ギャルに変わってしまったよ……
「ところでさ、さっきも唯……むっちゃ無理してる感じだった」
「……というと？」
「なんか……無理に笑ってるっつか。笑いが引きつってるんだよ。1年の時から見てるけどさ……さーやと付き合い始めて、変わったな～って。妙に口数少なくなったっていうか……なんかひっかかってるみてーな表情（カオ）だし。あ、別にゲイとかじゃねーから俺！」
「分かってる」
……やっぱり、周りの人も気づいている。
唯の表情の変化に……
「よかった……てか、周りの奴等みんなさーやと唯のこと高杉夫婦って呼んでからかってるけど……無理に付き合うのはよくねーぞ？」
「……中島も高杉夫婦って呼んでんじゃん」
「あ、そっか！そうだったなぁ……じゃなく！恋人同士で大事なんは、気遣いとかそういうのナシでお互い自然体でいられるよーな関係でいることだと思うなぁ、俺は」
……お互い、自然体で……
「おーい、ＨＲ始めるぞ～！」
担任が教室に入ってきて、話すのをやめた。

私が、自然体で接せられる人……
私が、本当の笑顔になれる人……

……私の、好きな人。

罪悪感とか、劣等感とか。
そういうのなしで、接せられる人は……

唯の方をチラッと見ていた。
頬杖をついて、配られたプリントを見る視線。
そこには、悲しさも見えた気がして……
……真の、唯の姿が見えた気がした。

きっと私が……そんな、真の唯の姿を作ってしまった。
……ごめんね、唯。
これ以上、私といたら……きっと、あなたがダメになってしまう。

私と付き合って、明るさが少なくなった唯。
真の唯の姿が、暗くなってしまった。
きっと唯は……私に、自然体で接していない。
そして、私も……

ワカレル。

これが、私たちにとって最良の選択なのかもしれない。
……これが、私が出した答えなんだ。

第４３話　旧校舎裏（前書き）

今回も途中でナレーターが変わります。

第４３話　旧校舎裏

……金曜日。今週は来週から始まるテストの範囲が発表される。
「ここ、中間の範囲だから忘れんなよ～」
数学、古典、世界史、英語……他の学校より少し遅い中間テストの範囲が発表されてるのに、全然頭に入らない。
“とりあえず”先生の言った範囲をメモする。そんな感じだ。
１０月下旬中の下旬。来週にはもう、１１月に入る。
そしてその１ヵ月後には１２月。そのまた１ヵ月後は新春……
超がつくほど遅生まれな私が１７回目の誕生日を迎えるのは、来年の３月の最終日。つまり３月３１日。
……あと２日生まれるのが遅かったら、夏姫や唯、桃花の後輩になってたな。
なんて思う私は、かなり年を食ったようだ。

「夏姫、帰ろ」
あっという間に放課後になり、カバンを持って夏姫の席に行く。
「あ、うん！部活も休みに入ったしね！」
普通の期末とかだったら、実施される先々週ぐらいに範囲が発表されて、発表された次の週から部活がテスト休みになる。
けれど修学旅行や体育祭がある２学期の中間は、体育祭が終わってすぐに範囲が発表され、その次の週の水曜日からテストが実施される。
つまり、今回の中間は例年通り急ピッチで進められていくわけで……
「ヤッバい！早く帰って勉強しないとぉ！！！」
「もう私、諦めたぁ～」
……精神状態も急ピッチになる人、諦めてる人、様々。
私はというと……至って普通……いや、もうテストどころではない。
そういう意味では焦ってんのかな。

海宮市駅まで、自転車を走らせる。
「なんかさぁ、さーやと唯、今週入ってから仲悪くない？」
「べ、別に悪くないよ」
風の音がムダに大きく、少し大声で夏姫と会話をする。
「そ～お？あ、サーティーツー寄らない？」
「うん、寄ろう」
大声での会話に疲れて、サーティーツーの中に入った。

店の中は、暖房が効いていて寒がっていたらしい学生がほっこりした笑顔で友達と会話している。
「トリプルミックスベリーのカップ、１つ」
「私は……ホットミルク１つ」
私はアイス、夏姫はホットミルクを注文すると、席を選んで座った。
「改めて……さーやってすごいね」
「何が？」
「だってこんな寒いのにまだ半袖にベストって……」
「だって別に寒くないし……冬服、あんま好きじゃないし」
冬服が嫌いな理由は単純。ヌケてる私は、よくブレザーを学校に置き忘れる。
それに比べ、夏服は体育の時以外脱ぐ機会がないから絶対忘れない。だったらベストを置き忘れるんじゃないか、とよく聞かれるけど、シャツだけだったら下着が透けるからベストは必要不可欠。つまり、ベストも脱ぐ機会がない。
「まぁさーやは腕細いしぃ？隠す必要もないとお・も・う・け・ど～……」
……なんで間を作る？
「夏姫は１年を３とすると２．９はずっとブレザーだよね」
「だって腕見えるの嫌だもん！」
どうやら、夏姫のコンプレックスは腕らしい。

冬服2．9に対し、夏服0．1……2．9：0．1……
なんてよく分からない比の式を頭の中で立ててると、アイスが届いた。
トリプルミックスベリー。9月から10月までの秋季限定メニューだ。
「ん～……ウマいっ！」
限定メニューの中でも、このアイスは格段とウマい。
「さーや、おなか壊さないようにね～……」
感嘆の声をあげてる私を見て、夏姫はホットミルクを啜っていた。

「で、唯とさーや……何があったの？」
アイスを食べ終え、夏姫はミルクを飲み終え……夏姫がそう聞いてきた。
「だから、別に何もないって……」
「だって大抵はさーやいつも、唯と帰んじゃん」
……ギクッ。
「しかも帰るだけでどこも寄らない……放課後デート成立ならず？」
（尾行した）
……ギクギクッ。
「唯も今日1日元気なかったし。さーやも上の空って感じだし？」
……ギクギクギクッ。
「……ほんっとぉ～に何もないのぉ？」
「……あります」
そう言うしかなかった……

「……やっぱ“あの時”言ったのがまずかったのかなぁ～……」
蒼井君のことはなるべく伏せて、今までのことを全部話した。
私には前、好きな人がいて、失恋して……
それがきっかけで唯と付き合い始めたこと。
私が、前に好きだった人の存在が唯にとって重荷になってること……

そう言うと、夏姫はヤバいって感じの表情を浮かべた。
「……あの時？」
その言葉を鸚鵡返しして聞く。
「体育祭の時……大翔君、さーや連れてったでしょ？その時私言ったんだよね……「大翔君に取られないよーにね～」って、唯に」
……マジで……？
てか、この成り行きだと……
「それがきっかけで唯、いつもにまして元気なくしたじゃん。もしかして大翔君が関係してんの？」
「……」
嘘をついても、見透かさないような夏姫の大きい瞳。
……私は小さく頷いた。
「……そっかぁ」
私が頷いたところで、私が前好きだった人は蒼井君だって夏姫にバレてしまった。
けれど夏姫は、そう言うだけだった。
「じゃあ、大翔君が関係して……」
「それは……違う」
咄嗟に否定した。
……私が、蒼井君のこと好きだから唯とは別れる。
そんな最低な女にはまだ、なりたくない。
「中島が言ったんだ。恋人同士は自然体でいることが重要って」
「自然体？」
「唯のお姉さんの唯華さんっていう人がね、唯は本当は凄く寂しいのに気丈に振舞ってる感じがするって。そうさせたのはきっと……私なんだよ」
複雑な家族関係に加え、私の存在で……唯の元気さを奪ってしまった。
「私自身……周りにおかしく思われないように一生懸命唯の彼女を……無意識のうちに演じていた。つまり……自然体じゃない。唯も

私も自然体になってない以上……恋人でいる資格なんてないよ」
「……じゃあさ、さーやは唯の傍にいたいの？」
唾を飲む。
唯華さんが、「唯を愛してあげてね」って言った時、私が返すはずだった言葉……
「……自信が、ない」
「……そっか」
それ以上、夏姫は何も聞かず、何も言わなかった。

電車に乗って、４０分。Ａ市駅について、電車を降りた。
降り際に夏姫はこう言った。
「さーやと唯の問題だから、余計なお世話はしないけど……どんな結果でも、さーやを応援するよ！！」
私は、ありがとうって呟いた。

――――……

流れるように土日が過ぎ、月曜日を迎えて授業が終わり……
「４時４５分……」
丁度日直だった私は、仕事をしながら5時までの時間を潰した。
あと１５分。仕事も終わり、日誌を書こうとペンを持って字を書く。
「……あれ……？」
手が振るえ、字がへにょへにょになってて……情けない文章になってしまった。
……私の体の中から出てる、罪悪感。
日誌を閉じると、窓の外を見た。
……部活動に励む、何人もの生徒。
ポケットの中から、修学旅行で唯とおそろいで買ったミ〇ーマウスのキーホルダーを出した。
「……ごめんね」

夕日にかざすと……光が宝石みたいなキラキラした石に反射して、私の目を刺す。
それを握り締めると……ポケットにまた、しまい直した。

――――……

5時15分。1年校舎では、日直の仕事と委員の仕事がかぶり、5時30分の下校時間前まで文書にペンを走らせていた大翔は、ペンを置いた。
「終わった……」
彼は背伸びをすると、窓際のいちばん後ろの席……咲良の席を見る。

“「……大好きだよ大翔。別れよ」”

寂しげな咲良の笑顔がよみがえる。
あれから咲良は、いつも通りの笑顔で優希や李流と接していた。
咲良が喋ったかどうかは知らないけど……だんだん周囲の人々は「2人は別れた」と噂し始めていた。
だけど、それも先週の週明けの話。次の週に入った今日は、その噂はピタリと止んでいた。
「……伝えられるのかな、俺」
今まで、たくさん想いを伝えてきた咲良。
一方大翔は、咲良に想いを伝えたこともないし、咲良に想いを抱いたこともない。
……伝えることの、難しさ。
大翔は溜息をつくと、カバンと日誌と委員の文書を持って席を立った。

「よっ」
教室を出ると……壁によりかかり、片手を上げる……

「えっと……五十嵐先輩でしたっけ？」
「よく覚えてくれてんじゃん。喋ったことねーのに」
……伶がいた。
「だって同じブロックでしたし。このクラスでも有名でしたよ？」
「へぇ。どんな風に？」
「女子も男子も五十嵐先輩を崇拝（スウハイ）してたっていうか……」
「俺、神様かよ」
伶は笑みを浮かべ、それにつられて大翔も笑顔をみせた。
「それはそうと……今、杉浦沙彩が危ねーぞ？」
「……杉浦先輩？」
「杉浦があまりにも唯に無関心だったからか……唯、かなりキレてて、杉浦呼び出してた。……たしか、旧校舎裏だったっけ」
大翔の顔からは笑みが消え……カバン等をその場に置くと、走り出した。

「嘘なんだけどなぁ」
大翔の姿があっという間に消えた後、伶は大翔が置いていったカバン等を拾い上げる。
「学級委員か……大したもんだ」
文書には、『１－Ｄ学級委員用　１－Ｄ近況状況』とあり、５０行ぐらいのスペースがあり、それをビッシリと綺麗な字で埋められていた。
『神楽と武田と水口は最近仲間割れしたそうだ』とか、『榛名と神保は最近妙に仲がいい』だとか、『八代と榎本が付き合い始めた』など。
人間関係、休み時間の様子、体育祭の様子や反省……これだけ生徒の状況を記憶できるのも、記憶する領域が空いたからなのか。
「杉浦は……どっちにするんだろうな。楽しみだ」
窓から伶は、旧校舎を見る。

裏までは勿論見えないけれど……意味深な笑みを浮かべるその目には、見えてるかのように思えた。

第４４話　本当の唯

日誌を職員室に返し、旧校舎に向かう。
何回……旧校舎に足を運んだかな。
唯に告白されたとき、咲良ちゃんを助けるため……
きっと、今日以降はもう行くことは……ないだろう。

旧校舎裏に行くと、唯がいた。
ケータイをいじってるようで私には気づいていない。
「唯」
私がそう呼ぶと、唯は顔を上げ、私を見る。
そして再度、画面に目を戻し……
「……１０分早い」
笑みを浮かべながら、ケータイを閉じた。
「今日日直で、日誌とか仕事とかいろいろやってたけど……ダッシュで来た。途中先生に呼び止められて
「髪染めろ」って言われたけど、無視した」
「そっか。その髪？」
「うん。黒に染めろって。地毛なのにさぁ……染髪料って髪痛むらしいし」
体育祭の練習とかで日に当たってたから、ますます茶色に磨きがかかって見えるらしい。
「まぁ確かに……林（桃花）の髪見たら一目瞭然だよな」
「アハハ……」
……シーン。
私のシケてる笑い声で、沈黙が訪れてしまった。
「……決まった？」
「……うん」
きっと、私がどうするか。

「……別れよ」

唯の目を、しっかり見て言う。

私が見つめる唯の目は……決して逸れなかった。

そしてまた訪れる沈黙……

「やっぱり。そうだと思った」

「え？」

唯はそう言って笑う。

「やっぱ……沙彩にとってアイツは消そうとしても消せない存在だったんだな」

「そ、それは違う！」

……ていうこともないけれど、咄嗟に否定する。

「唯……変わったよね。私と付き合い始めてから」

「俺が？」

「うん。1年生の時は……唯、すっごいうるさかった。いちいちリアクションがデカくて、クラスのムードメーカーみたいな存在で……」

1年生の頃を、思い出す。

唯に対する第一印象は、“少々ウザいけどいいやつ”

でも今の唯には……ウザさが全く無い。

それはそれでいい、って言う人も居るけど……私には、それがどうしても納得いかない。

最近になって、そう思い始めた。

「でも今は……何か、ひっかかってるみたいな顔ばっかりしてる」

私がそう言うと、唯は目を見開く。

……図星、なのかな。

「中島が言ってたんだ。恋人同士は自然体じゃなきゃやってけないって……今の唯は、自然体じゃないと思う」

「中島がそんなことを……」

いつもうるさくはしゃいでいる中島ばかり見ている唯には、中島がそんなこと言うなんて想像つかないだろう。
「このまま何か引っかかってそうな唯と一緒にいるのは……キツいな」
「……そっか」
……唯も、自然体じゃない私と一緒にいることがキツいって思ってるのかな……
「じゃあ……沙彩の本当に好きな人は？」
「え……」
本当に好きな人……
それは、頭から離れれない人。無意識に目で追ってる人。忘れれない人……
本当に、何が何でも一緒にいたいって思う人。
……もう、分かってるはずなのに……名前が口から出ないのは、何故だろう。
卑怯で情けない私は、言い出すことができず俯いた。
「……よかった」
「へ？」
思いがけない唯の一言に、顔が自然と上がる。
「沙彩の本当に好きな人が、俺じゃなくて」
唯の言葉の意味が、分かんなかった。
じゃあ……唯は最初から、私のことなんか好きじゃなかったってこと……？
「沙彩をずっと苦しめるとこだった」
「……苦しめる？」
「そ。自然体じゃない俺と居て……だって自分の好きな人がずっと素じゃなかったらキツいじゃん」
……そう言う唯は、自分にも言い聞かせているようだった。
「……ごめん」
「まぁ俺も……ずっと沙彩がアイツのこと見てる気がして……気が

気じゃなくてキツかったけど」
唯は笑う。
……本当に笑ってるようには見えないよ。
「俺からも……別れようって、言おうと思ってた」
「……」
それは……本心？
唯の気持ちと唯の言葉。この2つが同じものかどうか分からないうちに……唯に何かを握らされた。
「新しい彼氏に、沙彩からプレゼントして」
……ミ○キーマウスの、キーホルダー。
私はそれをそっと握って——もう、終わったんだという事実を噛み締めた。

付き合って……もうすぐ2ヵ月になろうとしたところでの、決別。
世間一般からしたら、相当短い、私たちが恋人同士であった期間。
そんな短い間にも、たくさんのことがあった。
でも——どれも、朦朧としか浮かばなくて。
そんな自分が、情けなかった。

どうせ引き裂かれる、もろい仲。
私がそこら辺でイチャついているカップルを見て、度々思い浮かべていた言葉。
でも、どのカップルでも……そんなもろさの中にも、ちゃんと繋がっているものがある。
鋼のように、太く、切れない、頑丈なもので……
唯と私も……そんな繋がりはあるのかな。

それから、今までのことを語った。
修学旅行で私が倒れたとき、唯が私に口移しで薬を飲ませたこと。
伶君が唯に、「杉浦を放さないようにな」って言ったこと。

私がいても、勇気を出して唯に告白してきた女の子のこと。
いっぱい話を聞いたけど……本当の唯は、分からない。
「ねぇ唯。本当の唯ってどんな感じなの？」
「本当の俺？」
「うん」
「……族の総長」
……はい？
「今何て？」
「だから、族の総長」
……はいぃ！？
「族……て？」
「高杉組っていうやつで、親父が総長だったけど放棄して報道関係の仕事に就いて……俺に総長の座を任された」
そういえば、両親は報道関係だったって……
「姉貴はレディースの元総長。妊娠を理由に脱退した」
レ、レディース！？唯華さんが……！？
「そんで姉貴の夫が家に転がり込んできて……俺の座を奪おうとしている」
だから馬が合わないのね……
「え、えっと……家で寂しがってるって唯華さんが……」
「姉貴、被害妄想激しすぎるから、あんましっかり受け止めないほうがいい」
……そうですか……
「じゃあさ、族ってケンカするやつでしょ？」
「ああ」
「んじゃーさ、1回殴っただけで気絶させるような拳の振り上げたときの角度ってどんぐらいなの？」
「角度って……関係ないじゃん？」
「あ、そうなんだ……」
角度も大切だと思ったけどなぁ……

なんてガックリしてたら、唯に立つように促された。
「1回殴っただけで気絶する殴り方教えたげよっか？」
「ほんと？」
私がそう言うと、唯は私の胸倉を掴む。
「相手から攻撃されないように、まず胸倉かどっか掴んで自分との距離を縮めといて……」
今度は拳を作った。
「空いてるほうの手を思い切り握り締めて、腕曲げて脇を広げる」
「なんで、に、握り締める必要が、あ、あんの？」
「相手にダメージを送りやすいから。木の枝で殴るのと鉄で殴るのじゃ、かなり違うだろ？」
「あ、な、なるほど」
ていうか……さすが総長。力が半端じゃない。首が苦しい……
声が自然と途切れ途切れになる。
と、その時……
「うわっ」
唯の声とともに、首が楽になる。唯は横倒れになっていた。
「先輩、加藤先生が呼んでたよ」
「へ？カトキョン？」
加藤恭子先生。略してカトキョンは1年のときの担任。
2年に進級して何ヶ月か経った今、カトキョンとはほぼ縁が無い。
「行こ」
そう言うと……蒼井君は、私の手を掴んで有り得ない速さで走り出した。

第４５話　蟠りと心

「え……マジですか？」
「うん。大マジ」
サーティーツーに入って、「なんで高杉先輩ってあんなに暴力的……」と呟いた蒼井君に、今までの経緯を話した。
唯が族の総長で、“私が”相手を一発殴っただけで失神させる方法を教えてくれ、と頼んだこと。
つまり、蒼井君が目撃した唯が私の胸倉を掴み上げていたのは模範演技だったこと。
……いや、殴られてはないから演技とは言わないか。
「今日俺、日直で残ってたら五十嵐先輩が待伏せして「杉浦が危ねーぞ」とか言ってて……」
「危ない……？ただ私は別れ話を……」
……って言った途端に口を押さえた。
「え？」
「な、なんでもない……アイス頼みに行ってくるね」
たどたどしく席を立つと、蒼井君は「俺も」と言って席を立った。

秋の定番、トリプルミックスベリー。
１０月ももうすぐで終わっちゃうから、しっかり味わって食べないと……
「やっぱウマいなぁ～……」
「アイスって……」
エスプレッソというコーヒーを飲みながら、蒼井君は苦笑いを浮かべる。
「今の時期にアイス食べてんの、杉浦先輩くらいじゃん」
まぁ確かに……１０月下旬の今。周りの人たちはホットミルクやらココアやら紅茶やらコーヒーやら、ホット系の飲み物をすすりなが

ら、まったりと会話している。
「今の時期“だから”だよ。寒くも暑くもない今の時期だからこそアイスがおいしーの」
「……先輩。世間一般では超寒いし暑いわけがない時期だよ今」
「私の感覚器官は世間一般とはちょっと違うの」
そう言って笑ってたら……あることに気づいた。
蒼井君、荷物がない……？
「カバンとか、どこにあるの？」
「あ……学校に置きっぱなしだった」
この人、今気がついたように言ってるね……
丁度その時、ＥＸ〇ＬＥの……曲名はなんだっけな。グラサンバレーのテーマソングが聞こえてきた。
「ちょっとごめん」
「あ、うん。いーよ」
どうやら、蒼井君のケータイからの着メロ。
蒼井君は慣れた手つきで片手で折りたたみケータイを開けた。
「もしもし？……おう、亜珠華（アスカ）か。どした？」
……アスカ？アスカって誰だろ……
耳を（心の中で）ダンボにして蒼井君のケータイから漏れてくるアスカさんの声に耳を澄ますけど……サーティーツーの中で流れている、流行のＪ－ＰＯＰの音が邪魔して聞こえない。
「マジで？……ああ。あとでよろしく言っとくよ。うん。……んじゃあ、切るよ」
約１分ちょっとの会話を終えて、彼はケータイを閉じる。
「家にカバン届いてた。デカいフェ〇ーリの真っ黒な車って、この辺りじゃあ五十嵐先輩の家しか保有してないよね？」
「デカいフェ〇ーリ？……ああ、伶君の家の車だね」
前、駅で伶君と待ち合わせした時……近くに黒くやけにデカい車があって、周囲がちょっとザワついてたのを思い出した。
「えっと……アスカって人は……同棲人？」

「同棲って……俺の妹だよ。5歳の蒼井亜珠華。血縁はないけど」
あ、そうだ。蒼井君って妹いるって前言ってたっけ……
「あ、そうなんだ」
「杉浦先輩、たしか五十嵐先輩のケー番知って……？」
「うん。あ、教えよっか？」
「お願い致しまする」
致しまするって……武士かい。
ポケットから紙とペンを出すと、伶君のケー番を記した。

――――……

何たる失態……俺としたことが、五十嵐先輩にパシらせるなんて。
「はい」
お礼を言って、杉浦先輩から五十嵐先輩のケー番が記された紙を受け取った。
……ちゃんとお礼をお詫びを申し上げなければならぬ。
って……ヤバい。大河ドラマの見すぎで口調も武士になりかけかもしれない。
今は２００９年。平成２０年。（正しくは２１年）天保でも文久でもない……

そろそろ電車が来る時間だから、俺と先輩はサーティーツーを後にした。
……五十嵐先輩の言葉で我を忘れて……別に杉浦先輩が襲われてるわけでもないのに連れ出して……
冷静になった今、思えば……杉浦先輩が襲われるわけねーじゃん。
ていうか逆に、先輩を襲おうとした人が怪我をする。
「カップルの談話……だった？」
旧校舎裏で愛を語り合う……なんて昭和時代な風習、今はないかもだけど、一応聞いてみた。

「談話……って言えば談話……だけど微妙……かな」
先輩は曖昧な答えを出した。
……まぁ、ハッキリと「愛を語りおうてござんした」なんて言われちゃあ、ショックで立ち直れないだろうけど、俺。
先輩の表情からしても、愛が絡んだいざこざ……としか悟れなかった。
「蒼井君は……咲良ちゃんとうまくいってる？」
「咲良とは……つい最近、別れた」
「……え？」
予想外の答えだったんだろう。元々おっきい目を見開いて先輩は俺を見上げる。
「なんで？」
「……まぁ、いろいろと」
……到底、「君のことが好きで、咲良にもそれを悟られて別れを切り出されたんだぁ！」なんて言えない。
「……そっか」
そう言うと、先輩は車道側を見る。
車が絶えず、次々と走る車道。
チビの頃、窓から車道を見るのが好きだった。といっても、車を運転するドライバーの顔を観察することだけど。
ドライバーの顔……遅刻寸前で行き急ぐ、必死こいた顔。
助手席に座っている恋人とイチャつきながら運転している男のデレた顔。
窓全開にして、爽快そうに運転する青年の顔。（後にポリスに呼び止められるのだが）
ナンバープレートに“練習中”という板をひっつけて、助手席に先生らしき人を乗せ……初の運転でどぎまぎしている女の人の顔。
シルバーマークをつけた車を運転しているおじいちゃんの顔。隣にはおばあちゃんがいる。

中でも、後部座席に乗っている子供にちょっかいを出され、迷惑だけど幸せそうに笑っている父親らしき人の顔を見ると、見ている俺も幸せになり……同時に、激しい嫉妬心を燃やしたことだ。

海宮市駅に着いた。帰宅途中の生徒で賑わっている。

「あそこのバーガーショップ、超おいしいんだよ。特にスイーツバーガーっていう……」

たくさんの飲食店が立ち並ぶ海宮市駅。先輩は目をキラキラさせて店の紹介をしてくれた。

……ふと思った。

杉浦先輩は……誰に対しても、平等に接している。

普通、後輩の男となんて並んで歩きたくないだろうけど……決して、離れて歩こうとしない。

噂では、体育祭の練習の時にはうちのクラスのギャル3人組を見事に練習に参加させたという杉浦先輩。

改めて……ほんと、凄い。

だから好きになったのかもしれない。

駅に着くまでの間、先輩と他愛もない会話が弾んだ。

加藤先生……通称カトキョンは有り得ないぐらい泣き虫で、先生からの信頼は0ということ。

安田先生の全盛期は先輩が1年生だった頃。全盛期というのは、生徒から最も支持を受けてた期間だという。

なんとか崎という人は、タメ語で喋る後輩の2人のうち1人だってこと。もう1人は俺。

……ほんと、先輩と喋ってたら時間が経つのが早い早い……40分が、5分ぐらいに感じた。

でも、先輩にとっちゃ多分、いつもの40分間だろう。

……少し、切なくなった。

駅前に停めてた自転車を開錠する。
「そんじゃあ、気をつけてね」
「先輩こそ」
やっぱ「気をつけてね」って言われることは……後輩として見てくれていない証なんだろう。
ペダルに足を乗せた。
そして、ゆっくりこぎだす。
１０Ｍぐらい進んだとき……
「……蒼井君！」
先輩がそう呼んだから、急停止させた。
「咲良ちゃんのこと、未練とかないの～！？」
車の走る音に負けないぐらいの、大声。
……きっと、俺がフラれた、って思ってんのかな。
「俺からフッたから、未練とかねーよー！」
「そっかぁ。ごめんね変なこと聞ーてー！じゃーねー！」
俺とは反対方向に向かう先輩の背中を、いつまでも見送った。

実際……本当にフッたのは、どっちからなんだろうな。
けれど、何ヶ月前からかの蟠り（わだかま）はすっかり消えていて……今あるのは、単純に先輩のことを好きだという心。
「……好きだよ」
小声で、呟く。
いつか……ちゃんとした声で伝えられる日が、来るんだろうか。

第４６話　楽しみ

「あの、ちょっとお時間よろしいでしょうか？」
１２月７日。この日の最高気温１０度。
お母さんから冬服着用令が出てしまい、渋々クローゼットからブレザーと冬スカートを出して着て登校。
まぁさすがに私も人。暑いとはもう思わないけど……電車の中の暖房だとか、周りの人たちが着用している防寒具を見ると、気分が茹(ゆだ)る。
そんな中、４０分……やっと海宮市駅について、ホームへ降りた。
……で、メガネをかけたスーツ姿の女性とチャラそうな私服の女性、あわせて２人に声をかけられたのが今。
「何ですか？」
「お名前を教えていただけますか？」
……名前？まぁ別にいいけど……
「杉浦沙彩です」
「漢字は？」
「杉田玄白の杉に光浦〇子の浦。サンズイに“少”しで“沙”に色彩の“彩”で杉浦沙彩ですが」
何故か必死に私の名前をメモってる２人……
「杉浦沙彩様……私(わたくし)、こういう者でございます」
メガネに渡されたのは、ゴールドの紙。『Ｐｅａｃｈ＆ａｍｐ;Ｃｈｅｒｒｙ　編集記者　田辺紀子』
「あ、私も渡しとこ～っと」
チャラそうなのに渡されたのもゴールドの紙。『Ｐｅａｃｈ＆ａｍｐ;Ｃｈｅｒｒｙ　編集アシスタント　香川みなみ』
その名前の下には、『０９１２７　杉浦沙彩様』と書かれてある。
２枚とも、おそらく名紙。てか派手色。てか編集記者か……。確かに一方はそんな感じがする。もう一方は……スルーしよう。スカー

トのポケットにつっこんだ。
「あなたは今何年生ですか？」
「……高２ですけど」
「えぇっ！？うそぉ！！！大人っぽ～い！高３だと思いましたぁ！！！」
……外見相応にオーバーリアクションだな、香川って人。
田辺っていう人が香川の腕を肘でつつく。小さく香川は「すいませぇん」と縮こまった。
「高２ならもちろん、Ｐｅａｃｈ＆ａｍｐ；Ｃｈｅｒｒｙはご存知ですよね？」
「……知りませんが……桃とサクランボ……？」
２人の表情は、「え」って感じで固まる。
……マズいこと言ったか？私。
「……えええええっ！？うそぉ、知らないのぉ！？統計からでいうと女子高生の３人に２人のイマドキ女子高生は読んでるっていうのに！ましてやあなた、イマドキの女子高生じゃない！」
うるっさいなぁ。何回女子高生って言ってんだよ。外見相応に頭悪そうだなぁ……
「意識調査なら、知らないに１票入れます。失礼します」
と言い、踵を返そうとした途端……
「あああ！！！待って待ってぇ！意識調査ならわざわざ名紙渡さないわぁ！」
「だったら何なんですか……桃とかサクランボとかイマドキとか……」
「じゃあ、結論から言いますね」
田辺はバッグから、何か取り出す。
……カメラ？
「今、Ｐｅａｃｈ＆ａｍｐ；Ｃｈｅｒｒｙの冬の大特集で「イマドキ女子高生の制服きこなしスナップｉｎ静岡」っていうのをやってるんです」

……何ソレ。てかなんでここなの？普通東京でしょ……

「なので1枚だけ撮らせていただけませんか？」

「……嫌です。写真嫌いなんで。じゃ」

ソッコー踵を返し、早歩き。

「ええ～っ！残念っ！Ｐｅａｃｈ＆ａｍｐ；Ｃｈｅｒｒｙ、今度よんでね！ヨロシクねぇ～！！！」

香川の声がホームに響き渡る。

歩く私に視線が集まる。……そんな見んといてくださーい。

そして、実は写真嫌いな私。

修学旅行の時も東京で班員（夏姫・唯・伶）との写真を自由に撮るときでさえ上手く逃げて拒否した。

まぁでも夏姫がカメラ独占してほぼたっくんと撮ったわけだけど。

クラスの集合写真でも、常に後ろ。シャッターがおりる瞬間にバッとかがんだ。

「制服スナップとかマジ勘弁だし……」

そのまま早歩きで駐輪場へ向かうと、胸ポケットの中から自転車の鍵を取り出した。

「聞いたよぉんさーや！」

教室に入るなり、早めに来ていたらしい夏姫がすり寄ってくる。

何を？と聞くと……

「あの紀子サマとみなみサンにスナップ要求されたんでしょ～？？」

声デカッ……つか情報早っ。

なぜかみんな、耳打ちしあっている。

「ああ、うん。これ……」

スカートのポケットに入れておいたゴールドの2枚の名紙を夏姫に見せる。

「えええええええええっっっっっっ！！！！！！Ｓ級カードじゃんこれっ！」

……の声に……

「うっそぉ！どれどれぇ！？」
「紀子サマとみなみサンのＳ級カードォ！？」
わらわらドドドドとクラス中の女子が集まってきた。
……まぁ、私はうまくすり抜けカバンを片付けた。
女子の群れの中から、夏姫が出てくる。
「ねぇ夏姫、名紙がなんなの？なんでみんなあんな猪みたいになるわけ？」
「も～……相変わらず無関心なんだからさーやはっ！」
人差し指を立て、夏姫は田辺と香川、桃とサクランボについて力説し始めた。

Ｐｅａｃｈ&ａｍｐ;Ｃｈｅｒｒｙ。桃のように甘く、サクランボのように可愛い女の子になるためのヤングファッション雑誌。
売り上げ部数は他のヤング誌よりも圧倒的に多い。意識調査によると、女子高生の約３人に２人はこのＰｅａｃｈ&ａｍｐ;Ｃｈｅｒｒｙの読者らしい。
そんなＰｅａｃｈ&ａｍｐ;Ｃｈｅｒｒｙの巻末には、編集者のコーナーも。
そのコーナーで人気なのは、さっき私に話しかけてきた田辺と香川。
田辺はその硬派なルックスと仕事のテキパキさで、読者から「カッコいい」と崇拝され紀子サマと呼ばれてる。
香川は常に流行の最先端を走る、読者の憧れの存在。通称みなみサン。
そんな２人は街角スカウトや雑誌用のスナップを撮るため、日本全国２人でダッグを組んで放流し、話しかけた女の子の可愛さ度によって銅色、銀色、金色の名紙を渡す。
特に金色の名紙を持っていたら、将来芸能関係の仕事に就きたいときに事務所にそれを持って行って見せれば即入れてくれるらしい。

「あの名紙があれば、さーや、いつでも芸能事務所入れるねっ！」

「冗談じゃない……」
人差し指を親指に変えて「グッジョブ」のポーズをする夏姫の手をそっと制した。
「あれ、オークションとかで売ることとってできるの？できるよね？」
「ざんねぇん！もらった本人しか使えないのだ！名前書かれてあるっしょ？」
……あ。そうだった。
「じゃあ消しゴムで消して……」
「フツーにボールペンじゃ～ん」
……だよなぁ。
「じゃあ駅まで返して……」
「もういないと思うよん？たぶん大阪あたりに行ったと思う」
……時、既に遅し。
「……もういっそのこと廃棄……」
「捨てちゃったらさーやと絶交するよん？」
それはヤダ。
「まぁ絶交は嘘だけどねぇ～。記念に取っときなよぉ。あの名紙、1ヵ月に多くて3人にしかあげないんだよ？プレミアだよ？レアだよ？」
「……はい」
詰め寄ってくる夏姫に小さく返事した。
夏姫は満足げに「ならよし！」って言った。

始業5分前。
「よっす！」
ここ数日間、新型インフルエンザで休んでた唯がやって来た。
「おっはよぉ唯！完治？」
「おう、バッチリ完治！これでインフルかかんないしぃ～」
インフルエンザにかかると、インフル菌に対する免疫がついちゃうらしい。

けどまたインフルかかる人もいるけど……
ていうか唯……なんだか超吹っ切れた感じだ。
「唯、今日超テンション高いねぇ！何があったの？」
私が思ったことを代わりに夏姫が聞く。
「ああ……姉貴の旦那がやっと伏せたんだ。「お前が高校卒業するまで手は出さない」って」
「へぇ～！よかったねぇ！それでかぁ」
……ん？
「夏姫知ってたの？唯が族かなんかの総長だって……」
「うん！1年の時から」
……マジ？
なんで早く教えてくんなかったの、と唯に聞いた。
「だって沙彩、刑事の娘だろ？」
……それだけかい！
「別にお母さんにチクるわけないのにさぁ」
「じゃあ、仮に沙彩が超人気若手俳優と歌姫のデートを目撃したとするよ？ジャーナリストの息子の俺に言う？」
「……あ、確かに……ちょっと言えないかも」
だろ？と唯は言った。
……多分唯は気づいてないだろうけど……私たちの間に信頼感って実はなかった、って暗に言ってる気がするなぁ。
「そういえばさ、もうすぐクリスマスじゃない？」
「あ～、イエス・キリストの誕生日……」
12月25日。恋人たちが愛を語らう行事……
「私の家、飾りつけがハンパなくってさぁ～！ツリーも、唯よりはるかにでっかいの！」
唯は身長175センチ前後……それ、ハンパなくデカいじゃん。
「俺の家は……奴らが勝手に俺の家に踏み込んできて、勝手に飾り付ける。んで、勝手にパーティー始めてる……かなぁ」
「うっわぁ、超仲いー感じじゃん！さーやん家は？確か去年聞いて

なかったよね？」
「あ～、家は……」
……家は、とにかく仏教を厚く信仰している。お父さんの影響だ。月1回は神棚に祀られている銅像に向かってお母さんと一緒に手を合わせている。
小さい頃からお経1冊丸まる覚えさせられ、今では窮地に陥ってもそれが思い出すことができる有様。
……なんて言ったら空気が乱れるだろうから……
「特に何もない……かな。お祝いも別にしないし」
「あ～そっかぁ。共働きだからねぇ……」
夏姫が、うんうんと頷く……そして何故か、眉間にシワよせ目を瞑り、う～んと唸って何か考えて始める。
「ねー唯、夏姫何考えてると思う？」
「さぁ？小原とのデートプランじゃない？」
唯とこそこそ話してると……
「そうだっ！」
って言って、目を大きく開いた夏姫。
「提案なんだけど、今年のクリスマス……」

「遊園地？」
帰り道。偶然蒼井君を見つけ、朝のことについて話す。
「……っていう、夏姫からの提案なんだけど……」
「クリスマスに遊園地……」
蒼井君は何か考えている様子で……
「遊園地って、何するとこなんですか？」
「は！？え、そこから！？」
「だって俺、行ったことないし……名前は聞いたことあるけど。文字からして遊ぶところ？」
「ま、まぁそんな感じ……」
ビックリした。この世にまだ遊園地を知らない高校生がいるなんて

……

遊園地ができたての頃だったらまだ分かるけど……普及してから何十年目だっけ。

「なんか、おもしろそう。うん、行きたい」

「本当!?」

内心、パッと明るくなる。

「え?」

「あ……っと、蒼井君って妹いるでしょ?えっと……亜珠華ちゃんだっけ?その子寂しそうにするだろうから、断られるかと思って……断られたら夏姫らにどう話そうって、ちょっと計画立ててたとこだから、うん」

笑い混じりの口実……なんとか自然的にしようとがんばった。

「亜珠華か……母さんもどうせ仕事だろうな……」

「あ、なんだったら亜珠華ちゃんも一緒にどう?」

「マジ?いーの?それメッチャ助かる」

あ、別にシスコンとかじゃねーから、と彼は付け足した。

「亜珠華ちゃんも遊園地行ったことないの?」

「うん。なかなか親が休み取れなくて……取ったとしても、1日中部屋で寝てるし」

「そうなんだ……きっと楽しめるだろうね。初めての遊園地って、なんかすっごいワクワクした記憶があるな」

幼稚園の頃……お母さんが偶然休みを取れて、明日遊園地に行こうって話になった。

遊園地ってどんなとこ?って聞いたら、「すっごい楽しいところよ」って返ってきて……その日の夜は楽しみのあまり眠れなかったっけ。

「先輩でも楽しみに思うことってあるんだね」

「うん、あるよいっぱい……って、それどういう意味ですかい?」

「アハハ……」

む。笑って誤魔化したな。

……ま、いっか。交渉成立ってことで……

クリスマスまで、あと１８日。

第47話　クリスマス1～出発～

翌日。屋上で弁当を食べている途中、昨日のことを夏姫に報告した。
「へぇ～、大翔君の妹かぁ。亜珠華ちゃんかぁ。きっとすっごい美少女だろうねぇ」
「いや、5歳らしいし……5歳児はみんな可愛いと思うよ？」
「え～……私のイトコは全然可愛くないよ？リュージは無愛想だし、マミはやんちゃすぎるし……」
高1の時に聞いたことによると、夏姫のお母さんは5男5女の大家族。しかもお父さんの方も3男6女の大家族だから、イトコの数が一般よりケタ違いに多い。
お盆には、今年新しくできた母方の大家族の末っ子（中3）の中学校の体育館を貸切して宴会を開いたとか、今年は大晦日から元旦まで泊りがけで宴会を開くとか……
人数は、母方の大家族12人、父方の大家族11人。
それに加え、婚姻した子供の配属者。そして夏姫やそのイトコたち……うわぁ。100人越えるかも。
「何何？何の話～？」
夏姫がこぼす「5歳児の現状」について頷きながら話していると、イケメン好きの河野さんが入ってきた。
……なんで屋上来たんだろ。
「えっとね～、クリスマスに遊園地に行く話～」
「遊園地って、やっぱ名古屋のアレ？」
名古屋。名古屋市。愛知県の県庁所在地。
昨日夏姫が提案したのは、そこにある某人気遊園地に1泊の泊りがけで行くこと。
特に家族連れや恋人、友達同士などに人気で、特に人気で目玉なのは……
なのは……なのは……

「さーや？どしたの？」
「あ……なんでもない」
人気で目玉の“あれ”の姿を思い浮かべ、ぞっとした。
言わずと知れた、“あれ”だ。
「メンツは？」
「メンツね～……今作成中！とりあえず私とさーや、たっくんと大翔君。あと、大翔君の妹の亜珠華ちゃんかな」
「え～～～っっっ！！！？大翔君って……あのイケメン四天王の！？」
……河野さん、いい加減そのネーミングやめよーよ……
「ねーねー東郷さん、私も行っていい！？」
「うん、もちろん！メンツ多い方が楽しいし」
「やったぁ！」
河野さんの目……完全に蒼井君狙ってるなぁ。
あ、そうだ。ケータイチェックしないと……そう思って、制服のポケットからケータイを出した。
着信、３件。２件はお母さんと桃花。３件目は……蒼井君。
２人に悪いと思いつつも、蒼井君からのメールを開く。

『Ｔｏ．杉浦先輩
Ｓｕｂ．すんませんが……
クリスマスのこと、うっかりダチにばらしちゃって（－－；）
カイジとユウヤが行きたいって言ってるけど、その２人追加してもいい？』

「夏姫、さっきメンツ多い方が楽しいって言ってたよね？」
「うん、バッチリ！」
「２名追加でいい？１－Ｄのカイジ君とユウヤ君」
……次の瞬間、河野さんが興奮し始めたのは言うまでもない。

――――……

ちなみに着信3件中の2件、お母さんと桃花からのメールは……

お母さんからは、早めに帰宅する、とのこと。

桃花からは、愚痴。最近ユースケが浮気性とのこと……

桃花のメールを返すと、多分１００件ぐらい続きそうだから帰宅して返信した。

案の定、１０秒も経たずに来る返信……しかも絵文字５０個あるし。

どんな技使ったら１０秒で５０個も絵文字入れれるんだろうなぁ……

「沙彩、今年のクリスマスは友達とパーティとかしないの？」

夕食を作ってるお母さんが尋ねる。

去年のクリスマスは……夏姫の家で5人ほどでパーティする予定だったけど、お父さんが早めの冬季休暇をもらって帰宅して、急遽家族団欒のクリパ。

よって友達とのクリパはドタキャン。お母さんはそのことをまだ覚えていた。

「今年は……１０人前後ぐらいの泊りがけで、名古屋の遊園地に行きたいな～っと」

１０人前後というのは、今回引率してくださる夏姫のご両親。

それに加え、例のメンツ。でももしかしたら減ったり増えたりするかも、っていうことを踏まえて１０人前後って言った。

「そう。今年は友達を優先させなさいね」

そう言い、お母さんは意味深な笑みを浮かべる。

……なんだろうなぁ。この笑みは。

まぁともかく、お母さんの承諾を得た、ということで……

それから月日は飛ぶように流れて、１２月２５日。終業式。

……が終わり、午後3時。

「あっつまりましたかぁ～？？私（ワタクシ）、東郷夏姫と申しまっす！一応幹事やるんで～、困ったこととかあったらまず私に言ってねぇ！！！」

A市のE町の東郷家の前に、１０名が集結した。
最低限の1拍分の荷物と、お母さんから渡された荷物をキャリーにつめ、それを片手に持つ私。
幹事、っていうことでハイテンションな夏姫サン。その横にはたっくんこと拓海。
いつも通りの蒼井君。……の後ろに隠れてお菓子らしきものを食べてる子は多分、亜珠華ちゃん。
体育祭でちょっと話したカイジ君とユウヤ君。
結構ド派手な河野さん。早速顔赤いです。
そして、引率してくださる夏姫のご両親たち……
「それじゃあ、名古屋まで行っちゃいますかぁ！こっちの黒い車には男性陣、こっちの赤い車には女性陣が乗ってくださぁい！メンツはパーキングエリアに寄る度にちょくちょく変えますんでぇ」
ここは静岡県……といっても、ほぼ神奈川。名古屋市は愛知県だけど三重県と岐阜県にめっちゃ近い。だから結構な長旅になるだろうなぁ。結構長旅は慣れてないけど……
でも、せっかくだから、楽しもうじゃないか！

第４８話　クリスマス２～消そうとした感情～

女組、赤ワゴン車……
「車内カラオケたいかぁ～いっ！イエ～～～イッッッ！！！」
いきなり何を出したか……と思えば、そう大声で言う夏姫サン。
カラオケ大会……？
「実はぁ、カラオケ機器を今年買いまして……みんな歌おうじゃないかぁっ！！」
「ねぇねぇ、ジャニソン入ってる？？」
「もっちろんっ！」
「じゃあさじゃあさぁっ！！！ＫＡＴ－Ｔ○Ｎの『ＲＥＡＬ　ＦＡ○Ｅ』歌いたいっっ！！！」
「いーよん！じゃあトップバッターは河野さんでぇ！！」
河野さんと夏姫の、意味不明な交信……
ジャニソンって何？か○ぅーんの『りあるふ○いす』って何だ？曲名？
１人混乱してると、車内に前奏が流れ始め……
「ギリギリでいつも生きていたいからぁ～～～ああ～」
河野さんが歌い始めた……
ハイテンションで手拍子打ってる夏姫をつついた。
「ねぇ、か○ぅーんって何？アーティスト？」
「えぇ！？さーや知らないの！？ありえん……ジャニーズグループだよぉ！」
グ、グループだったんだ……
「ジャニーズグループって、ア○シしか知らないんだけど……」
「あ～なるほど！！今年大活躍だったからねぇ～！！！」
そして私も、手拍子に便乗した。
２曲目で夏姫、３曲目で再び河野さんが歌い始めた頃……座席の隅

っこで小さく蹲(うずくま)っている亜珠華ちゃんに気づいた。
「亜珠華ちゃん……だよね？」
信号にひっかかっていることをいいことに、亜珠華ちゃんの席の隣に移動する。
返事は……ナッシング。
「あれ？違ったかな……アスミちゃん？いや、アズミちゃん？それとも……アラスカちゃん？」
「……あおいあすか、です……お兄ちゃんがいつも、お世話になってます」
顔を少しこちらにむけて、亜珠華ちゃんは言う。
……さすがにアラスカちゃんはないだろうなぁ、カナダの地方かい。って、今それは置いておいて。
「それは、ご丁寧に……お家、帰りたいの？」
亜珠華ちゃんは、首を横に振った。
「お家帰っても、誰もいないの。お母さんはずっとお仕事……お父さんは、死んじゃったの。あすかが2歳のとき」
……この子は、当たり前のようにサラッと言う。
私は……何も言えなかった。
「でもね、大翔兄ちゃんがいるから全然寂しくないんだよ！」
「……そっか。お兄ちゃん、とっても優しい人だもんね」
「うん！大翔兄ちゃん、ほんとのお父さんみたいに優しいんだよ！」
そう言ってる亜珠華ちゃんの目は……強がってるようにも見えたし、真実だけを話しているようにも見えて。
それからずっと、蒼井君のことや家族のことについて亜珠華ちゃんと話した。

「さーやぁ！！！さーやも何か歌えいっ！」
「げ……私が？」
カラオケなんてしたこともない私が！？
「ほらぁ、何か好きな曲言ってよさーやぁ！」

河野さんに急かされ……
う～ん、好きな曲って言われてもパッと思い浮かぶものがない。
なんかまるで……音楽の授業が始まる前にクラスのみんなから「さーや何か弾いて～！」って急かされるみたいだ。
「沙彩ちゃん、あすかと一緒に歌お！」
「え？」
「あすか、あいちゃん大好きなの！さく○んぼ歌いたぁい！！」
……マジっすか？
そりゃあ曲は知ってるけど、歌うとなれば……
「さーやがさく○んぼ！？何か新鮮～！」
「よっし、それにしよう！いいよね？さーや？」
「沙彩ちゃん、歌お～！」
３人のキラキラした目に負け……半ば自棄で承諾した。

ＳＡ（サービス・エリア）に寄って、車から降りる。
時刻は６時……いつもより若干早めの夕食をしましょう、と夏姫のお母さんは言った。
「沙彩ちゃん、あすか、おなか空いたぁ。歩くのしんどい～……抱っこして～？」
「いーけど……大丈夫？」
よいしょ、と亜珠華ちゃんを持ち上げる。思ったよりずっと軽い。
「うん、大丈夫……お兄ちゃんはどこぉ？」
「お兄ちゃんは……あ、いたいた」
蒼井君とたっくん、カイジ君とユウヤ君、夏姫のお父さんがベンチに座って何かしていた。
高速道路の状況とか、ＥＴＣとかの関係で男組の方が結構早くに着いたみたい。
「たっく～んっ！！！」
夏姫が大声で叫ぶと、５人は一斉に私たちを見る。
ケータイをいじっていた蒼井君は、亜珠華ちゃんを見るなりケータ

イを閉じて駆け寄ってきた。
「ちょ、亜珠華、お前何して……」
「ん～？おなか空いたししんどいから沙彩ちゃんに抱っこしてもらったの～」
「アホかお前は……ごめん、杉浦先輩。亜珠華が迷惑かけて……」
そう言うなり、私の腕の中にいる亜珠華ちゃんを抱き上げた。
「亜珠華、しんどくても自分で歩くのが普通。お前、もうひまわり組だろ？」
「はぁ～い……」
ひまわり組……はよく分かんないけど。（ひまわり組＝幼稚園の年中のクラス）
さすがお兄さん。しっかり躾けてる。きっと私には無理だろうなぁ……

ＳＡで夕食を食べて、メンツ変え。
夏姫父率いる黒車には、私、蒼井君、亜珠華ちゃん、カイジ君。
夏姫母率いる赤車には、夏姫とたっくん、ユウヤ君、河野さん。
「は～……同じ車でもなんか広いわぁ」
カイジ君は車に乗り込むなり、そんなことを言った。
黒車は赤車に対して普通車。ドライバー合わせて５人乗り。
ドライバーに夏姫父、助手席に私、膝の上に亜珠華ちゃん、３人乗るはずの後部座席には蒼井君とカイジ君が座った。
「どデカい男３人が座ってたからなぁ。もうきっついのきっついの……」
「悪かったな、どデカくて」
いや……蒼井君よりカイジ君の方が若干身長高く見えるけど……
あ、そうだ。
「カイジ君、だよね？」
「ああ、小西カイジ。体育祭ではお世話になりましたぁ」
「いや、別に男子は世話してないけど……」

「あれ？忘れたんすか？まぁいっか」
……すんませんなぁ、物覚えが悪くて。
「私の名前は……」
「知ってますよ。杉浦沙彩先輩でしょ？コイツが色々と……ムガッ」
後ろを向くと、カイジ君が蒼井君にほっぺたをつかまれている……
「何でもないよ、うん、何でも……」
「はひゃへ！ひほほぉ！！（放せぇ！大翔ぉ！！）」
2人が相当仲睦まじく見えて……思わず、笑みがこぼれる。
何か、怒ってるような蒼井君の顔……
……可愛いなぁ。
――あれ？
「沙彩ちゃん？どうしたの？」
亜珠華ちゃんが見上げてくる。
「あ……な、何でもないよ。ちょっと忘れ物したかもって思っただけ」
「え？沙彩ちゃん忘れ物したの？取りに帰る？」
「あ、いえ、別になかったってことに気づいたし……しかも今からリターンしてたら、名古屋（あっち）に着くの、明日になっちゃいますし……」
夏姫父の心配そうな顔と声を交わし、窓を見る。
ガラスに映ってる、私の顔……相当、醜（みにく）いかもしれない。
さっき、私は……蒼井君のこと、素直に可愛いって思えたんだ。
それは……あることを、意味していた。

自分を、悪役にしないため……なるべく、自分自身にも隠し続けていたもの。
唯と付き合ってる間……必死に忘れよう、消そうとした、あの感情を。

第４９話　クリスマス3～元々好きじゃなかった～

愛知県名古屋市……愛知県の県庁所在地。
さっすが、県庁所在地とだけあって……
「人、多っ！！！」
窓の外に映る、異様な人の多さに思わず目を疑った。
さすが１２月２５日……元々人が多いのに加え、さらに人が多くなったわけかぁ……
私の大声で、膝の上で寝息を立てていた亜珠華ちゃんが目を覚ました。
「沙彩ちゃん、お外キラキラしてるぅ！！」
亜珠華ちゃんには、人の多さよりも煌くイルミネーションが印象的に見えるみたい。
「東郷さん、この後どうするんすか？」
「ああ、予約しておいたホテルに一度行って荷物置いて、外出たい人だけ外出て、休みたい人はそのまま温泉入って就寝かな。夕飯はもう食べたしね」
カイジ君の声に、夏姫父はそう答える。
外……は、勘弁だなぁ。人がうじゃうじゃいるし……
改めて窓の外を見て、そう思った。
「大翔は？どーすんの？」
「俺は……いーや。勉強あるし、寒いのあんま好きじゃないし」
「マジ？お前ほんっと優等生だなぁ。俺はユウヤと河野先輩とでオケるし！」
カイジ君の話によると、ユウヤ君と河野さんはＳＡに寄る前、カラオケに行く約束をしたらしい。
河野さん……積極的だなぁ。
「あ、そうだ。今のうちに部屋割り決めてくれないかな。ケータイとかで連絡とって」

「部屋割り……？」
「そ。２人部屋２つと３人部屋１つとったから」
亜珠華ちゃんは小学生以下だから各部屋の予備の布団を使ってくださいって言ってた、と夏姫父は続ける。
「まぁ、とりあえず夏姫とたっくんは２人部屋のひとつを使うとして……」
だって、カップルの初（？）旅行だもん。相部屋にしないといけないよね。
「俺と大翔とユウヤで３人部屋？んで、杉浦先輩と河野先輩と亜珠華ちゃんが２人部屋に入ってもらって……」
「亜珠華、嫌だ！あのコウノっていうお姉ちゃん、嫌い！」
部屋相応なメンツを言い上げたカイジ君をキッと睨む亜珠華ちゃん……
「おい亜珠華……嫌いはねーだろ？」
「だって嫌いなんだもんっ！お歌、とってもヘタだもん！」
か、核心にふれた……恐るべし五歳児！
そう……確かに河野さんは歌が激がつくほどヘタ……つまり超がつくほどの音痴だったのだ。
「歌と部屋は関係ないだろ、亜珠華」
「ヤだったらヤだっ！！！」
そう言うと、亜珠華ちゃんは私に抱きついて泣き出した……
「……じゃ、じゃあ、亜珠華ちゃんは誰と同じ部屋になりたいの？」
数分経った後、カイジ君が恐る恐る泣き続ける亜珠華ちゃんに聞く……
なんか異様な光景。（十六歳が五歳に恐る恐ると……）
「亜珠華ね、沙彩お姉ちゃんと大翔お兄ちゃんと一緒の部屋がいいっ！！！」
パッと泣き止み、亜珠華ちゃんが言った言葉は……それ。
な……なんですと？

しばらくの沈黙の後……蒼井君と私が亜珠華ちゃんの考えを覆そうといろいろ言うにも、彼女は「ヤだ」の一点張り。
子供の駄々は数学の東大入試問題よりもはるかに解きにくい、というカイジ君の一言で……
「わ～いっ！沙彩お姉ちゃんと大翔お兄ちゃんと一緒のお部屋だぁ！」
やって来ました、ホテル……つか、温泉つきの旅館。
「ひっろぉい！！！」
すぐ、ドタバタと部屋内を駆け巡る五歳児……今では恐ろしくも見えます。
「ごめん……亜珠華の駄々のせいで……」
「……いやいや、亜珠華ちゃんもきっと寂しいんだよ。蒼井君が別の部屋だったら……」
と言った直後、考えを覆そうと提案した、「3人部屋（1－Dトリオ）と一緒の部屋になるのは？」で「沙彩お姉ちゃんがいないから嫌だ！」と言った亜珠華ちゃんの表情を思い出し、苦笑いを浮かべた。
「と、とにかく荷物置こう！これ、結構重たいんだよねぇ」
キャリーケースを部屋の隅に置こうと、靴を脱いだ。
それに続いて、蒼井君も部屋に入る。
「沙彩ちゃん、お外綺麗！」
でっかい窓……そこから見える、都会離れした壮大な森林を見て、亜珠華ちゃんが飛び跳ねる。
夜とはいえ、ライトアップされてて……
「ほんと、綺麗だね」
思わず、そう言ってしまった。

それから、しばらくくつろいでいると……メールの着信音が鳴る。
同時に蒼井君のケータイの着信音も鳴った。
えっと、何何……「入浴するんで9時にフロントに全員集合！生理

の人はＤｏｎ'ｔ　ｃｏｍｅ」……幹事である夏姫からだ。
「お兄ちゃん、誰からめーる来たの？」
「カイジから……9時にフロント集合だってよ」
「あ、それ私のとこにも来てるよ」
……シーンと、場が静まる。
「……どーいうことだろうねぇ……」
呼び出すのなら、同性の人だけ呼び出せばいいのに。

「お部屋いかがでしたかぁ～？幹事の夏姫でっす！！」
集まったのは、東郷夫妻を除く高校生メンバー。
亜珠華ちゃんは「そこのお風呂に入ってもう寝る～」って言った。
1人で入れるの？と聞いたら……3歳ぐらいから毎日1人で入ってる、と。恐るべし5歳児……
「さぁ、ここに3つのお風呂に通じる通路があります！女風呂、男風呂、そして3つ目が混浴でぇす！」
混浴って……まさか……
「私とたっくんは混浴するけど、他にしたい人いますかぁ～！？」
「「「いるか！！！」」」
……全員がハモッた。

「だから両方集合させたのかぁ」
湯船につかりながら、真相を初めて知ったかのように河野さんが呟く。
「あそこで「混浴したい」っていう人がいたら……その人の人格疑っちゃうよ」
「だよね～」
大体、恋人とか家族でもないのに混浴とか絶対無理……
夏姫はそんなことさえ分からなかったのか……
「話変わっちゃうけどさ、さーや、高杉君と別れたじゃん？」
「え？なんで知ってんの？」

「噂だよぉ。すっごい出回ってるよ？なんか、すっごい修羅場だったそうじゃん。高杉君がさーやの胸倉掴み上げて……目撃者がいたんだって。たまたま旧校舎裏に用事があった人」

……マジ？恐るべし、噂……

しかも、かなり間違った方向で出回ってんなぁ。

「そこで、彗星のごとく、あの蒼井大翔が現れて……彗星のごとく高杉君をさーやから話、彗星のごとくさーやを連れてどっか行ったと……」

「彗星って……まぁ、確かに」

それから、真相について語った。

「え、それって……マジで“あの”高杉君が総長！？」

河野さんから見たら、唯は結構天真爛漫に見えるだろう。

んで、実際のことを言ったら相当驚かれた……

「私もそれ知ってビックリしたよ……まさか、みたいな」

「へ～……凄いねぇ、それ……」

……あ、そういえば……

「唯、将来プロのカメラマンになりたいって言ってたんだよね」

「あ、それどっかで聞いたことある！」

だったら、族はどうするんだろ……

放置？いや、それとも解散？

いずれにしても、そんな無責任なことしない人だって分かってる。

だったら、プロカメラマンへの夢は正体を隠す為の口実？

「修旅でさーや達の班、テレビ局行ったでしょ？それ、結構珍しいんだって！ほとんどの班は1日中ショップ巡りなのにさぁ」

……まぁ実際、何日目かには1日中ショップ巡りしたけどね。

「ていうか、高杉君のことはさて置き……さーや、どうするの！？」

「え……何が？」

「蒼井様だよぉ！同室なんでしょ？」

蒼井“様”って……結構レベル高し？

「うん。けどまぁ、亜珠華ちゃんいるし」
「あの子ちっちゃいから、もう寝てるでしょ！？部屋帰ったら2人っきりも同然じゃん！」
まぁ、確かにそうだけどさ……
「大体、何かあるわけでもないし……そんな身構えなくっても……」
「あ～も～……なぁんにも分かってないなぁさーやは……」
そう言うと、河野さんはお湯にもぐっていく……
で、ちょっとしたらすぐ水面に上がってきた。
「じゃあ、さーやはどう思ってるの？蒼井様のこと！」
「……え？どうって……前も言ったじゃん。ただの後輩だ。って」
あの時私が言ったあの言葉は……きっと、蒼井君に聞かれていた言葉。
誤解された、って思ったけど……解くことは、できなかった。
「そうかなぁ……私にはそう見えないけどなぁ……」
そう言う河野さんの声は、冷やかしとかじゃなくって本気だった。
「いい加減に素直になんなよ、さーや。ここ何ヶ月間……すっごいオーラがにごってる」
……オーラが？
「2学期始まった頃はすっごいキラキラしてたのになぁ。ありゃ絶対恋してるなぁって思ったもん」
それはきっと、私がメイクとかヘアアレンジとか覚えたわけで……
でも、覚えたきっかけも……蒼井君だった。
「ほんとは、高杉君のこと好きじゃなかったでしょ？」
レンズを隔ててない、まっすぐな瞳が私を捉える。
……初めてだ。こんなにはっきり言われたの……
どうなんだろうなぁ。

第５０話　クリスマス４～チョコレート～

１時間後……（４５℃の）温泉から出て、ジャージに着替え……
……たかどうかもうろ覚え。
つまり、逆上（のぼ）せてしまいました。河野さんと話すあまり。
「さーや……大丈夫？」
「え？　へーキへーキ……あははは……」
「もしかして、長風呂とかしない派だった？」
……はい。
いつもは遅くて１０分、早くて５分の入浴ですので……

ゆらゆらした足取りで、部屋に帰る。
鍵は開いていたけど、中には誰もいない……いや、見えない？
たぶん、従業員さんが敷いてくれただろう布団に思い切り倒れこんだ。
「うへ～……」
頭がガンガンする……
ああ、誰かこのガンガンをとってくれ……
……意識が、そこで途絶えてしまった。

――――……

頬に、ひんやりとした何かが当てられて、目が覚めた。
「あ、起きちゃった」
はい、と言われて受け取ったのは、ペットボトルのミネラルウォーター。
「あ……りがと」
キャップを緩めてそれを飲む。
冷たい液体が、喉を通り、一気に胃に流れ込む。頭が少しすっきり

した。
「杉浦先輩、超顔赤かったよ？なんか変なモンでも食った？」
「の、逆上せ……1時間ぐらい温泉つかってて」
「あ、なるほど」
改めて、辺りを見回す。
日はとっくに暮れている。時計は11時をさしていて……
隣には、小さい布団で寝息を立てる亜珠華ちゃん。
あ……よかった。ちゃんと部屋に戻れてる。
「カイジとユウヤと河野先輩、早速カラオケ行っちゃいました」
「カラオケ……」
……あの歌声を聞くのか、カイジ君とユウヤ君。
ちょっと気の毒……かな。
「蒼井君は？一緒に行かなかったの？」
「俺、カラオケとかよく分かんないし……それにあんま、歌上手くないし」
「え～……外見的に上手そうなのに」
「外見的って……」
そう言うと、彼は笑う。
……大好きだった笑顔。そして……今も……
――――今も？
「俺、今から本読んだりとかするんだけど、光とか大丈夫？」
「あ……うん、大丈夫」
だってライトガンガンの体育館の中での校長の話で眠れるんですから。
「そっか」
そう言うと、何やら分厚い難しそうな本をカバンから取り出した。
男子高校生って、18禁を含むマンガとか雑誌とか読むっていう固定概念があったから、少しビックリした。
本に向かう後姿を見ながら……今、この人のことをどう思ってるんだろうって考えた。

ただの後輩じゃない。それは分かってる。
だったら好き？……分からない。
……もしかしたら、私の中にいるもう1人の私が、好きって想い始めるのをセーブしているのかもしれない。
だとしたら……永遠に、この分からない感情の中、もがき続けることになるだろう……

――――……

気がつくと、朝だった。
横にいる亜珠華ちゃんは、まだ寝息を立てている。そして、その隣にいる蒼井君も。
……今のうちに、顔洗って寝癖直して着替えよう。
お母さんから渡された袋を持って、洗面所に行った。

持ってきた洗顔料をあわ立てて顔を洗い、ドライヤーとヘアウォーターで少しついた寝癖を直す。
……縮毛矯正、とやらをお母さんにされてからは、寝癖は以前よりつかなくなった。
そして、渡された袋を開ける……
・・・……
な……な……
「なんじゃこりゃあああああ！！！」

「ええっ！？これがさーや！？」
「マジかわいい！！！」
1時間後……荷物を持って、ロビー集合。
早速夏姫と河野さんが私を見て目を丸くする。
……当然だろう。

普段はかないブーツにワンピ、アクセ。
思いっきり“カワイイ”って感じの服には似合わないストレートな髪。
「さーや！せっかくかわいいのにその髪は合わないよぉ！杏里（アンリ）、コテ！」
「アイライサー！」
車内カラオケの一件で大分河野さんと仲良くなった夏姫は、河野さんの名前を呼び捨てしてる。
「さーや、そこに座るっ！」
「あ、あいらいさー……」
夏姫の剣幕に押されて、傍にあったイスに座る。

「よし、これで完成！」
5分も経たないうちに、私の髪は大変身を遂げた。
「は、派手すぎない……？」
「だーいじょうぶだって！うちらとあんま変わんないしぃ」
と言う夏姫と河野さんも、改めて見ればミニワンピ。
逆に私の方が長いくらい……
「んでんで～、さーや、大翔君となんかあったのぉ～？」
夏姫がつついてニヤニヤする。
「別に何も……気づいたら眠っちゃってたし、私。ていうかそれ以前に何もあるわけないじゃん」
「え～……つまんなぁい」
うん、期待するだけ無駄だったね河野さん。
それはそうと……男子軍団がまだだ。
「夏姫、男子軍団は？」
「あ～……たっくんはまだ準備してるみたい」
……普通彼女の方が準備遅くなるんじゃ？
「カイジ君とユウヤ君は気分悪そうだったから放置したよ」
放置って……

ちなみに蒼井君は亜珠華ちゃん待ち。亜珠華ちゃんはまだ、夢の中……仕方ないもんね、6時だもん今。
起こせばいい、って言ったけど……6時半ジャストじゃないと起きないんだってさ。

「ごめん夏姫、待った？」
「待ったよぉ！なんで準備に30分もかかんのぉ？」
「マジごめん！！！」
たっくん登場。いつになくキレ気味の夏姫さん。
夏姫、たっくんと結婚したら絶対カカア天下になるなぁ。
「おはようございます……」
「おっはよぉカイジ君ユウヤ君！昨日楽しかったよねぇ！」
「は……い……」
2人は死にかけ……仮にも四天王のうちの2人でしょ……
よっぽど河野さんとのカラオケが効いたか。

「すみません、ほんと……」
「沙彩ちゃん、おはよぉ！！」
「おはよ、亜珠華ちゃん」
6時35分。蒼井兄妹の登場……そして、東郷夫妻も。
とりあえず、全員揃ったところで……
「じゃ～、行きますかっ！！」
いよいよメインの……遊園地！

――――……

車で約30分移動し……着いたのは、人がうじゃうじゃいる遊園地。
「うわあ……名古屋だけあって広い……」
ユウヤ君が、パンフレットを見て呟く。
「へぇ。ちょっと見せて？」

「あ、はい。どうぞ」
パンフを借りてみると……確かに広かった。
２０を越えるアトラクション、１０を越える売店、５０を越えるトイレ……
……トイレ多っ！！！
「じゃ～とりあえず、人多いんで離れないようにしてください！」
そりゃそーやわ……

先にみんなで向かったのは……ジェットコースター。
「うぷっ……俺無理……」
「俺も……」
カイジ&ユウヤ君はジェットコースターそのものを見てリタイア。
亜珠華ちゃんは怖い、と言って乗らず……蒼井君もお医者さんから止められてるから乗らず。
乗るのは、東郷夫妻、夏姫&たっくんカップル、河野さんと私。
絶叫系、大好きなんでね、私。

「あ～楽しかった！」
思わずそう叫びたくなるほど楽しかった。
地下ジェットコースターとお化け屋敷が一体化している、特殊なジェットコースター。
やっぱいいね、絶叫系。
「次何乗る～？」
「あすか、コーヒーカップ乗りたい！！」
……という亜珠華ちゃんの意見で、コーヒーカップ。
これなら大丈夫、とカイジ&ユウヤ君が乗ったものの……加えて河野さんが乗り、彼女がハンドル回しすぎて……カイジ&ユウヤ君は火に油状態。
東郷夫妻、夏姫&たっくんカップルはまったりとラブラブと……私は亜珠華ちゃんとキャッキャいいながら乗った。

これもまた、蒼井君はドクターストップより乗れず。一気にドバッとくる回転（スピン）は、脳に悪いみたい。

ゴーカート、メリーゴーランド、３Ｄシアター……ほんとになんでもある。

空いた時間には、２・３人で分かれて両親へのお土産も選んだ。

「あすか、沙彩ちゃんとおそろいの買いたい！」

「え？お揃い？」

「うん！たぶん、もう、会えなくなっちゃうから！」

笑顔でそう言う意味は分かんなかった。

それより……お揃い、という言葉に反応してしまう。

だって……唯ともお揃いのものを買ってしまったから。

過去のことがフラッシュバックしてくる。

そんな中、亜珠華ちゃんとお揃いのぬいぐるみを買った。

「やったあ！沙彩ちゃんとのおそろい……後でお兄ちゃんに自慢しちゃおうっと！」

小さな猫のかわいいぬいぐるみ。

今後、これはどうなっていくのかな……

あの時買ったストラップ。買った直後はいつまでも身に着けたいって思った。

でも今は引き出しの奥……捨てるべきだけど、捨てれない。

自分から別れを切り出したのに……ワケ分かんない。

「みんな集合しましたね～？」

待ち合わせ場所にみんなが集う。日は沈みかけていた。

「じゃあ次どこ行こっかなぁ～」

パンフをなぞりながら、夏姫が呟く。

……どうか、あそこだけは避けてくれますように……

と、そこへ……

「これどうぞ～！」
カゴを持ったお姉さん2人が私たちの輪の中に入る。
渡されたものは……チョコレート？
「あの、これは？」
「チョコレートショップ「Ｓｗｅｅｔ　Ｃｈｏｃｏｌａｔｅ」の新作！とってもおいしいので食べてみてください！」
……毒は盛られてなさそうだけど……やっぱちょっと食べ難い。
「あ、ちょうど俺腹減ってた」
みんなチョコを見て固まってる中……蒼井君は躊躇なくそれを口の中に入れる。
つられてみんなもチョコを食べた。
……ん？なんか、トロッとしたものが……フォンデュ？お酒？
……お酒だなぁ。
亜珠華ちゃん大丈夫かな……と思って亜珠華ちゃんの方をちらりと見ると、みんなとは違う包み紙を持っていた。
よかった。そこんとこはちゃんと配慮してくれてたんだね。
「お……なかなかウマいかも」
カイジ君は絶賛。
「あ～……俺、酒無理だったっけ……」
たっくんは苦そうな口をする。
蒼井君はというと……意外と普通。
「それじゃあ、改めまして……とりあえず探しましょう！乗りたいのがあったらそれに乗る、みたいな！」
半ばヤケの夏姫の提案。歩きだした彼女のあとについて動き出した。

……なかなか乗りたいものがない。つまりほとんど乗りつくしてしまったから……
みんなの足が進むごとに、私の心臓はバクバク。
「ね～大翔兄ちゃん～……あすか、疲れちゃった～」
亜珠華ちゃんのこの言葉でみんなの足は止まり、私は安堵する。

「ちょっと休もっか。ね、亜珠華ちゃん？」
「うん！」
蒼井君……黙ったままだ。
でもよかった。時間稼ぐことができるから……

近くにあったベンチに腰かけ、辺りを歩く人を見る。
カップル、家族、夫婦、友達同士……いろんな人がいた。
しばらくしみじみとしながら見ていると……
「東郷先輩、ちょい自由行動していい？」
「え？あ、自由行動……うんいいよ！６時に最初の場所集合ね！」
「ありがと」
……おかしいなぁ。私以外の先輩には決してため口じゃない蒼井君が……
と疑問に思った直後……蒼井君がこっちに近づいてきて、私の左手首を掴んだ！
「ちょ、ちょちょちょちょちょ！！！」
慌ててバッグをつかみ、走り出した蒼井君のスピードに必死についていく。
「さーや！！」
背後から河野さんの声が聞こえてきて振り返ると……何やら、口が動いていた。
ガ、ン、バ、レ……？
む、無理だって！
だって、この先には……

第51話　クリスマス5～観覧車で～

「着いた着いた」
ウキウキしている蒼井君の声……それに反して、私の頭の中は大混乱。
理由は……1つ目に、いきなり連れてこられて、未だに手を掴まれてること。
そして2つ目に……この、ただならぬデカさの物体……
「この“観覧車”、日本最大級らしいよ！俺、こーゆーの好きなんだよね～」
すなわち背の高いものが好きってこと……？
むっちゃハイテンションだし……
徐(おもむろ)に目の前にそびえ立つ観覧車から目をそらしていると、蒼井君が私の顔を覗き込んだ。
「あ、もしかして観覧車苦手だったりする？」
「い、いや別にそんなことない！断じて！」
「だよなぁ。だってジェットコースターとか普通に乗ってたし」
いや、あのジェットコースターは地下を通る仕組みのやつだったんだけど……
もちろん、高いやつもあったけど、並んでいる間にうまくすり抜けてトイレの中に非難していた。
ていうか、この流れって……
「もしかして蒼井君、乗る気？」
「当ったり前じゃん！」
キラキラした瞳……完全に乗る気だ……
蒼井君に引かれるまま、観覧車乗り場へ。
迫ってくる順番……！
「でも今から乗って間に合うかな？6時に……」

「うん、余裕余裕。まだ5時だし」
乗る気を失せさせよう作戦第一弾、失敗。
第二弾は……
「じゃあ、カイジ君とかユウヤ君とかを誘ったら……」
「カイジとユウヤ、もうミイラ化してるし」
……失敗。実際あの2人は疲れ果てていた……
よし、第三弾！
「今からダッシュで亜珠華ちゃん連れてくるよ！」
「あ、次だ順番」
……観覧車、回るの早っっ！！
って思ってたら、私の傍を親子2人が通っていた。
……子供のほう、泣いていたような……？
つまり、観覧車を目前とした子供が泣き叫び、親はその子供を宥(ナダ)めながら……
それに気づかない私もスゴい。
私も泣き叫ぶ……？いや、プライドっていうもんが許さないと思う。
こうなったら……乗るっきゃないっしょ！！！

「お楽しみくださいませ～」
係員の人がそう言い、外から鍵を閉める。
ほぼ、閉鎖的空間。もう、戻れぬ……
「県庁所在地見えると思う？」
「うん……見えるんじゃないかな……日本最大級だしね……」
ヤバい。声が震える。三途の川がリアルに見える感覚……
と、その時……ゴンドラが大きく揺れ動いた！
「うわぁぁっっっ！！！」
咄嗟に叫んで、目を閉じた。
そして次に……私自身の体が何かに引っ張られて大きく動く！
「おわぁぁぁっっっ！！！」
ますます強く目を瞑(つむ)る。

マジで……本気で死ぬかもしんない！
まだやりたいこともいっぱいあるし……高校卒業してないし……まだ16なのに……！
「やっぱ観覧車苦手なんじゃん」
背後から、声がした。
目を開くと……目の前には、さっき座ってたはずの座席。
首には、誰かの腕……
「ここだったら、外見えないっしょ？」
確かに……窓を見上げても、暗くなりかけの空しか見えない。
……いや、それじゃなくて。
今私は……どんな状態？
「嫌だったら放すよ？」
……何も答えられなかった。
それを返答だと悟ったらしい蒼井君は、また腕の力を強くする。
……観覧車に乗っている、という現実に対するのとはまた違う意味の動悸が起こった。
早くおさまれ……って念じても、加速する。
このままでは――気づいてしまうかもしれない。
「……先輩は忘れてるかもしんないけど」
また後ろから、声が聞こえる。
「体育祭の時、借り物競争で先輩借りたっしょ？」
体育祭……そのフレーズでそれを思い出し、小さく頷く。
「その時、俺言ったんだ。先輩みたいに勇猛果敢になりたいって」

“「同性でも杉浦先輩みたいに勇猛果敢な人はいないよ」”
“「痴漢締め上げたりケンカの中に自分1人で入って行くし……ほんと、俺も杉浦先輩みたいになりてぇ」”

「んで、俺言いかけたんだ」

“「でもさ、俺……あ～、やっぱ何でもない」”

鮮明に、あの時の蒼井君が言ってたことを思い出す。
気になったけど、聞き流していた言葉。
「いくら強い先輩でも、絶対どこか弱いところがある、って」
うん……今まさに弱いとこだよ。高所っていう……
「そういうところを守りたいって、言おうとしたんだ」
……え？
「でも、あの時言ったら迷惑になるかもって思って言えなかった…
…あ、今もか」
「迷惑……って？」
無意識に聞いてしまう。

「だって、どう考えても迷惑じゃん。恋人がいるのに、他の奴から
好きって言われたら」

動悸も、思考回路も何もかも……体全体が、フリーズした。
胸から込み上げてきた言葉を抑えようと……口を手で塞ぐ。
……もう、ダメだ。気づいてしまった……

――最初から、ただ1人を人を……好きだって。

肩に何かが乗っかって、心臓が跳ね上がったと同時に現実に戻る。
「あ、蒼井……君？」
寝息が聞こえる。……寝てる？
弱くなった腕の力。それから上手くすり抜けて、蒼井君の横に移動
する。
再度、肩に乗っかる頭。
私は、自分の首筋に手をやる。……熱い。
「ん……あれ？どこだここ……」

起きたらしい彼は、辺りをゆっくり見回す。
天井、ドア、目の前の座席……そして、私。
「杉浦先輩……だよね？」
「う、うん」
どぎまぎしながら答える。
ますます、“ワカラナイ”といった表情を浮かべる蒼井君。
そして、立ち上がった。
ゴンドラが大きく揺れるけど……怖がる余裕がない。
「……分かった、ここ観覧車だ！」
まるで初めて分かったような声……
あれ？もしかして……
「……覚えてない？」
「え？何を？」
その顔は、まだあどけなさがかすかに残ってるような……すなわち、マジで言ってるらしくて。
全身の力が抜けて、座席にもたれかかった。
「とにかく……めっちゃすげぇ、名古屋の夜景……先輩も座ってないで見よーよ」
「絶対ヤだ……」
この人は一体……何なんだ？二重人格？

「大翔のヤツ、酒が全然ダメなんですよ」
帰りの車の中。メンバーは夏姫父、私、亜珠華ちゃん、カイジ君、ユウジ君。
2人に蒼井君は二重人格かを聞くと、カイジ君がそう答えた。
「……酒？」
「このチョコ、酒入りでしょ？それで酔っちゃったんだと思いますよ。東郷先輩にタメ語遣った時点で分かりました」
ユウジ君は、チョコの包み紙を出し、洋酒入りの文字を指し示す。
そっか、酔って……

だったらあれは、本心じゃないかもしれない。
それはそれで、なんか複雑だけれども。
「へぇ、そっか。酔い……チョコも侮り難いね」
「あ、もしかして先輩、大翔になんかされたんですか？大翔に言っておきますよ？」
「いや、何もないよ！うん。ただ観覧車に入った途端すぐ寝始めちゃったから……しかも、それまでの蒼井君、妙にハイテンションでらしくなかったし」
咄嗟の嘘。でもさすが1年生。ぱっと信じてくれた。

遠ざかっていく名古屋の夜景。窓に映る自分の顔……
我ながら、清々しい顔。

気づくための回り道は……決して、無駄ではなかった。

第５２話　父の言葉

静岡県に着き……そして東郷家に帰ってきた。
「２日間、どうもありがとうございました」
「いえいえ～！楽しんでもらえたかしら？」
「はい、おかげさまで」
夏姫の両親にお礼を言って、さようならのあいさつをして海宮市駅に向かう。
……が。
「Ａ市駅行き？大分前に終電行っちゃったよ？」
「うそ……」
……ガ――ン。まさに今そんな感じ。
確かに、もう午後１１時。終電行ってもおかしくない時間帯。
「そうですか……ありがとうございます」
駅員さんのもとを離れ、１人ベンチに座る。
まいったなぁ……お母さん、もう仕事から帰ってきてるかな。
でもＡ市から海宮までって電車でも４０分かかるし……
「杉浦先輩？」
「あ、蒼井君」
１人悶々と考えてて、蒼井君の声で我に返った。
「数学解くときみたいな顔してたよ？」
「え、マジ？」
あれ？この会話どこかで……
まぁ、いっか。
「帰り、どうすんの？終電ないっぽいけど……」
「それを今考えてんの。蒼井君は？」
「珍しく親父が家にいるから、迎えにきてもらう」
珍しく……なら、普段家にお父さんがいないのかな？
私は相槌をうつと、観覧車のことを思い出した。

「……蒼井君ってさ、お酒ダメなの？」
「酒？あぁ……カイジによると、相当ダメっぽい。少量でもすぐヘラヘラになるって言ってた」
ヘラヘラって……
「あのチョコ……遊園地でもらったやつ。あれ、洋酒入りだったの気づいた？」
「マジ？チョコレートって酒入れんの？」
ビックリしたようすで、私の方を見る蒼井君。
バチッと目が合う。
「……まぁ、種類によっては。体に害がない程度だけど……」
平然を装って目線をそらす。
「だから目覚めた時観覧車に……俺、もしかして無理矢理杉浦先輩誘った？だとしたらほんとごめん……」
「いや、もう過ぎたことだしいいよ。それより……」

“「だって、どう考えても迷惑じゃん。恋人がいるのに、他の奴から好きって言われたら」”

告白まがいのあの言葉の意味は……
「え？それより、何？」
「……やっぱなんでもない」
喉まで出てきた言葉を、必死に飲み込む。
やっぱ……聞けない。だってあれは、素面（シラフ）じゃないし。
いきなりそんなこと言ったら、「何言ってんだこいつ」って思うだろうし……
「あれ？誰だあの人……こんな時間に男1人って」
蒼井君がそう言い、見た先には……ダウンジャケットを来た、1人の男性。
「にしても、物凄いイケメンじゃん。彼女待ち？」
……あれ？どっかで見たような……

「先輩もそう思わない？」
「……あっっっ！！！」
あのほんの少し天然がかかった微妙すぎる髪……！！！その癖寝起きはスーパーサイヤ人みたいに爆発するあの頭は！！！
「おとーさん！！！」
「え……」
するとその人は私の方を向き、片手を上げた。

「よ、よんじゅうろく……！？」
やって来た私のお父さん、杉浦涼太郎（スギウラリョウタロウ）を蒼井君に紹介すると、彼は改めて父を凝視する。
「そ。生粋のアラフィーだよ」
「見えねぇ……最高でも２０代後半……」
「いやいや、２０代後半はキツいっしょ。最近老眼気味になってきたオッサンが」
２人が話している間に、ケータイをチェック。
お母さんからメールが入ってて……内容は、『お父さんが迎えに行ったから、私はソッコーで寝る』という、訳が分からないものだった。
「最初見たとき、沙彩の彼氏かと思ったが……違うんだね」
「はい。杉浦先輩は先輩ですし」
……その言葉に、チクッと胸が痛む。
杉浦先輩は、先輩。
当たり前のことなのに。
「……ちょっと温かい飲み物買いに行ってくる」
「おうよ。行ってらっさい」
その場にいるのがキツくなり、まだ開いている売店へ向かった。

その頃、足が疲れたのだろうか、涼太郎がベンチに座って空を見上げる。

大翔もベンチに座り、持っていたコーヒーを飲んだ。
「……さっきは先輩がいたからあんなこと言っちゃいましたけど」
白い息をはく大翔を、涼太郎は見る。
「杉浦先輩は、俺の中で凄く特別な存在なんです」
「……というと？」
涼太郎の目に映る大翔の目は、真剣そのものだった。
「先輩にとって俺は後輩でしかないだろうけど……俺は心から好きなんです。中学からずっと」
大翔の脳裏には……中学時代、荒(すさ)んでた自分の目に入ってきた、女神のような微笑みが浮かんでいた。
「いつか……ちゃんと伝えたいって思ってます。迷惑だと思うけど」
言い切った途端、大翔の目の前に黒い車がやって来た。
中には、サングラスをかけた中年の男性が乗っていた。
「……それじゃ」
「あ、あぁ。まぁいろいろと頑張れよ」
「はい」
涼太郎の言葉には、俺は一切干渉しない、という意味も入っていて。
……こいつは、なかなかいい男かもしれない。
過ぎ去っていく車を眺めながら、涼太郎は思っていた。

「あれ？蒼井君は？」
売店でカフェラテを買い、その近くでそれを飲んで元のベンチに戻った時にはもう、蒼井君はいなかった。
「さっきお父さんらしき人に乗せて帰ってもらったよ」
「そーなんだ……」
……もうちょっと話したかったな、と思った。
けどあのままここにいたら……どうなってただろう。
「沙彩、夜食でも食い行くか」
「え……マジ？」
光る大通りを指差し、小走りでそこに向かう父の背中を追った。

「わぁ、超カッコいい！」
……それ、さっき同性の人も言ってました。
「誰あれ……彼女？」
……娘なのだが。
「佐〇健みたいなんですけど！！！」
……よく言われてます。
予想通り、大通りに出るとお父さんは注目の的。
「お父さん、せめてタックインして七三分けのルックス……まぁつまりもうちょっとダサい格好してきてよ」
「やだね。彩華がいる前でダサい格好なんてしてられるか」
……あなたたちどこまで気分が高校生のままなんですか……
「とりあえず、夜食の定番はラーメンだよな」
「……絶対低カロの塩で」
ラーメン店の前に来て、早くもメニューを決めてしまった。

ラーメン店に入り、店員を呼びつけて私は塩ラーメン小、お父さんは豚骨ラーメン大とチャーシュー山盛りラーメン大とバニラアイス大を頼む。
「そんなに食って大丈夫？ほら、メタボリックシンドロームとか……」
「海上自衛隊の夜食はこれの比になんないぞ」
……そうきたか。
「ていうか、単に目立ちたいだけじゃないの？」
「海上自衛隊の中で目立つことは全くない。だから帰省したときぐらい目立ってもいいだろう？」
うわ、肯定しちゃったよこの人……
残念ながら、私にはそんな気持ちは分かんない。
そして訪れる沈黙……まぁ、父娘ともに無口だからやってくるのはしょうがない。

ケータイを開けて、メールを確認。
……桃花から来てる。またユースケ絡み？
「……沙彩さ」
「ん？」
「今好きな人とかいるのか？」
「ん～……いる、よ」
メールを打ちながら、特に何も考えずに応答する。
「それは、夏の頃とは違う人か？」
「うん……そう、だね～……」
って……
「なんで分かるの！？」
「俺、エスパーかもしれない」
いや、いくらお父さんでもその冗談は通じない……
まさか、ここ何ヶ月間ずっと監視されてたとか！？
「いや、冗談冗談。勘だよ勘。女の勘ならぬ男の勘ってやつだ」
……うわぁ。物凄く当たって欲しくないかも、その勘……
「まぁ、いい。沙彩、今度付き合うとしたらちゃんと自分が心から好きな男と付き合えよ？」
そう言い、やって来た豚骨ラーメン大をツルツル食べ始めるお父さん。
……分かった。お母さん情報だな。
本当、夫婦揃って……侮(あなど)れない。

第５３話　学年トップ

それから、新年。
一応ちょっとは勉強しつつも、ほぼダラダラした生活を送っていた。
その間にお父さんは海にまた帰った……いや、海に帰ったって死んだみたいだな。
正しくは、仕事に戻ったってとこ。
お母さんもまた刑事の仕事に戻り、私も今日から学校。またいつも通りの生活スタイルに戻った。

「おっはよ～！さーや！」
電車に乗り込むと、まるで「心機一転しました」と言わんばかりにキメてる夏姫が笑顔で手を振ってきた。
「……３学期デビュー？」
「ま、そーいうとこ？コスメも新しくしたし～！」
私はというと……特に何もなく。いつものごとくストレートにマスカラとリップつけたぐらいだ。
大体私に心機一転なんて言葉は不相応だ。
「にしてもさーや……相変わらずスゴイね」
「何が？」
「こんな真冬なのに移行期間服なんて……」
長シャツにセーターかベスト。これが海宮高校の夏服から冬服ｏｒ冬服から夏服への移行期間の制服だ。
……確かに夏姫の言うとおり、周りで寒々とした感じでブレザーを羽織い直している女子高生数人と比べちゃあ、だいぶ私は変わってるのかもしれないな。
「わぁ、見て見て！イケメン四天王！」
「マジ！？新年早々拝めてラッキー！！」
周りの女子高生が色めく……彼女らの視線の先には、蒼井君にカイ

ジ君、ユウヤ君、シゲオ君。
……うん。女の子が騒ぐだろうな、この４人が一緒にいると……
「ほんっと、新年から超注目の的だよねぇ。１－Ｄ四天王メンバーは」
夏姫が「やれやれ」と言った感じでケータイを開けた。
なんか……２学期の最初みたいだ。

電車から降りて、歩く。
珍しく寝坊しなかったためか、だいぶ時間に余裕があった。
「見て見て！これ、たっくんと撮ったプリクラァ！」
と、夏姫は自分のケータイの裏を見せ付ける。
「キスプリじゃん。よくつける勇気あるね」
「あったりまえじゃん！愛の証だよぉ！」
愛の証って……ちょっとサムいぞ。いやサブいぞ。
思えば……唯との思い出の品、って少なかったな。あのミニーのストラップだけ……
と、ぼんやり考えてると……
「おわっ」
背中に何かがゴスッと刺さり、私は訳分かんない声をあげ、ぶつかってきたものは「……あ」って言う。
「すみません、前見てなくって……」
振り返ると……２つ結いの女の子がいた。
……あれ？この子、どっかで……そうだ、１年でトップの窪田（クボタ）恵夢（メグム）だ。
その子の手には、英単語が書いてある。
「窪田さん、勉強するのはいいけど前見てないと危ないよ？電柱にぶつかって頭おかしくなったら、新学期テストがうまくいかないじゃん？」
「え、なんで私の名字……」
「結構先輩の間でも有名だったりするし？」

「そうそう！私も知ってるよぉ！」
夏姫も知ってるらしく、話に入ってくる。
「よかったら一緒に学校行かない？」
「は、はい」
……ということで、久しぶりに女3人、という形態で学校に向かうことになった。

「へぇ、入学した時からトップかぁ」
「はい。新入生テストからずっと……やっぱ、誰にも譲りたくないんで」
窪田さんの口から、感心する事実が飛び出す。
新入生テスト、1学期中間期末、2学期中間と、ずっとトップを死守してきていること。
「え、じゃあ2学期期末は？」
夏姫が、ふとそう聞く。
窪田さんは「えっと……」と声を詰まらせ、
「……奪われちゃいました」
彼女はへへッと笑った。
「奪われちゃった……？」
「え～、誰に？ず～っとトップの天才ちゃんを誰が追い越しちゃったの？」
「さすがにそれは分かんないです。成績は非公開だし……」
そう。海宮高校は成績を貼り出す措置をとってない。
だから、人に教えない限り順位がもれることはないのだ。
「まじない部の1年生に占ってもらったら？」
「その1年生が私の友達なんですけど……出てきませんでした」
……まじない部、しっかり。
「だから新学期テストでは絶対1位を挽回したいんです！」
と言い、窪田さんは意気込む。
「ね～メグちゃん、そんなに勉強しておもしろい？」

夏姫はズバッと聞く。
「おもしろくはないですけど……勉強が唯一の、私が全力で戦えるものなんで。戦うからには、勝ちたいんです」
おぉっ。なんか深イイ発言。
「そっか。頑張ってね」
気がつくと、もう学校に着いていた。

「おっはよぉメグゥ！」
教室に着くなり、原美来（ハラミライ）……例のまじない部の唯一の1年生部員が私に飛びつく。
「おはよ、美来。歩海は？」
「歩海はまだ朝練だよぉ！」
「へぇ。毎日頑張ってるねぇ」
歩海とは、高倉歩海（タカクラアユミ）のこと。
バスケ部に所属してて、1年生で唯一のレギュラー。チームの一員として強くなる為に毎朝の朝自主練と部活と社会体育への参加と帰宅後トレーニングは最早日課らしい。
「んで、どう？美来のまじない的に……1位っぽいのは」
「う～ん……結局メグ以外見つかんなかった……だってメグ以外に頭いー人なんていないもんっ！！！」
なんて言って、泣き出す美来を宥めた。
……一体、誰なんだろう。
分かったら、実際に会ってどれほどの人なのか確かめたい。
その人を、新しいライバルにするんだ……
私は立ち上がり、職員室に向かった。

HR中、先生から貰った1年生の名簿を眺める。
A組からC組まで見てみたけど……やはり、「この人！」っていう人は見つからなく。
D組に目を向けると……最初に飛び込んできたのは、「蒼井」とい

う文字。
「ああ、例の転入生……」
美来の好きな人……まぁミーハー心かもしんないけど。
どう考えたって、2学期からの転入生に抜かされるわけがない。
現に中間でも1位だったし、私……
「くーぼたっ！どーした？そんな怖い顔しちゃって～」
隣のお調子者の坂村（サカムラ）が私の頬をつつく。
「いや、別に……」
「ふ～ん。ま、いーけどさ。その紙何？」
「1年生の名簿だよ」
へぇ、と言って坂村は私の手からそれを取る。
「おっ、大翔ちゃんと出席番号1番じゃん！2学期中ずっと最後だったもんなぁ。『和田』の次で『蒼井』っておかしくね？と思ってたけど……よかったよかった」
「何、坂村、蒼井っていう人のこと知ってんの？」
「知ってるも何も、家結構近くてチビの頃よく遊んでたかんなぁ。まぁ幼なじみってやつ？」
家結構近いっつっても隣家じゃないんだけどな、と坂村は付け加えた。
「蒼井って、どんな人？」
「おっ、何何？恋しちゃってる系？」
「断じて違う」
そう言うと、坂村はうーんと考えるようにうなった。
「一言で言うと……頭脳明晰、神経抜群、容姿端麗、才色兼備、完璧、ＡＬＭＩＧＨＴＹ」
「一言じゃないじゃん……つまり、どういう？」
「つまり……めちゃくちゃ頭いいのは確か！学年で1位取ったし！足も超速ぇんだよ！１００Ｍ１０秒とかで走ってさ！おまけにイケメンだし、常ににこやかで爽やかで……とにかくモテるのなんの！告られた人数、もう５０人越えちゃってるしよぉ！ったく、なんで

あんな完璧な野郎がこの世にいるのか……神に問い質したいぐらいだわ」

へぇ、まるで絵に描いたような完璧少年……それが、夏休みに見た咲良ちゃんと一緒にいた無愛想で取り柄なさそーな男子とは、やっぱり思えない。

足速くって、顔よくって、正確よくって、学年トップだなんてさ。

……ん？

「……学年トップ？」

「そ。中間の時は検査入院してたから受けてないっぽいけど。期末で初登場1位！みてーな。あ、オリコンじゃねーぞ？」

……私はガタッと席を立ち上がり、教室を飛び出した。

第５４話　新学期バトル

「おい窪田！まだホームルーム終わってねーぞぉ！！！」
担任の声も気にせず、反対側校舎のＤ組へ。
走ってる途中にホームルーム終了を告げるチャイムが鳴った。

Ｄ組に到着し……
「蒼井大翔はいる！？」
ガラッと戸を開ける。
教室内がシーンと静まり返った。
「委員長なら、さっきダッシュで会議室行ったぞ？」
「ほんと、あのダッシュは風みたいだったし！」
「なぁ！ほんとヤベェ！」
ダッシュのすごさについて、またざわつきを取り戻したＤ組。
「へ？会議室？」
委員長が集まる会議室。ホームルームの前に集う。
その日の授業について、変更などの伝達事項を教頭から聞き、それをクラスみんなに伝える。
「でも、今更……ホームルーム終わったし」
「あ～あの委員長……」
と、目の前の男子が言いかけたとき……
「今日の５限目の英語、リーディングからライティングに変更！あと選択語学でフランス語とイタリア語とってる人は１－Ａに４限目に集合な！」
後ろから、ざわめきをピタッと止ますほどの声が聞こえてきた。
「よっ！ド忘れした委員長、お疲れ！」
「ああ。ほんっと忘れてた……冬休みボケってやつ？」
「授業の伝達ぐらい、浅田（ガクタン）がやればいーのになぁ？」
私の頭上で交わされる会話……

そりゃあ、私は背がちっちゃいですし……ノープロブレムだろうけど……

「……頭上で会話すんの、やめてくださらないかしら」

わざと“かしら”口調で言って、振り向く。

「あ、ごめん。えっと……誰だっけ」

……ほんと、ありえないぐらいのツケメン……いや、イケメンがそこにいた。

「マジ？中学生からずっとトップ死守って……」

「……随分と疑ってる口調だね」

「そりゃあ」

そのD組委員長に期末のことを聞くと……あっさりと、「うん」って答えられた。

で、私のことを話すと……この反応。

「じゃあ……」

と、私はケータイを開く。

「これでどう？」

と言って見せたのは、中1の1学期中間から高1の2学期中間までの成績表の写メ。

順位欄のところは、常に一桁。総合順位に関しては、1以外をとっていない。

そこを見てほしかった。だが、この“どこかズレたD組委員長”は……

「スゲェ、全教科の平均偏差値85．8じゃん。うわ、90以上とかあるし」

……偏差値に目がいったらしい。

しかも、この10数秒間の間で中1から高1までの全教科の偏差値平均を暗算で編み出してるし……

……うん、帰ってほんとに合ってるか確認してやる。

って……

「いや、本題これじゃないし！」
いつの間にか、自分中心になっている。
委員長の手からケータイを取って、パチンと閉める。
「単刀直入に言うけど……」
「ん？何？」
「勝負しよう、今日明日明後日の新学期テストで」
……案の定、委員長は何も言わない。
でも、ニコリと笑って……
「うん、いーよ」
いともあっさりと承諾した。
よし、あと１５分間……みっちり勉強するぞ。

それから、３限目までみっちりテスト。
我ながら、完璧な出来……×をつけるとしたら、どこにつける？と、先生に問い質してもよいぐらいの解答用紙を提出した。
そして、明日明後日。それを繰り返して……
「ふあ～っ！やっと終わったぁ……」
美来が私の机に来てのびる。
「ここ３日間、メグとちょっとしか話せなくてつまんなかったよぉ」
「ごめんごめん」
「ま、メグはテスト前になると、ほんっと“近寄らないでオーラ”をガンガン放出すっからね」
歩海も来て、坂村の席を借りて座る。
「そこんとこは美来も分かってるよ。ね？」
「う～……そうだけどさぁ……」
窓の外を見る。
丁度、反対側の校舎にいる蒼井大翔を見つけた。
「……絶対１位を奪回してやるんだから……」
そう呟き、拳を握り締めた。

「さーやぁ！どうだった？テスト～」
「あ～、うん。まぁまぁだったよ」
新学期テストが終わり、４限目。
３日間に渡って取り組んだテストが一度にドバッと返却された。
まぁまぁ……とは言いつつも、結構ヤバいかもしれない。
「へ～……どれどれぇ」
「あ、ちょっと夏姫！」
気がつくと、夏姫は私の答案用紙を手に持っていて……
「数学……４５……理科の生物……５１……」
ズタボロなその紙を、慌てて奪い返した。
「相変わらず、理数系は凄まじいね、さーや」
ニコッと笑う夏姫。
あ～もうっ！このクラスは？型だから理数系はどうでもいーの！（？型＝文系。ちなみに？型＝理系）
って、自分で言って自分で疑心を抱いてるのが否めない……
「大翔君に教えてもらったら？」
「・・・」
夏姫にとって、私の理数技能は蒼井君より下ってことか……
いや、ていうかそれ以前に教えてもらうとか無理。心臓がもたん……（そこか）
「……たっくんって？型だったっけ？」
「？型だよ」
「じゃあ、唯って理数の成績よくなかったかなぁ……？」
「２学期の理科と数学の成績、１って言ってたよ？」
「じゃあ、伶君は……」
「そりゃあ、伶君はほとんどオール５に近いって言ってたけど……バカンス中じゃん」
……そう。あのお坊ちゃまは冬休みが終わったにも関わらず、ローマの休日を楽しんでいる。
つまり、イタリアにバカンスに行ってるんだ。

「……もういいよ、数学と理科は。諦めた」
「そういや、さーやの進路ってどこだったっけ？」
「一応、瀬名大島大学」
瀬名大島大学……東京都にある大学。（※架空です）
公立大学の文系の中でも、特にレベルが高い大学だ。
「へぇ、瀬名大島かぁ。私はイザベラ女子大学！」
「イザ大って……私立かぁ。いーなぁ」
夏休み前。第一希望だった私立を断念せざるを得なくなった。
「まぁ、お互い頑張ろう！」
「……うん」
でも、今では瀬名大島もなかなか魅力的に見える。

私の夢は、検察官。
物的証拠を探し出して、法廷でそれを基にして被告人の有罪を主張する。
昔から、お母さんに憧れて夢見てきた職業なんだ。
まぁ、お母さんは刑事なんだけどね。

「え――――――っっっっっ！！！？？？」
どこからともなく、馬鹿にデカい超大声がきこえてきた。
「誰だろ？」
「さぁ？今、1年のテスト返却と順位表配布の時間長引いてるから……思惑通りの順位じゃなかったんじゃない？」
窓の外を見て、答案用紙を返却している1年E組の教室を覗きながらそう言った。

第５５話　罰ゲーム

総合成績、２位……

「あ、また来た」

D組の戸をガラッと開けると、友達と喋っていたらしいD組委員長がこっちに向かってきた。

「……勝っちゃった」

「あはは……」

笑ってみるも、最終的にはため息をつく。

「なんで君、そんなに頭いいわけ？」

「それは俺から説明しよう」

という低い声が聞こえてきて、１人の男子が私に耳打ちする。

驚愕すべき理由だった。

「へぇ……そんなことあるんだね」

「え、何何？俺がどーかした？カイジ、この人になんて言ったの？」

「その前に、お前いい加減覚えろよ、この子の名前。窪田恵夢さんだろ？」

あ、そういや自己紹介してなかったっけ。今更だけど……

でも、このカイジって人が紹介してくれたから、手間が省けた。

「ま、私の名前覚えてくれなくてもいいんだけどさ……この勝負、あんたの勝ちだわ」

と言って、成績表を見せる。

２位、という文字が鈍く輝いていた。

「罰ゲーム、何がいい？」

「罰ゲームとかあったっけ？」

「今作ったの。罰ゲームなしの勝負なんて味気ないじゃない」

「そっか」

委員長は、少し唸る。

……いや、名前は委員長じゃないや。蒼井だ。
そして何かひらめいたように彼は顔を上げると、メモ帳らしきものに何かスラスラと書き始めた。
「ここに来てくんない？今度の日曜、えっと……9時あたりに」
「え？」
渡されたのは、やはりメモ帳。B市明野善町4丁目538番地……
「遠っっっ！！！」
ただでさえB市自体遠いのに、明野善町って……ほぼ山ん中じゃん！
「そ。超ド田舎って言われてる」
「じゃあ、その超ド田舎での罰ゲームって？」
「……それ言ったら断られるかもしんないから、秘密」
と言って、少し笑った。
いや、罰ゲームなんだから断るも何もないっしょ……
「……分かった。今度の日曜ね？」
丁度塾も休みだし、日程的には大丈夫。
だけど、そこで何をするのかは見当がつかなかった。

そして、日曜日。
「明野善町、明野善町に停まります」
60分電車に揺られ、何分もバスを乗り……やっと明野善町到着を知らせるアナウンスが流れてきた。
バスを下り、ケータイ片手に明野善町を徘徊（？）すること10分……
「……わっかりやすいなぁ」
白い棒みたいなのが立ってあって、“こっから2丁目”って書いてあった。
こっからは、持ってたケータイの地図機能を使う。
その地図の中には、住宅地ならそれぞれの建物の番地が載っている。
昨日調べたら、結構デカいスペースに“538”とあった。
「多分、あんだけデカいからビル……いや、こんな山の中だし、工

場とか……」
その地図を見ながら歩き、“５３８”の前に立つ。
ここだな。
顔を上げると……
「……！！！？？？」
思わず、口があんぐり開いた。

「違うよ。工場じゃないし、ここ。母方の親の家……まぁ簡単に言うと“祖母の家”かな。忠義（おじい）さんは結構前に亡くなったし」
数分前、目の前にしたのはでっかい門。
その奥にそびえ立つ、ばかデカいホワイトハウス……
唖然としてると、門が開き、ジャージ姿の蒼井がどこからともなく現れ、私は今、ばかみたいに煌びやかな赤絨毯敷いてる廊下を歩いている。
「へ、へぇ……」
「んで、罰ゲームっていうのは……」
結構歩いてたどり着いた、でっかい扉。
蒼井はその扉を開ける。中には……
「あ、ひろとくん！おかえりなさい！」
可愛い女の子が、積み木をして遊んでいた。
「……えと……誰？」
「まぁ、簡潔に言うと俺のいとこ」
「じゃあ、罰ゲームって……」
ジャージ姿の蒼井を上から下まで見る。
そいつは苦笑いを浮かべていた。
「罰ゲーム……っていうか頼みなんだけど、その子……るいの面倒みてやってくんない？」
……マジで？

「わぁっ！お姉ちゃんすごぉい！！！」

１０数分後、蒼井はお守りを頼んだ後、「じゃあ、俺部活あるから。あと、飯は作っといたから適当に食って」と言い残し、風のように消えた。
そして私はこの、るいちゃんっていう子の面倒をみている。
「……よし、完成」
「わぁっ！！おっきい！すっごぉい！！！」
手を叩いてはしゃぐるいちゃん。
うん、我ながらバランス感覚を重視した、素晴らしい積み木作品。
「るい、これ乗っける！」
あ……その積み木を乗せたらバランスが……！！！
と思ったが、時既に遅し。
どんがらがっしゃーん……という擬音語がピッタリ合うような音で、力作は崩れ落ちていった。

それから小１時間遊んだあと……
「るい、疲れちゃったぁ……」
さすがに疲れたのか、そこら辺に寝そべるるいちゃん。
「じゃあ、お片づけしよっか」
「えぇ～……いやぁ。めんどくさぁい」
「文句言わないの。はい」
「う～……」
積み木を手渡すと、るいちゃんは渋々といったような感じでそれを片付ける。

「るいちゃんは何歳？」
「５歳！亜珠華ちゃんと同じだよ！」
「へぇ、５歳……じゃあ、年中さんだ」
亜珠華ちゃん、っていうのはスルーしておいた。
「お姉ちゃんは、ひろとくんのカノジョ？」
「ううん。同級生で……戦友ってとこかな」

「センユウ？」
びっくりした。カノジョっていう単語が５歳児から出てくるとは……
「うん。戦う友達ってとこかな。……ん？いや、友達じゃないなぁ。じゃあ何だろ……戦う相手？いや、それじゃ敵対視オンリーになっちゃうし……」
ブツブツ言ってると……
「……あら」
るいちゃんは、眠っちゃっていた。

「ほんと、助かった！ありがと」
「どーいたしまして。まぁ、何時間ぐらい暇だったけどね……」
午後６時。蒼井が帰ってきた。
「先週さ、いきなりおばさんが来て「るいを１週間預かって」って言うもんだからさ……それまでは幼稚園に預けたりしてたんだけど、日曜日はその幼稚園の子以外預かり禁止になっててさ。俺は１１時から部活だったし、親たちはいないしベビーシッターとは都合が合わなかったし家主は出張で留守だし……でめっちゃ困ってた」
家主……って、おばあちゃんだよね？
おばあちゃんが出張って……
「……あんたも色々と大変だね。よくそんな中でトップ……」
「偶々（たまたま）だって」
……うん、ちょっとイラッときたぞ。

そのまま蒼井は寝ているるいちゃんを抱きかかえ、私と３人でバス、電車と乗り続けた。
「でもさ、なんでおばあちゃんの家にわざわざ移動したの？」
「ああ、俺の家朔良町なんだけど……結構近いし、これ一応頼む形とはいえ罰ゲームじゃん？」
なるほど。納得。

それから電車で２０分後、Ａ市駅に着いた。
「そんじゃ、下りるわ」
「うん、バイバイ」
そう言った後……なぜか心の中に残る、何か。
電車から下りて、私から見える窓の外を歩く横顔を見た。
……綺麗。
素直に、そう思う。
男子を綺麗だなんて思ったこと、初めて。
同級生の男子はふざけていて、下ネタ好きで、うるさくて……
でも蒼井は、そんなんじゃない。
すごく……すっごく、綺麗。
気がつくと、何かに縋るように窓へ近づいていた。
まだハッキリと見える、けど徐々に駅の出口へと向かう後姿。
そして、何か見つけたのか……軽く走って、出口へと向かう。
そして、誰かに話しかけて……
……女の子？よく見てみる。……やっぱり、女の子だった。
チクッと、胸が痛む。
まるで、話さないで、と心が叫んでいるような痛み……
……電車は動き出し、その２人の姿は見えなくなった。
座席に座りなおして……考えた。
私……いつのまにか蒼井に、恋してる。
――――……
電車から下りて駅の出口へ向かっていると……好きな人、の後姿が見えた。
「杉浦先輩！」
そう声をかけ、振り向いた顔が杉浦先輩だと確認して、軽く走る。

「あ、蒼井君。どしたの？」
「ちょっと明野善行ってた」
「あ、明野善って……こりゃまた遠いねぇ」
「まぁちょっとね」
先輩は、俺が抱えてるるいの顔を見た。
「この子、亜珠華ちゃん？」
「ああ、俺のいとこの、るい。亜珠華と同い年なんだ」
「へぇ。可愛いね」
そーでしょ？と言うと、イトコンかって言われた。
イトコンって……糸蒟蒻（イトコンニャク）の略みたいだな。
「るいちゃんと明野善で遊んだの？」
「いや……罰ゲームでお守りを頼んだってとこかな」
「え、誰に？」
誰に……と聞かれ、窪内……いや、窪谷……まぁ、窪なんとかっていう人を思い浮かべた。
「……戦友？」
「へぇ、戦友。じゃあ、カイジくんとかと違う友達ってことだね」
「いや、友達ってワケでもなく……女子だし。まぁ、ライバルっていうとこかな」
……いきなり、会話が止まった。
るいを抱えなおし、先輩を覗き込む。
「どーしたの？」
「あ、いや、なんでもない……今日さ、桃花とユースケと遊んだんだ」
「桃花とユースケって……あのギャルカップル？」
1年の間でも有名な、ギャルカップル。
杉浦先輩は「そうそう」と頷いた。

それから、自転車には乗らずにずっと先輩と喋っていた。
自転車に乗らなかったのは、るいがいるからと……先輩と喋りたか

ったから。
まぁ、杉浦先輩はそんなこと察してないと思うけど。

「それじゃ、また明日から学校だし、がんばろーね。バイバイ」
「うん、また明日」
そう言って先輩と別れると、るいをまた抱えなおした。
ライバル……か。
これからまた色々、定期テストとかでバトルすることになんのかな。
「……がんばろっと」

空にはオリオン座が明るく光っていた。

第５６話　実行委員

黒板に記される、５つの名前。
“有野陽一”
“高杉唯”
“日比野潤”
“垣端薫”
“杉浦沙彩”
「え～、推選で選ばれたこの５人……いや、４人は教卓に集まってください」
クラス委員長の日比野（ヒビノ）は自分を除いた４人を教卓に集める。
重い腰をあげて私も教卓の方へ向かった。
「どうやって決めます？」
「くじ引きとか？」
「改めて票を採る、ってのは？」
「それ、めっちゃめんどくさいし……」
「もう、ここはいっそのこと公平にジャンケンで……」
みんなが議論してるのは……文化祭実行委員として推選された５人のうち、どうやって正式な実行委員を決めるか。
悲惨なことに、男女１名ずつではなく、各クラスごとに１名だけを選出する。
つまり、クラスの文化祭を吉と出すか凶と出すかは１名の肩だけに重く圧（の）しかかる……ってこと。
推選されたのは、吹奏楽部部長の有野、唯、クラス委員長の日比野、茶道部部長の薫、そして（一応）声楽部の私。
唯以外は全員文化部……という、かなりインドア系な人間ばかりが選出されてしまった。
そして、議論はなかなか結論せず……
「じゃあさ、こーゆーのはどう？」

真ん中の列のいちばん前の席……うるさい奴の指定席でもある席に座っている中島が、議論に入ってきた。
「紙に5人の名前書いて、裏返して重ねてよくきって……委員長に1から5の番号言ってもらって、上からその番号にあたる人を実行委員にするっての！」
「それ、くじ引きとかぶってんじゃん……」
「いーんじゃない？もうそれで。時間もかなり押してるし」
私はそう言い、終了5分前の時計を指し示した。
「……そーですね。杉浦さんの言う通り。じゃ、ちょっと待ってください」
日比野は自分のポケットからメモ帳とペンを取り出すと、5人の名前をスラスラと書き始めた。
……メモ帳とペンを常備してるって……すごいな。
書き終えたらしく、日比野はその5枚の紙を私に渡してきた。
「杉浦さん、きってください」
「あ、うん」
トランプのカードをきるみたいに、よくきる。
「できたよ。数字は？」
「僕と彼女の記念日が3日だから……3」
へぇ。こんなインテリにも彼女できるんだね。
1枚目の紙を表にかえして机に置く。
その紙には……“高杉唯”とあった。唯は軽くガッツポーズをする。
2枚目は……“垣端薫”。薫もこれまたガッツポーズ。
残った有野と日比野と目を見合わせる。
この3人の中の1人が……実行委員。なる確率は、ひとりひとり平等に3分の1……
どうか、当たりませんように。
そう思いながら、運命の3枚目の紙を表にかえした。
――――……

「あれぇ～？さーやも実行委員なの～？」
……放課後。会議室。
「うん……桃花も？」
３枚目の紙に名前があった私は、渋々と会議室に行き、所定の席についた。
そんな私に話しかけてきたのが、桃花。
「そうだよぉ。クラスみんなでジャンケン大会して……決敗戦で負けちゃって……とんでもない不運って感じ？」
決敗戦って……決勝戦の対義語みたいだな。
ていうか、１クラス４０人近くいる中で負け続けたっていうのも凄い。
あとの４クラスの実行委員も、みんな表情を暗くして会議室に集まってきた。
「よぉ！みんな集まったか～い？」
去年のクリスマスに結婚した、幸せいっぱいの例の巨大先生がハイテンションな声で会議室に入ってきた。
「Ａ組の田中、Ｂ組の安藤……よし、みんないるな！」
……お～い、ＣＤＥＦ組の確認はせんのか～い……
「ところで、体育祭のときのブロック分け覚えてるかい？」
「覚えてる？」
「え～、どうだったっけ～……」
周りがざわつく中、私はしっかり覚えてた。
３年Ａ組、１年Ｄ組と同じ水ブロック。団長は小原先輩。
「覚えてる奴は、今すぐ同じブロックの３年の教室へ移動！忘れてる奴は聞きにこ～い！」
ペンケースをもって、３年のＨＲ棟へ向かった。

「お、２年の実行委員？」
教室の中にいたのは……金髪のロン毛男子。

「そうですが……」
机に足をドカッと乗っけている姿をじっと見て見る。
……いかにもこんな、“アイ・アム・ヤンキー”な人、３－Ａにいたっけ……
「後輩にとってはお初かな。俺、武田武蔵（タケダムサシ）っつーの。武田信玄の武田に宮本武蔵の武蔵。うぜぇぐらい“武”が入ってんの。よろしくな。君は？」
「あ、はい。よろしくです。２－Ｄの杉浦沙彩です」
「へぇ。んじゃあ、沙彩ちゃんは名字名前にうぜぇぐらい３画のやつが入ってんの？」
「察しの通りです」
比較的、落ち着いた方のヤンキーだなぁ。桃花とかユースケとかと違って。
……いや、性格が落ち着いてる分外見がド派手だけど……
よく見てみたら、ピアスは１０個つけてるし冬のクセして超ガングロだしネックレスとかじゃらじゃらつけてるしブレザーのボタン全開けだし腰パンだし。
「失礼します」
後ろから、なじみのある声がして、振り向いた。
「おっ！１年実行委員？超イケメン君だねぇ」
「はい」
……その“はい”は、”実行委員？”という問いかけの“はい”か“超イケメン君だねぇ”に対する“はい”かは分からない。
「蒼井君……」
「あ、杉浦先輩も実行委員？」
脈が早くなるのを感じた。

第57話　ブロック曲

なんか、初めて実行委員になれて嬉しいって思った。

「……で、俺は更生の道を歩み始めたってワケ。3学期から」

武田武蔵先輩のトリビアを長々と30分も聞いた。

まぁ、超省略すると……もともと荒(すさ)んでいた武田先輩は、3年の3学期にまっとうな人間になろうと急に思い、更生の道を志したという。

そのスタートラインが、実行委員の立候補だったらしい。

「あの……早く会議始めましょーよ。別のクラスの人、切り上げてますよ？」

蒼井君が廊下を指した。

隣のB組……風ブロックだった1・2・3年生が談笑しながら歩いている。みんな女子だった。

「ああ、そうだね。んじゃ、まず各クラスでの出し物の決採っといて。んで、俺らが話し合うのは、ブロックの曲」

「ブロックの曲？」

中学の時はやらなかった“ブロックの曲”について蒼井君に説明した。

「文化祭の2日目に各ブロックで合唱やるんだ、毎年」

「へぇ。おもしろそうだね、それ。ざっと数えて120人の大合唱……杉浦先輩は去年何やったの？」

「んと……クラスでカレーの模擬店、ブロックではキスケの“白いベンチ”。結構ウケたよ」

「え、笑いで？」

武田先輩の視線に気づき、会話を中断した。

先輩は何故かほのぼのした目で……

「仲いーねぇ、2人とも。さっさと曲決めちゃおっか？」

「あ、はい」

――――……

下校時間ギリギリで、ようやく学校を飛び出した。

「保留……かぁ」

武田先輩には彼女がいるらしく、校門で根気強く待っていて……

そして私は今、蒼井君と駅のホームへ向かっている。

「まぁ、男女兼用の曲ってそうないからね」

……そう。女性アーティストの曲だったら男子にとってはキツいし、男性アーティストの曲だったら女子にとってキツい。

決まったとしても、ソプラノ・メッゾソプラノ・テノール・バリトン・バスとオペラ並みにパートが分けられるから、音楽の先生と協力して編集するのも大変。

「いろいろ大変だけどさ、がんばろうね」

「うん、もちろん」

にこっと微笑む蒼井君。

……この笑顔を見たら、大抵の女子は卒倒だろうな……って考えた。

私も、その“卒倒する女子”の1人だろうけど。

同時に、最近気になっていたことも浮かんでくる。

あの日……あの観覧車での言葉は、幻じゃなかったのかって。

私の幻聴なのかって。

「……ねぇ」

「ん？」

私は立ち止まり、呼びかける。

3歩ぐらい進んだ蒼井君は振り向いた。

「クリスマス……正確に言えば26日なんだけど……観覧車でなんて言ったか、本当に覚えてない？」

彼の表情は、いつもみたいに“あどけなさを残した大人っぽい表情”で。

「……うん、どうしても思い出せない。結構努力したんだけど」

「……そっか」

――残念。

そんな感情たっぷりで笑顔を作った。

思い出してくれれば、もうちょっと私の方を見てくれるのかな……って密かに期待してたから。

「気に障るようなこと言ってたら、ごめん」

「ううん、そんな気に障るってことじゃないから。……全然、嫌なことじゃないし」

蒼井君があのことを思い出したら、きっと私の想いもばれるだろうなって、言った後に思った。

彼は「ならよかった」と、安堵の表情を浮かべてまた足を進めた。

1週間後。放課後、3年A組にて会議。

「沙彩ちゃん、何かいいやつない？」

「ないですねぇ……」

なかなか曲が決まらず、右往左往していた。

「んじゃあ大翔君は？」

「うーん……最近の曲ってあまり聴かないんで……」

……蒼井君、流行に疎いのか。

にしては私服のセンスは凄くいいと思うけど……

ちなみに今日のＬＨＲでクラスでの出し物は即決した。

題して“２－Ｄカフェ”……素晴らしく凡庸。

“２－Ｄカフェ成功同盟”も作って、これから本格的にカフェの模擬店の準備が始まるってとこかな。

「……そうだ」

テーマを3人が悶々と考えてると……私の脳裏に、衝撃を受けた楽曲が浮かんできた。

「アラメスの“ＩＷＹＨ”は？」
「あ、いいねぇアラメス。古すぎず新しすぎず……幅広い年齢に通用しそうな曲だね」
……ということで、ブロックの曲はアラメスの“ＩＷＹＨ”に決まった。

ＩＷＹＨ……Ｉ　Ｗｉｓｈ　Ｙｏｕｒ　Ｈａｐｐｉｎｅｓｓ（私はあなたの幸運を願います）の略。
あるラブラブな恋人たちが突然離れてしまい、お互いが相手の幸せを願う歌。
でも曲は明快。前向きに事実を受け止める大切さも垣間見られる。
さっそく、行きつけの楽譜屋さんに行って楽譜を買い、翌日音楽の北神先生に相談にしに行った。

「え～！？アラメスのＩＷＹＨにしたのぉ！？」
はっきり言って、北神先生は苦手だ。
理由は……ウルサいから。
「ＩＷＹＨって、めちゃくちゃ変拍子じゃなぁい！しかも転調がバンバン出てくるし……パート分け大変ねぇ～！」
「いや……変拍子や転調って、ほとんど歌唱には関係ないかと……」
「そうねぇ～……まずはソプラノ・メッゾソプラノ・テノール・バリトン・バスの５つのパート分けは無理だわぁ！原曲の高さをメッゾソプラノが担当して、ソプラノとテノールがハーモニーの部分ねぇ。バリトンとバスは外しましょ！」
あの、私の意見を聞いてくださいよ……

先生の書き込みが入った楽譜を持って、放課後の会議へ。
「うわぁ……わっけ分かんねぇ……なんだこのオタマジャクシの群れは……」
武田先輩は、グチャグチャな楽譜の書き込みは読解不能な様子。

一方蒼井君は、結構読み取っている雰囲気だった。
「……これ、生徒に渡すとなるとパソコンでの編集がいるよね」
「うん。次の放課後から編集スタートするつもりなんですけど……いいですか？」
一応武田先輩に聞いてみたら、あっさりいーよって言われた。
「じゃあ俺は、楽譜編集以外の仕事やっからさ。君ら2人で編集頑張れ」
「……はい？」
多分、同時にそう言った。

――――……

なんか、すっごい悪寒がする……
「メグちゃん、大丈夫？」
「あ、はい。すみません」
慌てて会議に集中した。

昨日、3年A組の前を通りかかったとき……蒼井の姿があった。
同じ実行委員だ……って、ちょっと嬉しくなったりして。
でも、その向かいにいた女の人……少ししか見えなかったけど、見覚えがあった。
そしてその隣には、派手な人。多分3年生。
派手な人はさておき……あの女の人、誰だっけ……

ちなみに私のクラスはたこやきの模擬店をすることになった。たこやき好きな担任の策略だ。
そしてブロックでの合唱曲は、Ｉｓｍの“Ｍｙ Ｆａｖｏｒｉｔｅ Ｐｌａｃｅ”。
2人の先輩が決め、私は全く知らない曲だった。
そして私の手元には、４０人分の楽譜が。

「これから音楽の時間にこの曲を練習させておいてね」
にこっと先輩が笑って、私に渡してきた楽譜だった。

ほんと……誰なんだろう。
気になって気になって、よく眠れない日々が続いた。

第５８話　放課後

「あ～も～……わっけ分かんない……」
パソコン室の責任者である小宮先生に許可を貰って、早速放課後の楽譜編集。
……そりゃあ、好きな子と一緒にいれるのは嬉しいけどよ？
でも……
「私って相当なメカ音痴だったんだなぁ」
思い返してみると……中学の時、技術でのパソコン授業はいっつも置いてきぼりにされてたし。（技術の成績だけC評価だった）
それに、ケータイの操作方法を取得すんのにもかなりかかったよなぁ……唯や夏姫に教えてもらったりしながら。
「いや……ただ単に、楽譜が見づらいからじゃない？」
机に伏した私に、蒼井君が聞く。
「私、一応声楽部だよ……楽譜なんて毎日見てるよ……」
それに、今学期からは伴奏を任された。
コンクール用、定期演奏会用、文化祭用。この３つの譜読みを今やってる。
「……じゃあ、メカ音痴だ」
と言って笑う蒼井君は、もう3枚も試し刷りを終えている。
……この手際のよさ、ハンパじゃない。
「機械なんて日頃ほとんどいじんないし……作曲とかたまにするけどパソコンなんか使わないし……全部書き込んでるし……」
ん？書き込む？
書き込む……書く！！！
「そうだ！いちいち機械と戦わなくてもいいじゃん、手で書けば！」
「うん、それ今俺も思った」
早速パソコンの電源をきって、濃いシャーペンを取り出した。

……2時間後。
「おーい実行委員！もう下校時間過ぎてるぞぉ！」
巨大先生が見回りに来て、集中の糸が切れた。
うわっ、もうそんな時間……廊下に出て、窓から見た景色は暗かった。
「夜中並みじゃん、この暗さ」
廊下でさえも、暗く見えた。

電車に乗り込んで、出発の時間を待つ。
隣には、蒼井君が座っていた。
“結構暗いし、今日は家まで送ったげる”って……う～ん、どこまで紳士なんだ！って思った。
「今日で何枚ぐらいできた？」
「え～っと……5枚ぐらい。明日になったら全部完成する」
7枚ある中の5枚って……
ちなみに私は3枚。微妙すぎる。
「ほんっと手際いーね。音楽やってたの？」
「いや、別に？」
「……なんでもできるんだねぇ、ほんと」
ぼそっと呟いた私の言葉の後、沈黙が訪れた。
「……そんなことないよ。俺にだってできないことぐらいあるし」
「へぇ。何？それって」
「秘密」
え～、何さぁ。
そう言った後、制服のポケットの中からチャラリンという何の変哲もないメールの着信音が流れた。
……アドレスブックに登録してない人からのメール。
「誰からだろ……迷惑メールかなぁ」
一応開けてみることにした。
Ｆｒｏｍ欄には、“ｙｕｓｕｋｅｓ２ｍｏｍｏｃａ－ｓｉｎｃｅ５

３０”……ユースケだ。桃花の彼氏だ。ギャル男だ。
どこから私のメアドを仕入れてきたんだろ……
メールの内容は、こうだった。
“最近サァ、Ｍｏｍｏｃａσ木幾女兼ヵﾊﾞメチ悪ィッチャヨォ　ｏｒｚ　サーャ、ナンヵ矢口ラニャィ？”
（翻訳：最近、桃花の機嫌がすごく悪いんだ。さーや、何か知らない？）
……は？
解読不能なんだけど……なんだよ、矢口って。名字？
見なかったことにするように、ケータイを閉じた。
「いいの？返信しなくって」
「ギャルの彼氏のギャル男からの解読不能な文章だったから……放っておいてもいいかなって」
「ははっ！先輩、それはヒドい！」
……といって、ひとしきり蒼井君は笑う。
無邪気な笑顔につられて、私も笑った。
「んじゃあさ、読める？これ」
再び受信トレイを開き、さっきの解読不能メールを出す。
蒼井君に手渡すと……
「あ、これが解読不能な……えっと、“最近桃花の機嫌が凄く悪いんだ。さーや、何か知らない？”って書いてあるよ」
「うわ、すっご！蒼井君、これが読めるんならダイイングメッセージとかも読み取れるじゃん！」
「いや、これただのギャル文字……」
やっぱスゴイなぁ、この人は。
ていうか、桃花の機嫌が凄く悪いって……前に、桃花が愚痴ってたよなぁ……ユースケのことで。
そのことが関連してるんだろうか……
それからＡ市駅について、私は歩き、蒼井君は自転車を押して再び

帰路につく。
「ごめんね、ほんと……超遠回りじゃない？」
「いや、そんなことないよ」
……って言って笑ってるけど、駅からの帰路の向きは明らかに逆方向。
なのに蒼井君は嫌な顔ひとつせずに送ってくれている。
「もし不審者出ても、私なら倒せるよ。防衛術もマスターしてるし……」
「でも杉浦先輩、女じゃん。限界があるっしょ？」
さらっと言ったその言葉に、何故か顔が熱くなる。
ほんと、蒼井君はこんなことを平気でさらっと言う。
だからかな……前日、蒼井君が“ライバル”と称した女の子と一緒にいた、って聞いたときは本当に動揺したんだ。

「それじゃ、また明日」
「うん。えっと……送ってくれてありがとう！」
蒼井君は笑顔を見せると……さっき通った道の方を振り返り、自転車に乗ってペダルに足をかける。
火照る顔、異常に脈を早くする心臓。
……ついこの間までは、恋するとこんな不思議な現象が起こるなんて知らなかった。
無知なままで、恋や愛を“どうでもいい”って思って、知ろうとしないで……
知ろうとしないまま、時が過ぎて、蒼井君に出会った。
恋をした時の幸福感、緊張感、嫉妬心……
全部、教えてくれたんだ。

第５９話　ジンクス

「ちょー、さーやぁ！ケーキの発注って５０個ずつだよね？」
「うん、５０個ずつの５種類ね」
実行委員決定から、数週間後。
いよいよ文化祭準備も大詰め……ブロック曲の方も、武田先輩の見事なセッティングにより着々と準備が進んでいる。
「さーや、ちょっと内装の方手伝ってぇ！」
「はいはい」
衣装作りの手を止めて、内装の方へとまわる。
「ありがと、さーや！だいぶ進んだよぉ！」
「いーえ」
ずっと屈ましていた腰をあげ、大荷物を持った後のおばあちゃんみたいに腰をたたく。
「さーやぁ！マジピンチ！ＢＧＭが鳴んないんだけどぉ！」
「今行く～」
ＢＧＭの試し流しがうまくいかないらしく、音響調整にまわる。
無事流れた後、今度は看板作りのヘルプに呼ばれ……

「なんか……さーや、屍累々（シカバネルイルイ）って感じだね」
午後８時。すっかり暗くなった空の下を夏姫と唯と３人で歩く。
ちなみに、この文化祭準備期間はＨＲ棟なら午後９時まで使用しても構わない。
まぁ、そこまで準備するクラスは少数だけど……
「しっかし、沙彩マジで大変だなぁ！明日って多分、ブロック全員集合して２回目の合わせじゃね？」
「察しの通りだよ……」
１回目の合わせは……パート練習がままならなかったのか、グダグダ。

明日、2回目を迎える。結構期間があったし、パート練習も各クラスでやってきている……はず。
「でもさ、1年はあいつが実行委員でいーの？転入生だろ？」
「リーダー性に在校期間なんて関係ないと思うよ？」
「まぁそうかもしんないけどさぁ……」
唯は未だに蒼井君を気に入っていない様子。
……きっと、夏にあんなことがあったから、蒼井君も唯を良くは思ってないだろう。
「あ！今日、おもしろいこと聞いちゃったんだぁ～」
夏姫が小走りして止まって後ろを向き、私たちの目を覗き込む。
まるで、聞きたい？って聞いてるみたいに。
「おもしろいこと、って何？」
言いたげな目だったので私がそう聞くと、夏姫はパッと明るい表情になった。
「あのね、文化祭の最終日に西日が差す教室でキスしたカップルは結ばれるんだってぇ！」
話の内容は……どこにでもありがちなジンクスみたいなものだった。
「……へ、へぇ～」
とりあえず、相槌を打つ。
ていうかその前に……教室でキス、なんて結ばれてること前提じゃん。
「前例あんの？」
「あるよ～！まずA組のマキとユウジ、C組のサナとヒロキ、そして我がD組のカナエとサトシ！あと、3年の半数のカップルはこのジンクスで成就したらしいよ！」
唯に前例を聞かれ、夏姫はあらかじめ言う準備をしていたかのようにスラスラと話す。
「でもねぇ……他の人に見られたら成就できないらしいんだ」
「う、丑の刻参り……？」
……といったら、あれだ。

キスしてる2人がいる教室の前を誰かがたまたま通りかかって教室内を見ちゃって……

2人同時に「み～た～な～」……的な？

……怖すぎる。

「ま、どうせ縁のない話だな、俺にとっちゃ。文化祭の最終日なんて午前中に終わるじゃん。その後は後夜祭ならぬ後昼祭だし？西日が差す頃なんて、打ち上げに行く途中だろうし」

ていうか、今の時期西日なんて差すかな……

唯が言う後昼祭とは、合唱コンクールが終わってからある、生徒会が中心になった生徒参加型のライブみたいなもの。

実行委員である私は片付けとかで残っとかなくちゃいけないから……

「気をつけよ……」

2人にバレない程度に呟いた。

翌日。2回目の合わせ……

1回目よりかはだいぶマシだった。けれど、まだ音程のズレが気になる。

ちなみに指揮者は3年の西表先輩（イリオモテ）、伴奏は五目ヵ丘先輩（イツメガオカ）。

2人揃って変な名字……が第一印象だった。“五目ヵ丘”って名字を初めて見たときは“五目ヵ丘（ゴモクガオカ）”って読んじゃったし、“西表”だって“西表（ニシオモテ）”と読んでしまった。

その2人から曲の出来について評価とアドバイスをしてもらい、続いて実行委員。

武田先輩は……

「1回目よりかはちゃんとできてて良かったよ～以上」

……さすが元ヤン、気だるさが垣間見れる。

私の番が来た。

「えっと、まず最初はソプラノ……10小節目のト音が前の1オクターブ下のト音から一気に駆け上がるせいか、ホ音で留まってます。それから25小節目のハーモニーの部分はもっと影の部分から主張

するような声量で。あと、57小節目の8拍伸ばすところが7．3拍ぐらいで途切れています。それと、101小節目の……――（約10分後）……とまぁ、このくらいです。以上」
持ってた楽譜から顔を上げると……何故かみんな、死んだような顔をしている。
隣にいた蒼井君から腕をつつかれ、「先輩、アドバイスが長すぎ」と言われてしまった……
……だって、“アドバイス”だもん。

私の次の番だった蒼井君は、悩殺スマイルつきの褒め評価で女子を魅了した。
それからあと1回通して、この日の合唱合わせは終わった。
「次に合わすのが文化祭の前日、最後に合わすのがリハーサル……かぁ」
武田先輩からもらった今後の日程表を見て、チェックを入れる。
あと2回の合わせ……その中で完璧に仕上げるためには、どこをどうすれば……
「やっぱりここは、パート練習……かな。音楽室借りれるかな……」
「なんか賭けでもしてるの？」
「うわっ！」
横からいきなり現れた蒼井君。
「びっくりしたぁ……賭けてないよ何も。そんなメリットもデメリットもどちらもあるような……ほら、運を手玉にとってるみたいなもんじゃん？」
「手玉って……」
まぁそうかもね、と蒼井君は笑った。

それから、HR棟に戻って内装の手伝い。
ちなみにこの期間の授業は仮HR棟（物凄くボロい）で行われる。
「近くなったねぇ、文化祭……」

夏姫がいきなり、ふとそう呟く。本当、近い。
文化祭まで……あと約1週間。

第６０話　男装の超人

文化祭１日目当日……
……前にも言った通り、私は肝心なとこで寝坊をする。
例えば高校入試。集合時間に起床した。
例えば入学式。早々に先生や生徒たちの注目の的に。
例えば修学旅行。いつもより早く起きるのを忘れてしまい、お母さんを怒らせてしまった。
といった感じだから、文化祭当日の今日も……
「あ～も～！今月のお小遣いが極端に減る！！！」
駅まで猛ダッシュ中。普通列車がとっくに出発したから、特急列車の切符を取らないといけない。
しかも、その切符が７５０円とお高い……
「駅員さんっ！海宮行きの特急券１枚！」
「は、はい……７５０円です……」
私のかなりの荒れっぷり（？）に、駅員さんもタジタジしていた。

「も～！おっそいよさーやぁ！」
「ごめんごめん……」
息を切らしながらＨＲ棟の２－Ｄへ。
夏姫が仁王立ちして待っていた。
「ま、実行委員のさーやが来てくれてよかったよ！内装の最終チェックとこの衣装着てね」
「うん」
衣装は、主に接客する人が着る。ウラ……つまりレストランでいう厨房を担当する人は、個々のエプロンを着用する。
ちなみに接客衣装は、女子はメイド服。男子はスーツ。
……メイドカフェとホストクラブが融合した、みたいな。
そんな中、「さーやはメイド服とか絶対似合わない」という意見が

飛び出し……「それじゃあ、ちょっとしたゲームやろうよ」という意見も飛び出し……

その意見をふまえた上で、今私が着てるのは……

「キャー！さーやカッコいい！！！」

「ほんっと、２－Ｄのヒモ男子よりもカッコいいし！」

スーツ。しかもヅラまで用意されていた。

目は切れ長になるよう施され、チークもグロスも使われてない、女っぽくないメイク。

「歌舞伎役者じゃないよ、私は……」

あまりに男に見えすぎる自分の顔を見て、少し複雑な思いになった。

ちなみに、ゲームというのは……“さーやが女だと気づくかゲーム”

女だと気がついた人数が１０人を越えたら打ち上げの幹事は私、１０人以下だったら幹事はゲームを考案した中島。

いわゆる、幹事をめぐる争い。

ちなみに中島は女装もせず、全身鏡の前でスーツでナルシなポーズをキメている最中だ。

全く……どこまでも不平等を愛する男だ。

カフェがオープンした。

１組目は友達連れ、２組目はカップル、３組目は見知らぬ中学校の制服を着た女子同士……

開店から１５分後、だいぶ席が埋まってきた。

「さーや、ゴー！」

夏姫の合図で、男子バージョンの私が接客に出動した。

――――……

１－Ｄの出し物は……これまた地味な、「展覧会の絵」

俺が出し物で何をしたいか聞いたところ……自他共に“金持ち”だと認める榊原（サカキバラ）が自分のコレクションを展示することを提案した。

多少ブーイングが出たけど、他に意見が出なかったのでそれに決まった。
「大翔、あんま実行委員になった意味なくね？クラスでも学年でも」
一緒に校内をまわっているカイジにそう聞かれる。
確かに……準備なんか3日ぐらいでできたし、内装だって拘るにも拘れない。
いや、拘ってない内装の方が榊原コレクションの味を引き出すにはいいかもしれないな。
「そう？」
「だってさ、ブロック曲だとしたら……2年は杉浦先輩っしょ？しかも3年は急浮上した武田先輩……まぁ大翔もかなり目立つけどさ。そんな優秀な先輩2人だったら、大翔は任せとくだけで何もしなくてよくね？」
「いや……1年で後輩だからって先輩2人に甘えるようなことはしてねーよ。てか、したくないし」
だから精一杯、杉浦先輩や武田先輩をサポートした……はず。
そんな俺を見て、カイジは「やっぱ真面目だねぇ」と一言呟いた。

1年の教棟を歩き回り、2年の教棟に入った。
いつもは他学年の教棟には入ってはいけないけど、文化祭の時だけは良しとされている。
「お？D組の方騒がしいなぁ……って、すっげぇ列！」
D組の入口からF組の出口にまで続く長蛇の列。
何かやってるんだろうか、杉浦先輩のクラス……そういえば、何も聞いてなかったな、クラスの出し物。
「2ーD……カフェ？」
人々の間から垣間見える看板。そこにはそう書いてあった。
「カフェ？カフェでこんな列できんの？2ーBでもカフェやってんのに……」
カイジの声につられ、B組を見てみると……列どころか、人の気配

すらうかがえなかった。
この差……カイジは一層ワクワクしたらしく。
「ちょっとお姉さん、僕たち先に行かせてもらっていい？」
奴は得意の色仕掛けで3年の女子の先輩に頼む。
元々カイジは色気が凄いのだろう……その先輩は鼻血を出した倒れた。
「ほら大翔っ！入るぞっ！」
「あ、ああ……いいんですか？」
カイジに腕をひっぱられながら、倒れた先輩のツレらしき人に聞く。
ツレらしき人は無言で激しく首を縦に振っていた。
「どうも、ありがとうございます」
笑顔を返して、２－Ｄの教室……もとい、２－Ｄカフェに乗り込んだ。

内装は夜のバーを思わせる黒を基調とした内装。所々に設置されてる植物。
「２名様でしょうか？こちらへどうぞ～」
妙に短いスカート丈に頭に変なカチューシャみたいなのをつけた女子の先輩に促され、あいてる席に座った。
店内には、スーツ姿の男子の先輩とさっきの女子の先輩みたいないでたちの女子の先輩が慌しく駆け回っていた。
「へぇ、スーツにメイド服って……ホストクラブとメイドカフェの融合？」
どうやら、女子の先輩の服装は“メイド服”というものらしい。
「それより、なんか頼もう。小腹空いたし」
テーブルにあったメニューを取り出し、広げる。
ケーキが５種類、パフェが３種類、ちょっとした軽食が３セット、飲み物が５種類、その他５種類。
……なるほど。この種類の多さが長蛇の秘訣？
「俺、Ｂセットとコーヒーにしよ。カイジは？」

「え〜っと……フライドポテトとコーラ」
「うわ、アメリカン」
とりあえず、俺もカイジも注文は決まった。
そして、すぐ隣の席で女子生徒から注文のメモをとってるスーツの男子の先輩……
「……以上ですね。少々お待ちください」
どうやら注文を聞き終えたらしく、ボールペンをポケットに差し込んでいた。
「すみません、こっちいいですか？」
「あ、はい」
俺がそう声をかけると……その先輩は、少し顔色をかえる。
でも、すぐ元に戻って……
「ご注文は？」
彼は営業スマイルでそう聞く。
隣の席の女子生徒は、やけにキャーキャー言ってて……
すぐ目の前にまで来たその先輩のあまりものカッコよさで、俺が思い浮かべていた長蛇の列の意味が更新された。
にしても……こんなイケメンな先輩、いたっけ？

――――……

「お疲れさーや！」
「は〜……もう疲れたどころじゃないよ……」
ヅラをとって、スーツのボタンをゆるめる。
何時間かヅラの中に納まっていて窮屈そうだった長い髪が、一気におりてきた。
……結果。誰にも気づかれなく、ゲームは終わった。きっと更衣室の外で中島はうなだれてることだろう。
ささっと元の制服に着替え、メイクを直した。
「男のフリするのも大変だねぇ……イケ〇ラの芦〇瑞希ちゃんの気

持ちが分かった気がするよ、この何時間かで……」
イケ○ラとは、女の子が男装して男子高に入学する、みたいな話。
「でもさ、交代時間ギリギリでいきなり大翔君とカイジ君が来た時は私もビックリしたよ！だって列に並んでなかったっしょ？」
夏姫の言う通り……注文を聞き終えて、呼ばれたその声の主が蒼井君で動揺した。
でも幹事をやりたくない一心で……全身全霊で平静を装って注文受けたっけ。
そのおかげか、全くバレてなかった様子。
「気がつかないうちに並んでたんじゃないかな……ま、とりあえず何か食べに行こ」
「うん！あ、もしどっかでたっくんと会ったらたっくんと2人でまわるからね！」
「はいはい……もうそのパターンは慣れてるよ……」
海宮花火でも、修学旅行での自由行動でもそうでしたから……

裏口から教室を出て、廊下を見る。
まだカフェの中にいる蒼井君やカイジ君を見物するためか……長蛇の列ができていた。

第６１話　占い

「２－Ｄカフェのあのホスト、すっごいカッコよかったねぇ～！」
「ほんとほんと！あんな彼氏だったらいいのにぃ」
擦れ違う人が、口々にそう言う。
そんなにうちのクラスの男子がカッコよかったのかな……
「ねぇ夏姫、うちのクラスの男子ってレベル高い？」
「う～ん……猿レベルはＭＡＸだよね！猿っぽさなら海宮高校Ｎｏ．１だよ！」
さ、猿っぽさ……まぁ確かに。

３－Ａは、おばけやしきをやっていた。
結構空いていたから、入ることに。
「あ、倉橋先輩だ」
「あ、富田先輩」
「あ、厳島先輩だ」
おばけが出てくるたび私がそう言うと、おばけはつまらなさそうに退散する。
「沙彩ちゃん、そんなすぐに見破ったら驚かし甲斐がないっしょ？」
出口のところで、武田先輩がそう言った。
夏姫も「私が驚く前にさーやが名前言っちゃうから全然怖くないよぉ」とぐずった……
だって見破るの、好きだもん。検事の娘で私自身検察官希望だから。

１－Ｄは……展示。題して「展覧会の絵」
「わぁ……モデスト・ムソルグスキーのピアノ組曲の題名パクってるし……」（展覧会の絵……元々ピアノ組曲だが、モーリス・ラヴェルによって管弦楽用に編曲されたのもある）
一応おもしろそうだし、ブロックの後輩……そして何より、蒼井君

が率いるクラスの出し物だから見てみることに。
「いらっしゃいませぇ。2名様ですかぁ？これ、パンフレットです。どうぞお楽しみ下さい～」
やる気のない受付嬢、ところどころ掃除に現れる清掃員……人、少なっ！
いかにも「おしつけジャンケンで負けました」みたいな人たちが数人いるだけの殺風景な教室内だった。
でも、絵はいっぱいある。
ポール・ゴーギャン、フィンセント・ファン・ゴッホ、クロード・モネ、ジョルジュ・スーラ……印象派やポスト印象派、新印象派のフランスで生まれたかフランスを拠点に活動した画家ばかりの作品。
「かけられてある絵、このクラスの榊原って人の所有物らしいよ？」
パンフを見ながら、夏姫が呟いた。
榊原？誰だっけ……
「あ、美術部の……唯一の男子部員」
私がそう呟くと……
「そうだとも！」
と、どこからともなくメガネをかけた、いかにもインテリ系の男子生徒が姿を現した。
名札には、榊原……ああ、こいつが榊原か。
「僕は榊原智文（サカキバラトモフミ）。フランスで10年間過ごした日仏ハーフさ」
なんて言いながら、金に近い髪の毛をさらっと靡（ナビ）かせる。
……あ、完全に思い出した。
この榊原……この高校屈指の変な人、略して変人なんだっけ。
「この僕のコレクションは全てフランスから取り寄せたもので……」
と、意気揚々と自慢話を語りだす榊原を尻目に、夏姫に教室を出ようと促した。
「特にこのジョルジュ・スーラの作品は元々数少ないだけあって相当レアな……って、あれ？」
ちび○るこちゃんに出てくる、丸○君と花○君を足して2で割った

ようないでたちのそいつを喋らせたままにさせ、１－Ｄを出た。

「なんか、すごい人だったねぇ」

「たぶんあの人にかまうと1時間は教室出れなかったよ……」

さて……次はどこに行こうか。

そういえば、桃花が「桃のクラスは劇やるんだよぉ！時間あったら見にきてっちゃ！」って言ってたっけ。

おもしろそうだし、見にいってみよっと。

――――……

美来と歩海。２人と一緒に丁度空いていた２－Ｂのカフェで一息ついていた。

「ふぃ～……午前中は疲れたねぇ」

と言って机にのびる美来。

それもそのはず……私のクラスでは、ファッションショーをやったから。

服をレンタルしたり、会場作りをしたり……と、準備もほんっと忙しい。

当日も、短い時間で服の着脱をしなくちゃならないからモデルも裏方も忙しい。

ちなみに私と歩海がモデル、美来は持ち前の腕でメイクを担当した。

「午後はもっと人増えるだろうから……ＰＭ組は悲惨だなぁ」

歩海が言うＰＭ組とは、午後にファッションショーを行うモデルと裏方のこと。

ちなみに私たち3人を含む、午前中の担当はＡＭ組だ。

「ま、とりあえず成功したんだし……午後からはパーっと騒ごーよ」

「え～？メグが騒いでるとこなんて想像つかなぁい」

そんな美来の言葉に苦笑いを返し、プレミアムカルピスを口に流し込んだ。

にしてもこのカフェ……メニューのレパートリーが極端。
まずドリンク。普通のカルピスとプレミアムカルピス、桃カルピス、みかんカルピス、りんごカルピス。
カルピス尽くしのドリンクメニュー。
フードはAセットとBセット。そのどちらかだった。
ガラガラに空いている理由も推定できる。

「次どこ行く～？」
文化祭のパンフレットを見ながら、校内をうろちょろ。
クラスの出し物の5割がカフェ。2割は展示で3割が劇その他。
中には休憩室、なんてところもあった。（休憩室……教室内にイス並べただけのもの。無人）

ふと見ると……1－Dの教室。
「あーっ！ここ、大翔様のクラスじゃん！」
美来が声をワントーン上げてそう言う。
一瞬、「いるかな？」って思ったけど……この空き具合じゃあ、絶対いない。
しかも出し物が……展覧会の絵。
「完璧展示じゃん。何気榊原プレゼンツってこっそり書いてるし……絶対あの榊原の自己満じゃない？」
榊原って……あの金持ちの変人か。
全くこの学校は……榊原といい、2年の五十嵐先輩といい、飛びぬけた金持ちがいすぎなんだよ。私立でもないのに。
「いーから、次行こ。あ、まじない部って占いやってくれるんだよね？」
「うん！2・3年の先輩がね！」
まじないは、漢字で表記すると“呪い”。
なんか呪われないかな……と少々ひかかってたけど、美来の屈託ない顔と言葉と声を信じて、会場であるまじない部の部室へと向かっ

た。

まじない部の部室に到着。

「へぇ、意外と混んでるねぇ……」

「あっ！あれ、立花リリアンさんじゃんっ！雑誌によく出てる……へぇ、午後からゲストで来てるんだぁ……知らなかったぁ！部員なのにっ」

どうやら、混ませている理由は立花リリアンという人らしい。

せっかくの機会なので、私たちもその立花さんという人に占ってもらうことにした。

占ってもらった子は、みんなスカッとした表情で部室を出て行く……

「次の方どうぞ～」

もはや誘導係と化している2年の先輩に呼ばれ、私も占いルームへ。

「初めまして。立花リリアンといいます。よろしくお願いします」

「く、窪田恵夢です……よろしくです」

いかにも占い師、って感じな人だった。

その人の手前には水晶玉が1個、光を受けてないのに煌々と光っている。

「ではまず……何を占ってほしいですか？3つまでどうぞ」

「えと、勉強運。あと、健康運……それから仕事運」

ほんとは恋愛運とか占ってほしかったけど……さすがに言えなかった。

立花さんは水晶に手をかざし……私と水晶を交互に見る。

まるで、私の運命を水晶に表しているかのように。

「仕事運は良好ですね。将来に不安を抱く必要はないでしょう。でも、油断はしないでくださいね」

「あ、そうですか」

この不景気なご時世……仕事運は良好、と言われて心なしかほっとした。

「健康運は……そうですねぇ。脳がやや危ないです。たまには頭を休めることも考えてください」
「は、はぁ……」
確かに、たまたま少し偏頭痛がするときがある。
やっぱ雑誌によく出てる（らしい）だけあるなぁ。当たってるかも。
「勉強運は……最近、誰かに首位を奪われた。そうでしょう？」
「は、はい」
「この高校に入ってからトップを死守してきたあなたは、その時信じられない気持ちと一緒に首位を奪った者と決着をつけたい、と密かに対抗心を燃やしていた……」
「その通りです」
だから冬の長期休暇間、いっぱい勉強した……だけど勝てなかった。
そのことまで立花さんはピタリと当てた。
「対抗心の矛先を向けていた相手……その相手を意識しすぎたために、感情が憎むべき相手から好意へ変わった。そうでしょう？」
「・・・」
言葉が出なかった。
あの綺麗な笑顔の持ち主……それが、憎むべき相手だったとは。
私が静かに頷くと、立花さんは目を伏せた。
「道を外しましたね……」
「え？」
「いえ、なんでもございません」
ぼそっと呟いた彼女の言葉を聞き返したけど、はぐらされた。
少しお時間いただけますか？と立花さんが聞き、私が頷くと再度、私と水晶を交互に見始めた。
……まるで、そこにいない憎むべき相手の像を浮かび上がらせるかのように。
「……急がば回れ、という言葉をご存知ですか？」
「はい、知ってます。早く着こうと思うなら、危険な近道より遠く

ても安全確実な方法をとったほうが早く目的を達することができるというたとえ……ですよね？」

「そうです。でもあなたの場合……着く場所は彼の心、目的は彼の恋人になること。早く心に着くため、早く恋人になることを達成するためには……急いだほうがよいかもしれません。回る暇はないかもしれません」

急がば回れ……もとい、急がば急げ。

その言葉を頭にインプットした後、カーテンが開かれ2年の人が「時間です」と小声で言った。

「あ、あの、私……恋愛運を見てくれとは一言も……」

「特別ですよ。さ、時間です」

「……はい。ありがとうございました。失礼します」

まるで面接会場を後にするかのように、丁寧にルームから退室した。

「一途に彼の心を掴み取ろうとする、健気な心の持ち主だわ……けれども彼の心には、もう入り込んでしまっている人がいる。道を踏み外さなければ……事前にもっと心の底から憎んでいれば、この事実に対する苦しみを味わうことはなかったかもしれません」

――――……

ルームの外で2人を待って、2人揃ったところで部室を出る時……1枚の紙を渡された。

「ジンクス集……？」

そこには、海宮高校にまつわるジンクスが連なってかかれていた。

それぞれのジンクスの横には、真実度が記載されている。つまり、本当かどうかの確率だ。

その真実度がマックスのジンクスが……

「2日目の文化祭の日、西日が差す教室でキスをした男女は結ばれる……」

思わず声に出す。
結ばれていない2人がキスをするなんて変だな、と思いつつも見入ってしまう。
「わ、明日の天気超快晴じゃん。西日も差すかもねぇ～」
ケータイで翌日の天気を確認した歩海が言う。
……ジンクスなんか、興味ないし実行しようとも思わない。
そう思ってても、ブレザーのポケットに入れていたその紙を家に帰っても捨てる気がしなかった。

第６２話　灰色の空

「本番では、テノールはシ♭の発音、メッゾソプラノはオクターブの変化を意識して、ソプラノはメロディが大きくなりすぎないように。以上」

文化祭２日目。リハが済み、恒例の感想タイム。

……いや、ただひとつ恒例じゃないのは私のアドバイスが１分とからなかったこと。

１分以下で欠点を言えるほど、かなりよくなった。

「５４小節目のこのフレーズ、結構歌い方が平坦に聴こえるので、このフレーズが持つ意味をしっかり理解して歌ったらよくなるかなーと思います」

シメは蒼井君。アドバイスもうまくなっていた。

私たち水ブロックは、所定の位置に座った。

「杉浦先輩」

「ん？」

「本番での配列、もう一度確認したいんだけど……これでいいんだよね？」

そう言い、蒼井君が見せてきた１枚の紙。

武田先輩が前回の話し合いのときに見せてきた、雑な配置図を彼が綺麗に書き写したものだった。

「テノールが右、メッゾソプラノが真ん中、ソプラノが左、前から学年が若い順……うん、バッチリ」

「ありがと。これでちゃんと誘導できる」

そう言って、可愛い笑顔を見せた。

「あ、そういえば、昨日２―Ｄのカフェ行って……すっごい男前な人に注文とってもらったんだけど、あの人なんて名前？」

「え？なんでまた……」

「シゲオがすっごい知りたがってんだ。「俺より注目される奴の名を是非知りたい」って」
……シゲオ君、なんて無駄なことを考えて……
その人、実在しないのに……なんて言えない。
「え、えと……その人、モデルやっててすっごく忙しいんだぁ！だから名前知っても顔は見れないと思うよ？」
「へぇ、モデル……どうりで……」
納得したように頷く蒼井君。
な、なんか悪いなぁ……
「じゃあ、せめて名前だけでも」
「い、いや～……その子、芸名で活動してるから……本名がクラスメイト以外にバレたら、ちょっと……って言ってたから……ごめんね」
「……そっか、残念」
ああ、もう、ほんとごめん！蒼井君、シゲオ君……
その人、モデルなんてやってないし、第一私の男装なんで実在しませんので……
心の中で深々と謝ってると、開始のブザーが鳴った。

――――……

文化祭の2日目の大種目、合唱コンクールが幕を閉じた。
「メグゥ！やったね！2位だよぉ」
私たちが所属する風ブロックは、惜しくも2位。
ちなみに1位は水ブロックだった。……蒼井のブロック。
「うん、結構頑張ったよね」
「速見（ハヤミ）が単独で思いっきり音程ハズしたからなぁ～……多分、あれがいちばんこたえたね」
美来と歩海。2人で感想を言い合いながら、教室に戻ってＳＨＲを済ませた。

「私たちは帰るけど……メグは片付けだっけ？」
「うん、いろいろね。先帰ってて」
「頑張れ～実行委員！じゃあね」
２人を先に帰し、私は実行委員のみで行う場内片付けに。
まず、およそ５００脚並んでいるイスの収納だ。

合コン（合唱コンクール）会場であった体育館に入ると、数人の人が早くも収納を始めていた。
収納に携わるのは、約３人×６ブロックの１８人。１人３０脚前後収納しなければならない。「
「あ、窪田恵夢ちゃんだ」
数人のうちの１人……杉浦先輩が、私に気づいて声をかけた。
……てか、先輩すごっ！片手５脚ずつ持ってるし……
「あの、重くないですか？手伝いましょうか？」
「ううん、全然平気。それより、そこの塊崩してくれる？」
「あ、はい……」
数１０脚イスが集結しているところが塊らしい。
にしても杉浦先輩、すっごい美人なのにとんでもない力の持ち主なんだなぁ。
イス１０脚を収納した先輩は、森ブロックの１年生男子の手助けをしている。そして、１年女子にも。
……いけない。感心してる場合じゃない。
とりあえず、力も平均的な私は片手２脚ずつ、計４脚のイスを持って収納場所に向かった。

１５分後、見事にイスは全部片付いた。
「つっかれたぁ。絶対１００脚は片付けたなぁ……」
偶然隣にいた杉浦先輩がそう呟く。
「え、１００脚もですか？」

「あ、うん。うちのブロックの1年と3年、外の方にまわってるから」
外の方、というのは、外に出された看板だとかポスターとかの片付けのこと。
教職員も手伝うから、実行委員は5人ぐらいで足りるらしい。
「3年の武田先輩には「俺らの分も片付けヨロシク！」って言って……1年の蒼井君は体育館の方にまわるって言ったけど、武田先輩に連れてかれちゃって」
ハハッと笑う杉浦先輩。
……うん、モテるだけある。少なくとも1年生の中で50人ぐらい（女子も含む）は杉浦先輩を想ってる。
「杉浦ぁ！ちょっといいかぁ？」
「あ、はい。じゃあね、恵夢ちゃん」
数学の巨島先生に呼ばれた杉浦先輩は体育館から姿を消した。
「さてと。私は荷物でも取りに行こっかな」
HR棟へと、足先を向けた。

――――……

職員室に入った私は、巨大先生から1枚のプリントを渡された。
「……あと、蒼井と武田にも渡しといてくれ！」
と言って、追加で渡された2枚のプリント。
廊下に出て、目を通した。
「実行委員同士の打ち上げ会について……幹事・巨島文男（キョジマフミオ）」
巨島文男、というのは巨大先生の本名。知る者は少ない。
打ち上げ……か。
とりあえず、外に出よう。

校門を丁度出るところだった武田先輩を呼び止めた。
「おー沙彩ちゃん。どうしたの？」

横の金パのギャルが軽く睨んでるけど……まぁいいや。
「これ、巨だ……いや、巨島先生が武田先輩に、って」
「へぇ、打ち上げか。サンキュー沙彩ちゃん」
渡したプリントを、先輩はポケットに突っ込んだ。
「あの、蒼井君はどこにいるか知ってますか？」
「大翔君？……ああ、ヒロ君らが担当するところ今終わったとこだろうから荷物でも取りにあがったんじゃない？」
「そうですか。ありがとうございます」
手短にお礼を言って、すぐ校内に戻った。
てか先輩、蒼井君のことヒロ君って呼ぶんだ。初めて知った。

１－Ｄに行ってみたけど、蒼井君の姿はなかった。
「帰っちゃったのかな……」
……って呟き、気づいた。
そうだ、実行委員はそれぞれの会議教室に荷物置いたんだったっけ……
すぐさま踵を返し、３－Ａに向かう。
ふと窓の外を見ると……雨だった。
「折りたたみ、持ってたっけ……」
なんて思いながら、３－Ａへ向かう足をどんどん進める。
……なぜか、雨音がだんだん大きく聞こえた。
やだな。なんか気色悪い。……悪い予感がする。

ようやく、３－Ａという札が見えた。
「なんか長く感じたな……」
いつもなら、どうってことない３年生のＨＲ棟までの距離。
今日は果てしなく遠く感じた……
ドアを開けると、そこには……

「あ……」

キスをしている、男女2人。
男子の方の髪は……黒。
私が、見間違えなんかしない。……蒼井君だった。

とんでもなく、大きい雷の音が聞こえる。
気がついたら、その場から逃げ出していた。

……空は……全部、灰色に染められている。灰色に支配されている。
まるで、私の心を丸映しにしたようだ。

第６２話　灰色の空（後書き）

３－Ａでの３人の位置関係を示すと、北にドアがあって沙彩がいるとすると、南にある窓に、北向きに大翔が立っていて、大翔の目の前に女の子がいる模様。

今のところ、沙彩は女の子の顔は見てません。

文章だけで位置関係を示すとなると難しいですね（＾＾；）

さて、次回は打ち上げ編！

……絶対何かありますが（＾＾；）

第６３話　明日

頭は真っ白。けれど足だけは行く当てもなく動き続ける……
まるで、足にもう１つ脳があるみたいに。

いつのまにか、３－Ａの反対の校舎……特別教棟に来ていた。
走り続けていた足は、手首に感じた感触によって静止する。
「やっと追いついた……先輩、文化部なのに足速すぎ」
……約半年前、初めて聞いて……忘れるよう努力して……今は愛しく思う声。
その声を聞いて……目にじわじわと溜まっていく涙。
その涙に気づかれないように、振り向かない。
「……どうしたの？」
「あの方向から見たら、してるように見えるだろうけど……してないから、あれ」
上がった息とともに伝わる言葉……それは一層、私を悲しめる。
「なんで、それを私に言う？」
「誤解されたら……嫌だから」
「もし見たのが私じゃなかったら、同じようにそう言った？」
……答えは、帰って来ない。
掴まれている手首を、思い切り振り下ろす。
冷たい風が、握られていた部分にあたって余計冷たく感じる。
「蒼井君はただ……私が誤解して、それを広められて噂されるのが嫌なだけだろうけど」
振り向いたと同時に、うつむいていた顔をあげて、しっかりと蒼井君の目を見た。
「私はね！好きでもないただの人のキス現場見てこんな風に泣いたりしないんだから！」

――――……

あーあ……つい感情的になっちゃって……

「とんでもないことを言ってしまった……」

「どーしたのよ。帰って来るなり暗いわね」

用意された焼き魚をつつくなり、お母さんがそう言う。

「お母さんこそ……なんで今日に限って早いの？」

「いーじゃない。たまには」

お母さんも私同様、焼き魚をつつく。

「何なの、ケンカ？」

「ううん」

「先生に暴言吐いた？」

「違う」

「告った？」

「・・・」

……もうちょっとハズしてよ。

肯定する代わりに、テーブルに突っ伏した。

「いいじゃない。この期（ゴ）に及んで付き合っちゃえば。あんた丁度フリーでしょ？」

「いや……告ってはないんだよ。はっきりとは……」

「ふーん」

「ていうか……付き合えるとは、思えないし」

……そう。改めて言うけど、蒼井君はモテる。

噂では、もう何１０人に告られた。とか、海宮高女子約２７０人がバレンタインに蒼井君にチョコあげる予定の人が約１００人越えているとか。

そんな人が私を好きになるとか有り得ない。

“結構仲いい女子の先輩”……っていうのが、当たり前だって。

「ダメねぇ、あんたは。誰に似たのかしら」

「は？」

思わず突っ伏していた顔をあげる。
「そんな消極的になってちゃ恋なんてする意味ないわ」
そう言い残すと、食器を持ってお母さんは立ち上がる。
「……じゃあ、お母さんは積極的な女子高生だったわけ？」
「さぁね。……まぁ、生徒会長には立候補して当選はしたけど」
「それ、この場合の積極的と意味違うじゃん」
「いや、全く違うわけじゃないのよ」
……わけ分かんない。
私だって、実行委員とかにもなったし……そういうとこでの積極性は中学時代と比べちゃあると思うけど。
「それで、あんたを悩ましている意中の人って誰よ。名前ぐらい教えなさい」
「お母さんの知らない人だよ」
「だったら尚更よ」
……本当、お母さんはわけ分かんない。
「……蒼井君。蒼井大翔」
「……え？」
食器を洗っていたお母さんが、私の方を向く。
「そんな変な名前？」
「いや……蒼井……大翔……うん、素敵な名前じゃない」
それだけ言って、あとは何もしゃべらなかった。

そういや……打ち上げのプリント渡してなかったな。
ていうか、カバンも忘れたじゃん。
「やっぱりダメなのかもね……私」
桃花に、打ち上げの日程を蒼井君に知らせるようにメールで頼んだ。
打ち上げは、明後日の１８時から……
明日と明後日は、文化祭の振り替え休業。
まだまだ時間は２ケタにのぼるほどあるのに。
「気まずい……」

……明後日会ったとき……どんな顔すればいいんだろう。

しばらくベッドにうつ伏せて、ケータイの着信音が鳴ったのをきっかけに重い体を起こした。

ドキドキしながらケータイを開く。

Eメール欄を開けると……夏姫からメールが来ていた。

なんだか、ホッとする。

『明日、唯とうちとさーやと3人で遊ばない？なんか、唯から重大発表があるんだってさ！』

……という内容だった。

何だろう、重大発表って……彼女できたとか？

そういえば、唯とは最近全然気まずさを感じられない。

……最初（ハナ）っから、私のことなんて好きじゃなかったのか、と自問するくらい。

蒼井君に失恋したも同然なことで弱ってた私に同情したまでなのかじゃないか、と思うくらい。

もし明後日、蒼井君と会ったとしたら……唯みたいに、何もなかったかのように接してほしいな、と思った。

――――……

「「……ハァッ！？」」

翌日。最早定番化しているサーティーツーで例の重大発表を唯の口から聞き……私と夏姫は揃って大声を出す。

周りの人がチラチラ見てくるのも無視し、唯に問い詰める。

「ちょっ、何さ！それってあっちに永住するってこと！？」

「当然退学だよね……？まだ2年なのに……」

「ねぇねぇっ！それって親が決めたの！？どうなの！？」

「も、もしや宿命……！？」

「だーっ！もう落ち着け2人とも！！！」
唯のキレた声と同時に、私たち2人は黙り込む。
「俺だって信じらんねーよ……そんなこと、幼なじみなのに一言も聞いてなかったし」
重大発表というのは……
もう何日も学校に姿を現さず、イタリアにバカンスへでかけていたはずの伶君のこと。
バカンスと称した、“お見合い”だったってこと……
「五十嵐家ってさ、知っての通り資産家だろ？資産家なら、代々の仕来りがあって……」
「仕来り？どんな？」
「……日本で16歳まで過ごして、17歳になったらイタリアにいる父親の事業を継ぐんだってさ。婚約者と結婚して」
唯は強張りをほぐすかのように、アイスをすくい食べながら言う。
前にテレビか何かで聞いたことある。イタリアでは、女の子は14歳、男の子は16歳から結婚できるって……
「ほんとは16歳でイタリア行く予定だったんだけど……もうちょっと海宮で過ごしたかったんだって。高校の人間も、海宮の人間も気に入ってたって……」
「……イタリアに行って結婚して事業を継ぐ、ってさ……ずっと前から伶君は知ってたの？」
「らしいな。チビの頃からずっと言われてたんだって。婚約者の存在も」
浮かんできたのは、見たことはないけど……亡くなった、早川愛美さんの姿。伶君の元カノ。
代々伝わる仕来りを破ることになったとしても、婚約者がいるとしても、1人の女の子を好き、という気持ちを貫き通した……
シナリオがあるかのようなドラマみたい。
“「いちばん、好きな人と一緒になれ」”

不意に浮かんだその言葉が、急にずっしりと重みを帯びているように思える。

「……あとこれ、沙彩と夏姫にって」

と言って、渡されたのは白い封筒。表面には“杉浦沙彩”裏面には“五十嵐伶”。

どこまでも素っ気無い文字だった。

「・・・」

何故か、私も夏姫もその場で開いて読む気にはなれなかった。

「……さてと。重大発表はこれで終わり！さっさと食ってゲーセンでも行こーぜ！」

無理に盛り上げようとする空気が、唯から伝わる。

それに答える夏姫の声からも、それが伝わった。

――――……

「んじゃ、また明後日学校でな！」

「うん、バイバイ唯」

「明後日ねー」

駅のホームで唯を見送った後、私と夏姫はA市駅行きの電車に乗り込む。

無言が続いた。

「……どう思う？伶君のこと」

「……私がもし伶君だったら……きっと何が何でも嫌がっただろうな」

私の問いかけに、夏姫がそう答えた。

「だってさ、嫌じゃん。……言語も何もかも分からないところに行かされて、好きでもない人と結婚させられて、いきなり大企業の社長っていう重大責任負わされて……友達とも離れ離れだよ？」

「うん……」

仕来りを守って何もかもリセットされる道と、仕来りを破って何もかも失う道。
そんな2つの道の人生の岐路に立たされていたなんて……これっぽちも気づかなかった。
「キツかっただろうね……きっと」
明日にでも、この当たり前な光景がガラッと変わるなんて、想像つかない。
きっと伶君は……それを想像した上で、高校生活を送ってきたんだろうな……

――――……

誰もいない家に帰って、リビングのソファに座る。
テレビのチャンネルを回してみたけど、ニュースばっかりだった。
偉そうな口ばっかりきいてる政治家。殺人事件が起こった家の前で必死にリポートするリポーター。
見慣れた、夕方のニュースの光景……
とりあえず、4チャンのニュースを見ていた。
……この時他のチャンネルで、伶君のお父さんがしている企業の社長が交代されたことを報道されていたことを知らずに。

打ち上げは、明日……

もたもたするな、と伶君に言われた気がした。

第６４話　手紙

「あ、さーや！ここ、ここぉ！！！」
……打ち上げ会場にて。
会場は、畳の広い部屋……いかにも“サークルの飲み会”って感じの。
少し顔だけ覗かせてキョロキョロしていたら、桃花がバカデカい声で私を呼んだ。
「まだ結構揃ってないね」
私と桃花。それに3年の先輩が2・3人といった状況だった。
「そだねぇ～！なんせあと1時間あるもんねぇ。会場が海宮だから桃は待ちきれずに来ちゃったんだけど……さーやってA市じゃなかったっけ？」
「ああ、うん。A市だよ」
「え！？じゃあなんで？いいぐらいの電車ってあるじゃん！」
「……まぁ、うん。いーじゃん、ちっちゃいことは」
……実は、バッタリ会う、というパターンから逃げていたりする。
私って、こんなに臆病だったんだ……
「わぁ、出たァ！消えかけてるゆ〇てぃネタ！！」
桃花の言葉に適当に返しつつ……内心では、ドキドキしていた。
とりあえず、呼び出す？……いや、楽しんでる途中に悪いよね。
しらばっくれる？……いや、人としていかんでしょ。
話す機会があったら……いや、１８人も先生もいるんだ。それはない。
……シカトする……？
「いや、そりゃいかんっしょ！！！」
「わぁっ！！！ビックリしたぁ」
「あ、ごめん……」
いかんいかん。思わず声に出てしまった……

もう、何をどうしていいのか分からず、ため息をつく。
「あ、そういえば、桃昨日メアド変えたんだぁ。赤外線するからケータイ出してぇ？」
「うん、いいよ」
ケータイを取り出そうと、がさがさバッグを漁る。
ふと、手に当たった……昨日、唯経由で渡された伶君からの手紙。
まだ読んでなかった……どうしても、読む勇気がなかった。
「さーや？どしたの？」
「え？い、いや、なんでもないよ。……はい、赤外線！」
……よし。今日読もう。
きっと、家にいるより他のことに気が紛れるから……

それから、だんだんと集まってきたメンバーとの会話に花を咲かせる。
チラッと見ると……数人の男子の塊の中にいる蒼井君を見つけた。
（塊の中には武田先輩もいた）
来ていた嬉しさと、気まずさや緊張。いろんな感情が渦めく中、女子とのガールズトークにも花を添える……
……今まで一度も、こんな同時進行の作業をやったことない。
「おーい！静粛にぃ！！！」
巨大先生の声で、一瞬で静まり返る会場内。
みんな一斉に巨大先生の方を注目する。
「みんな集まったかぁ～？各ブロックの3年生は点呼取れ～い！」
……はぁ！？いきなりピンチじゃん、私……
普通、点呼とは1点に集まって名前を呼んで確かめるもの。
徐々に他のブロックも点々と集まっている。
当然、私もどっかには集まらないといけないわけで……必然的に、蒼井君の目に映ることになる。
ピンチの中で平静を装っていると……
「おっ、沙彩ちゃんいんじゃん。ヒロ君もいんね。俺もいんね。セ

ンセー、水ブロックの実行委員みんないまーっす！」
……さすが武田先輩。自分で確かめてるよ……
この時ばかりは、武田先輩を大いに尊敬した。

実行委員代表と巨大先生の挨拶。そして乾杯を済ませて、食事。
「あ、これメッチャおいしい！さーやも食べてみ～？」
「ほんとだ。何肉かな。牛？鳥？」
「あははっ！牛と鳥は全然違うじゃん！」
2年の同級生とわいわい喋りながら、用意された料理をつつく。
……あ、そういえばお母さんに言ってなかったな。打ち上げのこと……

「ごめん、ちょっと電話かけてくる」
「オッケー」
バッグを持って、一旦会場を出た。

1階に降りると、普段通り営業している外食屋の雰囲気が漂ってきた。
「おや？お嬢さん、海宮高校の生徒さんかい？」
「はい。お世話になってます」
「まぁ、ゆっくりしていきなされ」
食器を洗っていたオバチャンと、いまいちかみ合っていない会話を交わした後、店の外へ。
もうすっかり暗くなっているためか……人気が全くなかった。

とりあえず、石段に座ってケータイを開く。
「えーっと……さ行……杉浦彩華……」
……というのは、お母さんの名前。
ケータイには、大体身内であろうとなかろうとフルネームで登録している。
3回コールが鳴って、お母さんが電話に出た。

「あ、もしも……」
『沙彩悪いわね。今家宅捜索に入る前なの。１０分後に掛け直すわ』
「え、ちょっ、すぐ終わ……」
……切れた。
通話時間、５秒……
「１０分後……かぁ」
会場戻ってまた出てくるの、めんどくさい。
……１０分の間、夜風にでもあたってようかな。

――――……

一昨日の放課後……荷物を取りに上がろうと、３年教棟に入ってふとＡ組を見ると、蒼井がいた。
「……何してんの？」
Ａ組内に入り、入口近くの机に座る。
「あ、えっと……窪内さんだよね？」
その第一声にガクッと来た。
名前を正式に覚えられていない事実に
「……窪田だけど」
「そうだった、窪田恵美さん。人の名前って覚えるの意外と苦手だから……」
「いや、恵夢ね」
「・・・」
相当眼中にないんだな、と改めて実感する。
「ところで、さっきも聞いたけど何してんの？」
「ああ、帰る準備。結構時間押しちゃったから」
時間を押す、というのは予定より長引いたこと。
業界用語で、押すの対義語は巻く、らしい。
窓の外は雨……
「雨降ってるね」

「え、うそ、マジで？」
窓に背を向けていた蒼井が、窓に近寄って雨の加減を見るように窓を開けた。
「うわー……結構本降りじゃん。傘持ってきたっけ……」
「雷も鳴ってるね」
ふと、あのジンクスが過ぎる。
文化祭2日目の放課後、西日の差す教室でキスをした男女は結ばれる……
西日は差してないけど……心のどこかが、疼く。
急がば急げ、というあの占い師の言葉。
今が……急ぐチャンスなのかもしれない。
「蒼井」
「ん？」
蒼井が振り返ったと同時に、机から下りて蒼井に近づいた。
「え、何？」
出来る限り近づいて、出来る限り背伸びして、蒼井と身長を合わす。
「ちょっと目ぇ瞑って？」
「あ？あぁ」
私が言った通り、目を瞑る蒼井。
分かってないのかな、この人……こんなに近づいて、目を瞑ることを要求するっていうのは、どういうことなのかってこと……

……キスをするまで、あと数センチの距離まできたとき、入口の扉が開く音がした。
それすら無視して、距離を縮めていく……

「……ちょっと待って」
蒼井が目を開き、至近距離で目が合った。
両肩を掴まれ、蒼井は無理矢理私との距離を遠ざける。
私が背伸びさせていた足も、ストンと定位置に戻った。

「何しようとした？さっき」
「……知らないの？この学校のジンクス」
「は？ジンクス？」
「文化祭２日目の放課後、西日の差す教室でキスをした男女は結ばれる……って」
それを聞いた蒼井は、私の肩から手を離して……有り得ない速さで教室を後にした。
１００Ｍを１０秒で走るだけある……と同時に、いつもの私に戻った。
「これって……告ってるのと、ほぼ同じじゃん」
やってから、気づく……途轍もなく、馬鹿だった。

そして、今日。巨島先生による打ち上げに来ている。
蒼井は、数人の男子とかたまって何かを喋っていた。
私はというと……同じブロックの先輩と、文化祭の反省。
他の女子たちは、いかにも打ち上げといった雰囲気を楽しんでいた。
……その女子達の１人、林桃花先輩が蒼井のところに行く。
「大翔君、ちょっとさーや探してきてくんない？」
「え？どうかしたんですか？」
「電話かけるって言ったきり戻ってこないんだぁ……まさか誘拐！？的な！うちらは女子だからこんな暗い時にむやみに外に出ちゃいけないらしーしぃ……頼むっ！」
「分かりました。なんかあったらすぐ電話するんで」
「え？大翔君、桃のケー番知ってんの？」
「夏休みぐらいに無理矢理交換したじゃないですか（桃花から）」
「あ、そうだったっけ～？とりあえず、よろしくね！」
林先輩の声は大きいから、すぐに会話の内容は分かった。
蒼井が席をたったと同時に、私も先輩方に一言言って席をたつ。
「蒼井！」
「……窪田さん」

私の方を振り向いたその顔には、焦りが垣間見られる。
……もしかして、杉浦先輩のことを……
「あのさ、一昨日のことなんだけど……」
「悪い。今急いでるから、その話はまた今度」
そう言い、立っている私の傍を通って店を出る蒼井。
残して行った風が、妙に冷たくて……
……確信した。
私のことを、どうとも思ってないって……
「杉浦先輩のことが、好きなんだ……」
あの、尋常でないような焦り顔。
そんな顔にさせるのは、想い人しかできない。私には、できない。
私には、できない……

――――……

「あ、そういえば……桃花には、電話かけるってだけしか言わなかったっけ」
なかなか戻ってこない私を、心配してんじゃないか……って思って、メールを打とうと思ったけど……
「……ま、いっか」
送ったところで、あんなガヤついているところで着信音が聞こえるわけないし。
それに、私のことなどすっかり忘れて騒いでいる頃だろう。（実際は沙彩が心配で今騒いでいるところなのだが……）
それより、今吹いている夜風がたまらなく心地いい。
「……そうだ」
今なら、伶君からの手紙も読めそうな気がする。
バッグから、白い封筒を取り出して……便箋を取り出した。

『Ｔｏ．杉浦沙彩

唯からもう聞いただろうけど、イタリアでこれから後の人生を過ごすことになった。
杉浦には愛美の墓を掃除してもらったりと色々世話になったな。
婚約者がいることは、チビの頃から言われ続けてたんだ。
愛美と付き合うことになった時は、色々と親父に邪魔されたもんだよ。
それでも、愛美と付き合えたことはよかったと思う。
いつか、嫁のことも愛するようになるかもだけど、愛美のことは今も昔もずっと大好きだ……ってことを、墓の下で眠ってる愛美に伝えてくれ。
ひとつ、よろしく。

あと、杉浦のことは唯から色々とメールで聞いた。
超ハードな実行委員になったんだってな。気の毒に。
それに、あの3年の武田とも一緒なんだって？益々気の毒だな。
でも1年は蒼井だろ？お前にとっちゃあ相当ラッキーだよな（笑）
いつか、蒼井とくっつくといいな。心から祈ってる。

そうだ。唯といえば……別れてから、友達に戻ったんだって？
どうだ？恋人だった時の唯の顔と、友達の唯の顔。なんか違くねーか？
心なしか、唯のテンションもだいぶ上がってきてるきがするよ。（メールの文面だけで判断してるけど）
でも、たまに落ちる時もある。決まって杉浦の話が出てくるよ。
「友達に戻るのって結構しんどい」「どうしても彼女だったときの思い出が苦しめる」……愚痴ってばっかだ（笑）
杉浦はたぶん、「こんなに早く友達として接してくれるってことは、唯は私のこと最初っから好きじゃなかったのか」と誤解するだろう

けど、そうじゃねーよ。
俺が見てきた限りは、唯はすっげぇお前のこと好きだったと思う。
うん。

長々とすまん。もっと書きたいところだけど、飽きてもいけねーしな。
とりあえず、ちゃんと好きな奴と付き合えよ。好きじゃねーのに付き合っても、続かねーぞ。
あと、もちろん俺は退学する。
退学しても、俺のこと忘れないでくれ。別れ現場に蒼井を送ったのは俺だからな。
恩を忘れちゃ困るしな。
ひとつ、よろしく。

Ｆｒｏｍ．五十嵐伶』

「め……めちゃくちゃな文章だなぁ……」
まるで、言い残したことを書き連ねたような……そんな文面だった。
でも、なんか伶君らしい。
フフッと笑っていると……

「あ、こんなとこにいた！」

蒼井君の、声がした。

第６４話　手紙（後書き）

大事なことは、メールより手紙の方が心が伝わる。
それは作者もつくづく思うことです（しみじみ）

さて、とうとう大翔と鉢合わせしてしまった沙彩。
以後、どうなるか……！

第６５話　“好き”

「よかった。誘拐とかされてなくて……」
「な、なんでここに？」
「ギャルの先輩に頼まれたんだ。なんかメッチャ心配してたよ」
ギャルの先輩……桃花だね、きっと。
不自然な動きで便箋を封筒にしまってバッグの中に入れた。
「……あのさ、一昨日のことなんだけど」
……来た。
ヤバい……どう言えばいいんだろう。
頭の中で悶々と考えていると……バッグの中のケータイから、着信音が聞こえてきた。
「……っと、ごめん」
そう言い、ケータイを取り出す。
やっぱり、お母さんから。もうあれから１０分経ったんだ……
『沙彩？悪かったわね。後回しにしちゃって』
「う、ううん。全然」
『で、何？』
「きょ、今日、文化祭の実行委員の打ち上げに来てるから、か、帰るの遅くなるかも。会場は海宮の九石っていう、外食屋さん」
『幹事は誰？』
「えっと、数学の巨だ……いや、巨島先生だよ」
またしても巨大先生と言ってしまうところだった……
『ああ、あのガタイがデカい……分かったわ。ていうかあんた大丈夫？声の芯がガタガタよ？』
「だ、大丈夫大丈夫。えと、じゃ、切るね」
『じゃーね。……頑張んなよ』
意味深な発言をした後、お母さんの方から電話が切れた。
……お母さんの声を聞いたら、緊張が少し解れたかもしれない。

「戻ろ。みんな心配してる」
私がケータイをしまったと同時に、蒼井君がそう言う。
「あ……まだ戻りたくない」
「え？嫌いな人でもいんの？」
「そうじゃなくってさ……ほら、夜風気持ちいーじゃん」
……なんだか、もう2人になれる機会がなくなってしまうような気がして。
って、素直に言えたら……どんなにいいだろうか。
「結構寒いと思うけど……杉浦先輩がそうしたいなら、俺もいる」
「な、なんか悪いね。私の異常な運動神経に合わせちゃって……」
「それを言うなら、感覚神経っしょ」
蒼井君は笑って、私の隣に座った。
……寒くて冷たいはずの夜風。でも、ちっともそう感じない……
暖炉に氷を1個入れても、火は無害そうな顔して簡単には消えない。
そんな感じだった。

沈黙が続く。
「……お、一昨日の、気にしてる？」
私が勇気を出してそう聞くと……
「うん。かなり」
……予想だにしてなかった言葉が返ってきた。
きっと、気にしてないって答えるだろうと思ってたから……
「でも、あれは“ダチとして”でしょ？」
「……え？」
「好きにも、いろんな意味があるし。だから、一昨日のあれは友達だから……」
「ち、違う！」
気がついたら、否定していた。
いつもの私だったら、「そうだよ」って嘘ついて、はぐらかすのに……

「蒼井君は、私にまだ恋人がいるって思ってるっぽいけど……今はいないんだよ。一昨日のあれは、友達としての好きじゃないし……ちゃんと恋愛感情の、好き……なんだから」

ちゃんと顔を見れない。地面ばっか見ている私。

でも……言葉は、はぐらかしたくなかった。
嘘はつきたくなかった。

自分の気持ちを無視し、唯を選んだ過去の自分。
今の自分は……過去の自分のせいで、唯を傷つけてしまった。

もう、大切な大切な人を傷つけたくない。
もう、自分に嘘はつきたくない。

たとえ今から自分が傷つくとしても、これがせめてもの償い……そうとまで思えるほどの、告白だった。

――――……

「あ、大翔君！さーやいたぁ？」
“さーや”
たくさんの人からそう呼ばれてる名前が聞こえ、動きが止まる。
「……あ、はい。いました」
「え？じゃあなんで一緒にいないのぉ？」
「……明日の課題、結構溜まってるから、って言って帰りました」
明日から学校。いつもの日常が帰ってくる。
ギャルの先輩は残念そうに顔をゆがませ、それを言葉に表すと女子の塊の中へ帰って行った。

「よーおかえりヒロ君！災難だったねぇ～、２年の林だっけ？パシられちゃってさぁ」
「いえ、別に災難ってことは……」
武田先輩にそう言われ、言葉がつまる。
「ところで、沙彩ちゃん見つかったの？」
ギャルの先輩……もとい、林先輩からのほぼ同一的な質問に、さっき言ったように返す。
武田先輩は杉浦先輩の勤勉さ（？）に感心しているようだった。
「へー、課題ねぇ……俺なんか、ほったらかしだよ。やる気しねーもん」
……と言いながら、茶色い物体……おそらくチョコレートを口に含みながら武田先輩は言う。
「武田先輩……更生の道はどうしたんですか？」
「ああ、文化祭実行委員に当選した自体で閉ざされたね」
「早っ」
「そういうもんさ、人間て。それより、これウマいぞ結構。ヒロ君も食べてみなよ」
さあさあ、と勧めてくる。
皿に乗っかった５つのチョコレートのうち、１つを口の中に入れた。
……何か、甘い液体が口の中に広がる。
……なんだか、意識が呆然と……
「ちょっ、おいヒロ君？どうしたぁ！？」
「ヤバ……頭がボーってする……」
その場で座っておくことさえしんどくなり、壁にもたれかかった。
目の前には、心配そうな顔して俺を見てる武田先輩。思い思いに騒ぐ男子たち。酒が回ってほろ酔いになってる先生たち……
「……なんで俺、引き止めなかったんだろ……」
目の前にいる人たちとは、ほぼ無関係な杉浦先輩の姿が浮かんで……先輩を引き止めなかったことを悔やむ。

「え、何を？沙彩ちゃん？」
「俺が思ってること……全然伝えてないのに……あの時、言えばよかったのに……」
……杉浦先輩の、一昨日の言葉。
あの言葉の意味が、“友達として”なんだろうな……と、今日まで自分に言い聞かせていたこと。
言い聞かせる度……恋愛対象じゃないんだろうなって、虚しくなったこと。

そして何より伝えたかったのは……好きだってこと。

――――……

巨島先生のバカデカい笑い声で、意識が戻った。
「……あれ？」
なんで俺、意識を失ってたんだ？
しかも見上げた先には……なぜか、武田先輩の顎。
「お？お目覚めかい？ヒロ君」
武田先輩が俺を見下ろし、そう言う。
「……うわっ！すみません！」
自分がしていることにようやく気づいた俺は、慌てて起き上がった。
「ま、いーってことよ。女子なら何回もあるけど男子を膝枕してあげたのって初めてだしぃ？ヒロ君の寝顔は見れたしぃ？」
「あの、俺何して……」
俺がそう聞くと、武田先輩は「やっぱり」と呟く。
何か？と聞いてみたら……
「いやー、さっきヒロ君のケータイ取ってカイジ君って人と連絡取ったんだよ。「ヒロ君は酒弱いのか？」って聞いてさぁ。そしたら、「弱いっていうか、アイツ酒飲むと普段ひたむきに隠してる本音をぶっちゃけちゃうクセがあるんですよね」……だって！ヒロ君、色

々悩んでんだねぇー！ガハハ」
……そうだったのか！
だから何時ぞやの時、クリスマスの観覧車で俺が言ったことを覚えてないのかって杉浦先輩は聞いてきたのか！
「うっわぁ……何言ったんだろ……」
まさか、告っては……ねーだろうなぁ。
いくら酒が入ってるとはいえ……そんぐらいの自制心は持ち合わせているはず。……多分。
「悩みなら俺が聞くぜ？なんたって学校だけでなく人生の先輩だしね」
「……やめときます」
武田先輩には悪いけど、ぶっちゃけたら最後、全世界中に広まるような気がした。

――――……

家に帰っても、あの観覧車の中で何を先輩に言ったのか……次に顔を合わせたときはどうすればいいのか……って、いつも以上に杉浦先輩のことで頭がいっぱいだった。
「お帰り大翔君」
「あ、修二さん。珍しいですね、今日中に帰ってくるなんて」
彼は母の再婚相手、修二さん。俺の継父にあたる。母と同じジャーナリスト。
戸籍上は父親なんだけど……赤の他人っていうこともあって、なかなか“お父さん”とか“親父”とかって呼びがたい。
「今日は仕事が早く上がったんだよ」
「そうですか。じゃあ、俺は風呂入って寝るんで……」
「ああ、おやすみ」
グラサンかけて、黒いベンツ乗り回してて強面だけど、実は結構優しい人だったりする。

シャワーを浴び、ベッドにもぐりこんだ。
改めて、あのシーンを思い返す。
……そういえば、杉浦先輩……俺のこと、恋愛感情で好き、って言ったよな。
それが本当だとしたら……
「……メチャクチャ嬉しいじゃん……」
いや……でも、俺1コ下だし……幻聴かもだし……
でも、俺だった1コ上だってことを気にせずに杉浦先輩を好きになったわけで……

様々なパターンや想いを馳せたまま、いつのまにか眠りについていた。

第６５話 “好き”（後書き）

悶々と考える大翔のセリフを書いててなんかおもしろかったです（笑）

さて、次回はいよいよ決着を!?（バトルみたいだなぁ）

次回更新は、１週間後を予定しています。

第６６話　天使（前書き）

今回は「＝＝＝＝……」を区切りとして、沙彩視点→ナレーション→沙彩視点→武田先輩視点……と、コロコロ変わります（汗）

第６６話　天使

「どうしたの？沙彩」
……どうしたもこうしたもないよ……
「学校休みたいぃ……」
「何言ってんの。高校生は1日でも学校休んだら命取りでしょ？」
そりゃそうだけどさ……
言うこと全部言って、挙句の果てに蒼井君の顔さえみずに帰っちゃって……
完璧に1人で突っ走って……蒼井君も「意味分かんない」みたいなこと考えてるよね絶対……
……怒濤（？）の打ち上げの翌日の今日。またいつもの学校生活が始まる。
口では「休みたい」を連呼してるけど、食事の手を止めることはなかった。
「あら……雪ね。さすがに寒いだろうから、今日はちゃんとブレザー着て行きなさいよ」
「……はーい」
食器を片付けた後、クローゼットの奥に眠っているブレザーを（今更）引っ張り出した。
紺色のブレザー。今まで、数えるほどしか着て行かなかった。
まず、1年の時の入学式。その次に2学期の終業式、3学期の始業式。卒業式に修業式。
2年の時も3学期の始業式まで同様。
去年は温暖化のせいで雪はあんま降らなかったから、式典以外にはブレザー着て行かなかったけど……
「今年は……よく雪が降るなぁ」
温暖化はどうした、と地球に問いかけたい気分だ。
……いや、その前にあの告白をした後……どんな発言をすればよか

ったのか神様に問いかけたい気分だ。

電車の中は、いつもに増してガンガンエアコンが効いている。

「あ、さーや！こっちこっち！」

夏姫の声が聞こえ、その声の方へ向かう。

おはようの挨拶を交わした後、夏姫がカバンを使って空けておいてくれた席に腰を下ろした。

「相変わらず朝は混んでんね。もうほぼ席ないじゃん」

「ほんとだねぇー。通勤ラッシュってやつだ」

でも、よくニュースのドキュメンタリーコーナーに出てくる“東京の地下鉄で相次ぐ痴漢事件！”の電車内環境みたいなように、身動きひとつできないほど混んでいるわけではない。

「んで、どうだったのぉ？昨日は～。なんかあった～？」

夏姫が肘で私をつつきながら聞く。

ちなみに昨日打ち上げがあったことは、この前メールで夏姫と話した。

「うん……告ったよ」

「……へ？」

「だから、告ったの」

夏姫の表情が止まった……

「……えええええっ！！！？うそぉぉぉん！！！」

「ほひゃあっ！？」

いきなりの大声に、向かい側にいた転寝してたおじいちゃんが奇声をあげて目を覚ます。

……このシチュエーション、どっかで見たような……

一応、私がすいませんと謝っておいた。

「ちょっ、ええ！？告たって……大翔君に！？」

「うん」

「愛の！？」

「そう」

夏姫はまだ信じられないといった感じの表情だった。
……そんなに告りそうじゃないキャラなのかな、私は……

海宮駅に着いて、自転車に乗り換える。
今朝は……蒼井君を見かけなかった。
できれば鉢合わせしたくないけど、なんか残念……でも安心……
矛盾してるなぁ。
溜息をつき、自転車の鍵をさした。

「おはよー沙彩夏姫！」
「あー唯！おっはよぉ！」
大通りに出たところで、唯と会った。
って……夏姫、まさか唯に昨日のこと言う……とか！？
友達に戻ったとはいえ、今はさすがに唯には言いづらい……
「お、おはよ唯……」
「ん？どーしたぁ沙彩！元気ねぇなぁ！」
「そんなことないよ。アハハ……」
バンッと背中を叩いてきた唯に対して無理矢理笑顔を作った。
“「友達に戻るのって結構しんどい」”
“「どうしても彼女だったときの思い出が苦しめる」”
伶君の文字で書き連ねられていた、唯の本音。
このあけっぴろげな笑顔の裏にこんな本音があるってなると……やるせない。

学校について、自転車置き場へ。
ほぼ満席（？）だったので、私たち3人は分裂して、空いている数少ない場所にそれぞれがねじ込んだ。
荷物を取って、施錠。
「……これでよし、っと」
さて、唯と夏姫と合流して教室に行くか……と、足先を置き場から

外へ向けたその時……！
「もー、結構遅いからメッチャ待ったんだけど～」
「……へ？」
どこからともなく声がして、辺りを見回すけど……何もナシ。
気のせい？それか他の人たちの会話？
いろいろ考えて首を捻ってると……
「……こっち！」
「うわっ！」
いきなり手首を掴まれ、ひっぱられた。
……っつか、早っ！
「ちょっ、頼むから止まっ……」
うわっ、リアルに足が浮くっ、足が浮くぅっ！！！

「……よし、うまく逃げられたかな」
数分走った後、いきなり急停止され、思いっきりひっぱっていた張本人の背中にぶつかった。
「イッテー……」
デコをさすりながら、見上げると……
「ごめんね沙彩ちゃん。ビックリした？」
「ビックリしたも何も……って……」
金パに腰パン……武田先輩じゃん！
そして何故か隣には、今日鉢合わせしたらいちばん気まずい人物ナンバーワンの蒼井君がいた……
反射的に、一歩あとずさる。
「まずヒロ君拉致って、次に沙彩ちゃん来るまでしげみに隠れて待ってたんだ」
「な、なんで……」
私がそう聞き、返ってきた答えは……
「なんでって？遊ぼーぜぇー！」
……だった。

＝＝＝……

沙彩が武蔵（武田先輩）から返ってきた言葉に呆然としていたその頃、杉浦家に１本の電話がかかってきた。

自分が勤める仕事場へ向かおうと身支度をしていた沙彩の母、彩華はその電話を取る。

「はい杉浦です」

『あ、２－Ｄの担任なんですが、沙彩さんがまだ来ていません。欠席ですか？』

内容は、こうだった。

彩華の脳裏に、学校に行きたくなさ気な顔で「いってきます」と言った沙彩が浮かんだ。

それに加え、昨日の電話で聞こえてきた沙彩の芯がガタガタの声。

ずっと気にかかっていた、沙彩の想い人の名前。

……さては、と彩華は思った。

「……ええ。沙彩、昨日の打ち上げで風邪をもらってきまして……欠席ということで」

『そうですか。分かりました。次はできるだけＳＨＲの前に連絡ください』

「はい。ご迷惑をおかけして申し訳ございませんでした。失礼します」

受話器を置いて、彩華は沙彩のケータイに電話をかけようと思ったけど、やめた。

「……話は後でゆっくり聞くから、がんばんなさいよ」

今は傍にいない沙彩に、そうエールを送りながら。

ちなみに、１－Ｄの担任、３－Ａの担任も無断欠席をしている生徒の自宅に欠席確認の電話を入れたが

……どちらも不在だった。

大翔の父は事件現場のリポートをし、母は問題をおこしている政治家へのコメントを要求している最中。
武蔵の父は会社勤めをしている最中だった。

＝＝＝……

「ほら、俺ら縁あって同じ実行委員になったのに、まともに交流しなかったじゃん？今更気づいたっていうか、今更遊ぼう的な？」
「んな無茶な……ＳＨＲ終わってる時間じゃないですか！早く学校戻らないと先生が……」
「まぁなんとかなるっしょ！とりあえず、Ｃ市あたりでも行こう！」
Ｃ市、というのは、ここら辺じゃあ結構都会な市。
そこに行けば、先生の目も届かない……じゃなくて！
「やっぱりダメですよ！そりゃあ先輩はサボり慣れしてるだろうけど……って、もう駅行ってるし……」
武田先輩は軽い足取りで駅に向かっていた。
「……武田先輩放っておいて学校戻る？」
「んー……」
改めて考えると……学校戻っても、どう弁解していいか分かんない。
時間はもう、１限目が始まって１０分経過したとこ。
遅刻にしては遅すぎるし……
悶々と考えてると、ケータイが震えた。
「お母さんからだ……」
やっぱ家にはもう、連絡入ってる……よね。
意を決したつもりで、ケータイを開く。
もし、「何してんの」ってあったら……武田先輩の名を出そう。

『Ｓｕｂ.
学校には欠席扱いにしてもらうように言ったから』

サ、サブタイや絵文字がない……怒ってる証拠だ。
でも……
「なんか……見透かされてる感じがするな」
今、私がどんな状況にあるのかも、蒼井君と何があったのかも、何もかも……
「え？」
「……な、なんでもない」
途端に、今ふたりっきりな状態が気まずくなって、返信を打ちながら平静を装った。

『Ｓｕｂ：Ｒｅ：
ありがとう』

それだけ打って、送信ボタンを押した。
「……蒼井君のとこは？」
「ああ、家に連絡入ったとしても両親仕事でいないし……多分俺も、欠席扱い」
「そっか」
待ち受け画面に戻して、ケータイを閉じた。
「とりあえず……さ、貴重なオール１日サボりだし……昨日のことは一旦忘れてパーッと騒ごうよ！ね？」
「……そーだな。サボりなんて一生のうち１回ぐらいだし」
だいぶ離れたところで、武田先輩が「おーい！早く来ーい！」と大声を出していた。

――――……

電車に揺られて１時間。Ｃ市駅に到着。
「うぉーっ！すげぇ！人が少ねぇっ！」
……うんまぁ、そりゃそうです。

１８歳のいい年した高校３年生は、無邪気に駅のホームを駆け巡っている。
「……んで、どこ行くんですか？武田先輩」
「おーそうだなぁ～……まぁとりあえずゲーセンでも行くか！」
……えぇ！？Ｃ市まで来てゲーセン！？
とツッコむ間もなく、武田先輩はホームを出ようとしていて……私と蒼井君もそれに続いてホームを出た。

――――……

ゲーセン、水族館、映画館、（なぜか）美術展……いろんなところをまわって、今、ショッピングモール……の、バスケ用品店にいる。
「ヒロ君～……もう２０分も見てんじゃーん……俺立つの疲れたぁ～……そこのイスで待っとくねー……」
「あ、そんじゃ私も」
「……あ、了解。なるべく早く決めるから」
武田先輩がぐずってイスに向かうのに続いて、私も用品店を出た。
昨日のことは忘れてパーッと騒ぐ予定だったんだけど……やっぱふたりっきりは気まずくて。
蒼井君ってば、もう２０分もバッシュコーナーを眺めている。
あの眼差しは、前に見たパソコンに向かってるときと同じで……（第５０話参照）
相当、ひとつのことにのめりこむタイプなんだな……と密かに思った。

自販機でレモンアイスティーを買って、武田先輩が座ってるイスの隣のイスに座る。
「うっわ、こんな寒いのに氷たっぷりのアイスティー！？」
「私の運動……じゃなくって、感覚器官はちょっと人とは違うんで……」

そう言いながら、レモンティーをすすった。
「にしてもヒロ君、すごいねぇ。あんなにひとつのモンに執着するって……だから恋も一途なのか……」
先輩の語尾はいまいち聞き取れなかったけど、先輩も同じことを思っていたようだ。
「いやー、デートするとなると大変だね！ショッピングモールはデススポットだよ！」
“デート”
その単語で、レモンティーがあらぬ方向に流れ込み……少しむせ返った。
「大丈夫かい？沙彩ちゃん」
「……はい、なんとか……」
ハーと息をついて、一旦レモンティーから口を離した。
その直後、先輩が驚くことを聞いてきた。
「沙彩ちゃんさ、ヒロ君のこと好きっしょ？」
「……へ？」
間の抜けた返事をすると、先輩は「やっぱりね」って感じで頷き、未だに悩んでる蒼井君を見る。
「なんでそんな……」
「んー……お似合いだなーって思っただけ」
……お世辞でも、その言葉が嬉しかった。

＝＝＝……

「んじゃー暗くなったし、そろそろ帰りまっか！」
後輩2人に俺がそう言うと、その2人は今気づいたように空を見上げる。
「うっわぁ、もう星出てる……今何時だ？」
「7時……やっぱ冬の日は短いなぁ」
ヒロ君の独り言と、沙彩ちゃんの独り言。

俺から聞くと、完璧に成り立ってる会話。
本当、２人からは同じ匂いがする。

下り線の普通列車に乗り込む。
１時間ぐらいで海宮市に着くから、Ａ市には２０分ぐらいで着く。
時間的にも丁度いい。
「今更だけど、ごめんな？俺のお遊びにつき合わせちゃって」
「……何今更言ってんですか……」
呆れたように言うヒロ君。可愛い顔（？）して、結構この子がいちばん鋭い。
俺はハハッと笑うと、今日を振り返った。
……いろんなところへ行ったなぁって、改めて思う。
高校生活最後の、楽しい思い出ができたなって思う。
「武田先輩？どーしたんですか？ボーっとして……」
「いや……補導されなくてよかったなーって思っただけ」
咄嗟についたウソは、どこか本心が混ざっていた。
高校生活最後の楽しい思い出……これからは……きっと毎日説教だ。
俺の夢は、俳優になること。
その為には……バイトで金稼ぎながら、オーディション受けまくる。
進学も就職もしない。そんな俺に説教しない学担など、どこにいるか。
それに、俺の親父は会社員。当然、収入は低い。母親は既に他界してる。
今でさえ不景気で家計は苦しいってのに……大学行って、さらに負担をかけるなんてことはできない。
「ねえねえ、２人の将来の夢って何？」
「夢？私は検察官ですけど……」
「へー、ケンサツカン……あれ？交番にいる人？」
「それは警察官です……」
なんだろうな、ケンサツカンって。

ま、とりあえず沙彩ちゃんはケンサツカンか。
「ヒロ君は？」
「俺は……そうですね。うん。なれたら言います」
と言って、ニッコリ微笑む。
「なって言っても将来の夢になんないじゃん」
とりあえず……この２人はちゃんとした目標があんのか。
うん。それがいちばんいい。

２０分後……
『次はＡ市、Ａ市にとまります』
電車のアナウンスが、Ａ市到着を知らせる。
「おっ、もう着いた。やっぱ早いな～Ａ市は。俺なんてまだ４０分あるしぃ」
俺の愚痴に、２人は笑う。
「それじゃ」
「最初はどうなるかと思いましたが、楽しかったです」
「おう、俺もだ！」
沙彩ちゃんのその言葉に、俺も元気良く返す。
人の列ができて、丁度空いたところに沙彩ちゃんは入り、そのまま出口に向かう。
ヒロ君も同じく入ろうとしたが、俺が腕を掴んで引き止めた。
「何ですか？先輩」
驚いたような顔で、ヒロ君が振り返る。
「がんばれよ、大翔」
口端だけ上げた笑顔を作って、ヒロ君の背中を押した。
『間もなくドアが閉まります』
ヒロ君が出口を通った直後に、ドアが閉まる。
ガラス越しに……ヒロ君が、俺を見てかすかに頷いたような気がした。

偶然が重なって出会った俺ら。
結局俺は頼りなくって全然先輩らしくなかった。
けど……可愛い2人を結びつける天使（キューピッド）になれれば、それでいい。

第６６話　天使（後書き）

予定より１話のびました……（汗）
更新遅らせておいて、スミマセンｍ（＿＿）ｍ

第67話　ただ、伝えたい。

「うっわぁ……星がすごい……」
駅のホームを出るなり、夜空を見上げる先輩。
つられて俺も空を見上げる。
ホームの天井が遮っていた夜空が広々と広がっていた。
「ほんとだ」
朝降っていた雪は止み、雲がすっきりと消え去った夜空。
月は煌々と光っていて、無数の星が煌いている。
……不意に訪れた沈黙。
「……あ、昼間水族館で見たイルカ！超凄くなかった？」
「ああ、うん」
「ショーとかテレビでしか見たことなかったんだよねぇ。やっぱ間近で見ると迫力が違うよ」
「そうだね」
先輩の口調から、なんとか沈黙を取り去ろうとする焦りが垣間見られる。
……ここは、やっぱ俺から切り出さないと。
って決心した矢先に、
「あ、そうだ！ちょっと寄り道していい？」
「え？寄り道？……あ、うん。いいよ」
……何故か、先を越された気分になった。

向かった（向かわされた）先は、俺の家や杉浦先輩の家とは思いっきり逆方向。
記憶を辿る限り、俺は足を踏み入れたことがなかった方向だ。
「えーっと、確かここを曲がって……あ、あった！」
目の前に広がるのは……空の色を反射して黒く輝く、夜の海。
夜……しかも冬だから、俺等以外誰もいない。

「ちっさい頃、よくここの海で遊んだんだ。貝拾いとか砂遊びとか」
「へぇ。貝拾いに砂遊び……先輩にもそんな時代があったんだ？」
「何？その言い方～」
笑いながら、懐かしむように貝を手に取る先輩。
その笑顔は、去年の夏のあの日から意識的に、それに反射的にもずっと見てきた顔。
“彼女（サクラ）”の存在があったにも関わらずに。
石垣に座って、目を閉じてみる。
秋の日……咲良と別れたときに言われたあの言葉を思い出す。

“「……先輩には、唯先輩がいる。けど……大翔はそんなこと関係ないよね」”
“「それ、ちゃんと杉浦先輩に伝えて？結果がよくても悪くても……大翔が幸せになれること、願ってる」”

心の中で誓った。
もう、自分の気持ちに嘘はつかない、と。

ゆっくり目を開けた。
「……あのさ」
「え？」
貝に夢中だった杉浦先輩は、俺の声を聞いてこちらを向いた。
「昨日のこと……本当？」
砂浜に足をつけたと同時に、しゃがんでた先輩も立ち上がる。
先輩は、言葉をさがしているかのような表情をした。
「……朝、一旦忘れるように言ったこと？」
「うん、それ」
微妙な距離のまま、波の音に飲み込まれない程度の声の大きさで話す。
「一旦って言ったけど……ずっと忘れてていいよ。だって迷惑っし

ょ？ただの先輩から気持ち押し付けられても……」
「いつ、迷惑だって言った？」
「……え？」

……人から聞いた俺の過去のこと、咲良のこと、後輩っていう立場……
それらを全部取っ払って、最後に残ったのは……“ただ、伝えたい”

「俺も好きだよ。ちゃんと、恋愛感情で」

――――……

無性に海に行きたくなって、無理矢理蒼井君を連れて、ちょっと遠い海へ来た。
懐かしい気持ちがあふれ出したのと同時に、何か他のことをして気を紛らわそうとして、貝を手に取った。
そして、蒼井君から声をかけられた時……来た、と思った。

フラれる時が。

でも……聞こえてきたのは、“俺も”という言葉。
頭が真っ白のまま、頬を伝ったのは……涙だった。

「うそ……」
「嘘じゃないよ。全部本気」
真面目な顔で、蒼井君は言う。
「だっ、だって1コ上じゃん？蒼井君から見たらオバサンじゃん？」
「全然。１コ上……って言っても、同い年じゃん。１６歳」
「しかも、私全然女らしくないし……痴漢倒したり、すぐ蹴るし殴るし圧し折るし、ハタから見たら5対1の劣勢でも余裕で勝っちゃ

うし……しかもテストじゃ理系は赤点ギリで……」
テンパって、最早ワケ分かんない単語ばかり並べる私。
蒼井君は緊張の糸が切れたように、笑い出した。
「もー、分かってないなぁー全然！」
「え？何が？」
涙を指でぬぐいながら聞いた。
「男より強いとこも、誰よりもカッコいいとこも全部好きなんだよ！この世でいちばん」
……この世でいちばん大好きな笑顔で、蒼井君は言った。
「……それなら、私もじゃん！」
いつのまにか涙は止まってて……気がつけば、私もつられて笑っていた。

それから、蒼井君の隣でいろいろな話をした。
今までのことはもちろん、ずっと気になっていたことも。
それは……前に電車内で鉢合わせしたとき、なんで私を睨んでいたのか、ってこと。
返ってきた答えは……「高杉先輩の顔が浮かんできて、ムカついたから」……だった。

――――……

「……わ、もう9時……そろそろ帰ろっか」
私がそう切り出したところで、その海を後にした。
手の中には……拾った、2、3つの貝殻がある。
「だいぶ冷え込んできたなぁ……杉浦先輩、寒くない？」
「全然。私の感覚器官は異常だから」
「そっか」
……よし。運動器官って間違わなかった。
「今更なんだけど……付き合ってる、ってことでいいんだよね？」

確認してくるように聞いてきた言葉に、小さく頷いた。
「……そんじゃー呼び方も“杉浦先輩”じゃ堅苦しいよなー……」
「いや、すぐに変えなくてもよくない？もうそれで定着してるわけだし……」
「定着……ってことは、俺は“蒼井君”？」
「……っていうことになる……ね」
私がそう言うと、蒼井君は不満そうに「えー」と言った。
「高杉先輩は“唯”なのに？」
「ゆ、唯ってのは、高1の時から定着してるからさ！それを言うなら、咲良ちゃんだってそうじゃん！」
「あ、そっか。でも、咲良のことは昔何て言ってたか覚えてないし……」
……そう来たか。
「……んじゃあ、前言撤回。沙彩って呼んで」
「そんじゃあ俺のことも名前で呼んで」
途端に静まりかえった空気に、笑いを堪えるのに必死で……
蒼井君も同じだったようで、2人して笑った。

“幸せ”
まさに、それ。

幸せを噛み締める中で……不意に頭に浮かんできたのは、唯と咲良ちゃんの顔だった。

第６８話　一歩踏み出す勇気

翌日。“幸せ”で一睡も出来なかったのに、なぜかスッキリさえてる頭で洗面所へ行き、顔を洗って寝癖を直した。
「沙彩～……昨日聞けなかった分、たっぷり聞かせてもらおうじゃないの……噂によると9時過ぎに帰宅したんですって？」
「げっ……」
……忘れてた。
昨日、誰もいない家に帰ってきて……そのせいで忘れていたお母さんのこと。
ていうか……何の噂だよ……

――――……

説教を喰らわされて、化粧もままならないまま電車に飛び乗った。
「さーや！おはよう！」
夏姫が手招きをして、そっちに向かった。
「あれ？今日手抜きじゃない？」
「お母さんから説教喰らわされて……髪のセットとメイクの時間が削られたんだ」
でもさほど変わりないっしょ？と付け足す。
「……ん？なんで説教喰らわされたの？」
「あ……」
「そういえば～、昨日もいきなりさらわれて……何故か風邪で欠席だったよねぇ？一緒に登校したのにぃ～……それと関係あんのぉ？」
……これは、全てを話さなければいけない状況。

全部話すと、夏姫の顔は輝きに満ち溢れていた。
「よかったじゃんさーや！おめでと！」

「あ、ありが、と……」
バンバンと背中を叩かれ、声が途切れ途切れになる。
「早速みんなに報告しないと！」
と、ケータイを出す夏姫。
「だーっ！ちょ、ちょーっと待って！早い！早すぎるって！！！」
「え？なんで？……あー、そっかぁ。大翔君、めっちゃモテるもんねぇ。ヘタに早く広めたら……ロクなことされないよねぇ……」
まっ、そーなるのも最早宿命だけど、と、思いっきり他人事のように夏姫は笑う。
でも、そんなことよりも……気になったのは、唯のこと。
唯に報告すべきなのか……もう友達なんだし、言わないのもおかしい。
でも、唯からしたら私はまだ……って、自意識過剰か。
それでも、やっぱり言い辛い。
夏姫はそれを察知してるのかどうか知らないけど……呑気に鼻歌を歌っていた。
いや、これじゃあ察知してないだろうな、たぶん。

海宮駅について、唯と会わないよう只管祈りながらホームを出る。
「あ、おはよ！」
「あ、唯！おはよー！」
……ホームから出た途端に会ったし！
「お、おっはよ、唯、君……今日もいい天気だ、ネ……」
「どうした沙彩！まるで日本に来て２４日目の中国人みたいな喋り方だぞ？つーか昨日どした？」
こ、細かっ！
２３日でも２５日でもないんだ……（モデルのＪＯＹさんの発言をパクリました（汗）ｂｙ作者）
なんて、ブツブツ考えてると……
「さーや、大翔君と両想いになったんだって！昨日も幸せすぎて一

睡もできなかったんだってさぁ～！さーやも乙女だと思わない？」
……ぬがぁぁぁぁぁぁっっっ！！！
さらっと夏姫が言いやがった……！
「あ、そーなんだ？よかったじゃん！これで俺もスパッと諦めれるよ」
「へ……？」
な、なんだ？この呆気なさは……
チラッと夏姫を見ると……「ほらね、大丈夫だったっしょ？」って言わんばかりの笑顔を見せた。
「なんかさー、俺、次はいけそーな気がするんだよね」
「え？唯、好きな子いんのぉ？」
「いねーけど！」
「じゃあなんなの～？その予感！」
唯と夏姫の会話。
普通過ぎる唯の表情……
数分前の気持ちとは打って変わって、とても軽いものにかわっていた。

徒歩で、しかも喋りながら登校したので始業ギリギリで到着した。
「さーや、風邪はもう大丈夫？」
「え？あ、うん。1日で治っちゃう体だから……つまり丈夫ってわけで？」
「アハハッ！さっすが1月なのに移行期間服（ブラウスにベスト）なだけある！」
クラスメイトとの、何気ない会話……
ていうか私、風邪で休んでたことになってんだ。
蒼井君や武田先輩は……昨日の欠席（サボリ）の理由、なんて言い訳したんだろうか。
「ていうかさぁ、付き合ってんならなんで朝1人だったの？」
前の席に移動してきた夏姫が小声で聞く。
「え？なんでって？」

「ほら、地区も一緒だし……一緒に登校ーって流れになるじゃん？」
「あー……蒼井君、いつも朝練が日課らしいし。今は朝練中止期間だから、海宮の市民体育館か何か使って練習してるんじゃないかなぁ。A市って、市民体育館ないし」
「なーるほどぉー……これはちょっと説教しなきゃな……」
夏姫は何やらボソボソ言うと、いきなり席を立って、私が「どうしたの？」って聞く間さえ設けずにダッシュで教室を出ていった。

――――……

「今日のＬＨＲは、文化祭の後片付けの続きな」
朝のＳＨＲの前。教頭がいなかったから、学担に連絡事項を聞く。
たしか、昨日も文化祭の片付けがあった。なのに……
「なんで2日連続で？」
「なんでか分かるか？」
「さぁ……」
俺が曖昧に答えると、学担はわざとらしくデカい溜息をついた。
「お前が昨日無断欠席したからだよ……なぁ、昨日なんで休んだんだ？」
「あ？ああ……脳波に異常がないか確かめる為に1日検査入院してたんです」
……嘘です。
「それならそうと連絡をよこせ。ったく、お前がいなかったせいで昨日は後片付けが進めたもんじゃなかったんだぞ」
「すみません……いろいろと迷惑かけて」
確かに、実行委員がいなかったら片付けは進まない。
昨日サボったことに反省しながらも……やっぱ武田先輩についていってよかった、って思った。

会議室を出て、廊下を歩いていると……

「あ、いたいたっ！大翔君！」
後から声がして、振り向いた。
少し目線を下にしたところに、東郷先輩（夏姫）の顔があった。
「東郷先輩。おはようございます」
「うん、おはよう……じゃなく！大翔君って朝練が日課って本当！？」
「はい、そうですが……」
そう答えると、信じらんないっていった表情で俺を見る東郷先輩。
「“アンタ”、さーやの彼氏なんだから！登校ぐらい一緒にしないと！自分のことばっかり優先させてたらフラれちゃうよ！？」
ア、アンタって……
ＳＨＲの始まりを知らせるチャイムが鳴り響き、東郷先輩は「それだけ！じゃっ！」と言って、来た道をダッシュで戻って行った。
「登校ぐらい一緒に……か」
……よし。今日あたりにでも、誘ってみよう。

――――……

あっという間に1日が終わり、放課後になった。
「……よし、帰るか」
実は日直。日誌を書いて、学担に提出した後、帰路を辿ろうと踵を返したとき……ふと、体育館が目に入った。
……そういや、部活してる蒼井君って見たことなかったなぁ……
「ちょっとのぞくぐらい、いいよね……？」

体育館の目立たない小窓から、少し顔をのぞかせて体育館内を見た。
「あ、１ｏｎ１やってる」
１ｏｎ１……1人対1人のミニゲーム。
バスケ部は部員が多いらしく……ベンチには、多数のバスケ部員が。
コートには、ごっつい……おそらく、受験勉強の気晴らし目的で参

加している3年生2人が白熱のバトルを繰り広げていた。
やがて、終了の合図があって……
「次、小城と蒼井ー」
……という、バスケ部顧問の声がかかったと同時に、黄色い歓声の二重奏（デュエット）、三重奏（トリオ）、四重奏（カルテット）、五重奏（クインテット）……数え切れないほどの重奏が！
思わず肩があがってしまう。
「蒼井くーん！がんばってーっ！！！」
「ステキーッ！」
小窓だから、黄色い歓声の主は見えないけど……
やっぱモテるんだなぁ。
当の蒼井君は、黄色い歓声に答える……ことはなく、関節を柔らかくする直前運動をやっている。
っていうか、小城って人……身長推定１９０センチの2年の中でも有名な大男。名字に“小”の字が入ってるのが似つかわしいほど。
気づけば、私が少し見上げるほどの身長になった蒼井君よりも、はるかに高い。
当然、バスケは身長勝負。高ければ高いほど有利……どうなるんだろう。
試合開始の合図と同時に、ジャンプボール。
身長的にも、やっぱ小城が取るかな……と思いきや……
「……えっ！？」
一瞬のことで、目が追いつかなかったけど……今、ボールは、蒼井君の手によってドリブルされている。
ってことは……ジャンプボールで蒼井君が取ったのか……黄色い歓声が、私の推測を事実だと言っているかのようだ。
その後も、ボールは蒼井君の手、小城の手を行き来し……
やがて、試合終了の合図がかかった。
「小城１０点、蒼井２５点！」
結果が報告され、女子の歓声。次のペアを指示するバスケ部顧問の声。

「はー……凄かったぁ……」
いつのまにか、小窓の柵を掴んでいた。
……久しぶりだな。バスケの試合を、こんなにまじまじと見たの……んで、初めてだな。バスケの試合が終わった後でも……まだ、こんなに気持ちがフワフワしているのって。
「蒼井の試合、どうだった？」
「凄かったよ！２年の先輩でしかも１９０センチの大男の小城相手に２：５の比で勝っちゃうなんて！」
……って言いながら振り返ると……
「ははっ！２：５って！」
スポーツタオルで汗を拭う蒼井君がいた。
「あーあっつい！冬なのに汗って凄くない？」
「う、うん……」
蒼井君は地べたに座る。
「あ、戻らなくて大丈夫なの？」
「俺はこれで今日の練習終わりなんだとさ。まだみんなと同じメニューやっていいっていう許可おりなくってさ。まぁ、同級生にはさんざん羨ましがられてるんだけど」
……と言う表情は、なんか物足りなさそうで……
「……だったらさ、私と練習しない？」
「え？」
「ほら、蒼井君いっつも朝練してるじゃん。それに私も付き合うっていう」
「ありがと。でもいーや」
予想外の反応が返って来て、私は「え？」と聞いた。
「だって杉浦先輩が相手だったら……絶対手加減しちゃうし」
「えーそれどういう意味ー？」
「だって本気でやって、好きな人ケガさせたら嫌だし？」
……また……私がドキッてする言葉を、さらりと言う。
「しかも、強制じゃない限り朝練やめるし」

「え？なんで？」
汗が引いたらしく、蒼井君は立ち上がった。
「登校！これからは一緒にしよ」
そう言い、「いいよね？」って付け足したから、私は大きく頷いた。
「そんじゃ、俺、着替えて荷物取ってくるから、そこで待ってて」
「あ、うん」
走って部室に向かう後姿を見送った。
……本当に、私、今……幸せなんだなぁ。
小窓からもう一度、館内を覗くと……３ｏｎ３の練習に切り替えていた。

――――……

まじない部は休み、女バスはコートを男バスに占領されて休み。
久しぶりに私と歩海と美来で下校した。
「でねー！大翔様、マジカッコよかったの！２年の小城って人と１５点差で勝っちゃって！」
ミーハーな美来は、男バスの試合……蒼井と小城って人の“わんおんわん”っていう試合の感想を熱く語っている。
「確かに、蒼井君は凄いよ。ジャンプ力がありえないもん。しかも足超速いし……小城先輩、どちらかっていうとディフェンス派だから、完璧に流れは蒼井君が持っていったって感じ」
歩海も、熱く……とまではいかずとも、その試合の感想をやや興奮気味で語っている。
「もー……メグも見ればよかったのにぃ」
「……だって、バスケとかよく分かんないし」
美来の言葉に、私は口実を返す。
今は……蒼井の姿を見るのが少し辛い。
告ってもないけど、フラれた気分だから……
蒼井は、杉浦先輩だけしか見ていない。それが分かった今、フラれ

た気分。
杉浦先輩は、いい人。誰にでも平等で、要領よくて、優しくて……
蒼井が好きになるのも、納得できる。
もちろん、杉浦先輩を憎たらしいとは思ってない。
なら、この切なさや悔しさは……何にぶつければいいんだろう。
……拓海先輩の時でもそうだ。
夏姫先輩っていう彼女がいるってことも知らずに好きになって……
その事実が分かった後、告白さえせずにさっさとその恋を捨てて……
そして、この恋も。
相手に大切な人がいる、って分かると、自分が立ち入る隙がないって直感的に思ってしまう。
「なんで私の恋は、うまくいかないんだろ……」
……ううん、違う。

一歩踏み出す勇気を持てない、“私”がいけないんだ。

「サーティーツーでも寄ろーよメグ……って、え!?」
「ちょっ、メグ、どうしたの?」
2人が慌てて、私の顔を覗き込む。
私の目からは……大粒の涙が、零れていた。
「あ、ごめ……なんでもないから、気にしないで……じゃっ!」
「メグ!?」
袖で涙を拭いながら、帰路を走る。

今度の恋は……一歩踏み出す勇気を、大切にしよう。

第６８話　一歩踏み出す勇気（後書き）

視点コロコロ変わってすみません……
惠夢ちゃんの心境を書いてると、まるで自分のことのように思います。
告白もしないで、勝手に“無理だ”と判断して、その恋から降りてしまう……
一歩踏み出したら、何か変わったかもしれないな（しんみり）
惠夢ちゃんには幸せになってほしいですね。
さて、次回は（ようやく）進級編です。
沙彩が３年生、大翔が２年生になります。
この連載がスタートして約１年……妙にリアルな進級に（＾＾；）
これからは、“学年の差”にスポットライトをあててみようかな、と思います。
あ、もちろんラブの部分も（笑）

第６９話　三者面談（前書き）

少々内容が薄い回になりました（汗）

第６９話　三者面談

２月は逃げる。３月は去る……とんとん拍子で、２年生の３学期が終わった。
あ、恋の一大イベント、バレンタインはというと……２月１５日、つまり月曜日に、
「さーやは昨日チョコあげた？大翔君にぃ！私はもちろんたっくんにあげたよ」
「ば、ばれんたいん……？」
ケータイを開け、日付を確認して……気づきました。
「わ、忘れてた……」
「えーっ！ありえなーいっ！今日はさーやの分のチョコも用意したのにぃ～！」
バレンタインを忘れてた、ということは、友チョコの用意も忘れてた……ということで。
その日の放課後、蒼井君、夏姫、唯、桃花、（なぜか）たっくん……５人にサーティーツーで奢ったアイスをチョコの代わりにした。
そして３月。武田先輩たち３年生が卒業していった。
武田先輩がどこの大学に行ったのか……はたまた就職したのか。それは一切知らない。

そして、春休みの最終日……クラス分け表を見て、新しい教室へ。
……まぁ、文系がそのまま繰り上がるわけだから、メンツはほとんど変わらない。
新しい学担の短い自己紹介なんかを聞いて、すぐに三者面談。
３年生、という言葉に三者面談、という言葉はつきものだ。

そして今……なぜか横には……
「初めまして。杉浦沙彩の父です」

今朝到着したらしい、お父さんの姿。
営業スマイルでじっと坂野先生（シンタンニン）の顔を見る。
「あ、はい、初めまして……新担任の坂野と申します……」
うっわぁ……お父さんの笑顔の怖さに坂野先生もひいてるよ……（正しくは、みとれてる）
「え、えっと……まず、進路……杉浦さんは、えっと……瀬戸内小島大学が、き、希望でしたよね？」
「瀬名大島大学ですが……」
瀬戸内小島大学ってどこじゃい。

それから、約１０分の三者面談を終え、帰路につく。
「沙彩の将来の夢って、検察官だったんだな」
「うん。って、言ってなかったっけ？」
「うーん……彩華から聞いたよーな……でもすぐ忘れちゃったかもな」
……なんという父親だ。
こっそりと溜息をついた。
「あ、さーやちゃーんっ！！！」
「キョン」
向かい側から、キョン……遠藤崎右京が駆け寄ってくる。
「久しぶりっ！」
「うん、久しぶり。部活終わったの？」
「んーん。休憩中なんだ！飲み物買いに行こうとしたとこ！」
キョンの右手には、おばあちゃんが持ってそうながま口の小銭専用財布らしきものが握られていた。
「沙彩、こちらのお嬢さんは？」
「あ、２年の遠藤崎右京。中学の時、バスケ部の後輩だったんだ」
本名がコンプレックスらしいキョンは、少々ふて腐れた顔で「この人、沙彩ちゃんの彼氏ぃ？」って聞いてきた。
「いや、彼氏なんてものじゃあ……」

「沙彩の父だよ。よろしくね、右京ちゃん」
１００％の営業スマイルをするお父さん。
キョンは１０秒ほど固まった後……
「えええええっっっ！？沙彩ちゃんのお父さん！？若っ！凄っっ！！ありえないっっっ！！！」
って言って、ホギャーとかフギョーとかヘケーっていう奇声をあげる。
お、驚きすぎだ……
「って、そういや沙彩ちゃんの彼氏って蒼井君だったよねぇ！」
「え、なんで知ってんの？」
「部活一緒だし、その程度の情報は回ってくるよん！しかも結構喋るし！」
そんじゃ、飲み物買って来る！って言って、キョンはまた走り出した。
そっか……結構喋るんだ……
「沙彩、お前心配してんのか？」
「え？」
「さっきの右京ちゃんに心変わりするのかって。俺は大丈夫だと思うぞ」
「……別に、そんなこと心配してないもん」
嘘をついて、また足を進める。
お父さんは「やれやれ」と言ってついて来た。

校舎から出て、校門に。
「まぁ、久しぶりに母高に入れて懐かしかったよ。しかも何気、あの教室俺が３年の時に使ってたしな」
……それはそれは……とことん懐かしむがいい。
でもさぁ……
「なんで校門に車停めてあんの！？」
「ああ……駐車場に停めるのめんどくさかったから」

「めんどくさいっつっても、こんな大迷惑な場所に停めないでよ！よく駐車違反の紙はられなかったよね！」
そう……駐車違反している車には、容赦なく「駐車違反」とかかれた紙をフロントガラスに貼られる。
デパートの駐車場で、そんな車を何台か見たことがある。
「ちゃんと許可取ったから大丈夫だよ。通りかかった女の人に。校長って言ってたけど」
校長……（涙）
盛大な溜息をつきながら、車に乗り込んだ。

「……っていうかさ、なんで三者面談に来たの？」
「彩華仕事だし。ばーさんに行かせるわけにもいかんだろ？」
だからって……海上自衛隊がそんなんでいーんかい。
というツッコミはさておき、「そりゃそうか」と返した。
「ま、そんなことより……アイツ、蒼井とはどうなんだ？」
「どう、って？」
「なんか違うことがあったりしたのか？」
今までを思い返してみる。
……関係が恋人、となった以外は、ほとんど変わりない。
一緒に登下校、たまに夏姫やたっくん達を交えて遊ぶ……違うことといえば……
「……学年末テストの勉強を見てもらったことぐらいかなぁ……数学と化学」
「……は？お前、あいつより1コ上のはずだよな？多分」
「そうだけど……蒼井君は理系においてはほんとスゴいの。教科書ちょっと見ただけですぐ分かって、問題解いちゃうんだから」
そう、あれは2月下旬……

3月頭にある学年末テストの勉強を、“勉強会”と称して、2月15日にアイスを奢ってあげた5人（冒頭参照）に加え、カイジ君、

ユウヤ君、シゲオ君が図書室に集まって勉強した。
2年同士か、1年同士。ほとんど1年から2年同士で質問をし合いながら、わいわい進めていた。
質問なんてできる性分じゃない私は、数学の問題をノートに写し、教科書ほったらかしでその問題に梃子(テコ)摺っていた……
「先輩、この問題、この定理使ったらすぐ解けますよ」
と言って、蒼井君が教科書に載ってる定理を指差す。
「あっ、そっか、なるほど……だからこうで……よっしゃ分かった！ありがと蒼井君！」
その瞬間は問題解くのに必死で……事のおかしさに気づかなかった。
私がやっていたのは数？。蒼井君がやっていたのは数？。とてもじゃないけど、？は分からないはずだった……
数10分後にそのことに気づき、化学の問題も聞いてみたところ…
…先生より何倍も分かりやすく教えてくれた。
そしていつしか、夏姫たち2年メンバーも、蒼井君の講義をまじまじと聞いていた……

「……っていう武勇伝もあんの」
「へぇ。まぁ、お前より頭いいのは確かだな……いてっ」
後部座席から、お父さんの頭を叩く。
「いーの。文系は文系さえできてれば」
「ふーん。それがお前の信条ならいーけど」
……つくづく発言がムカつくなぁ。

そんなこんなで家に着き、3年生生活1日目（実際は1日目イブ）が終わった。

第６９話　三者面談（後書き）

少々手抜き回になったかも（汗）
沙彩父が三者面談に来たらこんな風かな～って思いながら書いたこの回。さりげに大翔の天才っぷりもアピールしつつ（笑）
さて、次回は遠足編イブ！
海宮高校は、全校遠足というのが１学期の行事……っていう設定（笑）
それに加えて、ちょっとおもしろいエピソードも加えようかな、と企んでます。

第７０話　行き先

ちなみに、ほとんどメンツは変わらない、って言ったけど……

「唯と離れちゃったねぇ」

「そうだねぇ」

昼食タイムに夏姫と弁当を食べながら、ふと夏姫が呟き私も返した。

私たちが所属する３－Ａは文系国公私立大学進学クラス。３－Ｂは文系就職・専門学校進学クラス。

唯は３－Ｂに入った。

そして、私と夏姫の他に……

「でもこのクラス、何気にイケメン多くない!?加えて将来有望!

ああ最高……っ!!!」

久々の登場、イケメン好きの河野さん。

仲いい子はＢ組に入ったらしく、よく私たちとつるむようになった。

「河野さんはどこ大志望なの?」

「近江大学（私立）だよ!マネージャーの試験に受かって、イケメン俳優かモデルのマネージャーになって……ウフフ」

さ、最後のウフフはなんでしょう……?

「そういえば、前から気になってたんだけどさ、大翔君って何になりたいって言ってた?」

「え?なんで?」

「あんなに頭いい子が何になりたいか気になっちゃってさ～」

「うーん……なったら教える、って」

そう言うと、夏姫は「え～!意味ないじゃん!」と駄々をこねた。

「じゃあ、蒼井様は何系に進んだの?」

「あ、理系に進んだって言ってた。だからＡ組かＢ組かなぁ」

理系かぁ～……と、河野さんは言った。

１年から２年への進級の際は文理選択をするだけで、進学か否かは決めない。

「それよりさ、今日の全校ＨＲ（体育館で行う）って遠足の班決めだよね？」
「そうそう！再来週にあるやつ」
海宮高校の遠足とは、まず同学年内の男女で１組のペアをつくる。（クラス解体）
次に他学年のペアと合体し、男子３人女子３人の１班が完成し、その班で遠足を行う。
でも……ただの遠足じゃない。
海宮市市内は、広い故にたくさんの見所スポットがある。（実に１００箇所以上）
１班が、そのスポットの名前が書いてある１００個のクジから３つを引いて、書かれてあるスポットをまわることになる。
その３つの間を、足だけでまわれるか、電車やバス（運賃自腹）を使わないとまわれないかは……運次第。
でも、そんなことより……
「私、幼なじみとペア組んだんだけど……夏姫ちゃんやさーやは誰と組むの？」
ペアをどうするかが、最大の問題だったりする。
「夏姫はもちろんたっくんとでしょ？」
「あ～……そのことなんだけどさ……ちょっとさーやにお願いがあんの」
「へ？何？」
「たっくんとさーや、組んで欲しいんだぁ……」
……はい？
「え、ケンカでもした？」
「まぁ、そういうとこかな……さーやから言ってね。お願いっ！」
「うん、まぁいーけど……」
どうしたのかなぁ……あんなに仲よかったのに……
「じゃあ、夏姫は誰と組むの？」
まぁ大体予想はつくけど……

「あ、唯だよ！」
……うん。予想通り。

昼休みにたっくんとペアのことを言い、全校ＨＲの時間に一緒に体育館へ。
「何かあったか知らないけどさ、夏姫と早く仲直りしなよ？」
「あ、ああ。うん」
心なしか、たっくんの表情が暗く見えた。

「では、これから1班を作ってその場に腰をおろしなさい」
遠足の担当の先生からの合図で、約５４０人みんな一斉に立ち上がる。
そういえば……蒼井君は、誰と組んだんだろう。
一緒に登校したときも、特に遠足の話はしなかったからなぁ……
「あ、沙彩ちゃ――――んっっっ！！！一緒に組もぉ――――っっっ！！！」
女子の集団の中から、聞きなれた声がして……
女子の集団をかきわけて、見慣れた姿がやってきて……
「キョン！蒼井君！」
キョンに腕を掴まれて、蒼井君が見えた。

一応デッキ近くに移動した。
「はー……死ぬかと思った……酸欠で……」
蒼井君は、人口密度が高すぎて息苦しかった模様。
「ほんとビックリしたよ！先生の合図があった途端に女の子たちが集まってくるんだもん！このモテ男め！」
キョンは蒼井君の背中をバシッとたたく。
うわー、痛そー……
「とりあえず、2年と3年は決まったな。残りは1年生……」
残念ながら、私には1年生で仲良い子はいない。

後輩に対しても友好的なキョン情報からだと、元Ａ中女バス部のメンバーも何人が入学してるらしいけど……前にも言った通り、中学時代は後輩にさんざん恐れられていた。
「あ、小原先輩！」
どこからかたっくんを呼ぶ声がし、見てみると……
うわっ、デカッ……
「久しぶりです、小原先輩！１年生いなかったら組んでもいいですか？」
「ああ、うん。いいよ」
身長推定１９０ｃｍの小城並みの大男が姿を現した。
しかも、その横には……
「ギャッ！すすす、杉浦先輩っ……」
当時Ａ中１年だった、築島陽香（ツキシマハルカ）がいた。

その場に座り、自己紹介タイム。
「俺、３－Ｄの小原拓海。このデカい１年とは中学の時の後輩。一応班長なんで、よろしく」
班長は、原則として３年男子らしい。
「３－Ａの杉浦沙彩です。よろしく」
「２－Ｂの蒼井大翔です。よろしく。……あと」
「わっ」
……と言うと、蒼井君はいきなり私の肩に腕をかけた。
「この美人な先輩は彼女なんで手出さないよーに」
「え、マジでー！？」
「やるなぁ蒼井」
「アハハッ！沙彩ちゃん顔赤ーいっ！」
みんながひとしきり反応した後、肩から腕を離す。
あ～……ビックリした……
ほてった頬を冷ましてる間に、自己紹介は続く。
「私、遠藤崎キョン！２－Ｄだよ！本名は最大のコンプレックスだ

からキョンって呼んでね！ヨロシクゥッ！」
「俺、１－Ｅの水野章介（ミズノショウスケ）。このチビは俺のイトコだったりします。よろしくお願いします」
「わ、私、１－Ａの築島陽香です……す、杉浦先輩は、中学校の時の先輩です……い、色々ご迷惑をおかけすると思いますが、よよ、よろしくです……」
……うーん。私、こんなにも恐れられていたんだなぁ……
「さてと。クジ引いてくるから、待っててな」
たっくんはよいしょと立ち上がり、ステージの方へ向かった。
「杉浦先輩、小原先輩ってたしか、東郷先輩の彼氏じゃなかったっけ？」
「あ、うん。そーだよ。でもケンカしてるらしくってさ……ペア組むのはちょっと気が引けるみたいだよ、お互い」
蒼井君は「ふーん、そっか」と相槌を打った。
ちなみに、桃花とユースケ（ギャルカップル）の仲も只今、相当悪いらしい。
毎日のように、桃花とユースケから愚痴のメールが来る……
「あ、そういえば陽香、部活はどーするの？」
「あっ！バ、ババ、バスケを続けようと思いますっ！」
そう言うと、水野君の後に隠れる。
私は盛大な溜息をついた。
「陽香さぁ、私が怖いのは分かるけど……逆だったらどう思う？後輩に怯えられるなんて嫌じゃん。同じ班だし、仲良くやろーよ。ね？怯えたまんまじゃつまんないじゃん？しかも私、中学の時より何気に（気さくさ度が）進化してるし」
「……ハ、ハイ」
ようやく水野君から離れ、小さく正座をした。

しばらくして、たっくんが戻ってきた。
「よし、じゃー見るか！」

6人の輪の中央に置かれた、3つのクジ。
「俺がこれ裏返すから、さーやはそれ、ショースケがそれを裏っ返してくれ」
「イエッサー」
各々が裏返したクジには……
“海宮テーマパーク”“海宮神社”“海宮海”
「さて、どうするよ?さーやさん」
「私に聞かないでよ。海宮人のたっくんが決めてよ」
「・・・」
……黙り込んでしまった。
「杉下先輩、この3つの間……10キロ近く離れてるんですよ、それぞれ」
「……は!?じゅっきろ!?」
“杉下先輩”をツッコむことを忘れ、派手に叫ぶ。
「あ、この海宮神社って……確か超超超――――っっっ!!!山奥だよぉ!」↑キョン
「この神社がある山って……確か、恐怖山って名前じゃなかったっけ」↑蒼井
「海宮テーマパークって、ほぼE市(となりまち)だったような……前、友達と行ったことあるから」↑陽香
「まぁ結論は……小原先輩、クジ運なさすぎってことですかね」↑水野
……高校生活、最後の遠足。
なんだか、波乱の予感がしてやまない……

第71話　浮気？

翌日の6限目。15班（沙彩達の班番号）は2年C組に集まった。
「まず、電車使ってテーマパーク行こ。んで、バスで恐怖山の麓（ふもと）まで行って、なんとかゲームクリアして、麓の近く（って言っても4キロ強離れてる）の駅までバスで移動して電車に乗って、海宮市駅に行って、そっから徒歩で海宮海！……で、いい？」
「異議ナーシ」↑拓海
「キョンもー」↑キョン
「私も！」↑陽香
「俺も」↑蒼井
「あ、バス賃大丈夫なんでしょうか？」
……という水野君の問いに、キョンは……
「まっかせてっ！こう見えて、あたしん家（ち）結構金持ちなんだぁ！バス賃ぐらい奢ってあげるよ！」
という、太っ腹発言をした。
まぁ、名字（遠藤崎）が金持ち度を現してるよね……
それはさて置き……この班には、ひとつ問題が。
「テーマパークと海宮海はどうってことなさそうだけど……問題は恐怖山だね。何も出なかったらいーけど……」
蒼井君の発言、まさにそれだ。
恐怖山……昨日ネットで調べてみると、不可解な事件が多発してるらしい。
遭難したり、遭難したり、遭難したり……
……不可解か？
「まぁ、要は気をつけてたら大丈夫……ってことなんじゃない？」
「そうそうっ！それにこの大男（ミズノ）がいるからさっ！万が一幽霊が出てもビビって逃げちゃうよ」
「あ、俺なんか信頼されてる……」

キョンの発言に、水野君は少し不安そうに言った。

大まかな日程をたてたところで、解散となった。

帰りのメンバーは、私と蒼井君、そしてたっくん。丁度、男バスとサッカー部が休みだったから、このメンツになった。

水野君は彼女と下校するらしく、陽香とキョンは女バスの練習。

まぁ、水野君と陽香とキョンがもし部活休みだったとしても、帰りに誘わないつもりだった。

なぜなら……

「さぁ、白状してもらおーじゃないの。夏姫とのケンカの理由を」

「……まさか、それを聞くためにこのメンツで？」

サーティーツーにて、事情徴収するつもりだったからだ。

私の隣に蒼井君がいて、目の前にはたっくん一人。

「まぁまぁ小原先輩。カツ丼（アイス）でもどーぞ。奢りですんで」

と言ってアイスを差し出す蒼井君。それを受け取るたっくん。

……あ～、ここでライトが入ってくれたら、事情徴収のセット完璧なのになぁ……

あ、でも、本物の検事の事情徴収では、カツ丼は出ないらしい。（出るのはドラマだけ）

……ま、それはさて置き。

「夏姫に聞いてもなかなか白状してくんないのよ。逸らしてばっかで……」

「・・・」

……おいおい、お前も逸らすんかいたっくん……

「……まさかとは思うんですけど、東郷先輩……妊娠したとか？」

「はっ！？んなわけねーじゃんっ！一応常識は持ってるぜ俺！！！」

うわぁ、キャラ崩壊してるしぃ……

蒼井君は半分引きながら、冗談ですよ、と言った。

「……夏姫のやつ、勘違いしてるんだよ。俺が浮気したって。俺が他の女と歩いてたって」
「浮気ぃ？」
勘違い……ってことは、浮気している、というのは虚実らしい。
「心当たりとかは？」
「ねーよ……春休み中、話した女って姉貴とオカンぐらいだし」
たっくんのお母さんは、５０手前の女性。一緒に歩いてても、母親と息子以外に見えない。
姉貴……小原優羽先輩は、夏姫と大の仲良し。勘違いすることはまずない。
「じゃあ、ここ最近大きく変わったことってありますか？」
という蒼井君の問いに、
「大きく変わったこと……っていったら、イトコが俺の家に住み始めたってことぐらいかな。内藤拓哉（ナイトウタクヤ）っていうんだけど」
たっくんはこう答えた。
たっくんのイトコ……内藤拓哉が一緒に住み始めた事実っていうのは、あんま関係ないだろう。
「……んま、明日夏姫によく聞いて見るよ」
「おう、頼むわ」
そう言うと、たっくんはアイスを食べ始めた。

「もしかして、東郷先輩が見たのって小原先輩じゃないかも」
帰りの電車内で、いきなり蒼井君がそう呟いた。
「ほら、世の中には３人ぐらい自分と似てる人がいるって言うじゃん？ドッペルゲンガーってやつ」
「ドッペルゲンガー？聞いたことあるけど……」
自分のドッペルゲンガーを見ると、数日後に死ぬ……とか。
「でも海宮市にたっくんとそっくりな人って、あんまいないよ？」
たっくんは……こういっちゃなんだけど、結構特徴的な顔つき。
つまり、そこら辺にいそうにない、ってことだ。

「海宮市広いし、分かんないじゃん？」
「んじゃーさ、蒼井君は見たことあんの？ドッペルゲンガー」
「んー……ないかも。ドッペルゲンガーって医学用語で言うと自己像幻視っていうんだけどさ……俺はまだ幻視する域に達してないっていうか」
「アハハッ！域って！」
ドッペルゲンガーを見るのに域がある、なんて……思わず笑ってしまった。
蒼井君って本当、ズレてるのか普通なのかよく分かんない。
だから……もっと知りたくなる、って思ってしまうんだ。

翌日の学校。
「あ、おはよー夏姫」
「……はよ」
いつもより遅い電車で夏姫が登校してきた。
しかも、目の下にクマつくって、声がどんよりしてて……こりゃ重症だ！
「夏姫さんよぉ……たっくんが浮気してるって思ってるの？」
「え！？なんで知ってんの？」
私が夏姫の席に言ってそう言うと、夏姫はうつむいていた顔を上げて言った。
「たっくん本人から聞いたよ。夏姫が勘違いしてるせいで関係がギクシャクしてるんだって。浮気っていうのは、夏姫の勘違いなんだよ！たっくんね、春休み中に話した女の人はオカンと姉貴ぐらいだって言ってたし」
「だ、だって、コレ……」
そう言って、夏姫が私の目の前に出したのは……たっくんらしき姿と、仲よさそうに歩いている……可愛い女の子の写メだった。
……途端に、私の中にあった、夏姫の誤解を解こうという熱心さは消え……逆に、たっくんを疑う心が生まれてきた。

そんな私の心の中に……

“「もしかして、東郷先輩が見たのって小原先輩じゃないかも」”

昨日の蒼井君の声が不意に浮かんできた。

「この人、ほんとにたっくん？」

「ほんとだよっ！この私が見間違うわけないよっ！頬についたかすり傷に耳の近くにある黒子（ホクロ）、ちょっと薄めすぎた眉毛の端っこまでたっくんだったもんっ！」

す、すっごい観察力……

「論より証拠……この写メがあっても、私が間違ってるって言える？」

「・・・」

夏姫の呟くような声を掻き消すように、ＳＨＲ開始のチャイムが鳴った。

とりあえず、例の写メを私のケータイに転送して、画像解析（拡大して画素数を増やして鮮明にする）をやってみた。

夏姫が言ってた、たっくんの特徴……頬についたかすり傷、耳の近くにある黒子、ちょっと薄めすぎた眉毛の端っこ……

「全部あってる……」

時間は、気がつけば昼休みになっていた。

「……昼休み中に、ちょっと尾行してみよっか」

私はそう決断し、席を立った。

えっと、たっくんのクラスは理系の国公私立大進学クラス……

あ、いた。たっくんだ。

もう一度、画像解析したものと本人とを見比べる。

……ドッペルゲンガーでもなんでもなく、同一人物だ。

たっくんは、友達と親しげに話している。

時たま女の子が入ってくる時もあったけど、ほぼ相手にしていない。

……ていうか、この写メのような可愛い子はいなかった。

「……だとしたら、他校の子かな……」
結局そんな結論に達し、尾行を切り上げた。
ていうかコレ、尾行なのか？まぁいっか。

教室に戻る途中……体育館内に、妙な人だかりができているのが目についた。
何があるんだろう……と思って、体育館へ。
「どうしたの？」
入口付近で見ていた同じ部活のメンバーに声をかけた。
「あ、さーや！今ね、ソロの声楽部の新入りさんが練習してんの！すっごいよ、マジで！」
この学校の声楽部は、２つある。
ひとつは、私が所属している合唱型。もうひとつは、ピアノ伴奏と歌い手１人のペアで結成されているソロ型。
噂では、ソロ型の方は１人、新入部員が入ったらしい。
「今丁度終わったとこなんだけど、また練習始めるんだってさ！見てきたら？」
「うーん……いいや。人ごみ苦手だし。んじゃーね」
そう言って、その場を去ろうとしたとき……体育館内から聞こえてきた美声によって、その足が止まった。
「うっわ……めっちゃ高い声……」
「そう！しかも、歌ってる人が超可愛いの！絶対見てきた方がいいって！」
「そーだね。行ってくる」
人ごみをかきわけて、体育館内に入った。

確かあの曲は、世界でも数人しか歌えない、という超難曲……
やっとステージの前に来て、大きくなった歌声の主の方を見た。
コンクールが近いためか、綺麗な本番用の衣装に身を包んだ女の子。
顔を見て、気がついた。

「もしかして……」
ケータイを出し、例の写メを出した。
……同一人物。
コロラトゥーラを駆使する美少女と、写メに映っているたっくんと親しげに歩いている美少女。明らかに同一人物だった。
昼休みのチャイムと同時に、その歌曲も終わった。
鳴り止まぬ拍手の中、舞台袖に入る伴奏者と美少女……私もステージ袖に向かった。

「ちょっといいかな？」
「は、はいっ！？なんでしょう？」
水を飲んでいたその美少女に声をかけると、驚いたように声をあげた。
……まぁ、無理はない。見知らぬ3年の私に声をかけられたんだから。もし逆の立場であっても驚くだろう。
「これ、君だよね？」
例の写メを見せて、問い質す。
それを見て、相手も「あ、はい。そうですけど」と頷いた。
「たっくん……いや、小原拓海にはちゃんと東郷夏姫っていう彼女いるから。小原拓海が欲しいなら、ちゃんと夏姫にケリつけて……」
「いや、ちょっと待ってください！」
……え？
「こんな格好だから分かりづらいと思いますが、俺、男ですよ？」
……はい？
驚きの事実を口にすると、その子はいきなり自分の髪を掴んで、スポッと外す。
クルクルの茶髪の下に、ツンツンの黒髪が現れた。
「ちょっと着替えてくるんで、待っててください」
そう言うと、どこかに消え……数分後に、男子制服に身を包んで再び現れた。

そして、大きく咳払いすると……
「俺、内藤拓哉っていいます。その写真の拓海君とは、イトコです」
「あ、ああ、そうなんだ……」
……これこそ、予想外の結末……と言うんだろうか。
いろんなことに驚いて、立ち竦んでしまった。

内藤拓哉君。たっくんのイトコで、自他共に認める女装が好きで趣味の女装マニア。咳払いしただけで声が劇的に変わる超人。
……まぁ、要は“女装の超人”だそうで……
「あ、そういや、女装した拓哉と街に出たっけ……拓哉が「新しいアクセ見たい」ってせがんできたから」
帰りのサーティーツー。私、蒼井君、夏姫、たっくん、拓哉君の５人で話をふくらませた。
「まぁ、無事疑惑も晴れたし、よかったじゃないですか、小原先輩」
「そーだね」
「私は最初っからたっくんのこと信じてたよーっ！」
「嘘つけ夏姫！朝の教室でのオーラはなんだったんだよ……」
目の前では、たっくんと夏姫がベッタリくっついてて……若干拓哉君は「大好きなイトコの兄ちゃんがとられた」って感じでブスッとしながらアイスを食べている。
やっぱり、たっくんと夏姫はラブラブなのがいちばんしっくりくるなぁ。
そう思いながら、私もアイスをつついた。

来週は、いよいよ遠足です。

第７１話　浮気？（後書き）

更新がかなり滞った割にはパッとしない話ですみません（；；）
次回はいよいよ遠足編！
どんな出来事が待っているでしょうか……

第７２話　遠足１～トラウマの原因～

今日は、いよいよ遠足。
各班ごとにグラウンドに集合した。
「おーっし！点呼取るぞぉ！！！名前呼ばれたら返事しろよな！」
夏姫とのいざこざが解決したせいか……いつもより数倍テンションの高いたっくんの声が辺りに響く。
周りの班も若干ビクついてる……
「たっくん、ちょっと声大きいんじゃ……」
「杉浦沙彩！」
「はーい……って、聞いてないね……」
まぁ、いい事……だよね。
「蒼井大翔！遠藤崎右京！水野章介！築島陽香！」
それぞれが返事をしていく。
が……
「キョンいなくない？蒼井君見なかった？」
「そういえば……ＨＲの時いなかったような。遅刻じゃない？」
キョンが遅刻？
中学の時、絶対部活の時間に遅刻なんてしなかったキョンが……？
疑問に思っていた時……
「あっ！校門に……っ！」
陽香が、校門の方を指差して大きく目を見開いた。
そこには……維持費が相当高いクラシックカーがとまっていた……
黒い服を着た執事さんらしき人が、車のドアを開ける。
誰もが、遠足だというのにピンクのフリフリのドレスを着た超お嬢様が車の中から出てくるだろうと予想しただろう。（ちなみに遠足は、場所が各班違うのでＴＰＯをわきまえた服装にするように、という先生の指示のもとで私服）
でも、中から出てきたのは……

「沙彩ちゃん！みんな！遅れてごめんねーっ！」
……「今回の遠足、移動費を全部払ってあげる！」と公言したキョンでした。

とりあえず、まずは電車で海宮テーマパークへ。
「そういえば、結構前から気になってたんだけど……」
蒼井君は、私を見てそう言った。
「ん？何？」
「なんで最初、杉浦先輩、その1年生の女子……誰だっけ……？」
「陽香ね。築島陽香」
「そう、それだ。築島さんにあんなに怖がられてたの？」
どうやら、この人は人の名前を覚えるのが苦手らしい。
「んー……私が中学の時、かなーり厳しかったらしいのよ。傍から見たら」
「そうそう！沙彩ちゃん、他校の子からは“東野中の女豹”って呼ばれてたんだよ！元々、女豹って男をモノにする、いわゆる肉食系女子って意味だけど、沙彩ちゃんの場合は足は速いし怒ったら怖いし睨みは凄いし、まさに女の豹！それに怯えて後輩の女子からは恐れられてて……」
「キョン……そこまでにしよっか」
笑顔を作って話に入ってきたキョンを見ると……キョンは「ピャッ」と言って縮こまった。
「東野中学のなんとかっていう代名詞は初めて聞いたけど……顧問よりビシバシ後輩をしばいてやったのは確かかな」
「でも、ちゃんと後輩に成長してほしかったから……だよね？」
「もちろん。機嫌が悪くて怒ったことなんてなかったよ」
まぁ、あの頃はいつも機嫌が悪かったからよく分からない。
その時は、私、両親が傍にいないことが影響してか……結構荒んでたから。周りに友達なんていなかったし。
でも、高校に入って、夏姫に声かけられて、そこから輪が広がって

いって……
今では……あんなにも、余計なものだと思っていた恋愛をしている。
いてもいなくても同じような存在だと思っていた彼氏がいる。
……人って、どうなるか分かんないもんだね。
「そういえば、俺も東野中出身だけど……杉浦先輩って、あの東野中の女豹だったんですねー」
「え？知ってんの？水野君」
「はい。聞いたことはあるけど実物は見たことなくって……鬼のような形相で筋肉とか超ヤバい奴だと思ってたんですけど、全然違いますねー。こんな美人さんだとは思わなかった」
ハハハッと笑う水野君。
……どんなに名を馳せてたんだろう、私……
それと……そんなに名を馳せてたとしたら……
「やっぱり、まだ記憶とか戻っちゃったりしないの？」
キョンと水野君が話している間、私は小声で聞いた。
「いや……いろいろ断片的には結構思い出してる。例えば、朝起きたら「おじいさんって亡くなってるんだっけ」とか思い出したりして」
「め、珍しいね……」
自分の関連する人やもののことを思い出す、っていう経験のない私はそう言うしかなかった。
「でもなぁ……肝心なこと思い出せないんだ」
「肝心？」
「俺の本当の親父のこと。修二さんじゃない人のこと……かな。母さんは、その実父の名前が翔喜（ショウキ）って名前で俺に顔がそっくりってことと、俺がちっさい頃に離婚したってことしか教えてくんなくてさ。離婚の理由も聞いてみたんだけど、何故か言わないんだ」
「ふーん。なんか変だね。もしかしたら、その翔喜さんって人が相当酒癖だったり浮気性だったり……蒼井君とはあんまり関係ないことかもよ？」

私がそう言うと、蒼井君は「そうかも」と頷いた。
「でも、俺父親似らしいから……酒癖だったり浮気性だったりしたらどうする？」
「んー……どーだろね」
いたずらっぽい蒼井君の笑顔に、私も笑って返した。

……この時は、蒼井君のご両親夫婦の離婚の理由は、夫婦間のいざこざ。だから蒼井君には関係ない理由かもしれない。そう思えてならなかった。
だって、大概そうだから……離婚っていうのは、大人の勝手。子供は振り回されるだけ。そういう概念しかなかったから。
だけど、あんな理由があるなんて……それを知るのは、もうちょっと先の話。

E市……榎波市の町の駅のひとつ前。海宮テーマパーク最寄の駅で下りた。
そして、その例のテーマーパークへ。
「うっひゃ～……人少なー……」
クリスマスに行った、名古屋の遊園地とはえらい違いだなぁ……
「まぁしょーがないじゃん？平日だし」
蒼井君は伸びをしながら歩いてる。
うわー……筋肉すごいなぁー……
「ん？どした？」
「え？あ、いや、なんでもない……」
慌てて目をそらした。
「とりあえず、どこにクイズがあるか探そーぜ！！」
相変わらずテンション高めのたっくんの声に続いて、班員が動き出す。
「え？クイズって？」
「は！？さーや知らねーの！？今年から、各スポットで出題される

クイズに答えるんだってさ！」
へ～……そんなのあったんだぁ……
「沙彩ちゃん、聞いてなかったのー？」
「いや、多分その説明の時寝てた……」
「アハハッ！！！」
キョンが私の背中をバシッと叩く。
……痛いなぁ。

どんどん奥に進み、アトラクションがある都度見てみたけど……
「どこにもないなぁ、クイズ……」
ジェットコースター、コーヒーカップ、メリーゴーランド……どこにもない。
「ここが最後かぁ」
ずっと左右キョロキョロしてて、水野君の発言で前を見る。
「げっ……」
「どうしたんですか？杉浦先輩」
陽香の問いに適当に返して、改めて見上げる。
……そこには、観覧車（ヤツ）がいた。
っていうか、この下りって……
「おっ！もしかして、あそこじゃね？観覧車丁度止まってるし、ゴンドラに番号あるし……行ってみよーぜ！」
たっくんが、観覧車乗り場に向かって全力疾走。
やっぱり、この下りは……乗る系だ！！！

「海宮高校の生徒さんですか？この3つのゴンドラに2人ずつお乗り下さい。ゴンドラ内にクイズがあるので、この観覧車が1周する間に2人で検討し、下りた後にこの紙に答えを書いてください」
係員の人が、ご丁寧に説明する。
「わーい！観覧車大好きぃ！陽香乗ろっ！」
「はいっ！」

キョンと陽香は1のゴンドラに。
「んじゃー章介、乗ろーぜ」
「もちろん」
水野君とたっくんは、2のゴンドラに……
ヤ、ヤバい。なんとか乗らない手立てを……
「あ、わ、私はみんなの帰りをジュースでも飲みながら待ってるよ」
「えーっ!?沙彩ちゃん、まさかのサボりぃ!?」
キョンからのブーイング……
「だって、蒼井君頭いーし、私がいなくたってちゃんと……」
「いーや。蒼井は2年だし。3年のさーやがいた方が何かといーだろ?それにお前、蒼井の彼女だろー?」
そりゃそうだけどよ、たっくん……
「えっ、そうなんですか!?全然そういう風には見えないんだけど……」
陽香、今気づいたんかい。
そしてその発言が一番応えた気がするんだけど……
「これからの時間もあるし、乗ろ。杉浦先輩」
「おわっ」
蒼井君に背中を押され、彼も乗り込み……各ゴンドラの扉が封鎖された。
係員の人が押したボタンで、ゴンドラが動き出す……
ヤバい……どんどん地上から離れていく……

「杉浦先輩、顔真っ青だけど……大丈夫?気分悪いとかだったりしたら、強引に押し込んでごめん」
「いや、そんなんじゃないよ!風邪なんてほとんど引いたことないし、移動だってまだ電車だけじゃん!アハ、アハハ……」
必死に笑顔を作って、極力外を見ないようにする。
「だったらいいけど……ま、とりあえずクイズ見てみよ」
不審そうな表情をしたまま、蒼井君はクイズが入っている封筒を開

けた。
クイズの内容は……こうだった。

『ブタンＣ４Ｈ１０が燃焼すると二酸化炭素と水が生じることを化学反応式で表すと？（高校１年生レベル）』

「燃焼するってことは、Ｏ２と反応するってことだよね？えっと、二酸化炭素はＣＯ２、水はＨ２Ｏだから……」
Ｃ４Ｈ１０＋Ｏ２→ＣＯ２＋Ｈ２Ｏ。
でも、こっから原子数をあわせなきゃなんない。
……その方法を知らない。
なんせ、高校の化学なんてやったことないですから。生物しかとってないし。
「……２Ｃ４Ｈ１０＋１３Ｏ２→８ＣＯ２＋１０Ｈ２Ｏ」
「え？」
「炭素原子と水素原子の数をあわせて、酸素原子の数をあわせるとなると、酸素原子の数は分数になるから、全ての係数を酸素原子の分母倍したら、こうなるよ」
よし、終わり！
蒼井君はそう言い、背凭れに寄りかかった。
グラッとゴンドラが揺れる。
「ひゃっ！」
「え？どしたの？」
「ちょっ、ゴンドラ揺れたじゃんっ！今の衝撃でゴンドラがおっこっちゃったりしたら死んじゃうじゃん！」
……と言ったところで、ハッとなった。
完璧、怖がってるのバレるじゃん……！
「んなちょっと動いただけで落ちるってことは……」
案の定、蒼井君はひっかかったような表情をしている。
ヤバい、バレるの時間の問題じゃん……！

「……もしかして、観覧車苦手？」
……バレた。
そして、素直に頷く自分に驚いた。
「んじゃあ乗る前に言えばいいのに」
「い、言えるわけないじゃん。私、３年生だし……」
って言ったそばから、蒼井君はいきなり立ち、私の隣に座った。
そして……手を差し出した。
「１周するまで、手掴んでていいよ」
「……ありがと」
私がそっと蒼井君の掌に手をのせると、強いけど優しく握ってくれた。

「んで、なんで高いとこ苦手なの？」
外は見てないけど、恐らく頂上周辺で蒼井君はそう聞いてきた。
頭の中で……あの日のことが、甦ってくる。
「……中学の時のバスケの大会で……丁度私が２階席から男バスの応援してたら、隣にいた１０歳未満ぐらいの女の子がフェンスに試合を見ようとしてよじ登ってたらしいの」
「フェンスに？危ないじゃん」
「応援に集中してて、私、気づかなくて……下の方から女の子の悲鳴が聞こえて、気がついたら隣にいた女の子がいなくって……その女の子、頭を強打して即死だったんだ」
試合を中断させる笛の音。タンカを運ぶ救急隊員……私は、その場から一歩も動けなかった。
高いところから見下ろす女の子の遺体。それが、カメラのシャッターを押されたように強烈に残っていて……
「目撃者の証言だと……その女の子、フェンスによじ登った後コートを見下ろして……子供って、頭が重いから、頭につられて体がフェンスから離れて落下……」
それ以来、高いところからものを見下ろすことや、高いところにい

ることがダメになった。
カメラのシャッターによっておさめられたあの光景が、目に浮かぶような気がして。
一時的なものなら、目をそらしていれば凌げられるけど。
「……情けないよね。6年経った今でもそれがトラウマになって高いところがダメだなんて」
蒼井君は、ただ黙って聞いていてくれた。
でも、それは蒼井君の最大の優しさで……
強く手を握る力や温かさが、私の涙を乾かしてくれた。

係員によって解かれた扉。地上に着いたらしい。
ゆっくりと、つながれていた手が解かれた。
「あっ！蒼井ーっ！！！この問題、分かるーっ！？太宰治の本名なんだけど！」
「津島修治だろ……」
回答コーナーで、大きく手を振るキョン。
「さーや！お前文系なら太宰治の代表作とか分かるよなっ！？3つあげるらしいんだけど！」
「斜陽、走れメロス、人間失格……」
「え？何何？てかもう、さーや書いて！」
たっくんがそう言う。
ていうか、なんで2つは太宰治関連なのに、私たちのとこだけ化学なんだろう。

なんだかんだで、ひとまず第1スポット……いや、第1ステージをクリアし、次は……
「恐怖山……」
いわくつきのスポット。恐怖山だ。

第７３話　遠足２～不思議な山～

入った者が、次々と遭難する……という“いわくつき”の恐怖山の麓へ来た。
見たところ、普通の山だけど……
本当に神社なんて、あるんだろうか。
そして……
「うへー……酔ったぁ……沙彩ちゃーん……キョン死ぬよぉー……」
何故１０キロぐらいの移動でキョンは酔うのだろうか。
「大丈夫ですか？杉下先輩」
“相棒”の杉下右京じゃないもんっ！遠藤崎キョンだよっ！……
ウヘッ」
水野君の素晴らしき呼び間違いに威勢よくツッコんだせいか、キョンは益々気分が悪くなったらしい。
「遠藤崎、しばらくあそこのベンチに座って深呼吸して、緑でも見て大人しくしておいた方がいいよ。車酔いって大抵、ガソリンのこもった臭いに耐え切れなくなったり、脳が窓から見える景色と遠藤崎が止まってる状態の食い違いに追いつけなくなって拒否反応を出したせいで起こるものだしね」
蒼井君がそう言うと、キョンは「うん、そうする……」と言って、向こうのベンチに座った。
遠藤崎、って呼ぶんだな……何気に、初めて聞いた気がする。
「どしたの？杉浦先輩。なんか顔色悪いけど……先輩も車酔い？」
「え？いや、全然？電車通学で慣れてるし、平気」
私は……今も昔も、杉浦先輩、なんだな。
少なくとも、私が蒼井君と同級生だったら……自然と、名前で呼び合ったりできたのかな。
去年の夏……私が、蒼井君に「ため語で話していいよ」って言った。
それ以来、言葉を交わす時は常にため語。

でも……やっぱり、先輩は先輩なんだな。
なんだか、見えない学年の壁ってもんがあるのかもしれない。
「にしても、係員らしき人がいないね」
「あぁ、それならミコって人が案内するから、って担当の先生から聞いたけど……ミコって何だ？名前か？」
ちょっと酔っているらしいたっくんからの……アホ発言。
「ミコって……たっくん、知らないの？神に仕える女性を巫女って呼ぶんだよ。……まぁ、こんないわくつきの山奥にある神社の巫女さんっていったら、あんま普通の巫女さんをイメージできないんだけど」
冗談っぽくハハッと笑っていると……
「悪かったわね。普通でなくて」
「うわっ！！！」
いきなり背後から声がして、驚いて振り向いた。
白い小袖に緋袴の巫女装束を身に纏った……年はだいたい、２０代前半ぐらいの女性。
「す、すみません……わ、割と普通……ですね……」
「伊集院響香（イジュウインキョオカ）。伊集院は伊集院静と同じ文字で、響くに香で響香よ」
響くに香、で響香……初めて聞いた、そんな名前。
隣にいた蒼井君が、不意に口に手をあてていた。
「蒼井君、どうしたの？」
「あ？いや……どっかで聞いたことあるんだよなぁ。伊集院響香って名前」
「あら。あんな山奥にあるような神社の巫女が、世間に名が知れるとは思えないんだけど」
「ですよね。多分、昔のクラスメイトの名前とかだったりするかも」
ていうか……すっごい肌が白いなぁ、この人。
日にさらされないほど、神社はすっごい山奥にあるのかな……
「責任者（ハンチョウ）はどなたかしら？」
「あ、俺でーす」

響香さんは例の物を、とたっくんに指示。
たっくんは、エナメルバッグの中から6つの“例の物”を取り出した。
「これは俺の分、これがさーや、これが蒼井。これが章介の分で……」
「くあーっ！蒼井のアドバイスでだいぶ気分が良くなったよぉ！」
戻ってきたキョンの手にも、たっくんは同じ物を手渡した。
「あれ？築島は？」
「ああ、さっきからいますよ。俺の後ろに」
……なんと！？
私が水野君の後ろを見てみると……陽香がぐったりとした様子で水野君の脚にもたれかかっていた。
「ちょっと陽香、大丈夫？」
「う、うーん……杉浦せん……ぱい……」
「どうやら、その女の子はダメなようね。山奥は気温も低くなるから、そこの休憩所で休ませておくといいわ」
響香さんが指差す方向には、保健所らしき建物があった。
「んじゃ、俺が連れて行きますんで、先に進んどいてください」
水野君が陽香をおぶって、休憩所へと向かった。
話を戻して……と、響香さんは呟く。
「それは小型通信機器に間違いないわね？」
「あ、はい」
その例の物とは……バッジ型のトランシーバー。
海宮高校のものらしく、バッジは校章をあしらっていた。
「今から、五手に分かれて“個人個人で”山奥にある神社を目指してちょうだい」
「……は？」
「海竜宮商業高等学校は県内有数の進学校。学問に長けている方が多数いらっしゃるようですから、個人で行っても問題ないでしょうね」

……ん？海竜宮商業高等学校？
「ねぇねぇたっくん、海竜宮商業高等学校、って何？」
「さぁ……海宮高校の前の名前じゃない？１０数年経てば、学校名も多少変わるっしょ」
そ、そんなもんなのかな……
不思議に思ってると、水野君が休憩所から戻ってきた。
「ねぇ響香さん、この山クマとかイノシシとかウシとか出ないよね？？」
不安そうな顔してキョンが聞く。
いや……クマやイノシシは分かるけど、ウシはないっしょ。
「動物はこの山にはいませんわ。それでは、始めてください」
いや……動物いそうな気配ムンムンしてますが……
「んじゃ、お互いのチームの安否を確認するためにも、５分ごとに連絡ってことで！その赤ボタン押しながら喋ったら、全部のトランシーバーにつながるから！」
「ん。分かった」
「オッケー！」
山につながる五つの道。
それぞれの道に、それぞれが入って行った。
「さて……どうなるでしょう。今日は……誰の命日になるかしら」
――そんな響香さんの呟きを、誰１人として耳にせず。

……始まって、約３分。
「……早速……ってとこかな」
道２本。
こういうのって大体、直感で行けば当たるもの。
でも……今日はなんとなく、直感が効かない気がする。
私は手首に巻きつけていたシュシュを外すと、かすかに見える空に向かって投げた。
そのシュシュは、空中で弧を描いた後……右の茂みにポスッと落ち

る。
「右側の道……か」
茂みの中からシュシュを取って、それで髪をひとつに束ねた。
時間は、丁度5分。
『班長だ。こっちは順調だぜー』
『蒼井大翔。結構サクサク進んでる』
『キョンだよぉ！お花畑でいっぱい変な花見つけたぁ！』
『水野です。さっきから見張られてる気がするけど……まぁ、大丈夫です』
4人から連絡が入る。
キョン……何してんだ。
「杉浦沙彩。直感を頼りに歩行中」
適当にそんなことを言い、足を進めた。
すると、トランシーバーがいきなり震えだす。
『杉浦先輩？俺だけど、青のボタン押しながら何かしゃべって』
……蒼井君の声だ。
言われた通り、青のボタンを押しながら
「蒼井君？何？なんかあったの？」
そう言った直後、また声が聞こえてきた。
『杉浦先輩のトランシーバー、確かピンクだったよね？どうやらこのトランシーバー、7つの色のうちどれか押すと、押したボタンの色を持っているトランシーバーに繋がるみたい』
「へぇ。すごいね蒼井君。誰かと実証し合ったの？」
『いや、前メカ部がこのトランシーバーで遊んでるの見たから』
機器研究部。通称メカ部（雌株じゃないです）は、毎回妙な活動をしているらしい。
じっと座って研究してるかと思えば、校内を走り回ったり変なダンスをしたり。
海宮高校の隠れ名物って、やつ。
『でも、他のメンバーと個人通信は控えた方がいいと思う』

「え？なんで？」
『さっき水野も言ってたけど……山に入った直後から誰かに見張られてる気がするんだ』
「……ただの気のせいじゃない？」
『まぁとりあえず、さっき杉浦先輩歩いてるって言ってたけど……ちょっと急いだほうがいいよ。結構距離ありそうだし、次のスポットもあるじゃん』
「……わざわざそれを言いに？」
歩調を速くしながら、そう聞く。
『みんな神社に着いてるのに、杉浦先輩が遅れたら心配するじゃん。彼女だと尚更』
……彼女。
その言葉で……付き合ってるんだな、って実感が沸く。
『先輩？』
「あ、そ、そうだよね！遅れないように今、結構早足で移動してるとこ！んじゃ！」
『あ、あと……』
蒼井君が何か言いかけた気がしたけど、一方的に切ってしまった。
彼女、って言われて照れたのもあるけど……私まで、見張られてる気がして……
……とりあえず、さっさと進もう！

――――……

「……切れちゃった」
先輩からの音沙汰ナシのトランシーバーをポッケにつっこむと、今までよりさらに歩調を速めた。
……もしかして、彼女って呼ばれたのが嫌だったとか？
てかそれって、付き合ってる時点で嫌ってことじゃん。
……ていうか、両想いなんだろうか、俺ら……

もちろん、俺はすっごい杉浦先輩のこと好きだし、あの浜辺でちゃんと伝えた。
杉浦先輩も同じ気持ちでいてくれて……
でも、あの言葉は幻だったとか？そういうオチって、ナシにしてほしい。
……ていうか俺って……
「全然違う方向でネガティブになってなくね……？」
盛大な溜息をついた。
……杉浦先輩と付き合う前、偶然別クラスを通りがかった時……
『蒼井って、だいぶ性格変わったよなー』
『それ、俺も思った。中学の時は“タラシの蒼井”で有名だったのによ？同時に何人もの女子と付き合ったりとか！』
『そんな蒼井が、あの西院と別れて何ヵ月もフリーだなんて、信じらんねーよなー』
……明らかに、中学の俺を知っているような会話の内容だった。
つまり、同じ中学出身の奴らだったということで……
タラシで名を馳せるほどのタラシだったのかよ俺。ってその時思った。
未だにケータイに届く迷惑メールは、昔俺が付き合った女子の彼氏か、その女子を好きな男の嫌がらせとでも受け止れる。
でも……どうしても、自分を“かわいそうな奴”とは思えない。
昔の俺がした、最悪なこと。それに対する当然の報い……だろうから。
「その最悪なこと、が全く思い出せないんだけど……」
……まるで、自分が他の人間を“嫌がらせを受けるのは当然の報い”って言いながら罵っているような気分になる。
……あーあ。さっさと全部思い出して何もかもスッキリさせたい。
昔自分がどういう人間だったのか。周りの人たちとの関係はどういうものだったのか。

トランシーバーが震え、5分ごとの班員全員のやりとりが開始された。
『こちら班長。何故か滝が現れやがった……』
『水野です。こっちは何故か湖があるんだけど……海につながってるのかな』
『キョンだよぉ。今度はあっつーいジャングルゾーンに突入したんだけど……』
『杉浦沙彩。こっちは草原……おかしくない？』
杉浦先輩の言う通りだ。
こんな日差しが届かない中……花畑なんて、あるはずない。あったとしても、花はまず育たない。
この山……何か、おかしい。
そのことを、さっきの先輩とのやりとりで伝えようとしたんだけど……切られてしまった、ってわけだ。
『蒼井大翔。こっちはまだ林の中で……あれ？』
思わず、手から赤ボタンをはずす。
足元に広がるのは……黄緑色の草で埋め尽くされた地面。
そして、目の前には……トランシーバーを耳に当てる……杉浦先輩。
あっちも、こちらに気づいたらしく……
「あれ？蒼井……君？」
目を真ん丸くして、俺を見つめた。

第７３話　遠足２～不思議な山～（後書き）

変な山ですねぇ。
書きながら、実際こんな山入ったら……私なら即後戻りするだろうな、と思いました（笑）

第７４話　遠足３～守らざる者は……～

「・・・」

私と、目の前に現れた蒼井君との間に歪な沈黙が訪れる。

……まず、状況を整理しよう。

私は、林の中を歩いてて、また二本道に遭遇した。

前のシュシュ占いで、今度は左に進み……目の前に広がったのは、豊かな草原。

空も麓で見たように澄み切っていて……林の中では、木々が空を覆っていたのに。

そして……後ろを振り向いても、さっきまであった林はない。

ただただ、広がる緑色の海。

んで、さっきの５分ごとの通信で、蒼井君は林の中を歩いているようだった。「あれ？」と言った後、私の目の前に現れた。……ただ、それだけ。結構不自然なことだけど。

だって、蒼井君が歩いてきた林の痕跡がないんだもん。

「……この山、おかしい……よね？」

念のために聞いてみると……蒼井君は「うん」と返した。

「小原先輩は滝の前、水野は湖の傍。遠藤崎はジャングルの中……で、俺らは草原の真ん中。どう考えたって、同じ山にいるとは思えない……よな」

「でも、１０分前後前には、みんな麓から、隣の人とさほど離れてない距離からスタートしたじゃん！やっぱ、誰か……論理的には証明されない、何か他の人間とは違う能力を持ってる、って私思うんだけど！」

不安な雰囲気をなんとか打ち消そうとして、わざと笑いながら明るく話す。

でも、蒼井君は神妙な面持ちで……

「たぶん……あの人。伊集院さん」

「え？」
「この世に存在しない人だと思うんだ」
……マジで？
「それに、何故か聞いたことあるんだ、伊集院響香って名前。どこか、を忘れちゃったけど」
それに、と、何故か生徒手帳を出した。
「海竜宮商業高等学校、っていう名前、約１００年前のものなんだ」
沿革を蒼井君は指でなぞり、約１００年前の欄で指を止めた。
そして、それは５０年前に海竜宮高等学校という名前に変わってる。
やっぱり気になってんだ、蒼井君も。
「海宮市って、元々は海竜宮市で、いくつかの町と合併したのを機に海宮市になったらしいよ」
……なるほど。それは、約３０年前のこと。沿革にも、ちゃんとある。
“海竜宮市が合併し海宮市に。校名も海竜宮高等学校から海宮高等学校へ”ってね。
「それに……伊集院さん、外来語をひとつも使わなかった」
外来語とは、簡単に言うとカタカナの言葉。
代表的なのは……このトランシーバー。
確か伊集院さんは小型通信機器って言ってたっけ。
いや、でも１００年も前にトランシーバーなんてないよね……？
外観そのまんまで小型通信機器って決め付けたのかな。
いずれにせよ……
「つまり……あの人は、この世に存在しないってこと？」
「……まぁ、非科学的だけど、そうとしか思えないよね。１００年ぐらい経ったのにあんなに外見が若く見えるなんて、ありえないし」
そう話している間にも、どんどん歩みは進める。
……なんか、立ち止まってると、どんどんこの不思議な山に飲み込まれていくような気がして……
多分蒼井君もそう考えていたんだろう。いつもより歩みが速い。

私も頑張ってその歩調についていこうとした。

……やがて、緑色の集団が目の前に現れる。

「林……だ」

まるで、この林が第二の入口のように見えて……

そこに辿りつくと、道が二本に別れてて、足元に文書のようなものがあった。

「なんだ？これ」

蒼井君がその文書を開けると……中には、こう書いてあった。

「契（ケイ）を守らざる者、死あるのみ……？」

「蒼井君、それ、読み方“ケイ”じゃなくて“チギリ”だよ」

「契？……って何？」

「昔の言葉で、約束っていう意味だったと思う」

でも、約束って……なんだろう？

何かを約束したっけ？麓で……

“「今から、五手に分かれて“個人個人で”山奥にある神社を目指してちょうだい」”

あ……そっか、あれか！

「蒼井君、ここはとりあえず、別行動しよ！」

「うん、俺もそう思ってたとこだけど……大丈夫？別行動で。何か危険なことがあったりしたら……」

「大丈夫大丈夫。３年だもん！んじゃ、私こっち進むね！じゃねっ！」

私は手短にそう言うと、右の道に進んだ。

……手短にしなきゃ、殺（ヤ）られると思って。

多分、班のみんなが感じていた、何かに見張られてるような感じ…

…きっと伊集院さんか、その仲間だ。

きっと、誰が約束を破るか、ずっと見張っていたのだと思う。

私と蒼井君がトランシーバーで交信したことによって、その約束に亀裂が入り……
見張りの奴等が何かの力で私と蒼井君を引き合わせたんだ。亀裂を深くするために。
そして、最終手段が……あの文書。
あの言葉を無視して2人一緒に同じ道を進んだら……その時は……
“恐怖山の遭難者”の1人にされてしまっていただろう。
『よっす！班長だ！今、でっかい木に吊るされていた問題……ていうかクイズ解いてるとこ。1人で解けって書いてあるから、今超頑張ってる！』
『キョンだよぉっ！キョンも班長と同じように問題解いてます！』
『水野です。俺は問題解き終わって進んでます』
『蒼井大翔。まだ歩行……っていうか、走行中！』
きっと、蒼井君も気づいたんだ。
見張られている気配の正体について……
「杉浦沙彩。私もまだ走行中！」
それだけ言って、ポケットにトランシーバーをつっこんだ。

走ること、約10分……
「あ、あった！」
これが、たっくんやキョンが言ってたクイズかぁ。
とりあえず、開けてみた。

“歴代総理大臣の姓名を5人書き記せ。この木々を奉るべし”

文書の下には、数本に束ねられた木々があった。
歴代総理大臣、か。割と簡単じゃん。
バッグから、ペンを出した。
「えっと……」
印象に残ってる歴代総理大臣の姓名を書き、バッグにつっこむ。

よし。あとは、この木々を奉るだけ！

林のどんどん奥に進むにつれ……坂も急になり、どんどん道が険しくなっていった。

「なんか、山登ってるみたい……」

……いや、元々山やないかいっ！

1人ノリツッコミするぐらいしか、疲れを紛らわせる方法がなかった。

でも……なぜだろう。なんだか、どんどん頂上に近づいている気がするよ。

第７５話　遠足４～生け贄の巫女～

事の発端は、たっくんのクジ運の悪さ。
何人も遭難者を出した、という恐怖山がスポットとして当たってしまった。
そこを２つ目のスポットとして、海宮テーマパークからバスで麓まで移動。
バス酔いが酷いせいか、陽香は近くの保健所で休みを取った。
陽香がそうしている間に、私たちは奇妙な巫女に出会った。
名は、伊集院響香。１００年前の海宮高校の校名を言い、外来語を一切使わなかった女性。
そんなことさえ気にも留めなかった私たちは、一斉に林の中へ。
途中のトランシーバー同士の交信で……奇妙なことが起きた。
湖、滝、花畑、ジャングル……どれも、みんな山の中にいるとは思えない状況の交信。
そんな中、私と蒼井君は個別で交信し……広大な草原の中で、出逢った。
ますますおかしいと思った私と蒼井君は、その人……伊集院さんはこの世の人間でないと推理した。
そして、私たちの足元に現れた文書。そこには、約束を守らない人は死しかない、といった内容が書かれてあって……
まずい、と思った私は２本の道のうち１本の道に入った。もちろん、蒼井君を置いて。
走って走って走って……いつのまにか、私は山道らしき坂道を登っている体勢になった。
……というのが、あらすじ。
そして、今……

紆余曲折の末、やーっと着いた……と、ホッとしながら思うけど……

「誰もいない……」
おかしいなぁ。
私がクイズに辿りつく途中の交信で、クイズの答えを考えている人が多かったのに。
……ま、いっか。
とりあえず私は、数メートル前にある神社の前に行った。
海宮神社、と書いてあって……
「誰が書き換えたんだろ……？」
神社の中には、人の気配はない。木々も伸び放題で、誰かが手入れしてるとは思えない。
この町の名前をそのまま使ってるとしたら、前は海竜宮神社のはず。
じゃあ、誰が……？
「あっ！さーやちゃーんっ！」
後ろから声がして、振り向くと……キョンが大きく手を振っていた。
「さーやちゃんが奉るものって、それ？」
「あ、うん。木切れっぽいけど……キョンは？」
「キョンはねぇ……見て見てぇっ！めっちゃキレーな花！」
キョンの手の中にある大きい白い袋の中には、溢れんばかりの花々があった。
木、花……？意味分かんない。
まぁ、意味分かんないのは今に始まったことじゃあない。
「男群、遅いねぇ。もしかして、クマに食べられちゃったのかな？」
「そりゃないよ……たぶん」
そんな話をしながら、待つこと約１０分後……
「おーい！さーや、杉下！」
たっくんが到着した。
「杉下じゃないっ！遠藤崎ですっ！」
「あ、そーだっけ？」
たっくんは、ナハハと笑っている……全く、お気楽なもんだ。変な現象に次々と遭遇したくせに。

「すみません、ちょっと遅れました！」
水野君も到着して……
「あ、みんないる」
蒼井君も到着した。
５人揃ったところで……改めて、ホッとした。
よかった……誰も死ななくて。
最早、死活問題。本当、恐ろしいところだよ、この恐怖山……
「んじゃ、みんな揃ったし……奉るとするか！」
たっくんがそう言い、神社に足を踏み入れた。

数メートル進むと……石段の上にお賽銭箱みたいなのと、縄につながれた鈴みたいなもの。そして、古ぼけた畳が敷かれている屋根がついた家みたいなのがあった。（どれも“みたいなの”がつくのは……作者の神社に関する語彙数が少ないからです。すみません―
―ｂｙ　ｃｏｙｕｋｉ）
古ぼけた畳の上に、大きい器があった。
そして、それの前にいくつかの文書。
“壱”“弐”“参”“肆”“伍”と書かれてある。
とりあえず、壱の文書を開けてみた。
“水と塩を混ぜるべし”
「水と塩を混ぜる……んだってさ」
「あ、俺塩持ってる」
「たぶん、これ水だよな？結構重いし！」
たっくんと蒼井君が、器に塩と水を入れた。
木の棒が器の傍にあったので、私はそれをかき混ぜた。
「えーっと次は……花を浮かべる？あ、キョンが持ってるやつだ！」
キョンが弐の文書を開け、書かれてある通りに花を浮かべた。
最後の一輪を浮かべた時……
「うわっ！！！」
ほぼみんながそう叫んだ。

だって、器がひとりでに転がったんだから……
あたりに塩水が広がり、花が綺麗に浮かぶ。
たちまち足元全体に広がって……私たちは、石段の上に登った。
「えーっと、参は……木々を浮かべよ、らしいです。杉浦先輩ですよね？」
「あ、うん。分かった」
縄を解き、木切れを塩水と花の上に転がした。
水は水を吸って膨張したらしく、たちまち石段の幅ぐらいの……って、やっぱおかしい。一気にこんなに膨れるはずがない……
私は大きくためいきを吐いた。
全く……この山は、木までもおかしいのか。
「次は、肆……れ、霊を呼び寄せよ？」
たっくんはそう言い、固まってしまった。
……そうだ。この人、大のオカルト嫌いだったんだ……
「もしかして、これでしょうか？妙に膨れ上がってる、俺が持ってるこの白い袋……」
「や、やめてケロ！」
「カエルかっ！」
たっくんのケロ発言に思わずつっこんだ。
「とりあえず、開けてみたら？」
「そーですね。従わないと帰れないかもしんないし」
「ひぃぃぃぃ！！！」
よほど怖いのか……蒼井君の背中の後ろに隠れるたっくん。
全く、上級生が情けない……
下級生の水野君は、躊躇いなく袋の口を開けた。
次の瞬間……！
「ぎゃああっ！何かいっぱい来たよぉさーやちゃんっ！」
キョンの言う通り……何体もの巫女の姿をした物体が吸い寄せられるように集まってきた……
人が空中を浮遊している……不思議な光景。

いや、正しくは人だった人……かな。
「その伍……見送るべし」
蒼井君が、伍の文書を読み上げる。
私たちは、その一連の彼女たちの動作をずっと見ていた。
人が1人、木切れの上に立つ。下へ下へと流されていく。
人が1人、木切れの上に立つ。下へ下へと流されていく。
人が1人、木切れの上に立つ。下へ下へと流されていく……
……その繰り返し。

最後の1人が、私たちの方を振り向いた。
10代ぐらいの……私たちと同じくらいの女の子。
涙を浮かべた目で、微笑んでいた。
私たちは、まるでメデューサと目が合ったみたいに、その場に固まってしまう。
そして、その女の子は、また進むべき方向に目を向け……最後の1人として、下へ下へと流されていく……

――――……

「……いっ、おいっ！」
「……ん？」
気がつくと、白い服を着たお兄さんに声を浴びせられていた。
私が起き上がると……みんなも、次々と起き上がった。
「大丈夫かい？みんな揃って行き倒れかい？」
そのお兄さんの隣にいたおじいさんが私たちにそう言う。
お兄さんの胸のポケットには、“海宮デイサービス”といった文字とマーク……どうやら、介護福祉士さんと患者さんらしい。
辺りを見回してみる……間違いない。恐怖山の麓だ。
……帰れたんだ、私たち。元の世界に。
「きゃーっ！やったぁ！ちゃんと生きてる！！！」

「よっしゃあ！また夏姫に会える！！！」
キョンとたっくんがそう叫ぶと……おじいさんは、激しく咳き込んだ。
「大丈夫ですか！？伊集院さん！」
「おお。たいしたことはない……心配無用じゃ」
「い、伊集院……さん？」
介護福祉士さんに背中をさすられているおじいさんの名字を聞いて、思わず聞いてしまった。
「あのっ、おじいさん、伊集院響香さんってご存知ですか？」
「響香……？久しぶりに聞いたな。知ってるも何も、わしの女房だ」
１００年ほど前に行方が分からなくなってしまったんじゃがな……と、おじいさんは付け足す。
「……思い出した！」
蒼井君は、突然そう言った。
「伊集院響香って名前……恐怖山で遭難した人のリストに載ってたんだ！」

私たちは、１００年ほど前のことを聞くために、ベンチに座ったおじいさんを囲んだ。
「あれは、１００年ほど前のことじゃった……」
懐かしむような目で……まるで、１００年前のこの山を見るかのように、おじいさんは恐怖山を見上げた。
「結婚記念、と称して親友夫婦とワシと響香でこの山を登ろうと、この麓までやって来たんじゃ。すると、妙な女が現れてな……ワシらにこう言ったんじゃ」
“「１人ずつこの山の中に入り、無事全員この山の頂上に辿り着いたら、この山を差し上げましょう」”
その女の人も、巫女の格好をしていたという。
「当時はワシも若かった……皆の意見も聞かず、勝手にその申し出を受け入れ、１人で山の中へ入ったんじゃ。そして、好奇心旺盛な

響香もワシが山に入って行った後、山に入っていった」
親友夫婦は、何かが嫌な予感がしたらしく、麓に残ったらしい。
「ワシはどんどん山の奥深くへと進んで行った……そして、偶然にも響香と鉢合わせしたんじゃ。どうせなら2人で頂上を目指そう、と、ワシらはあの女の言葉を忘れて2人で頂上を目指したんじゃ」
おじいさんの目は、だんだん悲しげに伏せていく。
響香さんは途中で疲れたらしく、おじいさんの後に続く形で頂上を目指していったらしい。
「そして、とうとう頂上を見つけたんじゃ」
“「響香！頂上があったぞ！」”
おじいさんがそう呼びかけ、振り向くと……
「……なかったんじゃ。女房の姿が」
ここからはワシの推測じゃが、とおじいさんは続ける。
「その後数年間、ある者が命を絶つと、必ず後日、どこかの海でその者と深いつながりを持つ同じ姓を持つ者が水死体で発見されるようじゃ。……きっと、約束とやらを破った者を生け贄として巫女にするんじゃろな」
そう締めくくると……おじいさんは、また咳き込んだ。
介護福祉士さんが、背中をさする。
「わしももう、１２０を越えておる……響香も、もう１００年もこの山にいることになるじゃろな。ワシも早く死んで、響香をこの不気味な山から出して、向こうの世界で2人で暮らしたいのじゃが……いざ死ぬと考えると、やはり怖くなるんじゃよ」
「さぁ、もう帰りましょう。伊集院さん」
あらかじめ持って来ていたらしい車椅子におじいさんを乗せると、2人は坂の下へと下って行った。

「なんか……恐怖っていうか、不思議な山だったね」
「俺はもうこりごりだよ……」
駅まで向かうバスの中。しんみりした雰囲気が流れる中、そう呟く。

「そのおじいさん、１２０歳を越えているんですよね？」
「うん」
「じゃあ、なんでその響香って人は年をとっていないんですか？」
何も体験しなかった陽香が、当然の疑問をぶつけてくる。
「……やっぱ、さらわれた時点で死んだんじゃないかな」
幽霊は年をとらない……って言うしね。
「そういえば、みんなはクイズでどんなのが出題された？」
「あ、俺、超ラッキー問題でした！歴代総理大臣の名前！」
「え？うそ、俺も！」
「キョンもなんだけど！」
「俺も」
「え、私も……」
「ってことは……」
みんなで目を見合わせ……笑いが起こった。

――そして、後日。
私たちがこれから向かう海宮海で、着物を着た老婆の死体が発見された。
その死体の名は、“伊集院響香”
新聞のお悔やみの欄に、“伊集院秀一”といった名前があった。
そして……遭難者リストに、新しく、１人の女の名前が追加された。
あのまま、約束を守らず蒼井君と２人で頂上まで行ったとしたら……
私は、今頃そのリストに載っていたのかもしれない。

第７５話　遠足４～生け贄の巫女～（後書き）

若干意味が分からなく、すみません。恐怖山編（・・；）
さて、次回はラストスポット、海宮海編！
どういう風にしようか、考え中です（笑）

第７６話　遠足５～隠していたこと～

「ハー……やっぱ地元はいーねぇ」
「ほんとほんと。あんなヘンテコな山、二度とごめんだよ……」
海宮市駅に着き、たっくんと水野君は地元の空気を一気に吸う。
ここは私の地元じゃないけど……やっぱり２年ちょっと通っているだけあってこの市に愛着がついてしまい、空気を吸う度にどこか心が落ち着いた。
ケータイを見ると、今は午後３時。ゴールは５時だから……間に合わないわけでもないし、間に合う確証もない。
クイズの内容によって、大きく左右される……ってわけだ。
「よっし！じゃー、早いとこ終わらせて、さっさと帰ろーぜ！」
たっくんはそう言い、若干恐怖山ショック気味のみんなに気合を入れた。

徒歩約１０分。海宮海に着いた。
やっぱ、いつ見ても綺麗な海……って、見とれてる場合じゃない。
「浜辺に若いカップル１組、釣りをしているやけに体がデカいおじいさん、自分に酔い痴れている男性……どの４人も無関係っぽいね」
じ、自分に酔い痴れてる……って、蒼井君……
でも確かに、無関係っぽい。
「たっくん、ちゃんと先生と打ち合わせしたー？」
「したに決まってるっしょ！一応班長なんだし。確か、新任の先生がいるって言ってたような……」
新しい先生……？
そういえば、新任式ってのがあったっけ。毎度のごとく、居眠りしてたけど。
新任……なら、あのおじいちゃんはまず除外できる。
後姿しか見えないけど、あのデッカイ釣り吉ヨンペイを思わせるル

ックス＋ノースリーブの下着のようなトップス＋今オッサンの間で流行っている水色の縞模様のステテコ＋下駄は、６０歳ぐらいのおじいちゃんしかいない。
残りは3人……帽子を目深に被った、蒼井君曰く酔い痴れてる男性？それとも、若いカップル？
うーん、どっちも年齢的にアリだし……
悶々と考えていると、陽香が突然叫んだ。
「藤嶺（フジミネ）せんせ――――っっっ！！！」
藤嶺、という名字に反応してトコトコやって来たのは……
「築島。大声だしてどないしたんや？」
まさかの、釣りをしていたおじいちゃん……いや、２０前後のお兄さんだった！！！

班員の点呼や１５班であることの確認をとると、早速クイズの内容を聞く。
「まぁ、海宮海のクイズっちゅーんは、宝探しみたいなもんや。こーんな広い砂浜のど真ん中でちまちま問題解くんはつまらんやろ？」
「宝探し……？」
「せや。今から2人3組に分かれてもろうて、ワシが埋めたこの校章を探してもらうでー！結構前ん班も苦戦しちょったけん、がんばりやー」
……マジで？
2時間弱で終わる……かな？
「……それじゃ、とりあえずペア決めましょうよ」
「ハイハーイッ！キョン、小原先輩とがいいっ！あんま話してないしーっ！」
「あ、そーいえばそっか！ヨロシク！杉下……」
「杉下じゃないっ！遠藤崎！」
アハハ……キョン、どんまい。
「んじゃ、俺と陽香か」

「見つけられるかなー……」
「陽香なら大丈夫っしょ！ちっさい頃から勘いーじゃん」
若干不安げな様子の陽香と能天気っぽい水野君。
「そんじゃ、私と蒼井君だね」
「そだね。がんばろーね……つっても、あんなちっさい校章見つかるかどうか分かんないけど！」
「いや、見つける！最後の遠足ぐらいタイムオーバーしたくないし……」
「うっそ、全部タイムオーバーしてきたの？」
そうなのだ……
1年の時は、2年の先輩が（季節外れの）熱中症で5時までダウン。よってタイムオーバー。
2年の時は、タクシーがまさかのエンスト＋事故か何かで電車がストップ。よってタイムオーバー。
そのことを蒼井君に話すと、「そりゃ悲惨だね」って言われた。
「おい、そこの茶髪とモテ男！えー加減にワシの話を聞けっちゅーねん！」
「あ、はーい」

その後の話し合いで、私と蒼井君は洞窟の近く。たっくんとキョンは10メートル間のビーチ、水野君と陽香は何キロほど先の向かいの洞窟の近くに決まった。
ちなみに、藤嶺先生は陽香の担任の先生らしく、大学を今春卒業したばかり。あのユルッとした雰囲気と親しみやすい関西弁のお陰で男女共に人気を誇り、先生からは疎まれているらしい。（陽香情報）
私も騙されたオッサンルックは、生徒提案。「スーツ以外の藤嶺先生を見て見たい」とのこと……（陽香情報）
そして、新任である先生が蒼井君がモテるのを何故知っているかと聞いてみたら……
『うちのクラスの女子が、「2－Bに蒼井大翔っていう藤嶺先生に

負けず劣らずのカッコいい先輩がいるんだよーっ！」ってこの前騒いどったけんや！この海に来るっちゅー班のメンバーの名簿を見よった時、真っ先にソイツの名前が目に入ってなぁ。今日は生徒は私服やけん、見分けつかへんやろなぁって思いよったけど……まー、ワシに負けず劣らずのイケメンっちゅーことで、すぐ分かったんや。ついでに言ーと、アンタのこともワシが受け持っとるクラスの男子から聞いたで！「３－Ａに海宮人よりキレーな人がいるんで先生！工藤リリナにすんげぇ似てるんで！」ってな！まぁ、こっからはワシの推測やけど……アンタと蒼井、付き合っとるやろ！あの雰囲気といい、どっちもミーハーな感じせーへんもん！ま、今んとこあんま噂にはなっとらんけどな。高嶺の花同士、これから名物カップルとして学校中に名を馳せれるよーにがんばりやー！』

……いやー、よく喋る喋る。私が覚えてるセリフの３倍以上も喋って出遅れてしまった。

でも……

「ねー蒼井君」

「ん？何？」

「私、工藤リリナさんに似てる？」

洞窟の前……といっても、地面はほとんど砂。土を奥深くまで掘り起こされた形跡もないし、スコップとか使わなくても手で探し出せる。

そう考え、砂をいじってる最中にそう聞いた。

蒼井君は……工藤リリナってだれだっけ？って感じの顔をしていた。

「ほら、去年あたりに海宮花火見に行った時に見つけたちっちゃい女の子のお母さんだよ！」

「海宮花火……？あ、あの人か！」

ほんっと、陽香のことといい……頭いいクセに人のこと覚えるのが苦手だこと。

「サングラスかけてたしよく覚えてないなぁ……あ、どこかクール

っぽい雰囲気は似てる、ってよくクラスメイトが言ってたような」
「クールゥ？私が？」
「カイジとかユウヤとかシゲオも言ってたよ。「杉浦先輩ってクールビューティーって感じだよなぁ」って。一応いい言葉っしょ？」
クールビューティー……？クールでビューティー……カッコよくて美しい……？栗〇千明さんとか水川あ〇みさんとか……？
「……合わなーい……」
大げさに落胆する私を見て、蒼井君は笑った。
「でも、俺は可愛いって思うよ」
「なるほど、かわ……え？」
思わず手を止め、蒼井君と目が合う。
……私にとっては、超至近距離。２人同時に目を逸らしてしまった。
「え、だ、だって、私のこと勇猛果敢とか強いとかカッコいいとか……」
「あ、あれは隠すために言ったんだよ！」
その後、小さく「まぁ本当のことだけど」と彼は付け加えた。
隠すために言ったこと……か。
……私のこと、ずっと“可愛い”って思ってくれていたのかな。
いや、自惚れかもしんないけど……
「……ありがと」
素直に思える。
「お世辞でも好きな人に“可愛い”って言われるのって、嬉しいもんだね」
「……お世辞じゃないってば」
お互いに笑い合う瞬間。
ドキドキする心臓。火照る頬。
……きっとずっと、知らないままだった。この人に逢うまでは……
何度、そう思ったことだろう。

「……あ、あった！これじゃない？」

「マジ？……あ、それじゃん」
……1時間後。ようやく、小さな小さな海宮高校の校章を見つけた。
波打ち際の、でっかい貝殻の近く。
「よかったー！海に流される前に見つけて……」
きっと、あの先生はここに結構深く穴掘って校章入れて……時間が経つにつれて、砂がどんどん流されてって……
波打ち際なんて、隠してあるはずないと思ったから……穴を掘った形跡なんて調べなかった。
全く……あの先生は、かくれんぼの名人だね。
「そんじゃ、これ早くあの先生のとこに持って行こっ」
「ああ、うん」
「……どしたの？」
「いや、なんでこの上に墓地があるのかな……って」
蒼井君が見上げている先を見てみると……いつの日か、伶君と2人で愛美さん……伶君の彼女のお墓参りに来た記憶がよみがえってきた。
“「いちばん、好きな人と一緒になれ」”
この世にいない愛美さんと、遠い外国にいる伶君。
どちらも、私の傍にはいないけど……2人がくれたものは、とてもとても大きい。
「……ま、いっか。早く行こ、杉浦先輩」
「……うん」
ありがとう。伶君。愛美さん。
「どしたの先輩。顔緩んでるけど」
「そ、そう？」
「変なのー」
今、私に向けられる蒼井君の笑顔。
2人がいなければ、きっとずっと……他の人に向けているのを見ているだけだった。

――――……

「あっぢー……」

春のくせにポカポカと照りつける太陽。

ちょっとだけだったらまだしも、こう４５分近くあたってると、さすがに熱中症レベル。

１コ下の学年、杉下……おっと。遠藤崎右京は、もはや試合放棄してどこからともなく出てきた扇子で自分自身を扇いでいた。

「ほらほら！さっさと見つけるよ！」

「……へーい」

全く……夏姫の暑さや寒さにもへこたれないテンションを分けてあげたいぐらいだわ。

「あーあ……１０メートル間のビーチって結構楽だと思ったんだけど……キョンも洞窟の下にすればよかったなぁ。あっついなぁ……」

今更愚痴っても無駄ですぜ、キョンさん。

しばらく経って、キョンさんの死んでいるような目が……何かを目撃し、一瞬で輝きを増した。

「うををっ！？蒼井がさーやちゃんの首筋に手を回してるっ！」

そして、またまたどこからともなく双眼鏡を出して、洞窟の下に合わせた。

「あーもーっ！なんでさーやちゃんも蒼井の手の方見てんのさっ！早く正面向いてキスしちゃいなよっ！もったいないなぁ……って、あれ！？蒼井、手戻しちゃったよ！ってか、手に何か持ってる……ハァッ！？あれカニじゃんっ！超ミニサイズ！！ってことは……なぁんだ。カニとってあげただけかぁ。キスするつもりじゃなかったのかぁ、全く……ハァ」

溜息をつくと、キョンさんは双眼鏡から目を離した。

そういえば……何かとキョンさんって蒼井と一緒にいるよな。

体育館で班組む時もそうだったし、さりげにクラスでもよく２人で話してるっていうし……（蒼井ファン情報）

「キョンさん」
「え？なんですかー？小原先輩！」
「キョンさんって、蒼井のこと好きだったりしないの？」
そりゃあ、さーやが彼女なんだから……女子だったら、蒼井にヘタに手を出せない。
でも、キョンさんも女子なんだ。好きとかじゃないと、蒼井と一緒にいるわけがない……
「なーに言ってんですかーっ！！んなわけないじゃないですかーっ！！さーやちゃん，ｓスウィートダーリンですもんっ！！」
そう言い、ビシバシ俺の背中を叩くキョンさん。
うへっ。小原拓海、１０００のダメージ……
「蒼井は、兄みたいなもんですよ！宿題写さしてもらったり、宿題写さしてもらったり、宿題写さしてもらったり……」
「宿題写さしてもらったりするだけの友かいっ！」
アハハハハハとキョンさんは明るく笑った。
「いや……ほんとの兄かもしんないですね！」
「……と言うと？」
「私の継母ならぬ継父が……本っ当に蒼井にそっくりなんですよ」
相変わらず笑っていたけど……明らかに、違う意味を持つ笑いになっていた。
「小学校の頃、父が亡くなって……私が中１の頃、私の母と継父が知り合って結婚したんです。その継父の名前は、蒼井翔喜。ほとんど蒼井大翔と同じでしょ？」
「た、確かに……」
「継父は、本当に優しくて……私をよく、日本各地はもちろん、ヨーロッパとかにも連れていってくれたんですよ」
よ、よーろっぱ？
そういやこの人、移動代全部払うとか言ってたよな。んで、クラシックカーでやって来たよな……
……見かけによらず、超お嬢様なのか。

「でも……どこに行っても、なんか後ろから指指されるような感じがして。何回も聞いたけど、ただ笑顔をつくってるだけなんです」
その笑顔も、蒼井とそっくりらしい。
「そして……継父の口から後ろ指指される理由を聞かないまま、継父は亡くなっちゃったんです」
……じゃあ、この子は……2回も、お父さんを亡くしている……のか。
「もし継父が生きていたら、蒼井にも会わせたいなーって思ってる……んです！いやー、にしても初めて蒼井に会った時は、継父の生き写しだと思いましたよ！それを隠すのに必死で！ナハハハ！！」
「……それで、後ろ指指される理由って、何だったの？」
キョンさんにつられて笑うことなく、俺は聞いた。
すると、キョンさんは笑顔を失い……ただ、ポツリと

「……刑期を終えて、放免された人だから……だと、母から聞きました」

――――……

「藤嶺せんせーっ！」
やっと藤嶺先生のもとに着き、校章を手渡した。
「おー！よーやったな！最短記録や！1時間30分！他の班は2時間ぐらいかかっとったで！」
私たちを始めとし、たっくんチーム、水野君チームが続々と校章を先生に手渡す。
ゲームクリアした証の先生の（ナルシっぽさムンムンの）サインを貰い……
「よし、早く学校戻ろ！あと30分でタイムオーバーだよ！」
駅からは、自転車で学校まで15分。歩けば20分ちょっと……んで、海宮海は駅から数分だった。

上手くいけば、間に合うかもしれない！

第７６話　遠足5～隠していたこと～（後書き）

初のたっくん目線のエピソードが入りました。
蒼井とキョン。ただの部活が一緒同士の気の合う2人……じゃないだろうな、と思い、このような設定を追加しました。
蒼井とさーやのラブシーン（？）は、書いてる方も気恥ずかった……（・・＊）
特に蒼井がさーやのことを“可愛い”って言うシーンは……（・・＊＊）
これから甘めのセリフを考えるのに苦労しそうです……（・・＊＊＊）

第77話　遠足6～男の意地～

「15班、4時55分到着！ギリギリだったわね」
な、なんとか間に合った……
担当の櫻木先生に到着の報告をし、私たち5人は地べたに座り込んだ。（たっくんは班長としてクイズの結果などを提出しに行っている）
ハタから見れば、ガラの悪い高校生集団……もう、どうでもいいわい。
「つ、疲れた……」
「なんとか間に合ってよかったですね」
そう言う水野君の表情は、まるで歩いてきたかのよう……
……蒼井君とキョンと陽香はバスケ部、たっくんと水野君はサッカー部。
文化部なの、私だけじゃん……
3年間のバスケ部ブランクや日頃の運動不足がものを言ったのか……私だけ、物凄く疲れた。
「でも、キョンとたっくんって10メートル間のビーチだったでしょ？よく見つけられたよね、あんな小さい校章」
「・・・」
キョンに話しかけたつもりなんだけど……何故かシカト。
ずーっと一点を見つめている。
「キョーン？」
もう一度呼んでみたけど……反応ナシ。
「杉下さん？」
水野君が呼ぶと、やっとハッとして気づいた。
そして、お決まりのセリフ「杉下じゃないっ！」が耳を劈（つんざ）く。
「どうしたの？キョン、ボーっとして……話しかけても全然気づかなかったよ？」

「え？そう？ごめん沙彩ちゃんっ！ちょっとキョン、疲れちゃって……」
わざとらしく明るくそう言うキョンを、みんなは心配そうな目で見ていた。

「さーや、たっくん！ギリギリだったねー」
既にゴールしていたのか……夏姫が爽やかな笑顔をふりまきながらこっちへ来た。
「よっ！沙彩、拓海、蒼井！遅かったなー！」
「おっ、唯ちゃん！」
ウィズ、唯。こちらも余裕そうな笑顔。
……てか、唯とたっくんの絡みって初めてじゃない？（一応２人とも海宮人なので同中っぽいので、お互い名前で呼ばせてみました。by作者）
「唯の班は？いつ着いたの？」
「１時間ぐらい前。結構スポットが近場だったからさ！」
へぇ。そりゃあ羨ましいもんでっせ。
「こっちは誰かさんの極悪なクジ運のせいで隣町まで進んだんだよ……」
「うっわ、キツ！ていうかさーやの班って恐怖山行ったんだって？噂で聞いたけど」
「あ、それ私も聞いた！！」
「そうそう。危うく行方不明者出るとこだったよ……」
「つーか、さーやの班じゃねーし……俺が班長で俺の班だし……」
いじけるたっくんを見て、みんなでひとしきり笑った。
「んじゃっ、もう各自解散だし……沙彩、すまんが蒼井借りてくぞ！」
「え？俺？」
唯が、蒼井君を？
「う、うん、いいけど……じゃあ陽香、一緒に帰ろっか」

「は、はい！」
「キョンは疲れたぁー……車で送ってもらうー」
「じゃっ、俺は彼女と待ち合わせてるんで！」
少々ウキウキしている水野君。
夏姫はもちろん、たっくんと遊んで帰るようで……
にしても、唯が蒼井君を借りてって、どうするつもりだろう？

――――……

連れてこられたのは、旧校舎裏。
「ここね、俺と沙彩が別れた場所！……まぁ、途中でお前が入ってきて、俺を突き飛ばして沙彩を連れ去った因縁の場所……って言えばしっくりくるかな？お前にとっちゃ」
「因縁て……」
一応、あの時はすみませんでした、と謝っておいた。俺の勘違いに付き合せちゃったわけだし。
当の本人は、今はあんまり気にしていないらしい。
「沙彩が俺をフッた理由、知ってるか？」
「……知りませんけど」
「アイツね、ずーっとお前のことが好きだったわけ。んで、お前があの西院とか何とかいうお嬢と付き合ってるって知って、弱ってる間につけ込んで……半ば無理矢理みたいな感じで付き合ったけどさ。結局、アイツの目はお前を追ってた。でも、沙彩は俺を好きになるために頑張って……それが、俺にとっちゃ、かなりかわいそうに見えてさ。好きな奴に無理させるよりかは、自分から離れていこうって思って、伶……五十嵐伶っていうダチにも協力してもらって、わざとフるように仕向けたんだ」
……高杉先輩の声が、だんだん暗くなっていくのが分かった。
この人も……俺と同じように、杉浦先輩のことが好きなんだ、きっと。

「にしても、俺も結構未練がましいよなーっ！なんだかんだ言って、まだ沙彩のこと好きなわけだし！でも、別れたことは後悔してないわけ。俺、結構変わったっしょ？」
「えっと……はい」
前の高杉先輩がどんな人で、杉浦先輩と付き合ってどうなって、今はどう変わっているのか……いまいちよく分からないから、曖昧な返事をした。
「なんか、前の俺に戻れたっつーか……やっぱ不安事って処理することに越したことはねーな！」
「不安事……か」
さっき、杉浦先輩、高杉先輩、東郷先輩、小原先輩が談笑していたシーンが、脳裏に浮かぶ。
なんか……杉浦先輩が、どっかの違う人に見えてしまった。
「何何？オールマイティなお前にも不安事とかあんの？」
「オールマイティって……んなことないですよ。全然」
オールマイティ……完全無欠。
そんな人間、この世にいるわけがない。俺だって、まだまだ欠点だらけなんだから。
「なんつーか……やっぱ1年も年が違うと……こう、信頼度的なものが違うんだなって」
「ふーん。俺らの仲良し度に嫉妬しちゃったってわけだ？」
……なんとなく、ムカッと来た。
「そんな顔しねーの！せっかくのイケメンが台無しだぞー？」
「……でも、年の差なんかにへこみませんから、俺。いつか、高杉先輩に絶対追いつくし」
そう言い、高杉先輩の目を見る。
先輩は、フッと微笑んで……
「そうそう、その意気！でないと、俺か誰かに沙彩取られるぞー？あー見えてアイツ、すんげぇモテるんだから！」
「……分かってます。ちゃんと、大事にしますから」

「よし、そうこなくっちゃ！じゃっ、とっとと帰りやがれぃ！」
高杉先輩に背中を押され、旧校舎裏を出た。
日は傾いて、空がオレンジ色になっている。
……今、この綺麗な夕日を一緒に見たいのは……他の誰でもない、杉浦先輩。
「……電車の時間、まだ間に合うかな」
自転車にまたがり、駅のホームを目指してペダルを踏んだ。

――――……

「ゆーいっ！」
「おっ、夏姫、拓海！盗み聞きでもしてたのか？」
茂みから、一組のカップルがひょこっと顔を出した。
「だって大翔君と唯が殴り合いとかし始めたらいけないなーって思って、こっそりついてきたの！」
「ま、俺はそんなことねーだろーとは思ってたけど！」
殴り合いって……
いくら俺でも、後輩を殴ったりはしないでしょ。
「でもさー、私ら4人で話してたりしただけで、あんな風に思ってたとは……大翔君って、意外とさーやに似てるんじゃない？」
「似たもの同士って、やつ……かな」
案外、そのほうがうまくやっていけるだろう。
「でもさー、唯ちゃん、嬉しかったんじゃない？“あの”蒼井大翔に「絶対追いつく」とか言われて」
「別にー？ちょっと不思議に思っただけだよ」
あんなに目標としてきた男に、そう言われたもんだから。
まるで、ライバルに「お前ってスゴいな」って言われたみたいで。
それに……ちょっと勿体ねーなって思ったんだ。
沙彩が、あんな……俺が惚れ直すほどの綺麗な笑顔を見せるのは、

蒼井の前だけだってことに、当の本人はちっとも気付いてねーから。
……ま、フラれた男の意地として、絶対教えてやんないけどね。

第７７話　遠足６～男の意地～（後書き）

遠足編、終了しました！
いやー、結構長く続いた遠足編……いろいろなエピソードがありましたねー。
第一目標であった、沙彩と大翔のラブシーン（？）もしっかり書けた（だろう）から、結構自分の中でも達成感があります。
後半の大翔＆唯の絡みは、やっぱ頭の中に劇画みたいなのが浮かんできます……
２人とも、なかなかの美少年のはずなのに、なぜ……ｏｒｚ

第78話　パリス・ボルドレン

『まもなく、2番乗り場に○○列車が到着します。危険ですから、白線の内側まで……』

私たちが2番乗り場に着くと同時に、乗る予定の電車が到着した。

今日は肌寒いから、暖房の真下に座った。

「いやー、一昨日の、ほんっと奇妙な遠足だったよねー」

「奇妙っていうか……ド奇妙だった。あれ以上の遠足、これから後の人生一度もないと思う」

「だよね。あれ以上があったらマジ怖（マジであった怖い話）に投稿できるよ」

そんな話を、蒼井君とする。

話している時の笑顔、声……ああ、やっぱ普通がいちばんだな、って思える。

それくらい、蒼井君といるのがいつの間にか普通になっていた。

……と思ったのも束の間。

「あ、蒼井君だ！！」

「帰りの電車同じだったんだー！ラッキー！」

「隣にいるの、3年の杉下って先輩だよね？彼女かな？」

「えー？私、ただの先輩後輩って聞いてたけど！」

……そうだった。この少年、物凄くモテるんだった。そして私は杉下じゃない。杉浦だ。

体育祭の時の囲まれようといい、遠足の班編成の時といい……

大抵のドラマとか少女漫画とかって……学校でモテる方の男子と付き合ったら、絶対ファンの女子からの仕打ちを受ける仕組みになっている。

でも、私の場合……そうじゃないんだよな。直接的にも間接的にも、何もされてない……

……もしや、付き合ってる風に見えないとか！？（そうとしか考え

られない）
でも、付き合ってる風って、どんなもんなんだろ……
「杉浦先輩？大丈夫？結構考え込んでるっぽいけど……恐怖山でまだ何かあった？」
「えっ？あ、いや、ないよ、全然！マジ怖に投稿して採用されたらいくらもらえんのかなーって考えてたの！」
咄嗟の言い訳に、蒼井君は笑った。
……改めて考えよう。付き合ってる風って、どんな風だ？
辺りを見回してみる。ほとんどが、女の子2人から3人組。
そんな中、男女の2人組もちらほらいた。
でも、みんながみんな恋人同士ではなく……
「今日の夕食当番、にーちゃんだからね。ちゃんと準備できてる？」
「マジ！？うっわ忘れてた！ちょ、帰りにスーパー寄ろうぜ！」
両親が共働きの家庭らしき兄妹。
「岸田君、新入生の歓迎パンフの草案できたらこっち回してね。チェックするから」
「オッケー」
生徒会の役員同士らしき男女。
「ボス、あのエリアは満員らしいでっせ。他のエリアにしましょーや」（エリア＝ラーメン屋）
「そーね。私は待つのが死ぬほど嫌いだから」
グラサンの女と、その手下らしき男。
もちろん、恋人同士の人もいた。
「かっちゃん、ここの問題教えてー！」
「しょーがねーなー。教えても解けなかったらチューするぞ？」
ザ・バカップルの江藤君と美加子。ちなみに2人とも私の同級生。
「ねーねー、安田君の趣味ってなーに？」
「趣味？んーと……やっぱスケボーだな。俺の家、庭が広いから乗り放題で楽しいんだ。田村は？」
まだ趣味を教え合う関係、といった初々しい1年生カップル。

てか、入学式終わったばっかなのにもう付き合ったんかい。
「沙弓、リョー君大好きーっ！」
「ちょっ、バカ！くっつくな！」
2年生イチ、ツンデレだという噂の涼一君と1年のクリオネ女子との噂の後藤沙弓ちゃん。
ちなみにクリオネ女子とは、普段大人しいが好きな男に対してはどんどんアタックしていく女子のことだ。
ほんっと、いろんな形があるな。男女の関係って。
私たちの場合は……どんなだろうな。
ふとそんなことを考えると……目に留まった、車内広告。
「あ、パリス・ポルドレンの第3作、来週公開なんだ」
「え、マジ？俺、結構このシリーズ好き」
パリス・ポルドレンとは、簡単に言うとパリス・ポルドレンっていう男の人が難事件を次々と解決していくハリウッド映画。
あの推理漫画「名探偵コ○ン」のハリウッド版、といったところだ。
まぁ、主人公は普通の男の人なんだけど。
「第2作見てないんだよなぁ……去年公開されたやつ」
私立大への進学を認めてくれなくて、スネてた時期だ。去年の今頃、といえば。
レンタルＤＶＤ屋に借りに行っても、なかなか在庫がなくって……
「あ、俺、2作目持ってるけど……明日土曜だし、見に来る？」
「え！？いーの？行く行く！」
即座にそうＯＫして、テンションが上がり……重大なことに気づいた。
「……確か、蒼井君のご両親ってジャーナリスト……だったよね？」
「うん。修二さんがパリス・ポルドレン役のロナウド・ラドクリフさんと懇意らしくってさ。ＤＶＤも、ちょっとしたコネで手に入れたらしくって。1作目を何となく見たら、メッチャはまった」
なるほど。修二さん……たぶん、お父さんから2作目をもらったんだな。

ジャーナリストって、何かとお得だよな……じゃなくって！
「ジャーナリストってことは、ほとんど休みってないよね？」
「うん、まぁそっかな」
「じゃあ、明日ってご両親いないの？」
「そーだけど？」
当たり前じゃん、みたいな表情をする蒼井君。
……この人……下心っつーのが微塵も感じられない。
妙にテンパった私が次第にアホらしくなり……
「……んじゃあ、明日の午後ぐらいに、私が蒼井君家行って……」
「あれ？俺ん家分かる？」
……分かりません。
結局、蒼井君が私の家まで迎えに来る、ってことで合点がいった。

『えー！？うそーっ！？ちょっ、新展開じゃんっ！』
「新展開って……」
その晩。夏姫に電話し、明日のことを話した。
『だって、親がいない家にいい年した男女２人が同じ部屋にいる……ってことになるんだよ！？完全なる新展開じゃん！』
「それがさ……蒼井君ってば、まるで男友達と遊ぶ約束してるみたいだったの」
『というと？』
一連の会話を夏姫に話した。
「男子って、やっぱり実際そういうもんなのかな？」
『いやー……完全なる草食系男子だね、そりゃ』
……ですよね。
『でも、大翔君の中にもそーゆー感情が隠れてる可能性もあるじゃん！当日になってみないと分かんないよ！』
「そっか……って、別に何も期待してるんじゃないんだけどね。ただ、見逃した分のパリス・ポルドレンを観るために……」
『フフッ。さーやかわいー！』

「おいっ！」
『んじゃ、今日はもう寝んしゃい。夜更かししてるとお肌に悪いぞー？』
「分かってるよ。んじゃ、おやすみ」
『おやすみーん』
終話ボタンを押して、ベッドの上に仰向けに寝転がった。
やっぱ私……女子として見られてないのかな。やっぱ今でも“尊敬してる先輩”なのかな。
……何時間もあれこれ考えてるうちに、いつの間にか眠ってしまった。

次の日の朝。
「んじゃ沙彩、仕事行ってくるわね」
「んー。行ってらっしゃーい……あ、そうだ。お母さん、今日何時に帰ってくる？」
「そーねぇ……現場捜査と事情徴収が重なっているから、結構遅くなるかも」
「そんじゃ、鍵置いてって。私今日出かけるから」
「あら。どこに？」
……当然の質問。
「……な、夏姫たちと受験勉強！夏姫ん家で！」
「ふーん。まぁいいわ。気をつけなさいよ。鍵、靴箱の上に置いとくから」
お母さんは意味深な笑みを浮かべ、家を出た。
やっぱ、見透かされてる気がする……

午前中。カットとカラーリングのために美容院へ行った。
「沙彩ちゃん、今日はどんな風に切る？思い切ってショートにしちゃう？？それともいつもの？？」
小学生の頃からずーっとカットしてもらっている、中須賀里穂（ナカスガリホ）ちゃ

ん。３５歳。
いつしか、年齢を気にしない友達みたいになっている。
そりゃそうだよね。２０代前半の里穂ちゃんがこの美容院に入って、最初にカットしたのが私。
最初はあまりにもヘタで……左右の長さが揃ってないだの、切ってないところがあるだの、と小学生のクセしてよく文句つけてたな。
でも、里穂ちゃんはその文句につっかかることなく、素直に受け入れてくれて……
約１０年経った今は、結婚もして子供もいて仕事もうまくいっていて……何もかも、上手くいっている女性になってる気がする。
「んーと……とりあえず、毛先を揃えるぐらいに……あと、色もちょっと落ち着かせてダークブラウン的に」
「オッケー！んじゃ、シャンプーするからおいで！」
「はいはい」
……まぁ、少々テンションが高いのが難点だけど。

「沙彩ちゃんさー」
「へ？」
「今日なんかあるっしょ？？」
「……はい？」
シャンプーをしている間、里穂ちゃんが聞いてくる。
里穂ちゃんはエステシャンの資格も持っているらしく、里穂ちゃんのゴッドハンドを求めシャンプーだけをしに来る人も多いらしい。
まぁ、そんな人たちの気持ちも分かるなぁ。こう、痛気持ちいいっていうか、なんていうか。
「頭皮が強張ってるよー。よっぽど緊張することでもあんのー？」
「いでで っ」
語尾をのばすごとに、力をこめられ……“痛気持ちいい”を通り越して“痛い”のラインに入ってしまった……
「……に加え、毛先を揃えるぐらいっていうイメージを変えたくな

いという保守的な心理、ダークブラウンっていう明るすぎず暗すぎない高感度大な髪色……もしかして、バイトの面接？それとも彼氏とデート！？」

「ハ、ハハハハ……」

ほんっと、この人は、探偵にもなれるんじゃないだろうか。

シャンプーが終わり、「よーし！」という掛け声とともに顔にかかっていた布がはがされ、視界が一気に１００種ものシャンプーで埋めつくされた。

「服のイメージに合う、とびっっきり可愛い髪形にしてあげるっ！沙彩ちゃんのことだから、家に帰って着替える……なんてことないっしょ？」

「よーするに、ズボラってこと？」

「んー、どれがいっかなぁー！」

……無視ですか。

ようやく、カラーリングとカットとアレンジが終わった。

……って気づいたのは、里穂ちゃんのドデカい目覚まし声のおかげで。

「沙彩ちゃん、起きて起きてっっっ！！！」

「んー……」

雑誌を読みながら、いつのまにか眠っちゃっていた。

そりゃしゃーないか……前の晩、ほとんど寝れてないんだもん。

「ふふっ。よっぽど緊張してるのね！沙彩ちゃん！」

「え？」

「もうぐっすり眠ってたよ！頭起こしてもちーっとも気づかないの！」

うそ、私、どんだけ……ハハ。

それより、髪はどうなってんだろう。金髪でクルクルになってなきゃいいけど……

鏡を見た、その瞬間……
「うわぁ……」
思わず、感嘆の声が出る。
目の前にいる私の髪は、里穂ちゃんの手によって上品なハーフアップにされていた。
「どう？春っぽいフワフワ感を出しつつ、沙彩ちゃんらしいキリッとした感じも出してみたんだけど……」
「……すっごい気に入った！ねぇねぇ、どうやってやるの？」

それから、今の髪型の作り方や他の候補も見せてもらい、マネキンとかを使って1時間ほどレクチャーしてもらった。
「あ、そうだ。沙彩ちゃん、時間大丈夫なの？もう1時になっちゃうよ？」
「えっ！？本当！？」
気づけば……午後1時ちょっと前。
やっば……1時に蒼井君が家に来るんだった！

お金を払い、（髪型が崩れない程度で）急いで家路を辿る。
すると……
「あっ！」
家の近くの塀にもたれかかっている、見覚えがあるシルエットが見えた。
どんどん近づくごとに、そのシルエットは……好きな人の姿として、はっきり見える。
「あ、杉浦先輩！」
蒼井君も私に気づき、走ってこっちに来る。
部活があったのか、学校のジャージ姿……でも、ダサさのカケラもない。見事に着こなしてる感じ。
「ごめんね、午前中美容院行ってて……話し込んでたら、もう1時前で……」

「んなこといーって。俺、全然気にしてないし！」
ほとんどの女の子が惚れてしまうような笑顔でそう言う蒼井君。
……なんか、妙に動悸が早くなる。
「じゃ、行こっか」
「あ、ちょっと待って！その前に……」
やっぱ、お家にお邪魔するんだから、何か持って行かなきゃヤバいっしょ。女子として。
咄嗟にそう思い起こし、蒼井君と一緒に東野通りに来た。
えっと、確か前お母さんと来たときに……ミニデパート的な建物の1階のお店に、すっごいおいしいクッキーあったよね。うん。そこで1箱ぐらい買っちゃおう。

「別に家誰もいないんだし、そんな気遣わなくっても……」
じーっとクッキーの箱を眺める私の背後で、蒼井君がそう言う。
その言い方は本当に下心の微塵も感じられず……
いいことか悪いことなのか、分かんないなぁ。
「ダメなの！親しき仲にも礼儀あり、って言うじゃん？」
「そう？」
「そう！キョンだって、場所構わず騒ぎまくるじゃん！」
電車の中といい、学校の中といい……
……そういえば、海宮海から学校へ戻る時は、妙に大人しかったな。
なんでだろ。

クッキー1箱を買って、そのお店から出て……3階のレストランへ。
理由は、何を隠そう……昼食だ。
お店から出て、蒼井君が急に「レストランか何か行かない？」って言い出して……
私はグラタンとサラダのセット、蒼井君は定食を頼んだ。
このレストランの定食は結構ボリュームがあって……さすが部活少年。

「いやー、蒼井君に言われるまで昼食抜きだってこと気づかなかった」
蒼井君は、何やらキョロキョロしている。
「どしたの？」
「え？」
我に返ったように、私の方を向く蒼井君。
「あ、分かった！可愛い女の子とかいたんでしょ？」
「何言ってんの。違うよ」
そう言ってクスッと笑う。
……そして私はまた、ドキッてなる。
本当……何人もの人が、この笑顔に惚れこんだのか……全く、見当がつかない。
「なんか、コソコソ言われてる気がして……さ」
「コソコソ？」
耳を澄まして聞いてみると……
「あの６番テーブルの海宮高のジャージ着てる男の子、超カッコよくない！？」
「声かけちゃおっか！」
「うわ、なんだあの男……超イケメンなんだけど」
「モデルなんじゃね？ジャージ着てるけど」
……男女構わず、キャーキャー言われているだけだという。
当の本人は……
「ジャージ？海宮高校ってそんなに珍しいもんなのかな」
ジャージ、という単語しか聞き取っていなかった。
「ま、まぁ、放っとこ！」
「そーだね」
それから、色んな話をした。
学校のこと、カイジ君たちのこと。そして……咲良ちゃんのことも、少し。
「西院さん、あれから男子を結構とっかえひっかえしてるっぽい。

もう２０人ぐらい余裕で越えたとか。まぁ、西院さんと同じクラスのシゲオが言ってたんだけど」
蒼井君が咲良ちゃんのことを“西院さん”って呼ぶのも少々気になったけど……
何より気になったのは、咲良ちゃんのこと。
根は絶対いい子なのに、本当に遊び人になっちゃったのかな……？
「そういえば、美容院行ったって言ったよね？」
「あ、うん。カラーリングと、ちょっとカットして、アレンジしてもらったんだ」
「すっごい似合ってるよ、その髪型。いつもストレートだから、ちょっとイメージ変わった」
「……ありがと」
去年……笑い合っていた蒼井君と咲良ちゃん。
今、笑い合っている蒼井君と私。
咲良ちゃんから、大切な人を奪ってしまって……きっと、咲良ちゃんは私を嫌っているだろうな。
そんな私に……いろいろ詮索する資格なんて、ないよね。
それでも、今の瞬間が……凄く、幸せ。

レストランを出て、いよいよ蒼井君の家へ。
東野通りを、さらに奥へ奥へ進み、出口を出たところよりさらに奥へ進むと……
「着いたよ」
「うわっ！」
曲がり角を曲がった直後、どどんと“蒼井”と筆文字で書かれた表札がかかってある……超日本風の建物の門が目の前に現れた。
ていうか、この規模だと……ここに辿りつくまでに何メートルも続いた塀の向こう側も、蒼井家の敷地？
「あれ？セキュリティロック解除されてる……誤作動でも起きたか？」

「セキュリティロック？」
「この門、玄関が施錠されてると俺か修二さんか母さんか亜珠華の姿がこのカメラで認識されないと開かない仕組みになってんだ」
「へ、へぇ……すごいね……」
……超日本風かつ、近代的。

門をくぐり、数メートル進んで玄関へ。
その間も……めっちゃ綺麗な庭が。
春だからか、花は咲き誇り、桜の木まである。
池もあり、鯉が泳いでいて……豊かな緑の中には、木製のベンチとテーブル。
「ただいま。誰かいるの？」
でっかい平屋の玄関を開くなり、少々大きめの声で蒼井君はそう誰かに聞く。
……うわっ、家の中に風車がある。なんで？
そんな疑問を、吹っ飛ばすような人物が、家の奥から現れた。

「大翔、お帰りなさい。そちらのお方は？」

……幅広い男性から支持を持つ超美人リポーターの片瀬翔子（カタセショウコ）が、紅色の着物を着こなしてやって来たのだから。

第78話　パリス・ボルドレン（後書き）

約2週間ほったらかしにしてしまい、すみませんでしたm（＿＿）m

サブタイにもなってる、「パリス・ボルドレン」というハリウッド作品は……おおまかにいうと推理もので、私の好きな「ハリー・ポ○ター」を少しもじったものです。

ちなみに「パリス」は「パリス・ヒ○トン」、「ボルドレン」は「ウ○イン・ボルト」からとりました。

さて、このデート編（？）は、2人の雰囲気を描くと同時に、大翔の家族のことや大翔の過去についても触れていきたいと思います！

第７９話　大翔母

「お友達？」
「あ……っと、海宮高校２年の杉浦沙彩です！」
あまりもの綺麗さに言葉を失って……やっとのことで、自己紹介。
「……間違えた。３年……です」
しかもマヌケなミスつきの……
「杉浦……沙彩、さん……」
私の名前を復唱する片瀬翔子……
うわぁ、なんだか不思議な感じ……まるで、テレビから出てきた人と話しているみたい。
「母さん、出張は？」
「予定よりすごく早く終わったの。東京に戻る前に家に寄り帰ったら、大翔も誰もいなくて……」
へぇ。やっぱりリポーターって遠いところまで出張とか行くんだ……って……
「え！？蒼井君のお母さん……ですか？」
「ええ、そうよ。蒼井翔子。よろしくね……あ、片瀬翔子と言えば分かるかしら」
こ、子持ち（しかも高校生）には到底見えない……
そもそも結婚してたなんて知らなかった。ずーっとアラサーの素敵未婚女性の代表格だと……
「大翔、お風呂にでも入って着替えてらっしゃい。私、杉浦さんともっとお話がしたいわ」
「ああ、うん。余計なこと言わないでよ？」
「まぁ。人聞きの悪いこと」
蒼井君は私に軽く「んじゃ」と言うと、平屋の奥に進み、右へ曲がって行った。

片瀬翔子……いや、蒼井翔子さんに連れられるまま、応接間的な広い空間に入った。
「大翔、学校ではどう？」
「え？」
「あの子、学校でのこととかほんっと言わないものだから、気になっちゃって……」
ほこほこと湯気が立っている日本茶を出され、軽く会釈した。
そして、目の前に正座する蒼井翔子さん。
正座に慣れないものだから、しびれが切れる寸前の私……
にしても……本当、年齢を感じさせない綺麗な顔立ち。
色白で、目が大きくて、まつ毛が長くて、鼻が高くて顔が小さくて……
「学年が違うから、よく分からないですけど……いろいろな人から信頼される人だと思います。学級委員してたみたいなので……」
「まぁ、大翔が学級委員？　へぇ……人ってどうなるものか分からないわねぇ」
……きっと、この人は知っているのだろう。
蒼井君が事故に遭う前……すごく荒れていたこと。
もちろん、本人にはそう聞かないし、桃花が言ってたことだから確証もないんだけど……
……あ、そうだ。
「あの、お菓子を持ってきたのですが……よかったら、召し上がってください」
と言い、さっき買ったクッキーを渡した。
「あらあら！　ありがとうね！」
「しょ、翔子さん、和服着ていらっしゃるし、お家もこんな立派な日本邸宅なので……少し趣味じゃないかもしれませんが……」
「あっ、このクッキー、東野通りにあるデパートの１階の所のでしょう？　私、あそこのお菓子大好きなの！　すっごく嬉しいわ」
子供のようにはしゃぐ翔子さん。

よかった。翔子さん、って呼んだのを咎められなくて……

「この家はね、前の主人の趣味の塊なの。あの人、すごく歴史に興味を持ってらしたから……当の本人は、医者でしたけれど」

い、医者って……

趣味を形にできるほどの財産があるはずだ。

でも、“前の主人”って……

「い、今のご主人は……もしかして、修二さん、という方ですか？」

「ええ、そうよ。私と同じリポーターをしているの」

……門の前で、蒼井君が言っていた“修二さん”という名前。

身内のはずなのに、さん付けっておかしいな……と思ったら、そういう理由だったんだ。

「大翔は前の主人にそっくりなもので……今年で17になるんですけど、ますます前の主人そっくりになってしまって」

……そう言う翔子さんの顔は、どこか暗かった。

翔子さんは何かに気づいたのか……「でも、大翔と前の主人の性格は真逆で、それだけが救いなのですよ」と付け加えた。

……やっぱり、浮気性で飲んだくれ……だったのか？

「そして、嗜好も瓜二つ……あの子も、歴史に興味があるんですよ。学校では理系を選択したと言っていたのに」

「歴史？」

「ええ。もし機会があれば、あの子のＤＶＤデッキをご覧になってみて。歴史系のものがほとんどなんですの」

へぇ、そうだったのか……新しい発見。

「今時の男子高校生のＤＶＤデッキ……といえば、破廉恥なものの1つや2つあればいいものを……」

「は、はれ？」

「前にこの家に帰ってきた時、大翔の部屋に入ったら……部屋の隅にそのような類のＤＶＤが置いてあって。「あなたもやっと、このようなものを見るようになったのね」って言ったらあの子、「ああ、

それ、カイジが忘れてった」って言って……その時に熟読していた雑誌を覗き見してみたら、題名何だったと思います？“週間歴史探索”なんですよ。全く、授業で習ってさえいればいいものを……」

「はぁ……」

ぶつぶつと、まるで愚痴のように語りだした翔子さん……

「あとでそのＤＶＤを取りに来たカイジという名前の男の子に話を聞いてみると……「大翔のやつ、せっかくシゲオとユウヤで３人こぞって鑑賞会開いたっていうのに、１人だけ黙々と雑誌読んでるんですよ。週間歴史なんとか、とか、メンズなんとか、っていうファッション雑誌とか。挙句の果てに、眠いって言って寝る始末。あいつの頭、事故でいろんなところがおかしくなったんじゃないんですかねー」ですって。本当、ＣＴ検査のやり直しを要請したいほど……」

「母さん。俺、余計なこと言うなって言ったよね？たぶん」

見上げると……甚平を着た蒼井君が、翔子さんを見下ろしていた。

お、男の人の甚平姿って……生まれて初めて直（ジカ）で見たんだけど！

「あら。余計なことじゃないわ。ちょっとした情報じゃない」

「それを余計なことだっての」

そんな母子のやりとりが、少し面白く感じだ。

……だって、普段はこんな蒼井君見れないもんね。甚平も含めて。

「それじゃ、私は新幹線の時間があるから出るわね」

翔子さんはいとも簡単に立ち上がると、蒼井君の耳元で何やらつぶやいた。

「ちゃんと避妊すんのよ？」

「……は！？ちょ、何言ってんだアホ！」

「あらやだ。大声出さないでよ。うるさいわ」

な、何を言ったんだ……？

あの蒼井君が“アホ”って……

「じゃあ沙彩ちゃん、ゆっくりしていってね。大翔の部屋にあるテレビ、すごく画質がいいものだからきっと楽しめるわ」

「あ、はい！お仕事、頑張ってください」
翔子さんはニコッと微笑むと、応接間を後にした。
……い、一気に緊張感が抜けた……
「ハー……やっぱい、超ドキドキしたぁー……あの片瀬翔子さんと話しちゃったよ……軽く３０分ぐらい……」
「そんな緊張する必要ないよ。５０目前のヘンなオバサン相手に」
溜息混じりで言う蒼井君。
「あのねー、蒼井君よー……」
あんな綺麗な４０代、そうそういないってば。
「んじゃ、パリボル（パリス・ボルドレンの略）観よっか」
「うん……いでっ！」
返事したと同時に立ち上がろうとしたけど……足に激痛が！
ああもう……痺れのバカヤロー……
「大丈夫？」
「うん……正座って慣れないからさ……血管参ったみたい」
うっひー、鈍い痛みがジンジンくる……
軽く３０分ぐらい話したってことは、軽く３０分正座していたこと……そりゃあ普通なら痺れる……よね。
「ちょっと体勢変えながら聞いてたら軽くなってたかな……いやでも、そんな余裕なかったし……」
そうブツブツ言ってると……
「うわっ！」
体がふわっと浮いて、膝裏と肋骨あたりに手の感触が……
……これって、“横抱き”ってやつじゃん！
「ちょっ、お、重いっしょ！」
「全然。杉浦先輩、身長のわりに体重なさすぎなんじゃない？」
そう言うと、「動くよー」と言われ、動く景色……
こ、ここここ、怖っっっ！！！高いっ！高すぎっっっ！！！
「し、死ぬかと思った……」

いや、イスに座ってうなだれている人が表紙の本の題名とかじゃなく、本気で。
地上から約１７０センチ越えの世界は、あまりにも私には高すぎた……
本来ならば、ドキドキするシーンだったのかもしれないけど……私にとっては、違う意味のドキドキ……むしろハラハラだった。
「ごめん、ここの家の中、イスとかっていう類の家具がなくて……しんどかったっしょ？」
「う、うん。でも、風情があってすっごく素敵だと思うよ」
「そう？」
一息ついて、部屋の中をぐるっと見渡す。
掛け軸、生け花……桐でできた本棚がいくつかあって、ひとつには教科書類、ひとつには歴史書、ひとつには雑誌類……その他諸々。
窓際に桐ローテーブル、そして座椅子……部屋の隅っこに、和室には若干不釣合いなプラズマテレビやパソコン。
うーん、昔と現代が行き来している間の光景みたい。
「蒼井君って、子供の頃からずーっとこの部屋？」
「うん。ってか全然覚えてないけど……ほら、そこの柱に落書きしてあるっしょ？」
見てみると……確かに、“あおいひろと”と、子供らしいあどけない筆跡が薄っすら残っている。
でも……同じく、薄っすらと残っている……
「なんで蒼井君の字の上に黒いシミがついてるの？」
何かを押し付けたような、黒い跡。
まるで、そのあどけない筆跡を侮辱しているような……
「ああ、これ？日差しとかで焼けたんじゃない？」
蒼井君の手が、その黒いシミに触れる。
甚平の袖口から出た、長い指の大きい手……
……あれ？
何も考えずに、その手をとる。

そして、柱の黒いシミを見て……
「どーした？」
そう言う蒼井君の方を見て、ハッと我に返った。
……近っっっ！！！
「あ、ご、ごめんっ！なんでもない！」
パッと掴んでいた手を離した。
ただの偶然ならいいけど……柱の黒い跡と、蒼井君の手の甲についていた黒い跡。
形、濃さ……そっくりだったんだ。
絶対、何かある。蒼井君の知らない過去の中で……
「変な先輩。……んじゃ、映画観よっか」
クスッと笑うと、蒼井君はリモコンの再生ボタンを押した。

第７９話　大翔母（後書き）

少女漫画の王道シーンでもある“お姫さま抱っこ”さえ、“恐怖”に感じる沙彩ちゃんの感性……うーん、どこまでもズレてるっていうか。

いや、元々沙彩ちゃんは“正統派”として固めていないから、それはそれでいいかと（笑）

さて、大翔の過去もいろいろ判明してきました。

中学時代は荒んでいた、という設定の彼を作り出した家庭環境が明らかに……なるかな？

……こういう予告だと、大体悪いものが浮かんできますね（苦笑）

第８０話　偽りのない本当のこと

「はー、おもしろかったぁ！」
約２時間のパリボル第２作……
最後まで犯人が分かんなくって、まさにハラハラドキドキって感じの２時間だった。
「ってか、蒼井君、この映画観るの２回目ぐらいだよね？つまんなくなかった？」
「いや、これ観るのもう５回目ぐらいかもしんない。何回観ても飽きないって感じ」
「５回も！？じゃあ、パリスが犯人に白状させるきっかけになったセリフって覚えてる？」
「んーと……“Ｗｈｙ　ａｒｅ　ｙｏｕ　ｋｎｏｗ　ａｂｏｕｔ　ｉｔ？（どうしてあなたはそれについて知っているのですか？）”だよね。被害者と犯人だけが知っててそうなのを、犯人じゃないって言い切っていた犯人が知ってたから、それについて言及したんだっけ？」
さらりと答える蒼井君。
しかも正解……心なしか、悔しくなってくる。
「じゃあ、ストーリー最初のセリフは？」
「Ｔｈｅ　ｐｅｏｐｌｅ　ｓａｙ　ｔｈａｔ　Ｉ　ｈａｖｅ　ｂｅｅｎ　ｇｉｖｅｎ　ｂｉｒｔｈ　ｔｏ　ｓｏｌｖｅ　ｅｖｅｒｙ　ｐｒｏｂｌｅｍ.（人々は、私はありとあらゆる問題を解決する為に産まれてきた、と言う。）」
「じゃ、じゃあ、アンドレがギャグを言って、それに対してパリスがとったリアクションは？」
「Ａｎｄｒｅ，　ａｒｅ　ｙｏｕ　ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ？（アンドレ、お前大丈夫か？）……てか、俺からも問題出していい？」
うっ……答えられる自信ない……

一応、「どうぞ」と言ってみた。
「カフェテリアでパリスとキャサリンが交わしていた会話でパリスが１０回目に発した言葉は？」
「分かるかっ！！！」
笑いながらふざけたようにそう言った時、ケータイの着信音が鳴った。
この着信音は……お母さんからだ。
「あ、ちょっとごめん」
「ん、いーよ」
カバンの中からケータイを取り出し、電話に出る。
「もしもし？」
『沙彩、悪いけど今日家帰れないわ。病気で倒れた人の分の仕事がこっちにまわってきちゃって……家であんたを１人にしとくのも物騒だから、夏姫ちゃんの家に泊めてもらいなさい。下着は一応帰れなかったらいけないと思ってあんたのカバンの中に入れておいたけど、服は貸してもらってね』
「……へ？」
『夏姫ちゃんの親御さんにはちゃんと言うからかわってくれる？』
……あ、そっか。お母さんには夏姫の家に行くって言ってたっけ……
「……い、いい！自分でちゃんと言える！」
『そう？』
「それじゃお母さん仕事頑張ってね！こっちのことは心配ないから！じゃっ！」
『ちょっ、沙彩？』
一方的に電話を切った。
「お母さん、何て言ってたの？」
「えと……」
いきなり「泊めて」って言ったら、蒼井君困るよね……プライベートに侵入してきたみたいに思われるかもしんないし……
でも、お母さんの言うこと聞かないで家に帰っても、発覚した時に

相当怒られるだろうし……
かといって野宿も危険だし……
……てか、ちゃんと理由話せば分かってくれる……よね？
そう信じて、口を開いた。
「お母さんの仕事が片付かなくって、今日家に帰れないんだって。だから、泊めてもらいなさい……って言われたんだけど……」
なんとなく、夏姫の家に行くって嘘をついたのは言えなかった。
「そっか。やっぱ刑事さんって大変なんだね、色々と」
「え？えっと……嫌じゃない？泊まらせるの」
「嫌なわけないじゃん。いーよ、全然！」
……これまた、下心がなさそうな笑顔で言うもんだから……必要以上に、ホッとしてしまった。

それからは、テレビを見ることによって時間は流れた。
午後4時5時ぐらいなら、再放送のドラマやバラエティ番組が盛り沢山。
私たちは再放送の“豊島和子の刑事簿”っていうサスペンスドラマを見ながら、「犯人はあの人っぽい」「いや、あの人じゃない？」と話を弾ませていた。
宿泊のことだけど、よくよく考えてみると、ずっと2人っきりってわけじゃないし……
「ねぇねぇ、亜珠華ちゃんっていつ帰ってくるの？保育所にいるんだよね？きっと」
「いや？フランスだよ。ここ1週間ずっと」
……はい？フ、フラ？
「な、何故？」
「だって亜珠華、子役だもん。知らない？」
蒼井君は、ドラマが終わってCMが流れているテレビの電源を落とし、襖（ふすま）に寄りかかる。
私も隣に行って、寄りかかった。

「し、知らない……テレビあんまり見ないし」
「次始まる“冬の恋は雪のように純白”ってドラマで、パリでデザイナーをやってる主人公の娘役で出てるんだけど……」
ふ、冬の恋は雪のように純白？何それドラマ名？
ていうか、子役って……役者じゃん。
「亜珠華ちゃんも翔子さんもいないし、修二さんって人もいないし……ずっと2人？」
「え？……まぁ、そだね」
まるで、「え？当然でしょ」って感じで、さらりと言う……
「蒼井君はさ……」
「ん？」
「……下心とかってないの？」
「下心？」
うーん……と、蒼井君は考えるような顔をする。
それを、私は隣でじっと見る。
一言一句、逃さず聞けるように。
「……あるよ」
「へっ？どんな？」
あまりにも意外な答えだったから、思わず素っ頓狂な声になる。
そんな私の顔を見て蒼井君は微笑むと……私の顎に手を添えて、親指で唇をなぞる。
「今すぐにでもキスしたい……みたいな。もちろん、それ以上も」
……心臓が、今までよりもさらに跳ねる。
だって……蒼井君が、今までみたことない表情で、そんなことを言うから。
目を見開くだけで、何の声も出なかった。
「でも、流石にそれを表に出したら……引くでしょ？いくら俺が男で、そんな感情持つのが普通だったとしても」

……まるで自嘲のような笑みを浮かべた後、そっと蒼井君は手を離す。

私は、まるで反射のようにその手を掴んだ。

「いいよ……引かないよ」

少し驚いたように目を大きくしている蒼井君の目を、しっかり見る。

「だって蒼井君のこと、大好きだもん」

握る手に少し力をこめて、そう言った。

嘘は1つも混じってない、心から本当のこと。

今、相手の目を見て、逸らさずそれをしっかり言えることが……とても、嬉しい。

ゆっくりと、蒼井君の顔が近づく。

その速度に比例するように、私もゆっくりと目を閉じた……

……と、その時……！

「よーっす大翔――――っっっ！！！ってあれ？ここじゃねぇか？」

いきなり入ってきた声に、パッと目を開けて2人してドアの方を見る。

「おわっ！そこにいたかっ！死角で見えなかった……ってか杉浦先輩もいんじゃん！」

……若干……いや、かなりテンション高めの……

「カイジ……」

続々と部屋に入ってきた、1－D四天王のうちの3人の面々。カイジ君、ユウヤ君、シゲオ君。

「大翔、顔赤くない？何かあったのか？」

ユウヤ君が、鋭いところをついてくる。

「いや、別に……ってか、なんでお前ら来たの？」

「約束したじゃーんっ！先週、“また鑑賞会やろーな！”って！」

カイジ君は……もう、満面の笑みだ。

「え……何の？てか言ってたっけ？」

蒼井君の問いに対して、シゲオ君が紙袋らしきものから出したのは……

「親父の部屋からパクってきた。みんなで見よーぜ」

……ザ・エロビデオ。

ってオイオイオイオイ！！！

「私女子！女子なんだけど！！！」

「バカだなー先輩！これは性別の国境を越えるパスポートっすよ！」

うわぁ、カイジ君がキャラ離れした変なこと言ってる！バカとか言われた……

そんなカイジ君の傍ら、蒼井君は何やらタンスをごそごそと漁っていた。

……ま、まさか、そのタンスの奥からまた新しいブツが……！？

「……杉浦先輩、とりあえず服貸すから風呂にでも入ってきて。こいつら、俺がどーにかしとくから」

「え……あ、ありがと……じゃ、じゃあ、貸してもらいます」

手渡されたのは、かなり懐かしい朔良中の体操服。

しまわれてから軽く1年ちょい経つだろうけど、虫食いひとつない。

蒼井君は、何か気づいたように「あっ」と言った。

「風呂の場所分かんないよね？一応案内しとく」

「あ、お願いします……」

「カイジ、ユウヤ、シゲオ。部屋から一歩も出るなよ？」

「へいへーい」

薄暗い廊下。天井の明かりをつけながら、さらに奥へ奥へと進んだ。

「ごめん、なんかこんなことになっちゃって……」

「いや……えっと、なんか楽しそうだね！」

「そう？」

……うわー。意味不明な発言しちゃったよー……

そして、また沈黙。

……そういや私、蒼井君に“大好き”とか言っちゃったんだよなー

……
なんだろ……この時間差をもってやって来る羞恥心は。
何分か後に、浴場へ着いた。
「んじゃ、俺部屋戻るわ」
「あ、うん。ありがと」
蒼井君は踵を返し……立ち止まった。
「一応露天風呂あるけど、使わないで」
「へ？なんで？」
「結構冷えてきたし、誰かに見られたら嫌だから……んじゃっ」
若干足早に去っていく影を見送る。
だ、誰かに見られたら嫌だから、って……あんなに塀あるのに、見られるわけないじゃん。
どんだけ独占欲強いんだろ……
「ふふっ」
……でも、なんでだろう。
そんなのも、たまらなく……愛しい。
ニヤケた顔と声を、脱いだ服にうずめた。

第８０話　偽りのない本当のこと（後書き）

今回は、大翔の下心っていうのを出すのに苦労しました（・―・；）
いきなり牙をむかせたらイメージ下がるし、かといって焦らすのもらしくないし……
やっぱストレートに言うのが１番合う気がして、実行してみました！沙彩ちゃんもさぞかしドキドキしたことでしょう。（笑）
さて、次回でデート編完結！ってとこですね。
次回更新は、土日あたりになると思います。

第81話　安心

『今すぐにでもキスしたい……みたいな。もちろん、それ以上も』

……なんであんなこと言ったんだろ。

「おっ！大翔！早かったな！」

「……ああ」

部屋に戻ってきた俺に声をかけるカイジ。

テレビから聞こえてくる女の声らしきもの……若干ウルサいなぁと思いつつ、ベッドに寝転んだ。

「なんかあったんか？」

ユウヤが、そんな俺の様子を心配そうに覗き込んできた。

……この際、3人が揃ったから本名でも紹介するとしよう。

「杉浦先輩とケンカでもしたん？」

若干方言が混じった喋り方をする、比較的落ち着いた感じのユウヤ。

本名、瀬野裕也（セノユウヤ）。

「大翔、ユウヤ！お前らも見ようぜ！今すっげぇいいところ！」

いつもと比べて今日はテンションが高い……普段は爽やか系なカイジ。本名、小西海嗣（コニシカイジ）。

ちなみにカイジは酸っぱいものを食べたり飲んだりするとテンションが上がる……つまり、酔いに等しい状態になるという。

そんな説を立てたのは、祖父母の家がレモン農家で親が（何故か）プロテニスプレーヤーのシゲオ。本名、寺田重男（テラダシゲオ）。

親の影響からか、昔からテニスをやってたらしく、とにかく肌の色が黒い。

この3人の出身は全員この市で同じ町。ちなみに杉浦先輩もそうだ。

当然、保育園に通っていた頃からずっと一緒らしいんだけど……思い出せない。事故で、過去のことは全部忘れたから。

事故に遭って、もう1年が経つ。脳波にも異常はみられない。

……もう、俺の脳は「こいつには過去はない」とでも断定しているかのように、何も思い出してもらえない。
「大翔？どーした？」
「え……あ、悪い。ちょっとボーッとしてた」
「４月ボケか？まぁ大翔は大抵ボケてるよな」
珍しくケラケラと笑うユウヤは、人間観察がうまいヤツ。
そして、どこか他人とはズレている。
「……俺、おかしーかもしんない」
「なんで？」
さっきの一連の出来事を話しているうちに、カイジとシゲオも加わっていた。

「へーえ。だから大翔、顔赤かったんだ？」
「ほんっとお前、杉浦先輩以外興味ナイよなぁ！超惚れてんじゃん！てか、俺邪魔した系じゃない？」
「今気づいたのか……」
話が終わって、俺とユウヤとカイジでそんなことを言ってると、シゲオが咳払いをした。
「大翔、大丈夫だ。お前はおかしくない。つか、むしろよく我慢した方だと思うぞ！」
俺の両肩に手をつき、そう断言する。
「我慢？」
「俺だったら、彼女に「下心あるの？」って聞かれたら、超むき出しで迫ってるよ今頃！」
「おいおい……」
ちなみに、ユウヤ以外は全員彼女持ち。
カイジは同級生の李央さんという人で、シゲオが大学３年生の美香子さん……だったっけ。
ユウヤは、かなりモテる……けど、クールすぎて告白されたことはないらしい。

ユウヤ自身、好きな人はいないって言ってた。
「あ、そういや俺、彼女できた」
……って思い返した途端、まさかの彼女できた発言。
「マジッ!?何年生!?何組!?何カップ!?」
真っ先に飛びついたのはカイジだった。
「何年生……っていうよりも、朔中の3年生。俺が中学の時入ってた部活の後輩」
「おわっ!後輩じゃん!どっちから!?」
「こっちからだけど……」
「あれ?ユウヤ、好きな人いないんじゃなかったっけ?」
俺がそう咄嗟に聞く。
もう、これはガールズトークならぬボーイズトークだ……

――――……

風呂から出て着替え、長い長い廊下を渡って部屋に戻ると……
「うわっ!どうしたの、みんな一点に集まって……」
ベッドの中央に、4人が集まっていた。
……男子高校生4人を乗せたベッドは、私には悲鳴をあげてそうに見える。
「あ、今、ユウヤの彼女について聞いてるとこなんスよ!」
「ユ、ユウヤ君の彼女?」
そんなこと(失礼。)で、そんな犇(ひし)めき合う必要あんのか……?
うーん、よく分からない。男子の行動。
床には、散らばったビデオとケース……
一応片付けてあげよう、とそれを取った瞬間、カイジ君が「あ、いーですよ!片付けなくって!」と止めに入った。
「え?なんで?」
そう聞くと……
「また後で見ますから!」

カイジ君は、ウインクしながらそう答えた。
「や、やめてくれ……」
溜息をつきながらそう言って、タオルで髪の水気をゴシゴシ拭う。
「……よし。そんじゃ、今日は俺が何か作ろっと」
「え？何を？」
蒼井君がいきなり立ち上がったから、私はそう聞いた。
「晩ご飯。もうそんぐらいの時間じゃん？」
「あ、そっか」
忘れてた、ご飯の存在……
「おっ！今日は大翔作ってくれんのか！楽しみー」
「コイツの作る料理、めっちゃうまいんですよ先輩！」
「そうなんだ。てか蒼井君、私も手伝うよ」
「マジで？ありがと！」
「カイジの料理は食えたもんじゃないけど……」
「おいユウヤ！さらっとショッキングなこと言うんじゃねーっ！」
そんな会話をしながら、４人についていく。

リビング（畳）ダイニング（畳）キッチン（ここだけフローリング）
……俗に言う、ＬＤＫゾーンに着いて……
「相変わらずでっけーテレビ！」
カイジ君は、さっそくリビングで寝転がってくつろぎながらテレビをつける。
映った人気女子アナを見て、「おっ！かわいっ！」と、早速見入っていた。
シゲオ君とユウヤ君もそれに続き……
「んで、何作るの？」
「んー……とりあえず、無難なカレーにしよっか」
確かに、男子が４人もいるし、おかわりがたくさんできるカレーがいちばん無難。
「じゃあ、俺野菜切るから、先輩は米を冷蔵庫から出して温めてく

れない？レンジ、そこだから」
「オッケー」
冷蔵庫からラップで包まれたご飯を出して、数分温めて、５つのお皿につぎわけた。
……そんな数分の間に、蒼井君はもう野菜を切り終えていた。
「て、手際いーね……」
「１０年も家事してたらこんぐらい普通だよ。保育園卒業するまでは、家政婦さんが家事してくれてたけど……」
「ってことは、小学生からずっと？」
「まぁ、そういうことになるかな」
……それだったら、私の方がよっぽど家事力低いじゃん……なんか悔しい。
それでいて、学年トップだから尚更悔しく感じる。
「うおーっっっ！！！片瀬翔子！おい大翔！片瀬翔子出てるぞ！！！」
いきなりカイジ君が大声を出したから、一瞬ビクッてなった。
「はいはい。そーすか」
「マジ美人！俺のねーちゃんもこんぐらい美人だったらいーのに！」
「なー。自慢できるのになー」
「ていうか、なんでこんなに美人なのに結婚しねーんだろ？恋愛スクープとかもねーよな？」
様々な声が聞こえてくる。
「しょ……翔子さんがお母さんだってこと、言ってないの？」
「……言ったら最後、ずっと入り浸るだろ？あいつらのことだから……」
「そっか……」
その状況、安易に想像できる。
きっと、そのことを知った男子全員が入り浸るようになるだろう。
「てか、ほんとごめん。カイジらが来る前、あんな変なこと言って……」

野菜の灰汁（アク）を取りながら、蒼井君が言った。
私は、小さく首を横に振る。
「むしろ、なんか安心したよ」
「安心？」
「蒼井君は、ずっと……カッコよくて優しくて、みんなの王子様的な存在で……なんか、遠く感じるような時が多かったから。今思ったら、普通の男子な面もあるってことだから、謝ることないよ」
脳裏には、周りの女の子から黄色い歓声がおこる、蒼井君と誰かの１ｏｎ１や、歩く度に振り返る人の姿が浮かぶ。
あんな表情を見せる相手が、私だけ……ってことに、なんか、安心すら感じた。
そんなことを、風呂の中で回想してみて、思ったんだ。
……蒼井君は、ずっと黙ってこっちを見ている。
「えっと……あ、コップ並べるね！」
沈黙に耐えかねて、棚の中にあったコップを５個取り出そうとした。
その時……

「ありがと、沙彩」

背後から、そう聞こえた。
え……名前？
「なんか名前で呼びたくなった。……嫌じゃない？」
「えと……い、嫌じゃない……うん」
自分自身を納得するように、頷いた。
「よしっ、完成」
そう言うと蒼井君は私の横をすり抜け、リビングに向かって言った。
「おーい、メシできたぞー！」
「おっ！カレーか。うまそー」
真っ先にやって来たのは、やはりカイジ君。
その後に、シゲオ君、ユウヤ君と続いた。

なんか、カイジ君↓シゲオ君↓ユウヤ君って順番が多いなぁ、心なしか。

それから、カレーを食べ、テレビを見て笑って……

「やっぱあっちゃんがいちばん可愛いって！不滅のリーダー！」

「俺、こじはる派。彼女に似てるし」

「たかみなっしょ！あの笑顔は神だし」

「私、ともちん派なんだけど……」

「つか誰？その人たち」

いつのまにか、みんなジャージで音楽番組に出ているＡＫＢ４８メンバーの中で誰がいちばん可愛いかについての会議が始まっていた。

そうして、夜は更けていく……

第８１話　安心（後書き）

さて、デート編（途中から何話ぶりかの四天王&沙彩の絡み編）終了！

次話からは、えーと……？（ホニャララ）編です（´∀`＊）

なんじゃそりゃ！というツッコミはさておき（笑）

クリスマス編で、最終回まで一気に引っ張ると言いましたが……すみません。あと２０話ぐらい引っ張りそうです。（－｜－；）

どこまで書くか、で大きく変わるんですが……

まぁとりあえず、これからちょっとシリアスめにしていって、最後でドーンとハッピーエンドにしたいという希望を持ってる作者ｃｏｙｕｋｉです（・ｖ・＊）

第８２話　クラスマッチ１

いろいろなことがあった、初の蒼井家訪問から数日後。
遠足の盛り上がりの余韻は消えて、また元のような毎日が始まった。
電車の中で転寝（うたたね）して、駅に着いたら電車を降りて、定期を通し、チャリ置き場に向かう。
「眠い……」
転寝のおかげか、まだ眠い目をこすっていると……
誰かが、私に追突した！
そして、首にまわる腕！
「うわっ！」
背後から抱き締められたと認識して咄嗟に、踵落としの体勢に入る。
が、視界に僅かに入るサラサラの黒髪が、私がしようとした攻撃（カカトオトシ）を阻んだ。
「びっくりした？」
「……蒼井さん……」
腕はほどかれ、私の左肩に手をつきながら隣に立つ……蒼井君。
あまりにびっくりしたから、さん付けになってしまった。
「おはよっ」
「おはよう……ってか、もう少しで踵落としするとこだったよ！多分あのまま攻撃してたら中足骨折れてたよ……」
「ごめんごめん。でも、眠気吹っ飛んだでしょ？」
「まぁそりゃそうだけどさー……」
左肩に置かれた手の温もりが消えた。
思いっきり伸びをして、再度太陽の光を浴びる。
「そういえば、沙彩先輩、クラスマッチの競技何にした？」
あの日、１回呼び捨てで呼んだ蒼井君。
その後、やっぱ照れくさいってことで、沙彩先輩と呼ぶことにしたっぽい。

「バスケだよ。蒼井君は？」
「俺はサッカー。バスケは部活でやってるから……って、知ってるっけ？」
……って聞く、蒼井君の今更感に、自然と笑みがこぼれる。
クラスマッチ……来週行われるやつ。男女ともに、バスケ、バレー、サッカーから1種目選ぶ。
「2年のクラスマッチは午前の後半だよね？応援行っていい？」
「もちろん！てか、来てもらわないと困る」
「困るって……」
今度は、照れ笑い。
……何年か前まで、笑いもさえしなかったのに……今じゃ、こんなに笑いのバリエーションが増えてるなんて、信じられない。
本当、蒼井君って凄いな。私でさえ知らないことを、どんどん引き出してくる。
「あら、沙彩ちゃんじゃない」
前方からやって来た、つい最近まで知っていた人物に声をかけられた。
「あ、部長！久しぶりです！大学に行く途中ですか？」
「そうよ。ていうか、私、もう部長じゃないわよ～沙彩ちゃん」
「あ、そっか……なんか、先輩＝部長ってのがなかなか抜け切れなくて……」
部長……いや、先輩はふふっと笑った。
「あら、沙彩ちゃんの横にいる男の子は誰？彼氏？」
「蒼井大翔です。初めまして」
私が紹介する前に、蒼井君が自己紹介をする。
「そう。ふふっ、仲良さそうで何よりだわ」
なんだか、さっきとは違うような笑い方……
……笑い方のバリエーションの一部かな？
「それじゃ、私は駅に行くわね」
「あ、はい。さようなら」

ペコッと会釈して、先輩と別れた。
数歩歩いて、蒼井君が聞いてきた。
「沙彩先輩があんなに尊敬の意を表すあの人って珍しいね」
「それ、ちょっと何気に失礼だよ？まぁ正解だけど……あの人は、私が1年のとき声楽部の部長やってた人だよ。蒼井君とは入れ違いだから、知らないだろうけど……斉藤美希（サイトウミキ）さんって人なんだ」
「え？斉藤……美希？」
蒼井君は、先輩の名前を復唱して立ち止まった。
「ん？どしたの？知り合いだった？」
「あ、いや……なんでもない。行こ行こ」
「……ふーん」
時間がせってきたのもあって、少し駆け足でチャリ置き場に向かった。

学校に着くと、自転車置き場に自転車を置き、校舎に入る。
文系・理系の分かれ目となる階段の踊り場まで来た。
「蒼井君、今日部活あるの？」
「うん。大会も近いし」
「そっか……」
2年生レギュラーとして活躍する、次期キャプテン候補。
もちろん、サボるのは厳禁らしい。
……私がバスケ部に入っていたら、練習後にも一緒に帰れたはずなのになぁ。
「どーしたの？」
「いや……蒼井君カッコいいから、私がいない時に他の女の子に襲われないか不安……」
そう言うと、蒼井君はハハッと笑った。
「襲われるわけねーじゃん。しかも帰りはカイジとシゲオにユウヤもいるんだし。んじゃっ」
私の頭を軽く撫でると、上の階へと上って行った。

……本当、自覚症状ないんだから。
まぁ、あったとしたら相当なナルシストになっているだろうけど……
「さ――――や！」
後ろからいきなり名前を呼ばれて、慌てて振り向く。
ニヤニヤしている桃花がいた。
「桃花……どしたの？就職クラスって1階じゃなかったっけ？」
「さーやのクラスに遊びに行こうと思ったとこだよー」
と言うと、肘で私の腕をつつく。
「超ラブラブじゃん！頭撫でられたりしてー」
「う、うっさいなぁ……そっちこそどーなのよ」
軽い感じで聞いたけど……桃花の表情は一瞬で曇る。
ヤバ……墓穴ってのを掘ったか？私。
「あ……っと、桃花、去年ぐらいに蒼井君のこと好きだとかなんとか言ってたっけ？」
「え？ああ、あれ～？さーやが大翔君に気を向かせるための嘘だよー」
……はい？
私、結構悩んだ記憶があるんですけど……
「本気にしちゃった系～？桃は年下には興味ないよん！」
へへへッといたずらっぽく笑う。
もう、苦笑いする他にない……

1時限目は、クラスマッチの競技説明。全校生徒が体育館に集う。
「杉浦先輩っ！」
不意に呼びかけられた声の方を見て……足が止まった。
「お久しぶりです」
そう言い、駆け寄ってきた……咲良ちゃん。
多分、蒼井君と付き合い始めてから1回も話したことがない。
相変わらず、リボン美少女っぷりはそのまま。けど……
「なんか……痩せたね」

「そうですか？」
ちょっと、痩せた……というか、やつれたように見える。
ザワザワとしている周り……そのざわめきも、今、私には遠く聞こえる。
……だんだん、居心地が悪いものに感じてきた。
「んじゃ……」
そう言い、足早に去っていこうとした。けど……
「待ってください！」
少々か細くなったような声で、呼び止められる。
「大翔は……ずっとずーっと、杉浦先輩のことを見ていたんです。私と付き合っている時も……中学の時からずっと！……大翔は、覚えてないみたいだけど……でも、私には分かるんです！」
え……中学の時から？
「大翔の、先輩に対する想いだけは今も昔も本物なんです！だから……えっと……」
数人の人が、「なんだコイツら」という風な目つきで見る。
そんなのお構いなしに、咲良ちゃんに近づいた。
「……分かった。ずっと……大切にする」
彼女の顔が、パッと明るくなった。
そして私は悟ったんだ……蒼井君のことを想うのは、咲良ちゃんにとっての幸せだってこと。
それくらい……咲良ちゃんは、蒼井君のことが大好きだってこと。
「よかった……それだけ、どうしても言いたかったんです」
「あ……私からも、ちょっと聞いていい？」
チャイムが鳴り響く。
「斉藤美希、っていう人、知ってる？」
「え……サイトウミキ？その人って……」
一瞬、怪訝な表情をした咲良ちゃん。
その後に発した言葉は……慌てて体育館に入り込む何人もの生徒によってかき消されてしまった。

怪訝そうな表情をした理由は……また今度会った時に聞いてみよう。
入り込む生徒の流れに混じり、私も体育館の中に入った。

もう3回目のクラスマッチ。例年通り、なんの変化もないルールで行われることになる。
でも……私にとっては、忘れられないクラスマッチになろうとは、この時私は到底思えなかったんだ……

第８２話　クラスマッチ１（後書き）

クラスマッチ……私の高校では、悪天候のため決勝目前になって中止になりました（＾＾；）
いろんな意味で思い出深い学校行事です。
さて、そんなクラスマッチ……果たして無事に終わるか否か。
斉藤美希っていう新キャラが、なにやら怪しげなのはお気づきでしょう。
美希の行動や素性本性、すなわち正体についてもご注目ください。

第８３話　クラスマッチ２

「スポーツマンシップに、の、のっとっとり……」
１週間後。クラスマッチが開催された。
「せいせいせい、どうどうどうと、しょ、勝負することを誓いまふ！」
上がり性のくせに、体育委員長をやっている織田。
全く、選手宣誓ぐらい間違えずにちゃんと言おうよ……みんな腹抱えて笑っているよ……

「ハー！おもしろかったぁ！織田君の選手宣誓！」
体育館への移動中、夏姫はまだ笑いながら言った。
「おもしろい通り越して情けないよ全く……」
私のクラスの試合は、初っ端第一試合。
組み合わせ表を見ると……相手はＣ組。理系の進学クラス。昨日のくじ引きで決まったらしい。
「ガリ勉クラスじゃん！余裕余裕！」
河野さんが余裕そうな口振りで言う。
……まぁ、実際にＣ組の８割がメガネ。大体Ｃ組の教室の前を通ると、勉強しているか先生に問題の解き方を個別質問しに行っている。

思った通り、私たちＡ組が勝利を収めた。
試合中、何度も客席を見てみたんだけど……蒼井君の姿はなかった。
まぁ仕方ないか。試合がかぶってたのかもだし、学級委員だから呼び出されたりしたのかもしれないし……
ああかもしれない、こうかもしれない……と考えていた時、ケータイのバイブが鳴った。
体操服のズボンのポケットは結構深いから、ケータイを入れてても試合中に落ちたりはしない。

ベンチに座り、ケータイを開く。
「え……！？」
音声着信、蒼井大翔。
そうディスプレイに映し出されている。
急いでボタンを押した。
「もしもし！？」
『沙彩先輩、左斜め前見てみて』
そう言われ、その方向を見てみる。
……いた！
ボタンを押してケータイを閉じ、ベンチから勢いよく立ち上がった。

「蒼井君、そこにいたんだ！全然気づかなかった！」
「だって客席、ほとんど生徒で埋め尽くされてたし……」
蒼井君が居る場所は、以前私が蒼井君と小城の１ｏｎ１をこっそり覗いていた場所。
柵があり、窓があり……もしボールで窓を割ったとしても、柵のおかげで外の生徒に危害を与えない仕組みになっている。
「しかも、こっち側のゴールはＣ組じゃん？ほとんど人が来ないし、来たとしても沙彩先輩、ずっとＡ組のゴールのところの守備してるじゃん」
「あ、だから気づかなかったのかー」
コンクリートの階段状になっているところに座り、持ってきたスポーツドリンクを飲む。
蒼井君も隣に座った。
「でも凄かったなー。あの超高速ドリブルから、他の追随を許さぬゴール……みたいな。ジャンプ力もズバ抜けてて、ほんと、東野中学校の女ひょ……」
「そのあだ名はやめてー」
軽く笑いながら、その続きを制した。
「でも……高校でもバスケすればよかったな」

「どして？」
「それだったら、蒼井君とこの日だけじゃなくて、いつもこんな風に喋れるんだもん」
お互い体操服で、ほとんど誰も通らない場所で、こんな風に喋れる時間……
普段ないだけ、すごくすごく特別な時間に感じる。
そして、その特別な時間がいつもいつもあればいいな……って、そう思った。
「蒼井君と同級生だったら、今の時期に入部してもレギュラー狙えたかも。今入っても遅いじゃん？スタメンはほぼ確定的だし」
「そうかもね……」
何か言いたげな沈黙が来る。
私も、蒼井君も。
……どこからか、バイブ音みたいなのが聞こえてきた。
「ちょっとごめん」
蒼井君のケータイらしい。
「はい。……ああ、うん。分かった」
ほんの４語で切られた電話。
内容は、クラスマッチの組合せのくじ引きらしい。
「あれ？体育委員がくじ引くんじゃないの？」
「体育委員、季節外れのインフルにかかってて今日休みなんだ。だから第２責任者の学級委員がくじ引くわけ」
「ふーん。大変だねー学級委員」
「いや、こういう時ぐらいしか仕事ないって。……にしても喉渇いたなー。それ少しちょーだい」
「あ、うん。いいよ」
手に持っていたペットボトルを渡す。
慣れたような仕草でキャップを開け、１口飲んだ後キャップを閉めて私の手の中に返した。
「んじゃ、決勝トーナメント頑張って」

「……ん。頑張る」
走っていく彼に、小さく手を振った。
行かないでほしい……そんな、言えない本音がふと浮かんだのは何故だろう。
見送ってく私の耳に、『2年男子体育委員は会議室に集まってください』というアナウンスがかすかに入ってきた。

体育館に再び戻ると、女子体育委員のカナコが私を見つけて言った。
「さーや！決勝トーナメントの組み合わせ、くじ引きした結果シードになったから！A組の子に会ったら伝えとってねーっ！」
「あ、うん。分かった」
いつも元気のいいカナコは、私の返事を聞かないでとっとと走って行った。
シードか。あと1回勝てば優勝じゃん。
「でも、そう上手くいかないもんなんだよなぁ……」
そう思いながら、ドリンクを飲もうとキャップを開ける。
口につけようと思った瞬間……数分前、これに蒼井君が口をつけたことを思い出した。
「……ここで私が飲んだら……」
間接キス、になってしまう。
いや、蒼井君がさっき飲んだ時点で間接キスしたのかもしんないけど……
途端に、脳が意味もなく慌てだした。
いやいやいや、今まで何回も回し飲みとかしたことあるじゃん！蒼井君も、そんなのあんまり気にしない方の人かもしんないし……
そう思ってるうちに……
「さーや、それ、新発売のやつじゃん！ちょっと飲ませてー」
ひょいっと現れた夏姫が、ひょいっとペットボトルを取り、あっさりとそれを飲んでしまった。
「あれ？飲んじゃヤバかった？」

夏姫が不安げな顔をしたところで、初めて自分が唖然としていたことを認識した。

「あ、いやいや！全然！アハハハハ」

「ん？なんかさーや変だよー？シードがそんなに嬉しいのー？」

……結論。あんなに色々考えたのに、あっさりとしてやられると、途端に自分がアホみたいに思えてくる……

『3年生バスケ女子の決勝を10分後に体育館1階で行います。選手は速やかにコートに集まってください』

別の競技を応援していた途中で放送が入り、メンバーを連れて体育館へ入った。

相手はF組。就職クラス。

勉強をあまり強いられないせいか、運動部に所属している人たちが多く、陸上部だったり、武道系の部活だったり……足の速さもパワーもハンパない。

「んじゃ、頑張りましょーっ！！！」

「オーッ！」

カナコの威勢のいい声で、みんなの気持ちが引き締まる。

彼女にとっては、相手はどうでもいいらしい。そんな雰囲気が、緊張感を少し和らげた。

試合は5分区切りの3セット。5人制。

文系は女子が多いから、実際のメンバーは7人。その中で、スタメンは……

「スタメンは、ハルカ、夏姫、ホノカ、マリア、私。さーやとミホは2セット目から点差を開くかドンドン点稼いでいく方向で出てもらうのでいい？」

7人全員で肩を組み、内緒話をしているようにスタメンをカナコが言う。

ミホは、私と同じ中学出身で同じバスケ部だった女の子。でも何故か、私とはなかなか馬が合わない。

「オッケ。でもなるべく点は取ってきてね」
「あたりまえっしょ！」
夏姫が少々大きな声でそう言った時、試合開始の笛が鳴った。スタメンは急いでコートに行き、所定の位置につく。
ジャンプボールは夏姫。相手は相当背が高いけど……夏姫ななんせ、バレー部。しかもスパイクを武器にしている、まさにちっさな巨人。ボールも、予想通り夏姫がとった。
そのままドリブルで、ゴールの下へ……っと、そこでボールが相手チームに渡る。
「あちゃー。入っちゃったか……」
F組が先制点2点を取る。
次は、A組が取って、その次はF組……点差の一進一退は、どんどん続く。
笛が鳴り、始めの5分間はあっという間に終わった。
A組10点、F組16点……
「ごめんさーや……頑張ったんだけど……」
夏姫が、顎にまで滴る汗を拭いながら言った。声のトーンが、いつになく低い。
「大丈夫大丈夫！あと2セットもあるんだから」
背中を軽くたたきながら、励ました。
1分間の作戦タイム。そしてすぐ2セット目。
元々、誰がどこのポジション、相手チームの誰をマークするかは全然決めていなかったから、カナコがメンバーを決めるだけで1分が過ぎた。
手首と足首をブラブラさせながら、観客の方を見る。
A組の、試合がないサッカー、バレーの男子女子……（負けたか、たまたま空いているかは分からない）
その3年生集団のすぐ後ろに、蒼井君がいた。隣には、カイジ君やユウヤ君もいる。
蒼井君は、拳を握り、私に見せて微笑む。私も、それに返す。緊張

が、ほんの少し解れた。

第2セット目。ジャンプボールは私。

そしてF組は……

「さーやじゃんっ！」

「も、桃花！？なんで！？」

「ジャンケンで負けたー。手加減してねー？」

「いやいや……本気で飛ぶよ、私」

なんと桃花。

約5秒のくだらない会話をした後、笛が鳴る。

ボールを、横に居る夏姫に送った。

素早く、私にボールが渡り……恐らく私を元バスケ部だと知っている人たちが纏ってくる。

フェイントをかけ、カナコに渡す。ゴール下3メートル前ぐらいに来た時、ボールが来た。

大股で2歩進み、そのままジャンプしてシュート。笛が鳴り、2点加算された。

「さーやナイス！」

「さすが女豹！」

「……女豹ゆーな」

誰かが言った言葉に、苦笑いしながらそう返した。

それから、A組の快進撃は続く。

12対16、14対16。14対18、16対18……いよいよ、18対18の同点になった。

ボールを受け、ドリブルしながらディフェンスを押し切り、ゴール下へ。

シュートをうつ体勢になったところで、背のやたらデカい女子（おそらく180センチ）が私の視界を阻んでくる。

相手チームは、その女子がボールを取ってくれるだろうと油断して

いる。それを象徴するかのように、ゴール下の他のゾーンはガラ空き……ってなることは、予想がついていた。
1回目のシュートをうつ体勢は、もちろん演技。それから、パッとその場から離れて、デカい女子が「えっ」ともらした声を背に受けドリブルしながら他のシュートゾーンへ。阻むものはもう何もない。しっかり狙い、シュートをうった。
歓声が、一気に大きくなった。
そして、5分終了の笛が鳴る。
「よっしゃ」
小さく拳を握り、コートを一旦離れた。

『2年男子体育委員は、至急会議室に集まってください』
そんなアナウンスが、耳をかする。
スポーツドリンクを飲みながら、蒼井君がいた場所に目を向ける。
「……もういない」
例のケータイをつかったアナウンスよりも早い召集がかかったのか……
3セット目に入る前に1回、顔見ておきたかったな。
それと……
「もう飲みきっちゃった……」
スポーツドリンクは、カラ。
どうしよう……まだ喉は渇いてる。けど買いに行く時間はない。あと30秒ぐらいしかない。
そう思っていたとき……
「さーや、これいる？」
目の前に、ペットボトルが現れた。ピカリスウェットのペットボトル。
「あ、うん、いる。ありがと……って……」
いるはずのない人が、ペットボトルを私に手渡しながら微笑む。
「斉藤先輩！？え、なんで、その服……」

「ああ、これ？この体操服、今の部屋着なの。さーやの試合見たくって、ちょっと不法侵入しちゃった」
「えー、大丈夫なんですかー？」
ピカリスウェットを一口二口……いや、四口ぐらいいただい、お礼を言いながら先輩の手に戻した。
「大丈夫よー。私、結構童顔だしね？」
作戦タイムの終了を知らせる笛が鳴る。
「それじゃ、試合頑張ってね！」
「あ、はい！」
威勢良く返事すると、コートに入った。

……なんか、おかしい。緊張しているせいか……うまく、体が動かない。足が、若干竦む。
「さーや、パスパス！」
ハルカが手を大きく振る。
5メートルぐらいドリブルして、ハルカにボールを回す。
そのパスを受け、ハルカがシュート。4点差に持ち込んだ。
「ナイスパスさーや！」
「あ、うん」
ハルカとハイタッチを交わし、また相手ボールから始まる。
パスカットをして、さらにマリアにパスをした。
頭の中が、なんだかぐるぐる回る……瞼が、異様に重たい。
「杉浦」
ミホが、私の肩に手を置いた。
辛うじて、正気に戻る。
「なんか顔色悪いよ。ホノカと交代して休んどきな。あとは、私が何とかする」
「ん。そーする……」
少し男っぽい素っ気無い口調。その中に、最大の気遣いが入っていると……この時、思った。

体育館を出て、数時間前蒼井君と2人で喋ったところに腰掛ける。
「何これ……」
朦朧とする意識。霞む視界。重たい瞼。
まるで、電車の中で眠りに落ちる瞬間のよう……おかしいなぁ。疲れてるのかな、最近。試合中に眠たくなるなんて、今まで一度もなかったのに……
柱にもたれかかる。
試合は大丈夫。ちゃんとミホがリードしてくれているはず。
そう思うと、なんだか安心して……意識の流れに身を任せた。
意識を失う前、一瞬だけ……細い脚が見えた。

「ごめんね。本当はこんなこと、あなたみたいな素晴らしい人にしたくないんだけど……」
――誰の声？

「……素晴らしい分、なんだかイライラするの」
――何に？

「だから二度と……あの人に、会えない姿にしてあげる」
――どういうこと？どんな姿？あの人って、誰？
意識は、聞きたいことを放ったまま、途絶えた。

第８４話　クラスマッチ３

体育館に戻ると、一際デカい声援が聞こえてきた。
「夏姫がんばれーっ！」
「ミホファイト――――！！！」
「ホノカ行け――――っ！！」
主に３年女子の先輩たちの声援。
俺が今いるのは観覧席だから、他クラスの人たちだ。
ゲームは……３セット目、残り１分ってとこ。決勝とだけあって、声援もゲームも迫力がケタ違いに違う。
そんな中、結構目を凝らして探すけど……
「……あれ？いない？」
沙彩先輩の姿は、コートの中にはいない。
……んなわけない。東野中の女ひょ……いいや、元バスケ部の彼女が、こんな勝敗を分けるセットで補欠だってことは、まずない。
一応補欠席も探したけど……補欠席にもいなかった。
「よーっす大翔！」
「おう、ジュンヤか」
バスケ部仲間のジュンヤ。中学からバスケをやってて、俺とも中学校からの同級生らしい。
……だとしたら、沙彩先輩のことも知ってるよな？
「なぁ、さあ……」
「さあちゃんなら、ゲーム途中で抜け出したぞ？気分でも悪ぃのかな……めっちゃフラフラしてたぞ？」
俺が全部言い終える前に、ジュンヤはそう言った。
え……あの沙彩先輩が、気分悪そうにしていた……？
ていうか……
「なんだ？“さあちゃん”って」
「あ、中学の時から男子の間ではそう呼んでんだ。もちろん、本人

のいねぇとこで」
「……ふーん」
なんか……妙にムカつく。
「んま、保健室かどっかにいるだろ。さあちゃんのこと、見舞いに行ったら？彼氏さん」
「……お前、わざと先輩のことそう呼んでんだろ」
「さあね。どーだか」
片手をヒラヒラさせながら、観客をかきわけ消えた。
残り２０秒……Ａ組が、３点追いついていない状態。
どーなるかな……そう思った時、えらく細い女子がスリーポイントゾーンからショットをうつ。
ボールは弧を描き、吸い込まれるようにリングをくぐる……笛がビーッと鳴った。
歓声が、ひときわ大きくなる。
４５対４５。残り１０秒。相手組からのスローイン。
ボールは、瞬く間に相手組の下へ……そして、ショットを打つ姿勢に入る。
Ｆ組が勝っちゃうかな……そう思った時……
「え……マジ？」
あのちっちゃい東郷先輩が、ボールを奪った！
人の間をすり抜け、風のように走る。
「ミホッ、お願いっ！」
さっきのえらく細い女子……ミホと呼ばれたその人は、東郷先輩のロングパスを受け、的確なショットを放った。
その瞬間、笛が一際大きな音を出す。
その直後……シュカッと、歯切れのいい音が聞こえてきた。
「ブザービーター……」
Ａ組の、優勝が決まった瞬間だった。
「……え？来てない？」

「ええ。外科関係で来た生徒は数人いたけど、内科系はないわね」
カルテを見ながら、保健の先生はそう言った。
「おかしいなぁ……」
「2年生男子のクラスマッチ、もうそろそろじゃない？」
「……あ、ヤベッ、そうだった。それじゃ、失礼します」
……きっともう、ちょっと休憩したらすぐ良くなったんだろう。
一応メールをしておき、グラウンドに向かった。

――――……

「以上をもちまして、平成〇〇年度クラスマッチの全日程を終了します。3年生から順に退場してください」
2年クラスマッチ、1年クラスマッチが終わり、とうとう閉会式。
ちなみに俺のクラスのサッカーは、見事優勝を……せず、準優勝に終わった。
「蒼井、マジごめん！あん時パスくれたのにシュートできんくて……」
「ああ、うん。いーよ。気にすんなって」
クラスメイトにそう言いながら、辺りを見回す。
試合中、姿を現さなかった先輩……今も探してるけど、見つからない。
なんだか……嫌な予感が、心のどっかで広がる。
背中に、つつかれた感覚がして振り向いた。
「あ、東郷先輩」
「さーや見てないっ！？」
切羽詰ったような表情をして東郷先輩が俺を見上げていた。
「はい。一応探してはいるんですけど……」
「そっか……あれからずっと、顔出さないし……誰に聞いても、見かけなかったって言うし……」
遠くで「んじゃ、先行ってる！」と、クラスメイトが言っていた。

「もしかしたら、家に帰ったとか？」
「だとしたら、教室に荷物ないはずでしょ？探してみたけど、まだあった……」
「……やっぱ、どっかで倒れてるのかな……」
「いや、さーやに限ってそれはないよ。回復力、めっちゃ高いんだから！」
……残る可能性は、ひとつ。
「誘拐……？」
「いやいやいや、あのさーやだよ？防衛術や先攻術に長けてて、痴漢ぶっ飛ばして、ギャル5人の中からあの子を助けたぐらいの……」
……いずれにしても、筋肉より脂肪の割合が勝っているオッサンや高校生の女子。
いくら沙彩先輩でも、相手によっては……
「……まぁ、手当たり次第探してみます。ショートあるし、とりあえず教室行きましょう」
「うん。そう……だね」
東郷先輩の顔は、不安一色だった。

ショートの時の先生の話なんかろくに聞かず、窓の外を見ていた。
地上からかなり離れてるけど、沙彩先輩の姿なら分かりそうな気がして。
「……あれ？」
「どーした蒼井。なんかあんのか？」
「あ、いえ。なんでもないです」
無意識に発した言葉によって、俺が窓の外を見ていたことがバレてしまい、正面に向き直る。
でも、度々窓の外を見ては、疑問に思った。
……今、全クラスではショートの時間。なのに……なんで、体操服の生徒が壁と壁の間によりかかってケータイを耳にあてているのだろう。

ショートが終わり、更衣をした後沙彩先輩を探し始めた。
理科教棟、ＨＲ教棟、特別教室教棟、図書館……どこにもいない。
談笑している生徒ばかり。
やっぱ校外か……と思い、市内を探してみる。
よく２人で行く場所、たまに数人でたむろする場所。雑貨屋、カラオケ……どこにもいない。
探しているうちに、日が暮れてしまっていた。
「やっぱ家に帰ったのかな……」
入れ違いで、電車に乗って東野市にいるのか。
でも、だとしたら、メールを送ってくれているはず。
ケータイを開けても、友だちからのお疲れメールのみ……
「……どこにいんのかな……」
とりあえず、一度落ち着きベンチに座った。
あと探していない場所は……ない。
手当たり次第、全部探したはず……
……あ。
１箇所だけ、探していないところがあった。
普段は鍵がかかってるけど……なんとか、もぐりこめる場所。
思いついた途端、俺はベンチから立ち上がっていた。

第85話　暗闇と光

気がつくと、薄汚れた空気が鼻を掠めた。
ここ……どこだろう。真っ暗で何も見えない……
しかも……体が、鉛みたいに重くて動けない。
瞼さえも重く、細目で辺りをキョロキョロした。
「やっと起きたか」
パチン、という音がし、視界が一気に明るくなる。
その明るさに、さらに目を細めた。
視界に入るのは……
「誰よ、あんたたち」
5人の男。胡坐をかき、ニヤニヤしながらこっちを見ている。
全然見たことのない5つの顔。でも……明らかに、ヤバそうな奴ら。
そいつらは、ユラユラと立ち上がった。
「……何する気？」
「“あのお方”に言われたんや。あんたを、アイツに二度と顔向けできひんような姿にしろ、ってな」
頬に刺青をしている男はそう言う。
……関東人なのに関西弁遣ってるし。
そんなくだらないことを考えてる私は、よほど冷静なのか、感覚が鈍いのか……
「あのお方やらアイツやらあの人やら……指示語使うのも大概にしなさいよ。一体誰のことなのよ」
見下ろされてる感が否めず、私も立ち上がる。
脚がフラフラする……プラス、地に足がついていない感じ。
「ねぇ……覚せい剤か何か、私に注射したの？すっごいフラフラするんだけど」
「待て待て。一気に質問しすぎや。せやな……ここにおる男みんな、あんはんには“まだ”何もしてへんで」

「せや。てか、あんたもえらい冷静なもんやな。俺が女やったら泣き喚(ワメ)いとるわ」
「お前、ほんまは男やあらへんの？」
「ハハッ！それ言えとるわー！」
……バカにしたように笑う男たち。
いかん……ムカつく気持ちと、フラフラして気持ち悪いのと、眠いのと、校舎の古臭いニオイのせいで気失いそう。
……肘が、プリントを収納している納戸の薄いガラスに触れる。
拳を、硬く握った。
バリンッという鈍く不快な音が、空気を劈(ツンザ)く。
「ハハッ。とうとう気でも狂ったんか、杉浦沙……」
「……汚い声で私の名前呼ばないで」
拳全体に走る、鋭く鈍い痛みが頭を冴えさせる。
よかった。これで、当分眠気は来なさそう。
「こんな時間にこんな人気ない場所で、あんたらのような脳無しみたいなのが私を包囲する……そう指示したあんたたちの崇拝している“あの方”は誰なの」
「……あんたのよう知っとる人やで。よう聞いとき」
「……は？」
頬の刺青が私に近づく。
そして、胸倉を掴んだ。

「あんたが1年の時の部長や」

え……
斉藤先輩……？
うそ。んなわけない。
斉藤先輩は、私の尊敬する先輩で、先輩も私のことを信頼してくれて、今日だって応援に……
――――なんで？

なんで、校内行事にわざわざ変装して忍び込んだの？
体育祭や文化祭とか、一般見学が許可されてる行事はある。けど…
…あの人は、姿を現さなかったじゃない。

思考回路がグルグル回ってる時……ガッという音とともに、頬にビリッと痛みが走る。
……油断してた。今、胸倉掴まれてるんだった。
「そんなにショックなんか？」
ククク……と、不気味に笑う。
胸倉を離し、壁に強く私の体を押し付けた。
「んじゃー、とっととやりましょうか」
手の骨を鳴らす刺青。
私の目は、まだ現在（イマ）と疑惑の間を彷徨っている。
でも……そいつの拳が目の前に迫った時、本能的にそれを受け止めていたんだ。
「……っらぁっ！！！」
鳩尾（ミゾオチ）にケリを入れ、数メートル先にぶっ飛ばす。
そいつは、ダンボールの山に倒れこむ。
「キサマ……ッ！」
別の男が、ケリを私の腰に入れようとする。
私はその足を持ち、体ごと床にたたきつけた。
やっぱ体（ガタイ）がデカいせいか、ハンパなく重い。
ガラスが刺さった手も、殴られた頬も、じんじんと痛む。
「ヤバ……ちょ、こいつめっちゃ強いで……」
そんな男の呟きさえ、まともに聞けない。
フラつく、痛い、眠い、でも寝たら殺（ヤ）られる……
そんな辻褄が合わない連鎖妄想が起こっている中……
「あれ？まだやってないんだ？」
扉が開き……男たちと同じような服を着た女……
……斉藤先輩が、不気味な笑みを浮かべて立っていた。

「美希姉。コイツ、可愛い顔してメッチャ強いんすよ」
「当たり前じゃない。そんなこと私も知ってるわ。だから空手やってるあんたらを呼んだんだけど……沙彩、あなたやっぱり強いわね。予想以上だわ」
フフッと笑いながら、私の顎を人差し指で持ち上げる。
しっかりしてて、美人で、頼りになる声楽部の部長――そんな影は微塵もない。
冷酷で、残酷で、卑しい、最低な女の影。
「……2年前から、私をこんな状況に追い込もうと企んでたんですか？」
「2年前？そんな前からじゃないわ。そうね……つい数ヶ月前からかしら？」
「……なんで？」
「決まってるじゃない。復讐よ。あの人の前に現れる女の影は……可愛い後輩だろうがアイドルだろうが誰だろうが――どんな手遣ってでも、捻り潰す」
そう言う先輩の目は……光が、全くなかった。
私まで、光を失ってしまいそうな……そんな錯覚さえ起こる。
でも……新たな光が、私の目に差し込んだ。
「うわっ、何やお前！」
「おい、まさかコイツ……」
入ってくる人物に絡む男たち。
そいつらを押しのけ、私の方へ近づいてくる。
視線が……何時間ぶりかに、交わる。
「やっと見つけた……」
その目は、確かに……光が宿っていた。
――――……
それから……何時間も、暗闇の中にいた。

四方八方真っ暗。どこをいくら歩いても、広がるのは暗闇だけ……
不安になってきて、走り出す。
お母さん、お父さん、夏姫、桃花、たっくん、唯、伶君……私の周りにいた大切な人に、とても会いたくなる。
でも、いちばん会いたいのは……
「蒼井君……どこ？」
言葉では言い表せられないほど大切な、彼氏。
この人と出会えたから……いっぱい、笑顔になれた。
私に、好きっていう感情を教えてくれた。
この人がいなきゃダメになるって感覚が芽生えた。
そんな人に……たまらなく、会いたい。
走りつかれて、その場に座り込む。
汗が出て、動悸が早くなる。
そのせいか……手から、再度血が流れ始め、頬がズキズキ痛む。
ああ、もう私、ダメかもしれない。
死んでしまうのかな……
「……沙彩」
ふと声がして、頭を上げる。
「やっと見つけた……どこ探したっていないから、すっごい不安だった」
地についていた私の右手を、優しく握る。
「早く出よ」
私の手を引いて微笑む……最愛の人。
さっきまでのネガティブな思考は抹消され……代わりに、温かい気持ちになる。
そして、手を引かれて目の前に広がるのは……光の世界。
……この感じ。前にも見たことあるな。
森かどこかで迷っていて、主の分からない手にひかれ、出口に向かう夢。
その主は、きっと……

――……

辺りを見回す。

白い天井。ほんの少し、薬くさい。

「……あっ！！！さーやっ！みんな、さーやが起きたっ！！！」

テンションの高い声が耳に入る。

「夏姫……？」

起き上がろうとするけど、うまく体が動かない。

夏姫は慌てて私をベッドに寝かせた。

そして、ベッドを少し起こさせる。

「さーや、動いちゃダメ！」

「あ、はい……」

真摯すぎる目に、思わずそう答えた。

「ここ……病院？」

「うん。そだよ。海宮病院。さーや、３日間ず～っと寝てたんだよ！」

「み、３日間も……」

いつのまにか、どやどやと見たことのあるメンツが顔を現した。

「おい沙彩、大丈夫か！？どっか痛いとこねーか！？」

「う、うん……」

「桃、心配したっちゃよ！！！このままさーやが起きなかったらどーしよーって！」

「まだ死なないよ……」

「今親御さんに連絡入れたから。１時間ぐらいで来るってよ」

「あ、ありがと……」

唯、桃花、たっくん。みんなが口々にそう言った。

溢れるほどの優しさがある……そんな感じがして、うっかり涙が零れそうになった。

「そんじゃ、さーやも起きたことだし……退散するっちゃよ！」

「そーだな」
「さーや、これ、クラスからの寄せ書きとお見舞い！」
「んじゃお大事に」
「あ、うん。ありがとね、いろいろ……」
そう言うと、夏姫はいたずらっぽく笑った。
「お礼なら、さーやのすぐ傍にいる人に言いなよ！」
「え？傍に？」
「んじゃーねー」
部屋のドアが閉まる。
混乱してて気づかなかったけど……右手に、かすかな温もりがあることに気づいた。
私の右手を、一回り以上大きい手が包んでいる。
見てみると……黒髪の頭が見えた。
「蒼井君……？」
そう呼びかけると、その頭はゆっくりと起き上がった。
「先輩……よかった。ちゃんとついてきてくれて……」
そう言い、私の頭を撫でる。
まだ夢心地なのか……目はとろんとしている。
傍から見たら、蒼井君の言葉は意味の分からないものかもしれない。
でも……本当は違うかもしれないけど、私は思ったんだ。

この人も、同じ夢を見ていた。って。

途端に、涙が出てきた。
それが原因で正気に戻ったのか、蒼井君は目を見開いた。
「あ、ご、ごめん！頭触られるの嫌だった？それか、あの５人怖かった？それとも……」
嫌。怖い。
そんな言葉を否定するように、頭を振る。
蒼井君の肩に、額をくっつけた。

「ありがとう……」
ただ、そう伝えたかった。

四方八方が分からなくて、ネガティブの海に沈んでいた私の手を引っぱってくれてありがとう。
もう一度、光の世界に導いてくれてありがとう。
みんなにまた会わせてくれて……ありがとう。

第86話　Gメン

あれっきり、斉藤美希の姿は現れなかった。
「ごめんね沙彩。いくら調べても捕まらないの」
「……なんで？」
着替えを持ってきたお母さんが、重々しくそう言う。
「名前や住所、電話番号、その他もろもろの個人情報をすべて抹消していたり改めていたりしていたら……特定は難しいわね」
「抹消……」
「あと、現場検証してみても、何も見つからなかった。髪の毛、指紋……どれもこれも、綺麗さっぱりなかったわ。ルミノール反応であなたの血液が分かっただけ」
そんなに手を回してまで、なぜ私を……？
それが、いちばんの疑問だった。
それに、“あの人”の意味。そして、斉藤美希という名を耳にした途端……なんで蒼井君や咲良ちゃんは一瞬固まったのか。
「でもね、沙彩みたいな傷害事件の被害者はたくさんいるの。全員、沙彩と同年代ぐらいの女の子。そして、容疑者も沙彩と同年代ぐらいの人たちだわ」
パッと、咲良ちゃんの顔が浮かぶ。
去年、3年生のギャル……いや、ヤンキー5人に暴行を加えられて、一時的に記憶を失うほどの大怪我を負ったことも浮かんだ。
「そして、キーパーソンが2人……蒼井大翔と斉藤美希、なのよ」
……え？
「なんで蒼井君？」
「被害者は全員、当時蒼井大翔と付き合ってたの。そして、容疑者は口々に「斉藤美希から命令されました」って言うわけ。でも、その斉藤美希のしっぽは掴めない……全く、悩ませてくれるわよ、彼女には」

「いや……でも、なんで蒼井君？」
「さぁ……その蒼井大翔と斉藤美希の因果関係が全く分からないの。蒼井大翔は父親からの……」
そこまで言って、お母さんは口をつぐむ。
「え？父親からの？」
「なんでもないわ。えっと、多少人とは違う特殊な面もあるけど、いわゆる普通の男子高校生。斉藤美希は前科がたくさんある謎の犯罪者……」
ってことで、と言って、お母さんは私の肩をつかむ。
「母親としては、もちろんどちらを選んでもいいわ。蒼井君は、私の目から見てもとてもいい子だもの……でも、検察官としては、蒼井大翔とこれ以上関係を続けるのは、勧めない。斉藤美希から、今回以上の危害を加えられるかもしれないから」
さすがに今回みたいに、学校内じゃ……私たちの目も行き届かない。お母さんはそう続けて、肩から手を離した。
「どうするかは、また日を改めて……」
「……分かった」
もう、考えは決まっている。
私は……――この恋を、手離したりなんかしない。
「また襲われたとしても、全力で戦う。そして、斉藤美希のしっぽを必ず掴む」
「……そう。蒼井君と、離れないわけね」
そう聞かれて、静かに頷いた。

それから数日後、手や向精神薬摂取に対する治療も済み、無事に退院した。
向精神薬摂取……あの時、斉藤美希からもらったスポーツドリンクの中に、睡眠薬が入っていたらしい。
何はともあれ……まず、ノート写しから始まり、クラスマッチ後からすぐ中間だったからテストを受け……見事撃沈したけど、平常点

からも加点されるから助かった。
勉強の方をパッパと片付けてから……
「まず、やっぱポスターとか？」
「いやいや、今の時代個人情報載せるのは危険でしょ」
「じゃあ、聞き込み？」
「アリだけど……私らが1年のときの声楽部の元部長でしょ？あんま人脈なさそうだなー……」
「そういえば、斉藤美希の通う大学とか……」
「あっ、それだ！でも偽名遣ってるかもしれないし……」
蒼井君の家のリビングで、私、蒼井君、夏姫、たっくん、河野さんが集まり、いろいろと作戦を練った。
出た案は、さまざま。
ポスター、聞き込み、大学……
……大学？
「それだっ！」
あるアイデアを思い出し、バッと立ち上がった。
「大学見学ってことで潜入して、斉藤美希を捜せばいいじゃん！」
「あー、なるほどー！それなら見つかりそう！」
「でも講義とってなかったりしたらダメじゃん。それに、大学って思ったよりすっごい広いんだよ？」
「……まぁ、そこんところは運の問題だけど……」
でも、行動しないよりかはマシ……だよね？
「んじゃあ、もうそれしかねーじゃん。明日あたりにでもとっとと潜入してしっぽ掴んで……」
「待って。私らだけじゃあ、簡単に逃げられちゃう」
話を進めようとするたっくんを止めた。
「あとは、私が予定組むから、後日よろしく！」
「うーん……まぁ、さーやなら大丈夫だよね！予定任せたよっ！」
よし、思い立ったが吉日……早速行動に移そう。
リビングを出て、玄関へ向かう。

「沙彩先輩」
「ん？なーに？」
「俺もついてく」
靴を履いている途中、蒼井君に背中から声をかけられ……そんなことを言われた。
振り向くと、蒼井君はジャンパーを着ている途中だった。
「先輩のことだから、“思い立ったが吉日”とかなんとか考えて今日予定組む気でしょ？」
「……大正解。さすが私の相棒！」
「って……俺、亀〇薫？」
「いや、今は神〇尊でしょ」
そんなやりとりをしながら、蒼井家を出た。

――――……

某日。私と夏姫とたっくん、蒼井君と河野さんの2班に分かれて海宮市駅に集まった。
「キー大学は2つ」
ちなみに、私と蒼井君が分かれたのは、実物の特徴をしっかりおさえているからだ。
「まず1つは、ご存知海宮大学。こっから2駅下ったところにある、最も身近な大学。んで、2つ目は東ノ橋大」
「え？なんで東橋？」
夏姫から、質問が飛んできた。
ムリもない……こっから上り方面に7駅近く離れている。
「斉藤美希と会った日、私と蒼井君は下り線の列車で海宮（カイグウ）に着き、10分少々後に彼女とバッタリ出くわしたんだ」
「あの時間の下り線の次、15分で次の下り線列車が来る。でも、斉藤美希はあまり慌てている様子もなく、余裕そうに歩いてて……それで、15分後の下り線の次に来る、さらに30分後の上り線に

乗ると見たんだ。あ、海宮大学をキーにしたのは、午後から授業をとってる可能性もあると見たから」
蒼井君は、時刻表を見ながら淡々と言う。
「斉藤先輩は学年トップクラスの成績。東ノ橋大は偏差値トップクラスの大学……キーにするには妥当だと思わない？」
一同、あーっと言って納得した。
ちなみに海宮大学も結構レベルが高い。
「そんじゃあ、私たちは海宮大。蒼井君たちは東ノ橋大……だよね？」
突然の付加疑問。多少張り詰めていた空気が緩む。
「そーだよ沙彩先輩……この期に及んで確認？」
「いや、なんか肝心なとこ間違えそうな気がしてさ」
ハハハッと笑いながら、みんな切符を買いに並んだ。
上り線切符と下り線切符は隣同士の機械で売っている。丁度隣に来た蒼井君の袖を引っ張った。
「……確率的には、東ノ橋大にいる可能性が高いから、万一見つかった場合には絶対私に連絡ちょうだいね。もちろん、“ボス”にも」
「オッケー。なんかGメンみたいでワクワクする」
蒼井君はいたずらっぽい笑みを浮かべた。
つられて私も笑顔になり……でも、その内側は闘志に燃えていたんだ。

第87話　Gメンの捜索

上り線普通列車、2両目。6番目の席。
そこで、必死に思い出そうとしている。斉藤美希と俺との因果関係。
沙彩先輩が1年生のとき3年生だったから……俺とは丁度入れ違いになる。まず、学校内で知り合ったということはない。
3W……「いつ、どこで、なぜ」関係が成立したのかが全く掴めない。まぁ、記憶がないから当然かもしんないけど……
「……おい……蒼井様、蒼井様！」
「え……？」
「どうしたんですか？ボーっとして」
「いえ、なんでも……すみません、河原さん」
……と言ったところで、ヤバいと思った。
この人の名前、うろ覚え……間違ってたらどうしよう。
彼女はクスッと笑い、
「河野杏里です。人の名前覚えるのが極端に苦手だって噂、ほんとだったんですねー」
怒っている様子は全くなく、とりあえずホッとした。
「因果関係を、頑張って思い出そうとしてたんですが……ダメでした。全然無理です」
「そうなんですか……私が思うに、完璧に蒼井様の昔の彼女さんだったのだと思いますよ」
昔の……彼女？
ていうか……
「……話変わりますけど、普通に呼び捨てでいいですよ。年下だし、神でもないし様づけっておかしくありません？」
「いえいえ、様づけは私のポリシーなので！」
……あまりにも必死そうだったから、「そうですか……」で終わらせた。

「まぁとりあえず、蒼井様の卓越した千里眼でとっとと見つけちゃって成敗しちゃいましょう！」
「ハハ……千里眼って……」
……おかしいな。すんごい眠い。
まさか、向精神薬……って、そりゃないか。朝飯の後何も飲んだり食べたりしてないし。
「ちょっと眠くなったので、１駅前ぐらいになったら起こしてください」
「いーですよ。おやすみなさい」
窓に頭を預け、ゆっくり目を閉じた。

――――……

ここ……どこだ？
……あぁ、知ってる。ファストフード店。名前は確か……マクド〇ルド。
って、これは夢か。今電車の中だから、いきなりマクド〇ルドにループするわけない。
その店の一角で、仲睦まじくイチャついているカップルが一組……人が見てるのに、大胆なもんだ。
「ねぇ、私たちこれからもずーっと一緒だよね～？」
「あぁ、もちろん……」
男の方は、そう言って目を閉じる。
女の方は、キス待ちかなんか悟ったらしく、ゆっくりと唇を近づけていっていた。
「……もちろん、ずっと一緒になんかいるわけねーだろ。いーかげん飽きた。別れよ」
……は！？そこまでいってそれ！？
同じ男として、それはどーよ……
「え……嘘でしょ？どういう意味！？ねぇ！！！」

「……だから、失せろって意味だよ。分かんねーの？」
うわ、ヒド……
ここはひとつ、傍観者ながら意見させてもらおう。
「お前、別れるにしても言い方ってもんがあんだろ……」
……って言い、肩に手を置くが……目の前にいる男は、全然気づかない。
女の方も、全然俺に気づいている気配がない。
どうやら、俺はこの世界（ユメ）では幽霊と同然の存在らしい。
「……もういい。さよなら」
そう言い、女の姿は消えた。
目の前の男は、溜息をついて頬杖をつく。
ケータイを開き、なんかの画像を見ながら……
「……名前、なんていうのかな……」
と、呟いていた。
……よし。幽霊の特権として盗み見てやる。
男のすぐ後ろにまわり、ケータイを見てみた。
そこには……黒髪の女の人の画像があった。
……どこかで見たような気がする……という、妙な予感はさて置き。
コイツ……彼女と付き合っているさながら（もう別れたが）他の人を狙ってんのか!?
「ほんっと、サイテーなやつだな……」
夢の管理人（？）は、恋愛関係における最低なパターンを再現させているのか……
……なぜ再現させているのか？予知夢か？いや、絶対ない。
とかなんとか考えていると……
「ねぇ、今彼女さんと別れたの？」
ひょこっと、１人の女が姿を現した。
白とマテリアルを重視したその服は……
「私、斉藤美希。海宮高等学校２年よ。あなたは？」
やっぱり……斉藤美希。

目の前の男は、ケータイをパチンと閉じて、こう言った。
「俺は……東野中2年。蒼井大翔」
ふーん。東野中っていったら、俺の出身中で……
……って……俺かよ！
「んじゃあ、大翔……私を、次の彼女にしてくれない？それとも、予約待ちがいるかしら？」
「……まぁいるけど、あんたみたいな女、珍しいな。おもしろい。付き合おーぜ」
ってことは、この男……3年前の俺、ってことか。
そんでこの夢は、斉藤美希と俺が知り合ったきっかけ……

――――……

「あと一駅ですよー」
河野先輩に声をかけられ、すっと目を覚ました。
3Wの真実……
「俺が中2のとき……マクド○ルドで、軽いノリ……」
「どうしたんですか？」
「やっぱり、斉藤美希とは昔、付き合ってたみたいです」
冷静になってみれば、夢をアテにするなんてバカげている。
でも、この夢が……真実を伝えているように思えてならなかった。
『まもなく石之ヶ里、石之ヶ里に着きます。お降りのお客様は……』
「……降りましょう」
列車から降りて、東ノ橋大学に向かう。
にしても……どんだけ軽いんだ、昔の俺。
しかも予約待ちがいるって……どうやら相当モテていたらしい。
今と違って表現力や話術に長けていたのか……
そういえば、芸人は表現力や話術ともに最高ランクだから、ルックスは多少悪くてもモテるっていう話をどこかで聞いたことがある。
ということは……昔は芸人みたいだったのか！？俺！いつも半裸で

黒いタイツを履いていたのか！？
「蒼井様？どうしたんですか？」
「あ、いえ……」
……とりあえず、バカなことを考えるのは今は止そう。

東ノ橋大学に着いた。
丁度オープンキャンパス期間で、生徒証明カードを受付に見せたら難なく入ること……いや、侵入することができた。
現在９時４５分。タイムリミットは終電まで。
「それじゃあ河野先輩はあちらの西校舎の方をお願いします」
「はい。万一これらの写真に似た人物を見かけたら電話いれますね！」
これらの写真……というのは、斉藤美希の写真。
沙彩先輩が斉藤美希の卒業アルバムからプリントアウトしてきたもの。
それと、斉藤美希の指名手配書の写真。それから、沙彩先輩と斉藤美希が一緒に映っているプリクラ。他数枚。
女の人というものは髪や化粧でガラリと印象が違ってくるから、なるべく多くの写真があるといい、という沙彩先輩の考慮から、手がかりを多く作ってきてくれた。
でも、やっぱり有力なのは俺と沙彩先輩。なぜなら、実物を見て会話をし、声も記憶しているから。
見逃すわけにはいかない……そんな、妙だけど重大な責任感が手伝い、闘志が燃えてきた。

――――……

昼もとっくに過ぎて、午後４時。
『どう？さーや、いた？』
「ううん、全然。においすらしない」

海宮大学内を三手に分かれて捜索している私たち。
夏姫との電話連絡で、手がかりナシを確認しあい、落胆しあった。
この大学……広い上に生徒数も教授数も多い。
蒼井君や河野さんからの連絡もないし……やっぱ、別の大学なのかな？
でも、海宮大学と東ノ橋大学のふたつ以外考えられないし……
そんなことをブツブツ考えながら歩いていて……誰かにぶつかった。
いや、正しくはぶつかってきた。ゆえに、相手が謝るのが道理であって、こっちが謝る必要ナシ。
しかし……
「いってーな、ネエちゃん。ぶつかってきて謝りもナシなの？」
……運悪く、タチ悪いヤツ5人組だった。
でも、私から謝る気はさらさらない。
「そっちがぶつかってきたんじゃないですか。大学生ですよね？あなたたちが謝罪を要求するのは間違いだってことぐらい気づかないんですか？」
「……んだとテメェ！可愛い顔して随分とナマイキじゃねーか！」
……うっへぇ、めんどくさっ。胸倉掴んできたよコイツ……
その時、ケータイの着信音が鳴った。電話だ。
「ケータイ鳴ってる。電話出るから離してくれる？」
「ハァ？ふざけ……イダッ！！」
胸倉掴んでいる手を思い切り握りつぶして、ケータイをとった。
ディスプレイには……蒼井大翔、と出ていた。
勢いよく電話に出る。
「蒼井君！？」
『沙彩先輩ですか？蒼井です。今、斉藤美希と思われる人物を追跡しています。確証とるために沙彩先輩も大至急石之ヶ里街に来てください』
石之ヶ里街……石之ヶ里市の中心部にあるでっかい商店街のことだ。
東ノ橋大学にいたはずなのに、なぜ商店街にいるのか、という疑問

はさて置き……
「分かった。この時間だと特急があるからそれに乗る。バレないように気をつけてね。あ、ボスに連絡いれた？」
『はい、もちろん。じゃ、また後で』
電話が切れた後、素早くメールを打って夏姫とたっくんに送った。
文面は……「入口に至急集合」の７文字。
ケータイをパチンと閉じると、私も急いで入口へ向かった。
「あ、オイ！」
……という、胸倉を掴んできたＡ男の呼びかけは完全に無視して。

――――……

午後３時４５分。昼飯を食べ終え、捜索を続けていたが、一向に手がかりを見つけられないままだった。
そんな時……
「ねぇ、そこのキミ！」
「はい？」
後ろから声をかけられて、振り向くと……茶髪の女２人が立っていた。
「何年生？１人なの？」
「いえ、俺は……」
といいかけて、ハッと気づいた。
この２人も、斉藤美希のグルかもしれない。本当のことは避けるべきではないか……と。
「……理工学部１年の蒼羽快斗（アオバカイト）といいます」
……名探偵コ○ンに出てくる怪盗キ○ドの本名を咄嗟にもじってみたら、意外と実名に近いものになって驚いた。
「へぇ！快斗くんって言うんだぁ。カッコいい名前ねー」
「よかったらお茶しない？キャンパス出てさ」
「あ、いえ、今……」

……参ったなぁ。ここで断ったらますますめんどくさいことになるかもしれない。
でも誘いに乗ったらキャンパスを出ることになるし……ていうか、彼女いるのに逆ナンにひっかかるってどうよ。
と、悶々と考えていると……
「あ……」
数メートル手前を、斉藤美希そっくりの女と知らない男が2人寄り添って歩いていた。
2人は、出口に向かっている……どうやら、キャンパスを出るらしい。
「ねー、どーなの？お茶しよーよー」
ヤバッ。このままじゃ見失う……
「……分かりました！ですが、少し頼みがあります」
あの2人の追跡を依頼すると、2人は少々渋そうな顔をしながらもOKした。

第８８話　Ｇメンの追跡

数メートル間隔をおいて、斉藤美希と男の後をつける。
男の年齢は２０代前後……あの日、沙彩先輩を袋叩き（？）にしようとした連中とは歳が少し離れていそうだ。
「ねぇ快斗くん、綾子が何かやったの？」
「え？アヤコ？」
イモト……ではないよな。いくらなんでも話がズレまくる。
「菅原綾子（スガワラアヤコ）。文学部の２年生よ」
誰だそれ……今尾行しているのは斉藤美希とは別人か？
……あ、そっか。指名手配されてるから偽名使ってる場合もあるのか。
「友だちなんですか？」
「ううん。同じ講義受けたりするときもあるけどさ、ウチらとはタイプ違うもん。なんていうか……マジメでガリ勉系？」
斉藤美希は、黒縁の目がねをかけている。
……犯罪者をマジメでガリ勉系と印象づけるメガネ、恐るべし。
「……詳しくは内部秘密なので教えられませんが……何かやったのは確かです」
「ふーん。じゃあ、あとはケーサツに任せていい加減遊びに行こーよ」
「リナ、尾行もう飽きたんですけどー」
そんなに遊びに行きたいのか、しびれを切らしたように２人は言う。
んなのに関わらず、見張りを続ける。
……今思えば、こっちは名乗ったのに名前さえ聞いてなかったな。
どーでもいいけど。
「ほら早くケータイで～」
「あ、ちょっと何すん……」
いきなりバッグをとられ、ケータイを取り出すために漁る。

ほんと礼儀ねーなこの2人……マジで天下の高偏差値大の学生かよ。
取り返そうと手を伸ばしたとき……
「あのー、ヘタにケーサツ呼んでくれたら困るんですよー」
どっからか声がして、バッグを漁る2つの手を掴んだ。
「こっちはこっちでちゃんと策あんだよ。邪魔すんだったらとっとと消えな」
「痛っ……な、何よあんたたち……リナ、行こ行こっ！」
「他にもっといい子いるもんねーっだ！」
意味分からん捨て台詞を吐いて、掴んだ手を振り解いてその2人はどこかへ去っていった。
手をパンパンと払って、素早く俺と同じ場所にもぐりこむ……小原先輩と東郷先輩。
「蒼井ー、お前バッグぐらいちゃんと持っとけよ」
「すんません……見張りに集中してたから、つい」
「んま、斉藤美希を監視するのに集中力使うのはしょうがないから、そんな怒んなくてよくない？たっくん」
「……へーへー。夏姫がそう言うんなら分かったよ」
相変わらず、仲良しカップルの2人……って、今それどこじゃない。
「さ……いや、杉浦先輩は？」
「あ、さーや？さーやなら、いきなり……」
「ト、トイレ行くって言ってたぞ！なぁ！？夏姫！」
「え？そ……あ、うん、そうそう！メイク崩れたー……とか言って？」
「あ、そうなんですか……」
……おかしいなぁ。2人のテンパりよう……
それに、沙彩先輩はこんな事態に化粧なんか直すタイプの人じゃない。
……まぁいっか。沙彩先輩なりに考えがあるのかもしれないし……
にしても……あれから約2時間。男と何か話しているだけで、一向

に動く気配ナシ。
「もう、ボス呼んで強行突破しちゃう？」
「いや、他にも客いるし、この商店街、結構こみ始めたし野次馬増えるだろうし厄介だし……」
とりあえず、この喫茶店と商店街を出るまで粘るか……
……と思った瞬間、
「あっ、席立った……出口行く」
時刻を確認……午後６時３０分。通学通勤ラッシュで人が多い……見失わないようにしないと。
「よっしゃ。追跡開始……でいいんだよな？」
「もちろん！さて、血反吐出るまで吐かせるぞー！」
……東郷先輩、言ってること怖いです。

しばらく進むと……斉藤と男は手を振り合う。どうやら別れるらしい。
「１人になったみたい……このまま強行突破する？」
「いや、もう少し様子を見ましょう。まだ人も多いし……」
俺がそんな暢気なことを言っている間……
「……あっ！！！」
いきなり、斉藤が猛ダッシュした！そして一気にくる黒い人ごみ……夕方着の電車に乗っていた学生の波だ。
「バレてたか……」
「ちょ、どーしよー！たっくん、大翔くん！」
素早く、念のため渡されていた“秘密兵器”を小原先輩に渡す。
「蒼井、これ……」
「ＧＰＳを俺が装着してるんで、それで俺の居場所が分かります。可能な限り追っかけますんで、早急にボスへの連絡お願いします！」
返事を聞かずに、素早く２人の元から去った。
ちなみに、小原先輩に渡したのはＧＰＳ本体。画面に地図が出てて、今俺が装着しているＧＰＳが発信している電波で居場所が分かるよ

うになっている……追跡の必需品。
追っかけてる側が追跡の必需品を装着しているなんて、変な話……
でも、今はそんなこと気にしている場合じゃない。

人ごみなんか気にせず、走りに走りまくった。
いつの間にか、学生はおろか人の姿さえ点々とし始めた場所に辿り着いた。
足は速いほうだから、徐々に斉藤の後姿が見えてきて……
「あれ……消えた……？」
人気のない、真っ暗な河川敷。忽然と、やつの姿は消えた。
「逃がしたか……」
それか、初っ端から違う人物を追いかけていた……いや、そんなはずはないだろう。だとしたらメチャクチャ悔しい。
軽く舌打ちして、振り返ると……
「逃がしてないわ。お見事ね」
腕組した、斉藤が立っていた。

第89話　Gメンの戦い

人通りのない河川敷……時たま吹く風が、異様に冷たい。
ハタから見たら、若い男女の修羅場か何かに見えるだろう。でも実際は違う。
……いる。
他にも、あちらこちらに……人の気配。
きっと、時を見計らって俺を袋叩きにするか殺すかするつもりだろう。
そして恐らく……俺に強力なバックがいることには気づいていないだろう。
「ちっこい女とまぁまぁ顔はいい男……その2人を引き連れて、2時間も見張ってたでしょう？」
「……ああ。1人になった時、あんたが沙彩にしたように睡眠薬か何か飲ませて眠らせて、警察に届けにいこうと思ってたんだよ」
「そのくらいすぐに見抜いたわ。フフッ……綺麗な顔して物凄いこと考えるのね」
やっぱり予想通りだ。
「それにしても、“口調”が前に戻ったみたい。やっと思い出したのね、私たちが付き合ってたときのこと」
何も言わず、笑みだけ浮かべた。
ほんとは、何ひとつ思い出してはいない。
この最低な女と付き合ってた頃のことはもちろん、以前どんな人間だったかさえ。
でも、大体想定できる……きっと俺は、相当女癖悪い遊び人だったんだろう。
以前の俺のままで、もし万が一の確率で沙彩先輩と出会って付き合ったら……付き合った途端呼び捨てにするだろう。もしかしたら、1週間もしないうちに恋人が辿る道を全て通るかもしれない。

でも実際は……罪悪感が邪魔をして、ずっと進めないままなんだ。
「……俺があんたを眠らせる前に、ひとつだけ聞きたいんだけど」
「なーに？ひとつだけなら答えてあげるわ。フフッ」
口元に手をあてながら笑う斉藤の腕と胸倉を同時に掴んだ。
「なんで沙彩に手ぇ出した？」
ありったけの憎しみと非難の目を向ける。
「あら……結構怖い目じゃない」
斉藤はニヤリと笑って、胸倉を掴んでいた手を振りほどく。
「沙彩はね……私から見ても、すっごくいい子。多少キツいところもあるでしょうけど、正義感や責任感や気配りもちゃんとできて……自慢の後輩だったわ。大好きだった……いいえ、今でも大好きよ」
でもね……と、斉藤は続ける。
「あんたと沙彩が付き合い始めた、っていう情報が入ってきたの。その途端……あの日の事件にむけての計画を始めたわ」
あの日の事件……沙彩先輩が薬で眠らされて、あわや大怪我を負いそうだったこと。
「私の中に、ある“ポリシー”があるのよ。西院咲良や神藤舞、絢音沢るり子……その他もろもろに制裁をくだしたのと同じように。何だか分かる？」
俺は黙ったまま、次の言葉を待つ。
「きっと、あんたは「俺に近づく女を徹底的に排除して、残った斉藤に気を向かせるためだろ」とか思っているでしょうけど……違うわ」
もちろん、そんなこと思っていない。思っていたとしたら、第一あんな質問投げかけないのに。
斉藤は1歩、俺に詰め寄った。
「あなた、私をどんなフり方したか覚えてる？あれで、私が積み上げてきたプライドは一気にガタ落ちしたわ……そう。全部、あなたへの復讐よ」
「……俺への？」

「ええ。あなたが大切にする人を次々と排除して、どんどん廃っていく姿を見たかったのよ……――それなのに」
斉藤は、俺の胸倉を掴む。
そして……この世でいちばん憎いものを睨むように俺の目を見た。
「あなたは何ひとつ傷ついた顔すらしなかった！　とっとと自分の彼女が傷ついたら他の女に乗り換えて、何食わぬ顔でまた乗り換えて……だから気づいたのよ！　あんた自身を傷つければいいってことにね！！」
「っ……」
結構力が強い……気道がふさがれそうだ。
「やっと復讐劇が終わるわ……！　あんたたち、やっちゃいなさい！」
斉藤は目をカッと見開く。瞳孔が開いていて……まるで、殺人鬼のような笑みさえも浮かべている。
……最早、予想の範疇を超えた……凶悪犯。
今、俺はその犯人の被害者のはずなのに……なんで、傍観者的なことを考えているんだろう。
「うっ……」
いきなり斉藤が小さな呻き声をあげる。
顎にあった手は外れ……斉藤の体はアスファルトに倒れこんだ。
「背中は任せてね、蒼井君」
「沙彩先輩……！？」
素早く俺の後ろに回り込んできた……沙彩先輩。
気づくと、幾人もの男が俺らを囲んでいるのが見えた。
……ざっと見て、２０人ぐらい。
こんなに大勢の男が囲んできた、って気づかなかったことは……ちっとも、傍観者的でも冷静でもなかったってことか。
「……ボスから習った防衛術、ちゃんとやってね。先攻しすぎると、傷害の罪で逆に逮捕されちゃうから」
「……ああ。分かってる」
小声で確認をとる。

次の瞬間、男が一斉に襲い掛かってきた。

……本当、品性的な意味でヤバい戦いだった。

鳩尾蹴ったり殴ったり、殴ってきたヤツの顎を蹴り上げたり、それでもなお、相手は全然へこたれない……沙彩先輩に至っては、頭を回し蹴りしていた。

そんな戦いをすること、数１０分……

「そこまでにしなさい。菅原綾子……いえ、斉藤美希」

「んだよババァ！コイツらぶっ殺さねーと意味ねーんだよ！！」

駆けつけてきたボスが斉藤を羽交い絞めにし、落ち着いた声で諭すように言う。

他の男たちも、全身青色の服で包まれた男たちに捕らえられた。

「ババァじゃないわよ私は……県警捜査一課の杉浦綾華。あなたを過去数回の傷害の容疑で現行犯逮捕します」

ボス……沙彩先輩のお母さんは、羽交い絞めしているにも関わらず警察手帳を斉藤に見せる。

斉藤の顔は、一気に青ざめて……

「……っ！？逮捕だと！？ふざけんなっ！！離せよ！！私はただ復讐しただけなんだよ！！」

別人のように暴れ狂う斉藤の手首に手錠がかけられた。

「こんなの冤罪だ！最高裁判所に上告してやるっっ！！！テメェら全員クビだぁっ！！――――」

静に流れる河川の水音が、はるか遠くに感じるほど……斉藤やその他の男たちの喚き声が黒い黒い夜空に響き渡る。

……いろいろあって、ゴチャゴチャしている。でも、以前よりかはまとまってきた気がする……

ただひとつ、確かなのは……

「やっと……終わった……」

隣にいた沙彩先輩がそう呟いて、その場に座り込んだ。

「昔っから、疲れたりショックなことがあったら引きこもったり寝込む子なのよ」

ボス……もとい、彩華さんの自家用車に乗り込み、東野市へ向かう。運転手は無論彩華さん、後部座席に戦いで負った傷の手当てを受けた俺と沙彩先輩が座っている。

沙彩先輩は座り込んだ直後に寝息を立て始めた。

ちなみに小原先輩と東郷先輩は2人で電車で帰っていった。河野先輩は急用ができたらしく、数時間前に帰ったという。

「幼稚園の頃、友だちとおやつの取り合いになってケンカして……2週間も登園拒否になったこともあるわ。小学校のときは、マラソン大会で張り切っちゃったらしくて、その後の授業は仮病使って早退してから何時間も不貞寝(ふてね)して……次の日の朝の食事量が凄いのなんの」

「ちょ……いいんですか？そんなにいろいろ喋っちゃって……」

「いーのよいーのよ。要するに、気持ちとか体調とか調節するのが苦手なのよ。見た目とは少しギャップがあるでしょ？」

「はい……少し。でも、人は誰でも意外な一面は持っているものですよ」

……そういう意外な一面を知るたびに、好きになっていったんだ。

「ふふ。そうね。でも、恋愛事でそんな風になった沙彩を見たのは去年が初めてよ……」

「恋愛事？」

「ちょうど秋ぐらいだったかしら……好きな人がいるけど、その人には彼女がいて……んで、告白してきた男の子と付き合い始めた。普通なら、好きな人はとりあえず棚にあげて彼氏ができたことに浮かれてもいいはずなんだけど……その子ったら、目は充血してて少し腫れてたの。その後部屋に引きこもって……夕飯も食べずに、翌朝もちょっとしか朝食を食べなくって……そんな状態で、1週間引きこもったわ」

去年の秋……ああ、想いを伝えられない自分に嫌気が差して……い

ろいろと構ってくる西院さんと付き合い始めた頃だったっけ。
俺がそんな荒んでいた頃……沙彩先輩は、俺同様に荒んでいる人に想いを寄せていたのかな。
「その好きな人をよっぽど好きだったんだなーって思ったわ。きっと、あなたのことね」
「え……俺？」
「ええ。だって、最近の沙彩……私から見てもすっごく明るいの。あまり顔には出てないけどね。だから、私からは沙彩を幸せにして……とは言わないわ。十分幸せそうだしね。けどね……あまり、沙彩の気持ちを揺さぶらないようにしてちょうだいね」
精一杯の……彼女の母親からの、忠告。
「はい。約束します」
それは……絶対に、この人に、そしてこの人の家族に辛い思いをさせないという確固たる信念になった。
「……おかーさん……あんまべラベラ喋んないで……」
「あら、ごめんなさいね。久しぶりに若い男の子と喋る機会ができたからお喋りになっちゃったわ」
「……ふふっ……立派なおばちゃんだね……」
そっと沙彩先輩の方を向くと……彼女は、眠ったまま。
ってことは、寝言？
「さ、もうすぐ着くわよ。その子なかなか起きないから、落とさないようにしっかり運んでね」
……寝てる、って分かってて会話してたのか。
この2人……心で通じ合ってるんだな。
そう思うと、なんだか心が温かくなった。
俺は彩華さんに「了解」と言うと、沙彩先輩の小さい手を軽く握った。

第９０話　ひと夏めぐり１

季節は、とぶように過ぎていった。
（なぜか）お父さんが参加した学期始めの三者面談。
ファンタジーな世界に迷い込んだみたいだった遠足。（あの後ちゃんとおはらいしてもらいました）
あわや袋叩きになりそうだったクラスマッチ。結局他のキー大学にいたＧメンの捜索。
男十数人対２人で戦った河川敷。そして、その後は事情徴収とかいろいろ……
「ハデな１学期だったなぁ……」
ハデ……ドハデ……いや、現世離れしたような１学期だった。
「そだね。俺、あんなにドラマみたいな経験した１学期ってないし……たぶん、日本中探しても俺らぐらいじゃない？」
そんな、ドラマみたいな経験は、必ず蒼井君も一緒だった。
そういえば、蒼井君家に行ったこともあったよな……パリス・ボルドレンの第２作見たっけ一緒に。
んで、その後……
「……」
「あれ？どーしたの沙彩先輩。顔赤いけど？」
頬にあたる手の感触で、我に返った。
「あ、いや、えっと、なんでもない！ほら、今夏だし気温も高いじゃん？それに私、極度の暑がりだし！」
「ここ、電車の中だけど……」
蒼井君と、目が合う。
“「今すぐにでもキスしたい……みたいな。もちろん、それ以上も」”
……その時のセリフが、頭の中を過ぎる。
って、何思い出してんだ私は！！！変態か！

パッと目をそらして、広告を見た。
「あ、海宮花火……今週の土曜日にあるんだね」
「花火？もうそんな季節か……」
なんか早いね、と彼は呟く。
去年は、蒼井君と夏姫、たっくんと一緒に行って、咲良ちゃんに「大翔と関わらないで」みたいなことを言われ……桃花とユースケにも会ったっけ。
あの時とは、もう全然違うんだな。
ただ、蒼井君と付き合い始めた、ってだけだけど、随分と変わっているように思える。
きっと……私の中で、蒼井君の存在が大きいせいかな。
「土曜日か……沙彩先輩、午後練終わったら一緒に行かない？」
「え？ほんとに？私から誘おーと思ったんだけど……」
「去年は東郷先輩に巻き込まれた形で行ったからね。今年は2人で行こ」
ニコッとする蒼井君。
クールそうな顔立ちと言葉が妙に合ってなくて、笑ったせいで目元がフニャってなって……でも、そこがまたかわいかった。
「まぁ、去年も夏姫とたっくんが蒸発してほぼ2人でまわったも同然だったけどね……」
「あ、そっか。屋台のおじいさんの話長々と聞いたっけ……」
「んで、りんごあめ屋さんで私がどれ買うか迷ってると……蒼井君、全種類買っちゃうんだもん。ビックリしたよ」
りんご、ぶどう、いちご……その3つが入った袋が少しずっしりしていたのを、今でも思い出せる。
「だって好きな人には喜んでほしーじゃん」
「……」
……なんて、さらって言っちゃうから……途端に、ドキドキした。
「……ちょ、なんかつっこんでよ先輩！」
いたずらが成功した子どもみたいな声で笑うから、つられてフフッ

と笑ってしまった。
……こんなんじゃ、いつまで経っても付き合いたてのカップルみたいだな。
ちょっとしたセリフにも、すぐ反応して照れてしまう。
『まもなく東野、東野に着きます。お降りのお客様は……』
「あ、もう着くね。降りよ」
「ん、そだね」
でも……それで、いい。
これが、私たちのペース……みたいな感じがするから。
いろんなことがあった1学期。それを乗り越えたからこそ、平和に笑い合えていることがいちばん幸せなことなんだって思うんだ。
「てか、蒼井君って去年のこの時期から私のこと好きだったの？」
「うん、そだよ。隠しに隠しまくったつもりだから、全然バレなかったっしょ？そっちは？」
「私はね……」

――――……

……着方、たぶんこれでいいんだよね。うん、よし。
髪を高い位置で束ね、準備完了。
「お母さん、お祭り行ってくんね。9時ぐらいには帰るから」
「ああ、うん。行ってらっさい。お祭りねー……そういえば、涼太郎（父）の部屋掃除してたら甚平が1着消えてたんだけど、あんたどこにあるか知ら……」
オフだから、ゴロゴロしながらテレビを見ているお母さんは、せんべい片手に私の方を振り向く。
（珍しい“日本のお母さんスタイル”は、違和感を感じるとともに「検察庁の紅一点」といういかにもマドンナみたいな通称がにわかに信じがたくなる）
下駄を履いている私の姿を見て……お母さんはせんべいを落とした。

（玄関のすぐ傍がリビングになっている）
「あんた、お祭りって……友だちと行くの？」
「いや、蒼井君とだけど……」
そう言うと、お母さんは素早く立ち上がり「待ってなさい」と言った。
２０秒後、部屋から帰ってきて……
「３分で着付け、５分でヘアスタイル、１０分でメイクしたげるから。しめて１８分……５時発の特急電車には間に合うでしょ？」
「え、ちょ……」
「ほら早く！黒ゴムのポニーテールも速攻外して甚平も部屋で脱いでこれ着なさい！！！」
と言われ、渡されたのは……浴衣の下に着る白装束みたいな白いの。
（肌襦袢のこと）
「でも、浴衣とか似合わ……」
「ハリーッ！！！」
「は、はいっ！」
お母さんが英語を使うっていうことは、結構ヤバいってこと……
ハリー（Ｈｕｒｒｙ）は英語で急げ、ってことだし。
お母さんに言われるまま、白いのに着替え始めた。

――――……

「遅いなぁ蒼井君……」
海宮駅。ホームを出てエントランス状になっているところで、午後練がある蒼井君と待ち合わせをすることになっているけど……１０分経っても来ない。
まさかすっぽかして……！？いや、彼に限ってそんなことはない。
もしかしたら、逆ナンされてるのかも……！！って、そんな心配する彼女ってどーよっ！
１人で悶々と考えていると……

「……わっ！！！」
「ひゃっ！！」
耳元で大声を出されて、思わず飛びのいた。
「あ、あああ、蒼井君かぁ……びっくりしたぁ！」
「ごめんごめん。だって何か考えてるっぽくて全然気づかなかったからさ」
部指定の紺色のジャージの袖を無造作にまくって、いたずらっぽくほほえむ。
部活で汗かいたのか、それか暑くて水をかぶったのか、髪は若干濡れていて……なんだか大人っぽい。
「待たせてごめんね。行こ」
「……ん」
拗ねと照れから短くそう返事して、祭り会場へと向かった。

第９１話　ひと夏めぐり２

そう、あれは１時間前……

「終了――――っ！！！５分ミーティングの後解散！」

部長の掛け声で、１日練習が終わった。

正直……疲れた。午前中はずっとロードワーク、午後からは１ｏｎ１や５ｏｎ５のオンパレード。

ミーティングでも、みんな屍状態だった。

「蒼井、この後時間あるか？海宮花火見に行かねぇ？」

「あ、すみません。彼女と約束してるんで……」

とりあえず暑かったから水道水をかぶって更衣室に戻って髪ふいてると……３年でいちばんデカいと有名な小城先輩がそう言ってきた。

「ふーん、そっか。彼女って、あれか。Ａ組の杉浦か」

「はい。そうですけど……」

「杉浦か、いーな」

「……あの、一応言っときますけど渡しませんよ？」

「いや、そーじゃなく……」

……だったら何なんだ。

背がデカいことに加え、結構なプレイボーイとも名高い小城先輩。

カイジ並みのハスキーボイスと２人だけという空間が手伝ってか、なんか口説かれてる気がする……恐るべしプレイボーイパワー。

手っ取り早く着替えると、更衣室を出た。

「蒼井、蒼井！」

体育館の出口に向かっていると……アク○リアスを片手にした遠藤崎が走ってきた。

「遠藤崎。どした？」

「自販機のとこで蒼井狙いの女子約３０名が待機中ですぜ。みんな今日のお祭りに誘うって言ってたよ！」

「んなまた、変なジョーダン……」

「嘘じゃないもん！このままだったら、あんた完璧に３０人の餌食だよ！うまく自販機避けて行きな！」
遠藤崎の表情からして……マジっぽい。
「……ああ、分かった」
「さーやちゃん待ちぼうけにさせたら許さないからね！んじゃーね！」
「イダッ」
去り際に、胸板に強烈なパンチを食らった。

遠藤崎の言う通り、別の出口から出て校門を出ようとした時……
「おー、蒼井じゃねーか！ちょーどよかった。ちょっと来い！」
「げっ……マジかよ……」
担任のブッチ（田渕）が職員室の窓から手招きしてきた。

――――……

駅のロッカーに部活用品を預け、祭り会場に行く途中に事の成り行きを話した。
「……んで、雑用頼まれて遅れちゃったわけだよ。ほんっとごめん！」
「ん、いーよ……にしてもキョン、グッジョブだね。キョンいなかったら１時間ぐらい待ちぼうけしてたよ」
フフッと笑う沙彩先輩の顔には、怒りの色ひとつ見えない。
こういう時ヒステリックにならないところが、大人っぽいっていうか憧れっていうか……
「でも、今度はうまく撒いてね。１人で結構寂しかったんだから」
「……ん、了解」
でも可愛く拗ねたりして……本当、遠い存在なのか近い存在なのか、よく分からない。
……付き合って、もう約半年。

月日の流れと一緒に彼女のいろんな面を知っていくにつれて、どんどん近い存在になっていって……自分でも怖くなるくらい、どんどん好きになっていく。

「あ、ちょっと飲み物買ってっていい？」

「ああ、うん。いいよ」

傍にあった自販機へ駆けていく沙彩先輩。

薄い紫の生地に赤や黄色の花がプリントされている浴衣姿が、思わず見とれてしまうほどすごく綺麗。

「お待たせー……どーしたの？ボーっとして。気分でも悪い？」

「……あ、ううん。浴衣すっごい似合ってるなーって思って見てただけ」

「……そっか。ありがとう」

そう言うと、彼女は照れくさそうに笑った。

「結構混んでんなー」

海宮花火祭りは、車道を封鎖した海沿いの商店街で行われる。

食べ物の匂い、はしゃぐ子どもの声、威勢のいい屋台主の声。

今更ながら……この場所に部活帰りのジャージ男が居ていいものなのか……（部活道具が入ったエナメルは駅のロッカーに預けた）

沙彩先輩みたく、甚平とかに着替えてＴＰＯをわきまえた方が良かったかな。

「花火って８時からだったよね？あと１時間ちょいあるから屋台とかまわってみない？晩ご飯を兼ねて」

「ん、そーしよっか」

実は結構、腹がヤバい。

沙彩先輩の提案に即賛成した。

「お祭り……といったら、やっぱヤキソバ？あと、たこ焼きかな。しぐれ焼きとか？あ、ホルモン焼きも……」

「Ｂ級グルメが何でもかんでもお祭りであるとは限んないよー！てか、やっぱから揚げっしょ？」

「あ、そっか。紙コップに入ってるやつ？あれなんで紙コップに入れるんだろね」
「さーねー」
そんな話をしていると、前方から見知った人物がやって来た。
「お、大翔に沙彩先輩。あんたらも来てたんだ」
ＴＰＯなんて微塵も気にしちゃいない、バリバリの制服姿のユウヤだ。
隣にセーラー服を着ている女子を連れている。
「ユウヤ君じゃん。久しぶり」
「久しぶりっす先輩。大翔がお世話になっております」
「あ、いえいえ……」
……ユウヤ、お前は俺の親父か。沙彩先輩は少々キョドっている。
「そちらの可愛らしい子は？その制服、東野中だよね。妹さんとか？」
若干ユウヤの影に隠れ気味のその女子について、沙彩先輩は尋ねる。
「いや、妹じゃなくって……」
「う、牛川美玲（ウシカワミレイ）ですっ！東野中学校３年Ｃ組１８番です！！」
すんごい高い声でいきなり喋りだしたから、かなりビックリした。
「ゆ、裕也先輩とは、その、あの……」
「あ、分かった。例の彼女って、この子のこと？」
「うん、そーだよ」
いつか、ユウヤに２つ年下の彼女がいるって話を聞いたことがある。
「へー……にしてもかわいーねぇ。ユウヤ君って年下好きだったんだ？」
「それを言うなら先輩もでしょーがっ」
ハハッと笑うユウヤの傍らで……明らかにタジタジしている牛川さん。
どうやら、人見知りのようらしい。
「ゆ、裕也先輩、この方たちは……」
「あ、そっか。紹介してなかったな。このジャージ野郎が俺のダチ

で蒼井大翔。んで、こっちのヤマトナデシコがその彼女の杉浦沙彩先輩。海宮高の3年生だよ」

「誰がヤマトナデシコじゃいっ！」

……うわ、ピッタリ。ヤマトナデシコっていう単語。

それから、ヤキソバとかから揚げとか買って食べながらしばらく4人で話した後……

「んじゃ、もうそろそろ時間だし……俺らは穴場へ行くとするよ。ついてくんなよ？」

「言われなくてもついてかねーよ」

「そーだ！美玲ちゃん、メアドとケー番交換しよーよ」

「あ、はい！私も言おうと思ってました！」

牛川さんも、すっかり沙彩先輩に懐いた様子。仲良く赤外線通信でアドレスを交換していた。

2人は、穴場へと旅立ち……

「蒼井君はよかったの？美玲ちゃんとアドレス交換しないで……」

「え？何？交換してほしかった？」

「……いや、そんなんじゃないけど……」

いたずらっぽく聞くと、口をとがらせる沙彩先輩。

「……心配しなくても、沙彩先輩以外興味ねーよ」

「え？何何？何て言った？」

「……なんでもなーい」

照れから、わざと無邪気っぽくそう言うとベンチから立ち上がった。

「俺も花火見るのにいー穴場知ってるんだ。行こ」

そう言って、手を差し出す。

なんだか、ワケ分かんないって感じになってる沙彩先輩。

「人もだいぶ混んできたし、はぐれたりしないように手でもつなごーよ」

「あ、そ、そーいうことか……うん、つなご」

たどたどしく俺の掌に手を乗っける先輩。俺はそれを、できるだけ

優しい力で握った。

……1年前の今日。俺は今よりもっと子どもで、沙彩先輩を見上げていた。

身長的には同じ目線だったけど、なんていうか、心の位置や立場が見上げないと見えない距離にあるって感じで。

でも今は……ちょっとでも、少しでも、対等になってきたと思う。

心の距離も近づいてきたと思うんだ。

この人を、ずっとずっと優しく守っていきたいって思うようになってきた。

……花火が打ちあがるまで、あと30分。

第９２話　ひと夏めぐり３

あれは……昨日、見た夢。

――――……

場所は、とある神社だった。

『わーっ！すごーい！！夜なのにお空がキラキラしてる！』

『ねー、キレイねー』

白いワンピースを着た女の人と、抱っこされてる４歳か５歳ぐらいの男の子。

覚えてないけど……なんとなく分かった。

これは、母さんと俺だって。

そして、２人と距離を置いて花火を見ている白衣の男性。

神社に白衣、というアウェイな出で立ち……俺の、知らない方の父親だろうか。

白衣というと……医者か科学者？はたまた塾講師か？

とにかく、傍（ハタ）から見たら父親が少し変わっている家族に見えるだろう。

でも……なんでかな。ある意味では第三者の俺には、かなり訳アリに見える。

『おとーさんもこっちおいでよ！そこ、木ばっかりで全然見えないよー？』

『大翔、お父さん、夜勤で疲れてるの。あんまりしつこく言うと怒られるわよ？』

『えーっ？いつも怒ってるじゃん！』

そう俺が言うと、母さんはひどく困惑した表情になって……ちらっと、父さんの方を見る。

父さんはメガネをかけていて無表情。表情筋は、ピクリとも動かな

かった。
でも……だからこそか、少し悲しげ。
そんな表情のまま、こちらに向かってくる。
『……ごめんな、大翔。こんな父さんで』
俺の手を握り、そう言った。
『新しい父さんになったら、いっぱい遊んでもらいなさい』
『え？なになに？おとーさん、どーいう意味？』
そして……俺の手を離し、神社の境内から消えていった。
『おとーさん、お仕事かな？はなび嫌いなのかな？』
『あっ、ほら、見てみて！大翔の大好きな青色の花火があがってる』
『ほんとだーっ！！』
俺と母さんは、花火が全て打ちあがるまでそこにいた。

……あ、なんとなく思い出した。
この日以来、“お父さん”は、俺の前に二度と姿を現さなくなったんだ……

――――……

「へー、こんなとこに神社ってあったんだー……」
隣にいる沙彩先輩は辺りを見回しながらそう呟く。
広い境内に高く聳（そび）える神木。雑木林はちゃんと手入れされてあって見苦しくない。
神主はいなさそうだけど、放ったらかしではない神社……
「蒼井君、こんなとこに神社あるって知ってたんだ？」
「……ああ、うん」
夢のまんまだ、何もかも。
……何故か俺は、自然と夢の話を先輩にしようと思えてきた。
「……いや、違う」
「え？違うって？」

「ここ、俺が昨日の夜、寝てるときに見た夢の場所。打ち上げ花火があがってて、めっちゃキレイで……どこにあるかは分かんなかったけど、あの花火だけは海宮花火だ、って思ったんだ。なぜか」
「へぇ……その、蒼井君の夢の中では、誰と花火見てたの？」
「４歳ぐらいの俺と、俺の実の両親。……まぁ正確に言うと、父親が俺の前に現れた最後の日の記憶かな。その日以来会ってないから……きっと離婚でもしたと思う。それだけは思い出したけど……父親がどんな人間だったかはどうしても思い出せない」
そこにあった石垣に座り、壁に背をつける。
頭の中には、あの夢の映像がフラッシュバックしていた。
「……蒼井君のお父さんだもん。きっとすごい人だよ」
「すごい人……か。まぁ、医者だったらしいけど」
「それだけじゃなくって、人間的にもすごい人だと思うよ？」
「……どーかな」
さりげなく、俺のことを褒めてくれているような気がした。
でも実際……どーだろな。俺の人間性なんて、高が知れてるだろう。

突然、強い風が吹いて木々がざわめいた。
「うっわ、強い風……髪ぐちゃぐちゃになっちゃった」
先輩はそう言って、サイドでひとまとめにしていた髪をほどく。
……そこで、やっと気づいた。
「あ、誕生日にあげたネックレス、つけてくれてる」
「……やっと気づいたか……いつ気づいてくれるか、ずっとソワソワしてたのに」
苦笑する彼女の胸元で、シルバーのティアラが輝く。
「やっぱ似合うね、すごく」
「……ありがと」
そう言って、可愛らしくはにかんだ。
「でも……慣れないアクセ使っちゃったもんだから、髪がネックレスに絡まっちゃったみたいでさ……」

「あ、ほんとだ」
先輩の両手は、後ろの首筋をまどろっこしく動いている。
その手を制して、チェーンに絡まったダークブラウンの髪を外して、手グシで整えた。
「……ん、これで大丈夫」
そう言って沙彩先輩の顔を見ると……月光が、赤く染まった頬を照らしていた。
「あ、髪ちょっと引っ張ったから痛かった？」
「い、いや……男の人に髪とか首とか触られるのってあんま慣れなくって……」
手の甲を頬に当てて、そう言って照れくさそうに笑ってて……
……それがすっごい可愛く見えて……おかしくなりそうだった。
……いや、もうおかしくなったのかもしれない。
これが……理性（ロゴス）を失う、ってことなのかな。

「……蒼井君？」
彼女の瞳に、声に、引き寄せられるように近づく。
……もしかしたら、俺がその瞳をとらえているんだろうか。
そっと、彼女の顎に手を添える。
「……キス、していいですか？」
……声は聞こえなかったけど……代わりに、その目はゆっくり閉じていって……

花火が遠い遠い、はるか彼方で打ちあがる音を聞きながら、俺たちは初めて唇を重ねた。

――――夢に出るようなずっと昔に、俺は実の父親と、ここで別れた。
……だからかな。あの、すごく動悸が高まった数秒間の中でひたす

ら思ったのは……

“離れたくない”

それだけだった。

でも……いつかは必ず、俺たちは離れてしまう。

何キロも……もしかしたら何千キロも、はたまた何万キロも。

それが、“体”の距離だったら……まだ、ずっとマシだ。

“心”が何万キロも、何億キロも離れてしまったら……どうなってしまうだろう。

せめて、“心”だけは、ずっと一緒にいれますように。

そう願った、夏の日だった。

第９２話　ひと夏めぐり３（後書き）

すんごい更新遅くなってすみません……ｍ（＿＿）ｍ
一応ひと夏めぐりシリーズは完結となります。
次回の更新は、運がよければ６月中旬、それを逃したら７月中旬となりそうです（汗）

第９３話　夏風のざわめき

終業式、前期補習……が終わった。
本格的に“夏休み”といえるシーズンが巡ってきた今日この頃……

「そーいえば私、あんたの通知表見てないんだけど」
お母さんとお昼ご飯の冷麦を食べている時、不意にこんなことを言われたもんだから、おもわずガハッと咽(むせ)た。
「ちょっと、大丈夫？」
「……ん、大丈夫」
海宮高校の通知表は、普通に５段階評価で表されたもの＋定期テストや模試の結果（いわゆる順番）も明記されている。
……言っちゃ何だが、３年生になって成績が落ちた。順番に関しても、５段階評価に関しても。
だから終業式が終わってから通知表は葬っていたんだけど……
「２学期の頭に三者面談もあるんでしょ？成績を把握しておいた方がいいから見せて」
「……はいはい」
日々難事件に果敢に取り組んでいて、７月下旬にはほとんど家に帰らなかったお母さん。
通知表に気づく瞬間が、事件がほぼ片付いた状態でよかったな……と思う。
だって、忙しい時にこの通知表なんか見せたら……

「……沙彩。あんた、成績落ちたわね」
「……あ、あはは……」
……ああもう、史記とかに出てくる表現使ったら、『頭髪上指シ目眦尽ク裂ク（ようするにメッチャ怒っている）』だよ……
仕事に支障が出たに違いないよ。

「4が古典と英語だけってどういうことよ。数学や理科科目にいたっては2とかあるじゃない。それにテストや模試の順番だってそうよ。100番台が4つもあるじゃない。あと模試の平均点が40点すら越えてないって……」

お母さんは、普段クールな分、成績に関してはズケズケ言う。

ああ……思い出したくなかったのに……

「ハッキリ言って、これじゃあ瀬名大島大の法学部なんてムリよ。今度の模試では絶対20番以内……いや、せめて30番以内には入りなさい。命令よ」

「……はい」

お母さんはテーブルに肘をつき、頭を手で支え、溜息をついて……

「涼太郎さんになんて言えばいいかしら……」なんてぼやく。

不穏な空気漂う居間……兄弟（特に弟）がいたら、アホなことか何かしてこの空気を打開させてくれるだろうけど……そんな存在など、この杉浦家にはいない。

「……なんて言っても、いきなり勉強法を変えるなんて沙彩には難しいわよね……事件を起こした被告だって、ずっとじっとしたままじゃあ更生なんてしないわ……」

……犯人と娘を一緒にしないでくださらないかな……なんて思ってると、とんでもないことをお母さんは言った。

「後期補習が始まるまでの2週間、寺小屋に通いなさい。勉強合宿にも参加させてあげるから」

寺小屋……それは、某塾。

江戸時代あたりに、学校の代わりに開かれたのが起源……とも言われる。

「……で、入塾したんだ？」

「そう。明後日から毎日塾生活だよ……先が暗い……」

「大変っすねー、3年生って」

「あ、コレ絶対3番じゃね？」

今日は、入塾前の貴重な息抜き……蒼井家で、Ｗｏｏをやっていた。
内容は、５人でやる“Ｗｏｏ　Ｐａｒｔｙ”
その中でも、個人的クイズとやらで盛り上がりながら塾の話を持ち出した。
「てかさ、みなさん成績ってどんくらい？」
「成績っすか？断トツトップはもちろん大翔で……２位が俺、３位がカイジで４位がシゲオですかね」
「中学からみんな同じ順番なんすよ」
「へぇ……そーなんだ……」
つまり、２年のトップ４はこの４人が独占……ゆえにみなさん頭がいいってことか。
成績落ちて入塾せざるをえない私の気持ちなんて分からないだろーなぁ……

いくらかゲームをやってその結果、１位がユウヤ君、２位がカイジ君。３位がシゲオ君、４位が私で５位が蒼井君という結果になった。
もちろん、罰ゲームもあらかじめ決めてあった。
４位と５位の人は……

「えーっと、飲みもんはオッケー。次は菓子かな」
「やっぱ男の子はスナック菓子派だよねー」
……“コンビニ自腹でおやつを買ってくる”これが罰ゲームだ。
まぁ、ハバネロ５本食いとか尻文字とか、精神的肉体的にキツい罰ゲームじゃないだけよかった。うん。
しかし、蒼井家は周りにコンビニがあるような街中にはないから……コンビニに行くまで、結構疲れる。
「にしても、蒼井君が最下位ってなんかすごいね」
「……ゲームとかやったことないんだよ……アイツら、意外とゲーマーだし」
「ん？負け惜しみですか？大翔くん」

「……」
にんまり笑うと、何も言わずにそっぽ向く蒼井君。
なんていうか……かわいいなぁ。
「……そのジャガイモみたいなやつ（ポテチ）買ったら行こ。なんかここ、おでんくさいし」
「あ、妖怪えびせんも食べたい」
「んじゃ、それもどーぞ」

結局、半分はお金出そうと思ったけど……「いいから」と言って、全て蒼井君持ちになってしまった。
レジ袋2袋分のおやつを、2人で分けて持つ。
「なんか、ただの付き添いみたいになっちゃったなー私」
「別にいーじゃん？」
蒼井君がそう言いながら私と並んで歩く。
そんな……当たり前の光景。
ずっと昔……たとえば、中学生の頃とかだったら、きっと予想さえしなかっただろうな。
「……そういえば蒼井君、記憶はまだ戻ってないの？」
「ああ、うん。まだ完璧には……俺がどういうことしてきたのかさえすら」
もちろんあいつらのことも、と彼は付け加える。
「あいつらには、ずっと俺を加えた4人で時を過ごしてきた記憶があるだろうけどさ……俺にとっちゃ、まだ知り合って1年ぐらいの3人、なんだよな」
「……そっか」
「でも、なんでだろうな……」
そう言うと、蒼井君は立ち止まって私を見る。

「沙彩のことは、ずっと前から好きだった気がするんだ」

そう言って、彼はやわらかくほほえむ。
……傍に立ってるいくつもの樹木についている青葉が、ザザァっと揺れた。
「……だったら、嬉しいな」
袋を持ってない方の手で火照る頬を押さえて、私も笑った。
「……なんか、今の口説き文句みたいだった？」
「うん、まぁ、ちょっと思ったけど」
蒼井君は、頬にあててる私の手をとる。
そのまま指を絡め合わせて手をつないだ。

当たり前に、隣を並んで歩ける。
当たり前に、手をつなぐ。
当たり前に、想いを伝え合う……

ずっとずっと、何年先もいつもそうだったらいいな……

――なんて願う私は、夢の見すぎだったのかな。

家に着くと、自然とその手は解かれた。
「ただいまー。条件通り３０００円分買ってきたぞー」
「お、おうっ！おかえり！大翔、先輩！」
「い、意外と早かったなー！」
……なぜか、しどろもどろな３人。
……変なの。
「蒼井君、ちょっとお手洗い貸してもらっていいかな？」
「ん、どーぞ」
きっと、バレちゃまずいことでもしてたんだろうな。
特に気にも留めず、レジ袋を托して私はお手洗いに行った。

――――……

「何してたんだ？３人でそんな１箇所に固まって」

「い、いや～、別にー？」

２つの袋をテーブルに置きながら聞くと……ユウヤが珍しく動揺しながら答える。

シゲオもカイジも、明らかに目を泳がせていた。

変な空気が２０秒ぐらい流れた後……３人で固まって、何か内緒話をはじめた。

意を決したように俺を見たのは……カイジだった。

「大翔、お前……――――高校卒業したら、留学すんの？」

第９４話　ＧＩＲＬＳ　ＴＡＬＫ～不安にさせる人～

駅のホームに着くと、２人の姿が見えた。
「さーや！おっそい！」
「ごめんごめん……寝坊しちゃってさ。連絡すんの忘れてた……」
「寝坊！？まぁさーやっぽいけど……」
部活帰りでジャージ姿の夏姫が笑いながら怒る。
「んじゃ、とりあえず何か食べ行こー！お腹ペコペコだし」
私服の杏里がそう言った。
ちなみに杏里とは河野さんのこと。
いつまで経っても名字にさん付けはおかしいってことで呼び捨てにすることにしたんだ。
私たち３人は、夏休み中に起こったことを話しながらファミレスに向かった。

ひととおり注文を終わらせ、話題はもちろん……
「……で、最近大翔くんとはどうなの？」
……問答無用で、恋バナ。
「えっと……うーんと……まぁ、ぼちぼち」
「なんじゃそりゃっ！なんかあるっしょー？ほら、デートしたとかキスしたとか……」
「キ……！？」
頭の中を、海宮祭りでの一件がよぎる。
……うわヤバい。なんか顔があつい。
「……おおっ、ついに！？」
「キャー！やったじゃんさーや！」
何も言ってないけど、顔の火照りから悟られたらしい。
火照り冷ましをかねて、水の入ったグラスを頬に当てた。
「で、いつ！？いつ！？」

「……海宮花火見てるとき……かな。緊張しすぎて花火とか見てる場合じゃなかったけど……」
「へぇー！すっごいロマンチックじゃん！」
ロマンチストな杏里は笑顔でそう言うが……夏姫はなぜか、神妙な顔つきをしている。
どうしたの？って聞いてみると……
「ねぇさーや、海宮祭りっていつだったっけ？」
「え？んーっと……7月初旬？」
「今何月？」
「8月中旬……」
「ってことは……もう1ヵ月以上キスしてないの！？大翔くんと！！！」
「ちょっ、夏姫、声でかいよ！」
いきなり出した大声で、周りの視線が一気に集まる。
あ、確かにそっか、と杏里も言った。
「……だってしょうがないじゃん……一応私受験生だし、塾ばっかだし……今だって、貴重な空き時間抜け出して来てるんだよ？」
今通ってる塾は、夏期の短期特別コース。午前8時から夜9時まで、（お昼休憩や休み時間除く）10時間みっちりフルコース。まる1日の休みもない。
……塾講師さんに申し訳ない気分になる。
ちなみに空き時間というのは、3日に1回ある小論文や面接対策の時間。主にAO入試を受ける人がやってて、一般入試を受ける予定の私には無縁なもの。
この空き時間だけは、ショッピングに行ったり映画を観たりしている。それか自習。
……これが、ここ最近の毎日。
「まぁそっか……さーやは国立ギリギリだもんね。もしくはギリ以下だもんね」
「あの、杏里さん……結構刺さるよ？その言葉……」

でも、そのみっちりフルコースのおかげで多少は学力が上がってきている今日この頃だ。

「でもさ、大翔くんって2年生でしょ？2年生といったら……部活に遊び、勉強は二の次って学年じゃん。さーやが塾で忙しいってことに安心して、他の女の子に目移りしちゃうかもよ？」

「なっ……あ、蒼井君はしないもん……浮気なんか……」

「いやいや、バスケ部って結構いい子いるって聞くよ？2年でいちばん可愛いっていうカナちゃんとか、めーっちゃ胸デカいエミリちゃんとか、さーやに引けをとらない美人のナナちゃんとか……」

「それに、“あの”蒼井様じゃん。さーやがいるっていったって、告る子は後を絶たないと思うなー」

……なんか、だんだん不安になってきたんだけど……

確かに、バスケ部女子はかわいいってことで有名。

同学年でもそうだし、下学年でもきっとそうだ。

しかも、蒼井君は優しくてめっちゃいい人で……付き合ってから、一層そう思うようになった。

だから、きっと私には言わないだけでいっぱい告られたりしてるんだろう。

疑うなんて最低なことだと思うけど……やっぱり、不安にならずにはいられない。

「……って、おーい？さーや？」

「……あ、うん。なに？」

「ごめん、ちょっと言い過ぎたかも……別に、他の子と一緒にいるとこ見たわけじゃないし、あくまで予想だからあんまり深く考えないでね？」

「ん……分かった」

そう言うと、力なく笑った。

それから、いろんな話をした。（まぁ主に夏姫ののろけ話だけど……）

そして新事実が……なんと杏里に彼氏ができたみたい。
杏里のことだから、きっとイケメンを仕留めたんだろうな……と予想しつつ、今度紹介するって約束もした。
あっという間に2時間が過ぎて……海宮駅。
「んじゃさーや、塾がんばってね！」
「バイバーイ！」
改札で2人と分かれて……1人、電車の中。
そして、電車に揺られて……東野駅。そして塾。
それからは、いつもの塾時間サイクル……

――この中に、蒼井君がいたらな……

そう思えて、やまなかった。

――……

「おつかれーさーや！バイバーイ！」
「ん、バイバイ」
「さーやおつー」
「じゃーねさーや！」
塾で出来た、元同中の子が続々と帰ってゆく。
中学生のころ、友だちという友だちがいなかったけど……雰囲気が丸くなったせいなのか、いろんな同中の子が話しかけてきてくれて、友だちがめっちゃ増えた。
……それだけは、嬉しいことだな。
「さてと……私も帰るか」
また明日から、同じ１０時間サイクルが待っている……
でも、それもあと5日だ。
それと同時に、後期補習が始まるまであと5日ってことになるんだけど……

「よーっす、杉浦！」
「……へ？」
荷物を持って、出口に行こうとする途中……たむろっていた男子３人組のうち１人に声をかけられた。
「えーっと……誰？」
「覚えてねーの？同中の秋田だよ！」
「はぁ……全然」
「まぁしゃーないか。１回も同じクラスになったことなかったしな」
１人は茶髪、もう１人はすんごい腰パン、そしてもう１人はピアス……
なんかガラ悪いなぁ……きっと、成績悪すぎて親に無理矢理塾に入れさせられた輩（ヤカラ）なんだろう。
無視して通り過ぎようとしたが、「おいおいおい」と止められた。
「無視すかー？数年ぶりの再会なのにー」
「だから知らないっつの……それに親来てるし……」
「ウソだ。いつもあんたが乗ってる黒のオープンカーないし」
窓から駐車場を見る。
いつも「夜遅いから」と、帰りはお母さんに迎えに来てもらってるが……今日に限って来ていない。
……でもなんでオープンカーで迎えに来てもらっているというのをコイツ等は知ってるんだろうか。
「なぁ、親来るまで俺らと遊ばね？ぶっちゃけあんたに興味あんだよね俺ら。ほら、超美人になってるし？」
「は？やだよ。誰がアンタ等なんかと……」
「いーからさ！ちょこっとカラオケでも……」
そう言って、１人が私の手首をつかむ。
振りほどこうとしても、勉強で疲れたせいか全然力が入らない。
それに……まだ蒼井君のことがひっかかってるんだ。
あぁもう……なんか、全てが上手くいかないような気がしてくる……
自然と、頭は下向きになってしまった。目にはなぜか、涙が溜まり

始めている。

……その時、誰かの手によって、私の掴まれていた手首が放たれた。
そして、私の手を握る。
「んだよテメェ、誰だ!?」
ギャンギャンわめく3人相手に、その人はこう言った。

「うるせーな……沙彩の彼氏だよ」

……え?
顔を上げると、その人は「行くぞ」と言って私の手を引っぱった。
「ちぇっ、男いんのかよ。マジ萎えるわ」
そんな声を背に受ける、その後姿は……紛れもなく、その人だった。
私を不安にさせてやまない、蒼井君だった。

無言が続いて、気がつくと家の近くまで来ていた。
その間も、ずっと手はしっかり握られたままで……
「なかなか出てこないから心配になって入ったけど……誰?あの人たち。もしかして知り合いだった?」
「同中の人……全然覚えてないけど……でも、どうして蒼井君が?」
「杉浦刑事から電話もらったんだよ。「急なヤマが入ってきて、迎えにいけないから沙彩迎えに行って」って。その後泊りがけで現場検証するんだって。なんかすごく急いでたみたいだけど……」
「そっか……」
……すごく、嬉しかった。
あの時、まるでネガティヴのどん底から救われたように……
……救ってくれたのは、隣にいる私を不安にさせてやまない……言い換えれば、恋しく思ってやまない、愛しい愛しい人。

横顔を見てると、なぜか胸の奥が熱くなる。
「夕飯のことも頼まれちゃってさ。丁度俺も飯食ってないし、どっか食べ行こ。どこがい……」
そう言って、私の方を見た蒼井君の声が止まった。
……私が、手を引っぱって背伸びして……心の動くままに彼にキスをしたからだ。
「よかったらでいいんだけど……今日、泊まってくれないかな」
……ハタから見たら、すごいお願いをしているかのように聞こえるかもしれない。
でも、私は……素直に、もっと蒼井君と一緒にいたいなって思ったんだ。

第９５話　夢の中で

さっきは、なんか怪しくなりそうな雰囲気だったけど……
その後、家の近くにあるファミレスに入り、なんとかいつもの雰囲気に戻った。
いつもの雰囲気……というのは、くだらない話で盛り上がったり笑い合ったり、という感じ。
「ユウヤが彼女とケンカしちゃったみたいでさ、ユウヤ超ヘコんでんの。なんでだと思う？」
「え？なんでだろ……美玲ちゃんが何か言ったの？」
「そう！「アンタみたいなオッサン、もう知らない！」って言われたんだってさ。コンビニ入ったとき悲しい目で育毛剤見てたよ」
「言うねー美玲ちゃん」
こんな感じの話ばかりで……すっかり、不安な心も溶けていた。

でも……そんな心はすぐに、また出てくる。
「おじゃましまーす」
「どーぞどーぞ」
それは、蒼井君を家に入れてから後のこと。

「でもいーのかな。勝手におじゃまして……」
「ん、大丈夫だよ。お母さん、こんな時間から現場検証するとなったら次の日のお昼まで帰って来ないし……あ、そこのソファに座ってて」
若干緊張しながら、クーラーをつけて２つのグラスにお茶を注ぐ。
両親はいない、完全に２人っきりの空間……なんだか、妙にドキドキする。
お茶を注ぐのだって、少しままならない。
「手伝おっか？」

「いや、いーよ」
……対して、蒼井君は余裕のその一言……もしかして、緊張してるのは私だけなのかな。
……まぁ、今更緊張したっておかしいかな。
「お待たせ！はい、どーぞ」
「ありがと」
お茶と冷蔵庫にあった少しのお菓子が乗ったおぼんをテーブルにのせ、グラスを持って蒼井君の横に座る。
目の前にあるテレビの電源を入れると……
『恐怖の心霊映像ランキング、続いて第２５位！』
真夏にぴったり、心霊番組の特集。
始まってすぐのせいか、順位がまだ下の方。映像もＣＧらしいものばかりで……
「ちょっと風呂入ってきていい？」
「あ、うん。いいよ」
まじまじとテレビを見ている蒼井君にそう言って、風呂場へ向かう。
……付き合うことって、２人っきりの空間になることさえ当たり前になってしまうのかな。
それさえ覚束ない自分って……まるで、ずっと１人で恋をしているようだ。
……すぐ壊れてしまうような、もろい仲を夢見ているようだ。
そう考えると……なぜか、異様にゾッとした。
現実には、すぐ壊れてしまうもろい仲……そんな仲に、私と蒼井君はなってしまったのだ。
おかしいな……１年前の今頃は、恋なんて、恋人なんて要らないと思っていたはずなのに。
そんなもろい仲になっていたら、時間の無駄だと思っていたのに……
――――……

テレビには、続々と幽霊が出てくる映像……言い換えると、幽霊が出てくるＶＴＲが流れていた。
……数十分前の、不意打ちのキスを思い出す。
泊まっていかないか？という言葉に、一瞬でもヤバいことを考えた自分を……あの時に帰って殴りたくなる。
きっと、彼女には“そういう気”はないだろう。いや、絶対。
あの目を見て、分かった。
「そりゃあ、不安になってもしゃーないよな……」
ここ数週間、会うことはもちろん電話もメールもしていない。
塾でクタクタになってる先輩には１分でも長く休んでほしい……というのは建前で、ほんとは部活が忙しすぎて俺がコンタクトをとる余裕がなかった。
そのことを引退した頼れる先輩である（ということにしておこう）小城先輩に相談したところ……
「アホか！！そんなこと考えている暇あったら疲れていようが筋肉痛だろうが会いに行きなさい！！！彼氏に会えて嬉しくねー彼女なんていねーんだぞ！？」と一喝入れられた……
……そして、今。
彼女を不安を和らげるには、どうすりゃいいんだろうか……そればっかり考えている。
抱きしめる？キスをする？……いや、それじゃかえって変な雰囲気になってしまう。
大体、怖い特番見ながらそんなことするカップルっているんだろうか……
などと、悶々と考えていた。

ホラー特集もいよいよ大詰め。トップ１０に差し掛かった。
意外と長風呂なんだな……かれこれ、４０分ぐらい出てこない。
『続いて第９位！！』
テレビがそう言ったとき……ガッシャーンと、大きな物音がした。

急いで立ち上がると、先輩が行った方向（おそらく風呂場）に向かう。
「今すごい音したけど、大丈夫？」
一応扉に向かってそう聞くけど……何も返事がない。
「沙彩？沙彩先輩？」
さっきより大きめに声を出したが、やはり何も返事がなかった。
なんか変な胸騒ぎがする……そんな気がした。
扉を開けると……奥に洗剤やら掃除用具などが散らばっていて、バスタオルを巻いた先輩がうつ伏せで倒れていた。
「ちょっ、どーした！？」
慌てて近寄り、先輩の肌に触れると……すごく熱かった。首に手をあててみると、脈の速さも尋常じゃなかった。
のぼせた？いや、ただののぼせじゃない。顔を見たらすぐに分かった。
とりあえず、なにか着るもの……咄嗟に目についた、ハンガー掛けのバスローブを手に取り、床に広げて沙彩先輩をその上にのせて、袖に腕を通させた。
前身ごろを閉じ、バスタオルを抜き取って帯をしめた。これで一応湯冷めは防げる。
沙彩先輩を抱き上げると、次は元のリビングに戻ってソファに寝かせた。
「冷凍庫……勝手に使ってもいいかな」
……いや、使わせていただきます。ごめんなさい。
心の中でそう謝ると、ポリ袋に氷を入れた簡易氷嚢をタオルで包み、先輩の首の下にすべりこませた。
もしかしたら、熱があったのかもしれない……あの熱さは尋常じゃなかったから。
そんな仮定が生まれ、氷枕を頭の下にいれて冷却シートを額に貼った。
これでひとまず安心……と思ったとき、ものすごい悲鳴が聞こえビ

クッとなった。
「……なんだテレビか」
画面は、トップ5を終えてトップ4に差し掛かっていた。

――――……

風呂場で、いきなり意識がとんじゃって……気がつくと、なぜか毛布にくるまれててソファの上にいた。
「あ、起きた？大丈夫？」
心配そうに覗き込む蒼井君。首元にはひんやりした感覚……
それになんでだろう。体がだるくて全然動けない。
「テレビ見てたらすごい物音がして、行ってみたら倒れててこっちに運んだんだけど、全然目も覚まさないし熱もとれてないし……もしかして、風邪でもひいた？」
時計に目をやると、もう12時をまわっていた。
……こんな時間まで、ずっと看ていてくれたんだろか……
「……ん、そうかも……風邪なんてめったにひかないけど……ごめんね、迷惑かけて……」
「ううん。彼女だし、全然迷惑じゃねーよ」
なんて言いながら優しくほほえんで頭にポンと手を置く。
当たり前のように「彼女」と呼んでくれること。
私1人が恋をしているわけじゃない……両想いだってこと。
途轍もない……安心感。
……私はずっと、“くだらない”“時間の無駄”と思い続けた恋人関係の裏にこれがあることを望んでいたのかな。
「へへっ……ありがとう、蒼井君……大好きだよ……ずっと一緒にいようね……」
……きっと、そうだろう。
だって、こんなにも愛しさがあふれて心地よくなれるんだから。
そう思いながら、再び、眠りについた。

――――……

次に目を覚ますと、すっかり気分は晴れやかになっていた。

すっごく気持ちいい夢を見ていたような気がする……もう、覚えてないけど。

「あ、ただいま。沙彩。元気だったか？」

ご飯を作りにキッチンへ向かうと……モッサリしたおっさんがいた。

「……えと、誰？」

「数ヶ月ぶりに再会した父親に向かって誰とは失礼な」

「あ、お父さんか。どしたの？」

「どしたの？って……休暇に決まってんだろ。お前こそ、どしたんだよ。彩華のバスローブ着てさ。それ、あいつの一番のお気に入りじゃないか？まぁ何を隠そう俺がプレゼントした……」

あ、ほんとだ。私、お母さんのバスローブ着てる……でもなんで？

……そういや、脱衣場で倒れてから記憶が全くない……

あ、そうだ、蒼井君……

「お父さん、蒼井君見なかった？」

「蒼井？ああ、あいつなら俺が帰ってきたとき帰ってったぞ。なんかひどく眠そうだったが……」

うそ……じゃあ、私が倒れてから彼を放ったらかしにしてしまったのか？

いや、もしそうだったら脱衣場で寝起きしたことになるだろう。私は。

……しかも、脱衣場ではバスタオル一枚だったよ、私。でも今はバスローブ……

……てことは……

「そういやお前、ピンピンしてっけど風邪ひいてるんじゃなかったのか？あの蒼井が言ってたけど……」

……あ、蒼井君が倒れてる私を見つけてバスローブに着替えさせて夜通しで看病してくれたってこと！？

「って、やっぱお前顔蒼いじゃん。寝とけ寝とけ。塾サボれ。彩華

には内緒にしてお……」

私は風の速さで自室に戻りケータイを取り出した。

それから、私が蒼井君に向けての謝罪メールを送ったのは……言うまでもない。

第９６話　異例の代理人１～ＶＩＰ～

「あーもーっ！！！全っ然終わんなぁぁぁい！！！」
後期補習も、もう終盤。３日後には二学期が始まる。
今、私たちは二学期の期首テストという学期始めのテスト……いわゆる、“夏休みの宿題サボッてたらバレまっせテスト”に向けて勉強をしている。
「夏姫、うるさいよ」
「東郷先輩、宿題すら終わってないってキツくないっすか？」
「休みの間ずーっと俺と遊んでたからこーなるんだよーハハハ」
メンバーは私、蒼井君、夏姫にたっくん。
３－Ａに、“このクラスの女子２人”“他クラス男子”“２年男子”が集まっている少し異様な光景に周りからは注目買ってるが……
そんなことは気にする間もない。
「ううう……同情の声がひとつもない……」
私立を志望校にしている夏姫。もちろん、彼女の学力では合格圏内バッチリだ。
だから高校生活最後の夏休みを満喫しようと、ずーっと遊んでいたらしい……
「しかし……やっぱすごいなぁ、３年生……教室の空気がピリッとしてる……」
周りを見渡して蒼井君が言う。
手元には、文系の私たちには理解不能なアルファベットと小文字が連なっていた。（おそらく化学だろう）
普通期首テストは国数英の３教科だが、教科ごとの先生によって理社科目の期首テストが出される場合がある。
もちろん、文系進学コースのＡ組は日本史と政経、生物の期首テストが予定されているから……勉強ばっかしなくちゃいけないのだ。
でも、だからといって……このピリピリ感はヤバい。

「体育祭だってあるっていうのにねぇ。まぁ、シーズンになったら一気に騒ぎ出すよ」
「さーやは騒ぎ出すどころかサボりそうだよねぇ……」
「えー？人聞き悪いなぁ夏姫ー」
1、2年と、あまり準備に協力する方じゃなかったから……今年は多分一生のうちで最後の体育祭だから、準備からしっかり手伝おう……と思う。
そう思いながらペンを走らせていた。
「蒼井君、ちょっと聞いていいかな？」
「ん、何？」
「ここの問題だけど、内接円の面積ってどうやったら分かるの？」
「ああ、これだったらまず余弦定理使って各辺の長さ出してから……」
隣にいる蒼井君に、数学で分からなかったところを聞く。
聞きつつも……やっぱ気になってしまうのは、彼の髪。
「……ってこと。分かった？」
「バッチリ。ありがと。さすが数学の神だね」
蒼井君の頭の上に手を置きながらそう言う。
後期補習入るときに、気合入れたいからって言って結構切って……
「沙彩さん、最近会う度に髪触ってますよね……」
「え？いーじゃん。この髪型好きだもん」
「まぁ最近またちょっと伸びたけどね」
できあがった髪型が、自分の中で結構ウケて……こうして触るのが、ひそかな楽しみでもあったりする。
「こらこらーそこのバカップル！テスト勉強はー？」
「はいはーい」

時刻は15時。午前中は補習で午後からずっと勉強して……いつのまにかそんな時間になっていた。
「あっ、ヤベッ。30分からだった……早めに行ってウォーミング

アップの指揮とらないと」
時計を確認するや否や、蒼井君は自分の勉強道具を手際よく片付け始めた。
「それじゃ、さよならみなさん！勉強がんばってくださいね」
「おう！じゃーなー蒼井！」
「またね、蒼井君」
大変だなぁ蒼井君……勉強に部活動に。キャプテンらしいから、なおさらだよね。
「……おっしゃあああ！！！宿題オワタァァ！！！……って、あれ？大翔くんは？？」
「うん、さっき部活に行ったよ」
集中の魔の手から解き放たれた夏姫は、数時間ぶりに顔を机から離した。
たっくんも私もひと段落ついたし……
「どーしよっかなぁ……早めの電車で帰ろっかな……それともどっか寄ろうかな……」
「おっ、帰る系っすかぁ？さーやさぁん」
テンションが上がっている様子の夏姫さんは、意味もなく隣に来て私の肘をつつく。
「じゃーさ、3人で新しくできたカフェにでも行かない？ケーキいっぱいあるんだよ！」
「いや、やめとくよ。“ご褒美デート”として2人で行ってらっさい」
こう見えて私にも、お邪魔虫の概念ぐらいあるんです。
「そう？もったいないなぁ……んじゃあたっくん、2人で行こ！」
「オッケー。んじゃーなさーや……あ、そういや蒼井部活行ったよな？見学でも行ったら？」
「ん、そーしよっかな」
そんなこんなで、体育館前。

「おおお……」

ギャラリーが結構いる中で、新生海宮バスケ部はウォーミングアップをしていた。

今日はバレー部が休みらしく、コート両面使っていて……片面を海宮、もう片面を見知らぬユニフォームの高校が使っていた。

ていうか……ここからじゃ遠くてあまり見えないな……と思っていたところ

「よっ！蒼井の彼女じゃねーか！」

肩をポンッとたたかれ、振り返ると……腹。さらに見上げると……とんでもない巨男がいた。

身長推定１９０センチの……

「……誰だっけ……」

「おいおいおい、「誰だっけ」はねーんじゃね？小城だよ、忘れちまったか？」

「……ああ、そっか」

彼がそう言い、やっと思い出した。

そーだ小城だ。１年の時同じクラスだった……

「今日はさ、新生チームになってから初めての練習試合なんだぜ！杉浦は新キャプテンの彼女だから特別にＶＩＰルームに連れてってやるよ！」

「あ、ああ……そりゃどうも……頼んでないけど……」

脚が長い高身長で結構なイケメン（でもゲイ）でモテるとして有名な小城だが……なんか押し付けがましいところが癪に障るんだよなぁ。ギラギラした生粋の肉食男子っつーかなんというか。

ＶＩＰルーム、というのはステージの下だった。

「どう？ここだったら、他のギャラリーと違って超間近で見れるぞ」

「……ん、そだね」

窓や入口出口付近で群がっているギャラリーたちを見て小城が言った。

若干視線が気になるけど……そんなのはどーでもよくなるくらい、練習に見入ってしまった。

ボールが床にたたきつけられる音、シューズのこすれる音、ゴールに吸い込まれていくボール……シュカッていう擬音がぴったりなシュート音。ただのシュート練習なのに見入ってしまう。

そして何より、蒼井君……ボールさばき、そして計算されつくした外れのないシュート……

「……浦、杉浦……杉浦！」

「え、あ、はい。何？」

「あんたただのシュート練習に見入りすぎ！よっぽど蒼井に惚れてんだなぁ」

「……まぁそれもあるけど……ちょっと懐かしくってね」

４年ぐらい前の今の時期……私も蒼井君と同じ東野中女子バスケ部キャプテンだった日を少し思い起こしていたのだ。

「私、中学校の頃……」

「知ってるよ。杉浦、東野中のキャプテンだったろ？」

「……知ってるの？」

「ああ。東野中って基本的に男女別だろ？東野中に練習試合行っても野郎ばっかでさ……んで、合同ミーティングの後男子の中で結構話にあがってたんだ。「ウチの女子キャプテンの杉浦、超すげぇんだぜ」ってな。まさか高校で一緒になるとは思ってなかったけど」

淡々と、その巨人は語る。

「そんなスゲェ奴だったら高校でもバスケやんのかな……って思ってたら……」

「ごめん……電車通だから運動部入ってたらいろいろと不便なんだ。しかも、片親は出稼ぎで片親は不在気味だから帰ったら家事とかいろいろしなきゃで……」

って、何弁明してんだ私は。

「いやいや、別にいーんだけどよ……まぁちょっと見てみたかったなーっていうかなんというか……ということで！蒼井ー！マネージ

ャー！ちょっと来てくれ！」
……ん？なんか妙な流れに……
「なんすか……って、あれ？沙彩……いや、杉浦先輩？なんでここに……」
「んー、なんか連れてこられたっていうか拉致られたっていうかなんというか……」
蒼井君は私を見るなり“杉浦先輩”呼ばわり。やっぱ隣の巨人が関係しているんだろう。
「蒼井、今日たしか山西休みだよな？」
「ああ、はい。夏風邪ひいたみたいで……」
「山西の代わりに、杉浦を入れる！異存ねーな？」
「「……は！？」」
蒼井君と私の声が重なって、二人で目を合わせた。

第９７話　異例の代理人２～不可能な現実～

「……もしかして、最初からそのつもりだったの？」
「まぁ半分そーかな」
うわ……素直に認めたやがったぞ。
「でも大丈夫！あんた、あの強豪東野中のキャプテンだしな！」
「元、ね」
「伊佐垣高校（対戦校）の男子ぐらいどーってことねーだろ？」
「いや、一応女子ですが……しかも見た感じゴリラみたいなのばっかですが……」
伊佐垣高は県下でもトップクラスのバスケの強豪校だ、ってどっかで聞いたような……
「そーっすよ小城先輩。いくら杉浦先輩が最強だからって……ブランクもあるだろうし……」
あ、蒼井君、最強って……あなたの中で私は一体どれほどすごい存在なんですか。
大丈夫！と言い、小城は親指を立てる。
「この前のクラスマッチで男子の群れのなかでも大丈夫だと確信した！！」
……うわ、見られた。あの暗黒のクラスマッチ……（８２話～８４話参照）
大丈夫、と連呼する彼はどうやら“大丈夫”が口癖らしい。
マネージャーにユニフォームの準備を頼みながら、彼は続けた。
「それに、この新生チームは率直に言うと実力者とそうでない者の格差がデカい。なるべくそうでない者も出させたいんだけど……今は実践させるより観察させることが重要だと思うんだ……」
次々と自論を唱え続ける小城……
「蒼井君、他に監督とかコーチとかの姿が見当たらないんだけど……」

「ああ、職員会で遅れるから代理の小城先輩が臨時コーチなんだ、今日は」
なるほど。だからこんなに偉そうなんだね。
……じゃあお前がやれよ、っていう典型的なツッコミは効かないわけだ。
「……ってことで、杉浦！君しかいないんだ！」
……じゃあ、どうすることもできないじゃないか。
小さくため息をつくと
「しょうがない……いっちょやってやりましょうじゃないか。代わりにアイスでもおごってよね」
「おおっ！サンキュー杉浦！アイスでもジュースでも昼飯でもおごってやるよ！」
「あ、あの、これユニフォームです……」
「ん、どうも」
タジタジしているマネージャーからユニフォームを受け取った。
「じゃ、蒼井君、部室か更衣室まで案内してくれる？」
「ああ、うん」

「ほんとに大丈夫？」
バスケ部男子の部室に入って、完備されているシャワー室で着替えをしていると……衝立越しに蒼井君がそう言った。
「何が？」
「いや何がって……伊佐との試合」
伊佐、とは伊佐垣高校の略称だ。
「君、言ったじゃん？私は最強だって」
「まぁそうだけど……いくらなんでもあぶねーじゃん。阻止しようと思ったら沙彩さん呆気なくオッケーしちゃうし」
「……蒼井君。普通、チームメイトにそんな心配する？」
着替えが終わりシャワー室から出て、鏡の前に立ち髪を高い位置で結ぶ。

伊佐、とは伊佐垣高校の略称だ。
女子の部室から借りてきたメイク落としでマスカラ、アイシャドウ、チーク、口紅を落とした。
「チームメイトって……」
「今から、蒼井君と私は彼氏彼女じゃなくってチームメイト。これならそんな余計な心配はいらないでしょ？」
コンシーラーで唇の色を抑えて、アイブローペンシルでいつもの眉に少し濃さを出す。
「まぁ、同じチームでやるわけだからそうかもしんないけど……あ、そういえば演劇部の部室で何借りたの？」
……とうとうきたか。実は、演劇部の子に借り物をしたんだ。
「フフ……さらしとネットとショートウィッグ」
後者2つを取り出しながら、不敵な笑みを浮かべた。
「ウィッグ……って、まさか」
「そう、そのまさか」
ネットをかぶって、男子用のショートウィッグをかぶる。
ずれないようにピンで固定して……っと。
「男装……ってとこかな」
……よし。なかなかのイケメンが出来上がったぞ。
「どう？」
「いや、どう？って……それじゃあますます危ないじゃん。本気でかかってくるぞ、伊佐のメンツ」
「……って思うほど、男子に見えるってわけね？よかった」
棚の上に置いてある、予備のバッシュとアンクルソックスを取った。
「アホかと思われるだろうけど……結構ワクワクしてるんだ。久々に本気でバスケできること。授業じゃどうしても手加減しちゃうから」
バッシュの中に足を入れ、紐の調節をしながら続けた。
「しかも、蒼井君と同じチームで試合できるなんて……普通ないじゃん？あ、男装してるのはこっちのハンデを減らすため……んで伊

佐垣高校に本気できてほしいからよ。やっぱやるからには両チームに利益があるようにしないと」
紐の調節が終わり、立ち上がった。
「まぁこんなこと言うと、小城の策略通りに動かされてるような気がしてちょっと悔しいんだけどさ」
「ハァ……ほんっと沙彩さんはズレてんなぁ」
蒼井君は隣に来て、運動靴を履く。
「そこまで考えがあるんなら、キャプテンとして許す。でも、頼むから無理だけはすんな。性別も体格も違うんだから」
「分かってるって。ほら行こ」
さて……いっちょ暴れてやりますか。
男相手なら容赦しないもんね。

――――……

ショートウィッグを取り出した時点で、「まさか男装するんじゃ……」って思った。
昨今流行っている“男装女子”……それに萌えて取って喰っちまう男子がいるんじゃないか、っていう危機感も生まれ……否。そうはさせるか。
そう思った時に見た、沙彩さんの男装は……完璧な男子だった。

「あっ、そうだ。私……いや、俺の名前は1年の杉浦涼二（スギウラリョウジ）で」
「え？なんで涼二？」
「お父さんが“涼太郎”だからさ。男だったら涼二にしたのに……ってこの前ぼやいてたし」
そう言いながら隣を歩く彼女……いや、今はメンバーか。
薄い色の唇、少し濃く太い眉。チークがかかっていないフラットな色の肌……
顔は元から綺麗なつくりだから、男装しても全然違和感がない。

しかも、背も“ちょっと小柄な1年男子”で通用する１６６?。（３年になってからまた１ｃｍ伸びたらしい）
「蒼井君も女装したらいいのにー名前は蒼井ヒロコで」
「やめてくれ……」
多分見れたものじゃないだろう。

「おー杉浦！似合うじゃねーかそのユニフォー……って、あれ?」
「杉浦先輩なら先生に呼ばれて職員室行きました。代わりに……て言っちゃなんですが、杉浦先輩……の弟呼んできましたよ。１年です」
「ほー。杉浦の弟か……そういや似てるな……さっすがアイツの弟。結構な美少年じゃねーか……」
……そんな見んといてください……って言っているような表情を沙彩さんは浮かべていた。
「……い、今は部活入ってないんスけど……去年、東野中でキャプテンやってました。お役に立てたら嬉しいです」
やや引きつった表情で沙彩さんは言う。
そりゃ引きつるよな……同級生に敬語使うなんて。しかも声をワントーン下げてしゃべっているから、なおさらだ。
「んー、でも3年の時練習試合に行ったときは“杉浦の弟”なんていなかったような……」
「あ……そん時はまだレギュラーじゃなかったっスから……1年なんで当たり前っス」
「そーかそーか……まぁいい。名前はなんてゆーの?」
「涼二っス」
「涼二な。分かった。ヨロシクな!」
いつもより数倍先輩風吹かしている小城先輩を目の前にして……沙彩さん、なんか嫌そうだ。
「おーっし!練習終了!全員こっち集まれーい!」
小城先輩……いや、今日は小城コーチが召集をかけ、メンバー全員

が集まった。

コーチの話が終わると、給水してからゲームスタート。

「す、杉浦君！ドリンクどーぞ！」

「あとタオルも！」

女子マネージャー3人が、話が終わったとたんに沙彩さんのところへ駆けつける。

「おーサンキュ。ちょうどどうしようか迷ってたとこだった」

……そーだった。タオルとかドリンクとか渡していなかったんだった。

「しっかしマネージャーも大変だよなぁ……コート整備とか部員の面倒見るとか大変だろ？」

「い、いいえ！それがしたくた入ったようなもんですから……」

「俺だったらできねーなぁ、雑用なんて……ほんと君たち偉いよ。がんばってね」

沙彩さん、男喋りがだいぶ板についてきているけど……

その分、内容が“沙彩さん”っぽいっていうか女子視点というかなんというか。

ちっちゃいとこもちゃんと見てて褒めてくれる沙彩さんの話は、俺も他の人も聞いててうれしいものだけど……仮にも男子から女子に、だったらちょっと違和感あるんだよな。

“口説き慣れたホスト”みたいな……

って、何変な解釈してんだ俺は。あーいう奴もいるぞ、うん。……いないけど。

しかも、相手のマネージャーときたら……はにかんで若干視線逸らしている。

あー、なんでこんなイラつくんだろう……沙彩さんは男装してるけど女子で、その相手も女子マネ（でも3人）で、実質上女子同士の会話風景……

……もし、自分が女子で彼氏が女をはべらしているところを目撃し

たらこんな気持ちになるんだろうか……
「おい、大翔」
「あ？」
「すんげぇ怖ぇ顔してるぞ。なんか作戦あんの？」
無意識にひきつっていた顔をメンバーから指摘されて直し、別に、とつぶやいた。
そのメンバー……もとい、副キャプテンの田中真彦（タナカマサヒコ）は「じゃあどうしたんだよ」と聞いてきた。
「お前にだけは言うけど……代理の杉浦っていう1年……実は3年の女子なんだ。しかも俺の彼女の……」
「え？アイツ、杉浦沙彩本人なわけ？」
クールな真彦は特に声をあげるわけでもなく、沙彩さんを凝視した。
そりゃそうだよな……男子にしか見えないし。
「まぁどーりでアンタの彼女みたくキレーな顔してるなーとは思ってたよ。細いし。でもまさか本人とは思わなかった」
「だからさ、危なそーだったらさりげなくカバーしてくんないかな。前半」
キャプテンの俺は、監督から最終兵器（アルチメイト・ウェポン）として前半にはできるだけ出ないように言われている。
まぁそんなすごい奴でもないけど……
「オッケー。東野中の女豹を傷つけるわけにはいかねーもんな」
「お前……それ本人の前で言ったら殺されるぞ」
遠藤崎が“右京”と呼ばれるのを嫌うように、沙彩さんにとって“女豹”はワーストワードなのだ。
「おっしゃ！！3分後に試合開始するんで両チームのスタメンはコートに入ってください！」
小城コーチがそう声をかけると、向かい側では伊佐垣高校のメンバーが円陣を組み始めた。
何言ってるか分かんないけど湧き上がってくるムサい声……そういや伊佐高は男子高だっけ。

「先輩っ！俺らもやりましょーよ円陣（アレ）！」
１年エースの槙村（マキムラ）がワクワクした目で相手の円陣を指差す。
「じゃー俺らも円陣組もーか、久しぶりに」
何気に２年になって初めての円陣だ。
県の総体では、準決勝までいったものの……ピリピリしててそんなことするヒマなかったしな。
何を隠そう、その準決勝の相手がヤツらなのだが。
メンバーを集合させて肩を組む。……総勢１０名。（スタメン５人＋補欠５人）
「ウチの伝統は、それぞれゲームの目標言って、足踏み入れて「オー」みたいなそんな感じなんでそれに則ります。順番は……槙村からこの円陣の順番で」
隣には沙彩さん。その隣には真彦。
沙彩さんはしきりに咳払いをしている。……もしかして、ゴロリスの内藤拓哉（７１話参照）みたいになるのか！？
コートに入る直前、ベンチに座ってる俺に沙彩さんが近づて耳打ちしてくる。
「ねぇねぇ蒼井君、私、ちゃんと男声になってた？」
「ああ、なってたなってた。もうバッチリ。ハハッ」
「な、なぜ笑う！？」
元々あまり声は高くない沙彩さん。意識的にドスをかけたら……もう、タカラジェ○ヌの男役みたいで。
「ちゃんと見ててよ？わた……俺のボールさばき」
「おー、しっかり見とく。後半よろしくな」
「うん、待ってる」
コートに入っていく後姿を見て……もし、沙彩さんが男子で、同じ高校（バショ）で同じ部活（バスケ）やってたらこんな感じなのかな……と思った。
でもきっと、ありえない。同じ場所、同じ時代に生まれて、同じ時を一緒に過ごしていることは……すっげぇ奇跡だから。

もし何かひとつが欠落していたら……彼女に逢うことすら不可能だっただろう。

でも……今日ぐらいは、いろいろ置いておいて……

ゲーム開始のホイッスルが鳴り響きジャンプボールを敵から奪う、１８５?の真彦。

即座に速い動きでコート移動をする沙彩さん……いや、今は“涼二”だ。

不可能な現実が今、幕を開けた。

第９８話　異例の代理人３～練習試合～

やっぱ速いな……女子の比ではない。
個人個人の足の速さはもちろんだけど、パスのまわりもドリブルのスピードも。
見てるだけでは分からない速さを体感していた。
……でも。それだけじゃ、ただの傍観者だ。
「涼二！」
本日初のパスが回ってきて、それをしっかり受け取って……
あとはカットとディフェンスをうまくよけながら全速力でドリブルしてゴール下に向かって……
シュートを放とうとすると、邪魔するディフェンスの手。
うまくいけるかな……いや、うまくいく！ここまできたら、自分を信じるしかない。
ビ――――ッというブザー音が鳴って……ネットをくぐり抜けたボールが床に落ちた。
「ナイッシュ杉浦！」
「おうっ」
峯岸と片手でハイタッチして、またすぐにスローイン。そしてドリブル、カット、パスの嵐。
余韻に浸れないのが、虚しさ儚さを通り越した楽しみなんだ。

――――……

第二ピリオドも残り５分。得点は、こっちが３５であっちが４０……まだ十分巻き返せられる。
槙村が放ったシュートが外れ、こぼれ玉をとった敵が仲間にパスするのをカットしてすぐシュート……
一か八かのスリーポイントゾーンからのシュートだったが……

「……よしっ」
リングの上を一周して、内側に入った。
これで通算１５ポイント目。外した数は……聞かないでほしい。
スローインするメンツ……もとい橋田が、何やら目配せする。……
パスくれるのかな。
ボールを受け取りやすいように移動していると、誰かにぶつかった。
「あ、わりぃ」
「……おぉ」
敵だったが……無駄にデカい。もしかしたら小城よりあるんじゃな
いか。
橋田は、私の反対側にいる槙村にパスをすると見せかけ……私にパ
スをくれた。
なんとか、“代理でちゃっかりレギュラーの座を奪った見知らぬ１
年生”を信用してもらえるところまでいったみたい。
……まぁ、ベンチ入りしていない応援席の１年生（２年生も少し）
の視線は痛いけど……気にする必要ないよね。
だって、杉浦涼二は今日限りだもん。

――――……

第二ピリオド終了。第三ピリオドに入る前に１０分だけ、作戦タイ
ムと少しの自主練習時間……いわゆるハーフタイムが与えられた。
「得点は４０対４６……若干点差が気になるところだし、向こうも
策を考えているようだから、蒼井（キャプテン）入っても油断すんなよ」
選手を集め、選手配置などの策が漏れないように小城は小声で言う。
……小城だけに、小声で。
「じゃ、次のスタメンは蒼井、田中、橋田槙村、んで杉浦……いい
か？」
「ウィッス」
やっと蒼井君がメンバーに入ってくる。

……でも、今では得点をとってやる、という闘志に燃えていた。
スポーツドリンクをぐいっと飲んでいると……
「杉浦……沙彩さん」
「……へっ！？」
小さく本名で呼ばれ、ドリンクを少し噴いた。
ぬぐいながらあわてて振り向く。
小城みたいな長身……副キャプテンの田中だ。
「大翔から聞きましたよ……随分無茶なことするんですね」
私のすぐ近くでそう言う。……まぁ、副キャプぐらいには知られてもいいっか。
そんな思いから、苦笑いを浮かべた。
「しかし、さすが東野中の元キャプテン……男に引けをとらない技量で驚愕いたしました。……後半戦もよろしくお願いいたします」
「は、はい……」
男子高校生とは思えない言葉遣いの綺麗さに、思わず敬語になってしまった……
今どきあんな子いるんだなー……そう思って軽くシュート練をする姿を見ていると、
「コラ、他の男に見とれるの禁止」
「ハ！？見とれてなんか……」
またまた後ろから言われ、バッと振り向くと……いたずらそうに笑う蒼井君の姿があった。
「……蒼井君か……もう、何かと心臓に悪いよ……君といい、田中君といい……バレちゃったって思ったじゃんか……まぁバレてるけど……」
「今完全に“先輩に恋する後輩”だったよ。しかも両方男って……」
クックッと、笑いをこらえている様子だった……でも完全に笑っている。
「……るさいなぁ。蒼井君と同学年にも関わらず、すっごい言葉遣いが丁寧でビックリしてただけだよ」

蒼井君と同学年にも関わらず、を強調して言う。
彼は「どーせ俺は言葉遣い悪いですよ」と軽くすねてしまった。
「アイツ、ちっさい頃からなんていうか縦社会で生きてきたらしいからな……先輩とか目上の人には極端によそよそしいだけだよ。俺らタメに対しては敬語なんてつかわない、ごくフツーのしゃべり方だし」
でもまぁ、同い年にしては若干落ち着いているところはあるかな、と彼は付け加えた。
ふーん。縦社会……どんな境遇なのかは分かんないけど。
「それより、さ……いや、涼二は練習しねーの？」
「うん。基本、まとまった時間とれないときはイメトレだから」
「へぇ……なんつーか、余裕だな」
「ええ。だから中学の頃は眠れる獅子って……わっ」
いきなりボールが目の前に飛んできた。
「でも俺は、軽くウォーミングアップしてから臨む派だからさ。付き合ってよ」
「……ったく、しょーがないな……」
ボールまでよこしてきて、断れるわけないでしょう。
最近、分かり始めたことがある。……蒼井君は大人っぽいけど、少々自分勝手だ。
……でも“周りに流されやすい”より、“多少強引でも自分の意見を通す”方がキャプテンとしても人としても、案外受け入れやすいのかもしれない。……私の中では。
「パス回しだけでいーね？」
「おう」
同じチームなんだから、ディフェンスとオフェンスを分けてウォーミングアップする必要はないだろう。
パス、パス、パス……をいくらか繰り返し、彼がシュート。ボールはネットをすり抜けていった。
「んじゃ次、私がシュート入れるよ」

「オッケー“涼二”。外すなよ？」
……あ。そうだった。涼二だ涼二。
蒼井君が目の前にいると、すっかり自分の今の状態（ダンソウ）を忘れてしまう。
……やっぱり、彼氏の前だとどうしても女の子になってしまうのかな。

軽いウォーミングアップが終わり、第三ピリオドスタートのブザーが鳴った。
ジャンプボール……は、もちろん田中副キャプテン。
第一、二ピリオドではとってきてくれたのだが……今回は、とられてしまった。
それもしょうがない……相手がデカいから。小城よりあるぞ、きっと。
その大男は、一切パスを回さず、華麗なドリブルさばきであっという間にシュートに持っていった。
ダンクシュートが決まって、２点加点……一瞬で、あの大男は向こうの“切り札”なんだって分かった。
「アイツ、国体選手の候補らしーぜ」
「え、マジで！？スゲーな」
橋田がそう耳打ちしてきた。国体……は、よく知らないが、とりあえずすごい。なんせ“国”だから。
そんな奴と戦えるとは……すっごくワクワクしてきた。
「おっしゃーっ！点とりいくぞーっ！！！」
……と言いたいところだが、なんせ代理の身……心の中で咆哮しておいた。

第四ピリオド開始。得点は６０対５８……こっちが２点リードしている。
あれから、田中の長身を活かしたディフェンス、橋田の安定したパス回し、槙村の短身（失礼）が魅せるディフェンスのすり抜け……

そして蒼井君の打率１０割（野球か）のシュートで、逆転を喫した。
もちろん、私も負けてはいない。……いや、それ以前に同じチームの間だから勝敗もないんだけど。
「おりゃっ」
スリーポイントゾーンからのシュートをうつ。
ボールは弧を描き、ゴールに吸い込まれていって……ブザーが鳴った。
よしっ、これで６３対５８だ。打率８割のスリーポイントシュートも、なかなかのものだろう。
「そういや、杉浦沙彩もスリーポイントの女神だって噂もあったよな……」
近くで、聞こえるか聞こえないかの声で小城が言う。
……ギクッっていう擬音語は、こんなときに遣うものなんだろう。
「……よ、よっしゃーヒロさん、どんどん点稼ぎましょーぜ！！」
「お、おう……ヒロさん？」
テンパってる私が発した“ヒロさん”という言葉……たぶん、もう一生言わないだろう。
どうしても、安〇大サーカスのあの方が浮かんでくるから。……蒼井君よ、すまぬ。

試合も、あと少しで終了。
もちろんのことだが……体力が、ほぼ限界。首をつたった汗の数はもうカウント不可能だ。
でも、それはみんな同じなようで……
「橋田、マンマークズレてる。槙村は動きにムダがあるからもうちょっと考えて動いて」
「「ウッス！」」
蒼井君の指示に、汗をぬぐいながら答える橋田と槙村。
背がデカい相手のディフェンスに苦悩する田中……選手交代やタイムアウトをして少し休んだものの、この３人はほぼ出ずっぱりだ。

私と蒼井君は選手交代なしでずっとコートの中にいる。しかも、私に至っては前半からで……

……いやいや、それを考えると疲労が倍増しそうなのでやめよう。

「涼二！」

「はい！」

田中からパスがまわってきた。

渾身の力をふりしぼり、ゴールへ一直線にかけていく。

狙うはもちろん、得意のスリーポイントシュート。

ディフェンスの数、ゴールまでの距離、角度……すべてを計算して……

「……うらぁっ！」

ジャンプしながらボールを手から放った。

ボールはバックボードに当たらず、ザシュッとネットを抜けた。……私のいちばん好きなシュート。

大きく息を吐き、そして吸う。その間にも、ずっと心臓はドクドク波打っていて……

「よっしゃー！ラスト3分、はりきってくぞー！」

自分にも仲間にも渇を入れるつもりで叫ぶ。

相手チームは「なんだコイツ」みたいな顔で見てるけど……

「……おうよ！！総体での雪辱晴らそーぜ！」

槙村を始め、チーム全体は引き締まった。

相手チームも、負けじと盛り上がって……ああ、やっと練習試合っぽくなったな、って。

2チーム同時に盛り上がって、高めあって……最後は、どのチームも笑顔で終われる。相手のいいところを盗めて終われる。

メンツも普段の練習も違う学校同士が、切磋琢磨できる機会であるのだから。

第９９話　異例の代理人４～ＳＰＥＣＫ～

「結果、７５対７０で海宮高校の勝利……か」
勝利をかみ締めるかのように、小城がつぶやく。
ベンチとかの片付けをしている最中のことだった。
「小城先輩、何回言ってんスかそれ」
「いやー、総体で俺らが負けたトコに勝つなんて信じられなくってね！」
ハハハと軽快に笑う小城。いい加減先輩扱いに疲れた私……
「それよりさ、君、合同ミーティングに参加しなくてよいのかい？」
「ええ。俺、バスケ部じゃないし……所詮代理人だから」
「でも、代理であってもフル出場だったじゃないか。君の技術が大いにチームに貢献していたから君を外すなんて考えられなかったんだよ」
「……ありがとうございます」
「それで提案なんだが、ぜひとも我がＫＢＢＣへ……」
「無理です。すんません」
一方的にしゃべり続けていた小城も、私のその一言で黙った。
ちなみにＫＢＢＣとは、“Ｋａｉｇｕ　Ｂａｓｋｅｔ　Ｂａｌｌ　Ｃｌｕｂ”の略である。
「全く……涼二くん、君、お姉さんに似て随分スッパリサッパリしてんなぁ」
「……」
なんだよ、スッパリサッパリって……
「俺が大翔なら絶対他の子選ぶね。だって君のお姉さん、滅多に笑わないし男前だし強いしクールだし？美人だけど色気ないしなぁ…
…付き合っててもあの調子じゃあちょっとねぇ。フツーだったら多少美人じゃなくても愛嬌のあるコ選ぶよね。あともっと小さめの身長のさ」

「……」

オイオイ小城さんよぉ……本人目の前にしてえらいこと言いますなぁ。一発殴っていいっすか？

そんな気持ちで、持っていたパイプイスをギリギリと握りしめた。

「……でもまぁ、アイツが選んだヤツなら文句も言えねーよな」

……いやいや、思いっきり言ってたじゃないすか今。

「いいか涼二！！」

「はい？」

小城は、私の肩を両手でガッチリ掴み目線を合わせ……決して言ってはならないことを言った。

「これからお前が好きな人に彼氏ができて“失恋”しちまってもなぁ、“さっきの俺”みたいにその彼氏に文句言っちゃあならんぞ？」

「……」

呆気にとられて、なにも言えなかった。

脚が長い高身長で結構なイケメン……でもゲイっていうのは、ホントだったのか……！

「……ハイ」

私の脳内を整理するために必要な数秒の沈黙があって、やっと私はそう答えた。

「……そうやって引かずに何でも受けいれるトコ……つまり偏見がないってトコは似てるな、姉さんに」

若干小城は切なそうな顔をして、私から離れる小城。

……自分に置き換えたら、去年の秋、蒼井君と付き合っていたコ……咲良ちゃんを褒めるってことだよな。

ちょっと、悔しいかもな。

「……姉ちゃんは、蒼井君のことすっごくすっごく好きですよ。小城先輩の想いを蔑ろ（ないがし）にする結果にはきっとしません」

「……ああ。どーもな」

きっと、世間には受けいれがたい恋に悩んだかもしれない。

悩んで悩んで……好きな人が幸せになる失恋（ミチ）を選んだんだ。

……だから私は、絶対彼を幸せにしてみせる。
「さ……涼二」
ミーティングルームから蒼井君が出てきた。
「蒼井君。ミーティング終わったんだ？」
「うん。みんなそこで着替えるからさ。部室行こ」
「おう」
小城コーチ、と、蒼井君は小城の方を見た。
「伊佐高とここのメンバー数名が自主練するらしいので、終わった後の戸締りの確認よろしくお願いします」
「オッケ、任せろ。蒼井はもう上がんのか？」
「はい。今日はちょっと……用事がありますんで」
参加したい気持ちは山々ですけど、と蒼井君は付け足した。
“先輩”として普通に会話する小城……なんか、すごいな。
きっと私は、失恋した相手にこんなに普通に話せないだろう……
……現に、唯とは……3年になってからろくに言葉を交わさない間柄になってしまった。

――――……

「そういえば、伊佐高の2年がさ、沙彩さんのこと結構気になってるみたいだったよ」
「えっ！？……バ、バレてたのかな……」
「いや、そっち方面じゃなくて」
駅に向かう途中、ミーティングの様子を蒼井君がポソリポソリと話し始めた。
「オフェンスの動きにムダがないとか、正確なスリーポイントをもってるとか……新人戦ではぶちのめしてやるとか、徹底的にディフェンスするとか」
「う、うわぁ……男子コワ……」
「おかげで海宮（コッチ）はすっかりビビッちゃってさ……しばらく伊佐高対

策になるだろーな……」
それは、私抜きでも伊佐高に勝つ対策……ってことなのだろうか。
だとしたら、あんま必要じゃないのだろうか……所詮私は女子だし。
「そんなガチガチになんなくても、リラックスしたらすごく強いと思うよ。ＫＢＢＣは。伊佐高は、確かにみんなゴリラみたいでガタイはいいけど……あの国体選手以外は、ほとんど城壁みたいなもんだったからさ。簡単にぶっ壊せるよ」
「ハハッ、城壁って……さすが東野中の女豹は言うことが違……」
「蒼井さーん？そのハンドルネームも違うよー？」
笑いながらサッと準備した拳（コブシ）を蒼井君は制して……そしてそのまま、手をつなぐ。
蒼井君の手に包まれている中で、そっと拳を解いた。
……1年前のこの時期は……よく鉢合わせした時に一緒に帰ってたっけ。
その頃は、自分の蒼井君に対する恋心（オモイ）に気づいたばっかのときで……話すときもキョドりっぱなしで、何話したかあまり覚えてない。
今、その頃と同じ帰り道をたどっているけれど……やっぱ、全然違うな。
「でさ、ミーティング終わった後いきなり伊佐高の人たちが立ち上がって“お礼のダンス”って言って一斉に楽し○ごの真似始めてさ……注入されたこっちはどーしていいか分かんなくなって」
「た、楽し○ごって……そりゃあ１８０？超えてる男子たちが一斉に始めたら誰でもビビるよ」
「まぁ“コイツらも俺らと同じ高校生なんだ”って当たり前のことに気づかせてくれたけど」
時刻は午後６時……陽は傾き、オレンジ色になっていた。
――――……
電車に揺られながら、他愛もない話をする。

カイジ君たちのこと、クラスでのエピソード、そして……小城。
「ほんと羨ましいよあの身長。１０？ぐらいでいいから分けてくんないかなーっていつも思うよ」
小城の試合の仕方、身長、顔立ち、性格、筋肉（？）……それら全てが蒼井君の目標であり理想であり羨望であるという。
……蒼井君は知らないだろうなぁ。その小城から想いを寄せられていたことに……無知っておそろしい。
「いやいや、むしろ私から１０？とってってよ。そしたらやっと平均身長だし……」
体育館での小城のやりとりを思い出す。
“俺が大翔だったら、もっと小さめの身長のコ選ぶね”
蒼井君本人も、そう思ってるんじゃないかな……
私が１６６？で、蒼井君は１７０？ちょっと。
実際、恋人同士は１５？差がいちばんバランスいいって世間では言われるし……
そうウダウダ考えてると……ふと、隣でがんばっている姿が目に入った。
「あれー？届かない……」
私と同じ制服の女の子……おそらく1年生が、ガタガタと揺れる電車の中でフラフラしながら精一杯背伸びをしている。
どうやら、荷台に置いた荷物が取れないらしくて……
「はい、これかな？」
「あ、はい！ありがとうございます！！」
奥の方に追いやられていた皮製のスクールバッグを取って彼女に手渡すと、彼女は私を見上げてニッコリ笑ってそうお礼を言った。
やっぱ、女の子は小さいほうが可愛いなぁ……
ちょこちょこ歩いていく後姿をみながらしみじみ思った。
「ねぇ蒼井君」
「ん？何？」
「もっと背が小さくて女の子らしいコがよかったなー……とか思わ

ない？」
ちょっと見上げるぐらいで、蒼井君と目が合う。
彼は意味分かんないとでも言いたそうなきょとんとした表情で……
「……ああ、だから平均身長がどーとか……」
やがて納得した様子になって、続けた。
「全然思わないよ。てか考えたこともない」
「……え？どうして？」
予想外の言葉に、目を見開いた。
「だって身長が高かろうが低かろうが、沙彩は沙彩じゃん。他人から見て釣り合ってるのかどうとか関係ねーよ」
だから気にする必要ない、と蒼井君は言った。
それを聞いて……ちょっと安心した自分がいた。
ああ、蒼井君本人は全然気にしてなかったんだ……って。
「ふふっ、嬉しい。……ありがとね」
……私を選んでくれて。
もう、付き合って約半年ちょっと……いろんなことが変わって、分かって……改めてそう思った。
「……てか、なんかあったの？いきなりそんなこと聞くなんて」
「ん、ちょっとね。君の尊敬してやまない先輩からさ、「オメェは男前だしデカいし色気ねぇし、彼女に選んだ大翔の気が知れない」って言われてね……まぁ、あっちからしたら涼二経由だけど」
「……言うなぁ、小城先輩も……」
「でしょ？ぜーったい仕返ししてやるんだから……ものすっごい高いアイスおごってもらおーっと。バーゲンダッツ５個とかカリカリ君１０本とか。涼二が２１世紀最大のアイス好きとか嘘ついてさ」
「……」
軽快に話していると、ふと蒼井君が何もしゃべっていないことに気づいた。
「どしたの？」
「……いや、なんでもない」

『次は東野市、東野市です――……』
電車を下りる準備をしている間も……蒼井君は、ニコリともしなかった。
すっかり暗くなった午後7時……断ったものの、危ないからといって送ってもらうことになった。
車道側に蒼井君と自転車、内側に私……ひぐらしの声がする中、人通り少ない道を、ただ歩く。
一向に始まらない会話……きっと彼は、考え事でもしているのだろう。
こんな無言の帰り道も、悪くはない。
……って思うようにするけど、やっぱ気になるなぁ。
「……蒼井さん、なんか悩みでもあるんスか？」
「……え？」
いきなりの敬語での発言に、不思議そうにこちらを見る。
「私でよかったら聞きますけど……」
……とか言って、別れ話とかきても嫌だから、
「ややや、でもさ、返答に困る相談はちょっと……」
そう言う私を見て、蒼井君はハハッと笑った。
「ごめんごめん。……ちょっと疲れてさ」
「あ、だよね。第3ピリオドからフルだもんね……しかも司令塔だからチームの動きも見てないといけないもんね」
「それ言うならば沙彩さんもそーじゃん。開始からずっとだったろ？ましてや相手はドド〇コ男子だったし……疲れたろ？」
「いーや全然。このとーりピンピンしてるわ。何年も培ってきた体力を甘くみちゃあダメだよ」
「ハハッ、そっか……見習わねーとな」
……なんて見栄張ったけど、実は筋肉痛予備軍がきている。
でも、まぁ、悪くない……そう思えるのは、やっぱ蒼井君が傍にいるからかな。

「実はさ、珍しく今日修二さんも母さんも亜珠華も揃ってるんだ。だからさ、夕飯どっかで食べることになってるんだけど……」
「へー、そうなんだ！よかったね」
「亜珠華に至っては、もう3ヵ月も会ってないし……会って早々、クソ兄貴とか言われたらどーしよーかって……」

――――……

「あら、おかえりなさい沙彩。遅かったわね」
「ただいま。んー、ちょっと軽く一試合やらかしてきてさ……」
帰ってすぐ、ソファにダイブ。
……そーだよ。蒼井君の言うとおり、うん年ぶりに本気でバスケしたんだった。
しかも相手は優勝候補の伊佐高男子……思い返すと、どっと疲れが押し寄せる。
「何一試合て。ケーサツ沙汰になるようなことしてないわよね？」
「してないよー……てかお母さん、珍しいね。この時間に家にいるなんて……帰ってくんのほとんど深夜じゃん」
「事件（ヤマ）が早めに片づいたのよ。年がら年中深夜まで仕事だったら、さすがにもたないわよ」
そんな話をしている間……ケータイがメール受信を知らせた。
この着信音は……蒼井君だ。
ガバッとソファから起き上がり、スクバの中を漁ってケータイを取り出す。

“今日はいろいろ心配かけてごめん。ゆっくり休んでね”

たったそれだけの文章だったけど……蒼井君の優しさがこもっていた。
「なーにニヤニヤしてんのー？ごはんできたわよ」

何度もその文面を読み返している私を覗き込んでお母さんは言う。
「べ、別にニヤついてなんかないもん……あー、おなかすいたー」
ケータイを大事にパタンと閉めると、ダイニングへ向かった。

第１００話　１年数ヵ月後の後悔

「ハァ――――……」

カラオケのドリンクバーで、場違いもいいところ……盛大なため息をついて、しゃがみこんだ。

ああ、下手、下手すぎる……もはや雑音でしかない。

クラスでの体育祭打ち上げの二次会（カラオケ）に、最後だから……という理由で参加した私。

お忘れでしょうが、声楽部（全員女子部員なので女声部とも呼ばれる）に所属しているもんで……部活仲間としょっちゅうカラオケには来ていた。

夏姫や杏里とも来ていたなぁ。

しかし、いずれも聴く曲はかわいらしいアイドルソング、切ないバラード……そういう、女の子っぽい曲ばかりだった。

つまり……免疫がついてなかったのだ。男子の曲、そして男子の歌声に……

「うぉらぁぁぁぁ！！！いくぞオメーらァァァ！！！」

「うぉぉぉぉ！！！！！」

普段若干大人しめな男子たちが奏でる……というか叫ぶ、ヴィジュアル、ロック……

さらに言っちゃ悪いが（もう言っちゃったが）……下手な声が生み出すバラードは殺人レベルだった。

青春の真っ只中にいる海宮高校３年Ａ組男子のカラオケに対する過大なる熱意、おかしい方向への価値観を甘く見ていた。

彼らにとって、カラオケとは……ストレス解消の場。騒いだもん勝ちってことなのだった。

加え、つられて女子もそういう系に走っちゃったもんだから……もう、完全なる無法地帯。

そっから抜け出して……今に至る。

「今何時だろ……って、まだ8時!?」
一次会の食事はレストランの大広間で8時から始まり……二次会場には7時半に着いて……
かれこれ、1時間は聴いてたつもりなんだが……アインシュタインの言う時間感覚は、ある意味当たっているのかもしれない。
「ハァ。やだなぁ戻るの……」
まるで、彼氏とのデートを終えて帰りたくないと思う彼女の気持ちだ……なぜなら、家には闇の歌声が響いているからだ。勘違いしないでほしい。
意味分からない思考ループに陥っていたが……
「大丈夫っすか?気分悪いんすか?」
不意にかけられたその一言で、ドリンクバーのすみでうずくまっている現実に戻った。
私を心配そうに見つめる相手は……
「……あ、蒼井君!?」
「沙彩さんじゃん!」
ああ、あまりにも深いループだったせいか、幻でも見てんだろうか。
夢でも見てんだろうか。
……いやいや、違う違う。夢や幻だったらもっと他の場所で見るだろう。
こんな、他の部屋からの歌声が漏れ、換気があまりなされていな場所じゃなくて。
「何してんの?こんなとこで……あ、歌いに来てるんだったら決まってるよな……」
「うん、火事場から非難してきたんだ……ハハ……」
よっこらせ、と立ち上がった。
「蒼井君は?」
「ああ、リレー1位記念でバスケ部のヤツらと打ち上げだよ」
「そっか……いーね……やっぱカラオケは気心(ウタゴエ)が知れた仲間と来るもんだよ……」

自嘲的になる私を見て、何があったの？って聞かれるもんだから正直に話すと……

「……じゃーさ、こっち来ない？」

「あ、さーやちゃんだぁっ！！」

部屋に入るなり、抱きついてきたのはキョン。

「さーやって……あ、蒼井先輩の彼女っすか！？」

「うわ、キレー……でもやっぱ涼二にそっくりだな！！」

もの珍しげに見るのは、橋田槙村。

「あ、杉浦先輩。お久しぶりです」

丁寧に挨拶する田中……他もろもろ。

ちなみに、メンバー変更は蒼井君がやってくれて、私は一度元の騒音部屋に戻り……

責任者（男子学級委員）の前で、こう言った。

『ツレがいたので部屋移動させてください』

『は、はいっ！』

……で、部屋移動が完了された。

多少わがままだとは思うが……許してほしい。

でもやっぱ……いいな、ここは。

知り合いもたくさんいるし、適度にゆったりしていて……そして何より、みんな歌がうまい。

落ち着いている人が多いのか、はたまた時間帯の問題か、バラード系のものが多くチョイスされていた。

……など、履歴を見ながらぶつぶつ呟いていると……

「あの……」

「ふぇっ！？」

いきなり気配を感じ、ヘンな声が出た。

クリクリした目に似合うショートカットの女の子……誰だろう。１年生かな？

「３年Ａ組の……杉浦沙彩さんですよね？蒼井の彼女さんの」

「ああ、はい、そうですが……」
「私、蒼井と同じクラスで女バスの三笠奈緒（ミカサナオ）と申します。以後、お見知りおきを」
お、お見知りおきを……なんて言葉を遣う女子高生、初めて見たぞ。なんか……誰かに似ている。あ、そうだ……田中だ。この高校生離れした言葉の使い方、そしてどこか威圧感のある感じは。
と思っていた矢先、
「あちらの田中李緒（タナカリオ）とは双子の兄妹でして……一昨年両親が離婚して、私が三笠姓になったのです」
「あ、そうなんだ……なんか大変だね」
「いえ、別に……元々別居していたようなものですから」
……ああ、ヤバい。しんみりした空気に加え、ここだけ言いようのない雰囲気に……
しかし、そんな雰囲気も「奈緒ーっ！ちょっとこっち来てー！」というキョンの声によって消え去った。

改めて周りを見渡してみる。
メンバーは私、ペコリと頭を下げてキョンのもとへ行った奈緒ちゃん。
「イッキいきまーす！」とか言って、コーラのイッキ飲みをしているキョン。
難なく飲み干すキョンを、「センパイスゴイっすー！」と盛り上げる槙村、橋田、その他の1年生男子2人。
熟睡している田中、その隣で（今日失恋したらしく）涙ながらにＥＸ〇ＬＥのバラードを歌う男子に、そっと備え付けのティッシュ箱を差し出す蒼井君……の、総勢１０名。
学年別にしてみると、１年４人、２年５人、３年１人……という、状況である。
曲を歌う順番は（あらかじめ決めていたらしい）ローテーション。
紙に書かれてある。

飛び入り参加の私の名前が割り込まれていて、そして次の次が私なのだが……

「うーん……何入れよっかな……」

改めて機器を目の前にして考える。

空気的にバラード系だからバラードを入れるべきか……それとも、あえての明るい曲でいこうか……

いやしかし、周りから見て私はどんなイメージなのだろうか……はてさて明るい曲は合うのだろうか……

「悩んでんの？」

「んー、結構……」

奈緒ちゃんと同様、いきなり話しかけられたが……聞きなれた蒼井君の声だから、驚かない。

空気を読むべきか、変えるべきか相談してみると……

「んな重く考えなくてもいーよ。カラオケじゃん？」

……そんな、原点に帰ってみると当たり前のことを思い出させてくれた。

「……そっか。そーだよね……カラオケは考えるもんじゃないよね、楽しむもんだよね」

「そうそう。……あ、ひとつリクエストがあんだけど」

「え、何？」

蒼井君のリクエスト……それは、私がよく鼻歌で歌っていた曲だった。

洋楽でロック、足踏みと手拍子がＢＧＭでギター以外の楽器を使わない７０年代の曲……を、私が好きな海外女性アーティストがカバーした曲。

いきなり日本語以外の歌詞が聞こえたせいか、全員こちらに注目したもんだから……ちょっと緊張しながら歌った。

しかし……

「さーやちゃんカックいーッ！！」

「ヤ、ヤベェ……大翔よりイケメンに見える……」
「洋楽歌えるとかすげーなぁ！」
「てかもう、蒼井先輩の彼女歌うますぎっしょ！！！」
……と、結構盛り上がってくれたので……まぁ成功かな。
「やっぱ歌うまいね沙彩さん」
「まぁね……声楽部だしね……」
火照る頬をグラスで冷やしながら聞いた。
「てか、蒼井君曲何入れたの？多分、順番もうすぐだよね？」
「ああ、うん……まぁいいじゃんか」
「えー？なんで渋るの？まだ決まってないの？」
私と同様、炭酸が飲めない蒼井君はウーロン茶を飲みながらはぐらかそうとするが……
さっきの歌で妙にテンションが上がった私は、しぶとく聞く。
「……だって歌とか、ほとんど知らねーもん」
すねたようにそう言う蒼井君。
……ああ、そうか。忘れかけていたけど……彼は高校生以前までの記憶がないんだった。
当然、その時その時で一世を風靡した曲など、覚えてるわけがないんだ。
「まぁでも、こう見えて好きなアーティストは何人かはいるからその中から選ぶよ。曲はお楽しみってことで」
「ふーん……じゃあ、楽しみにしてる」
とにかく、それ以上言及するのはやめて……今歌っている人の歌を聴いた。
歌い手は田中……曲は驚くことに、９０年代を風靡した女性のアイドルの曲だった。
――――……
「あーもー、納得いかなーいっ！！！」

そう言って、終電の中で叫ぶキョン……
うとうとしていたお兄さんを派手に起こしてしまい、（なぜか）私が謝った。
「キョン、一応終電なんだからおとなしく……」
「だってさー、なーんでキョンが最下位なわけ!?」
「そりゃーキョン、音程全然合ってないもん。採点は甘くないよ？」
「そーだけどさー……それよりもっと気に喰わないのが、蒼井、アンタだっ！！！」
ビシッと指を蒼井君に指す……が、蒼井君は熟睡中だ。（キョンが大騒ぎしているにも関わらず）
「イケメンでモテて頭もよくて運動できてキレーな彼女もいるくせに、カラオケでも1位とはナマイキなっっっ！！！」
「キョン……それはあなたが言うセリフなのかな……完全に同性への僻みじゃん、それ」
ちなみに1位、最下位、とはカラオケの採点ゲームのこと。
蒼井君は1位（９５点）で私が2位（９３点）、キョンが最下位（４５点）だった。
……まぁ、僻むのも無理ないくらい蒼井君は歌が上手かった。上手かった。（二回言うほど）
音程、抑揚、声量……全てにおいてパーフェクトだったのだから。
「さーやちゃんも大変だねぇ……こんな完璧な彼氏持って。キョンなら絶対やだよー……女子からの僻みとかすごいんじゃない？さーやちゃんが3年でまだよかったものの……」
「……何言ってんのかな？キョンさん」
キョンの言葉をさえぎり、私は続けた。
「私はさ、この人が完璧だからって理由で好きになったんじゃないよ。そりゃあ僻まれることも多少はあるけどさ……絶対私には敵わないだろうって思うよ。ちょっと自信過剰っぽいけどさ」
想いは人一倍強い……そんな自信が、私の中ではある。
私でよかったのだろうか、他の人はどう思うだろう……そう考える

のはやめた。
「それに、完璧な人間なんていないんだと思うな。蒼井君は隠しているだけかもしんないけど……絶対悩み抱えて不安定になる時もあるだろうしさ。そういう時はバランスとるように助けたいって思ってるよ」
一方的にそうしゃべり続け……キョンのじっと見つめる視線にやっと気づいた。
「な、何？」
「いやー……さーやちゃん、タフだなーって思って……あと蒼井にベタ惚れだなーって……」
「……うっさいなぁ。ほら、降りる駅もうすぐじゃない？」
照れからか、キョンを急かす仕草をする。
「へへっ、さーやちゃんにもかわいーとこあんだねー」なんて言いながら、キョンは降りる準備を始めた。
「でもさ、僻みでイジメとかになったら絶対言ってよね？シメとくから！！んじゃねー」
「ん、よろしくたのんます」
キョンってば、心強いな……もうしばらく時間かかるな……そう思っているうちに、にわか睡魔がやってきた。

――――……

すみません、全部聞いてしまいました。
そう言ったら、怒るだろうな……

そっと目を開けると、今度は沙彩さんが眠りについていた。
電車が揺れるたびに、ゴンゴンと寄りかかっている壁に頭をぶつける沙彩さん。
自分の肩に預けさせると、ようやく落ち着いた。
何回目だろうな……こういうの。

そう思うと、なんだかふわふわした気分になる。
……ふと、さっきの言葉を思い出した。
“「それにさ、完璧な人間なんていないんだと思うな。蒼井君は隠しているだけかもしんないけど……絶対悩み抱えて不安定になる時もあるだろうしさ。そういう時はバランスとるように助けたいって思ってるよ」”
……本当、なんでもお見通しにされている、って感じだ。
最近、ずっと考えている……留学のこと。
カイジやユウヤ、シゲオや両親には洗い浚い話したけど……沙彩さんにはまだなんだよな。
なんか相談するってなると、やはり頼りにしてるのが見え見えで……いかにも“年下”って感じがするからだ。
決して、沙彩さんが頼りないから、とかではない。
頼りにしている自分にガッカリさせたら……と思うと、怖くてしかたがない。
でも……“不安定になったときはバランスをとってあげたい”と思ってくれているのなら……話してみようかな。
「……３－Ａ男子……ロックとヴィジュアルの応酬……」
「……なんだそれ」
意味不明な寝言にツッコみながら……いや、まだもう少し後でいいか。そう思った。
だって、まだあと１年半も卒業まで時間があるわけだし……今じゃなくても、いいよな。
そう自分に言い聞かせながら、再び目を瞑った。

――――あの時、もっと早く伝えておけば……
１年数ヵ月後の俺は、ひどく後悔することとなる。

第１０１話　紅葉の色のように　前編

１０月中旬。中間テストが昨日終わって、今日は蒼井君と遠出のデートだ。
場所は静岡市……いわゆる、県庁所在地の都会。地元と比べて、ビルや店の数がはるかに多い。
「そういや久しぶりだよね。私服で一緒に出かけるって」
「うん。休日はほとんど部活か遊びかだったし、一緒にいるのだって勉強か登下校するときだけだったよな、最近」
「まぁしゃーないよ。蒼井君はこないだ修学旅行だったし、その後も体育祭に中間テスト……おまけに部活や友達付き合いまであるからね」
「ハハッ。今の時代、大人も大変だけど思春期（モラトリアム）世代も大変だよなー」
電車の中で揺られながら、そんな会話をする。
蒼井君はパーカにジーンズを着こなし、帽子を少し深めにかぶっている。
ついでに私はというと……スニーカーにスキニー、シャツにキャスケットといった結構ラフな格好。
ほんとはヒールとか履きたかったのだが……やはり身長も身長だし、何より蒼井君から「動きやすい服装で」って言われたので、ちゃんと動きやすい服装をしてきたのだ。
ちなみに、海宮高校バスケ部は今日は休みらしい。
コート全面バレー部が練習試合で使うってのもあるらしいが……“テスト明け！！たまにはパーッと遊びなさいデー”（顧問考案）で、意図的に休みを置いたのもあるらしい。
「あ、そうだ。体育祭といえば……沙彩さん、すごかったね。あの“借り人競争”……」
「い、言わないで……あのあと、結構恥ずかしかったんだから……」
借り物競争ならぬ借り人競争とは、今年の３年女子の種目。

前年までタイヤ奪いだったが、安全面を考慮しての種目変更だったのだ。
その体育祭で……

――――……

高校生活最後の体育祭は、私は風ブロック、蒼井君は森ブロックだった。
同じレーンに並ぶのは……華奢でかわいい女の子たち。
その時点で、デカさがムダに際立って恥ずかしかったのに……
よーいドンの合図で、先着順に好きなカードをとった。
そのカードには……“１年で期首テスト１位の人をお姫様抱っこしてゴール　ただし男子の場合姫抱っこされても可”と書かれてあった。
誰だよ、１年の学年１位って……２年の学年１位ならすぐ分かるのに……（蒼井君か恵夢ちゃん）と、内心で愚痴をこぼしながら、「１年生で期首テスト１位だった人ー！」と呼びかけた。
ていうか、軽く１ヶ月ぐらい前だよね……覚えている人いるのかな、自分の順位なんて……と、ある意味では順当なことを考えていると……

「あの、杉浦先輩、俺ですが……」
と、名乗りをあげてきたのは……なんと水野君。
遠足で一緒の班だったあの巨大な１年生、水野君だ。
「へー水野君、あんた意外と頭いーんだね」
「そんな……まぐれっすよ。で、カードには何と？」
「ああ、姫抱っこすんだってさ、ホイ」
競争のノリで、いとも簡単に水野君を抱き上げた。
『おおーっと！！！他の女子がときめきメモリあっている中、全力疾走している生徒が１人！人一人抱き上げているにも関わらずこの速さ！！すごすぎです！！しかも、相手は推定１８０センチ越えの

大男だーっっっ！！！』
実況にも熱が入り、全校生徒が注目する中……傍から見るとアベコベな私たちがゴールテープをきった。
――――……
「いや、でもまぁ、いちばん恥ずかしかったのは水野君だろうね……ハハ」
もちろん、後でちゃんと謝っておいた。
私が男子なら、女子に姫抱っこされるなんて……死んでもお断りだからだ。
「水野……アイツ、抱っこされてる間中ずーっと顔隠してたからな……」
でも、と蒼井君は続ける。
「沙彩さんがされる側だったら……たぶんメチャメチャ嫉妬してたかもしんない」
「フフッ、ありがとね。でも大丈夫、力では誰にも負けないんだから。男子1人ぐらいどーってことないよ」
「さぁどうだか」
「あ、ヒドい……せっかくの自慢どころを……」
こりゃあ、納得させるために更なる訓練を積まなければ……って、いや、待てよ。蒼井君は彼氏だ。傍からみれば（きっと）私たちは高校生同士の爽やかカップル。
断じて男子持ち上げ道場（？）の修行を共にする同志ではない。
ここはひとつ……彼女らしい振る舞いをしたらどうだ、杉浦沙彩。
……いや、待てよ。彼女らしい振る舞いって一体何なんだ……
ぐるりと車内を見渡す。
奥のほうに、1組のカップル……って……
「おおおおおっっっ！！！」
あまりもの衝撃な光景に、奇声を発してその場に立ってしまった。

「え、何？どしたの？」
「え、あ、いや、その……なんでもない……」
一斉に注目が集まる中、恥ずかしい気持ちでいっぱいになりながら席に座る。
だってよ……ちょっと空いてるのをいいことに、女の方が男の方に脚絡ませてキスしてるからよ……エイリアンを発見したときレベルの奇声を発してしまったよ……まぁエイリアン目撃したことなんかないけど……
とにかく、あれは私には無理だ。
次に、斜め右前に座っている男女を見る……手をつなぎ、楽しく語り合っている模様。
よし、あれなら多分できるぞ、私。何たって、彼氏の頭を掻き撫でる女だからな、私は。
蒼井君の手の位置を確認し、いざ、私も手を伸ばす……が……
……あれ、動かない……ていうか、めっちゃ心臓がドキドキいってるし……
いやいや、矛盾してるぞ杉浦沙彩。常識で考えろ……頭を撫でれて手をつなげない彼氏がいるか。
……いやいや、私は彼氏じゃないぞ。そっから矛盾しているぞ……
そんな風に、いろいろ考えながらも、ちょっとずつ、手を近づけていく……が……
「９時半か……結構予定通りに走るもんなんだな、電車って」
ターゲットであった蒼井君の左手は、時間確認のため蒼井君の目の前にまで上がった。
「おわっ」
急いで、私も手を定位置に戻す。
「ん？今度はどしたの？」
「あ、えと、む、虫！そこにいたんだけど、死んでるかと思って触ったら生きてて飛んでってビックリしたっていうか……」
「そっか。虫興味あんの？」

「う、うん！」
って！虫好きな女子高生がどこにおるかっ！
ハァ……今日の私は、妙なところでテンパってるのかな……久々のデートで緊張してんのかな。
どんだけ純な乙女だよ私は……ガラでもない……
そう思ってると、蒼井君は気づいたように言った。
「そのネックレス、俺が誕生日のときあげたやつじゃない？」
「え？あ、うん、そう」
蒼井君が指差す私の胸元には、シルバーのティアラがついたネックレス。
地元の西ヶ崖で夕日をバックにもらったんだ。（詳しくは番外編「いちばんの人」で）
「いやー、ほんとカワイくってお気に入りだよ。ありがとね」
「そっか。嬉しいよ」
そう言って見せる、やわらかい笑顔を見ていると……なんか、守ってあげたくなる。
……いやいや、だから彼氏かっての、私は。
私もつられて笑っていると……ある重大なことに気づいた。
「あ、蒼井君って誕生日……いつ？」
「ん？7月5日だけど……」
それを聞いて、頭が真っ白になった。
……さ、ささささ、三ヶ月も気づかなかったのか私は！！ていうか浮かばなかったのか！！彼氏の誕生日がいつなのかって疑問を！！！
「あ、知らなかったんだ？」
「……ご、ごめん……」
ああもう、自分の不甲斐なさに泣けてくるよ……
知ったかぶりをするとさらに情けなくなりそうで……涙目で小さく謝った。
「いーよいーよ、そゆとこ好きだし」
「え、どーゆーとこ？」

「……“意外と”間が抜けてるとこ？ほら、バレンタインデーとかすっぽかして、東郷先輩たちすねてたじゃん？」
ちょっと考えて、蒼井君はそう言う。
そ、それ、褒めてない……
ああ、私に彼女らしい振る舞いができる日は……結構遠いかもしんない。

市内のある駅で降りて、バスに乗り継ぐ。
「お、お祝いをしなくては……でもやっぱ遅いよね……」
「んな考えなくてもいーって。また来年でも……」
「それじゃあますますダメ！せっかく同じ17歳なんだよ？1年しかないんだから」
出会って恋をして……これから、同じ歳の季節をめぐるためには、ちゃんとお祝いしたいんだ。
会う前までの時間を、補うためにも。
「やっぱアクセくれたから、アクセにすべきかな……いや、男物のアクセってどんなのがあるか分からんないし……」
そうブツブツ呟いてると、
「……じゃーさ、物じゃないけど……ひとつだけ、頼み聞いてくれる？」
「え？うん、何何？何でも聞くよ？」
じっと目を見ながら次の言葉を待っていると……驚くべき言葉が返ってきた。
「ここでキスして」
……耳打ちで囁かれたのもプラスして……顔が赤くなって、飛びのいた。
窓枠にガンッと頭をぶつける。……もう少し上だったら“降りますボタン”を間違って押してしまうところだった。
「な、なな、む、むむむ、ムリ！ひ、人いっぱいいるもん！」
「ハハッ、冗談冗談。おもしろいから、からかっただけ」

もう、なんなんだ、心臓に悪いな……熱くなった左耳を手で覆いながら、いたずらっぽく笑う蒼井君をにらむ。
蒼井君は、さっきぶつけた私の後頭部をさすりながら言った。
「……今日だけでもいいから、名前の呼び捨てで呼んでくれないかな」
意外な言葉に……にらむことも忘れてしまった。
……ああ、そういえばそうだ。蒼井君は私のこと“沙彩さん”って呼んでくれるけど、私は出会ってからずっと“蒼井君”のままだ。
「あのとき呼びやすいほうでいいって言ったのに、あれだけどさ……」
……なんだか、ちょっと寂しそうな笑顔で……
そうだよ、男友達には名前かニックネームで呼ぶのに、彼氏だけいまだに名字だったら……
「ん、オッケ、分かった……大翔」
……今まで、ふざけて名前に君づけで呼んだことはあるけど……やはり、改めて言うとなんか恥ずかしい。
ずっと見つめていた視線を逸らして、私は言う。
「そ、その代わり、私のことも呼び捨てにしてよね？」
「うん、分かった。……ありがと。すげぇ嬉しい」
こっそり見た蒼井君の横顔は……自身が手の甲で軽く押さえて冷ますほどの、紅潮したものだった。

第１０２話　紅葉の色のように　中編

バスに乗ること３０分……中心都市の外れまで来た。
始めは満員だった車内も、今じゃガラガラ。私たち以外３人ぐらいしかいない。
「ねぇ、ずっと気になっているんだけど……私たち、どこ行くの？」
いろいろ話しているうちに、やっとして当たり前の質問をした。
そもそも、誘ってきたのは蒼井君……いや、大翔だ。
どっか行こう、その言葉だけで、プランは全て大翔持ち。
静岡へ行くというのも、切符をもらってから聞いたし……
「……内緒。お楽しみってことで。多分、沙彩がすっごい喜ぶとこだと思うよ」
「えー、なんだよそれー」
まぁでも、それはそれでいいかも……大翔が提案してくれる場所だったら、きっとどこでも嬉しいから。

『終点の佐々丘、佐々丘です。どなた様も……』
「よし、降りるよ」
「あ、ちょっ、あお……いや、大翔！」
誰かの名字みたいな終点バスストップに着いたアナウンスが流れ、いきなり大翔は私のバックの上の乗車券を取って、席を立つ。
私も慌てて席を立ち、後を追いかけようとしたが……追いついたのは、バスを出てからだった。
そう、大翔が２人分のバス代を払った後で……
「なんか悪いよ、電車の切符代も払ってないのに……」
財布を閉じる大翔に、私は財布からバス代を出しながらそう言う。
大翔は私の手を制して……切符代を払おうとしたときと同じように、いーからいーからと言った。
「彼氏だし、移動料金ぐらいは払いたいんだよ」

「んー……でもなー……」
このご時世、そういうのは申し訳ない。（昔だとまた違うかもしれないが）
どうにかできぬものか……と考えた結果、
「じゃーさ、お昼ご飯は私が奢ってあげる！」
「あ、大丈夫大丈夫。サービスしてくれるらしーからさ」
「え、どういう意味？」
「それもお楽しみってことで」
そう言うと、スタスタと先に行ってしまう。
「ちょっ、そんな“お楽しみ”ばっかりにしないでよー」
慌てて追いかけている私の後ろ側で、バスが回送として発進するエンジン音が聞こえた。

「うわー、やっぱこの時期は紅葉がキレーだねー……」
「ん、そだね」
木々が立ち並ぶ公園に入り、辺りを見回しながらその美しさに感嘆の声をあげた。
赤、オレンジ、黄色……色とりどりの紅葉が、空の青を埋め尽くすように咲いている。
しばらく歩くと、「あ、ここだ」と言い、大翔は立ち止まった。
その先には……小さい洋風の建物があった。
秋色の紅葉には似つかわしい、白を基調としたヨーロッパ風の小さいおうち、みたいな。
近づくと……“Ｃｌｏｓｅｄ”という看板がつるされていて、初めて喫茶店かなんかのお店だということが分かった。
「Ｃｌｏｓｅｄって……閉まってるんじゃん？」
「今日だけは開くんだよ」
そう言い、大翔は扉の取っ手に手をかけた。
カララン、と懐かしいベルの音が聞こえて中に入ると……これまた、オシャレな内装が私たちを出迎えた。

そして……スタッフルームから、誰かが近づいてくる。
その人は……
「Ｏｈ，Ｗｅｌｃｏｍｅ！　Ｉ　ｗａｓ　ｗａｉｔｉｎｇ　ｙｏｕ！（いらっしゃい！待ってたよ！）」
これまた、流暢な英語で……日系アメリカ人らしき人物が、白い歯を輝かせていた。

４人用のボックス席に案内され、大翔とそのアメリカ人に対面する形で座った。
ニコニコしながらこちらを見るアメリカ人、厨房（キッチン）にいる別のアメリカ人（おそらく彼の兄だろう）と難なく会話をこなしている大翔……と、とりあえず話しかけてみようか……
「Ｅ……Ｅｘｃｕｓｅ　ｍｅ，……Ｗｈｏ　ａｒｅ　ｙｏｕ？　Ａｒｅ　ｙｏｕ　Ｈｉｒｏｔｏ'ｓ　ｆｒｉｅｎｄ？（すみませんが……あなたは一体誰？大翔の友だちなの？）」
つたない英語でそう聞くと……そいつは、大げさに体をのけぞらした。
「ノーッ！！ユー、僕を知らないの！？」
「え、ええ……すみません……」
「スティーブ、落ち着いて。ビックリしてるじゃん」
大翔がなぐさめるが、アメリカ人はＮｏ……Ｎｏ……と繰り返し、なんだか嘆いているようにも見える。
「え、えと……ひ、大翔、彼は芸能人か何かなのかな？消〇力のＣＭで歌っている子みたいな……」
「いや、芸能人じゃないけど……うちのクラスの転入生のスティーブ・アルベルトだよ。２学期の始業式に全校生徒の前で挨拶したじゃん？」
「そーだよ！！僕のキラースマイルで君もベイビーちゃんたち（女子生徒）もイチコロだったろ！？」
ス、スティーブ？キラースマイル？ベ、ベイビー……？

そんな聞きなれない単語には覚えがないが、ひとつだけ確かなことがある。
「……ごめんなさい。始業式、最初から最後まで夏姫に起こされるまでずっと寝てたから知らないの」
「ノーッ！！！この僕が目の前にいるのに眠っちゃう子羊ちゃんがいるなんて！！！」
ああもう、めんどくさいなぁ……若干そう思い始めた頃、厨房のお兄さんが料理を運んできた。
運ばれてきたのは、3人分のパスタにピザなど……本格的なイタリアンだった。
「うっわ、おいしそー……お兄さん、プロのシェフなんですか？」
「え？あ、いや……うんまぁ、そんなとこかな。お嬢さん、テレビはあまり見ないのかな？」
「あぁはい。ニュースぐらいしか……お兄さん、すごい人なの？」
「まぁそんなとこかな。それはさておき、どうぞ召し上がれ。お代はいらないからね」
そう言い残すと、お兄さんはスタッフルームらしきものに戻っていった。
残された私たち3人は、料理を一瞥して……
「ウチの兄の料理は世界一なんだよ！今回は僕の友だちとその彼女ってことでサービスだよ。ささ、早くヒロトも子羊ちゃんも食べちゃおうよ！」
「あのー、子羊ちゃんじゃなくて杉浦沙彩ですが……まぁいっか。いただきます」
聞いたところによると、厨房のお兄さんは世界的に有名な三ツ星シェフらしい。
どれほどすごいかは、つゆ知らない私だが……ランチの味だけはしっかり分かる。
「あー、おいしかったー！」

「沙彩、それ１０回目」
何度も何度も“おいしい”を繰り返すほど、その料理は格別だった。
リゾット、スープ、パスタにピザ、サラダ……どれをとっても、今まで食べたことのないおいしさ。
「すごいねー、スティーブ君のお兄さんは」
「まぁね。僕の自慢の兄さんだから！」
ナプキンで口元をぬぐいながら、スティーブ君は誇らしげに言い切った。
「兄さんはずっとジャパンで店を持つことが夢で、それが叶って……今年の９月にオープンしたんだよ」
「じゃあ、お兄さんと一緒にスティーブ君も来日した理由って？」
「だって、兄さんだけ来日しちゃったら……兄さんの料理、食べれなくなるじゃん？それに日本にもすごく興味があったしね」
親にはすごく反対されたけど、とスティーブ君は続ける。
「カルチャーショックとかも少しはあったけど……同じクラスになったヒロトにいろいろ助けられたんだぜ！」
「ハハッ、おおげさだって」
目の前にいる肩を組み合う２人は……なんだか、兄弟のようにも見えた。
知らなかったな……大翔にこんな友だちがいるなんて。
きっとまだまだ、知らないことといっぱいあるんだろうな。
そう思うと、なんだか少し寂しくなった。
「悪い、ちょっとトイレ貸してくんない？」
「オー、いてらさーい」
大翔はスティーブ君にそう言うと、奥のトイレへ行った。
目の前にいる彼は、きちんと座りなおす。
「サアヤは知ってるのかな？ヒロトが高校入学前の記憶が全くないってこと」
「ええ、もちろん。でもなんか、少しずつ思い出してはいるんだって……」

でもね……と続けて、これ以上しゃべってはいけないな、と思い口をつぐんだ。

「でも、何？」

「……うん、早く全部思い出してほしいなーって。きっと彼も、とても苦しいだろうから」

……そんなの嘘だ。どこかで、嫌な予感がするから……

お母さんが“蒼井大翔”という名前を知ってる時点で、きっと過去に何かあったのだろう。

どんな仕事にも守秘義務っていうのがあって、お母さんを深くは追及しないけど……

人には、知らないほうがいい事実と知るほうがいい事実がある。そう思うんだ。

もちろん、過去を思い出すこと、知ること、留めておくことは大切なことだ。

しかし、その過去のなかに知らないほうがいい事実が隠れているとしたら……

どうしたらいいのだろう。私は、どちらを望めばいいのかな。

そして彼にとって……どちらが幸せになるのだろう。

それから、いろいろスティーブ君は大翔のクラスでの様子を語った。

休み時間には勉強の質問にくるクラスメイトが後を絶たないとか、大翔目当てのギャラリーが昼休みに集まるとか、先生が知らないようなことまで知ってるとか。

「あとね、テキスト文を1人ずつスピーキングするときのヒロトの口調が……プククッ」

「え、何何？どしたの？」

「なんかさ、俺の口調が無駄にネイティブっぽいんだってさ。クラスのやつらは慣れてるけど、スティーブが毎回毎回うるさいのなんの……」

「へぇ、そうなんだー……じゃあ今度聞かせてもらおうかな」

「オーオー、命知らずだねぇサアヤ！笑い死にしても知らないよー？」
そのほかにも、アメリカの高校と日本の高校の違うところを語ってくれたり……
そんなこんなでお昼も過ぎ……
「お、もうこんな時間か。そろそろ出るわスティーブ。ランチごちそーさん、うまかった」
「そっかー……これからは2人の世界ねー。あぁさみしー……」
大翔はそう言うと、バッグを持って立ち上がる。
「じゃあまたねスティーブ君。お兄さんによろしくね」
そう言うと、私たちは小さな洋館……いや、木々に隠れる名店を後にした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2208h/

海と想いと君と

2011年12月24日11時46分発行